KAIZO

改造

8
10—13

秋季特別號

1926



糖尿病内服治療劑

ランゲリンに就て

Langerin

糖尿病に對しては從來的確なる藥劑なく、その療法としては單に食餌中より糖分を減ずるか又は全然これを除くの外なかりき。

糖分なき食餌は言ふまでもなく苦痛にして、身體構成の重要成分にして精力の源泉たるこの物質の缺乏は延ひて肉體的并びに精神的障害の續出を免るゝ能はざりき。

五年以前加奈陀のバンチング氏によりインシユリンの發見せられたることは糖尿病の療法に對し大なる福音を與へ、醫學界に於ける聲價は梅毒に對するサルバルサン發見の當時にも劣らざるものありき。

されどこの天來の福音たるインシユリンは内服するも全く無効にして毎日一乃至三回づゝ一定時刻に注射しこれを久しく繼續するの要あるを遺憾とせり。

然るに過般獨逸のフオルネツト博士はこの藥物に一種の抗トリプシン性物質を加へて與ふる時は内服するも良く奏效することを看出せり。

これ乃ちランゲリンにしてその効果は世界各地二百數十の臨床家諸氏により確認せられ特に輕症及中等症に對しては用法簡便にして安全、糖尿病療法の一大進歩なりと報告されたり。

詳細は『糖尿病のランゲリン療法に就て』と題する小册子にあり總代理店宛御申越次第送呈す

獨逸 ザールブルッケン微生物研究所

日本總代理店 東京日本橋區本町 株式會社 田邊元三郎商店

其一丸は尿中の糖約四瓦を補代す

三〇丸入……四圓七十錢

一〇〇丸入……十二圓五十錢

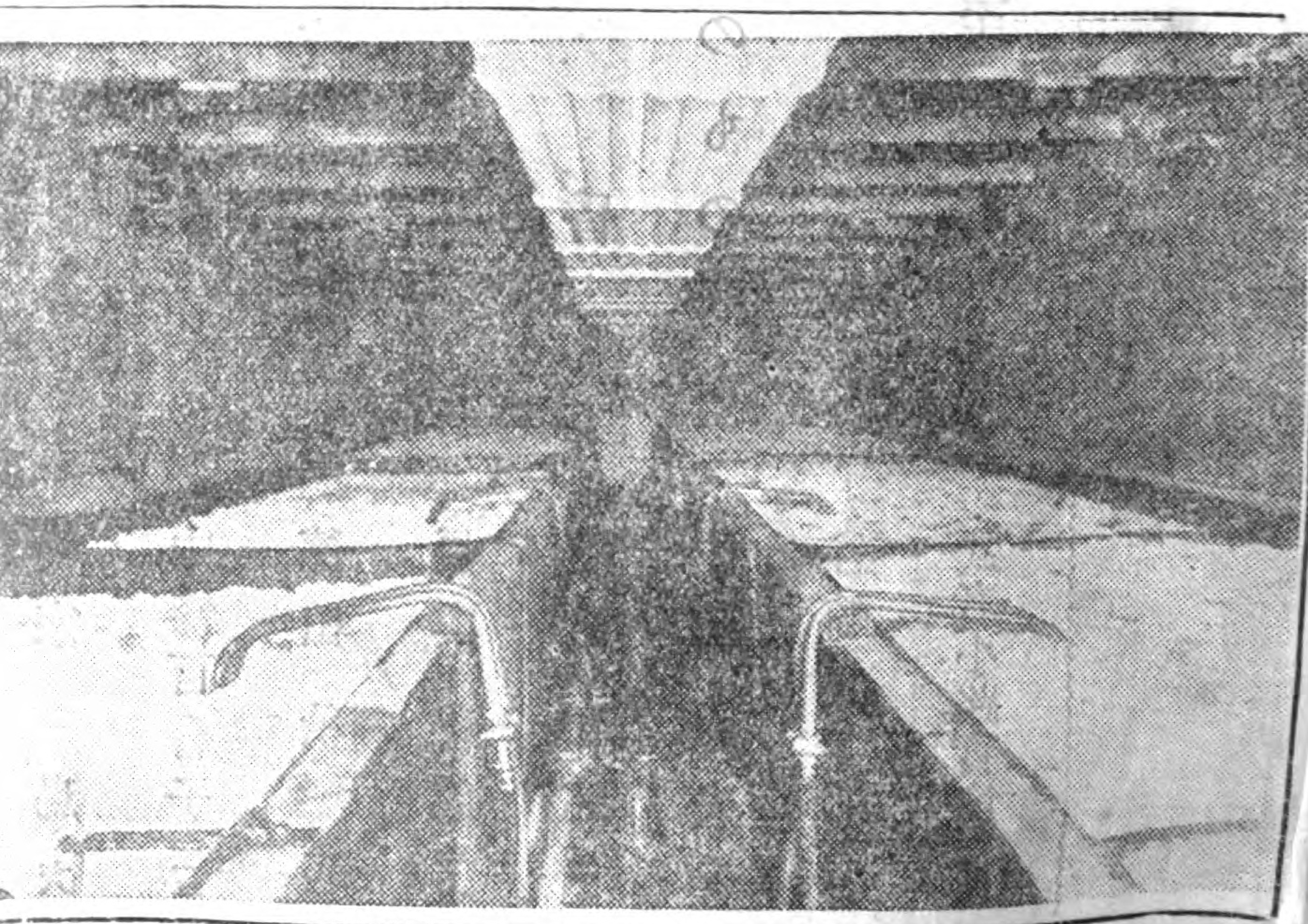
東京各藥店にあり

零下二十度

氷のなかに

サクラビール

は先づ醱酵す



市崎正治・六

中西伊之助著

長篇小說 國と人民

四六判八百頁
定價二圓八十錢
送料二十錢

東京神田錦町三
振替東京二九六三九
平凡社

忽八版

見よ此の近代日本の創世記！

作者久しき沈默を破つて『近代日本と東洋』を創世したる日清戰爭の內面的解剖を題材としたる堂々一千枚の長大雄篇を天下に問ふた。クレオパトラ・カテリナ、淀君よりも嬌艶なる本書の女主人公が象牙の如き白き腕に列强の使臣を縱橫に手玉に取つて、而かも政權におごりて日夜遊宴に享樂する。民怨は凝つて革命の烽火はあがつた、バイロンの如き詩人的革命兒、ワシントンの如き革命軍の首領、ジヤンダークの如き美しき革命少女、旌旗野を掩ふて人民軍の首都攻擊、列强出兵、捲き起る戰亂！あゝかくて人類は永遠の十字架を負ふて步む。――久しく叫ばれて解決せられざる藝術と時代の握手は、作者の新しき努力によつて成つた。眞に劃時代的大藝術品である！

大原社會問題研究所編輯

新刊

日本社會事業年鑑

菊判二五〇頁
定價壹圓八拾錢
送料拾二錢

大正十五年度版出づ

本年鑑は我國社會事業の全汎に渉り、之が政策、施設、運動、法規、統計、資料の類輯であつて、現下の本邦社會事業の一大鳥瞰圖であり、又近時の發達を如實に物語る歴史的記錄である。

總說‖社會行政—皇室と社會事業—社會事業行政—社會事業奬勵助成—方面委員—職業紹介事業—公設市場—住宅の供給—救助事業—釋放者保護事業‖社會教育—青年團及少年團‖社會衞生—人口問題—疾病—病院一班—特殊救療團體—軍隊衞生—工場衞生—本年度に於ける主要なる事項‖兒童保護—總說—母性及幼兒保護—少年職業指導—少年勞働者—不良兒の保護—盲、聾啞敎育—精神障害兒童の敎育—第四回全國聯合學校衞生大會—全國育兒院名—棄兒統計‖其他の施設及大會—細民金融機關—東京市市民共濟會—生活改善—地方改善「附水平運動」—財團法人同潤會同潤啓成社—財團法人俗風會—矯風運動—セッツルメント事業—全國社會事業大會‖社會事業關係法規‖社會事業參考資料—著書—雜誌—調査並に資料

發兌 東京神田西紅梅町 同人社
振替東京二七〇六五
電話神田三四四〇

河田嗣郎著

社會問題綱要

定價金貳圓五拾錢
送料金貳拾一錢

最新刊

社會問題の口にさるゝ今日より甚だしきはない。而かも社會問題の何物たるかを確と把捉せず、好加減な臆測と間に合せの斷片的智識によるを以て、盲者象を論ずの嗤笑を招く「識者」が多い。本書は社會問題に造詣深く且つ其立脚點の中正公平を以て知らるゝ博士が社會問題の發生、現勢、將來に就き正確と平易に且つ詳細に記述されたもので「社會問題とは何ぞや」の問に對し最も適確なる解答を與へ得るものは本書を措いて他にない。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二 改造社

堺利彦傳

堺利彦著

明治大正の社會運動を語る面白き側面觀！

堺氏は我國社會運動の大立物である。「この自傳が明治大正の社會史として社會運動史として多少の意義あれかしと望むでゐる」と謙遜の中にも斷言し得るは氏を措いて他に無い。斯る意圖の下に筆を取つたのであるから自身を語ると同時により多く當時の社會を語り、より多く當時の社會運動を語つてゐる。而かも一方文壇の老將たる氏が其の輕妙の快筆によりて縱横に社會變革期に於ける明治大正の社會を解剖するのだから一讀巻を蔽ふ能はざる面白味がある。

定價貳圓
送料貳拾壹錢

發行所 東京芝區愛宕下町二 振替東京八四〇二 改造社

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同しだと云ふ煙草も一度『カロット』を口にすれば

再び煙草は吸へぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本社代理部と榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御註文がありました店員が此事を主人に報告しますと主人は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御說明申さう」と云つて主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました。丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて與れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好きな方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速カロットを取上てお試しになりました、暫して其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが、社員の方「やつ!之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました、到底煙草等吸へないですね!」驚いたと仰有いたしました、此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ、」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立になつて「カロット」を取り上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草は吸へませんね!」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞讃下さいました。其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懷を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

天下堂は銀座、時事新報社に向つて左の通り左側八軒目です。何うか一度誰方も御來店御試しの上ニコチンの中毒の害からのがれて下さいまし、兎に角弊堂は確信を以つて發賣致して居りますから御來店御實驗の程願ひます。……………

特徵

外見恰も卷煙草を用ゆるに異なざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘い味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を離れて斷じて再び顧みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散步等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

カロット（凡百日分）

金貳圓五十錢（ベークライト製パイプ付）

金參圓五十錢（サック入象牙製パイプ付）

送料（內地十八錢 臺、朝、樺四十五錢）

引替送料（內地三十錢 臺、朝、樺五十五錢）

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

東京府大森不入斗四五一

榮川堂

振替東京五二九壹壹

東京市京橋區瀧山町十三番地

代理店 **天下堂**

東北大學教授　村岡典嗣著

切支丹文學抄

定價参圓　送料二十六錢

新村出博士評

本書は英佛に佚存し我國に遺つた吉利支丹文學の代表篇四種を選んで正確な原本批判と適當な翻字法とによつて學界及び讀書界に紹介したものである。文祿慶長時代の文學として日本文學史上に異彩を放てる創作並に翻譯の標本を提供するに方つて編者が盡された文學献的用意の細心精緻と本文の前後に附けられた解題や語彙の周到懇切と植字上に與へられた顧慮苦心とは學術的情熱良心の發露に外ならぬものとして至大の敬服に價する。

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

故アルフレッド・マーシアル著　大塚金之助譯

經濟學原理

（全四冊）

菊判上製　定價各冊参圓五拾錢　送料二十四錢

マーシャルが年と共にその學殖が圓熟して行つたやうにこの若き譯者の研究が成熟してゆく事はわが學界の喜びである。譯者は震災數年前にこの大著を譯したしかしそれはかれのデリケートな學的良心を滿足させるものではなかつた。震災でその紙型を燒いたかれはもう一度一九二〇年の八版によつて改譯した。本書には第一編の序論より第三編の欲望とその滿足までを收めてゐる、譯書でこんなに著者の心持に忠實なものは近來に見ない。譯書としてわれわれが薦めないと思ふものでこれほどわれわれを喜ばせたものは近頃になかつた。（東京日々批評）

分冊一　發賣

分冊三　第五編　需要・供給・價値の一般關係

分冊四　第六編　國民所得の分配

分冊一　第一篇　序論　第二篇　基本概念　第三篇　慾望と滿足

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京七四〇二番　改造社

帝大選手
醫學士 長谷川宗憲著

ボート

四六判天金
定價參圓五拾錢
送料廿二錢

新刊

近時運動競技の技術と理論とは、駸々乎たる進歩を遂げ、漕艇術の如きも、歐米に於てはレーマンの著書を初め數多の有益なる著述を得て、その進歩發達は實に驚くべきものがある。然るに漕艇術の最も發達せねばならぬ我國に於ては、その技術遲々として進まず、況して好指導書好參考書の如きは一冊もなく、斯界は多年その渇を愬へてゐた。此の時に當り、多年帝大の選手として令名を馳せた長谷川氏が、體驗と研究の結果を綜合して歐米の諸研究を參酌し、實に詳細親切なる指導書を公にされた。特に一人漕のスカルの漕法を詳述されるなど、用意の程察すべきである、愈海と河に親しむ時、愛艇家を初め大方の一讀を待つ。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社

小山内薫著

定價金壹圓參拾錢
送料金拾七錢

戯曲集 森有禮

新刊

本書は、我が新劇運動の先覺者として、劇作に演劇に、不斷の努力と奮闘を續けられつゝ著者の近業の中より、會心の作五篇を蒐められたものである。氏の作は、巧緻に陷らず、小手先を使ひず、正面より堂々と立向ふ所に、その長所を稱へらる。又何れの作を取上ぐるも、氏が劇に關する含蓄の豐富よりして、幾多の暗示を與へる。劇に志す人士の缺くべからざる良書として薦む。

（内容）＝1、森有禮（五幕） 2、吉利支丹信長（一幕） 3、ある敵討（四幕） 4、奈落（一幕） 5、財（一幕）

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二 改造社



(九月號)

發賣禁止に對する一抗議

近時頻々内務官憲によつて行はれる發賣禁止處分が、不合理極まるもので、殆んどそこに時代意識の何たるかを問題とせずに三十年以前、即ち明治廿六年四月公布の出版法でドシ〳〵發賣頒布を禁止さるることがいかに時代錯誤であるかは識者を俟たずして明かだ。

この三十年間にいかに我藝術、思想が劃期的進展を見、殆んど隔世の感を懐くまでに文化の躍進を見たるに拘らずその取締法は依然として舊態不變である。否、却つて明治乃至大正の前期に比して逆行せるは何ぞ。そして現行出版法さへ大衆のため、藝術家のため、出版業者、雜誌業者の、利益のために適用されていない狀態だ。假令へば出版法第十九條に「安寧秩序を妨害し又は風俗を壞亂するものと認むる文書、圖畫を出版したるときは内務大臣に於て其の發賣頒布を禁し、その刻版、及印本を差押ふることを得」とし、第三十條に「前條の差押を爲すときは製本の體裁により其差押ふべき部分と他の部分と分割し得るに於ては之を分割するとあるべし」とし、新聞紙法第廿三條又之に準ずる規定を設

け寛嚴其道を如何にでも選び得る條章あるに拘らず依然として刻板、紙型等は差押へられ、分割して販賣する方法も行はれざる狀態にある。立法の原則として發賣禁止は惡記事を社會と隔離し、そのために社會的煽動若くは淫蕩の惡習に感染せぬのにあつて、財產權の損害を發行者に與へるのが法の目的でないとは當局者も確認せる所だ。――に拘らず當局者は物質的に――しかも最高度に――之を制裁しているのは取締官憲が封建思想より未だ脫却せず自己の地位を時代的に職認するに至らざる謬想から來ているのではあるまいか。單に現行法に遵ひ內務大臣の裁量處分によるとしても既にかくの如く許さるべき幾多のものがある、殊に其以外に於て檢閱官に藝術上、思想上の理解があり、否それ以上に藝術家、思想家をも加へたる審議制度を設定することも現行法で許され得るのである。現存の忌はしい裁量處分によつてさえも、未だ當局者が考量し得る道はいくつもある。であるのに彼等が權力を强度にふりかざし、………の强權によりて不當にして而かも我々の首肯のできぬ仕儀のみに出づるのは全く裁量處分の大なる弊害である。若しも現當局の如き發賣禁止方針で行くならば、資本の少ない出版業者、雜誌業者は二三號連續し禁止處分に遇へば忽ち破滅するものも少くはないのだ。さらぬだに雜誌、新聞事業が經濟的に獨立する可能性の少ないことは當局者は百も承知している筈だ。殊に雜誌業は新聞業と違ひ、禁止の厄に逢へば全收入のすべてが無一物となることもわかり切つている。そして禁止處分に對して出訴權もなく、要償權も認められていないのだ。凡そ世にかくの如き不合理極まることが二つとあるだろうか、我々の生存は常に一檢閱官の前に………いておる狀態である。かかる爲體では法治國民としてのありがたさが何處にある。我々はかく不當、不合理、そして不安の下に出版、雜誌業を繼續して行くことは不可能である、故に之に對抗するには唯だ列擧主義によるより他に途がない。裁量處分には此以外に幾つもの危險が伴ふのを知る。それは反動派の內

閣、反動的內務大臣等が政策的に禁止處分を斷行するの恐あることだ。時の內閣、時の內務大臣等が幕府、上院の時代錯誤連へ迎合するため、若くは私怨のためこの此武器を振り廻はすとせば我々は誰に愬へ、誰にその公正處分を求め得る。裁量處分の恐るべき所は實にここに存するのである。そしてそれ以上に思想、藝術の無理解から來るだろうと思はるる禁止處分が無數であると云つても差支ない。我々が列擧主義に依り、出訴權、要償權を要求するのは實に我々の止みがたき生存權を確保する上からだ。藝術思想の發展、獨立の上からである。法治國の完璧を期する上からである。

文藝協會、雜誌協會、出版協會が本誌所載「犧牲」の禁止處分を機緣として共同戰線を張つて之が解決に起つたことは聊か時機の後れた感はあるが、今回は徹底的にやつて貰ひたい。三協會聯盟の解決案は一、現行出版法三十條をすべて分割切取に限定すること二、刻板紙型差押の削除三、文藝鑑定局を設くること（官民より一流の人士を選びこれを禁止處分の諮問機關たり且つ再審議の機關たらしめること）四、要償權を附帶せる出訴權を認めること五、禁止處分は例擧主義によること等で何れも世人を首肯せしむべき妥當溫和な案のみである。

時代はもう三十年前のそれの比でない、藝術に於て、思想に於て我が文化は燦然として面目を一新して居る。ただこれに伴はぬものは、決定機關たる當局者の頭腦のみではあるまいか。我々は我文化の進展のためにこの要求のすべてが近く實現することを期待する。現在の壓迫が依然繼續するに於ては我藝術乃至思想は全く魂なき空骸として墮落し、我國文化の進路も又全く阻止中斷されて民族的精華の發揚は期し難いと思ふのである。

迷信文明の變態的延長としての資本主義文明

長谷川如是閑

一　三つの文明形式

社會をその文明形式から見、文明形式をそれを支配する中心勢力をなすものから見ると、主として迷信が支配する文明があり、主として武器が支配する文明があり、又主として機械が支配する文明がある。迷信文明は最も古い文明形式であり、武器文明はこれに次ぎ、機械文明は最後の文明形式であつて、現代がそれに當る。

現代の資本主義文明は、誰れもいふ通り、機械の文明である。それは人間が機械を使用する組織ではなく機械が人間を使用する組織であると言はれる。そこには生活が道具を決定せずに、道具が生活を決定する。それは手段が目的を支配する顚倒である。

然しさういふ顚倒は決して資本主義社會に限つたわけではない。言ひ換えれば、道具に支配されるのは、決して資本主義社會だけではなく、また、資本のやうな道具に限つたことではない。元來すべての道具は、生活を支配する傾向をもつものである。例へば言語は、心の交通の手段（道具）である。社會生活に於て、人間が協同的行動をとる事情は、當然意識の共通を導き出すのであるが、共通の意識を協同の行動に於て役立てる手段が言語である。動物の協同行爲に於ても、必ず何かの形で、協同の目的が表示される方法をもつ。人間に於てはその方法が單に動作や暗號によるのみでなく、言語による事となつて、そこに協同行爲が格段の發達を遂げたのである。人間的生活の發展は、大部分言語の効果によつたのである。さういふ言語の重大性のために、遂に言語自體の絶對的存在が觀念されることゝなり、人間自身は、却てその言語の奴隷のやうに意識されるに至つた。宗教的道德的、乃至法律的生活に於て、言葉は、言語自體の權威を作りあげた。呪言、念佛を初め、道德的の諸名目、法律的名辭等は、一定の言語や、それを形態化した文字によつて、その言語文字が意味するその內容の生活事實を喚び起す力をもつと考へらるゝに至つた。『南無阿彌陀佛』とか『アーメン』とかといふ言語は、死後の生命を支配する力をもち、讀經、祈禱、素讀、等の長たらしい無意味の唱へ言の反覆が、いろ〳〵の複雜な生活要求を實現する力をもち、また『萬歲』とか『ハラー』とか『エイヤッ』とかいふ類の簡單で力のある言語が、不幸を幸福に、悲しみを喜びに、無力を有力に轉ずる魔力をもつと信念されるに至つた。もつと總括的の力としては大和民族が、生活の方便として生んだ日本語は、『言靈』と呼ばれて、あべこべに大和民族の生活をそこから派生せしめる力をもつものであると考へられた。これ等は、言語といふ生活交通の手段が顚倒して、生活を派生せしめる本體となつたのであるが、もつと物質的の總ての道具もそれと同じ顚倒を生ずる性質をもつ。例へば日本刀は殺人の器具であるが、殺人が或る時代の支配狀態に必然の行動であり、従つてその道具たる刀劍が重大な機能をもつた

結果、それが手段から本體に轉じて、日本刀が、軍國的日本人の心意と行動とを支配する絕對的の宗教的實在のやうなものに向上するに至つた。それは人間の造つた偶像が、反對に人間を造る本體に轉化したのと同じ作用である。

機械文明は、機械が右と同じやうな顚倒を生み出すヨリ強い事情をもつたものである。生產手段として機械文明の社會に絕對の偉力をもつ資本は、それなしには如何なる他の機能も全くその機會を得る事が出來ないといふほどの專制的支配を建設するに至つた。而かも資本がさういふ絕對的地位を占むるに至つたのは、全く機械の發達によつたのである機械工業以前の生產に於ては、今日の意味の資本即ち貨幣價値の資本が中心ではなく、生產的技術が中心であつた。所謂腕一本が資本であつた。それは充分分業が發達せず、生產が自給自足式の孤立的組織によつて行はれてゐたが爲めに、生產手段は、莫大な貨幣の集積を俟たずして細かく分割されて、個々の生產者に與へられたのである　その組織に於ては、生產勞働それ自體が主たる生產手段であつて、而かも、それが勞働商品の形で賣買されずに、生產者自體の生產行動として活躍し、他の生產手段即ち固定資本を構成する生產手段は、簡單な道具の形で、生產技術の所有者に容易く得られたのである　所謂腕一本が、資本たる所以は即ちそこにあつたのである　然るに、機械の發生は、その事情を全く顚倒せしめ、技術は從的となり、道具が重大な手段的地位を占むるに至つた。その道具は生產技術に從屬するものではなく、また、個々の生產者に容易く得られるものでもなく、反對に生產技術と、個々の生產者とを、それに從屬せしむるものである　そこでは生產技術は分業的に分解され、それがそれ〴〵個々の分業的機械によつて所謂機械的に爲し遂げられ、生產者は、その機械の番人として統一的生產行動の技術も要らず從つて興味も起らず、又從つて衝動も起らない機械的行動を反覆する道具となつたのである。そしてこの人間的道具は、個々の人間として存在理由をもたないで、大規模の機械の集合的管理の下に包含され、機械と同じ性質で、マッスとして賣買される商品となつた。し

かもここでは人間は必要ではなく、その機械的勞働が必要なのであるから、賣買せられるものも、昔の奴隷賣買のやうに人格それ自體ではなく、それの勞働の定量だけである　從つて人格の生存が保障されないで、勞働の定量を賣り渡す義務だけが强調される。

さういふ狀態は、生產組織が機械の物質的作用を中心として組み立てられるに至つた必然の結果として生じたものであるが、この組織に於ては、生產の第一條件が以前のやうに個人の生產技術ではなく、機械を獲ることである。さうして機械は、たゞ資本によつてのみ得られる。技術が重大で道具が簡單であつた時代に於ては、完全な技術を得る手段が、生產組織の中心をなし、技術が完成すれば道具はそれと共に獲られたのであつたが、技術が簡單となり道具が重大となつた組織に於ては、右の反對に、機械を獲る手段が中心となり、技術は機械に從屬して容易く獲られることゝなつた。即ち資本が、生產に於て中心地位を占めることゝなつた。

そこから顚倒が生れ、資本を作ることが、產業の最も重大な作用となり、利潤の獲得が生產技術を獲ることに代つて、生活の主たる目的となつた。故に此社會は『獲得社會』の名で呼ばれてゐる。昔は、人間的生活の修業は、生產技術を敎はることであつたが、今日では生活の全體が利潤を獲ることであるといふことになつた。社會的乃至個的生活目的はたゞ資本の蓄積に集中された。資本は、人間的生活の手段たることから、それ自體の獨自の絕對的價値を有つ存在となつた。人間は資本に奉仕することによつてのみ最高の生活を生活するものと觀念される。

かういふ資本文明の性質は、機械の發達に伴ふ特殊の現象であつて、たゞ近代生活の組織に必然のもので、決してその以前の社會に起り得べきものではないが、しかし、それは從來の人間の社會的生活の法則を根本的に覆したものではなく、寧しろ同じ法則を違つた形で現はしたものであること言ひ換へれば、資本主義的統制は、それより以前の統制の

性質が變態的に延長されたものであることを、説明しやうとするのが本論の目的である。

機械文明のすぐ前の文明形式は即ち本論が、武器文明と名づけたそれであつた。それは武器が生活の組織を決定した時代の形式である。

私の見地は、文明の形式が如何に變化しても、云ひ換へれば、組織の中心が如何なるものであるとも、社會生活の根本的性質を決定するものは生産行動の組織――それは生産行動それ自體の組織で、生産行動を支配する組織ではない――であらねばならぬと考へる。從つて、生産生活が文明形式の基本的の、また恒久的の基礎をなすものであると考へる。さういふ文明形式は他の形式のそれ――迷信文明や武器文明や機械文明や――のやうに、立派な文化形式をもつて完成されてはゐないもので、それは全く將來の形式であるが、しかし、そのことは、生産行動が、いままでの各種の文明形式の内容構成に於て、やはり根本的のものであつたことを妨げないのである。生産行動は、今日までは、それ自體の文化形式をもたなかつたが、しかし、各種の文化形式の内容を充實せしめたものは、やはり生産行動の組織であつた。ギリシヤの文化も、ローマの文化も、周の文化も、奈良朝の文化も、ルイ朝の文化も、ナポレオンの文化も、現代歐米の文化も、皆武器文明や機械文明であるが、然しそれの内容はすべて生産行動の組織によつて完成されたものであつた。その形式の差違は生産行動の實質と組織との差異に基くものであつた。そのことは文化的産物、殊に建築其他藝術的工作物の各時代の特徴がそれ〴〵その時代の生産行動の組織と性質とに依存してゐることによつて明かにされる。

右のやうな私の見地によれば、武器も機械も、實は、文明の形態に間接に影響するだけのもので、その實質には關係しないのである。さういふ武器や機械やそれ自體が生産行動の組織と實質で決定されてゐるのである。されば、武器文

明とか機械文明とかいふことは、その武器なり機械なりが文明の實質を直接に決定するのではなく、それが生産行動の組織に干渉し、從つて生産行動の實質に影響する所から、それ〴〵武器による文明の又は機械による文明の特徴を産み出すのである。

武器は、やはり道具であるがそれは機械文明に於ける機械と違つて、生産の道具ではなく、統制の道具である。それは直接に生産行動に影響する何等の力をもつてゐるものではなく、又直接、生産組織の構成に干與する力もない。それはたゞ武器による統制の特殊の性質のために、一般社會組織と社會行動とに變化を與へる、その一般的變化の結果として生産のそれに影響するのである。然しそれは決して影響が少いといふことではない。生活一般に對して武器による統制の與へた變化の重大であつたことは、その間の社會狀態が時と場合の異るに從つて、その文化的特徴に於て、最高と最低の兩極端を示してゐることによつても察しられる。

武器文明は、武力的統制が産んだ文化形式であつて、古代の軍國國家の驚くべく豪壯雄大な又纖巧精微な文化形式を産んだ點で、如何なる性質の文明もそれに企て及ぶものはないのである。それはたゞに軍事行動に關聯する文化形式に於てのみならず、『郁々乎として文なるかな』と孔子が讃美したやうな、又『咲く花の香へる如く』と歌人が唱つたやうな文學、藝術、風俗、習慣等に於ける人間的結構の極致を示した意味の文化方面に於て爛熟の境地にまで到着したものであつた。

然し、武器文明がさういふ爛熟の境地にまで到り得たのは、その武器による掠奪の組織が、豐富な生産物の集積を持ち來したためと、更らにその消費が社會的に平均されることなしに、殊に軍國階級の生活に集中されたことゝの結果であつた。しかもさういふ統制の可能は武器の威力だけが貫徹し得たものではなく、やはりそれより以前の統制の性質を

繼承することによつて可能であつたのである。

武器文明の以前に成立してゐた文明形式は即ち迷信文明であつた。迷信文明とは、迷信が統制の中心勢力をなしたそれで、たゞに、各人の意識に於ける迷信に依つたものではなく、特に、その迷信を基底として、その上に迷信的統制組織が建造され、そこから産れた文明形式をもつものである。

この迷信的文明形式は、原始的社會の文明形式であつたので、或は文明以前の社會形式とも考へられるが、しかし、一定の文化要素を備へた社會を文明といふことを得れば、原始的社會もまたある程度の文明をもつたものと見做すことを得るのである。しかもこの迷信文明は、その形式と性質と統制とに於て甚だ複雜で、後の進歩した社會の文明形式と統制との根本的性質は、大概、この迷信文明の內容の裡に含まれ又は萠芽されてゐるので、殊に研究の價値をもつものである。それに次いで起つた文明形式、殊に資本文明に於て、この迷信文明の性質が含まれて居り、しかもそれが變態的に發展してゐることを明かにするために、次に迷信文明の性質を考へて見やうと思ふ。

二　迷信文明の性質（一）

迷信文明は、生產物の集積が比較的社會的性質をもつた場合の文化形式であつた。前に言つたごとく、それは社會統制が現實の人格の命令に依つたものではなく、超越的の人格の意志に依るものと考へられた。超越的の意志は、後代の觀念に於ても所謂總般的の意志であつて、その權威は個人的利害を超越した原因をもつと考へられた。今日の社會學の所謂社會的統制から發生した諸制度は、本來決して意志的のものではないが、然し觀念的には、今日でもそれは、一般意志、又は社會意志と呼ばるゝ、或る特定の心ではないが、とにかく一つの統一された綜合的の心の發動であると考へら

れる。さういふ抽象的な、又概念的な考へ方によらずに——『社會心』といふやうなものを論理的組み立で造る事をしないで、——もつと具體的に、想像の働きで實在的な人格を想定したのが迷信文明の統制であつた。

この統制は結局蒐集生活の組織として發達したことは後にいふ如くであるが、元來社會的に成立した總ての組織は、後にそれが何ういふ反社會的結果にたち到らうとも、その發生に於て社會的條件をもつてをつた事は謂ふまでもない。迷信文明の發生は、それを基礎づける社會條件が存在せねばならなかつた。

それはやはり、始めから蒐集生活の組織であつた。が、然し反社會的の組織ではなかつた。一つの社會的集團に、固有な宗教意識が發生したのは、それが統制即ち Control の必要からであつた事は謂ふ迄もない。最も原始的の宗教意識は、種々なる空想的心理の單純な現はれであつて、それは今日の精神病者に於ける個人的空想と似たものであつた。然しそれが、苟しくも宗教の形をとるに到つた時には、その迷信の共通の性質のために社會的となり、その原始的空想が、社會的統制に利用される事となつたのである。宗教の動機は統制その事であり、それが原始的迷信の意識を基礎として成立したのである。形態化した宗教は、その統制の意識を潜在的に隠蔽し、それに利用された迷信的意識を象徴的に表明したものであつた。故にその時から今日迄の宗教家がやつてゐるやうに、その象徴自體を信仰の對象とし、それに基づく感覺及び理性の發展だけを對象としてゐる時には、その宗教の潜在的性質は見出されない。

總ての宗教がもつ禁制、戒律は今日の法律と同じ性質の統制意識であつて、宗教の根本性質がそこにある事は謂ふまでもないが、然し禁制戒律等の消極的統制のみが宗教の機能ではない。さういふ禁制、戒律は、所謂『勿れ』の形式で現はれるのであるが、宗教が決して消極的のタブーに止らなかつた事は、後の宗教運動が必ず積極的行動を惹起する事情によつても察しられる。原始宗教が單にタブーに止つてゐたならば、宗教が蒐集生活の中心をなすやうに發達する事

は不可能である。

宗教的蒐集生活は社會的生産を統制する組織であつたが、生産物を集積せしめるといふ事を完全になし遂げるには、他方に於て、もつと根本的に生産行動を强制する組織があらねばならぬ。生産行動を强制する組織なしでは生産物を取得する組織が成り立たない。宗教は生産を强制する事が根本的であつた。勞働動作が、あらゆる宗教に於て形式的に根本的修業と認められてゐるのは、さういふ宗教の原始的性質の名殘りである。『働かないものは食ふな』といふのは二十世紀のモットーではなく、原始宗教のモットーであつた。神は生産物を要求する。その神に生産物を捧げる事の出來ない人間は生存の權利がなかつたといふのが迷信文明の社會的統制だつたのである。

宗教は、それ故に生産物を社會的に集積する組織であつたが、さういふ組織は、宗教意識が先きに發生して、その意識目的によつて生産物が神の前に集められたのではなく、その反對に、先づ生産物を集積する組織が先きに成り立つて、而してそれを支持する意識として迷信が利用されたのである。生産物の集積を要求する神そのものは早くからあつたにしても、それが生産物を要求する組織は、生産物集積の制度によつて刺戟されて發生したものである。さうしてその神的人格が、生産物蒐集の組織に於て觀念的に統制者の地位をとつたのである。（如何なる時代にも統制は一つの觀念である、從つてもしその統制を人格に結びつけて、『統制者』といふ者を造る場合にも、それは矢張り實在的の人格ではなく、觀念的の人格となる。神、法王、帝王、等の人格が今日の宗教思想や法律思想やに於ても觀念的實在であるとへられてゐるのはこの理由である）

故に社會の統制は、統制意識が——それが迷信の形でも、道德の形でも、また法律の形でも、——先きに發生して然る後に出來上つたものではなく、統制その事がどこかにまた何らかの形で起つてゐる所から、それを目的づける爲に、意

識が次いで起つたのである。原始宗教に於ける生產物の蒐集は、それ故に宗教が起つて然る後に發生した現象ではなく、反對に何らかの形の生產物の社會的の集積があり、それが、社會的に必然であつたが爲に、それを支持せねばならぬ意識——今日で言ふ社會意識——が迷信的發動をとつて現れたのである。而してその生產物の集積は、神の物であるといふが爲めに人間的所有の目的となる事は出來なかつたといふ事も、神があつて然る後に起つたことではなく、生產物の社會的所有といふ事實が先に起つて、その事實を意識づけるために迷信的神格がその所有の地位に据へられたのである。社會的所有の事實が即ち超越的人格意志を設定せねばならぬ理由だつたのである。

宗教的蒐集生活は、其起原に於て社會の經濟生活の組織に關聯してゐたのである。それは生產、分配及び消費に關する統制であつた。家族の生產が家長の個人的所有に歸し社會の生產が寺院または國家の階級的所有に歸するといふ制度は、後の變態的現象であつて、發生的にはそれは社會的所有の意味であつた。從つて後にその個人的乃至階級的所有を正當づけやうとすれば、必ず家長なり、寺院なり、國家なりを一つの觀念的存在としてその觀念的存在としての寺院なり國家なりに、空想的な社會的性質—實際にはさうではない—を附與するより外はなかつた。家長や寺院や國家やが、事實は個人や、階級やの獨占に歸したのであるが、然し、觀念的に、今日までそれの個人的乃至階級的所有は『社會的』の名に於て道德づけられてゐたのであつた。家長財產、寺院財產、國有財產といふやうなものは、それが社會的性質をもつといふ事によつて肯定されてゐたのは、いかに專制的の時代に於ても變りはなかつた。事實は、家長や寺院や國家やが、個人若しくは階級の獨占的地位を代表するものであつたが、宗教意識、道德意識、法律意識等の上に於ては、未だ嘗てその現實の事態をありのまゝに承認する事は出來なかつた。といふ譯は、經濟生活の、云ひかへれば生產分配消費の統制は、必ず社會的であらねばならぬといふ事情は、如何なる專制的の時代に於ても根本の社會的事實であつて、個人乃至

階級の獨占的統制は、畢竟變態的社會現象だからである。さういふ事實を科學的理解によつて認識し、行動しやうとするのは發達した社會の事で、原始社會に於てはこの事實を、迷信的な宗教意識が保障したのである。生産物が神の前に提供されるといふ事は實は、何人の個人的所有にも歸せざらしむる爲であつて、しかもそれは神をしてそれを消費せしむる爲めではなく、無論社會的消費を目的としたのである。從つてその生産物の分配も又た神的意志によらねばならなかつた。神的意志は、誰れの個人的意志でない超越的意志であるが、それを近代的に飜譯すればやはり社會的意志である。そこから消費行動に對する神的支配が起らねばならなかつた。消費に於て個人的放逸を嚴重に禁じられてゐる事は、あらゆる宗教に通有の現象である。後にはこの宗教的禁慾は支配者が生産者を奴隷的狀態に安定せしむるための教化手段に利用されたのであつたが、それが、右に言つたやうな機能をもつてゐなかつたならばさういふ利用も實効を奏する事は出來なかつたのである。迷信文明はその經濟生活を統制する機能をもつた宗教的組織を中心として成立つたのである。（性的生活に關する宗教機能も亦同じやうに重大であつた。それは生活の基底的の行動は生産と生殖とであつて、人間の社會意識は先づこの根本的行動の社會性質から生けれたものだつたからである。性的生活に關する宗教の機能の變態的の現象は、早くから研究されてゐるのであるが、生産生活に關する宗教の機能は、比較的閑却されてゐた。殊にその變態的現象が寺院や國家に於て現れてゐることに就ては全く看過されてゐた。宗教及び寺院に關しては、それらの潜在的性質が少しも研究されないで、象徴的性質だけが研究されてゐた。近代の人類學が興るまでは、それに就て手のつけやうもなつたからである。）

社會的統制とは、元來人間が集團的に生活する組織の下に各人が協同的關係に於て行動する狀態であつて、その靜的の形は單純な習慣である。家族や社會の統一が保たれるのも、習慣的に反覆する單純な行動がそれを可能ならしめるも

のであつて、そこに意識せられた目的とか命令とかいふものはない。然るに總ての統制は、必ず命令として具體的に現はれる。統制が何らかの形態をとれば、必ずそれは命令である。道德、法律のやうな發達した統制が命令として意識されてゐる事はいふまでもなく、行動がいかに瑣細なものでも、悉くそれは命令し、または命令さるゝといふ形で現はれる。この現象を今日誰れも迷信と考へるものはないが、然し今日でもそれを命令として强く意識する爲めに、何程かの程度で迷信が利用されてゐるのである。例へば宗教的意識がある行動を目的づける時には、それを絶對的人格の命令として意識せしむる事は今も昔も變りがない。道德的に行動を起さしむる場合にもそれを絶對的の命令とする意識を伴ひ、その絶對命令を下す超越的の存在を想定する。尤もその超越的命令者は、客觀的人格として考へられる傾向が減退し、所謂アプリオリズムの思想がそれに代つたが、それは客觀的存在が、主觀的に形を變へたものでそれがために、却つて絶對的自我といふやうな、觀念的存在を設定し、その絶對自我が、吾々の相對的自我に對する命令者であるといふやうな、原始的思惟と本質的に相通じた觀念形態をとつた。それは要するに社會的統制を支持する爲めの意識作用として、何らかの形の命令者を求めてゐるのである。

この事は原始的心理に於ても近代心理に於ても共通である。たゞ原始的にはそれが甚だ具體的であつて、概念的の構成をもたなかつたまでゞ、自我を絶對と相對との二つに別けて、其一方が他方に命令するといふやうな概念構成をとるに至り得なかつた。即ち、命令は總て外部から來るといふ素朴的な見地をとつたのである。今日の心理學に於ては自己の觀念にも生存競爭があり、いろ〳〵の矛盾した慾望が自己の裡に於て互ひに優位を爭つて行動を決定するといふやうな作用を承認してゐるが、さういふ心理的の立憲主義は原始社會の人間にはあり得なかつた。即ち心理的專制主義が彼らを支配してゐた。自己の心理的攪擾即ち觀念の內部鬪爭は事實に於て殆んど起り得なかつた。言ひかへれば單一觀念

が、寧ろ本能が、彼らを支配した。從つて無意識的行動が動物社會のそれのやうに、原始的人格の社會形態を支持したのである。その結果、若しそれが何かの形で意識にのぼるとすれば、やはり自己撰擇の余地は殆んどないといふ形で現れた。それは必ず絶對的の外的命令として意識された。もしそれが實際に外的條件に統制されて起つたものだつたらば、その外的條件そのものを命令者と認めたのである。反之、またそれが、殆んど意識されない協同の社會的動作であつたならば、それはたゞ本能的無意識行動として保障され、殆んど統制の必要もないわけであつた。統制か必要となるのはそれ故に、この無意識的の協同動作が反逆された場合である。個人的の意慾が動いて、或る個人が協同に反した行動をとつた時に統制は始めて命令の形で發動する。この時には明らかに統制は現實の命令の形をとる。そして同時に外的强制として發動する。社會的制裁又は實際の統制者の制裁がそれに伴ふ。だから具體的には統制は外的命令としてほか意識されないのである。自己の良心の苛責といふやうなことも、つまりは、この外的制裁、又はそれの恐怖から惹起される心狀である。

その場合にも、無論單に「勿れ」の命令だけとは限らない。主としてそれは「勿れ」の形で現はれるが、積極的に協同的行動を示唆する形でも現はれるのである　神意が一定の行動を示唆するといふ迷信は、屢重大の社會的効果をもつたのである。それはつまり、自己の觀念內容に於ける撰擇決定の作用が、恰も外形の命令であるかの如く意識されたのである。自己の主觀にさういふ決定を起さしめたものは、彼れの社會的環境の刺戟であるが、其の刺戟が自覺的に作用せずに潜在的に作用した場合に、自己の自律的決定のやうな形をとるのは文明人の心理であるが、その自律を更らに迷信的に神の啓示といふ外的命令として意識せしめるのが迷信文明の統制である。例へば、われ〳〵がある社會的行動をとらうとするに到る衝動は、必らずそれを要求する環境の條件に示唆されたものであつて、社會的の協同行動が、それ

に接觸するわれ〳〵を要求する事實があつて、われ〳〵がそれに示唆されて、その行動を起したのであるが、近代心理は、其れを自我の自律的決定によると理解し、古代人は、神意によると理解したのである。近代人はそれがために、自我の自律を命令するある實在を想定してゐるが、古代人は、同じ理由で、具體的人格の命令者を想定したのである。その人格的の存在を保つといふのが統制の始めに通有の性質である。

然しこの古代社會の現象も、前に言つた如く、右のやうな意識が忽然として成り立つたわけではなく、事實ある特定の人格の統制が始まり、其事實に示唆された意識狀態であると考へねばならぬ。一體社會統制は、誰れもそれを創造するものがあつたわけではないが、もし意識的にそれを强制する場合、または、それが侵された時にその反抗を禁壓する場合が生じたならば、それをするものは社會といふやうな抽象的存在ではなく、誰れか特定の個人であらねばならぬ。家族の統制が强制される場合又はそれが侵された時それに制裁を與へる場合には、それは家族のうちの誰れかゞそれをせねばならぬ。それはその個人の命令で禁止されるとは意識されないで、必ず祖先、または家族神といふやうな超越的存在がそれを强制すると意識されるが、事實反抗者を捉えて處罰するものは、祖先でもなければ、竈の神でもなく、家長即ち現實の人間である。重要なのはこの二つの事實即ち統制は個人的意志によるものでないといふこと、然しながらそれを强行するものは個人であるといふ事である。この事實は社會その後の變化を喚び起した動機となり、且つあらゆる變態的統制を通じて一貫した事實である。寺院や國家もこの事實から産れた子供に外ならない。

三　迷信文明の性質(二)

社會的統制は、元來組織自體の機構を條件とする約束である。それは所謂集合的規制である。それは意志又は行動が

集合的に決定される作用であつて、そこでは必ず個人的意慾と、個人的行動とが壓迫される。個人はその壓迫に對して必ず反抗する傾向をもつが、その反抗が統制を不可能ならしめれば社會生活は成立しない。社會生活を構成するものは協同行動であるが、協同の行動は必ず一定の秩序をもち、その秩序は行動自體の全體の組み立てで決定されるのであつて、個人的作用は殆んど無力である。それは確かに個人に對する壓迫である。個人がさういふ風に自己を壓迫される組織は、單に外部關係のみによつて造り上げられるものではない。外部關係は、集團の生活に對し積極的に、また消極的に影響して一定の構造を造り上げるものであつて、內部關係は、この外部關係によつて導き出されるものであるが、然し內部に於て、規制が保たれるのは、その外的條件に對する共同利害が、行動の協同を必要とする爲めであつて、その協同行動に於て、個人が自己を壓迫する秩序に服從するのである。秩序は外部に對する關係ではなく、外部關係に對し、內部組織を完成する爲めの約束である。それは純粹に協同關係である。社會統制は、超越的人格乃至外部的命令から成り立つやうに意識されたが、その實は右のやうな組織自體の約束に過ぎない

然し、さういふ意識を惹起したに就いては、そこに社會的理由がある。即ち統制の管理者は、右に云つたやうな社會學的理解によつて統制を支持する事はできない。また社會の成員もさういふ科學的理解をもつて統制に服從することは出來なかつた。故に管理者は、統制を支持する命令が、超越的人格または觀念的な超越的實在から發動するといふ理解方法をとり、一般はそれが管理者、即ち特定の個人によつて强制されるといふ事實に基づき、それをその指導者の個人的人格意志と感ずるのである。聖人の敎へといふやうなものが、實は統制の客觀的性質を云つてゐるものであるに拘らず、人格意志の表現と考へらるゝ後の傾向も、そこから出る。而かも個人的人格の不等性を感じる事は、人間の本能的態度であるから、魔術者、酋長、帝王、聖人といふやうな統制の支持者を、一般社會人は、特に命令する理由をもつ人格

とす爲めに、それが神なり、祖先なり、精靈なりの超越的實在を表現する不平等の特別人格と感ずるのである。從つてこの種類の管理者が統制を强行する事を社會的約束を强行してゐると考へないで、超越的意志を斷行してゐると考へるのである。

從つて、一般社會は、その超越的意志がなかつたならば、社會的統制もないといふ信仰をもつ。この考へは、事實社會統制がそれを强行する人間の存在、言ひかへれば、さういふ統制者の先づ發生したといふ事情に基づいてゐるのである。更らに言ひかへれば、社會を規制する人格が發生して、然る後に社會統制の意識が生れたのである。規制者のない統制といふものは考へられない。統制自體は、決して特定の人格のこしらへたものではないが、統制があればそこにその支持者があらねばならぬ。

迷信文明の社會に於ける統制は、かくの如く意識的には超越的人格意志であつたが、現實の統制者は特定の人間的人格であつたが故にその超越意志も實は人間的意志なのである。家族にあつてはそれが家長の意志であり、社會的には長老の意志であつた。しかしその意志はそれが家族的乃至社會的傾向をもつたものであつた故に、それを超越的とする一般信仰に合致したのである。しかも家族的又は社會的であり得たのは、彼等の人格が超越的實在たる神や祖先やの權化であつたためではなく、彼等の管理の實際的能力によつたものである。その管理者の性質が、今日の意味の道德的、法律的、技術的、科學的、管理者として少くともその時代に於て妥當して居たといふ事實によつてゐるのである。即ち統制はそれが立派であつたか、又はなかつたかは別として、とにかくそれは今日の意味でいふ社會管理だつたのである。

迷信文明の社會は、右にいつたやうにその時代相應の科學的管理に始つたものであつて、たゞそれを意識づける法律道德及び科學等が、宗教的迷信の形で現はれてゐたのである。そこに迷信文明の變態を來たす動機が存在したのであ

る。

統制者が具體的の個人でなければならぬといふ事情は、人間社會の進化が動物のそれと異る重大な事情である、而かもこの個人の重要性には、二つの區別がある。一つは社會的統制の支持者としての個性——支配者又は支配者的管理者——であり、他の一つは、統制が社會の動的性質を固定せしむる爲め、社會的生存過程が壓迫され、社會は生存上その統制に反抗する集合的傾向をもつに至る場合に、その反抗的過程を指導する個性——社會的指導者又は管理者——である。

統制が支持される場合にも、個人的の命令の形で現はれるやうに、統制に反抗する集合的傾向も、また個人の——英雄または天才の——行動によつて現される。全然集合的に現はれたと思はれる場合にも、必ずそのうちの最も敏感な、最も反應の早い特種の人間が指導的地位をもつものである事は、鳥の群が銃聲を聞いて立つ場合でも、最も敏感で、最も敏捷な、ある小數の鳥が——性格的に鋭敏である場合もあり、また境遇的に即ちその地位のためにそうである場合もあるが——特に早く飛び立つのであつて、群は彼自らの動機をもつと同時に、その敏感者の行動を模倣する事によつて一齊に飛び立つのである。即ち或る社會的傾向は特にそれを敏感し、最も敏捷にそれに反應する特異性をもつた個性によつて先づ表現されるのである。

この個性は、統制の性質が絶對的であり、典型的である場合と、然らざる場合とによつて具體的に異るものとなる。前者即ち統制が絶對的である社會に於ては、集合的勢力が最も強く働くので、個性はその突變的變異を生ずる機會に乏しい。即ち統制の因襲的盲從が支配する爲めに、それに反抗する集合的傾向が起らない。個性の變異も、實は或る社會的環境に於ける集合的傾向を代表するものであるから、統制の力強さで社會生活が固定されてゐる間は、個性の變異は

起り得る機會に乏しい。言ひかへれば統制そのものからは個性は發展しないのである。そこにはたゞ集合性が働く。然らば、統制を支持するに特種の個人を必要とするといふ場合の、その個人は何ういふ人間であるだらうか？

それは進化過程に於ける變異をもつた個性でない事は明らかである。盲目的に服從される統制を支持するものは、それを覆すやうな變異をもつ個性であり得る筈はない。そこでその場合の個性は特に統制の盲從に堪能な個性であらねばならぬ。即ちそれは社會的に必要な統制組織が、それを反覆經驗することによつて生み出した統制反覆の名人である。それは反覆的經驗、言ひかへれば因襲的熟練が生んだ特種の人格であるがさういふ人格とはとりもなほさず『老人』のことである。老人は、長い間の反覆的經驗によつて統制の盲目的反覆に最も堪能な人格である。（尤も老人は同時に生活の科學的經驗者である事情もあるが。）長老の支配が即ちその時代の統制支持の組織であつたのは右の理由によるものである。老人は必ずしも、固定的變異をもつたものではないが、若いものに較ぶれば、より長い時間統制支持の行動を反覆したものである。恰度弓術の名人が六十歳以上になつてはじめて師範役となることができるといふやうなことは、反覆行動の永年の繰り返しのみが作り上げる事を得る人格である。弱年者はいかに秀才でも、天才でも、反覆行動の期間が短いために名人の域に達する事が出來ないのである。即ち統制の支持が長老でなければならぬ理由である。この種の統制者は個人であるが、實は一種の因襲的經驗の人間化したもので、個性であるといふよりは、寧ろ集合的性格の共同の持ち主であるといふのが適當してゐる、老人はさういふ性質の人格である。

然し、この長老の支配に於ても、すべての老人がそれに適した譯ではなく、そこでもやはり特種の個性的變異をもつた中心の存在をなした事は、すべての原始的社會を通じて一般の事情である。人類學者が Medicineman と稱する個人は、即ち個性的變異を具へた人格であつた。それは單なる統制の體驗者ではなく、即ち盲目的本能によつて反覆的

經驗を積んだといふばかりのものではなく、特種の個性的能力によつて、その統制の機構を何らかの形で意識した意識的管理者である。それは恰度後の文明社會に於ける科學的管理者の原始的のものであるといはれてゐる。その科學が錯誤に滿ちてゐる事はいふまでもないが、然し、性質に於てはそれは『科學的』であつた。

さういふ個性はやはり個的變異性をもつ點に於て社會進化の動機を造るものである。多くの人類學者が一致してゐる通り、社會的變化は、因襲的統制の支持者たる長老の支配の發展したものではなく、この medicine-man 式の支配形式の發展したものである。それは先づ宗教上の首長の形をとり、次に政治的元首の形に發展したのであるが、迷信文明は、その前者から後者への過渡期に於て榮えたのである。

次に、個人の變更性が社會的統制の支持者としてでなく、統制の固定的性質に對する敏感者、即ち反抗者として現はれる場合がある。この場合は、個性が特種の社會的變化を惹き起すのであつて、前の宗教的天才のやうなものもまたこの性質をもつた人格であるが、然し、その時代は社會的に集合的勢力の頑強であつた時代であるから、個人的特異性は、たゞ一般的統制の有機的變化の傾向に追從する傾きをもつたものである。集合意識が主として因襲的統制の典型を追ふてゐる場合にその傾向に順應する規制を強行するに止まるのである。これに反して、典型的統制に反抗する個性的變異は、組織の崩壞に當つて生まれ、新らたな統制を指導する性質をもつものである。故にさういふ個性が充分な働きをもつに至つたのは近代の事である。宗教、道德、法律、政治、其他の社會的統制の因襲的反覆を打ち破る傾向をモーダーニズムと呼ぶことも、全くさういふ個性的變異が徹底的に動き出したのは近代であるといふ事實を現してゐるのである。

迷信文明を指導する人格は、さういふ近代的人格ではない。然しそれは宗教、道德、法律及び科學の發見者であり、

發明者であり、また實行家であつた。その事は、多くの民族的傳説に於て、古代の支配者が、醫術、學術、その他土木的技術等の創始者であり實行者であつたといふ事のあるのによつても察しられる。それにも拘らず、迷信文明の統制は、主として集合的の統制意識に依從するものであつた。近代的意識が發達して、社會生活に於ける個性の價値が認められるまでは、如何なる個人的優越者も、その個性をもつて統制を支持する事は出來なかつた。(個性絶對の近代でも、事實個性の絶對性が觀念されてゐるのは、所謂哲學的意識に於てだけであつて、社會的には決して絶對的には成立してゐない。)即ち、超越的存在の力を表現するエーゼントとしてその權威を認められたのである。その統制が次第に變態的性質をもつて發展し、遂に特殊の迷信文明の形式を作りあげるに到つても、右に述べたやうな特性は、猶ほ觀念的に保存されてゐるのであつた。

四　迷信文明の經濟的管理

宗教的意識が、生産より消費へ至る經濟行動を統制する作用をもつてゐたために、經濟的管理が、宗教の首長の手にまたはその組織のもとに移らなければならなかつた。元來、社會の經濟的管理は、今日では結局個人的所有の管理となつてゐるが、本來は決してさういふ性質のものではなかつた。今日の經濟管理は、國家的必要とか、社會的要求とか、いろ〳〵の名目をもつてゐるが、歸するところは個人的私有財産を豐富にし、强固にする管理に外ならないのである。反之、迷信文明時代に於ける經濟的管理は、社會的所有の管理であつた。經濟行動そのものは、迷信文明に於ては個人的性質のものではなく、社會的性質のものであつた。今日家長の勞働が、一方で自己の個人的所有のためでもあるが、他方では家族全體の爲に働くといふ事にもなつてゐるが、迷信文明時代の經濟生活は、個性の乏しい全體的關

係のもとに行はれ、從つてその關係が個人に統一されるやうには組織されないで、社會的統一に融込んでゐたのである。すべては集合的行動であつた。米を作り衣を織る事も集合的行動であつた事は、苟くも社會の形で人間が集合して以來の事である。交換の如きも其初は決して個人的には行はれないで集合的に行はれた。かやうな集合的行動の管理が、即ち經濟管理である。經濟管理が全然個人的性質を帶びるものとなつた事は十八世紀以來の產業的變化の結果であつて、決して根本的制度ではない。而して迷信文明の社會に於ける經濟的管理は、その社會的性質を宗教的意識で貫徹せしめたものである。

その時代に於ては生產は神の所有の發展であり、生產物の集積は、神に對する提供であり、その分配が、神の恩惠であり、從つて消費の調節が神に對する敬意によつて行はれた。同時に交換の作用が神事に伴つて行はれた。物資の集積と分配と即ち今日の市場の開始が同時に祭禮であつた。種を蒔くに神秘的時日があり、收獲も祭事を伴つてゐた。家を造るに、地鎭祭又は起工式が神官僧侶の監督の下に行はれる習慣の殘つてゐるのも、また食事をとる時に、お初穗を神に捧げ、西洋では感謝の祈禱を捧げるといふやうな事も、すべて生產分配消費の經濟生活が、宗教的管理の下にあつた迷信文明の遺習である。その性質は云ふ迄もなく社會的である。誰れもの個人が、そのお初穗によつて利得し、その感謝の祈禱を受けるのではない。

然るに、事實統制は誰れかの個性に俟たねばならないのであるから、お初穗がその個性の利得となり、祈禱が、個人に對する感謝と變る性質をもつ事は止むを得ないのである。物資の集積が、一定の具體的場所を要し、その仕事が一定の管理能力を要し、同時に最後の決定力をその管理者が持たねばならぬといふ事は、即ち統制者の人格に社會的權力の賦與せらるゝ當然の結果を齎らすものである。

今日では、所有の觀念は個人に限定され、苟しくも所有する資格のあるものは、個的人格でなければならぬといふので、集合的性質の所有の場合には、その集合を法律の所謂擬制によつて一個の人格とするのである。それと同じやうに、古代の所有は、やはり人格的であつたが、個性を超越した神的人格のみに賦與されてゐた。從つて總ての人間的所有は、今日の意味でいふ保管に過ぎなかつた。それは依托された權能に外ならないのであつた。迷信文明の統制者の經濟管理の權能は、それ故に、今日の資本家の經濟的管理の權能のやうに、管理者の個性的權威に基づくものではなかつた。寺院は財産の共同管理の機關であり、僧侶はその保管者であつた。誰れもが所有してゐない生産物の集積が寺院財産であつた。この根本の性質は、今日の寺院財産に於ても名目上は變つてゐない。然しさういふ管理に於て、その絕對的權能をもつものがたゞ宗敎的首長であつたといふ事實は、即ち統制の當然の結果ではあるが、寺院及び國家の變態的發達を生み出す結果となる事は免れないのである。

同時に、さういふ管理を徹底せしむる統制には絕對的に必要な條件がある。それは即ち、生産手段の獨占である。生産物を集積せしむる事實が、命令の形で現はれる事は前にも云つた通りであるが、その命令の意識を貫徹せしむる爲には、一定の觀念的基礎を必要とする。さもない場合には、全く物理的に暴力によるほかはない。然し暴力だけが統制を維持する事の出來ない事情は原始時代より今日に至るまで一貫しいた事實である。そこで、原始的時代は、矢張り觀念的に一定の合理的關係を設定せしめたのである。即ち生産手段（その時代の生産手段は土地であつた）を神の所有することによつて、生産を神が收得するといふ關係を設定したのである。

一體生産手段は社會的には生産者に屬するものであつて、生産者は、それを自然から與へられ、生産するためにそれを獨占したものである。生産者は、生産手段を獨占しなければ生産を行ふ事は出來ない。土地及び道具は、生産に於て事

實上生産者が『所有』してゐるのである。然るに、迷信文明の統制は、この生産手段の所有を生産者から剝奪したのである。土地も道具も、その時代の生産者にとつては、自分が得、または作つたものであるに拘はらず、それに對して、今日の、意味でいふ自己の絕對的所有といふ事は許されなかつた。道具は往々、個人的所有の目的とされたが、然しそれが道具自體の性格をもち、寧ろ人格をもち、その人格は、奴隷が主人の所有であつたほど個人的所有の目的とはならないで、寧ろその特殊の生産行動に附屬する所有のやうに觀念された。今日でも大工、百姓が、工具や農具を神聖視する習慣は、その道具自體の主觀的存在を觀念することである。土地に至つては、未だ嘗つて生産者にそれに對する個人的所有の觀念の確立した時代はない。古代に於てはそれは神の所有であり、また帝王の所有であり、中世に於てはそれは領主の所有であり、近代に於てはそれは國家又は地主の所有であつて遂に生産者の所有であつたことはない。そしてその土地の所有者が、いかなる時代に於ても、その生産物を取得する權利者だつたのである。

されば、迷信文明が、土地を神の所有に歸せしめた事は、その後の領主又は地主の所有に較べて遙かに社會的であつたと言ひ得られる。その所有に於ては、所有者は神であり、從つて生産物の取得者も神であるといふ事は、普遍的の所有即社會的所有の意味であつて意識の形としてもそれは最も社會的である。從つて後の反社會的所有に於ても、この普通的所有といふ意識は、優越者の所有を肯定するために利用されたのである。生産手段の個人的所有者は、今日でも、その所有を國家又は社會の必要のためといふ口實によつてのみ肯定しやうとしてゐる。個人の自我が絕對であるといふ哲學は、そこでは最早通用しないのである。それに比すれば迷信文明の神的所有は意識としても遙かに社會的だつたのである。

然し迷信文明に於けるさういふ社會的意識は、軈て事實によつて裏切られた。生産管理の爲めに管理者に賦與された權

能、その管理のもとに集積された富は、自から管理者に特有の生活形式を與へた。即ち、生産物の蒐集組織を本位とする生活がそれであつた。この生活は自ら次の結果を生ずる。第一には、生産行動の廻避、從つて生産行動及び組織に對する無知となり、社會生活の重大な部分に對して局外的の地位をとるに至る。が、第二に、それは更らに積極的に特種の生活典型を生み出す。即ちそれは神の名に於て集積した生産物を、社會的に分配し消費する代りに階級的に分配し消費する組織である。この時代の集積分配及び消費が、神意に從つたものであるために、それにはどこまで發展しても、その神意を除外する事はできない。だからそれが個人的階級的集積乃至消費に移つても、神の**名にだけはよらなければならなかつた。今日までも寺院財産が、誰れもの個人に屬さない抽象的所有の名目だけを保つてゐるのは、その結果である。**

迷信文明は、從つて寺院文明である。文化はたゞ僧侶階級に於てのみ發達したのである　而してその文化を生み出したものは、僧侶が生産物の集積分配及び消費を、社會本位に於てせずに、寺院本位に於てした爲めであつた。僧侶階級が、社會人に比して格段な優越的生活を保ち、寺院は階級的生活の城廓となり、僧侶は個人的文化生活の特權者となつた。

さういふ迷信文明の生活は、殆んどその時代の形態に於て、社會の一部に今日まで持續されてゐる。無論昔のやうに寺院の生活が國家の生活に對し、より以上の權力的、經濟的、並に文化的地位を占めたやうな事情は成り立たなくなつたが、形式に於ては依然たるもので、また實質に於ても侮るべからざるものがある。最も近代的な國家に於てさへ、プロテスタントの寺院の勢力が、アメリカの國家に對して有力な勢力をもち、また一部に於ては、カトリックが新興の勢ひをもつてそれに當り、二つの勢力の鬪爭が、アメリカの政治狀態を左右する潛勢力であるといふやうな事情は、畢竟

迷信文明の延長である。

五　武器文明の性質

迷信文明に對する反逆者は、即ち三つの文明形式の第二段の武器文明であつた。武器文明は初めに言つた如く、武器が統制に對し或る程度までの決定力を揮ふ組織である。この組織の發生は、決して迷信文明のやうな社會の內的事情に淵源したものではない。それは所謂二元社會の發生に伴ふ現象であつて、二つの社會が接觸し、それが一元的に統一されずに、他元的存在を續ける現象である。それは即ち軍國々家の文明形式である。

前に言つた如く、社會統制は社會それ自體の機構のうちに出來上る約束であつて、その間に何らの暴力的强制の働く余地がなかつたものである　それに對する制裁が極端に峻烈であつたのは、それの侵犯される事が極めて稀れであり、それを侵す個性が、極端に――今日の意味でいふ病的に――反社會的であつたので、その矯正が殆んど不可能であり、また矯正する手段のなかつたといふやうな、いろ〳〵な事情に基づくものであつて、統制自體が暴力的桎梏を必要とするやうな事情では決してなかつた。反之二元社會は、その社會生活が、全體的に一つの統制を生むべき組織ではなく、一方は征服者、他方は被征服者で、前者は主人即ち人間で後者は奴隷即ち主人の所有物であつた。さういふ互ひに反撥的な集團が一つの統制によつて約束づけられるといふ事はあり得ない。故にそこでは統制といふ事は、社會を二分し、その一方が絕對的存立を主張し、他方をその絕對的存立の手段とする爲めの規制である　それは社會的統制ではなく國家的統制である。規制される社會は、それ自身の統制をもち得るが、それをもつて優位の相手社會を規制する事は全然不可能である。即ち優位者の統制は、統制としては、劣位者の社會に及ばず、劣位者の社會の統制は優位者の社會に及ぼ

ず、即ち社會統制は、異つた階級に於て、それぞれ別なものをもつといふ事となる。即ち階級的統制である。

迷信文明の統制も、寺院の發生に伴つて階級的となつたが、然し僧侶階級は、社會的統制に於て、階級的搾取を行つたのであつた。即ち、一般社會人をその統制のうちに含めて内的關係に於て搾取したのである。反之、二元社會は全く外部關係によつて被支配者の社會の統制と沒交渉の方法でそれ自らの蒐集行動を行つたのである。從つてその權威は何等の社會的淵源をもつ事は出來なかつた。生産者は全く掠奪される組織のもとにその生産物と、その勞働とを提供しなければならなかつた。

往々、武器の支配は社會的安寧を維持する警察的若くは國防的効果をもつたものであるから、その機能に對して、人民が生産及び勞働を提供したのであるといふ考へも行はれてゐるが、然し、武器の支配は、何人がその支配者の地位を占めても、人民にとつては殆んど同じ事であつて、武器文明の時代に於ては、社會的安寧、若くは國防といふ事は、人民にとつては意味をなさない。封建領主が、常に轉換しても人民は特にそのうちの誰れか一人を支持せねばならぬ理由をもたなかつたから、人民の側に於ては國防の必要は全然なく、誰れが來て自分達を支配しても同じことである。國防はそこでは領主が彼れ自らを防ぐ事だつたのである。後に民族國家の觀念が發達して、民族的範疇と國家的區域とが同一でなければならないといふ事情のもとに、所謂國防が人民的になつたのであるが、その時にも、その民族と國家との一致はたゞ觀念的であり、又國家利害は必ずしも人民生活の利害と一致するものでないから、國家的戰爭が同時に人民の戰爭であるといふやうな事は殆んどない。民族觀念の強烈なる國民は、征服者となつた時に、特に不必要の壓迫を被征服民族に加へるが爲めに、その民族の防禦は殆んど生存問題であつた事もあるが、武器文明の時代に於ては、征服は必ずしも族外的に限らず、盛に族内的征服が行はれたのだから、武器の支配が甲から乙に移るといふやうな事は、殆ん

ど問題でなかつた。族外よりの征服もその征服者の態度によつては、族內的の征服よりも歡迎された。又今日の支那の軍閥のやうに外國の勢力を借りて國內の征服を行ふものもあるのである。要するに武器文明は、軍國階級の社會的機能によつて出來上つたものではなく、反社會的行動によつて出來上つたものであることは動かない。

然し、さういふ反社會的な支配は、到底徹底的には成り立たない。歷史上、武器文明が完全に成立したのは、その反社會的性質を修正した國家制度の發達の賜であつた。而してその修正は、武器の支配が迷信文明の統制を利用することであつた。元來武器文明を構成した根本的行動は土地の侵略であつた。而てこの侵略の第一次的の目的は要するに生產物及び奴隸の蒐集であつた。然し、そこに生產物が蒐集され、それらの組織が維持される爲には、迷信文明の統制を借りなければならなかつた。即ち武器の征服者は、被征服者と協同の統制に服すべき社會的關係に入り込むのであつた。征服者は征服された社會の統制者と、同一の社會的集團を組み立てる事となつた。それは共同祖先の生活、共同宗教の生活を打ち建てる事である。その場合に征服された社會が已に二元社會であつて、そこに前から武器の支配が成立してゐた場合には、それに對する他の國家の征服は國家階級の間に、征服被征服の關係を生じ所謂二元國家が成立する。この二元國家は支配階級內に征服者と被征服者の關係を構成するものであるが、いかなる軍國々家も必ずこの形式をもつたものであつた。全く統一されたやうに見える國家構成も、實はこの形をもたないものはない。日本の如きも、軍國貴族の形で國家の多元的性質が殘留してゐた。支那の『百姓（ひやくせい）』といふのは姓を有するものといふ意味で、即ち國家階級內の被征服者を意味してゐたのであつた。下民は更らにその百姓のもとに生產社會を構成してゐる別の社會であつた。

それが武器文明を產んだ社會構成の特色であるが、この組織は、迷信文明の統制を利用してその武器の支配を合理化する手續きをとつたのである。然し遂に社會生活に於て、武器文明の階級と生產生活者の階級とが、協同の社會群を作

る事が出來なかつたのである。武器の支配者は、つひに生產管理の關係には入り込まなかつた。故に武器文明は、性質上迷信文明と共通點が甚だ尠いもので、迷信文明がいくら變態的に延長しても武器文明とはならないし、また武器文明がいかに迷信の統制を採用しても、決して迷信文明とはならない。武器文明は、その統制に於て迷信も哲學も必要としなかつた。武器文明の宗教と哲學とは、あらゆる他の文明のそれに較べて、極めて貧弱なものであつた。

然し、武器の文明が集積したその生產物と勞働との莫大な額は、武器文明を物質的繁榮の極度に達せしめた事は初めに言つた通りである。この極度の繁榮は要するに軍國的支配階級の社會に限定されたものであつて、一般社會はそれにあづからなかつたのであるが、然し其の形式の下に於ける物資と勞働との市場の極度の繁榮は、必然に社會的繁榮を持ち來し、軍國的階級の本據即ち城廓を中心とする生活の發展が都會の發達を促した。武器文明は要するに、たゞこの城廓都市の文明形式である。が、今日でもさうである如く、都會文明が文化的發展の全體をなす事は、武器文明の特色であつて道德、宗教、法律、藝術等の諸制度は、この都會に於てのみ特殊の發達を遂げた。社會統制が法律の形で出來上つたのも、武器文明の時代であり、學術藝術等が特殊の發達を遂げたのも武器文明の時代からである。

而かもこれらの社會的諸制度の發展は、武器文明それ自體の生產ではなく、武器文明に基づく社會的發達が產み出したものである。そこでも社會は階級國家と別に、それ自らの統制をもつべく、自存の發達を遂げたのであつて、ギルドの如きはその顯著のものであつた。この社會自體の統制は、常に國家的統制に反抗したものであつて、今日の支那の商人團體が國家に對抗してゐるのもそれである。商人も工匠も農民も、その統制は彼自からの社會のものであつた。從つて武器文明の續く間は社會は國家と對立關係をとり、國家の規制は壓迫であつて統制ではなかつた。

かやうな武器文明と、全く異る性質をもつて起つたのが近代の機械文明である。

六　機械文明

機械文明は初めに言つた如く、近代的生產の道具の變化から導き出された特殊の形式である。そこでは支配するものが、迷信ではなくて科學であり、武器ではなくして道具である。支配するものが科學であるといふ事は、つまり生產關係であるといふこととなる。生活の叡智は生產行動の叡智として起る事は根本的である。古代に於て Medicine-man が行つた社會管理は科學的であつたといふのは、即ち彼れの天文、氣象、地理、動植物、物理、化學等の極めて初步的の智識が生產關係に對して原始的なる科學的指導を行つたことをいふのである。すべて社會的に科學的意識が起る場合には、そこに廣義の生產行動の要求が潜在的の理由として存在してゐたのである。ルネッサンスの科學的傾向は近代的生產及びその組織の先驅的條件をなし、十八九世紀の科學の勃興は機械文明の基礎をなしたものであつた。すべて科學的な社會的衝動は新らたな生產手段の發見を目ざしてゐるのである。今日では科學が科學的叡智自體の滿足といふやうな觀念的地位をとるに至つたが、然しそれは意識の變態であつて、生產行動に關係しない社會の、享樂な科學的意識である。科學自體は廣い意味の生產行動及び生產の組織を實現すべき心的條件である事は云ふ迄もない。

されば機械文明は、產業社會の文明である。それは生產が新たな手段を得た事によつて豐富にされ、その手段の優越が遂に手段による目的の支配といふ顚倒をもち來したものである。さういふ風に、それが生產關係の文明形式であるといふ事情は、機械文明を武器の文明から引離し、迷信文明の性質に近づけるものである。

迷信文明の特徵は、暴力による略奪關係を排除した點にある。即ち生產物の集積を暴力の略奪によらないで、社會的統制の自然的關係によらしめたのである。社會的統制が、生產物を集積する組織を必要とする事情から神的支配が生ま

れたのであるが、その神的事情に代るに、人間的事情をもつて來たのが機械文明である。迷信文明は、個人を否定する事によつて生産物の社會的集積をもち來たしたのであるが、この個人の否定が、中途の武器文明の統制に利用され、それが生産を壓迫する關係となつたが爲めに、機械文明はその反對に個人を解放する事によつて生産關係を回復しやうとしたのである。それがために、神權に代るに人權をもつてしたのである。人權は他の如何なる觀念的構造をもつにせよそれが要求するところは生産行動の自由だつたのである。武器文明が生産物と勞働とを、生産社會の機構に關係なしに徴收する組織は迷信文明が個人を否定して生産物及び勞働を徴發するのと同じ組織のやうであるが、實は同じ形式のもとに全く違つた目的を遂行してゐたのである。後者は社會的統制の目的をもつてし、前者は階級的壓迫の目的をもつてしたのである。即ち迷信文明が生産行動を奬勵する事は、掠奪の爲めではなく、社會的集積の爲めであつたが故に、個人はその神意の強制を壓迫とは感じずに、激勵と感ずるのである。反之、武器文明は生産を激勵する何らの信仰的組織も持たず、それが個人を否定する事は、それによつて社會的生産行動を強制する爲ではなく、その生産物を獲得する爲めであつた。從つて前者に於ては、毫も生産行動の社會的廻避が生産者の側に起らないが、後者に於ては盛んに農民の逃走を始め、生産勞働を廻避する社會的傾向を生み出すに至つた。

機械文明が、個人を解放したのは、武器文明の個人壓迫が、同時に生産壓迫であつたからである。而かも機械文明がその個人解放を、個人の絶對的自由に求めて、神意に求める事が出來なかつたのは、武器の支配が已に神意を個人壓迫の道具に傳つてゐたのに對する反動と、科學的意識の覺醒が信仰を神の上から人間自身の上へと轉ぜしめた爲めである。そこで機械文明は、皮肉にも人間文明の意識を淵源とし、常にその人間本位の意識と伴つて發達したのである。かくして新たな個人の發展は、新らたな生産關係を生みなすに至つたのである。生産、交通、學術、教育、職業、そ

の他の自由は、生産關係を統一的な社會統制から解放して經濟生活の自由の發展方向をとるに至らしめた。即ち舊統制が排除され、生産關係自體の統制が回復した譯である。生産管理、または生産行動に携はる集團が社會的中心をなし、生産管理や生産行動と沒交渉な武器の支配者は、遠く中心點から斥けれた。そこでは統制は生産關係に於ける管理者によつて支持され、その管理は迷信文明のそれと同じく生産管理である。

機械文明は、更らに迷信文明のそれに似て管理者の『所有』を中心としてゐる。武器文明の統制に於ては生産物はそれを生み出す勞働とともに、何時限らず徴發されたが、それは迷信にも、哲學にも基づくものではなく、言ひかへれば、何らの本能的社會性または合理的意識によつたものではなく、ただ物理的强制によつて取り上げられるのであつた。機械文明は、さういふ、無根柢の强制、即ち暴力關係を排除して、生産と、所有とを結びつける社會の統制を回復したのである。それは、迷信文明に於て、前にいつた如く生産が必ず所有に結びついてゐたのと同じである。

然し迷信文明に於ける所有と生産との關係は、所有が神的であつて、從つて勞働が神に對する奉仕であり、その生産物は、神への供へ物であるといふ社會的關係であつて、個的所有の否定であつた。反之、機械文明は、生産と所有との連絡を、個人本位に於て組み立てた。そしてそれは神的所有の否定であつた。言ひかへれば所有を社會的のそれから取り上げて、個人に賦與せしめたものであつた。

さういふ個人的所有は、機械文明の成立するまでは、決して絶對的に成立した例のないものである。如何なる時代に於ても、個人の絶對がなかつた如く、個人的所有の絶對も決して成立しなかつた。然るにそれが近代に至つて成立した所以は、つまり神的所有が武器文明の時代に於て、暴力による所有を肯定する意識として成立した爲めである。前に言つたごとく武器文明はその無信仰、無觀念、無理由の獲得を基礎づける爲めに、迷信文明の意識と野合したのである。階

級的集積と、階級的分配と、階級的消費との爲めに神の名が濫用された。機械文明は、それに對する生産階級の擡頭であつたが、その生産階級とは商人、地主、等の生産管理の階級即ち、實は所有階級であつて、その所有を武器の文明が否定した事に反抗したのである。その時には既に言つたやうに、迷信文明の意識を科學的意識が排除してゐた爲めに、その所有の回復に於て神的所有を回復せずに、言ひかへれば、社會的所有を否定して、個人的所有を建設したのであつた。

そこで始めて成立した個人的所有は、同じく生産手段を所有する事によつて生産物を獲得する關係から成り立つてゐた。然しこの生産手段の所有は前の二つの文明形式に於ける所有とは全く違つてゐた。迷信文明に於ける生産手段の所有は、生産の自然條件――土地――の社會的所有であつた。次ぎの武器の支配はその自然條件を武力によつて、人間的所有に移し、その所有關係に於て、その生産物を獲得した。機械文明の社會は生産手段が土地といふ自然條件ではなく、人間的勞力の加はつた機械である。機械は、土地が社會的條件によつて神の所有に歸し、武力によつて領主の所有に歸するといふやうな關係で、個人的所有に歸したものではなかつた。機械の所有は即ち資本の所有に基づくものであつた。そして資本は、生産勞働の行動者がその生産によつて集積したものではなく、生産の管理者が特殊の統制によつて集積したものであつた。この統制は、武器文明のそれと全く性質を異にし、迷信文明のそれに一致するものである。即ち管理の組織が自づからその集積を生ずる條件を備へたものであつた。

然し機械の發達は、初めにいつた如く、生産者をその個人中心の生産組織から引離して、機械に屬する勞働力の賣手にしてしまつたので、生産者は、勞働といふ生産手段の所有者――管理者――の所有の目的物として機械と同じ管理の下に置かれることゝなつたのである。而もその管理は、迷信文明のそれが、生産物と勞働との統制によつて生産者の社會

的生存を保障しやうとしたのとは異つて、生産手段としての勞働そのものの管理であつて、生産者の生活の社會的管理ではない。生産者は、その場合、丁度武器文明に於ける農民が生産物の納入に於てのみ統制者との關係を保つてゐたのと同じやうに、その勞働力の賣買に於てのみ、管理者と關係するに止まるものである。從つて機械文明の管理に於ては、生産階級は、勞働力を働き出す機械としての生命を保障されるに過ぎない。機械文明の統制は、人間社會の統制ではなく、機械そのものゝ統制である。生産階段に對する種々なる社會政策も、モーターの保存方法と同じく、それをして最もよく動力を働き出させる狀態に置くための施設である。從つて機械文明の建設に於ける生産者の地位は、一般機械の地位と異らないものである。人間的生活をもつて文明に參加するのではなく、その機械的勞働をもつて參加するのであつて、それは、文明の宮殿の地下室の動力室に於けるモーターと同居することによつて、モーターと共に文明に參加するのである。迷信文明に於ける生産者は、その文明の貢獻として發達した寺院に對しても、それを社會的營造物とし、事實、社會的にそれを享樂する地位に在つた點に於て機械文明の生産者よりも社會的地位を與へられてゐたのである。迷信文明はその統制に於て生産階級を包含したが、機械文明の統制は、生産階級を機械と共に工場管理に包含せしめるだけで、社會的統制の裡には含ませてゐない。社會的生活の統制は、純然たる管理者の階級に限界されてゐる點に於て、武器文明のそれに近いものである。即ちそれは迷信文明と共に生産的統制の形をとりながら、生産者を、その統制に於て機械と同列に置くといふ變態に陷つてゐるのである。

機械文明に於ては、組織の中心が機械であるが、その機械は社會的生活の手段であることから、反對に、生活を機械の手段として、機械の産出する生活手段は、生活を豐富にすることの代りに機械自體を豐富にする役をつとめてゐるのである。機械は勞働を資本化するが、資本は生活を豐富にするより以上に、更らに機械を豐富にするために消費さ

れ、僅かに少數管理者の生活に反映するのみで、資本を生んだ勞働者の生活には殆んど反映しないのである。資本と機械との豐富は、それと反比例に、生産者の生活を相對的に低下せしめる働きを遂げてゐるのみである。それは丁度、迷信文明に於て、生産の豐富が、生産者の生活に反映しないで、寺院の建築と僧侶の生活とのみに反映するのと似てゐるのである。

かういふ文明形式に於ては、生活統制は、生産管理の形式の下に、社會的に統一されてゐる點に於て迷信文明に等しく、武器文明とは異るものゝ如き外觀を呈してゐるが、然しその實、この場合の生産管理は、生産階級と管理者の階級とを同一統制の下に統一してゐるのではなく、前者を機械の管理の下に統一し、後者だけを人間的統制の下に統一してゐるのである。機械文明に於ける生活文化は、別に迷信的タブーや武斷的禁制のある譯ではないが、しかも正確に生産階級を除外し、管理階級の社會に限定されてゐるのである。

されば、屢いつた如く社會的統制はそれ〴〵の社會圏に於て發生し行はれるといふ事實は、この機械文明の組織の下に於ても眞實であつて、生産者の階級に於ては、管理者の階級とは、全く別な彼れ自體の統制を行つてゐるのである。その點に於て、武器文明の下に於ける生産社會がそれ〴〵別々の統制を行つてゐたのと同じであるが、その場合は、武器の生活と生産の生活とが、生活の範疇を異にする當然の結果で、それはその構造の下では變態ではなく、正態であるといへるが、生産管理の全體的統制の下に於て、管理者と生産者とが、別々の階級的社會をなし、各々の統制をもつのは、迷信文明の變態たる寺院のそれと同じ變態的現象である。然し寺院の變態は、生産者の生活と寺院といふ文化的建設とを聯絡せしめることによつてその統制の正態を形の上で保つてゐるが、機械文明の變態は、管理者階級の生活典型の裡に生産者を入れないのみならず、管理者の階級の文化的建設と生産者の生活との間に何の連絡もない點で、一層

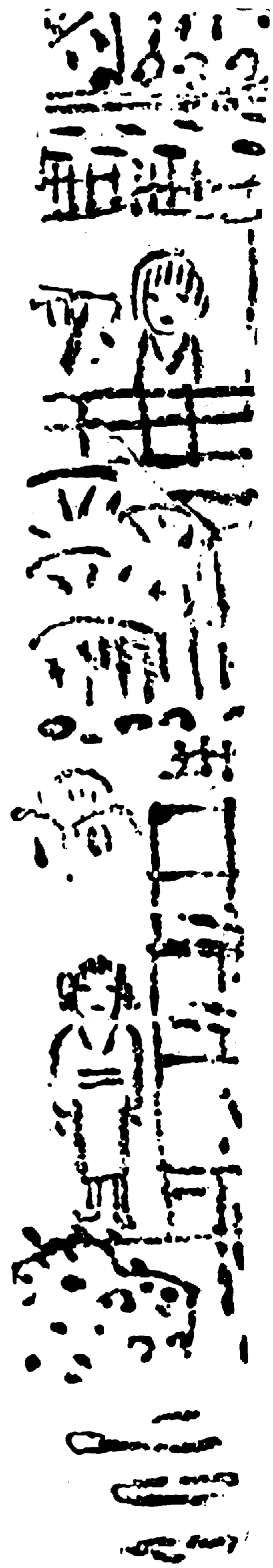
變態的である。同じ生産生活の統制の下に在る管理者と生産者とは、せめて寺院と生産者との聯絡位はあつて然るべきだが、そこでは生産者の階級を全くボイコットしてゐる。機械文明の管理階級の文化的建設は、生産者にとつては寺院よりも一層沒交渉のものである。

それは統制が異る階級的社會圏に於て別々に成立してゐるからであるが、さういふ異る統制の並立する社會は、畢竟武器文明のそれと同じ社會形態と認めねばならぬ。機械文明に於ける管理者と生産者とは、武器文明に於けるそれと異つて生産管理の同じ組織の下に統一されたものであるが、一方は迷信文明に於ける神と同じく、生産手段の所有者であり、他方は勞働によつてそれに奉仕する人間であるといふ相違から、そこに異なる生活範疇が築きあげられたのである。果して然らば、神と人間との對立が、武器による反逆によつて人間の勝利に歸したやうな中世紀式の過程が、機械文明の將來をトするものであらねばならぬだらうか。

このことは現に、異る統制の對立は、力の關係によつて解決せらるべきものであるといふ情勢が、機械文明に於ける管理者の階級と生産者の階級との對立に於て成立してゐることによつて暗示されてゐる。それは元來、一方の階級が神的所有の延長——生産手段の獨占——を、人間社會に成立せしめた事情に基くものであるが故に、もし社會統制が——管理階級と生産階級とを包括した統制が——その神的所有を神に返すことが出來たならば、きつと、一つ統制が兩者を總括することゝなり、從つて力の鬪爭によることとなしに、全體的統制の有機關係に於て、新たな統制を持ち來すことが出來るであらう。

現在の社會的統制は、やゝさういふ方向をとりつゝあるものゝ如く、個人に轉化された神的所有を宗教的、道徳的、法律的手段によつて、神——社會——に返す傾向が有力となりつゝある。この傾向が甚だ急速に進行して、神的所有に

よる管理が、社會的統制としての管理に變はることをうれば、所有と勞働とが、即ち神と人とが力によつて優越を爭ふ中世紀初頭の爭ひを將來に繰り返すことを避け得るであらう。それは國家的規制が社會的生存過程によつてこそ性質を進化せしめる歷史的變化を繰り返へすものに外ならないが、その場合に、社會的生存過程を具象する人間的行動は如何なる社會圏に現はれるかといへば、それはいつも生存行動の階級であつた。歷史の表面に現される所では、それが意識目的として知識階級に現されたり、力の形で武力階級に現はれたりしたが變化の基底には必ず生産階級の動きがあつた。その事實が、最もよく現はれてゐるのは勞働者階級の團結が具體的となつた現代社會である。機械文明が大きの文明に移る過程は、この勞働團體が國家的規制に反映する程度及方法の如何によつて、その歷史的進行が決定される。異民族の對立が、今なほ戰爭を經るにあらざれば協同に移ることの出來ない狀態にあるやうでは、神と人と——所有者と生産者と——の對立も、何ういふ解決法によるか容易に斷定することは出來ないがそこには最早中世紀式の過程がそのまゝ繰返される可能性が失はれてゐる。歷史は繰返すが時代的特徴をもつて繰返される。



單一無産政黨の擁護

山川均

（一）

私は先頃ある新聞で、有名な殺人强盜『ピス健』の述懷なるものを讀んだ。彼はあくまで自分のやつたことを尤もなことゝして辯護これ努めてゐるが、しかし『道理の上からは』なるほど惡るかつたにちがひない、と云つてゐる。さすがにこの人も、人を殺して金を取ることは惡るいといふことを、少なくとも純理の上では、認めざるを得なかつたのである。

これと同じ『理論』は、今日一般に、ブルジョア政黨の政治家らによつて用ひられてゐる。『なるほど純理においてはその通りだが、しかし政治は純理論では行はれぬ』これがブルジョア政治家の近頃の慣用語であつて、彼等はかうした

理論と實際との區別をもつて、彼等の有ゆる無節操と無定見との破產をごまかす唯一の淸算方法としてゐるのであるけれどもその無節操と無定見とを責められた時、彼等もまた少くとも『純理』の上では、それを認めざるを得なかつたのである。

かように道德と實踐、科學と信仰、愛國と商賣、大廟參拜と待合遊び、そして理論と實際、この二つのものを二元的に概念し、そしてこの概念の間の間隙を巧みに拔け道に使ふこと、これがブルジョアの特徵的な思想方法なのである。七月五日に發表せられた『日本農民黨組織準備委員會』の聲明書を見ると、全日本農民組合同盟の指導者諸君が單一無產政黨（勞働農民黨）に反對し、これに對立して日本農民黨の組織を必要とせられる『理論』は、このブルジョア政黨首領とピストル强盜の『理論』と符節を合したものである。（もちろん私は、全日本農民組合同盟の指導者諸君の行動が、日本の無產階級運動の陣營內における、ピストル强盜に類する行動だといふのではない）。

それが如何に萌芽的なものにもせよ、無產階級の單一政黨として勞働農民黨が現實に存在し、これをはぐくみ育てることが、無產階級の有ゆる要素の當面の必要事とせられてゐる時に、これに對立して農民の一黨派を組織しなければならぬとしたならば、それは無產階級運動全體の大局の利害と遠き將來とについての愼重な考察と、動かすことのできない確乎たる論據の上に立つ結論にもとづくものでなければならぬ。私は必ずしも、無條件に對立政黨の組織を非難しようとするものではない。たゞ現在の情勢の下に對立政黨の組織を敢行しようとする諸君の聲明書のうちには、必ずやこの行動を裏づけるに足る充分な論據の示されてゐることを期待したのである。『現下の形勢に於て左翼も右翼も勞働者も農民も擧つて單一無產政黨の傘下に集れと云ふが如きは、主張としては正しき純理ならんも、斷じて遂に一個の空論である。』これが諸君の理論の全べてゞある！純理論としてはその通りだが、實際にはさうゆかぬ！ピストル强盜は純理の上

では悪事だが、實際の上では善い事だ！全日本農民組合同盟の指導者諸君が、對立政黨の樹立を必要欠くべからずとする論據は、ブルジョア政治家がその無節操と無定見とを隠くす常套手段から、一歩も出でない思想である。

（二）

聲明書は吾々に、『刮目して現實を見よ』と命じてゐる。そこで私は少しく『現實』を見たいと思ふ。

國際資本主義の有機的な一部分としての日本の資本主義が、いま如何なる形勢のもとにおかれてゐるか、そしてこの形勢の必然の結果として、日本の無産大衆は必然に如何なる立場におかれて居り、必然に如何なる任務に當面してゐるか。これは極めて重要な問題であるが、かりそめにも現實の事實を少しでも概括し抽象した謂ゆる『理論』に對して、先天的に好意を持たれぬ諸君の嗜好を尊重するために、私はこの問題には觸れまいと思ふ。そして事實をたゞそのまゝ、に、即ち諸君の嗜好に適した生のまゝで見たいと思ふ。

先づ第一に工業勞働者の方面では、政府及び資本家が、一齊に攻撃的の態度を取つてゐることは爭はれぬ。それが沒落期資本主義の壓力の下に、日本の資本家が勞働者の生活標準の低下によつて、僅かに存立を支えようとする必然の努力の現はれであるか否かは、厭ふべき『理論』に陷入る疑ひがあるから、こゝには不問に附しておく。その結果として、到るところに爭議が勃發する。しかもその爭議の多くが、かなりに悪性（資本家側から見て）の爭議である。なぜならば勞働者に取つては、それは最低限度の生活を死守する爭ひだからである。しかるに資本家階級に取つては、それは最早や眼前の利害勘定のみの鬪ひではなくて、原則の鬪ひである。それ故に、眼前の利害勘定から云へば、勞働者の要求を容れることが寧ろ利益である場合にも、彼等は最後まで鬪はうとするのである。

工業資本家を動かしてゐる同じ力は、農村にもその作用を現はさゞるを得ぬ。ことに農村の場合、なかんづく大地主を除く中流地主の場合には、土地の所有から得られる利潤の率（利廻り）が當然商工資本以下にあるばかりでなく、利潤の總額も知れたものであつて、地主は當然、土地の所有によつて中流の生活をする權利があるものと假定したならば、彼等には、小作農に讓るべき餘裕は極めて少ないと云つてよい。しかるに少くとも農民組合が勢力を確立してゐる範圍においては、一と渡り小作料の減額が行はれ、もともと多からざる讓步の餘裕は一層少なくなつてゐる。地主の態度が漸次に硬化してくるのは、一つはブルジョアジーが全階級的に攻勢に立つたためではあるが、地主としてこの攻勢運動に有力に參加せしめたものは、右の如き事情が少くともその理由の一つとなつてゐる（階級意識の發達はしばらく別として）。最近、小作爭議の『深刻化』がブルジョアの側から盛んに指摘せられてゐるが、小作爭議の深刻化とは、爭議がもはや單なる眼前の利害勘定のみの爭ひばかりでなく、多かれ少かれ原則の爭ひとなつたこと、言葉をかへて云へば、意識せられた階級的利害の爭ひとなつたことを意味してゐる。

その理由がどこにあらうとも、地主の態度が（官憲の態度と相俟つて）著しく硬化し來つたことは爭はぬ事實であつて、農民組合の經濟鬪爭は、少くともこれまでほど容易には、地主を屈服せしめることが出來なくなつた。この事實は一方においては、經濟鬪爭から政治鬪爭への農民の進出を促がした。そして地方においては、一部の組合指導者を、從來の鬪爭主義から協調主義に移らせた。ブルジョアジーが全階級的に攻勢に轉じたこと、これと共に組合運動に臨む政府の態度と手段方法とが一變したこと、これが農民組合運動においても勞働組合運動の場合と同じやうに、意識的な右傾主義を生じた『現實的』基礎である。

如何なるものも、『現實』を反映して居らぬものはない。たゞ問題は、それを無産階級的に反映するか、ブルジョア的

ないしは小ブルジョア的に反映するかである。英國の坑夫は、現在の生活標準を死守する悲壯な決意をした。トーマスらは、組合基金の沒收、指導者の一網打盡の威嚇に驚愕して、總同盟罷業の跡始末もしないで逃げ出した。この正反對の事實も、同じ程度の正確さをもつて、英國資本主義の沒落といふ同一の『現實』を反映してゐるのである。たゞトーマスらは、自分らの降伏のみが、『現實』に立脚した行動だと考へてゐる。そして炭坑夫の行動は、資本家階級の根本利害に反し、資本家階級の固き決意に反した行動だから、即ち現實を無視した『一箇の空論』だと考へてゐる。

私は、意識的な右傾指導者を協調主義者の理論と行動とが、日本の資本主義の現狀といふ、現實に即してゐることを疑はぬ。

（三）

かような『現實』に『刮目』した結果として生れた當然にして唯一の無産階級的な意識は、經濟鬪爭の方面に於ては、組合運動の戰線統一の要求となつて現はれると同時に、政治鬪爭への展開となつて現はれてゐる。即ち工業勞働者の方面では、組合强大な全産業別の建設と、全國的總聯合を實現しようとする努力である。農民の場合もその通りであつて、現に全日本農民組合同盟の創立宣言は、『農民組合が地方的封建的に分立するは全農民解放運動の途上に暗影を投ずるものなきやを恐れ』、『全國的農民組合を創立する必要を痛感し』てゐるのである。この點においては、私は全日本農民組合同盟の指導者諸君と殆んど一致するものである。たゞ吾々が諸君と少しばかり異るところは、それが地方的にせよ、封建的にせよ、ないしは少數指導者の野心と私心の結果にせよ、またはブルジョアと地主の陰謀の結果にせよ、農民組合の分立は、全農民解放運動の途上に暗影を投ずるものなきや、を疑ふばかりでなく、暗影を投ずるものなることを、

少しも疑はないといふ一點にある。たゞに全農民の解放（解放とは、搾取の完全な撤廢を意味する）といふ遠大な目標に暗影を投ずるばかりでなく、工業ブルジョアと結束した地主の攻勢に對して、農民の當面眼前の利害を擁護することすらも不可能なことを信じて疑はない點にある。（そしてそれ故に、私は日本農民組合から分立を決行せられた諸君の心術を理解することができぬ。）

政治闘爭の方面では、それは資本家と地主の結合した政治勢力に對抗するために、無產階級の有する要素を結合した單一政黨の要求である。この二つの事柄は、精密に『現實』に即した要求であつて、これはことさらに刮目するまでもなく、苟めにも現實を直視する人々の決して見落しがたい事柄なのである。現に實踐の上では之に反對し、經濟闘爭の方面では日本農民組合の分裂を決行し、政治闘爭の方面では對立政黨の組織を決行してゐる全日本農民組合同盟の指導者諸君すらも、尙ほ且つこの主張が、純理の上では、正しい主張であることを認めざるを得なかつたのである。

(四)

しかしながら之は全日本農民組合同盟の指導者諸君によれば、『遂に一箇の空論』なのである!。

『無產階級運動に於て、單一無產政黨の主張とか、勞働組合の全國的總聯合の提唱等の共同戰線論は絕へず主張され屢々企劃され、而かも常に失敗を繰返せる事實は……日本の現實がその實現を可能ならしむる形勢に非ざるを立證するものである』。聲明書には明らかに斯う書いてある。そしてこれが純理の上では正しい主張を、諸君が一箇の空論と認めた唯一の論據であり、また諸君自らが純理の上では『正しい』と認める主張に反して行動する――言ひ換へれば、諸君が純理の上からは正しからずと認める行動を取る――唯一の理論となつてゐるものである。

私は本論の冒頭において、『現實的』といふ言葉が、ブルジョアによつて如何に妄用せられてゐるかを暗示した。獨りブルジョア政治家ばかりでなく、ブルジョア學者により、ブルジョア記者により、ブルジョア批評家によつて、この言葉は盛んに誤用せられてゐるばかりでなく、意識的に悪用せられてゐる。『現實』をもつて大衆僞瞞の手段に供することは日本のブルジョアの最近の發明なのである。しかるに『現實』に對するかようなブルジョア的見解が、無産階級運動そのものの陣營において摸倣せられてゐることは、ブルジョアジーの思想的精神的支配が、無産階級の上に如何に有力であるかを物語るものである。

組合總聯合はしば〳〵企てられた、そして今日なほ實現せぬ。これは日本の現實がその實現を可能ならしめる形勢にあらざる證據である、從つて總聯合促進の運動は、現實をはなれた空論である!。英國では、十數年この方、組合の産業別合同の必要が叫ばれて居り、現にその運動が續けられてゐる。しかるに今日尚ほ、産業別組合主義は實現して居らぬ。これは英國の現實が、その實現を可能ならしめる形勢にあらざる證據である!。從つてこの運動は、現實を離れた空論である!。『合理公正な小作料』は、日本に農民組合運動の始まつて以來、常にかゝげられてゐる要求の一つである。しかるに今日なほ實現して居らぬ。これは日本の現實が、その實現を可能ならしむる形勢にあらざる證據である!。從つて農民組合の運動は、現實を離れた一箇の空論である! 等々々々。これが全日本農民組合同盟の現實的な指導者諸君の理論である。

そこで諸君から、『現實的』だと認めて貰へる主張は何かと云へば、要するに今日主張して明日實現出來る主張に外ならぬ。言ひ換へれば、何等の抵抗にも出くわさず、何等の努力も何等の鬪爭も何等の犠牲もなしに與へられるものだけを資本家と地主から要求すること、これが即ち諸君の『現實的』とする主張であつて、苟もそれ以外の主張と要求と

は、遂に一箇の空論なのである！けれども無産階級運動のうちから、かような『空論』を引き去つたなら、その跡に何が殘るであらう。丁度資本家と地主の要求するもの（階級協調主義、組合分裂政策、いはゆる『赤化防止』農民運動、等々々のような）だけが殘るだらう。

資本家階級と地主が支配する現在の社會に於て、何等の抵抗なく何等の闘爭なく何等の犧牲なく、今日求めて明日直ちに實現せられるものは、たゞ現狀への屈從だけである。そしてこれがまさしく全日本農民組合同盟の指導者諸君の推賞せられる『現實』であつて、同時に資本階級と地主の嘉納する『現實』なのである。勞働者は、饑餓的賃銀に押し詰められてゐる。農民は、農奴的勞役に追ひ込まれてゐる。これが資本主義社會における農民と勞働者との『現實』なのである。何等の抵抗なく、何等の闘爭なく、何等の犧牲なくして實現せられるものは、たゞかような『現實』への屈從だけである。現に今日、日本に資本主義が存續してゐるといふことは、勞働者と農民とのかような狀態以外の狀態の實現を可能ならしめる形勢が、少くとも現在の瞬間においては、日本に存在せぬといふことを意味してゐる。從つて諸君は必然に、次の如く結論しなければならぬ。勞働者が饑餓的賃銀から、農民が農奴的勞役から脫しようとすることは、日本の現實をはなれた一箇の空論である、と。たしかに一種の現實主義である！

しかしながら斯ような意味での現實主義（？）の立場から批評するならば、眞實に笑ふに値ひする『空論』は總聯合や單一政黨の主張ではなくて、『土地を單なる營利手段』とすることに反對し、『商工資本の搾取を排除』することを主張してゐる全日本農民組合同盟の創立宣言そのものだと云はなければならぬ。現在の日本の『現實』の何處を刮目して探したら、かような主張（たしかに『主張としては正しき純理』である！）の實現を可能ならしめる形勢の片影なりとも見出だすことが出來るだらうか。私はもちろん、全日本農民組合同盟のかような主張そのものを笑つてゐるものではな

い。けれども土地の私有財產制度が存續する間は、土地が『單なる營利手段』でなくなることはない。また資本主義の社會制度が存續する限りは、農民が『商工資本の搾取』から免かれることはできぬ。從つて全日本農民組合同盟が、農民組合の『本來の職分』と認めてゐるこれ等の鬪爭は、疑ひもなく資本主義そのものゝ存續に對する鬪爭であり、土地の私有財產制度そのものに對する鬪爭を意味するものである。私が笑ふべしとするのは、かような主張かような鬪爭ではなくて、右の眼ではかような主張や鬪爭を『現實的』と見る人が、左の眼では組合總聯合や單一無產政黨の如き、無產階級運動のはるかに手近かな任務を、『一箇の空論』と見る都合のよい、びつこの眼を笑つてゐるのである。

資本家と地主との現實にあくまで忠實ならんとする諸君が、一方においては、農民のかような非現實的な(諸君の理論に從へば)要求を無視することができなかつたことに對しては、私は充分に、諸君の苦心に同情するものである。けれども若し諸君が、あくまで諸君の現實主義に忠實ならんとするならば、諸君は地主の存在と資本主義そのものゝ存續との否定に導びくような鬪爭をもつと『本來の職分』とする全日本農民組合同盟から脫退して、第二の全日本農民組合同盟を組織しなければならぬ。

(五)

これに反して吾々が『現實的である』とか『現實に立脚してゐる』とかいふ場合には、それは或る意識に照應した客觀的の事實が存在し、または發展してゐることを意味するものである。たとへば吾々は『土地を單なる營利手段』でなくするために鬪爭してゐるものだと假定する。現に吾々を農奴的な隷屬狀態につないでゐる力の根源は、土地が單なる營利手段となつてゐることにある。從つてこの鬪爭の目標は、決して空想的な目標ではなくて、現實的な目標である。け

れども若し吾々は、たとへば日本農民組合に對立して別個の農民組合同盟を組織し、ないしは勞働農民黨に對立して別個の農民黨をこしらへさへすれば、それによつて直ちにこの目標が達せられるかの如く考へてゐるならば、この期待は決して現實的でない。なぜならば日本の現實には、左樣な條件が備はつて居らぬからである。これに反して吾々は、この目標は無產階級の鬪爭の發展と、その決定的な勝利によつてのみ、初めて實現せられる目標であることを知つてゐる。そしてこの決定的な勝利に導びくための——即ち階級鬪爭の發展の——現在の段階における當面の任務として、吾々は組合運動の全國的結合と、無產階級の大衆的な單一政黨の結成とに努力するものだとしたならば、この最終の勝利を目標とする遠大にして困難な鬪爭も、現實的な鬪爭なのである。なぜならば日本における資本主義の現實には、吾々の鬪爭をかような發展に導びく條件が備付いて居り、且つその條件が發展してゐるからである。

その通りに、吾々が組合總聯合の計畫を『一箇の空想』と認めぬのは、これを必要とする吾々の意識には、それに照應した現實——資本主義の一定の發達とこれに伴ふ階級鬪爭の一定の發展段階——を伴ふてゐることを意味してゐる。即ち組合運動の全國的結合を必要としまた可能とする條件が、或る程度に備はつて居り、且つ進展してゐることを意味してゐる。けれども如何なる場合にも『その實現を可能ならしむる形勢』にある事柄が、必ず實現する譯ではない。少なくとも、それは何等の困難と鬪爭と犧牲なくして、自然に實現することを意味するものではないのである。無產階級の解放運動は、最も現實的な運動であつて、同時に最大の困難と、最大の努力と、最大の犧牲を必要とする運動である。

『現實』の『形勢』のうちには、唯一つの可能があるのではなくて、同時に幾つもの可能がある。英國の總同盟罷業には、勝利の可能があつたと同時に、墮落幹部の裏切りの可能があつた。少くとも同じ形勢のうちには、プロレタリアに

取つての可能とブルジョアジーに取つての可能との、二つの異つた可能がある。プロレクリアに取つて可能な事柄か、實際に實現するかどうかといふことは、獨り鬪爭のみが決定する問題であつて、究極はプロレタリアの力とブルジョアジーの力との權衡によつて定まるものである。

階級鬪爭の現在の發展段階は、プロレタリアの側から見れば、組合の全國的結合の實現を可能にしたと同時に、ブルジョアジーの側から見れば無產階級運動の陣營そのものゝ內部に、協力者を發見することをも可能にしたのである。最近、無產階級運動の陣營內に、ことさらに支配階級の希望に迎合した言動を裝ひ、支配階級の水心に對して魚心を示すことに汲々としてゐる意識的な右傾主義者の一群を生じたのは、そのためである。そこでプロレタリアに取つての如何なる可能といへども、先づプロレタリア自身の陣營のうちに働らいてゐるこの反對勢力（ブルジョアジーに取つての可能）と鬪はないでは、決して實現することはできぬ。

最近における全國組合會議の計畫が、不幸にして失敗に終つたことは事實であつて、かつこの失敗が、いろ〳〵な技術上の欠點に基づいてゐることも、恐らく爭はれぬ事實であらうと思ふ。無產階級運動は、もとよりこの失敗のうちから多くの教訓を得なければならぬ。

それと同時に、組合の全國的結合の如き事業が、二回や三回の試みによつて、決定的に成功し、または決定的に失敗すると考へるのは誤つてゐる。かりに最近の會議が所期の目的を達してゐたとしても、これは全國的結合へのたゞ一步であつて、その完成は、それ以後における堅忍不拔の努力と鬪爭とに俟たねばならぬ。

單一無產政黨についてもその通りであつて、無產階級のあらゆる要素を代表した單一な政治戰線を形成することは、決して一回の結黨式や創立大會によつて完成せられることではない。無產階級の眞實に大衆的な單一政黨は、いかに有利な形勢のもとにおいても、手品師の函から飛び出す親鳩のように、生長して飛び出してくるものではなく、卵から孵へさるべきものである、努力と鬪爭とによつて築づき上げらるべきものである。そして之が最も現實的な現實なのである。しかるに全日本農民組合の指導者諸君が、對立政黨を組織せられる第一の理由は、いま卵から出たばかりの無產政黨が、時をつげないと云ふことにあるのである。

『……かゝる主張の下に成立したる我國唯一の無產政黨たる勞働農民黨は、猶多く各地に散在する勞働團體農民團體の全國的糾合をなし得ざるのみか、黨內絕えざる抗爭に苦悶を重ねつゝあるではないか……』

そこであくまで無產階級運動に忠實な諸君は、『袖手傍觀に忍びず』して、別個の對立政黨を組織し、少くとも六ケ月以內（勞働農民黨の創立から今六ケ月目である！）を期して、「猶多く各地に散在する勞働團體農民團體の全國的糾合」を成就しようといふのである。（そして六ケ月後には、無產階級運動に諸君と同じほど忠實なブルジョアの手先が現はれ、袖手傍觀するに忍び切れなくなつて、第三第四第五の對立無產政黨の組織をもくろむ必要を感ずるかも知れぬ！）。勞働農民黨がなほ大衆的な黨派に發達して居らぬことは事實であつて、少なくとも諸君の推論の前提は正しいと云はねばならぬ。けれどもそれ故に、日本の現實が、單一無產政黨の實現を可能ならしめる形勢にあらずといふ結論は、卵から出たばかりのひよこが卵を產まぬから、日本の現實は、牝雞の存在を可能ならしめる形勢にあらずと云ふのと同じである。

若しこの推論が正しいなら、この正しい推論は、勞働農民黨の上に適用せられたように、同じ力を以つて日本農民黨

の上にも適用せられねばならぬ。勞働農民黨は來るべき總選擧を目前に控へて、一千三百七十萬の新有權者を包容することができないために、諸君から存在の理由を拒まれたものだとすれば、これを袖手傍觀するに忍びずして蹶起した日本農民黨は、少なくとも八百萬の農民有權者を包容する期待の上に立つてゐなければならぬことは云ふまでもない。そして諸君は日本の現實が、その實現を可能とする形勢の上にあると云ふ確信の上に立つてゐなければならぬ。『數は力である。八百萬の有權者を有する我が農民は……既に實質的には新議會を左右し得る實勢力を保有するものではないか』。諸君の聲明書はかう云つてゐる。數は力であるならば、千三百七十萬は八百萬よりも遙かに大きな力である。私は、諸君が何故に、『一千三百七十萬の有權者を擁する我が無産階級は……既に實質的には新議會を左右し得る實勢力を保有するものではないか』と問はれなかつたかを怪しむものである。それのみではない。現實を好む諸君にも似合はず、こゝでは問題を現實的に提起しないで、『實質的』(?)に取り扱はれてゐる。若しこの問題を現實的に見たならば、この一千三百萬の新有權者のうちには、工業プロレタリアと貧農以外の雜多な社會層を含んでゐることは暫らく別問題としても、この工業プロレタリアと貧農さへも、その大部分はなほブルジョアの思想的支配に屬してゐる。無産政黨の未來の任務は、彼等をブルジョアジーの影響から引き離し、これを獨立の政治勢力としてその上に指導を確立することである。無産階級は『實質的』には新議會を左右する實勢力を待つにもせよ、『現實的』には、新議會において獨立の交渉團體を形造るに足るだけの、議員を選出することさへも至難であつて、諸君の『實質』と日本の『現實』との間には、大變な隔だたりのあることを知るのである。

來るべき總選擧は、無産政黨にとつて、重大な機會であることは云ふまでもない。然れどもそれは無産政黨が、無産大衆の上に指導を確立するたゞ一歩として重大なのであつて、無産政黨の任務は、總選擧がなくても重大である。少な

くとも無産政黨は、來るべき總選擧に對する急ごしらへの道具として、差し迫つた總選擧といふ『千載一遇』の機會のために間に合はせに作られたものでもなく、また作らるべきものでもない。勞働農民黨の現在の陣容では、來るべき總選擧に臨んでいくばくの議員をも選出することができぬといふ理由のために、これ『千載一遇の好機』を逸するものだから、別個の對立政黨を作るといふ人があるならば、その政黨は、即ち來るべき總選擧を千載一遇の唯一の目當てとして急造される、代議士病者の機關にすぎないことを意味してゐる。

吾々は固より總選擧を輕視せぬ。無産政黨はこの機會を最も有効に利用して、ます〳〵廣汎な大衆を、その政治的指導の下に動員しなければならぬ。けれども若し吾々が、來るべき總選擧の直接の結果（たちまちにして多數の議員を選出し、新議會を『左右』せぬまでも、議會の形勢に重大な變化を與へ、無産階級に有利な改良を獲得すること、等々）を過大視するならば、それは無産政黨の任務に對する眞實の理解を欠いでゐる證據となるばかりでなく、かような期待は、期待としては正しい期待かも知れないが、日本の現實にその實現を可能ならしめる何等の根據もないところの『斷じて遂に一個の空想』なのである。

總選擧の直接の結果を過大視することは、少なくともこれを以つて『千載一遇』の機會視することは、一方においては、無産階級の政治運動に對する大衆の理解を誤らしめ、他方においては、大衆をして、プロレタリアの政治鬪爭の眞意義を理解する前に、早くも政治鬪爭に失望せしめる危險のあるものである。

勞農黨の内部に、諸君のいはゆる『抗爭』と名づけるものゝあることも、恐らくは事實であらう。けれども大衆的の運動は即ち大衆的の運動であつて、如何なる場合にも親子三人、水入らずで寄せ鍋をつゝき合ふようなものではない。無産階級運動の左翼と右翼とを單一政黨に結合することは、『現下の形勢に於て』は一個の空論であつて、これが諸君の

見解によれば、勞農黨の内部に『抗爭』のある所以である。けれども實際には、たゞに現下の形勢においてのみならず如何なる形勢のもとにおいても、左翼も右翼もない大衆的の團體はあり得ない。眞の問題は左翼と右翼のあることではなくて、左翼をも右翼をも包容するに足る强大にして彈力のある結束力と統制力との問題である。そしてこれは對立團體の組織によつて解決せられる問題ではなくて、單一無產政黨の發達に努力することゝ、團體的行動の訓練とによつてのみ、初めて解決せられる問題である。

(七)

無產階級運動の左右兩翼を包容した單一政黨が『空論』であるように、勞働者と無產農民とが同一の政治戰線に立つことも、諸君にとつては『空論』なのである。

直接眼前の經濟上の利害に限つて云へば工業勞働者と小作農とは、おの〳〵特殊な利害をもつてゐる。吾々はこの事實を充分に認めねばならぬ。けれどもこの直接眼前の經濟上の利害においてすらも、勞働者と小作農とは、それほど異つたものではない。少なくとも『勞働者』と『農民』といふ異つた名稱から多くの人々が不用意に受ける印象ほどに、異つた利害をもつものではない。少なくとも之の利害の相異は、ブルジョアと地主の代辯者らが、ことさらに誇張するほどに異つたものではない。勞働者と農民との利害が異つてゐる證據として、しば〳〵用ひられる標本的な實例は、米價の問題である。しかしこれとても、地主の代辯者のいふが如きものではない。いな反對に、精密な計算は、米價の騰貴が却つて小作農の利益でないことさへ證據立てゝゐる。

それにも拘らず、勞働者と農民とは、或る範圍までは、おの〳〵特殊な經濟上の利害をもつことは否まれぬ。またこ

れを否むの必要がない。勞働者と農民との共同戰線の主要は、決して勞働者と農民との、特殊な利害を無視することの上に立脚して成り立つてゐるものではないからである。たとへば米價の問題にしても、米價の騰貴は忽ちその日に勞働者の生活に影響する。しかるに小作農にとつては、米價の騰貴は究極はその利益でないにもせよ、それは少くとも、精密な計算によつて初めて知られることであつて、勞働者の場合ほど、その影響は直接かつ明白でない。また勞働者が工場において、一割の賃銀値上げの鬪爭に勝利を獲得しても、そのために農民の小作料が、一割輕減を見るわけではない。その如く、農民が小作料一割の輕減を獲得しても、勞働者の勞働條件には、直接何等の響きをも與へない。けれども勞働者と農民とが經濟上の利害を異にするといふ場合は、百の中の九十九人までは、勞働者の經濟上の利益が農民の經濟上の損失となり、農民の經濟上の利益が勞働者の經濟上の損失となる――言葉をかへていへば勞働者と農民との經濟上の利害が積極的に相反する――場合ではなくて、必ずしも積極的には共通せぬ場合にほかならぬ。

　しかしながら、斯ような特殊な經濟上の利害を數へたなら、それは職業を殊にする勞働者と勞働者との間にも見出すことができ、地方を異にする勞働者と勞働者との間にも見出すことができる。いな一人一人の勞働者は、或る範圍までは、おの／＼特殊な利害をもつとも云ふことができる。勞働者の場合にしても農民の場合にしても、一人一人の特殊な利害があるにも拘らず、もつと大きな共通の利害があるからこそ、組合運動が初めて可能となるのであつて、數百人數千人の農民を單一な農民組合に結束しなければならぬといふ主張は、この數百人數千人の農民おの／＼が、少しも特殊な利害を持たぬといふ空想の上に立脚してゐるものではない。その如く、勞働者と農民とは、直接眼前の經濟上の利害においては、必ずしも精密に一致して居らぬにも拘らず、それよりももつと大きな、被搾取者としての階級的な共通の利害があるからこそ、この二つの要素が單一な無産政黨に結合して、搾取者の政治勢力に對立する單一な政治的勢力

となることが可能となるのである。

それ故に、勞働者と農民とに共通の利害（即ち單一無産政黨を可能ならしめる現實的な基礎）といふものは、資本家と地主の階級を取り除けとして、勞働者と農民とを比較した場合に前景に現はれてくるものではなくて、勞働者と農民とを、搾取階級に對立せしめた時に、初めて前景に浮び出てくるものである。これに反して、搾取階級を取り除けにして、たゞ單に勞働者と農民とを比較する場合には、共通の階級的利害（單一政黨を可能ならしめる現實的な基礎）は後景におし除けられ、勞働者と農民との利害の相異（單一無産政黨を一個の空論と認める論據）のみが、誇張せられた大きさとなつて前景に現はれる。勞働者と農民とを、共通の被搾取階級として、搾取階級にくらべるのは、階級的の見方であつて、搾取階級を取り除けとして、たゞ勞働者と農民とをくらべるのは、非階級的の見方である。言葉をかへて云へば、勞働者と農民との共通の利害に焦點の合つてゐる眼は、階級的の眼であつて、勞働者と農民との利害の相異のみがはつきりと見える眼は、非階級的な眼なのである。無産階級は現在の社會的秩序を、率直大膽に、階級的な眼をもつて見る。それ故に、單一無産政黨が可能であるばかりでなく、必要缺くべからざるものである。これに反してブルジヨアと地主の階級は、現在の社會の階級對立をことさらにぼかしてしまうような、非階級的な眼鏡をかけて見る（そのレンズは搾取者の利害で作られてゐる！）。彼等は自ら非階級的な眼鏡をかけてゐるように裝ふばかりでなく、勞働者と農民とに、同じ眼鏡をかけさせようとするのである。

若し何者かゞ、勞働者と農民との利害は一致する。それ故に農民は、農民組合を解散して、勞働組合に加盟すべしと主張するならば、その時こそ、勞働者と農民にはおの〳〵特殊な經濟上の利害があるといふことが、初めて有効な反對の理由となる。そして地主に對する農民の經濟上の利害をもつて、闘爭の直接の目標とするものが、即ち組合なのであ

る。農民の政治行動——從つて政黨——の必要が認められたといふことは、即ち農民に特殊な直接當面の經濟上の利害以外に、尚ほ鬪爭の目標となるべきもの——目標としなければならぬもの——が、發見せられたことを意味してゐる。そしてこの目標は、都會におけるブルジョアジーの勢力と結合した地主階級の政治勢力との鬪爭に外ならぬ。地主階級の政治勢力を打破することなしには、資本家階級の政治勢力の打破を考へることが出來ないように、資本家階級の政治勢力と鬪ふことなしには、地主階級の政治勢力と鬪ふことは出來ぬ。資本主義の中心勢力なる資本家階級と結合した地主階級との結合によつて強よめられた資本家階級の政治勢力、この搾取階級支配階級の政治勢力が對象となつた時、勞働者の政治上の目的と、農民の政治上の目的とは、被搾取階級の政治的目的として、初めて精密に一致する。單一無產政黨は獨り可能なばかりでなく、この鬪爭における勝利の條件なのである。

勞働者と農民との政治上の目的（即ち階級的の目的）が一致するといふ意識が進めば進むほど、それは逆さまに、勞働者と農民との經濟鬪爭（組合運動）の上に反響となつて返へつて來る。言葉をかへて云へば、勞働組合と農民組合とは、直接には同一の搾取者に對して同一の條件を主張して鬪つてゐるものではなく、從つてこの範圍においては、勞働組合の經濟鬪爭と農民組合の經濟鬪爭とは、おの〳〵別個の經濟的利害のために鬪つてゐるものであるが、それにも拘らず、勞働者と農民との階級的目的が一致してゐるといふ意識は、勞働組合と農民組合との經濟鬪爭の上にも反射する。現に勞働者の爭議と農民の爭議との間の同感作用が次第に鋭敏になり、相互の同情と援助に事實が增加してくるのはその爲めである。農民組合をも包含した全國組合總聯合が、熱烈な要求となり、これに積極的に努力せぬ人々すらも、少なくともそれが『主張としては正しい純理』であることを認めざるを得ないのは、その爲めである。かように勞働者と農民との、被搾取階級としての階級的の利害と目標との一致が明白に意識せられるに從つて、勞働者と農民と

の、おの〳〵特殊な經濟上の利害を直接の目標とする經濟鬪爭すらも、もはや最初の特殊な性質を失つて、共同の戰ひのうちの異つた戰線を意味するものとなり、共通な階級的目的に隷屬した部分戰を意味するものとなるのである。

（八）

しかしながら之は明かに、ブルジョアと地主階級の利害に反してゐる。勞働者と農民との鬪爭が、この方向を取つて發展することは――そしてそれのみが――支配階級に取つての脅威である。それ故に、ブルジョアと地主とは、極力これを阻止しようとする。ブルジョアと地主の代辯者とは、つとめて勞働者と農民との利害の相異を强調する。彼等は都會と農村、工業と農業との利害の衝突を力說し、資本家と勞働者とを一緒にした都會の利害、工業の利害（實際には、そんなものは存在せぬ）に對立して、地主と農民とを一緒にした農村の利害、農民の利害なるものが存在してゐるかの如くに主張する。

勞働者と農民との階級的結合を阻止しようとするブルジョアと地主の計畫は、政治運動の方面では、勢ひ、農民は農民黨へといふ標語となつて現はれる。現に農政研究會を初めとして、今日までに、地主階級が農民の勢力をその政治的指導のもとにおき、農民の勢力を地主階級のために利用しようとした一切の政治運動の試みは、一つの例外なく、農民は農民黨に結束せよといふことを標語とする運動なのである。

單一無産政黨に反對し、これを一個の空論として嘲笑し、八百萬の投票を有する農民は、農民だけで政治的に結束することを主張する人々は、必然にこれと同一の立場を取らなければならぬ。日本農民黨組織準備委員會の聲明書は、『農民は農民黨へ』といふスローガンを以つて結ばれてゐるのである。

全日本農民組合同盟の指導者諸君が、このスローガンを選ばれたのは、諸君の立場と支配階級の立場との間に、共通の或るものがある必然の結果であつたか、それとも不用意の結果であつたか（私は後者であつたことを希望する）はしばらく措き、いづれにしても、それは勞働者と農民との階級的一致を破壊し、地主と農民との共通の利害を假想し、農民を地主の政治的支配のもとに置かうとする支配階級の意圖を代表した非階級的なスローガンであり、反無產階級的なスローガンであり、ブルジョアと地主と支配階級のスローガンであるといふ事實に注意を喚起したいと思ふ。

日本の現實の政治的形勢は、次の如く要約することができる。現在の日本を政治的に支配してゐるものは、反動主義化した資本家階級と、資本主義以前の遺物たる一切の反動勢力とが結合した力である。これに對して勞働農民黨は、無產勞働民の有する要素を結合し、現在の社會に存する一切の反資本主義的要素を動員することを目的とする、唯一の反對勢力である（若くはその萌芽である）。この反對勢力に僅かな重みでも附け加へるものは、勞働者と農民の味方に立つものである。この勢力から僅かな重みでも取り去るものは――または附け加へることを躊躇するものは――その動機がいづれにあらうとも、結果において資本家と地主の政治勢力を助けて居るものであり、資本家と地主の味方に立つものであり、資本家と地主が、勞働者と農民とを支配する力を強めて居るものである。（七月十四日）。

經濟社會轉換期に關する豫測

堀江歸一

一　經濟的循環期

大正九年三月の恐慌を一轉換期として、其當時まで、好景氣の下に、殷賑を極めて居つた我國の經濟社會が不景氣に襲はれ、諸種の事業を通じて、又國民生活の全班に亘つて、萎靡不振の狀況に陷つたことは、明白の事實である。然しながら一國經濟社會に於ける景氣の良否は互に相循環することが一の方則と爲つて居り、好景氣の永續す可からざると同じく、不景氣亦常に社會を苦しめるものでもない。恐慌の爲めに、經濟上の諸機關に大なる破壞を及ぼし、著しき損傷を與へた後の幾年かを通じて、經濟社會の不景氣に沈むことは、已むを得ざる所であるとしても、其間經濟社會に幾多の整理が行はれ、國民生活も緊縮されたならば、自ら國民の嚢裡に財力の豐なるものを生じ、此財力が社會に出で、諸方面に活動するに隨つて聊か經濟社會に刺戟を加へる、一方に産業界に於ては、諸種の整理を遂行して、生産費の節約に勉め、斯く節約された生産費の下に、生産業に從はんとしつゝある場合に、右の刺戟を受けるとすれば、經濟上の活氣を盛ならしめるは勿論であり、其盛なることの一般に及び、廣く之に伴ふ利益の普及されるに隨つて、好景氣と爲り、好景氣から投機熱の昂進に移つて、其勢の止まる所を知らず、遂に恐慌の再來に接すると云ふのが經濟社會を律する循環期の方則なるものである。而して此方則に於ける一の季節に就ては、國に依り、又場合に依つて、長短の差なきを得ないが、大體に於て、恐慌並に之に次ぐ不景氣、經濟社會の整理緊縮、景氣の恢復、好景氣到來、投機熱の誘致並に勃興、其終局に於ける恐慌襲來と云ふ順序を以つて、經濟社會に於ける一の季節から他の季節に推移し、斯くて一の循環的經過を終了するに至るのである。英國の經濟學者エー・シー・ピグー氏を始め

他の諸氏は此點に於て經濟的韻律の方則を定めやうとし、ピグー氏の如き、其「福祉の經濟學」第六編第一章第一節に於て、

　近代社會に於ける經濟的生活の特徴として、吾人の舉げ得る所は之を總額に就て見ても、將た又人口一人宛に就て云つても、生産の夥しく增加する一事であつて、此事は機械の發明、資本の增殖と相俟つて、文明世界の大半を通じて、看取されるのである。然しながら此上進的趨勢は必ずしも堅實に繼續するものではなく、進歩の次ぎに來るものは、躍進であり、之に次いで停滯若しくは衰微の時期の招かれることを免かれない。隨つて吾人にして此狀勢を圖表に依つて、示すとしたならば、其表たる、一氣に上進する線に非ずして、波狀形の一高一低を畫くことゝ爲るであらう

と說明して居る。故に今日の如く經濟社會に行はれる總ての行爲が無統制であり、自由競爭の結果として、産業の當業者は營利の欲求を事とし、之を目標として、生産の規模や、其程度を律する以上は、生産物の價格を決定する場合に、將た又放資の高を左右する場合に、是等を必要とする社會の狀況に調節することを求めず、一意自己の獲得す可き、若しくは獲得するを得ると考へる利益を對象とするのである。斯の如くして生産物の多寡、資本の放下に何等の統制なく、一に當業者の營利的精神に基き、而して其精神の發露に冷熱の差ある以上は、經濟社會に幾多の波瀾が惹起され、時に好景氣であり、如何なる黃金世界を現出するやも測り知る可からざるやに考へしめた社會を擧げて、不景氣の狀態に落下せしめるが如きことなきを得ない。唯今日の國家が從來の如き經濟組織の下に於て、經濟社會統制の爲めに、行ひ得る最上の經濟政策は好景氣時代に臨み、中央銀行と協力して、信用の膨脹する勢を掣肘し、以つて好景氣の奔放する所を或る程度に抑止し、斯くて其反動から生ずる不景氣の打擊を寡少ならしめる一事に止まる。此最小限度の統制を施すに、就て、必要とする所は國家に於て財政上經費の緊縮に勉めて、消極を事とする一方に、中央銀行亦國家財政と步調を一にし、或は金利步合を引上げ、或は資金融通の目的物を嚴選し、以つて信用の過度の膨脹を抑止し、市場に起らんとする投機熱を適度に掣肘する諸點に外ならない。此點に於て、政策の行はれること、正しきを得たならば、經濟的循環期の推移亦圓滑なるを得て、其間に大なる波瀾なきことゝ爲る。然も國家並に中央銀行をして斯る經濟財政の双方に亙る政策の下に、信用の統制を行はしめるには政府並に銀行當局者に智慮あり、決斷あり、理解あることを必要とする。斯る條件に缺ける所あつて、政府自ら好景氣時代の經濟社會に處する道を誤まり、政

略的に、又は其賢明ならざるの致す所として、好景氣時代に、却つて空景氣を煽揚して、經濟社會の形勢を粉飾し、誇張するが如き方針に出で、中央銀行亦政府の爲す所に盲從して、之と歩調を一にするが如き態度を取つたならば、其結果は果して如何であらうか。是等誤まれる方針と態度との爲めに、經濟社會に於ける循環期的變動の調節は全然打破され、好景氣の程度をして過大ならしめることのあると共に、不景氣の勢をして其甚だしきに至らしめ、又其繼續する時期をして長からしめざるを得ないのである。

二　我國に於て景氣恢復の遲々たりし所以

我國に於て大正九年三月に恐慌が襲來し、既往三四年の間を通じて、殆ど黃金時代を現出したと稱するを憚らなかつた經濟社會の繁榮が根本から破壞し盡され、爾來今日に至るまで六年半に亙る長年月を通じて、悲風慘雨の下に、不景氣の續くことは、經濟的循環期の學說から云へば、確に一の異例であつて我國が餘りに永く不景氣と云ふ一の季節に支配されるに至つては、吾人の驚くに堪へたりとする所である。我國に於て、從來幾多の機會に於て、世人の間に不景氣は既に其絕頂に達した、此後には景氣の恢復に接するであらうと云ふ說が唱へられたのも、要するに諸外國の經濟社會が大概上記循環期說に左右されて、假令ひ或る場合に不景氣に襲はれても、三年內外の歲月を經る間には、早くも景氣の恢復を見るを得る事實を目擊して居るからであつて、其想像にも事情の諒とす可きものがあると云へる。然るに我國に於ける此種の想像は常に事實の裏切る所と爲り、景氣は恢復す可くして、恢復するに至らず、遂に六年半の永きに亙つて、不景氣をして其跋扈するに任させしめたのは、何故であらうか。其重なる原因として、私の擧げるのは、不景氣の當初三四年間を通じて、政府が財政上に積極政策を施して、憚らなかつた一事である。不景氣の爲めに、國民經濟が萎縮したとすれば財政に於ても亦之に伴うだけ、其規模を縮小し、以つて兩者の步調を一にするのが當然であるのに、我國に於ては不景氣の經濟社會に襲ひ來つたに拘はらず、財政上に於ては、依然たる積極政策の下に、經費の膨脹を企て、此膨脹した經費を以つて、物資に對し、勞働に對して、共に過大なる需要を致して、渝らなかつたのである。此一事は何としても原、高橋兩內閣に代表された政友會內閣の經濟財政上に於ける失政の最も大なるものであつて、政友會が經濟社會到る所に輿望を失い、一度び政權を離れるや、獨力を以つて之を恢復するを得ざることも、亦當然の數であると認められる。

經濟社會に好景氣の勢の盛なるや、物價の騰貴するを以て、當然とし、物價が騰貴すればこそ好景氣であり、好景氣であればこそ、物價が騰貴すると云はれる位、兩者の間に、因果關係の密接なるものがある。既に好景氣時代に於て、然るものありとすれば、其反對に不景氣時代に於ては、物價の下落するのが當然であり、又斯く物價の低落する勢の盛なることが經濟社會に緊縮整理を促進する動機と爲るのであつて、此事は歐洲戰後最も早き機會に於て、經濟社會の整理を實現した英米兩國に於て、共に認められた所である。然らば、此點に於て、我國は如何であつたか。如何にも我國の物價指數に就て見るに、恐慌直前又は當時に於て、三百三十八(大正三年七月を一〇〇とす)と云ふ記錄的上進を示した指數は恐慌後に至つては、相次いで下落し、大正十年四月に於ては、遂に二百と爲つたのであるが、之を一轉機として、爾後徐々騰貴し、同年十月には二百三十と爲り、其後に於ても、尚ほ二百以上に居るを常とした。一方に國民經濟に於ける不景氣は日に月に顯著と爲り、其勢の深刻を加ふるに拘はらず、物價の之に伴つて下落しないのは、要するに財政に於ける積極政策の然らしめるものであり、而して斯く何時までも物價が低落せず、時に其反騰する氣勢すら現はれることは、經濟社會の表面に居つて、諸種の事業を經營する者をして中間景氣の到來若しくは景氣恢復の近きに居ることを豫想せしめて、眞面目に事業の整理、費用の節約を行うことを等閑に付せしめる傾きと爲り、相率いて以つて經濟社會をして景氣の恢復期から遠ざからしめるに至つた。即ち政友會の經濟政策を一の信條とし、所謂積極方針を財政上に施した原、高橋兩內閣は我國の經濟社會をして當然其歸着する所に歸着することを防げ、之を宙宇に彷徨せしめたものであつて、其間時に中間景氣を生じたり、又時に其挫折を招いたり。當業者をして將來何を目標とし、又如何なる見込みの下に、事業を經營して可なるや、殆んど五里霧中に彷徨せしめるの嘆を免かれなかつた。政友會の積極方針が事業界に依つて、指彈されるに至つたのも、亦怪むに足らない。

三　消極政策の效果

此點から云へば、加藤內閣が護憲三派の聯合に依つて、組織された當時から、今日の若槻內閣に至るまで、假令ひ徹底を缺くと云ふ非難は之を免かれないとしても、尚ほ財政上に消極政策を行ひ、經費は著しく縮少されないまでも、其膨脹する勢の遮斷されたことは、一方に財政上から來る物資勞務に對する需要を削減し、他の一方に國民經濟をして整理緊縮を急がしめた

效果を齎したと云へる。斯くて近年我國の物價指數は大正十四年一月に於ける二百十三を最高とし、爾後相次いで下落したことは、左の一表を以つて、之を知るを得るのである。

一九二五年		一九二六年	
一月	二一三	一月	一九二
二月	二一〇	二月	一八八
三月	二〇四	三月	一八四
四月	二〇二	四月	一八一
五月	一九九	五月	一七七
六月	二〇〇		
七月	一九八		
八月	二〇〇		
九月	二〇一		
一〇月	二〇〇		
一一月	一九八		
一二月	一九四		

從來我國の物價指數は英米兩國に比較して、常に高位に居ることを免かれなかつた。蓋し、英米兩國は歐洲戰後極端なる消極政策の下に、財政の規模を縮小し、經費を緊縮し、兩國共に一時急劇なる產業的沈衰を來すことすら、免かれなかつた。然も之が爲めに千九百十九年若しくは同二十年を一轉機として、兩國に於ける物價は著しく低落し、不景氣の下に、經濟社會安定の基礎を築くを得たのに反し、戰時から戰後に至るまで、積極政策の下に終始した我國に於ては、遂に經濟社會に整理の行はれる機會に接する能はず、遂に物價をして英米兩國よりも、高位に居らしめ、今日尚ほ同樣の地位に居ることを否定するを得ないが、然も最近時に於ては、我國に於ける物價低落の勢の頗る急である結果、從來日本對英米兩國の物價指數の上に存して居つた懸隔は次第に縮小しつゝあるのであつて、其一班は曩に揭げた日本の物價指數と左に揭げる英米兩國の物價指數とを對照すれば、明瞭に看取される。

一九二五年	英吉利	合衆國
一月	一七一	一六〇
二月	一六九	一六一
三月	一六六	一六一
四月	一六二	一五六
五月	一五九	一五五
六月	一五八	一五七
七月	一五八	一六〇
八月	一五七	一六〇

九月	一五六	一六〇
一〇月	一五五	一五八
一一月	一五四	一五八
一二月	一五三	一五六
一九二六年		
一月	一五一	一五六
二月	一四九	一五五
三月	一四四	一五二
四月	一四四	一五一

即ち千九百二十五年一月に於ては、

日　二二三、　英　一七一、　米　一六〇

と云ふ相對的指數であつて、日本の指數は英米兩國に對して、群を抜くの觀があつたが、千九百二十六年四月に於ては、

日　一七七、　英　一四四、　米　一五一、

と爲り、三者の間に於ける指數の接近した事實が明に認められるし、金輸出解禁前から磅貨の價値を急騰せしめた英國に於て、物價の下落した勢も甚だしいが、我國に於ける同一の趨勢も亦英國に於けると同じく、其著しきことが窺はれる。畢竟我國に於ては、第一財政に消極政策の行はれて、兩三年に及べること、第二財政上の政策の中途に變更せらる可きかに思ひを繋ぎ、經營上の方針を曖昧にした民間當業者が財政上に於ける消極政策の不變に着眼して、自家の營業上にも亦着々整理緊縮に勉めるに至つたことが原因と爲つて、斯る結果を齎すを得たものと考へられる。

四　貿易狀勢の轉換

從來我國の經濟社會に於て、不景氣なるが如くして、必ずしも不景氣ならず、社會の一部は不景氣に襲はれながら、其勢の未だ全般に徹底するに至らなかつたのは、要するに不景氣時代に、物價が騰貴して居つたからである。然るに近時の如く不景氣に相當する程度まで、物價が低落するに於ては、不景氣の勢の深刻と爲り、又世間に其普遍することは、免かれないとしても、同時に景氣の恢復する機運の開かれるに至ることも、亦掩ふ可からざる事實と爲る。物價低落の結果として、經濟社會に現はれた有利なる事相の一は貿易狀態の改善であつて、他の一は金融市場の安定である。近年我國の經濟社會を不安の境に陷らしめたものは、實に貿易の逆調、甚だしきの一事であつた。單に貿易の入超と云ふだけでは、經濟社會の全體から云つて、之を悲觀するに値しないかも知れない。然も我國の如く、昨今國際貸借に於ける受取勘定の超過額が僅々一億六七千萬圓を散

うるに止まる場合に、之に數倍する入超額に接し、之を決濟する爲めに、新に外國に債務を起したり、在外正貨を處分したりする有樣であつては、到底經濟社會の安定を保つを得ないのである。即ち大正十四年以前に於ける狀態は之に當つたのであるが、十五年に至るや、入超額は前年の六億四千六百三十六萬圓から、二億六千七百六萬圓に劇減し、世人をして入超決濟に伴う困難の緩和されたことに意を安んするを得せしめた。本年上半期の貿易に就て見るも、其狀態の改善しつゝある跡は明に認められる。即ち之を前年度と比較するに（單位千圓）

	十五年	十四年	增減
輸出	九九三、七七五	九八四、三七九	增　九、三九六
輸入	一、三九七、四七六	一、五〇三、三四五	減一〇五、八六九
入超	四〇三、七〇一	五一八、九六六	減一一五、二六五

であつて、一方に輸出に若干の增加を來し、輸入に相當の減少を告げ、兩者相合せて、入超額に一億一千五百二十六萬五千圓の減少を見ることゝ爲つたのである。今や問題は本年下半季の貿易如何に繫つて居る。現に昨年上半季に於ける入超五億一千八百九十六萬六千圓は下半季に於ける出超二億五千三百八十四萬二千圓に依つて相殺され、斯くて全年の入超をして上記の如く二億六千五百萬圓寡に減少せしめた次第である。本年の上半季に於て、輸入減退輸出增進に依つて、入超額の減少したこと、前記の如くであるが、一方に下半季の出超額は如何なるであらうか。私は下に揭げる諸多の理由に徵して、下半季に於ける我國貿易の狀勢が有利なる方嚮に向つて、轉換することを信ぜざるを得ない。

第一、本年上半季に於ける如く、爲替相場に急劇の騰貴を來し、爲めに輸入を促進する一方に、輸出を妨害する勢の甚だ强かつたに拘はらず、尙ほ輸出に若干の增進と輸入に相當の減少とを告げた事實に徵すれば、近時の如く爲替相場が四十七弗附近に安定し、其れよりも著しき高低を生ずる恐れのなき場合に、下半季の輸出季節に臨む以上は、輸出增進の勢に見る可きものゝあることは、論を俟たない。

第二、現に合衆國の經濟社會は本年上半季數個月間輸入超過の狀勢に居り、其債權國たる本來の立場から云へば、斯く爲るのが當然の事實でありながら、多年來の經濟的趨勢に對して、趣きの異なるものゝある爲めに聊か人氣を害するの觀なきを得なかつたが、其後に於ける出超は經濟社會の狀況を一變し、今や金融の緩和、株式市價の昂進等有利なる事實續出して、今後の經濟的繁榮を想像せしめるに足るものがあり、其景氣は正に我國の生絲の市價并に輸出數量に反映して、相當

の價格を以つて、昨年以上の數量の生絲の合衆國に輸出される勢の著明なるものあるに至つた一方に、支那印度等の狀況に就ては、特に昨年に比較して、不可なりとするものを認めない。

第三、殊に昨年中に比較して、近時に於て我國物價の低落したことは、輸出を刺戟する有力なる動機たらざれば、已まないであらう。或は此點に於て、異說を逞うする者は物資は價格の高い時に輸出されて、其低い時に輸出されないと云ふが如くであるが、私は之に與するを得ない。如何にも物價の低落相次いで已まざる場合には、外國に於て物資を購入をしやうとする者は物價の低落、極度に達するまで、見送りの態度を持し、進んで取引を結ばうとしない傾きがある。上記の異說の如き、此事實に根據を置くやに思はれるが、我國現在の物價の如き、個々の物資に就て云つても、又物價指數に徵しても、共に其底値とする所に達して居る。生絲に就て、綿絲布に就て、米穀に就て、總て其然るを見る。小賣相場は今後現在の卸賣相場と調節を保つまでに、低落することはあるかも知れないが、卸賣相場に至つては、今日を以つて、略ぼ其底値とす可く、爾後經濟社會の恢復するに連れて、是等諸物資の價格に騰貴を來すと共に、其騰貴に依つて、景氣の恢復が促進される。而して此道理は今や歷々之を指摘得る狀態と爲つて居るとすれば、本年下半季の輸出季節に於て、諸外國の我國物資に對する需要の盛なる可きことも、略ぼ想像される。

私が本年下半季の我國輸出貿易の旺盛であつて、上半季の入超を相殺するもの、少なからざることを信ずるのは、大體上記の理由に基くのである。

凡そ不景氣の極點に達するや、物價は必ず其底値とする所に達し、其後物價の騰貴と共に、徐々に景氣の恢復を見るを常とする。我國の物價は本年五月又は六月を以つて、其底値に達し、六月に於ては、些少ながら騰貴の方嚮に向つたものがある。其內容を見れば、主として生絲、綿絲並に是等の關係品であつて、木材、鐵材其他の材料品に至つては、未だ騰貴と云へる程度まで、進んで居らない。然も經濟社會の改善若しくは事業界の躍進を見るには、是等の建築材料又は原料品の價格に騰貴を來すことを以つて、先決問題とする。即ち物價の方面から、我國經濟社會の狀勢を窺へば、不景氣の極點まで到達し、何等かの機會に依つて、好轉せんとする時機に居るものと云へるのである。

五　國際貸借の改善

貿易の入超に加へて、貿易外受取勘定の劇減したことは、我國の經濟社會殊に其國際經濟上の方面に對する大なる脅威であつて、大正九年末内外國に所有する我國の正貨は二十一億七千八百萬圓の多きに達したに拘はらず、爾來次第に減少し、本年五月末に於て十三億七千萬圓に過ぎざるに至つたことの如き、誠に事情の已むを得ざる所に屬する。而して此間政府自ら五億八千九百萬圓の外債を起し、民間諸會社亦二億八千萬圓の債券を外國市場に發行した外、大正八年から同十四年に至る七年間に於ける貿易外受取勘定十四億六千萬餘圓の盡く正貨勘定に繰入れられたことを考へたならば、我國に於ける國際貸借の狀況の如何に不安定であつて、爲めに内國の經濟社會や、金融市場を壓迫することの甚だしきかゞ理解されるであらう。(拙著國際經濟總論第七章兌換制度と正貨政策參照)我國の經濟に此瑕疵ある以上は、永く金の輸出が禁止されて、其解除される機會を捕捉するを得なかつたり、爲替相場が容易に其平準點に達するを不可能としたりする所以が窺はれるであらう。玆に於てか國際貸借をして如何にして有利なる狀態に就かしめるやと云ふことは、我國當面の問題と爲つた。固より此點に就て、根本的解決を下すことは至難であつて、官民双方の間に未だ何等の試みられたものを見ない。彼の外國に移住民を送遣して、其送還金の増加を期するとか、海外到る所に我國の金融機關を特設して、我國輸出品の販路を擴張するとか、造船業を奬勵して、造船價格を回收するとか云ふことも、固より國際貸借の改善策には相違ないが、其效果の現はれるには、幾年かの後を待たなければならない。其れよりも當面の問題として、我國に於ては、早く國際貸借の狀態を改善することを要する。而して近時其效果の稍や實際に現はれるに至つたのは、何故であるか。之に對しては、(一)政府が近年海外拂の經費に節約を加へたこと、(二)我國の海運業が積年の不振狀態を脱して、運賃の收入に増加を來したこと、(三)之に加ふるに貿易上の逆勢が次第に緩和され、本年度の如き、假令ひ輸出超過の現出は期待されないまでも、輸入超過は貿易外の收入に依つて、決濟される程度までに、減却されはしないかと云ふ望みの生ずるに至つたことの諸點を以つて、有力なる原因とするのであつて、是等の事が我國民多數の從來國際貸借に就て懐きつゝあつた憂慮を輕くするに與つて力あつたのである。

更に是等の外に、國際貸借改善の爲めに、私の認めて以つて有効の方法とする所は、國民をして浮華の生活を脱せしめ、質實を事とする風を作ることである。此點に就ては、往年戊申詔

書の發布、國産振興の運動以來、官民に依つて試みられた所なしとしないのであるが、其爲す所の動もすれば、實際に伴はざる憾の多きは、何故であるか。國産奬勵を口にする輩が國産品を使用せず、外國製の裝身具や、服裝を用ひて、對者に國産の愛用を說くが如き、勤倹の必要を唱へた人が歸途には待合茶屋に足を向けて、浪費を事とする有樣であつては、斯る運動の進捗しないのも、怪むに足らない。國民の生活を質實ならしめる一事の如き、往年震災の直後に於ては、或る程度まで、行はれるの趣きもあつたが、其後震災氣分の薄らぐと共に、國民の奢侈的消費は依然として其跡を絕たず、好景氣時代と不景氣時代とを問はず、奢侈は我國民の生活に離る可からざるものゝ如くに見へる。輸入の增進し易くして、輸出の伸張し難きが如き、此點に關係する所の少なからざるは勿論であつて、私は斯る匡弊策として、政府の斷乎たる政策と國民の自省とを促さゞるを得ないのである。

六　金融の緩和と其原因

斯く貿易の改善と共に、國際貸借の狀況に於ける不安の緩和されたことは、必然の結果として我國の爲替相場を有利なる方嚮に向はしめ、一時三十八弗の低きに至つた相場は四十一、二弗から高騰して、最近四十七弗前後に歸着することゝ爲つた。固より斯く爲替相場の騰貴したに就ては、外國投機業者の圓貨思惑に依る買付の一原因を成して居ることが認められるとしても、尙ほ同時に貿易の改善、國際貸借の良化が此事を惹起すに少なからざる力のあつたものと云へる。此事が我國の金融市場を安定するに有力なる資料と爲り、一般金融の緩和を招いたのは明白の事實であつて、如何に金利歩合が下降するに至つたかは、左の一表に於て、之を知るを得るのである。

東京市中各月末金利

	貸付		割引		コール翌日物	
	最高	最低	最高	最低	最高	最低
大正十三年一月	二、七六	二、五三	二、七一	二、五〇	二、六五	二、六〇
同　六月	二、七五	二、五六	二、七二	二、五四	二、一〇	二、〇〇
同　十二月	二、七三	二、五五	二、七四	二、五一	二、六五	二、五〇
大正十四年一月	二、七二	二、五五	二、七一	二、五二	二、二一	二、一〇
同　六月	二、六五	二、四〇	二、六二	二、三五	二、二五	二、一〇
同　十二月	二、六三	二、四〇	二、五八	二、三〇	二、四五	二、二〇
大正十五年一月	二、五九	二、三五	二、五六	二、二四	二、一五	二、〇五
同　五月	二、六一	二、三〇	二、五七	二、二三	二、〇〇	一、九五

一方に右の各時期に於て、重要株式、各種債券、國債並に社債の利廻りの如何に低下したかは、左の表に於て、明瞭と爲る。

	重要株式	各種債券	國債	社債
	分	分	分	分
大正十三年一月	八、八〇	八、〇一六	六、一二四	八、九九二
同　六月	八、六〇	八、一〇〇	六、二三八	九、一六三
同　十二月	八、二一	七、九二一	六、一六九	八、七四〇
大正十四年一月	八、〇二	七、八九七	六、一四四	八、七一三
同　六月	八、〇四	七、四〇〇	五、九四六	七、九六二
同　十二月	七、三六	七、二〇七	五、九五七	八、〇〇〇
大正十五年一月	七、八一	七、一五一	五、九〇八	七、九〇七
同　五月	七、〇五	七、〇五七	五、八七七	七、六五八

經濟社會の安定が金利步合の低下に資するに至つたことは、右の表に於て、明であるが同時に斯る金利步合の低下が各種有價證券の市價を高からしめたことも、明瞭の事實であつて、證券の利廻りが健實なる步調の下に、低落しつゝあるのは、即ち金融緩和の證左であると云はざるを得ない。最近我國に於ける銀行會社の計畫資本金が其新設に於て、又其擴張に於て、著しく增加したのは、注目に値する事實である。即ち本年一月より五月に至る五個月間の計畫資本金を取つて、之を前年同時期に於ける分に比較すると、（單位一千圓）

	新設	擴張 增資	擴張 社債借入金	合計
大正十五年自一月至五月	三二八、八五五	二二四、〇七一	一六〇、一二五	六九三、〇五一
前年同時期	二二三、七七九	一三六、七六〇	一九一、九七〇	五三一、五〇〇
比較增	一〇五、〇七六	八七、三一一	五一、八四五	一六一、五四二

と爲り、然も斯く發行される株式なり、社債なりが其れ〴〵市場に於て消化されて、尙ほ上記の如く金利步合に低下を來し、有價證券の利廻りを低落せしめたとすれば、我國に於て金融の緩和し來つた趨勢の動かす可からざるものであることは何としても之を疑ふを得ないのである。

茲に於てか私は此金融緩和の趨勢を確實にし、又世人をして嚮ふ所を知らしめる爲めに、日本銀行が今日の機會に於て、金利步合を引下げることを以つて、至當の處置であるとし、此事を提唱して憚らないのである。固より世間には單に株式市場に一時的人氣を博する方便に充てる考への下に、日銀の利下を主張する者があるかも知れない。私が日銀の利下を提唱するに就ては、此類と全然其選を異にするのである。蓋し日本銀行の金利政策には、民間金融市場に對して、指導的態度に出づるものと、順應的態度を取るものと、二種の別がある。後者に於ては、日本銀行は單に市中金融の趨勢の赴く所に追隨することに重きを置き、例へば市中の金融大に緩漫と爲り、各種金利步合亦引下げられ、日銀の步合に對して、著しき開きを生じ、如何ともすべ可からざるに至つて、徐々日銀自身金利步合を引下げて、市中利率に接近することを求めるが如き、即ち順應的態度の標本とす可きものである。從來日本銀行の市場に臨むや、

斯る方針に出づること多く、之を以つて最も無難なるものとしたるが如くであるが、私は之を以つて中央銀行の態度として、甚だしく物足らずとするの感なきを得ない。日本銀行が金融市場に對する定見に缺くる所あり、金利歩合の決定を濫妄にし、或る時に之を引上げたかと思へば、他の時に之を引下げるが如き不謹愼のものであつたならば、徒に經濟社會を攪亂する危險の伴うものなきを得ない、斯の如きは斷じて之を避けなければならないが　之に反して近き將來に於て、金融市場に如何なる趨勢の現はれる可きかゞ判然として居り、又現に其端緒を開きつゝあるとすれば、日本銀行が此大勢を促進する意義を以つて、金利政策を決定することは、中央銀行として、當然爲す可き所であり、又斯の如くして金融市場に急劇の波瀾なからしめるを得るのである。數個月前世間の一部に日銀利下論の行はれるや、私は之を以つて未だ機熟せざるものとし、其尚早を認めたが、今日に於ては事情の著しく異なるものがある。即ち

第一、諸物價が著しく低落して、殆ど其底値ともす可き所に居ること、

第二、斯く諸物價の低落するに至るまで、公私經濟に整理の行はれたこと、

第三、株式商品兩市場とも年來の不景氣に依つて、疲弊を極め、今更ら多少の利下が實現された所で、爲めに刺戟を受けて、反動的投機熱を惹起すが如き危險の絶無であること、

第四、貿易、國際、貸借、爲替、金融の何れを見ても、從來の逆勢を脱して、次第に順調に向ひ、市場の金利歩合中、或るものは日銀の公定歩合に接近し、又他の或るものは公定歩合の以下に下り、將來益々鞘開きの大ならんとすること、

の諸點は即ち日本銀行をして利下を行はしむる適當の理由と爲るものであつて、斯る理由の備はれる場合に、日本銀行が依然市場の大勢と隔絶した金利政策を固持するに至つては、其鈍重驚くに堪へたりとすべきである。

何故に我國に於て一時緊縮の甚だしきを致した金融が今日の如く緩和したかの原因に就ては、私は曩に不景氣の爲めに、諸種の事業を通じて、資金に對する需要の減少した一事を擧げた。若しも金融緩和の原因にして、此一事のみに止まるとすれば、今後事業界に多少の活氣を呈すると共に　直に金融市場にも反動的事相を生じ、金融の前途亦樂觀するを得ざるやに考へられるかも知れないが、金融緩和の原因は種々の方面に伏在して居る。諸物價の下落が貨幣の購買力を高めて、自然金利の低落を促したこと、政府の消極的財政方針が金融市場を安んずるに至らしめたこと、諸銀行亦有價證券價格漸騰の勢に乘じて、其

固定貸に整理回收を試み、手元に若干の餘裕を生ずるに至らしめたことの如き、何れも昨今の金融緩和を致すに至らしめた所以であつて、其處に根柢の強きものゝあることが考へられるのである。

或は我國銀行業者の内には、其心術の殆ど高利貸業者と異ならざるものがある。即ち彼等は出來得るだけ低廉なる利率を以つて、預金を吸收する一方に、出來得るだけ高貴なる利率を以つて、資金を融通し、斯くて其間に貪り得られる利鞘を大にし、以つて營業上に暴利を獲得しやうとし、此見地から如何なる場合に於ても、日銀の利下に反對して止まない。市中某大銀行の主宰者某の如き、此シャイロック式營業法に於ける模型的人物であつて、彼が頃者主張する日銀利下反對論は自家營業上の利害あるを知つて、國民經濟あるを知らざる利己的議論に外ならない。銀行は單純なる一個の金貸業者に非ず、社會の爲めに信用の授受を調節する公共的機關である以上は、銀行の利益とする所は其對手なる取引先の繁昌と相並んで、收められなければならない、取引先には出來る限り、高利を徴して、資金を融通し、其利金の回收には、何等手を緩める所なく、取引先を銀行の手に依つて、倒すことすら辭せざる苛辣の手段を試み、而して金利步合の引下げられん總ての狀勢に反抗しやうとするが如き、實に高利貸式銀行業者の常套手段であり、而して此手段に出づるものが我國一流の銀行にあり、銀行と取引先との共存共榮に就て、顧みざるが如き私の認めて奇怪とする所である。

七　金輸解禁即行の不可

最後に私が一言したいのは、金輸出解禁問題である。一部の論者は我國が今日依然金の輸出を禁示することを以つて、經濟社會の變調を招く所以であり、之を常態に復せしめるには、金の禁輸を解くのが急務であり、之を解くには、四圍の狀況の如何に拘はらず、即時斷行す可きであると云ふ説を唱へる如くである。私は本來金輸出解禁論者であつて、此點に於て、人後に落ちるものではない、但し解禁を行ふに就ては、自ら其時期があり、又準備を要するのであつて、如何なる場合に於ても、之を爲す可しと云ふが如き單調なる議論に對しては、何としても之を可なりとする理由を知るに苦む。原則として金の輸出が解禁され、國際間に於ける正貨の出入が自由と爲り、斯くて國貨の對外價値の確定するに至ることは、希望す可き所に相違ないが、愈々解禁の行はれるに就ては、

第一、爲替相場が自然の徑路に依つて、確實に平價に達したこと、

第二、解禁後に於ても、平價の維持される見込みの確實であること、

第三、解禁後に必然、我國に向つて生ずる金の取付に對し、之に堪へ得ること

の三條件が備はらなければならない。故に昨今爲替相場が四十七弗に恢復し、永く其附近に居るとしても、其騰貴の幾何が我國經濟上の實勢力に基くものであるか、又其幾何が投機的買付に依つて、然るものであるか、後者の力に依る騰貴に至つては、昨今の如く平價を距ることの遠からざる所まで、相場の恢復した場合には、將來其效果を現はすことは少なしとしなければならず、隨つて今後我國の經濟的實力のみに依つて、果して平價に達せしめることの可能であるかどうか、爲替相場の既に四十七弗に上進した今日に於ては、我國が敢然金輸解禁を行つたならば、一躍相場を平價に接近せしめる效果を奏することは勿論であるが、一方に內地の諸物價に急劇の壓迫を加へると共に、他の一方に金に對する取付の起ることを免かれない。斯る危險を賭してまで、金輸解禁を即行する必要は果して何れの邊に求められるであらうか。兩三年前に於ける如く、我國の諸物價が暴騰して、其勢の極まる所を知らなかつた場合には、金輸出解禁の即時斷行に依つて、內地の物價を低落せしめることも、一の政策であるやに考へられた、少なくとも金輸解禁の即時斷行を高唱して、內國物價の引下げられんとする趨勢を牽制することは、一の政策としての價値を失はなかつたのであるが今や事情は全く變化し、物價低落の勢の日に甚だしきに至れる際、更に金輸出解禁の如き人爲的手段に依つて、其低落を極度に達せしめたならば、經濟社會を混亂せしめて、景氣恢復の機運を妨げる外に得る所なきやに考へられる。金輸出解禁の如き、將來貿易の順調に就き、金融の緩漫と爲つた場合に、平穩裡に解決せらる可き問題であつて、今日は未だ其時とするを得ないし、又金禁輸を解かされば、景氣恢復の機に接せずと云ふのも、一の僻論である。蓋し商業上の計算に於て、必要なるものは、爲替相場の安定であつて、其騰貴ではなく、一方に經濟上に最も避く可きものは、爲替相場に於ける急劇の變動に外ならぬのである。

金輸出解禁の準備の未だ整はざる內に、不熟なる金貨本位法を制定して、解禁を速行した一例は即ち英國に之を見るのである。英國の金貨本位法は決して多年英國人に依つて、理解されて居つた純眞なる金貨本位制を復興したもの でなく、幾多の點に於て、不純の分子を止めて居る。之を制定實行するの已むを得ざるに至つたのは、一に充分の準備なくして、金輸解禁を即行しやうとした結果であり、然も之を即行した爲めに、磅貨の價値を高くして、英國物資の輸出を困難にし、一時不景氣の勢を甚だしからしめたのは、當時の事實であつて、彼の世界を驚かした炭坑罷業の如き、從來の紛爭の決裂したものであるこ

とは勿論であるが、同時に政府が不熟なる財政策の下に、石炭の輸出を妨害したことも亦其一原因に數へられる。現藏相ウヰンストン・チアーチル氏の如き、財政に經驗あり、又識見ある政治家でなく、寧ろ功名心の高きことを以つて、世間に著明の人である。自家の手に依つて、金輸解禁問題を解決し、金貨本位制を完成したと云ふ名譽を收めやうとする野心が氏を驅つて、斯る不熟なる貨幣政策を妄斷せしめたものとすれば、政治家の野心亦國民に禍を及ぼすこと、甚だしとしなければならない。由來投機とか、場當りとか、大向ふ受けとか云ふこと位、一國の財政經濟に有害なるものはない。吾人が從來憲政會內閣に於ける濱口藏相に信頼を繫いだのは氏の財政策に此種の嫌の最も少なきの故であつて、私の如き奢侈關税の一事を除いては氏の財政策に贊成するを惜まなかつたのである。氏が在野時代に金輸出解禁を絶叫しながら、在朝の日に之を即行せざる一事を擧げて、無責任呼りをする者があるやに認められるが、チアーチル氏ならば知らず、斯の如きは時の事情の如何に變化したかを辨せざる者の言たるに過ぎない。濱口氏今や財政の局に居らないが、思ふに氏の遺した政策にして大體後任者に襲用さる以上は、チャーチル氏一流の急燥なる政策が行はれて、國民を困惑せしめるが如き恐れは先づ起らないであらうと考へ、又斯くある可きことを念ずるのである。

問題は更に他の方面に移る。一國に於ける金の輸出入に自由の認められることは、實に金貨本位制の一要件であつて、此事なければ、金貨本位制の實なしと云ふを憚らない。蓋し金の輸出入の自由と金貨鑄造の自由とが認められて、始めて金貨の價値は對內的に、將た又對外的に其確實を期するを得るからである。（拙著貨幣、銀行、外國爲替上卷第一編第二章第三節）故に我國に於て貨幣制度の完備を求める以上は、金輸解禁の必要であるは、論を俟たざる所であるが、然も之を爲して、將來の安全を收めるには、國際貸借に於て、我國自ら其占める地位の確實を以つてしなければならない。實際問題として、此點に於ける我國の地位を見れば、本年の如き、或は輸出入貿易の關係の順調と爲ることが期待されるが如くであるが、本來我國は先天的輸入超過國であることを以つて、一の特色とし、外國から食料品や、工業原料品の如き必要品を輸入して、一方に外國に輸出する物資が專ら奢侈品である以上は、容易に此特色を改新するを得ない。而して貿易外受取勘定を增加する確乎たる方策の定まるものなしとすれば、結局我國貨幣制度の根柢は不安なる狀態に居り、其不安なることは、遂に我國をして金貨輸出入自由の下に、金貨本位制を完成する時なきに至らしめるのではあるまいか。貨幣制度の維持に就て、有利なる國際貸借の差額を基礎としなければならないことは、千古の眞理である。然らば此基礎の不熟である我國に於て、純眞なる金貨本位制を口にするが如き、一片の空論に類しはしないであらうか、私の憂を懐く所である。

ポアンカレイ氏果して難局を打開すべきか

青木得三

遂にポアンカレイ氏の復活する日が來た。一昨年六月佛國新立法府の成立以來、政界の形勢氏の爲に非であつて、宰相の印綬を帶ぶる日が容易に來たいであらうと思はれたのに、佛國財政の難局は遂にポアンカレイ氏をして台閣に起たしむるに到つた。

巴里新聞の記事を讀むと、ポアンカレイ氏は依然として、氏が大正九年一月大統領の任期滿了の際、大統領官邸から轉居したルユー、マルボーの私邸に住んでゐるやうである。それはアークドトリオンフからアヴニユー、ド、ラ、グランダルメーをボート、マイヨーの方に歩いて、左に曲つて右に折れた町の右側である。双鬢の白髮は其の數を增したであらうけれども、從來意氣益壯であつて、佛國財政の難局は財政家にあらざるポアンカレイ氏をして、首相として藏相を兼ねざるを得ざるに到らしめた。

思ふに一昨年の六月ポアンカレイ内閣辭職しエリオー内閣成立して以來、佛國大藏省は大臣を變ふること八人に及んでゐる。即クレマンテル、ドモンジイ、カイヨー、パンルブエー、ボンネ、ルーシユール、ヅーメ、ラウルペレ、ポアンカレイの八氏である。その内パンルブエー氏とボンネ氏とは一は財務大臣として他は國庫大臣として同時に在職したのであるが、カイヨー氏はパンルヴエー内閣とブリアン内閣と二度ドモンジイ氏も亦前後エリオー内閣に於て二度在職して居るから、大藏大臣の更迭は實に九回に達するのである。約二ケ年三ケ月の間に九回の更迭を見るのは、一大藏大臣の在職期間僅に三ケ月といふ平均數を示すのである。如何に佛國の財政が窮境に沈淪したかは、此の一事のみを以てしても、極めて容易く證明することが出來る。

佛國財政の窮境に陷つた結果はフランの低落である。人の知る如く佛國はラテン貨幣同盟中の一國であつて、法律上は金銀兩本位制度の變態たる跛行本位制度であるけれども、歐洲戰後

の今日に於て實際流通してゐる本位貨幣は佛蘭西銀行の發行する不換紙幣である、而して其の發行額は本年六月十七日より二十四日に至る一週間の平均に於て五百三十億余萬フランに達して居る。フラン爲替相場の低落は主として此の銀行券增發に基くものといはねばならぬ。勿論今日の爲替相場の騰落は投機者流の賣買に基く所が多いのであるけれども、投機者流は利益を目的としてフランを賣買するのであるから、今日のフランを賣る者が多く爲に其の低落を來したといふ事實は、將來フランが尙一層低落するであらうといふ豫測に基くものと謂はねばならぬ、外國爲替市場に於ける投機者流は東京の兜町や蠣殼町の投機者流と聊其の趣を異にし、國際竝に國內の財政經濟事情に通曉して居る人々であるから、フランが尙一層低落するであらうといふ豫想は相當の根據あるものとしなければならぬ。

啻に爲替市場に於ける投機者流のみならず、私も亦佛國の財政を此の儘に放置すれば、フランは更に一層低落するであらうと考へる一人である。蓋フラン低落の原因はフランの增發に在り、フランの增發は佛蘭西銀行の政府に對する貸上金の增加に依るのである。即前述本年六月十七日から二十四日に至る一週間の平均に於て銀行の政府に對する貸上金は、永久貸上金二億フラン、新規貸上金三百六十六億フラン、合計三百六十八億フランであつて、之に佛國政府が諸外國政府に貸付金を爲す資金を調達する爲に佛蘭西銀行が佛蘭西國庫債券を割引いた金額、五十三億七千百萬フランを加算すれば總計四百二十一億七千百萬フランとなるのである。故に假に政府が佛蘭西銀行に對し其の貸上金の全部を返却したとしたならば、佛蘭西銀行券の發行高は百十億フランに減少し得る計算である。而して佛蘭西銀行の金所有高は內國に於て三十六億余萬フラン、外國に於て十八億余萬フラン合計五十五億余萬フランであるから、即發行高の約半額に相當する金を持つこととなり、銀行券の金貨兌換を開始し得る計算であるのである。

要するに佛蘭西銀行券の增發は政府貸上金の增加の爲である。私が此の說を爲すのは決して一片の獨斷(ドグマ)ではない、一體佛蘭西銀行券發行制度は英蘭銀行のやうに正貨準備發行と保證發行とを認める制度でもなく、又我が日本銀行、獨逸のライヒスバンクのやうに正貨準備發行と保證發行と制限外發行とを認める制度でもなく、又ライヒスバンクや合衆國のフエデラル、レザーヴ、バンクのやうに比例準備發行の制度でもなく、發行總額制限の制度である。即準備の如何を問はず、唯其の發行總額を制限して居るのである。其の制限は歐洲戰爭勃發當時六十八億フランであつたが、戰時戰後に亘つて十一回の改正を見、一

九二〇年十月四百十億フランに增加せられた。爾來久しく其の程度に止つたのであつたが、昨年四月エリオー內閣のクレマンテル藏相の辭職を一轉期とし、八ケ月間に百七十五億フランを增加して四百八十五億フランとなつた、而して發行總額の增加せられる度每に殆んど必、政府貸上金の最高限度も亦擴張せられたのである。即左表に依つて之が一目瞭然となる。

年月	發行總額（億）	貸上限度（億）
一九一四年八月	一二〇	二九
同　一二月	同	六〇
一九一五年五月	一五〇	同
同　七月	同	九〇
一九一六年三月	一八〇	同
一九一七年二月	二一〇	一二〇
同　九月	二四〇	同
同　十月	同	一五〇
一九一八年二月	二七〇	同
同　四月	同	一八〇
同　五月	三〇〇	同
同　六月	同	二一〇
同　九月	三三〇	同
一九一九年二月	三六〇	同
同　三月	同	二四〇
一九一九年七月	四〇〇	二七〇
一九二〇年十月	四一〇	同
同　十二月	同	二五〇
一九二二年十二月	同	二四〇
一九二三年十二月	同	二三二
一九二四年十二月	同	二二〇
一九二五年四月	四五〇	二六〇
同　六月	五一〇	三二〇
同　十一月	同	三三五
同　十二月	五八五	三九五

即右の表に依て明であるやうに、歐洲戰爭勃發當時佛蘭西銀行は政府に對し二億フランの永久貸上金を有したに止つたが、戰爭の爲新に二十九億フランの貸上金を爲したのが始まりで、最近は最高限度三百九十五億フランとなつたのである。而して一九二〇年から一九二四年迄の間に於て貸上金の減少して居るのは、一九二〇年十二月三十一日の法律が佛蘭西銀行政府貸上金返濟の爲每年少くとも二十億フランを返却する義務を政府に負はしめたからである。尤も政府は法律の命ずるやうに每年二

十億フランの返濟を爲すことが出來なかつたけれども、四ケ年間に五十億フランの返濟を行つたのである。しかし、一九二五年四月以降に於ては國庫の窮乏甚しく、却つて貸上金の增加を見るに至つたのであつたが、昨年末十億フランの返濟を行つたので、現在の最高限度は三百八十五億フランとなつて居るのである。

然らば佛國國庫の窮乏は何故に斯くの如く極端に達したのであるか、私は其の第一の原因として短期國債の償還期到來を擧げなければならない。昨年十一月二十二日時の國庫大臣ボンネ氏が議會に於て聲明した所に從へば、佛國政府短期公債の期限到來は左表の如き狀況を示して居る。

一九二五年	二二〇億
一九二六年	六〇
一九二七年	六〇
一九二八年	三九
一九二九年	九〇
一九三〇年	一一七〇
一九三一年	一〇
一九三二年	六〇
一九三三年	三〇
一九三四年	六〇
一九三五年	四九〇
一九三六年	四八〇
一九四〇年	五五〇

従て之が借替は中々容易なことでないので、一般民衆の間に借替應募者を見出すことが出來なければ、勢佛蘭西銀行より借上金を以て一時を糊塗するより外はないのである、一九二五年中に於て五度大藏大臣の交迭を見たのも、全く此の短期公債の期限到來するもの二百二十億フランの多額に達して居つたからであるといふことが出來る。

一九二六年に於ける財政の困難は短期公債の期限到來よりも寧ろフランの低落にあつた。然し乍ら其のフラン低落の原因は佛蘭西銀行券の增發であつて、其の增發の原因は政府貸上金の增加であり、貸上金の增加は一九二五年に於ては短期公債借替の爲であつたことを考へると、結局フランの低落は間接に源を短期公債の激增に發するものといふことが出來る。然らば佛國政府は何故に斯くの如き巨額の短期公債を發行したか。それは勿論普通歳入を以て歳出を支辨することが出來なかつたからである。何が故に佛蘭西は其の歳入を以て歳出を支辨することが出來なかつたのであるか。玆に於て私は佛國政府の豫算を一瞥

する必要がある。

一九二六年度佛國豫算案（佛國の會計年度は暦年と同しく一月一日に始まり十二月末日に終る）は本年四月二十九日議會を通過した。時の大藏大臣はラウル、ペレ氏であつたが、歳出總額三百七十三億余萬、歳入總額三百七十四億余萬である。而して歳出の中二百二億は公債費である。即公債費が歳出の半額以上を占めて居るのである。各省行政費の總額は百五十億でその中陸軍が四十二億、海軍が十四億である。歳入の中租税收入は三百三億である、其の他の歳入は租税に比ぶれば何れも輕少なもので、官業收入の三十五億が第一位を占めて居る。

即一九二六年度に於ては幸にして豫算の表に於ては收支均衡を得て居るのであるが、本年に於ても短期公債の期限到來するものが六十億あり、之が借替は必しも容易でないのみならず、フランの下落は驚くべき程度に達し、ポアンカレー内閣成立直前に於ては英貨一磅に付二百四十五フランに達し、即純分比價一磅に付二十五フラン二十五サンチイムに比較すれば約十分の一に下落したのであつた。ポアンカレイ内閣の成立に依り、相場は稍恢復して昨今二百フラン内外の處に居るのであるが、果して此の相場は永續するであらうか、今後此の以上の低落を見ないであらうか、私は大に之を疑問とする。是れ私が本篇の表題を『ポアンカレイ氏果して難局を打開すべきか』と稱する所以である。

私は立論の順序として最近の政變の原因に遡らなければならない。最近の政變は第九次ブリアン内閣の藏相ラウル、ペレー氏の辭職に端を發する。最初は藏相のみの辭職であつたが、後に内閣の總辭職となつた。而してラウル、ペレー氏の辭職の原因はフラン相場の引上の爲に佛蘭西銀行の所有する金を使用せんとしたけれども銀行總裁ロビノー氏が之を峻拒した爲であると巷間に傳へられる。思ふにラウル、ペレー氏はフラン相場の恢復を圖るには佛蘭西銀行の待つて居る金を以て磅又は弗を買ふ外はないと考へたのであらう、それは一應尤なことであつた。然し之を實行することが出來ないで辭職した。故に後を承けた第十次ブリアン内閣の藏相カイヨー氏は佛蘭西銀行總裁ロビノー氏を強制して辭職せしめ、アルゼリイ銀行總裁モロー氏をして之に代らしめ、佛蘭西銀行首席副總裁ピカール氏をアルゼリイ銀行總裁とした。かくして佛蘭西銀行幹部を無理矢理に更迭せしめた。私はカイヨー氏が果してラウル、ペレー氏の考へたやうに、佛蘭西銀行の金を利用したかどうかは知らないが、兎も角もフランは依然低落した、少くとも恢復はしなかつた。而してカイヨー氏がフラン恢復を目的として、財政問題の解決

手段を政府の手に一任せんことを議會に提案するや、下院議長の職にあつたエリオー氏は猛然として起つて、カイヨー氏を攻撃した爲に、遂にブリアン内閣は總辭職をなし、エリオー内閣の成立を見たが、藏相ド、モンジイ氏の持つて居る資本課税案は佛國資本家の恐怖する所となつてフランを賣つて磅又は弗に代へるものが續出し、遂に一磅に付二百四十五フラン迄の下落を見るに至つたので、エリオー内閣は數日にして總辭職をなすに至り、茲にポアンカレー内閣の成立を見たのである。

此度のポアンカレイ内閣は我國の詞でいへば所謂擧國一致内閣であつて、閣員の中に前首相六人を含んで居る。即副總理として司法大臣バルツー氏が居り、外務大臣としてブリアン氏が居り海軍大臣としてレイグ氏が居り、陸軍大臣としてパンルブエ氏が居り、文部大臣としてエリオー氏が居り、總理大臣兼大藏大臣としてポアンカレイ氏自らが居る、由來佛國の首相は近年殆んど皆外相を兼攝することになつて居たが、今回ポアンカレイ氏が首相にして藏相を兼ぬるに到つたのは、佛國政治史上に一紀元を劃するものであつて、佛國の現狀に於ては外交よりも寧ろ財政を以て難局なりとするに到つた證跡であるといはねばならぬ。

却説今回擧國一致内閣の成立を見るに到つた理由は最近佛國に於てフラン相場の下落を政權爭奪の具に供するの弊があつて、此の弊を一掃せんが爲であると謂はれて居る。爲替相場の低落を政權爭奪の具に供することの不可であるのは、啻に佛蘭西のみならず、何れの國に於ても實に然りであるが、然らば擧國一致内閣を組織すればフランの低落を止めることが出來るのであるか、是れ私の大に疑問とする處である。

新内閣は上院に於て殆んど全員の後援を有し、下院に於て絶對過半數の支持を有して居ると傳へられる。私は内閣の將來の運命を卜する爲に共絶對過半數を有して居るといはれる下院の勢力を一覽して見たい。

graupe radicale et radical socialiste 急進黨及急進社會黨聯盟	一三五
socialistes 社會黨	九八
republicainsh socialistes et socialistes francais 社會共和黨及佛國社會黨	四〇
gauche radicale 急進左黨	四〇
gauche républicaine démocratique 共和民主左黨	三四
gauche indépendante 獨立左黨	一六
republicains de gauche 左翼共和黨	三二
Union républicaine démocratique 共和民主同盟	一〇二

democrates	民主黨	一四
Communistes	共產黨	二八
aucun groupe	無所屬	二七
non inscrits		四
計		五七〇

即現內閣は下院に於てエリオー氏を出して居る急進黨及急進社會黨聯盟一三五とパンルヴェ、ブリアンの兩氏を出して居る社會共和黨及佛國社會黨四〇とレーグ氏を出して居る左翼共和黨三二と、ポアンカレー氏を出して居る共和民主同盟の一〇二とバルツー氏を出して居る共和民主左黨三四を後援に持つて居るから、政治上に於ては先づ安泰と見ることが出來る。從つてフランを賣るに急であつた外國爲替市場の投機者流も此處暫く賣り控えたと見えて、フランは一磅に付二百法內外に蹰躕低徊して居るのであるが、私はフランの根本的恢復及安定は上院の殆んど全部と下院の過半數の後援支持あるが故に完成せられるものとは考えないのである。

外國爲替相場の高低が貨幣の所謂實質價値と如何なる關係を持つて居るかは全く難解なる問題であつて、貨幣の對外價値と對內價値との相互の關係を論ずることは非常に困難な事柄である、私は嘗て之を國家學會雜誌の紙上に論じたことがあつたが（大正十三年六月號）、私は今日之を繰返すことを欲しない、唯茲に多くの躊躇なくして云ひ得ると思ふことは、不換紙幣の濫發は其の對內價値のみならず、對外價値をも低落せしむることである。從て私はフラン相場を根本的に恢復安定せしめようとすれば、佛蘭西銀行券の發行を縮少せしめるより外に途はないと思ふ、世の中には對外貿易の出超又は國際貸借の改善に依つてフラン相場を恢復させようと考へる人もあるやうであるが、それは金貨本位國又は紙幣を兌換するに足る金を持つて居る日本の如きに於て之を謂ふべきであつて、ドウス案實施前の獨逸には今日の佛蘭西に於て外國爲替相場の恢復安定は銀行券發行高の收縮を先づ其の第一步にしなければならぬ。獨逸の既に實行し又佛蘭西に於ても實行すべしと主張する人のある Debalvation 即貨幣價値の切下は、私の見る所を以てすれば要するに發行高縮少の一手段たるに過ぎない。佛蘭西に於ても之を行ひ得れば誠に結構であるが、不幸にして、否幸にして佛蘭西銀行券の增發はライヒスバンクの如く極端に至つて居らぬ。故に若し佛蘭西政府が前述一九二〇年十二月三十一日の法律に定めたやうに年々二十億フラン宛貸上金を銀行に返却すれば五年にして百億、十年にして二百億を減ずることが出來るのである。そうすれば必ずしも貨幣價値の切下を行ふ必要がないのである。

ポアンカレイ氏も亦今日貨幣價値切下を行ふ意見はない樣である。而して一九二六年度に於て三十五億フラン平年度に於て約百億フランの收入増加を見るべき増税案を議會に提出した、恐らく此の案は上下兩院を通過するであらうけれども、増税の目的は果して奈邊にあるで何らうか、今回の財政案の中には官吏の増俸を含んで居るから、増加歳入の全部を佛蘭西銀行貸上金の返濟に用ふることは到底出來ないであらう。又今回の増税案の中には社會黨年來の主張である資本課税を含んで居らないで、唯專賣品の値上、飲料品税、鐵道運賃税、自動車税、船舶運賃税の増徴、取引税の引上證券收入、重役特別手當課税及財産移轉税の増徴を含むのみであるから、果して豫期の如く百億フランの増收を得ることが出來るや否や大に疑問である。

ポアンカレイ氏は歳出の削減に向つて一大鐵槌を下すであらうか、今回の財政案中には本年中大統領令により行政部門の廢止及變更を爲す事を得といふ一ケ條があるけれども、佛國の歳出中二分の一以上を占める公債費は如何にしても削除の餘地なく、削減し得るものは唯軍事費殊に陸軍費あるのみである。而してポアンカレイ氏は果して陸軍費を削減するであらうか。

否、否、一九二三年一月ルール占領を敢行して歐羅巴大陸に突如として一帶の暗雲を卷き起したものは誰であつたか、それは時の佛國宰相ポアンカレイ氏ではなかつたか。而して其のルール占領軍を徹退せしめたのは一九二四年五月の總選擧後即右翼聯合ブロック、ナショナルの勢力失墜後であつて左黨聯合の宰相エリオー氏の施設であつた。ポアンカレイ氏は決して軍事費を削減しないであらう。

軍事費を削減しなければ、如何に行政各部の改廢を行ふとも、多くの歳出を削減することは出來ない、資本課税を避けては巨額の歳入増加を期待することは出來ない。佛國財政の改善せらるゝ豫想は甚微弱なるものである、フラン相場の顯著なる恢復は極めて覺束ないことではる。

私は確信する、ポアンカレイ氏はクレマンソー氏既に老いたる佛國政界に於て最力強き政治家である。ブリアン氏よりもミルラン氏よりも實行力ある人であると私は信ずる。加之熱烈なる愛國者である。私は此の偉大なる政治家、熱烈なる愛國者に對して叙上の如き不遜の辭を並べたことを非常に遺憾に思ふ、況んや歐米各國の大政治家中私が面識あり、且屢握手の榮を有した唯一の人であるポアンカレイ氏に向つて此の批評を敢てしたことを遺憾に思ふ。然し乍ら總てはポアンカレイ氏の祖國佛蘭西を懐ふの余りである。現代の佛蘭西を救ふの途は唯其の帝國主義を捨てることにある。フラン恢復の手段も亦唯是れのみである。(大正十五、八、一)

本篇を草する後八月三日佛國上院は二五〇票に對する十三票を以て、ポアンカレイの財政案を通過した。又一大減債基金を設くるの規定を佛國憲法中に挿入せんが爲た、上下兩院議員の連合會議なるアサムブレ、ナショナルをヴエルサイユに開かんとし、フランは八月二日一磅に付一八五フランに恢復したと傳へられる。然し乍ら此等の事實を以てポアンカレイ氏の成功を斷ずるは、時期尚早であると私は信ずる。

秘密社會の機能

新明正道

一

秘密社會において我等は何を意味するか。それは社會結合の一として如何なる特性を與へてゐるものであるか。一般世人は秘密社會に對して無意識的に强い嫌厭の情を有してゐる。彼等は秘密社會の存在を反社會的なものとして、之を排撃するに當り異常な熱心を示す。彼等はこれを以て一般的に社會の秩序を顚覆しやうとする野心を藏する社會であると考へてゐる。輿論によつて生活し、公開を愛する彼等としては、この態度が寧ろ當然であるかも知れぬ。我等の普通の心情が秘密や隱匿を憎むことから考へても、此の心理を理解することが容易である。しかし、秘密社會の如き異常な社會が何故社會結合のなかに出現してゐるか、その構造が如何なる仕組から成つてゐるかといふことを、偏見なしに考察した上でなくては、之に對する批判を下すことはできない。しかも、一般は、漫然と秘密社會を嫌厭する感情に基づいて、全然その社會的意味を考へることなしに之を病的なものとして斥ける傾向がある。果して秘密社會はかくの如き病的な反社會的なものとして批評し去ることが出來やうか。

私は先づ秘密社會を結合の一種類としてその特長を檢討したい。秘密社會は本來秘密を中心とした社會である。すなはち、それは秘密の共同によつて、結びつけられた人々の結合である。元より秘密の共同の事實が眼目であつて、これが如何なる事項に關係してゐるかといふことは問題とならぬ。秘密社會に對照されるところの、何等秘密を含まない社會は公開的社會である。秘密社會が公開的な形式を採らないのは、その遂行しやうとする目的の達成が社會の秩序によつて抑壓されてゐるからである。秘密社會は自から組織的な土臺から一に立つにいたる。秘密を中心とするところか

らして、その結合は單純な協働ではあり得ない。何等かの目的を中心とした成員の按排配置の生ずることは自然であらう。これ秘密社會の組織的なる所以である。しかし、秘密社會は單に組織的であるばかりでなく、特に注目に値するのは、それが目的社會的特徴を最も明らかに發揮する點である。これは秘密社會の成立の理由から考へて當然である。社會を公開的たらしめず、之を秘密的ならしめるところに既に社會の目的的結合の意圖は動いてゐる。しかも、社會成後における事情は益々社會の目的性を高調するの必要を感ぜしめる。公開社會においては學問生活の內容が成員の意識を支配してゐて集團形式そのものはあまり考慮されないのに反し、秘密社會においては成員が一個の社會を形成してゐるといふ意識が絕えず眼前に現はれてゐる。秘密社會の成員は常に自分等の結合が秘密的なものであることを意識してゐなければならぬから、彼等は、社會の內容よりもその形式を特別重要視するものである。彼等は絕えずその結合を社會として維持しやうと圖つてゐる。此の不斷の努力の結果として、秘密社會は目的的集團の形式を採るにいたる。此の性質はその構造の諸の形相を考へてみると一層明らかとなるのである。

　秘密社會は一定の秘密の共同を以て紐帶として成立した社會であつて、此の秘密的な目的は、社會の全體にわたつて著しい作用を及ぼしてゐる。總ては秘密の固守ならびに此れを中心とする社會の維持如何に懸つてゐるから、秘密社會の內部のあらゆる構成は皆なこの主旨によつて規制されてゐる。此れは先づ秘密社會の儀式において現はれてゐる。儀式は流動的な社會に定型を與へることを以てその目的とするものであつて、その確立によつて社會の持續制は大いに鞏固になるものである。かくの如き儀式が秘密社會において重要視せられるのは不思議ではない。秘密社會はその目的が如何であるにせよ、儀式を全く排除することは不可能である。秘密社會の儀式性が最もよく現はれてゐるのは、その入會式又は入社式であるといはねばならぬ。秘密社會が新しく成員を秘密の共同に參加せしめる場合に、彼等が手數のかゝる、面倒な儀式を設けてゐるのは、その社會の目的から考へて當然なことである。儀式が複雜で且つ煩はしければそれだけ秘密社會の威力が嚴肅に表現され得る。しかし、かくの如き効果のみを覘つて儀式が莊嚴化せられるものとは斷定できない。反つて、その本來の目的は、種々の手續を設けて出來るだけ外部からの闖入者を防ぐことにあるとみるべき

である。入會式の手續は、新入會者への試驗の意味を有つてゐる。メラネシアのバンク諸族の土民の間に存在する秘密結社――これはリヴアスによつて紹介せられたものであるが、これを秘密社會と稱するのは不適當だといふ說もある――の入會式はこの好例をなすものと思ふ。此の秘密社會の意義は明瞭でないが、此れに入會する者は紹介者を必要とし、更に入會に際しては紹介者へは勿論、その他故參の社會員に對して一定の贈與をしなければならぬ。此の贈與に對しては相手からまた返しをするのであるが、それにしても入會者は彼等の社會の狀態から考へると莫大な贈與をなすの義務があるのである。經濟的にいつて入會者は非常な犧牲を拂ふことを覺悟しなければならぬ。更に入會式についても一々細かな規定があつて、伴奏の役を務める樂手が失策をした時には、罰としてかなりな物財の提供を要求される有樣である。入會者に對する監視の程度はこれによつて想像することができる。入會者に對して誓約せしめる慣行の如きは、あらゆる秘密社會に共通するところであつて、何人も熟知してゐるものであるが、その內容には沈默の義務の含まれてゐるのが普通である。秘密と沈默とは離すことの出來ない對偶物である。秘密の固守は一に沈默によつて期することができる。從つて、秘密社會は沈默を要求するのみでなく、一般人が沈默を守ることの出來ない性情を有つてゐるのに鑑み、新入會者に對して沈默の習慣を付けるための特別な慣行を設けてゐる場合さへある。マレー香料島のある秘密社會では、入會者は更にその入會の體驗について緘默するのみでなく、幾週間のあひだ何人ともたとひ家庭においても語ることができないやうに規定されてゐる。沈默を守らせるために特別の方法を用ひてゐる秘密社會もある。その例をなすものは、ガリシアのドルイド教徒の秘密社會であつて、その秘密的對象はある宗教的な聖歌であるが、これを暗誦するには二十年の歲月を要する。從つて秘密の核心に觸れるまでには沈默の習慣が生じ、これを喋舌り散らす興味も減退して了ふわけである。秘密社會はかくの如き種々の方法によつて形式化された複雜な儀式によつて固められてゐて、これに對する尊重の程度は公開社會と大いに異なつてゐるものである。自から秘密社會では、慣習や方式や儀式が集團の目的內容よりも重要視せられる極端な場合をさへ生むのである。進步的なフリーメーソン結社は、それが決して秘密的結合でないこと、それが決してその意圖や行動を隱さうとするものでないことを強調し、唯だ彼等はその儀式の形式につい

て秘密を守るだけであると述べてゐる。又た十八世紀末の學生集團であるアミチストの結社は、その規約の第一條で各團員の守るべき神聖なる義務として團章、團員の氏名、儀式等をあげてゐるが、結社の本質については何等蔽ひかくすところなく、詳細記述をしてゐるのである。

目的社會としての秘密社會の基礎を固める作用をなすものは、儀式のみでない。次に、我等は階級的分割の原理を舉げることができる。秘密社會はその目的を達成する便宜上單なる並立的な組織よりも從屬的な組織を選擇する。この精巧な從屬的な組織は、本能を理性化しやうとする目的社會に必然的なものであるとジンメルはいふ。しかし、この說明は從屬的組織を十分に說明せぬ。我等はこの組織を以て秘密に基づく社會行爲において敏活と嚴格を期する必要が要求したものとみる。敏活な行爲を營み得るには、並立的組織に不便の多いことは明らかであり、更に號令の徹底と嚴格を期するには上下的な階層組織が最も適當である。且つ、秘密そのものも階層的な組織に織りこまれてゐる方が安全であり、外部から看破される危險性が乏しいと謂はねばならぬ。（秘密については特に古さが尊重されることもこの組織に多少の關係をもつ。古くから秘密を分享してゐる人々は後から來るものに對して上位的な威力を帶びる。秘密社會の階層のなかで入會の順序がその標準となつてゐるものが尠くないのである。）兎に角、階級的な分割は秘密社會構造の一特長をなすものである。カルボナリ党の階級的組織、ニヒリストの階級的組織は有名である。後者は特に小說的な想像を逞しうされたものであるが、ある記者によると、その一隊は五十名乃至十五名から成つてゐて、各隊は一人の古參者によつて支配せられてゐる。此の古參者は自分の配下の隊を每日監督し、且つ二十ケ隊の隊長と交通する。二十ケ隊の隊長は直接には執行委員會と關係することができない。兩者の間には委員會の使者が介在してゐる。これに似た例は、千八百五十年代にバクウニンが組織したといはれてゐる秘密社會である。これは國際的な革命的結社であるが、このなかには三つの階級がある。第一は、國際同胞團であり、第二は、國民同胞團であり、第三は半秘密、半公開の國際社會民主主義同盟の組織である。國際同胞團は百名以下を常則とし、革命戰の指導的精神たるべきものである。彼等は革命的な精神の所有者でなければならぬ。バクウニンは彼等に他の二つの組織に對する最高權能を賦與しやうとした。國民同胞團は

前者の指導を受けて群集を動かすのが役割であつてその熱心と支配力によつて抜擢されたものである。半秘密的半公開的組織は多數の群集によつて構成される。そして、これを組織化するために諸國には支部が形成されなければならぬ。此等の三つの組織の內第三のものは第二について、第二のものは第一について親ひ知ることを許されない。各々皆な特別の規約や原理によつて活動するのである。階級的組織は、訓練を生む、これは、社會の成員の關心を秘密的目的に集中せしめ、裏切り又は暴露しやうとする者に、斷乎たる報復を加へるに便利である。所謂恐怖政治も、秘密社會において最も完全に實現されるのである。

右の如き秘密社會の構造は、社會の威力を昂進的に高める作用を有する。秘密の中心を成す筈である社會の本質的な內容よりもこれを防禦する意味しか有たない儀式がタブーの性質をもつにいたるやうな現示も一見その本來の傾向に反對するものとも考へられるが、儀式や社會形式の只管な尊重は必ずしも秘密社會の存續に就つて無意味でない儀式や社會の形式がそのものとして威力を帶びてることは、やがて秘密社會の社會を確實にする効果がある。何故かといふと、社會の團結が有力になればなるだけ個人の力は萎縮して仕舞ひ、個性の破壞が可能と成るからである。換言すると、社會の威力が增大するに從つて、之に對する個人の服從性も亦た增大するからである。秘密社會の構造が如何に右の目的を達成するに適してゐるかといふことは、あらゆる秘密社會が犯罪的秘密社會にいたつては殊に、社會の指導者の命令のままに動いてゐる事實をみれば明白である。秘密社會が、本來正規な規範から脫却した行爲の綱領を目指してゐるに拘らず社會員はその圈內にあつては正規的な規範を嚴重に遵守してゐる。必要はつひにかくの如き結果を生むるのである。個性破壞は、特に秘密社會の苦心するところである。此の目的に資するものとしてはマスクの使用を指摘しなければならない。ある學者の說くが如く、その存在は秘密社會の存在と關係があるものと斷定することは不可能であるにせよ、マスクの使用が個性滅却のために相當効果があることは否定できないことである。ある秘密社會においては全然會員固有の氏名を呼ばず、番號によつて之に代へてゐる。此れも亦た個性破却の効果が有る。勿論此等の慣行が秘密を守るための手段として生じたものであるかも知れないが、現在では反つて個性破却の目的の方が强く支配してゐる觀があ

る。秘密社會の社會員において個性意義を失つてくると、秘密社會の結合が内的に鞏固になると共に、他方その外部に對する行爲に於いても種々の便宜が生じてくる。個性が失はれてくると、個人的責任の觀念の崩れてくることは自然である。個人は唯だ階級的な組織の一つの分子として、その役割を果すのみであつて、責任は母體たる秘密社會にかゝるだけである。秘密社會に包容される個人は無名である。尠くとも彼等は自から無名であるといふ意識において活動する。この無名の源泉において屢々秘密社會の恐るべき行動が準備されるのである。完成せられた秘密社會は宛然軍隊の組織に類似したものがある。

二

右の如き構造によつて成立した秘密社會は社會の全體的編成に對して如何なる影響を及ぼすものであるか。秘密社會はその成立から考へると逃避的な組織である。しかし、それは決して飽くまで逃避的な方向を辿るものではない。それは潜かに全體社會に一定の積極的行動を執らうとする社會である。從つて、秘密社會の社會における作用を考へるには、如何してもその内容的な目的を考へて來なければならぬ。しかし、此の點について一般人は極めて簡單なる見解を有してゐる。彼等は秘密社會の誇張された形式を見て、その凡ての種類を同一の論法を以て批評して了ふ。彼等は秘密社會を以て一般的に公然認可され難い目的をもつところの人々の集團であるとなして、一概にこれを斥けやうと努力するのである。しかし、我等は、秘密社會としての形式においてたとひ同一なる特長を發揮するとはいへ、その目的について見ると、飽くまで排斥すべきものと然らざるものとの二つの種類を秘密社會にみるのである。飽くまで排斥すべきものとは何乎。それは如何なる時代においても反社會的と考へられ得るやうな先天的な犯罪目的を中心として形成された社會である。暗殺を目的とする秘密社會、他人に危害を加へることを目的とする秘密社會の如きがこれである。かくの如き社會の目的は、特別なる社會の環境によつて殆ど制限されない犯罪であつて、かくの如き目的を基礎とした秘密社會は反社會的なものとして斟酌するの餘地はない。しかし、秘密社會は必ずしもかくの如きものばかりではない。同じ

く反社會的と考へられてゐても、それが全く政治的なる事情によつて決定されてゐる秘密社會がある。此等は無制限的に反社會的な目的とは斷定できないものであつて、謂はば時代に先んじた政治思想を中心とした秘密社會は犯罪的秘密社會とは別の範疇に屬する。後者に對しては今少しく親切なる理解が必要である。私は、一般人の秘密社會への嫌忌の感情において、正常に犯罪的秘密社會が指彈されてゐる他に、不正常にも政治的な秘密社會が全くこれと同一物と取扱はれてゐるのを見るのであるが、これは一般人が社會結合の意味についてなほ檢討の不十分なるの致す結果ではないかと思ふ。元より政治的なる正常的秘密結社の存立は、結合の生活の全局面から考へてみて決して喜ぶべき現象であるとはいふことができぬ。秘密社會はその內容的目的如何を離れて、社會形式そのものとして考へてみて決して理想的なものとは看做し難いからである。秘密社會において秘密固守の必要からして或る程度まで社會の目的そのものが忘却又は閑過せられて單に形式のみが重要な意味を有つにいたることは既に述べた如くである。かくの如く社會の內容的目的の他に、或ひはそれ以上に社會の團結が獨自の意義をもつにいたることは、一般の社會結合において不可避的な現象であつて、此の事實はある程度まで社會本來のテレオロギーである。社會の內容そのものとは別に多少の關心が獨立に社會の團結に對して向けられるのでなくては、牢固な結合が不可能であり、やがては結合を形成した主旨も失はれて了ふのである。しかし、無制限的にこのテレオロギーを昂進せしめる時は、つひに人間の社會は自働的な目的と化し、個人は社會化の名において奴隷化せられて了ふと見るの他はない。秘密社會においては確かにかくの如き集合的奴隷化の傾向が發生してくる。最もアナアキスチクな秘密社會においてもこの事實が認められるのである。更に、秘密社會の核心をなす秘密は容易に社會員に神秘主義的な傾向を植えつけるにいたることをも考へなければならぬ。秘密社會の種々の儀式において往々偶像崇拜的な慣行の交つてゐることは、その神秘的精神の現はれであるが、たとひ明白に宗教的な形式をからないまでも、神秘的な心理は極めて濃厚に現はれてゐるものであつて、理論的な論理の如きも、神秘主義の勢力によつて壓倒される場合が多い。神秘主義の心理に導かれた秘密社會においては、本來の理論に信仰的な熱情が附け加へられた結果、理論の論理性は失はれ、やがて信仰化せられた熱情が自由に且つ獨斷的に自己の理論を構造するやうにな

る。神秘主義の結果として憂ふべきは、それが一方秘密社會の信條をして彌が上に偏狹固陋ならしめると共に、他方その精神をして極端に簡單なものたらしめることである。密室内における祈禱が信者を狂熱的な昂奮に驅り立てると同じやうに、秘密社會における閉鎖的な神秘主義はその社會員の心理を異常的にまで幻想化するのである。我等が客觀的にみてその健全性を疑ひ得ない信條を中心とした政治的秘密社會も、兎もすると自己の理論を定想化する危險性を有つてゐる。殊に、その外界の社會に接觸する場合に執るべき方法については實際的なる思慮よりも唯だ勇躍的なる確信が凡てを決裁し勝である。彼等が理知的なる打算によつて行動すると自ら考へてゐる時も、實は信仰的な極端論が指導してゐるのである。秘密社會の實際的な目的が徒らに神秘的高揚によつて超理論化せられたならば、本來一般民衆の共感を受くべき筈の綱領と雖も終に彼等を超越せる非實際的なものと成つて了ふであらう。かくの如き秘密社會は結局その城廓の内において自己陶酔的な滿足を生ずるかも知れないが、その機能は文化的に周圍の社會に對して働きかけることが不可能である。秘密社會の機能は、漸次に非社會的と成る。たとひその本來の性質から考へて有効なものもかくては唯だ有害な結果を惹起するにとゞまるのである。一般民衆の主張と秘密社會の要求との間に生ずるこの裂罅、この距離は、正當なる秘密社會の前にも横はつてゐるところの難關であつて、この原因が主として社會の秘密的構成に基づくものであるとするならば、獨り犯罪的秘密社會のみならず、正常なる秘密社會も亦た社會結合の形式から排除すべきものであると見ねばならぬ。してみると、一旦私は正當的な秘密社會を犯罪的なそれから區別したものゝ、再びこれを社會形式から考へて不健全なものとして排斥しなければならないといふ結論に到達する。これは一般人の漫然たる秘密社會の嫌忌と相去ること遠からぬものではないか。しかし、私が秘密社會を排撃する見地は之と決して同一ではないのである。一般人は秘密社會といへば、その目的が悉く犯罪的な反秩序的なものと斷定してゐる。彼等はそのなかに正常的な目的を中心とせる秘密社會の存することを問題としない。私は特にそれを區別し、之に關しては絶對的なる否定を敢て試みぬ。唯それが秘密的形式を採るところから招くところの構造的な缺陷を指摘して、此の形式が甚だ不適當なものであることを認めるのみである。

三

犯罪的な秘密社會はその目的において既に抑壓すべきものである。正常的な秘密社會ではその目的は問題でない。しかし、我等はその形式的な缺陷から考へて、この社會も亦た結合として決して望ましいものでないことを主張する。正常的な秘密社會は異常なる社會心理を生ずることは確實であるから、その存在は結合に對する社會政策の見地から見ても、出來るだけ除去するに努めることが必要である。但し、秘密社會の除去が必要であるといふのは、直ちにこれを抑壓すれば足るといふのではない。これは犯罪的な秘密社會にはあてはまるかも知れないが、政治的な秘密社會については見當違ひである。我等は政治的秘密社會成立の原因を檢討する必要がある。我等は本來必ずしも反社會的ではない目的を揭げてゐる政治的社會が何故、秘密的形式を採るにいたるかを反問してみる必要がある。犯罪的な社會に對しては常に社會の鎭壓が必然的に要求される。これは當然のことである。しかし、政治的な目的、就中社會の制度の改革を意圖する目的の社會は勿論一定の政治のもとにおいて反秩序性を含むものであるが、これは果して犯罪的社會の如くに嚴重なる抑壓を必要とするものであらうか。時代の政權を壟斷する支配階級にとつてかくの如き勢力の好ましくないのは明らかである。從つて、彼等がこれに對して彈壓的な態度を採るのは、自然的なことといへるかも知れない。しかし、考へてみるに、此の彈壓は徒らに歷史の進展に堰を設けて、その流を激せしめるに過ぎない結果を生ずるものである。殊に、我等は現代の文化における結合の狀態を考へると、一層この感を深くするのである。

封建時代の文化においては、結合に對する要求が比較的弱かつたにも拘らず、支配階級の社會結合に對する禁壓的態度は極めて絕對的のものであつた。封建的な全體社會は、スペンサアの所謂軍事型の社會を完全に現はしてゐたものであつて、全體社會はその協同的生活を維持する必要上、社會員を出來るだけ協同的な行爲に向はしめやうと苦心したものである。個人の自由な行爲は制限されざるを得なかつた。此の結果として、全體社會內の結合は凡て抑壓せられ、存在するものは公的社會だけの樣相であつた。全體社會の支配的機關に關係なき組織は成立の餘地がない。私的な社會と

して存立することを許されたものは、結局公けの社會へ從屬してゐたのである。封建的社會の特長の一として、部分社會の稀少又は絶無が說かれてゐるのは尤もである。かくの如くあらゆる社會の成立を忌避し抑壓することにこれ努める封建社會においては、秘密社會發生の可能性が多分にあると謂ふべきである。全く封建時代の社會に、我が德川幕府の態度においてその特別な例を見るやうに、凡ゆる結社の自由を禁止したものであるその原因がスペンサアの記述するが如き事情に基づくか否かを問はず、兎に角、かくの如き事態は、秘密社會の發生を當然としたのである。

しかし、現在の開放的な結合に基礎をおいた資本主義時代においては、事情が自から異なる。果して現在の社會がスペンサアの觀察したやうな産業型の社風であつて、個人の社會への隷屬が要求されず、部分的社會の成立に對しても自由が與へられてゐるものと斷定することは許されない。それにしても、現代の結合關係において最早や昔日の如き法則が行はれてゐないことは明らかであると謂はねばならぬ。封鎖的な一元的な全體社會の拘束は崩壞し、此れに代つて自由結合の傾向が有力と成つてゐる。現代に於いては集團の形成そのものが社會人の特別なる關心をなし、全體社會も從來の如くには此の傾向を否定しないのである。此の傾向は法律の上にも反映する。從來禁壓されるのを常としてゐた團結も今日では一般的に權利として許容されるやうになつてゐる。而して、その特に重要なものには、法律的な人格性が確認されてゐるのである。我等は極めて複雜なそして異質的な結合生活を營む。我等はかつて一個の社會に集中せしめてゐた種々の作用を、分解された多數の集團において遂行する。我等の生活的な欲求の複雜化した現在においては、多元的な集團の分業的な力に依らなければ、到底その滿足を圖ることが不可能であつて、結合自由の傾向もこゝにその基礎を有してゐる。すべての欲求を中心として集團を形成する自由を有する現代は確かに社會の結合から考へて封建時代から一歩進んだものであると考へることが出來る。しかも、かくの如き結合自由の認識の高まつた現代においてなほ秘密社會の發生する事實は何を語るものであるか。封建時代の結合においては自由な集團の成長は本來許されなかつたものである。しかし現代においては事情が一變してゐる。自由な集團の成長は一般から寧ろ當然のことであると考へられてゐる。我等は總ての要求、總ての主張を貫徹するために公然たる集團を形成する權利がなければならぬ。しかも、なほ

秘密社會の發生を見るのは、結局現代の社會が結合の自由を完全に尊重してゐないことを證明して餘りがある。實際我國のみならず世界の資本的支配階級は原則的には結合の自由を承認してゐるやうであるが、その內實においては唯だ自己の階級的利益を代表する結合のみを認め、然らざるものに對しては封建社會におけると敢て異ならない政策を以て彈壓を事としてゐる傾がある。公開的な結合とはいふもの丶勞働組合が現行法のもとにおいて、如何なる取扱ひを受けてゐることであるか。その團結は認容されてゐるもの丶やうではあるが、その生氣のある活動は種々の法規によつて拘束せられ、結合本來の目的を遂行することは不可能とされてゐる。雇傭條件の維持又は改善を圖らうとする團體に對してさへ、かくの如き酷薄な取締が行はれてゐる以上、社會組織改造の意圖をふくむ結合の抑壓されるのは當然である。之より政治組織の改造を目的とする結合が支配階級によつて危險視せられるのは不思議でないかも知れぬ。しかし、現代は過ぎさつた封建時代とは同日に談ずることができないのである。現代は閉鎖的な一元的な結合の桎梏を破つて、結合の集團的多元の上にもつと高級な社會生活の基礎を置かうとしてゐる。政治は徒黨の暗闘の時代を離れて議論の公開的な舞台に移りつ丶ある。これは資本的統治夫れ自身が社會に導き入れた原理であるが、若し社會の進化の最も自然的な發展を欲するならば、支配階級は當然右の傾向に順應し、總ての社會に公開的發展を許し、政治的主張の爭を合理的な手段によつて解決し得るやうに努めなければならぬ。而してこれは資本的支配階級がその精力を把握した時に掲げた綱領に對して反つて忠實なることを意味するのである。

封建社會に於ては、全體社會そのものが閉鎖的であつたから、このなかに發生した秘密社會はそれ自身異常的なものではあるが、之に對して本質的に甚しい性質的對照をなさなかつたものである。秘密社會は軍事型社會の特長をあらはすものであるが、封建社會では、それ自身軍事型の色彩を帶びてゐるところから、兩者の間に結合としてある程度の類似點がある。しかし、現代においては、全體社會が産業型に變化しつ丶あるが故に、その全體的基調は、此の內部に發生する秘密社會の原理と著しい相違を示す。或る意味において、秘密社會は舊い閉鎖的社會の遺物である。從つて現代の秘密社會のなかで生活する人々の心理には、現代の開放的な結合の心理と矛盾する性情の發生することは避けることは

出來ぬ。公開的結合の不自由は、社會結合のなかに古代的秘密社會を再現せしめ、共同生活の結合の上に割目をつくる。獨り結合生活の發展に障碍を與へるばかりでない。この密室的な環境で、結合精神の排他性及び單純性は、その內容をなす種々の要求を過激化し、非實際化するとともに、その實現手段をも亦た狂暴化するにいたるのである。階級的勢力の推移において何等かの意味における鬪爭は不可避であらう。鬪爭は必然的にその導く所に導いてゆくものである。しかし、此の故に、推移の狀態をそのまゝ放任すべきものではない。支配階級はこの鬪爭を最も合理的に進行せしむる方法を講じ得るのである。凡ての秘密的な戰を公開的戰に、凡この秘密社會を公開社會に變化せしめることは、政治の穩當なる進展を圖るために先決的な問題である。

四

政治的な秘密社會はその現狀に對する反抗の意味をもつところから、改革を快しとせぬ階級によつて犯罪的秘密社會と殆んど同一視せられてゐるものである。從つてその社會的機能の如きも徒らに弊害ある方面だけが考慮されてゐる嫌がある。此の點において、秘密社會は群集と同一の取扱を受けてゐるのである。群集の研究は近世に入つて始めて勃興したものであるが、その當初から群集は病的な現象であると斷定される運命を蒙つてゐる。ル・ボンを始め多くの群集心理の研究者は群集を以て社會的な現象ではあるが、性質上反社會的なものであると考へてゐる。例へば、マルチンはいふ。群集は、論理的意味をつけて考へると明らかに反社會的なものである。個人も社會も群集行動の禍を蒙らないものはない。今日において文明の價値のみならず、人格の陶汰と自我の眞の認識を威嚇すること、群集的行動の習慣の如く甚だしいものはないと。かくの如きは群集に對する批評の定型であるといつていいのである。群集行動を仔細に考察してみると、確かにそれは異常なる性質を發揮することが屢々である。組織化の不完全な群集は、その結合の動機が瞬間的な共鳴に基づくものであり、その共鳴の範圍も亦た限定されてゐるが、この簡單性は反つて群集を驅つて消極的な破壞にみちびくことが多い。この群集結合の破壞的性質は秘密社會のそれと酷似したところがある。兩者の誇張的な特

長は全く符節を合するやうに一致してゐるのである。群集の神秘的な精神や獨善主義や憎惡性や絶對性は、秘密社會のそれに相當する。唯だ階層的組織が群集において發見されないだけである。かくの如き特長の類似を生ずる所以は、兩者がいづれもその周圍の全體社會から人工的に隔離された社會圈を成さざるを得ないやうにされてゐるからである。隔離は自づと一定の社會を孤立せしめ、これに特異の特長を生ぜしめる。群集又は秘密社會の特長は凡て隔離の産物であるとみることが出來る。社會的特長を同じくする兩者は、更に世間から非難を受けてゐる點においても同一である。しかし、秘密社會に對する非難を肯定する前に我等がその成立の事情を洞察しなければならないと同樣に、群集においても我等はその發生の根源について考へてみなくてはならないのである。ル・ボンは群集が無意識的であるとのみ謂つて、更にその根抵を問題とせぬ。群集の無意識を檢討して、その性質を闡明したのは、フロイドの功に歸する。彼の群集の概念は所謂群集よりも廣義のものであるが、彼の自我の分析は、群集の解剖に一歩を進めたものであることは明らかである。彼は無意識なるものゝ構造を研究し、その內容をなすものは充足されないで抑壓されたリビドであると斷定したのである。此の抑壓されたリビドは再び意識の表層において變態的にその充足を求めてやまない。而して、かくの如きリビドが變態的に編み出したところの人格的な結合が即ち群集であるといふのである。私は彼の理論が充足されない欲求に着目してゐる點を採用する。彼の說くところを稍々變へて考へると、病的と目せられる群集は抑壓された我等の欲求が變則的に社會の形式をかりてその充足を圖る現象であると見るべきものである。その基礎となる欲求は必ずしも彼の說くやうに性的であるを要しない。あらゆる生活の欲求は皆な此の際考慮に入れられなければならぬ。抑壓された生活は群集を生み出す伏線である。故に、我等は群集の發生の際には、その起因を調べて、如何なる欲求がその根柢にかくれてゐるかを窮める必要がある。勿論群集には判然たる犯罪的なるものもある。しかし、我等は殊に政治的な群集においては、その動機が必ずしも不純でないことを發見する。而して正義の欲求に基づいた群集は、たとひその行動が矯激に趨る場合があるにせよ、絶對的にこれを非難することは誤りである。群集は多く破壞的能力しか有たないものであるが、歷史において、特筆大書さるべき事件の先驅として群集の貢献した例も夥しく提供されてゐるのである。我等は

群集を唯だ排撃することにのみ力を注ぐべきではないのである。

我等は秘密社會についても群集と同一の見解を適用すべきものであると思ふ。我等は、群集を非難すると同一の態度を以て、秘密社會といへば全然犯罪的意味しかないものと速斷してこれを擯斥しやうとしてゐる。秘密社會は勿論社會形式として考へてみても種々の難點を含むところの、殊に現代においては不自然な性質を有つ社會ではある。しかし、何故結合自由の原則の樹てられてゐる社會に、秘密社會が殘存してゐるかといふ事情を勘考すれば、その發生を斟酌しなければならないのである。此の故に、群集の社會的對策として暴壓の手段のみに縋ることが近視的であるのに等しく、秘密社會の存在に對しても唯だ窮追を事とするのは賢明な處置であるとは考へられぬ。今日の如く生活の……が時代的な轉換期に迫つてゐる時には、過渡的に、秘密社會の簇生をみるものであるが、徒らに秘密社會の影を追ふて、社會の結合の自由を擴大することを避けるならば、階級的な政治鬪爭の前には益々暗雲が蟠つて行くのみであらう。我等は社會運動の前途に對する秘密社會の作用を決して歡迎するものでない。我等はこの惡作用を排斥しやうとするものである。且つ、實際の運動の原動力が必ずしもかくの如き、秘密社會に存在するものとも考へないのである。秘密社會の發生の由來を理解しないで、唯その怪異なる組織だけを眺める者は、これを以て運動の中心點であると考へ、これを剿滅することが軈て運動を破滅せしめる捷徑であると考へる。しかし、これほど謬つた見解はない。我等はかくの如き秘密社會恐怖症の極端な例證をウエブスタアにおいてみる。その著作『秘密社會と顚覆運動』のなかで、此の驚くべき著者は、世界において十九世紀の間連綿として社會及び道德の秩序を顚覆しやうとして陰謀を逞しうする秘密社會が存在してゐると論じてゐるやうである。彼女は、この社會の中心的な勢力が獨逸人又は猶太人によつて掌握されてゐるものと考へ、之に對抗するために、顚覆運動調査局の設立を各國政府に勸めてゐる。この他彼女は國民的な反對運動を喚起する必要があるとも說いてゐるが、我等は、彼女が健氣にも十字軍士の如き熱情を以て大運動の烽火を揚げる必要を說いてゐるのをみて、如何に秘密社會が擴大された大きさで彼女の腦裡に印象されてゐるかといふことを知ることができる。彼女の思想には大戰當時の浮說がかなり深く滲み込んでゐるやうである。我等は今日此の書を讀んで唯だ一篇の傳

奇小説に眼を曝した感があるのみである。しかし、一般の人々の秘密社會に對する眼と雖も或ひは彼女の見解と餘り變りはないのではなからうか。秘密社會の全體社會における機能を冷靜に考察しないで、唯だその妄想化された姿に眼を据えてゐると、それだけが特別の存在をゝ永遠に保つてゆくやうでもある。しかし、これこそ疑心暗鬼を生むといふものである。秘密社會は社會の畸形兒であるかも知れないが、そのなかに表現されてゐる內容は、必ずしも秘密社會と不可離的なものでなく、公開的な社會とも結び付くことができるものである。秘密社會が變則的なものであればあるほど、これを公開化するやうに努力することが施政者の態度でなければならぬ。かくてはじめて社會の結合關係の離隔が解かれるばかりでなく、生活全體の進展の道も大いに圓滑ならしめられる可能性があるのである。此の意味において、秘密社會への對策は、群集の取扱とともに、結合に對する社會政策の問題として重要な意味を有つものである。

發賣禁止に對する抗議

出版物の發賣禁止

美濃部達吉

七月の「改造」が、藤森氏の「犠牲」の爲に發賣禁止になつたと聞いて、その意外さに驚かされた。「犠牲」は自分も近頃での優れた作と感心して讀んだもので、それには風俗を害すとかその秩序を紊るとかいふやうな分子は、全く認めることが出來なかつた。斯ういふ優れた作品が、役人の勝手な認定で、世の中から葬られてしまひ、それに對しては何等の爭の手段も無いことは、如何にも亂暴な事柄で、出版法改正の必要が、今更ながら、痛切に感ぜられる。

固より出版に對しても何等かの取締の必要の有ることは勿論であるが、日本の現在の出版法及び新聞紙法のやうに、內務省の勝手な認定で、如何なる出版物でも、任意に發賣頒布を禁止するの權が有り、而もそれが最終の決定で、それに對しては全く抗爭の途が開かれて居ないといふやうな制度は、今日の立憲政治の時代に於いて、日本を除くの外、恐くは世界の如何なる國にも、尠くとも平時の制としては、見出し得ないであらう。

その改正の必要なことは、今更論ずるまでもない多年周知の問題で、それが今日まで解決せられて居らぬのは、政府も議會も怠慢の誹を免れない。

如何に之を改正するのが適當であるかに付いては、自分にも別段新しい意見は無いが、試に二三の要點を述べるならば、

第一には、出版禁止の事項を、今日の如く「安寧秩序ヲ紊ル」といふやうな抽象的な文句を以てせず、具體的に限定列記して、その禁止に觸れた場合にのみ、發賣禁止を爲し得べきものとする必要が有る。

如何なる事項を以て禁止事項と爲すべきかは、攻究を要する問題で、確定的の意見は直には述べ難いが、大體に於いて、風俗に關する事項と、その秩序に關する事項との二種類に分けて考へることが出來る。

風俗に關しては、具體的に禁止すべき事項を列示することは、甚だ困難で、やはり現在のやうに「風俗ヲ壞亂スル」といふやうな抽象的の文句を以てするの外は無いかと思はれるが、是れに付いても、その禁止せらるべきものは、唯學問的又は藝術的に存在の價値なきものに止まらねばならぬことは、特に注意を要する。男女の關係は人生の最も重要な事實であつて、それが學問上の研究の對象となり、藝術の題目となることは、言ふまでもない。それが學問的著作であり藝術品である限りは、禁制品たるべき理由は無い。禁制品たるべきは、唯學問的著作又は藝術品を以て目することの出來ない、單に猥褻そのものを目的とする作品に限られねばならぬ。是れは敢て法文を以て明示するまでもなく、當然の事理と見るべきもので、現行法の下に於いても、倘斯く解すべきものであるが、而も實際には斯かる區別なく、藝術的價値の可なり高いものでも、單にそれが男女の關係を取り扱つて居るといふだけで、風俗を壞亂するものと認定せられた例が、甚だ多いから、出版法改正の際には、法文を以て此の事を明示するのが、適當であらう。

風俗を害する虞ある出版物に付いては、自分は、其の取締の方法として、現行法の如き發賣禁止の外に、廣告禁止及び公衆の目に觸るべき場所（殊に店頭）に陳列することの禁止を設けたいと思ふ。風俗を害することの殊に顯著なものは、其の發賣頒布を禁止する必要が有り、且つ其の著作者出版者は、刑法上の風俗壞亂罪として所罰する必要が有るが、其の程度に至らない作品に付いては、敢て全然發賣を禁止するまでの必要の無いものが有る。併しそれ等のものと雖も、公然之を廣告し、又は店頭に陳列することは、甚だ好ましくないものがあるから、其の程度のものに對しては、單に廣告及び陳列を禁止することが出來るやうにすることは、適當なる一の取締法であらうと思ふ。

公の秩序に關する事項に付いては、具體的に事項を限定列記することが、殊に必要である。何となれば、何が公の秩序を害するかは、各人の主觀に依り、認定の標準を異にすることが殊に甚しいからである。其の列記事項は、成るべく狹く、眞に已むを得ない事項にのみ限りたい。「國體ヲ變革スルコト、皇室ノ尊嚴ヲ冒瀆スルコト、犯罪ヲ煽動スルコト、國家ノ存立ヲ否定スルコト」くらゐに止めて然るべきであらう。

第二に、禁止事項を掲載した出版物に付いては、發賣を禁止

し得べきものとすることは、當然であり、其の禁止權を有する者も、現行法の如く內務大臣とするのが、當然である。

けれども內務大臣の發賣禁止の處分に對しては、必ず訴訟に依つて之を抗爭し得べきものとせられねばならぬ。

現行法の如く、全然訴訟が許されないで、內務大臣の處分が最終の決定であるといふことであれば、假令法律を以て禁止事項を列記限定したとしても、其の列記事項に該當するや否やを認定する絕對の權力が內務大臣に存することとなり、而して絕對の權力ある者は必然に其の權力を濫用する傾向あることは、避け難い所であるから、禁止事項を限定したことの保障は、甚だ不確實となり、結局は現在の狀態と大差なきものとなるを免れないことは、容易に之を想像することが出來る。

權力の濫用を防ぐ爲には、必ず獨立公平なる審判機關に依つて、其の果して禁止事項に該當するや否やを、再審査し得べきものとせられねばならぬ。

其の審判機關を如何にすべきかは、攻究を要する問題で、特別の文藝審査院を設けることも一案であるが、それは豫算の關係上實現が困難であり、事件數から言つても、特にそれが爲に特別の機關を設けるほどに、事件が多いであらうとは思はれぬから、やはり、普通の行政事件と同樣に、行政裁判所の權限に屬せしめ、發賣禁止を受けた者は、行政裁判所に出訴して、之を爭ふことを得るやうにするのが、最も適當であらうと思ふ。

唯若し前述のやうに禁止事項を狹く限定すると、それは同時に犯罪として刑罰に處せらるべき事項となり、隨つて若し發賣禁止の審理を行政裁判所の權限とすると、其の結果は、刑事裁判所では無罪の宣告が有つたに拘らず、行政裁判所では發賣禁止を正當なりとし、又は反對に、刑事裁判所では有罪とし、行政裁判所では發賣禁止を違法とするやうな、二の裁判が相衝突する結果を生じ得ることは、避け難い所であるが、併し刑罰と行政上の取締とは、其の見地を異にするものであるから、此の衝突は、必ずしも忌むには及ばぬであらう。

行政裁判法の改正は、目下法制審議會に於いて調査中で、自分も小委員の一人として、それに關係して居るのであるが、委員會案としては、出版物の發賣禁止に對し、行政訴訟を提起し得べきものとして居る。けれども、此の委員會案が果してそのまゝ通過するや否やも未決の問題であり、假令通過するとしても、之を法律案として議會に提出することは、今年の議會には到底間に合ひさうではないから、それとは關係なく、出版法及び新聞紙法の改正に依つて、成るべく速に、少くとも發賣禁止に對する行政訴訟の途だけでも、開きたいものと思ふ。

第三に、現行の新聞紙法には、新聞紙に關しては、法律が直接に掲載を禁止して居る事項の外に、檢事の命令を以て、掲載の差止めを爲し得べきことが認められて居り、而もそれが頗る頻繁に實行せられて居るが、是れは宜しく全廢せらるべきものである。

此の如き權力こそ、最も濫用の虞あるもので、若し此の如き掲載差止めの權能を認むるならば、法律を以て禁止事項を列記限定することが、全く無意味とならねばならぬ。

且つ、現に社會に起つた事實は、社會は之を知るの權利が有る。現に起つた事實にも拘らず、その報道を禁止し、社會をして起らなかつたものと信ぜしむることは、社會を欺瞞するものである。是れ國家が自ら虚僞を以て政策とし、社會を欺くことゝなるであらう。

を、新聞紙に强制するものに外ならぬ。此の如きは唯戰時に際し國家の存亡が爭はれる場合にのみ許さるべきことで、平時に於いては、許さるべき事柄ではなく、又決して善良なる結果を得る所以ではない。

勿論、人間の模倣性の結果として、善行にもせよ惡行にもせよ、傳染力を有することは、爭ふべからざる所で、それが新聞紙に報道せらるゝ結果として、往々模倣者を生じ、隨つて事柄に依つては、公然報道せられない方が望ましい場合の有ることは、認めねばならぬけれども、それは他の手段を以て防止するの外ないもので、それが爲に新聞紙の掲載を禁止し、社會を欺瞞するの結果を生ずることは、其の害却て一層甚しいものが有

結局は經濟的支配關係

大森義太郎

最近、發賣禁止が目立つて頻繁に起るので、また新しく各方面の注意を惹いてきた。ところで、この發賣禁止といつたふうの、いはゆる政府の措置なるものは、一體、どんな事實上の根據をもつてゐるのか。我々はまづそれを考へて見る必要があら

う。

現代の社會は階級對立の上に打立てられてゐる。これは誰でも知つてをる筈だ。そして、その基礎をなすものは經濟上における支配――被支配の關係である。他のすべての社會關係は、この基本的な經濟上の關係に對應し、それを確保するやうにできてゐる。法律、政治が、第一に、この任務をもつてゐる。さらには、學問、思想、藝術などの、いはゆる文化についても、同樣のことが見られる。これは當然のことで、經濟上では支配階級であるものが、政治上では被支配者だなどゝいふことは、到底ありえない話である。かくして、現代における支配階級たる資本家階級はその支配を續ける必要上それ自身の學問、思想、藝術を社會全般に强ひなければならない。例へば、その支配を殆くするやうな思想は徹底的に取締らねばならない。だからして、…………

…………るわけである。藝術の場合についても、その間に多少の違ひはあるにせよ、ある種のものをば取締り、これに…………

…………のは、同じ理由からである。この場合には、多く道德上の見地が問題になるのだが、それはブルジョア道德の見地であるにほかならない

發賣禁止、或は廣くいつて種々の取締がかうした事實上の根據をもつ限り、それは資本主義社會においては常に行はれる。また行はれたのである。たゞ、やゝ緩いやうに見えたのは、新興の資本主義が、封建制の殘滓を掃蕩しようとして戰てゐた時代、自由主義の時代のことだけである。その以後は、殊に、被支配階級たる無産階級がその勢力を增してくるのにつれて、無産階級がその獨自の學問、思想、藝術をもつてくるのにつれて、…………

…………になれば、さらに激しさを加へることは云ふまでもない。…………

…………の特色は、絕對主義であり、極端なる干涉主義であることである。…………ようとしてゐる。それを、資本家階級はあらゆる强權を以つても支へようとする。この努力は、基本的な經濟關係を維持する役目をもつてゐる法律、政治、文化の方面に强く現はれる。これが…………

…………

…………

…………きないのだ。

これだけの事實の見据ゑがつけば、我々が發賣禁止問題に對してどうしたらよいかといふことが直ぐに出て來る。まづ、空

疏な正義論などを振翳すことの、いかに馬鹿氣てゐるかゞわからう。いま見たやうに、いろいろな政府の措置は充分な經濟上の根抵をもつてゐるのである。これに向つて下手な說教などは何の役にも立つ筈がない。同時に、內閣が變つたら、取締りも變るだらうなど丶考へるのは、取締りの經濟的根據を知らない、そして日本の資本主義の形勢に暗い、魯鈍な議論である。……………………ところで、操つてゐる人が同じなら、いつまでも同じことだ。

また自由主義時代に見られた「自由」といふやうな思想を眞面目に持出して、發賣禁止に抗議するのは、丁度、現在のこの獨占經濟の時代に疎い自由競爭を主張するのと同じやうに、空想的でもあれば、反動的でもある。それは小ブルジョアの泣事にすぎない。たゞ、現在の日本についていふと、封建制の遺物が殘つてゐる。それで、これに眼を奪はれてしまつたものは、ここで自由主義を唱へる氣になる。が、しかし、その封建制の遺物なるものは、帝國主義にまで推し進められた資本主義と織り混ぜられてゐる。このことが大切なのである。それをたゞ封建的なものがあるからといつて、「自由」を主張するなどは大間違ひだ。我々……………に對すると同じ方法を以つて發賣禁止問題にも對しなければならない。

結局、發賣禁止が、既に述べたやうに、資本主義の階級對立に深く根を下ろしてゐる以上、この事實上の根柢を除き去らないうちは、完全には解決しえない。が、それだからといつて、この根柢を直接取り除くことを他の運動に委して置くだけで、發賣禁止問題そのものに對しては、何もしないでゐていゝといふのではない。

こゝで我々は言論の自由といふことが我々に對して重大な意義をもつことを考へねばならない。資本家階級に言論の自由を獨占されてゐるといふことは、我々の思想を發表することができないといふことである。從つて、我々の思想を以つて資本家階級の思想に對抗しえないといふことでもある。ところで、資本家階級の主張する思想、或は文化はその經濟的支配を確保しつゝあるものである。だからして、もしこの資本家階級の思想に打克ちえないならば、その經濟的支配を搖り動かすべき第一步を踏出しえないわけである。しかも、經濟的支配關係を除きえない間は、いま假りに發賣禁止といふ問題だけに限つて見ても、決定的にこれを解決することができない。から考へるならば、言論の自由といふことは決して等閑に附しえない事柄である。我々はどこまでも抗爭しなければならない。

なほまた、我々はこの問題を別な方面から利用することがで

きる。現在、當局は公平なる第三者たることを標榜してゐる。これが單なる表面上だけにすぎないことは、我々には見え透いたことだが、しかし、大衆のうちには、まだこんな誤魔化しに乘ぜられてゐるものがないではない。さうした一部の大衆に、當局とは眞實にはどんなものだかを、曝露するためにこの問題はいい手段である。最近の例によつてわかるやうに、當局の取締方針なるものは全然出鱈目である。これに對して、その方針の明示を主張すべきである。この求めに應じないのは、當局が單なる思ひつきや氣まぐれでかゝる問題を取扱つてゐることの證據である。また、もしその方針なるものを發表したとすれば、我々はそれを通じて、當局が資本家階級の利益だけを取締りの標準にしてゐることを容易に明かにしうるであらう。かくて當局がいかなるものであるかを、事實について大衆にさらに知らしめることができる。

なほ注意して置きたいことは、前に述べたやうに、日本の資本主義は封建的なものを殘してゐる。そこで日本の資本家階級は、これと鬪ふべき必要を時に感じる。そして、かうした思想を代表してゐるのが急進ブルジョアである。我々は發賣禁止問題などについては、かゝる資本家階級の必要を利用すべきである。たゞ、それはどこまでも利用である。

最後に、運動の方法について具體的にいへば、これを言論の自由の問題として、同じやうな意義をもつところの集會、結社の自由の問題と共に勞働農民黨の活動によるべきである。それはこの黨にとつてかなりよい鬪爭題目であらう。

（一九二六・七・三一）

發賣禁止について

正宗白鳥

「改造」の支那號に寄稿した私の小說が、一行ばかり削られてゐるのを、山本氏に注意されてはじめて知つた。數十年の文壇生涯に於て、私の書いたものが檢閱掛の技手にかゝつたのは今度がはじめてなのである。檢閱の目がこれまでよりも峻酷になつ

たのであらうか。

私は今まで、禁止の刑を恐れてつねに筆を愼んでゐた譯ではなかつたが、肉感の刺戟に富んだ者を書きたくはなかつたので、自から刑を免れてゐた。多くの作家のやうに、自己苦心の作品が禁止の厄に會つた經驗がないのだから、禁止問題に對する憤懣の實感が强くない。しかし、言論文章に對する當局者の取締がもつと寛大であつたなら、私ももつと異つた材料を突込んで書きたいと思ふことがないでもない。

共同生活を營んでゐる限り、言論の絕對自由は有り得べきことでなく、現今のロシア政府の如きも、自己の政策實行の邪魔になるやうな言論は極度に禁壓してゐるらしい。文學者自身でさへ爲政者の意を迎へたやうな作品を書いてゐるらしい。德川時代の言論壓迫も、革命前のロシア、あるひは革命後のロシアに讓らぬほどに酷烈であつた。天下泰平を唄つてゐた戯作家でさへ、閉門や手錠の刑に處せられた。

由來、人間は自分に反對する者の言論の壓迫を好むもので、强者は必ず弱者の自由な振舞を好まない。歷史を顧るまでもなく、現今の日常生活に於て、我々は絕えずその實例を見てゐる。

さういふ通有の壓迫癖をもつてゐる人間に、圖書檢閱の職權を與へて、自在に振舞はせたなら、文筆業者が安心して筆を執れないのは當然である。出版業者の損失が、少數の檢閱掛の氣まぐれから起るといふ結果になるのである。作者や雜誌業者などが結束して立つて、不條理な闇討を防がうとするのはあたり前で、小說家協會が出來た當時には、第一にかういふ問題に身を入れるべき筈であつた。

今回は取締りに對し、作家と出版者側との望んでゐる條件の立案はどうであるか、私はまだ知らないが、檢閱掛の專斷に圖書禁止の全權を任かせないで、禁止問題の起つた時に、他の幾人かの有力者をして審査してその是非を定めさせるやうなことも、必要な條件になつてゐるのではあるまいか。それはいゝことだが、鑑定の任に當るものが、官僚から出るにしても民間の學者から出るにしても、それ等の人々の審査の目が、果して今の檢閱官よりも寛大であらうかと、私は危んでゐる。我々は發賣禁止の法案が改められても、決して執筆の自由の程度を非常に期待してはなるまい。闇討の泣寢入りを免れるくらゐを獲物とするに止まるくらゐであらう。

私は先日　西鶴の「一代男」を讀んだが　これなどは長い間の發賣禁止を解除したらいゝと思つた。ところ／＼〇〇や、、にしてゐるから却つて讀者に變な感じを起させるので、現代の小說に比べると遙かに難解な文章である西鶴が讀めるほどの讀

者なら、あのくらゐのことで心を汚し風俗を紊す恐れのある害はない。禁止書物になつてゐるため、却つて低級の讀者の好奇心を惹いて、強いて淫靡のものにしてしまはれるのだ。

しかし、明治政府の手で禁止されことは西鶴に取つて不幸ではなかつた。西鶴に限らず「國禁の本を讀む」といふことは、私などには興味になつてゐる。大びらの戀よりも人目を忍んだ戀に面白味があるやうなものだ。

發賣禁止について思ひ出したのは、我々現代の文學者の作品が、國定教科書などに無斷で取入れられることである。私のものは教科書向きではないのでさして採用されてはゐないやうだが、それでも二三はどれかに入つてゐることは、學生の話によつて知つてゐる。無論編纂者から何等の通知もなかつた。他の作家についてもさうであらう。有馬武郎氏のものは例の事件があつてから風教に害があるとされて、教科書から削除されたと聞いたことがあつたが　全體人の物を無斷で使用して置きながらあとで、削除とか何とか、ケチをつけるのは、教育者として不都合ではないか。……全體人の苦心の作品を無斷で利用することは、文部省あたりの道德では正しきこととなつてゐるのであるか。

發賣禁止問題に就いて

藤森成吉

私の作を機緣として立つて下さつた事に對して、文藝家協會初め雜誌協會のかたがたに深謝します。御骨折りを濟まなくさへ思ひます。

が、問題は、無論私だけの事ではありません。現在の法律乃至檢閱の不合理については、なぜもツと前に運動が起されてゐなかつたかを、むしろ怪訝に堪えません。これほどの亂暴、これほどの損害に對して、「言論の自由」を保證された何十年間を、ただ泣き寢入りに過して來るべき筈ではなかつたと思ひま

す——。

私達文筆の士——殊に藝術家の赤裸に望むところは、言論文筆の「絶對自由」です。藝術の如きは、實はただその境地に於いてのみ成り立ち得る世界です。もし眞に一國の文運に志ある當局者なら、必ず此の事を認容するでせう。かう云へば或は、治安風教の取締りを奈何、と云ふ人があるかも知れません。でなくてさへ不羈な藝術が、どんなにか放恣になるだらう、と杞憂する心配症の人があるかも知れません。が、憂ふるをやめよ。藝術はそれ自身の約束を持ち、儼たる内的規律を持つ。もしそれ等から、あまりに逸脱する種類の物があつたら、その時こそ遠慮なく取り締るべきです。ただ、その取り締り官は、あくまで深い藝術的素養を持つ者でなくてはなりません。

こんな事は、果して夢想に過ぎないでせうか? 否、いつかは——然も決して多くを要しない將來に、かうした時代は實現されるでせう。現在でさへ、苟くも藝術に理解と興味を持つ士は、皆暗々裏にその自由性を確認してゐます。一見空想の如くして、これは實は藝術の現未の明瞭な規準を指し示したに過ぎません。

私達は、藝術に志した時から實に此の信念の上に立ちます。が、假りに、現在の如き過渡期の——或は×××××××××××××場合に、かくの如き理想が單なる理想に過ぎないとなら、私達は、その意味の藝術の「相對的自由」の最大限度を要求する者です。最大限度とは、如何に要求しても足りない事の別言です。何故なら、その自由が多ければ多いだけ、私達はヨリ充分に生きる事が出來るからです。私達の依つて以て立つ根本理由だからです。私達と言ふのが目障りなら、藝術の藝術たる所以だからです。

この能ふかぎりの自由は、然しながら今與へられてゐるでせうか? 否、その代りに、能ふかぎりの不自由が與へられてをります。明治政府の依つて立つた大標識の一つ、「言論の自由」は、すでに名のみです。言論は、たゞ言論と云ふ形だけを許されてゐると云つても過言ではありません。

それとも、發賣禁止或は上演禁止處分について、行政裁判權さへも與へられてゐない、などゝ云ふ事が滑稽でないでせうか。「言論表現の自由は與へる。が、禁じたら發言の權利はない。」それは明瞭すぎる論理錯誤です。子供欺しだと云つても不當ではありません。もし「言論の自由」に對して眞に誠意があつたら、又あるなら、當然これは附帶さるべき保證ではありませんか。もつともつと瑣細な、又馬鹿々々しい自由に對してすら、立派に、又充分に訴訟の自由を認め、裁判權の行使を承諾

してゐるではありませんか。一國の學術文運の問題が、それほどの細事だけにすら尊重と考慮に値ひしないでせうか?

冷靜に觀て、今の制度と手口は、全く二十世紀文明時代の事實とは考へられません。宛たる封建的遺風です。純然たる斬捨御免です。丁度古の武士のやうに、たゞ官であるが故にどんなに斬つても構はない、と云つた態度です。むしろ、大いに斬る事によつてのみ官の威權を示すに足ると考へてゐるのではないかと思ふばかりです。人民は××××べきもの、と內達でもされてゐるのではないでせうか?――然もこれが、一國文化の華たる言論藝術の分野にひろげられてゐると云ふ事は、全く天下の奇觀と云はざるを得ません。

然し、問題は更に一つ手前にさへあります。もし眞に學藝を尊重するなら、どうして係り官にその專門家を置かないのでせう?たとへその批判が常に完全を期せられずとも、たゞこれに依つてのみ當局の誠意の示されるべきではなかつたでせうか?であつてこそ、天下の肯定と信任を得るに足る公明ではないでせうか?

前の告訴權と同じく、外の技術部門では、尠くともこれを以て原則としてゐるではありませんか? 學術藝文の事は、それほど專門的ではないと云ふのでせうか? そんな理由は成り立ちません。一方に一般の利用鑑賞を要求しながら、他方には特殊な專門的知識を必要とする事、他の所謂產業的部門と少しも變るところはありません。實は、檢閱者は單なる專門家でも不充分です。大勢の代表者であつてこそ、初めて民意政治の實は徹底します。

芳賀矢一博士が嘗て大いに法科萬能の弊を非難された事は、知る人にはなほ鮮かな印象でせう。まことに官僚政治の餘弊を承けて、今なほ法科が殊に官廳には專權を振ひ過ぎてゐます或は、法律の問題は法科出身でなければわからないではないか、と云ふかも知れません。が、法規の事位は、少し調べさへすれば誰でも容易に運用出來ます。そんな云はば末事は、又いくらでも下吏にさせれば濟みます。最も重要な事は、法の內容となるべき事實と精神の批判が誤つてゐないか、どうかの問題です。法律は、單に消極主義にとどまるべきものでもないでせう。そしてさうした根本的素養は――殊に言論藝術の場合は――尠くとも現在の學校制度では法科に望まるべきではありません。文科ですら不充分かも知れません。そんなら立派な民間の代表者を舉げるがいい。理解乃至教養をすら第一の眼目に置かない現在の檢閱制度などは要路自ら一國の學藝を侮蔑し、その興隆發達を更に念頭に置いてゐないものだ、と云はれても辯解

の餘地がないでせう。

　これらの事は、皆現在の法律乃至制度の自己矛盾です。文明國の一つとして、他の工場制度等と同じく、外國に對しても恥づべき筈の事です。その一つを擧げらけても文化國の實が何處にあるかの詰問を免れません。一度拔かれた劍は、そのまま收めらるべきではないでせう。かうした運動が初まつた事自身、すでに時代がその弊害と惡風に堪えられなくなつた事の表現でなければなりません。我が國の文化消長の重大問題として私は此を事件のすべてを人々が考へ、その一日も早き改善に努力擧援される事を願ひます。

1926・8

發賣禁止のみならんや

山本有三

　われ／＼が幾日も幾夜も、場合によつては幾月も幾年もかゝつてやつと生み出した作品を、一二の事務官の判斷次第で忽ちその發表を封ぜられてしまひ、しかもそれに對してどんな正當な理由があつても、どんな立派な抗辯の材料があつても、一切控訴の道がないといふことは、往時の斬捨御免にも增して、非立憲なことである。どうしてこんな理不盡なことが、今日もなほ行はれてゐるのか。平氣でゐる官憲も官憲だが、幾百回、幾千回、發賣禁止をうけた文筆業者、新聞雜誌社、出版書肆もまた餘りに呑氣過ぎたといへやう。彼等は禁止をくう度に、必ずぶつ／＼いつたには相違ないが、堂々と公に抗議したものは殆ないやうに思ふ。それは抗議する道が開けてゐなかつたからにも據るが、その開けてゐないといふことを大聲にどなつた者は一人もなかつた。それが今度はじめてわめき立てられたのである。今時分やうやくわめき出すとは隨分われ／＼も氣がきかない話であるが、しかし、まあ、遲いながらも公然と當局に突つかかつて行つたことは惡いことではない。一つは時代がさうさせるので、昔は地頭には勝てぬものとして、默つてゐたのかもしれぬが、兎に角一度叫びをあげた以上は、この叫びを十分に世

間に、官憲に、通じさせなくつてはいけない。

闇打式發賣禁止の不當を鳴らして、文藝家協會、雜誌協會、出版協會が聯合して立つたことは大分世間の輿論を喚起したやうに思ふが、しかしかうした不當の禁止の爲方はたゞひとり發賣禁止の時だけではないのである。それは上演禁止、上映禁止の場合もさうであり、更に美術品の陳列撤廢の場合もさうである。これ等の場合に於いても、發賣禁止の際と全く同樣に、官憲の二三の人々によつて、專斷的に決定され、決定されたが最後、禁止された側に、如何なる正しい辯明があらうとも、何處に向つても一切訴へるところがないのである。殊に上演、上映の際は、その檢閲方針は發賣禁止の時よりも遙に苛酷なのであるから一層憤慨せざるを得ない。それはわれ〳〵と雖、禁止方針を絕對に撤廢せよと叫ぶのではない。もちろん、理想をいへば、禁止どころか、檢閲を受けることさへ不愉快であるが、それは現在の實生活に於いては望めないことであるから、場合によつて、事實禁止に價するものであつたら、われ〳〵もそれを承認しないではない。けれども誰が見ても差支へないものを、殊更異を立てゝ、さうでもしなかつたら、自分が檢閲をやつてゐるといふことが………とまらないことを恐るゝかの如くに、むやみに拔き取つたり、切り取つたり、或は闇から闇に葬るやうなことをするのは、決して役人のすべきことではないと思ふ。さういふ物騷な人間がゐたら取押へることこそ役人の務めでなければならない。ところがそれがかなりあべこべになつてゐるのだから悲しくなる。

上演、上映、鑑賞禁止は發賣禁止の場合と全くその事情を一にしてゐるのであるから、われ〳〵は引くるめてその不當を鳴らすのが當然と思ふ。發賣禁止の方はかなり叫ばれてゐるが、この方は殆ど論ぜられてゐないからちよつとこゝに一言する次第である。もつとも過日委員として內相と會見した節、自分はこの問題にも觸れてはおいたけれども、當面に壓迫を受けてゐるところの美術家、演劇當事者、映畫關係者の各團體この好機を逸せず奮起したらいゝと思ふ。

思想法制の基礎としての出版の自由とその制限

榛村專一

口

言論、著作、出版、興行の自由及び其の制限並に精神的產出物の保護及び其の流通に關する一切の法令を概括して假に思想法規と名づけやうと思ふ。思想法規に屬する主なる現行法令は出版法、新聞紙法、著作權法、興行の取締に關する各地方の警察命令例へば大正十年七月警視廳令第十五號興行場及興行取締規則の如きものである。其他思想の取締に關する法令や我が國にはまだ制定を見ないが出版權に關する出版權法の如きも亦之に屬すべきものである。是等の公法、私法に亘る一群の法令は互に相俟つてその國、その時代の學問、藝術その他百般の文化に對し特殊の關係に立ち且つ法理上獨自の特色を有して居るものである。即ち思想法規に屬する各種の法令は孰れもその國その時代の思想生活や社會事情や政治組織、思想政策などと密接の關係がある。從つて思想法規に屬する法令の制定、改廢並に解釋、運用に付ては特に愼重の注意を以てその國、其の時代の文化の進展に絕えず適應せしめなければならない。殊に新鮮にして活力ある思想と感情とに支配せらる民族の營む思想生活、社會生活は實に暫くも停滯しない。故に斯る民族の生活に適應するが爲めには思想法規は絕えず敏活に變遷しなければならない筈である。この點から思想法規は一方に於て國際的、全人類的であるべき方面を有するに拘らず他方に於てはその國、その時代に依つて異るべき相對的のものであり而も變遷の早いものであると謂ふ一の特色が成立する。

右に述べたやうに思想法規は本來變遷の早かるべきことを特色とするものである。然るに我が國に於ては思想法規に屬する法令の或るものはその必要を感ずるに拘らず未だ制定せられず

（例へば出版權法、興業物法）又或るものは古い時代の制定に係り其後多く顧みられず舊態依然として今日に及んで居る。現に出版法は明治二十六年の制定に係りその後一回も改正せられて居らぬ。著作權法は明治三十二年領事裁判權撤去の必要に迫られ遽に制定したものでその後少しづゝ二回の姑息な改正を經たけれども今日から見れば尙ほ極めて不備である。是等の法律の制定が古いと謂ふこと自身が既に今日から見て是等の法律の内容上並に立法技術上の不當、不備を語るに十分である。新聞紙法は明治三十年の新聞紙條例を改正して明治四十二年に制定したものであるが實は甚だしい改惡であると謂ふのが從來一般の說である。そこで漸次是等の思想法規の改正が重要せられ先年國民黨の新聞紙法改正案の提出以來同法の改正案が屢々繰り返されたるを始め、最近には文藝家協會の著作權法改正運動があり、又出版業者の間には夙に出版權確立のため出版權法制定運動が起つて居ると謂ふことであり、又今回出版自由の擴張の爲めに文藝家並に出版業者等の聯合運動となつた譯である。當局に於ても新聞紙法並に出版法の統一及び改正の必要を認め兩法を打つて一丸とした出版物法案を今春の議會に提出するに至つた次第である。加之歐洲大戰以來思想界の世界的動搖に伴ひ各國共に過激思想の恐怖を感じ、言論、思想の取締に關する法令の制定を見たので、出版の自由と謂ふ比較的古い題目が相當の華かさを以て再び新しい題目として世界的に復活して來た。我國に於ても同樣襲に過激社會運動取締法案の提出となり、治安維持法の制定となり、其の間この題目に付て盛に論議せられた。

右の次第であるから思想法規の一般的、統一的研究は理論上可能であるばかりでなく、今や實際上必要であり、然も學問的興味の點から謂ふても彼の勞働法制と共に人格權的研究の共通の基礎の上に立つて法學界の新分野を占むべき興味ある法域であると信ずる。從來この方面の研究が比較的閑却せられて居つたのは遺憾である。

口

思想法制の骨子は謂ふまでもなくその一は思想の自由換言すればその研究及び公表の自由の制限であり、その二は思想的產出物の保護である。前者は主として出版法及び新聞紙法の關する所であり、後者は主として著作權法の關する所である。此の兩者は相互に關聯するのみならず相俟つて思想法制をして獨自の組織と體系とを維持せしむる基礎である。思想的產出物の保護に付ては他の機會に讓り玆には所謂思想の自由及びその制限に付て最も簡單に概說しやうと思ふ。

思想の自由は之を出版の自由（廣義）と謂ふ方がよいかも知れない。兎に角フランス人權宣言以來孰れの國の憲法に於ても之を保障して居る。我が憲法に於ても「日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ言論著作印行集會及結社ノ自由ヲ有ス」と規定してゐる。露西亞の憲法にも「勞働者ニ對シテ言論ノ自由ヲ確保スルガ爲ニ露西亞社會主義聯邦「ソヴイエツト」共和國ハ出版（Press）ノ資本ニ從屬スルコトヲ全廢シ、新聞、冊子、書籍等ノ刊行ニ要スル一切ノ技術的及物質的手段ヲ勞働階級及極貧農民ノ手ニ歸セシメ且ツ全國ヲ通シテ此等出版物ノ自由ナル頒布ヲ保障ス」と謂ふ規定がある。（譯文土橋氏世界各國憲法に據る）思想の自由は憲法に依り原則として保障せられて居るが其の自由は出版法、新聞紙法其の他の法律に依り夫れ夫れの理由に基き夫れ夫れの方法に依り可なり制限せられて居る。出版法、新聞紙法に依る制限の内にも種々ある。發行の許可又は屆出、保證金の納付其他の發行手續の規定に依つても制限せられる譯であるが玆では專ら出版法、新聞紙法に於ける實質的掲載禁止事項に依る制限並に其の違反に對する制裁としての行政處分に關してのみ考察することとする。

現行出版法も新聞紙法も實質的掲載禁止事項に關する直接の規定はないが秩序紊亂の事項並に風俗壞亂の事項に付ては一定の行政處分（出版法第十九條、新聞紙法第二十三條）及び司法處分を爲すべきものとしてゐるからこの種の事項が所謂實質的掲載禁止事項に屬することは言を俟たぬ。又出版法に於ても新聞紙法に於ても違法なる内容を有する出版物に對する制裁として規定して居る所の行政處分は出版物の發賣頒布の禁止及び其差押である。尤も、出版物の出版又は發行自體の差止を命ずる場合もあるけれども是は無屆發行其他の發行手續の違反に對する制裁としての行政處分である。出版物の内容が秩序を紊亂し風俗を壞亂する虞ある場合に司法處分即ち著作者、發行者、編輯者等に對する處罰の外に右の行政處分を認めたのは出版物夫れ自身に社會的違法性を帶有してゐるので其の頒布に因つて益々國家社會の法益の侵害の擴大することを敏速に防止しやうとする趣旨に外ならぬ。

右に述べたやうに出版物の取締に關し現行出版法並に新聞紙法の如く廣汎且つ强力なる行政處分を認めた立法例はない。佛國に於ては風俗壞亂の文書圖畫は行政處分を以て差押へることを認めてゐるが出版物一般に付ては頒布の禁止を認めて居ない。獨逸に於ても發賣頒布禁止の處分は一般に之を認めてゐないが或特別の場合に限り裁判所の命令に依らずして出版物を假に差押へ得ることを認めてゐる。但し其の場合の假の差押は二十四

時間以内に檢事の請求に因り裁判所之を確定し又は解除する決定を爲すこととなつてゐる。現行出版法、新聞紙法が前述の如く廣汎且つ强力なる行政處分を認めたのは恐らく明治初年に於ける封建的思想を背景とした言論の苛酷なる壓迫的取締に由來するもので、これは我が出版法制を特色付ける點であると同時に大いに考究、改正の餘地ある點である。そこで掲載禁止事項に依る出版自由の制限並に其の制限の違反に對する制裁としての行政處分に付き我が國に於ける沿革を一瞥するに、明治八年出版條例第四條には草稿又は納本を檢査して「世治ニ害アル者」と認むるときは「出版又ハ發賣ヲ禁止シ或ハ刻版ヲ毀タシムルコト」あるべき旨を規定し、明治十六年改正新聞紙條例第十四條には新聞紙の記載事項が「治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スル者」と認むる時は内務卿は「發行ヲ禁止若クハ停止スルコト」を得る旨を規定し、同條例第十六條には新聞紙の發行を禁止し若くは停止したときは内務卿は其新聞紙を「差押ヘ又ハ發賣ヲ禁止シ」其情重き者に付ては「印刷器を差押フルコト」を得る旨を規定し、明治二十年の新聞紙條例もこの種の行政處分に付ては同樣の規定を爲してゐる。又同年（明治二十年）の改正出版條例第十六條には「治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノ」と認むる文書圖書を出版した時は内務大臣は「發賣頒布ヲ禁止シ」「刻板印本ヲ差押フルコト」を得る旨を規定し明治二十六年制定の現行法に及んでゐる。新聞紙條例に付てはその後明治三十年一部改正の際行政處分としての發行禁止及停止を廢して明治四十三年制定の現行法に及んでゐるのである。

□

實質的掲載禁止事項に依る制限並に其違反に對する行政處分に付て現行法の規定の改正すべき點は多々あるけれども、第一には禁止事項の具體的例示が必要であると思ふ。秩序紊亂、風俗壞亂の事項と謂ふのみでは餘りに抽象的で意義を捕捉し難く且つ不當に廣義に解釋され易い。この點に付いて眞僞は知らないが、外骨氏の近著明治密偵史に面白い話が載つてゐる。寺内伯在世當時萬朝報が龜裂の入つたビリケンの頭に桶屋髷の御用議員が箍を箝めて居る戯畫を載せたので同編輯者は警視廳に呼び出されて將來再同樣の畫を載せれば風俗壞亂として處分するぞと威嚇された」と謂ふのである。尤も今春發表せられた政府の出版物法案には禁止事項として（一）皇室の尊嚴を冒瀆する事項、（二）國體を變革せむとする事項、（三）憲法上の政治組織の大綱又は私有財産制度を不法に變革せんとする事項、（四）軍事又は外交の機密に關し著しく帝國の利益を害する事項、（五）犯罪を煽動し若しくは曲庇し又は刑事被告人若は被疑者を賞恤

し若は陷害する事項、（六）虚僞又は誇大の事項にして著しく社會の不安を惹起すべきもの、（七）亂倫、猥褻、殘忍其他著しく善良の風俗を害する事項と謂ふやうに稍具體的に列擧して居る。この列擧の事項に付ても尚ほ議論は免れないのであるけれども適當に列擧することは實際困難なことであるから止むを得ない。第二には出版物の發賣頒布禁止若しくは差押の行政處分を爲す必要を認むる場合に於ても出版物全體がその處分を必要とする場合は尠い。故に分割の出來る場合には實際その處分を必要とする部分のみに對して之を爲し其の他は當事者の自由に委すのが相當である。**この點も出版物法案に於ては獨佛の出版法規に倣ひ右の趣旨に改正されてゐる。**當然のことである。第三に最も重大なことは發賣頒布禁止及び差押の行政處分に對する救濟の方法を設くることである。現行法の制度に於ては實際不當なる行政處分に依つて出版者其の他の關係者の精神上、財産上の私益が如何に不當に侵害せられても之に對して不服の申立を爲し其の處分の取消しを求むる途が全くない。行政訴訟は一定の事項に限り之を許すものであるから右の行政處分に對して行政裁判所に出訴することは出來ない。出版物法案に於てもこの點は全然考慮されて居らない。然し如何にも不條理のことであるから何等かの方法に依つて處分の取消を求むる途を開くべきである。故に此の點の改正を要望する今回の文藝家、出版業者等の共同運動は大いに理由あるものと謂はねばならぬ。元來發賣頒布の禁止及び差押と謂ふが如き強力なる行政處分を行政官廳の自由裁量に委するのは不當であるから全然之を廢止し司法處分のみに依るべしと謂ふことも純理上正當であるかも知れない。然し緊急の場合には行政官廳に斯る權限を與へて置く方が必要且つ便利であるから之を存置すべしと謂ふのも亦理由がある。假に之を存置するとすれば斯る行政處分は憲法に依つて保**障せられた出版自由の非常なる制限であるから必ず一方に於て不服申立の方法を認むべきである。**その方法として行政訴訟を許すことも考へ得る方法であるけれども、これは手續が複雜で簡便に行かないのみならず健訟の弊を馳致する虞がある。この點に付て暗示を與へらるるのは獨逸著作權法に規定する鑑定局の制度である。鑑定局は獨逸著作權法に依れば著作權侵害に因る損害賠償の請求、僞作に係る部冊又は僞作の用に供し又は供せんとした裝置の破毀、右の部冊又は裝置を破毀する代りに著作權者に於て相當の補償を支拂ひ之を引受くる權利の認定等に關し仲裁々判所として辯論及び裁判を爲す權限を有するに過ぎない。發賣禁止、上演禁止等の行政處分の當否を判斷する權限を有するものではない。然し之に類した機關を新設し而も其の

委員には民間の知識經驗ある者をも參與せしめ簡易なる手續を以て著作權侵害事件、著作者と出版業者、劇場當事者間の訴訟等を調停又は裁決せしめ、同時に發賣頒布禁止及び差押の行政處分に對する當事者の不服申立に基きその處分の當否を判斷する權限を與へたならば適當ではないか。考慮すべき一方法であると思ふ。又獨逸出版物取締法に於けるが如く行政官廳の處分は凡て之を假の處分と爲し、その認可又は取消の權限を司法裁判所に認むるのも一方法たるを失はない。兎に角當局に於ても此の點に關して愼重に研究の上更に提出すべき出版物法案に於て適當の方法を設けられんことを切望する。若し夫れ不當なる行政處分に依つて蒙つた損害の補償の請求を認むべきか否かは國家賠償責任制度を確立すべきか否かの一般の問題に關聯することである。(十五、八、一〇)

反動政策と變態的對策を評す

小川未明

文藝家協會、出版協會、雜誌協會、この三者が共同して、內務大臣に對して、近年頻々たる發刊物禁止に關して、考慮を煩はす運動に出たることは、注目すべき事件であらうと考へます。

この運動の伸展するところ、那邊にまで及ぶかいま揣摩することはできませんが、結局忌諱に觸れた個處だけを削除して、發賣を許すとか、また、いまよりは係の人員を增して、內檢閱を許すとかいふ位にとゞまるならば、また、それを運動の主眼に置くならば、この三者の提携は、あまりに大袈裟に過ぎたと言はなければなりません。

書籍出版業者、雜誌發刊者の利益をも文藝業者が能ふかぎり扶けなければならぬのはいふまでもない。かくしてこそ、互の利益を圖ることができるからであります。けれど、この運動が、單に發刊物の禁止に伴ふ物質的の損害を防ぐだけに、止る

としたならば、その無形に及ぼすところ、思はぬ結果を生ずるかも知れない。即ち、これによつて、益々、作品の商品化的色彩を濃厚にせしめることこれです。

こゝに於て、私達は、先づ、この運動の起つた動機をしつかりと知つて置かなければならない。禁止によつて生ずる損害の防止か、また、眞理のための擁護か、また、その何れものために於てゞあるか。以上について考へを要するのである。

もとより、當面の問題は、禁止によつて、生じた物質上のことが原因をなせるには相違ないけれど、これを常に、內檢閲とか、部分の切取りとかいふことだけで、防止されると考へるのは淺見でなければなりません。なぜなら、取締の水準が常に不定であり、今後寛容であることよりも、時勢の傾向とともに、いよ／＼嚴になり行くものと推察されたならば、文運の隆盛は、根本的に期することができないからです。

故に、このたびの三協會共同の運動は、法律の改正によつて、言論、思想の取締を支配階級の獨裁より、幾分なりと緩和し、これに對して、民衆の意志をも表示し討議し得る程の、新しい機關の設置にまで至らなければ、無益であると言はなければならない。

これまで、內相一人の意見によつて、禁止し、若くは、認定するといふことが、眞理に對して、極めて無雜な仕方であつたことは異論のないことだ。だから、たとへこのたびのことを假りに、現內相一人の諒解を得たものとしても、事は決して、今後に於て、安心されるとは言へないでありませう。

私達は、協調的に文化の促進をはかることができれば、これに越した幸福はあるまいと考へられてゐます。それには、何れもが、眞理に對して謙遜であり、地位に依つて暴壓的であつてはならないでせう。けれど、はじめより、その立場に於て、はつきりと分れてゐたならば、いづれが正しきか否かを大衆の理性に問ふことの必要がなければならないでありませう。

少くなくも他は知らず、文筆に從事する士は正義と眞理に對して、この覺悟を持たなければならないと思ひます。

雜誌協會、出版協會が、文藝協會と共同の行動に出たことは、單に、出版物の禁止による物質上の損害を妨ぐためばかりのことではあるまい。もし、このことに止まる運動ならば、單獨に於てもなし得られる筈であつたと考へられるからです。

しかし、現在にあつて、言論、思想の絶對自由を要求しても可能なるべきか否かは、多く思慮を費すまでもないことであるが、尋常の程度の自由を要求するために團結することは、あながち難くないことであるばかりでなく、常に文化機關にたづさ

はる者の良心よりの發動たることに於て、寧ろ至當の行爲であるといへるのであります。

ただ、この當然にして、且つ至當なる要求すらが、はじめ吾人が考へる如くに、容易に解決できるか否かは疑はしいのである。

中には、かういふ說をなす者もある。安寧秩序を害する云々といふやうな思想問題に觸れることは避けて、このたびの場合は、單に風俗壞亂といふやうな、純文藝の立場に於て起る問題についてのみ當局と談ずれば、案外容易に解決されるであらうと。

凡ての文藝家が、既存文化の擁護者であるものならば、そして、藝術といふものが、所謂享樂すべき性質のものなるため、風俗人情の描寫にかぎられてゐるならば、風俗壞亂といふ事項は、討議さるべき唯一の問題であらうけれど、最近に至つては、文藝が、他の社會科學、政治、經濟、と共關して、人類の理想を目的として文化に盡し、各その分野に立ちて、より善き社會を造る使命を負へることを自覺せるからには、思想問題に觸れないでゐることはできなからうと思ひます。あながち、抽象的に、客觀的に、これを取扱ふといふことの相違だけで、また可否さるべき問題ではなからうと思ひます。

成程、當局の忌避するやうな事柄を、意識して取扱はなければ、無事にはちがひないが、眞理のために戰はず、常に妥協的な心理の持續に、果して、眞の藝術家としての氣魂が體現されるであらうか。場合によつては、成敗を顧みず正義のために戰はなければならないことは、いふまでもありません。

かう言つたら、誰も個人の自由を束縛するものはない。その人自から、戰はんとするならば、いつだつて戰つたがいゝであらうと云ふでありませう。さなきだに、作品が、純然たる商品化されてゐる今日、そして、著るしく商品化したる作品等は、金錢の前に、主張すべき權利をも主張せず、時に、良心の鞭をも忍んで、恐らく本意ならざるも筆を曲げてゐるものが少なくない。私達は、常に思ふが、集團といふものは、最も正しいことに味方する場合に限つてのみ存在の意義があるが、もしさうでなかつたら、却つて、禍を遺すものであると。なぜならば、安きに就て、利福を得んとする多數者のために、少數の眞理のために、邁進せんとする者を、組織的に壓迫する結果に陷入るからです。

このたびの文藝家協會、雜誌協會、出版協會、三者の聯結が、宣言と目的に重きを置かなければならぬ理由はこゝにある。資本家と流行作家の提携にあつたといふ誤解を遺したくないもの

です。そして、一つの產業を構成する、各部門の人々等によつて、經濟的から、眞理の上から、個人主義的な各自の立場を離れて、一國の文化的使命を果たすために、反動的なる支配階級に對して、組織的に抗爭すべく、穩健な、理性的な、良心の發動たるものでなければなりません。期するところは、思想諸問題の設定でもいゝ。法律の改正でもいゝ。また行政裁判を定められることでもいゝ。苟くも後進のために幸福の途を拓き、將來の文化のために貢獻される運動でなければなりません。

過日、第一回、文藝家協會、雜誌協會、兩者の幹事會に、打合せ會があつた際、自分もこれに列してゐたが、私は、內務大臣に對して、たゞ形式的にもせよ、雜誌協會、出版協會、文藝協會、合同の聯盟にて、一片の警告を發することは、社會の耳目をこの問題に集注せしむるためだけでも無益と思はないが、それ以上を期待しての運動ならば、餘程の決心がなければならないことゝ。踏み出して、半途に挫折することは、はじめよりなさゞるに如かずといふ意見を有したのでした。しかし、その時は、却つて、私の言つたことが、絕對論であり、理想論であると評されたやうに記憶してゐます。

絕對に言論、思想の自由を得るといふことは、私と雖もこれを豫期しないが、問題は、どうしてもこの點にまで觸れなければ收まらない。そして思ふに前途は遼い。この三者は、大局から見れば、共同の利益と損失には立つてゐるが、手近かに於ては、必ずしも各の希望することが一つとはいへない。極めて、小數の出版業者を除いて、言論、思想の自由のために、文筆業者と共同の戰線に立たうと覺悟する者が幾何ありませう。しかも、文筆業者に於ては、むしろこの方が第一義でなければならぬからです。

しかし、すでに、この運動は開始され、社會は、今やその成行を觀望することに、多少の興味を感じてゐるらしい。案外、この問題は、調達なる濱口內相の適宜の處置によつて、一時、解決されるかも知れないが、果して、その言に信賴していつまで安心されるかは、疑問であります。

東西、古今、何人も眞理の行程を遮ぎることはできなかつたが、また、その眞理は、偶然にして、伸張されたのでない。ある時は、參政權を得るために、また、言論の自由を得るために、幾何の被支配階級が、犧牲を拂はなければならなかつたか。

其處には、また、いかなる主義も、一つとして偶然に生れたのではなかつた。反動は、さらに反動を生むに至つたのである。自由主義者にして、社會主義者ならざるが故に、かうした

提言が容易に容れられるであらうと思ふ者があつたら、寧ろ、滑稽でありませう。何人も、はじめから、革命的には行かなかつた筈だからです。

さきに、當局を反動的なりと言つたのは、八月號の雜誌、「解放」「改造」「文藝戰線」「社會思想」を禁止したのでも言へるのでありますし、しかもこれをもつて、內相一人を反動政治家とばかりは言はれない。さう言へるなら、社會科學研究聯合會に對して、軍事教育問題に、苛辣であつたばかりでなく、いま、また學校の思想團を解散せんと企圖せるやに聞く文相の如きは、反動政治家中の反動的なるものと言へるでありませう。憂ふべきは、正直に、眞理に面して、信ずるところに向つて勇敢であるこれ等の青年は、恐らく青年中の最も將來を囑すべき分子なるのに、叉して、かうした取締りが要を得てゐるかゞ疑はれるのであります。このことは、別の場合に言ふとして、これがために、獨り文相のみが反動的なりとは言へなからうと思ふ。もとより、その人の反動的なるには相違ないが、このことは、獨り現內閣に限らず、何の政黨が出現したにせよ。彼等支配階級の根本に共通した心理と政策の改まらざるかぎりは、いかなる內相も文相も同じやうな態度に出ることに、大差がないと思はれます。そして、法律に、議會に、一段の進歩を來たし、水準を改めるまでには、思ふに、今後幾多の曲折を經なければならない。

故に、私は、このたびの運動が、眼前の小康を得るために意義があることよりも、文藝家並に、雜誌記者等が事實に眼醒めて、街頭に、一步を進めるに至つたことに對して眞に意義をば見出すものです。

——七月二十二日——

警察と民衆との鬪爭的對立

警察權と小作運動

片山哲

□

小作爭議に於ける小作人の團體運動は、小作爭議調停法が制定せられた時に於ても法律上少しも公認せられなかつた。之に反し勞働爭議に於ける勞働者の團體運動は、今回發布になつた勞働爭議調停法の制定に依つて完全に公認せられた譯である。勿論後者制定の際は治警十七條の廢止を伴つてゐるから、その意味が更に明白になつたわけである。しかし小作調停法と雖も、その性質上當然小作人の團體的行動を是認しなければならぬものである。處が實際はそうはゆかなかつた。矢張り小作爭議は違法のものであるとか、罪惡のものであるとか考へられて、小作人の團體行動即ち自己の要求を主張するために團結して地主と爭ふことを、今日の農村に於ける止むを得ざる現象なりとは少しも思はなかつた。小作調停法はたゞ理由の如何に係らず圓く仲直りをする法律だ位に、極めて簡單に考へてをつた。從つて小作運動に關與する警察官にも、小作調停法の價値が少しも徹底せず、爭議に對し唯漫然と示威運動を取締るが如き考へしかもたなかつたのである。

□

それが爲めに小作爭議には刑事被告事件が附物の樣に影の如く添つて來た。香川縣、岡山縣、熊本縣、千葉縣、新潟縣などその顯著なものである。是等は共に小作人の團體行動を違法視したる當然の結果だと謂はなければならぬ。小作調停法の制定

に依り、小作爭議に於ける小作人は地主に對し對等の取引關係で交渉をなし又は自由に相爭ふことを、法律上公に是認しなければならぬ順序になる。そうなれば小作人を不當に壓迫する既存法律は其價値を失ひ、當然廢止にしなければならぬ筈である。治警十七條第二項「耕作ノ目的ニ出ヅル土地賃貸借ノ條件ニ關シ承諾ヲ强ユルガ爲相手方ニ對シ暴行、脅迫シ若ハ公然誹毀スルコトヲ得ズ」の規定の如きは、小作調停法の制定と同時に消えなければならぬ法律である。それが漫然と勞働調停法の制定まで存續し來つたといふことは非常な矛盾である。この矛盾は實に警官をして小作爭議を違法視せしめた結果に到達する。

□

小作人地主間の經濟爭議に警察權が干與するといふことは實に時代錯誤である。もし小作人の行動が治安を紊す樣であるならば、それは刑法を以て充分に取締ることが出來る。特に小作運動だから之を別個に且つ嚴重に取締らなくてはならぬといふことは、警察權を以て小作運動を抑壓することになる。假りに具體的な取締方法が抑壓的にならなくとも、小作運動壓迫の法律が存在すること、それ自體が既に小作運動にとつての大なる脅威である。又かゝる彈壓法律が存在することは、行政警察と司法警察の混同を來し、何んでもかんでも刑事處罰を以て之を斷定せんとするの色彩を濃厚にするものである。それ故小作爭議をして經濟戰たるの常道に歸らしめるには、第一にかゝる彈壓法律を驅逐しなければならぬ。官僚的な處罰法や取締法規は爭議を邪道に導くもので、其結果や實に恐るべく悲しむべきものである、警察權は法律命令のまに／＼動くものである。彈壓法律存在の時代には、その法律を翳して公々然と小作人の集團行爲を壓迫することが出來たけれど、基本法律がなくなれば、警察權も兩階級に對し公平に活動しなければならぬ順序になる。普選の實施から治警十七條の廢止、勞働組合法の立案等、社會立法制定の機運が、如何に勞働階級の團體行動を正義化したか想像するに難くはない。この意味に於て勞働立法制定の機運は、警察權の民衆運動に對する態度を非常に緩和したことになる。又そうならなければならぬ筈である。勞働立法が昔の樣な勞働者保護法規とか取締法規でけなくして、純然たる團體運動の法的公認であるから、その經路を進むのはまことに當然のことである。

□

昨年の暮、千葉縣印旛郡船穗村で小作組合が小作料輕減問題

で、地主に要求條項を提出した、處が地主は全部之を拒絶した。そこで組合員は多衆で地主の門前に押しかけ「この惡地主を葬れ、我等に團結の力あり」などゝ叫び、勞農民歌を高唱し大いに示威運動をしたといふ事件がある。檢事はこの事件を治警十七條第二項によつて起訴した、第一審裁判所又之を是認し、被告に對し六ケ月から二ケ月以内に於て夫々懲役刑を課した。第二審に控訴中右處罰法條たる治警十七條は廢止になつた、被告達は法律の廢止により當然無罪になるべきものと考へてをつた所、第二審檢事は同一事實につき刑法の脅迫罪を以て處斷せられたき旨要求し第二審判決又之を容れ、各被告達に對し八十圓から三十圓迄の罰金刑を課した。事件は斯樣にして實刑を免れ金刑で終つたのであるが、同一事實に就てすら、法律の適用が異れば斯樣に刑罰が違つてくる。十七條に依れば重い、その重い理由は小作爭議を罪惡視してゐるからである。その惡法は幸ひにして廢止になつたけれども、小作爭議違法の觀念は可なり根强く警察官吏の頭に染込んでゐるから之を廢除することはなかく／＼困難である。從つて色々な刑事法規が出來るだけ廣く解釋せられて活用せられる。

□

民衆運動取締法規の主なるものを揭げて見よう。行政執行法（檢束に關する法）、違警罪即決令（明治十八年九月太政官布告）、治安警察法、警察犯處罰令、刑法中騷擾罪、公務執行妨害罪、脅迫罪等、其他に治安維持法あり最近實施になつた暴力行爲取締に關する法律などある。その中本年四月三十日から實施の暴力行爲取締法のことを一言したい。最近信州伊那電鐵會社に勞働爭議があつた、その際罷業團員が夜間に態度曖昧な從業員に對し同一行動をとり罷業團に加はるべきことを勸誘に行つた。その際多少の暴行脅迫があつた、警察官は直ちにこの事實を以て暴力行爲取締法に觸れるものとして檢擧し十數名のものが起訴せられた。第一審裁判所之を是認し首謀者三名に六月乃至八ケ月の實刑を課した。この暴力法は組織勞働者の團體行動には斷じて適用すべきものでない、適用するとすればそれは治警十七條の廢止を無意義ならしめる。暴力法提案の理由にもこの趣旨の立法精神がよく現はれてゐる。それにも拘らず斯樣なお門違いの法律を適用することは、時代の逆轉と謂はなければならぬ。

□

小作運動に對しても恐らくはこの暴力法が可なりの威力を振

うであらう。しかしながらそれは立法の精神を蹂躪し團體行動を否認せんとするものであるから、この點は充分に警察當局の反省を促がさなければならぬ。

勞働爭議や小作爭議に於ける團體行動の法的公認を更に一層明確にし曖昧なる暴力法などの這入る餘地をなからしめると共に、民衆運動取締の各法規の適用に當つて、爭議を罪惡視し違法視するの謬想を一掃せしめることが、警察權の爭議に對する行動をして公正ならしめる所以であると信ずる。

官憲の特殊心理と民衆運動

赤松克麿

一

我國の官憲には、一種特別の心理がある。我國資本主義の變則的發達が、官僚といふ特殊の勢力群とその心理とを生み出したのである。官僚が支配階級の一成素であることは、勿論であるけれども、典型的發達を遂げなかつた我國の資本主義は、官僚といふ傳統勢力を、まだ完全には資本主義化して居ないのである。試みに我國の官憲と米國の官憲とを比較すれば、面白い對照が見出される。米國の官憲が完全に金權政治の奴隷であることは明かな事實であつて、例へば勞働爭議の際に、資本家が私兵を雇入れて罷業者を攻撃させたり、武裝列車を仕立てゝ、罷業者の家族の住んでいる村落を襲撃させたりしても、官憲は知らん顔をしている場合が珍らしくない。またスタンダード石油會社に關係ある或る富豪が離婚をしやうと思つて、フロリダ州に居住し、離婚を簡便にする法律を制定せしめ、それによつて離婚を實行した後、其の法律を撤廢した事實がある。

米國の官憲が、自ら資本家の走狗たることを公言して憚らないのに對して、我國の官憲は、資本家の走狗たることを潔しとせずして、自らは資本家と勞働者の何れにも偏せず、超然たる國家の統治階級を以て任ぜんとする矜持を持つて居る。此の矜

持が資本家階級のためにしば〳〵惱られつゝあることは事實だが、尙ほ國家的正義感に生きやうとする一種の心理が、我國官憲の間に相當に存していることは明かである。而して彼等は資本主義化せざる代りには、封建的であり、獨斷的であり、所謂官僚的である。此の官僚心理の內容を仔細に分析すれば、いろいろ議論の餘地もあるのであるが。玆では其れに觸れないで、唯だ斯くの如き特殊なる官僚心理が、我が支配階級の一角に存在していることは、我々民衆運動者に取つて、細心なる注意に値する事柄であることを述べて置きたいのである。

二

官憲が一種の國家的正義感を有していることは、勞働爭議などの際に、米國の官憲に比較して、幾分公平なる立場を取らしむることになり、それが爭議の解決を合理的ならしむるに役立つて居るのであるが、その點は良いとして、他の一方に於て、彼等の間に、封建的な、民衆を見下すやうな、威壓的な役人氣質が濃厚に殘つていることも爭へない事實である。此の心理は、權力を有する者に必ずつきまとふところの權威表現欲である。それは資本家の搾取欲にくらべて、惡辣と巧智とを缺ぐが、より原始的であり、不聰明であり、馬車馬的である。民衆の意志を無視し又は輕蔑して、權力を縱に獨斷專行を敢てしたがるのが此の權威表現欲である。

民衆の間に、民主主義的自覺が低度である場合には、役人が官僚風を吹かしても、別に社會的波瀾を生ずるまでに至らない。しかしながら民衆の自覺が進むにつれて、役人の權威表現欲は民衆の鼻について來る。そして若し其れが程度を越す場合には、其處に思はぬ社會的波瀾を生ずるのである。前にも述べたやうに、我國の歷史的事情が官憲の心理をして一方に或る程度の階級的中立性を保たしめると共に、他方に多分の權威表現欲を帶びしめるに至つたのであるが、最近に於ける我國民衆の急速度の民主的自覺は、此の官僚心理と動もすれば憂ふべき衝突をかもす形勢にあるのである。

私が最近、官憲の權威表現欲に就いて、最も不愉快に感じたのは、本年三月廿七日夜に起つた明治製菓株式會社の騷擾事件である。同會社に勞働爭議が起きてから、爭議團の代表者が幾ら社長に面會を申込んでも會つて吳れない。資本家の代表が勞働者の代表との會見を拒絕するなどは、よほど時代錯誤の固陋な仕打である。事件の發生した當夜も、百五十名ばかりの爭議團員は、何んとかして社長と會見しやうとして、東京市三田台町にある社長宅を訪れたのである。爭議團の代表者が刺を通ず

ると、社長は不在だといふ、そこで代表者三名が執事に會つて、懇談を始め、他の者は邸内の玄關前に腰を下ろして居たのである。ところが其處にけたゝましく馳せ參じたのが三田警察署長有松警視である。署長は部下數名を率ゐて現場に來て、いきなり「君達は何をしに此處に來たのだ」と怒鳴つた。勞働者等は、「今、代表者が奥に居るから、話しがあるなら、代表者と掛け合つて下さい」と穩かに答へた。そうすると署長は威丈高になつて「代表者が何んだ、御前達は解散しろ」といつて、續けさまに二三度「解散」を叫んだ。そして「俺が三度解散を命じても肯かなければ檢束だ」と怒鳴つて、自分の手近に居る一人の勞働者を鷲づかみにしやうとしたので、勞働者等も署長の常軌を逸した亂暴振りに我慢がし切れなくなり、遂に警官隊と勞働團との大亂鬪となり、双方に負傷者を出すことになつたのである。警察側は各署の非番召集を行ふて、勞働團を總檢束し、さん〲に彼等を、、、、、、其中の四十數名を市ケ谷刑務所に收容し、更に其中の二十四名を起訴するに至つたのである。

三

官憲の專制的心理は、民衆の團體運動を嫌惡し危險視する。民衆の民主的自覺と其の活動とは、官憲の支配的權威を傷けるもの〻如く考へるからである。「百姓大勢申合せ候を徒黨と唱へ、徒黨して强いて願を企つるを强訴といふ。前々より御法度に候條」云々と述べて、德川時代の專制政治家は、農民の團體運動を極端に嫌つたのであるが、此の心理は現在の官憲にも多分に殘つて居る。彼等は、資本家がどんな橫暴を振舞ふが、少數で密かにやることだから、眼を吳れない。之に反して、勞働者が痛切なる生活苦から我慢し切れないで團體運動を起す場合には、直ちに之を徒黨視し、不穩なる事件として之を取締らうとするのである。彼等の頭には、意識的に資本家を擁護しやうとする氣持はなくとも、唯だ外形に現はれた集團現象だけを見て、すぐ勞働者側を不穩視して取締るところに、官憲特有の權力的壓制癖と頭の惡るさとがある。

勞働者の集團が會社の代表者を訪問することは珍らしくないのであつて、彼等が暴行でもするならば別だが、靜粛に而かも生活苦に喘ぎながら頑迷な社長を訪問したときに、之を不穩視して解散を命ずるが如きは、警察署長として餘りに譯が分らな過ぎる。若し解散を命ずる必要があるのなら、穩かに爭議團の代表者に其の旨を通じ、代表者から爭議團に解散を促すやうに仕向けて行くのならば、事は無事に濟んだに相異ない。それを「代表者が何んだ」などゝ暴言を吐いて、代表者の存在を無視

し、暴徒にでも對するやうな態度で、いきなり權柄づくで勞働團に解散を命ずるなどは、どうしても現在の治安の任に堪える資格なきことを立證したものと見なければならぬ。失禮な申分かも知れないが、現在の勞働組合の幹部は、人格識見に於て、一警察署長のレベルに優るとも劣らぬつもりで居るのだから、あまり其の存在を無視したり輕度したりするやうな暴言は之を謹んだ方が當世向きである。就中、斯くの如き場合に、警察署長ともあらうものが、酒氣を帶びて來るなどといふことは以ての外である。私は過般の明治製菓株式會社の騷擾事件を以て、一官憲の權威表現欲の生んだ犧牲だとすることに躊躇しない。しかし犧牲としてはあまりに大きい犧牲である。

序に云つて置くが、警官が被檢束者を取調べる際に、無性に毆つたり蹴つたりするのは甚だ宜しくない。毆らなければどうしも取調べの効果が擧らない場合には、已むを得ないこともあらう。然るに被檢束者に暴行を加へることによつて生ずる實際の効果はどうかといふに、暴行に堪え得る氣の强い者が罪を免れて、暴行に脅かされて、すつかり參つてしまふ者だけが、警官の云ひなりに陳述して罪を着ることになるのである。だから群集犯罪に於て、實際は犯行のない若くは犯跡の薄い者が、唯だ氣の弱いために犯罪人になることが其の例を少しとしないのである。そして警官の方では、此の事件に何名位罪人にすれば恰好がつくからといふ風に考へて、眞の犯罪者を探査するといふよりは、何名かの頭數を揃へれば、責任が濟むやうに感ずるのである。此の邊の所は當局者に於て十分考へて貰ひたいものである。

四

近く天下の耳目を聳動した長野縣の騷擾事件を見るに、問題の焦點たる警察署の廢合それ自體の可否に就いては能くわからないが、梅谷知事の此の問題に對する取扱ひ方が、官僚的範疇を脱しなかつたことだけは確かなやうである。たとへ官憲の意見と民衆の意見とが齟齬する場合に於ても、官憲が條理を盡して民衆を說得する手續が必要でなければならぬ。然るに梅谷知事、竹下警察部長は、六月十八日の縣令で「具體案は持たぬ」「大いに研究を要すべき問題だ」と聲明しながら、僅々二週間の間に、思ひ切つた改革案を作製して、六月三十日に突如として三本署、十四分署の廢止を告示したといふことは、あまりに地方民衆を踏みつけた獨斷的態度と云はなければならぬ。知事や警察部長の動機が如何に善であつても、民衆の意志の動きを察しないで、天降り式に物事を決めつけてしまふことは、官僚

的警政主義であつて、此の節の時勢には適合せざるものである。

梅谷知事といふ人は、官僚氣質の强い人だと聞いて居る。今回の騷擾事件が發生する以前、彼は長野縣の小學校長の更迭を斷行して、地方民の反感を買つたことがあるさうだ。長野縣の小學校長は他縣の其れに比らべて、見識もあり氣位も高くて、相當に社會的背景を持つて居る。それを知事の權威を楯に民衆の思惑を度外視して更迭を斷行したので、こういふ遣り方ではきつと將來面倒な事件が起りはせぬかと、心ある人々は非常に心配し、知事に忠告したものもあつたといふことである。ところで長野縣といふ處は、自由思想の普及した地方であつて、官僚主義に屈服しないといふ一個の氣慨を持つて居る。此の自由思想は中產階級の思想であるが、長野縣は敎養ある中產階級が社會の中堅を成して居る點に於て典型的であつて、縣當局者が舊式な官僚思想を持つて居ては、極めて遣りにくい地方である。だから梅谷知事と長野縣では、甚だ取り合せが宜ろしくない。梅谷氏が長野縣に赴任したことは、運命の惡戲かも知れない。

五

帝國大學は官吏養成所だと云はれて來たが、私の觀察を以てするならば、官吏志望の學生が官界に游ぎ出して次第に一定の官僚タイプにはまつて行くには、自然な徑路があるやうに思はれる。今はさうでもあるまいが、私の學生時代には、まだ官僚崇拜の氣分が相當に强く殘つて居た。それは官尊民卑的な社會風潮の殘影である。ところで官吏志望の學生を見るに、人間としては眞面目な、律義な、若くは邪氣のない愉快な男が多かつた。しかし官吏にでもならうといふ學生の頭には、どこか簡單なところがあつた。彼等が高文の試驗に合格し、官界にスタートを切つて、田舍廻りの役人になり、年若うして警察署長となり、保安課長となり、純朴な地方民から高官の禮遇を受け、鳥なき里の蝙蝠で、すつかりいゝ氣持になり、更に昇進して警察部長、內務部長、縣知事になる頃には、いゝ加減に官僚タイプに出來上つてしまふことは、極めて自然なコースでなければならぬ。現在でも官吏に就いて見れば、個人としては實に善良な君子人か又は氣持の良い人が多い。しかし好漢惜むらくは時代思潮を知らずである。若し彼等が時代思潮を解し、その態度を民衆化して來るやうになるならば、我國の社會進化に及ぼす影響は蓋し甚大なるものがあるだらう

私の望む所は、官憲諸君が時代の流れと共に步まんことである。未だ資本主義化し切らない特性を十分に維持し且つ發揮す

ると共に、その信奉する國家的正義感から形而上學的要素を取り除き、之を近代科學化することである。我々は、官憲はブルジョアの走狗だと一概に決めつける一部の論者の說に、我國の歷史事情を嚴密に究めない杜撰な考方であると思ふ。若し官憲の指導精神たる國家主義が、形而上學から救はれるならば、官憲の立場はもつと社會運動と接近して來るであらう。官憲が空虛なる權威表現欲を棄て、眞にデモクラチックな態度を以て、治安の任に當るならば、消極的には、騷擾罪と公務執行妨害罪の件數を減少し、積極的には、我國社會運動の進展過程を著しく合理化するであらう。官憲の頭を支配する舊式な國家主義が、今後、資本主義化して行くか、又は新しい內容を盛つた國家主義となつて行くかは實に社會運動の前途に影響する重大なる分岐點である。私は今、時代と共に歩んだ一官憲を思ひ出すことが出來る。群馬縣の藤岡町には關東釀造勞働組合（總同盟）支部が存在しているが　先年此處にストライキが起つた。町の警察署長は勞働組合を能く理解し、資本家の專橫を認めて居たので、爭議團の示威運動や演說會其他の行動に對して、極めて寬大な處置を取つた。元來藤岡支部の諸君は氣の荒つぽい方であるが、署長の取締りが餘りに寬大なので、却つて思ひ切つた亂暴も出來なかつた。官憲と勞働組合との關係の方が、資本家と官憲との關係よりは　意志の疏通があつた。遂にストライキは勞働組合の大勝に歸した。署長は平常に於ても、勞働組合に對する態度は好意的であつて、官僚臭味は見出されなかつた。其後、署長は轉任したが、そのとき勞働組合は長い間の好意に酬ゆるため、記念品として金時計を贈つたのである。若し官憲が時勢の趨向を察して、之れに善處するならば、或は我國の階級鬪爭は、所謂我國特有の美山を發揮するやうになるかも知れない。（八月九日）

民衆暴動と警察權の濫用

布施辰治

一

去る七月十八日事件の勃發以來、廿日も記事禁止中であつた、長野事件の揣摩憶測は、次から次への噂を生んで、憲政內閣の責任倒潰迄も喧傳せられた。と同時に、郡役所の廢止に伴ふ全國的警察廢分合問題を是非する民衆運動は、栃木其他の各地に既然未然大小種々の暴動化を傳播した。そして地方近來の小作爭議勞働爭議等に牽連する多數行動の騷擾化と共に、所謂民衆運動進展の暴動化、其の取締に從ふ警察權の行使に就て、識者の頭を惱ましむるものがあつた。夫れは普選の實施を前にした民衆政治近來の政治傾向たる多數行動當面の問題である。

二

處で、昨五日午后五時、記事解禁と同時に今朝の新聞に報道せられた、長野事件の眞相は、所謂民衆運動進展の暴動化を憂へしむるよりも、寧ろ警察權濫用の民衆運動取締と人權蹂躪の不當檢擧を憂へしむる點に於て、前代未聞の重大事件たる事を痛嘆せしむるものがある。

長野事件民衆運動の暴動化には、社會主義者や、水平社員の裏面活躍があつたといふ者もあるが、長野縣には相當多數の社會主義者も居れば、水平社員も居るのだから、左樣した人達も亦、あの運動に參加して居たに違ひない。けれども、夫れが、長野縣民としての民衆運動に參加した、より以下の特別な意圖と計劃とを以て、其の暴動化に活躍したと謂ふ譯ではあるまい。にも拘はらず、長野縣民としての縣民大衆と共に活躍した社會主義者や、水平社員があつたからと云ふて、長野事件民衆運動の暴動化を目するに、一種特別の暴動事件を以てするが如きは飛んでもない間違ひであらう。嚴正公平に長野事件民衆運動の暴動化を批判するものは、普選の實施を前にした民衆政治近來の政治傾向たる多數行動を理解しない警察權の取締りが、民衆運動の暴動化を挑發する場合のある事を忘れなければなるまいと思ふ。況んや、私の最近關係した小作爭議勞働爭議の騷擾化を傳へらるゝ事件の內には、餘りに彈壓的な警察權の行使に脅えた民衆生命の正當防衛的暴動化さへも見た實例があるに於てをやである。長野事件が果して、民衆運動の主動的暴動化なりや、警察權濫用に對する正當防衛的暴動化なりやは、司法裁判の審理に依つて決せられるであらう。亦、私も、職務關係の調査研究に依つて、其の判明を期するであらう。が、現に、私等の知り得た長野事件の概要に依つて緊急考察を要するものは、民衆政治近來の政治傾向なる多數行動今后の進展が、

果して必然の暴動化を憂へしむべきか、若しくは其の取締に從ふ警察權の行使が、其の暴動化を挑發するかを憂へしむる民衆暴動と警察權との關係である。

三

惟ふに、民衆運動は、普選の實施を前にした所謂民衆政治必然の政治傾向として、各種の民意代表機關に依る民意政治と共に、民意參政の直接行動として今後益々大なる進展を見るに相違ない。殊に、無產階級運動が、漸と政治行動化するに從つて尙更ら其の進展を著しく激成するものがあるであらうと信ずる。けれども、私は、左樣した民衆運動今後の進展が常に必ず、民衆運動の暴動化を憂へしむべきものとは考へない。殊に、無產階級運動の政治行動化に激成せられるであらう、民衆運動今後の進展は、其の指導と取締りの順應さへにも誤らなければ、却つて民衆運動の暴動化を規律調制する事が出來ると考へる。何故なら、民衆政治の根本基調は、民衆の總意を組織訓練する制度化にあるのであつて、無產階級運動の政治行動化も、亦無產大衆の共同戰線を結成する組織訓練に於て、民衆總意の規律調制を一にするからである。民衆の總意を强調する民衆運動を組織化し、制度化して行くレツレングムの制度を併用しない限り、事實上の民意が制度上の民意を壓迫する場合が無いとは限らない。それを目して直ちに民衆運動の暴動化なりと云ふなら、それは暴動化したもの丶責任よりも先づ暴動化せしめた制度の缺陷を反省する必要がある。

事實上の民意が、制度上の民意を壓迫する場合を、其體的に想像すると制度上の民意を代表して居る當局官憲の政治施設一切を非なりとする事實の民意が制度の民意を…………

……………………………………

……………………………………

そして、左樣した民衆運動に依る眞の民意の强調が、眞の民意に非ざる制度上の民意を直接壓迫して仕舞ふ事を惧れるものは、如何にも民衆運動今後の進展を惧れるであらう。

四

然し乍ら、最も徹底した民衆政治の根本基調から観た民衆運動の事實的民意が、…………

……………………………………

……………………………………

……………………………………

……………………………………

……………………………………。事實上の民意でも制度上の

民意でも、眞の民意でさへあれば之を執へて民衆政治の根本基調たらしむるに、少しも差支へはなからう。此の間、更らに、私共の問題とすべきものありとせば、民衆運動によりて强調せられた事實上の民意が、制度上の民意を壓迫する形式組織的でない場合に暴動が起る惧れのある事である。そして、所謂無警察所謂無政府狀態に陷る事を喚かなければならない。けれども、事實上の民意が制度上の民意を壓迫する支配關係を組織的に制度化してさへ置けば、之れ亦、少しも、眞の暴動化を惧るゝに及ばない。故に、左樣した場合の民意尊重を、制度的に、順調ならしめる方法如何制度如何といふ對策さへも立つて居て、何時でも、眞の民意を基調とする眞の民衆政治を實施すべき民衆運動の組織訓練を制度化する事が出來れば良いのである。それが即ち現在の代議機關に依る民意政治の欠陷を補ふレフレンダムの併用應用である。若しも、眞の民衆政治を標榜して置き乍ら、常に、眞の民意に依る所の民衆政治を實施せず、事實上の民意に背いた、制度上の民意に依つて政治を强行せんとする中途半端の民意政治に滿足して居ると、所謂民衆運動が起るであらう。然かも其の民衆運動で强調せられた事實上の民意を容れた、眞の民衆政治を實施せず、眞の民意に非らざる制度上の民意を以て、眞の民意を壓迫する如ふな事があつたら普選の實施を前にした民衆運動今后の進展が、常に必ず其の暴動化を見るかも知れない、けれども、左樣した民衆運動の暴動化は、民衆運動必然の暴動化ではない、寧ろ民衆政治を標榜して民衆運動を許容する現在の制度が、其の民衆運動に强調せられた事實上の民意を基調とする、眞の民衆政治を實施せず、却つて事實上の眞の民意を眞の民意に非ざるの制度上の民意を以て壓迫せんとする爲に起る制度欠陷の責任であつて民衆運動其者の責任では無い。然かも、左樣した、民衆運動の取締りに從ふ警察權の行使が、動もすれば、眞の濫用に陷り、民衆暴動を挑發したり、或は正當防衛的暴動を余儀なくしたりするに於ては、尙更ら當局官憲の責任であつて、民衆運動其の者の責任ではないから、斷じて民衆政治近來の政治傾向たる民衆運動を壓迫すべき所以では無い。と同時に、當局官憲の努むべきものは、眞の民衆政治を理解した民衆政治の指導と取締りの順應であらねばならないと思ふ。

五

私は、以上の所論を理由づける爲に、凡そ民衆運動は如何なる場合に起りて、亦如何なる場合に暴動化するかといふ事を附言して置きたい。最も著しい一例は、一般民衆の實際生活を支配す

る政治に一部少數の有產階級を參與せしめて、一般無產階級には參與せしめず、參政權を有するものが、濫りに參政權を有しない無產階級を壓迫する場合に多數の無產階級が制度化せられた參政權を以て、有產階級の壓迫政治を排擊する事が出來ない爲に、言論集會其の他の方法に依る民衆の威力を以て壓迫政治の阻止若しくは、壓迫階級の倒潰を目的として起るのである。之を具體的に云へば、普選の實施を前にした、有產議會の惡法提案に對する無產階級の惡法反對運動が、最も顯著なる一例であつた。普選を實施して、無產階級の參政制度化した勞働立法でなければ、眞に無產階級の幸福を增進する勞働立法の出來得やう筈が無い、といふ勞働立法に對する民衆運動も亦、其一例を實證するものであつた。更らに、彼の、普選問題に對する幾多の民衆運動に依つて、內閣の倒潰を見たり、民衆運動の暴動化を見たりした事例は、極めて明かに民衆運動の强調した民意を眞の民意として、眞の民衆政治を實施する爲に眞の民意に非らざる制度上の民意を代表して居る時の當局官憲が、其の椅子を去れば、暴動は起らないが、飽く迄其の椅子を去らず、眞の民意に非らざる、制度上の民意を以て、民衆運動の强調した眞の民衆を壓迫しやうとすれば、…………………といふ事を考へなければならない。

次は、抽象的には民衆を代表して居ても、具體的の民衆を代表せず、寧ろ、民衆を裏切る政治を實施せんとする場合に起るのである。例へば、今回の郡制廢止問題に就て云ふと、郡役所の廢止に伴ふ、警察の廢分合と云ふ抽象的の民意丈けは代表してゐても、何處の警察をどの如ふに廢分合すべきかと云ふ具體的の民意を代表して居らないにも拘らず、同問題に對する、抽象的の民衆を代表として居る制度上の立場を利用して、全然眞の民衆を裏切る警察廢分合の彈壓的强行を阻止する爲に、今回の如き全縣的民衆運動が起つたのである、故に、長野縣當局にして同問題に對する、眞の民衆を知つて、之れに順應する丈けの警察廢分合が、尠くとも、その取締方法を怠らなかつたならば、斷じて斯うした民衆運動の暴動化を見なかつたであらうに――縣當局の警察廢分合問題に對する態度の頑强と幾度かの民衆運動に對する民意の無視、更らに、民衆運動を取締る警察權の濫用は、遂に斯うした民衆運動の暴動化を挑發したものである事は、當局知事警部長の引責免官に依つて明かと評し得よう。

尙ほ私は、長野事件の民衆運動を取締つた警察權の濫用が如何に非常識を極めたかといふ事例と、新潟縣の小作爭議に於ける暴動化が警察權の濫用に挑發せられた小作人側の暴行だと

云ふので、警察權の濫用に對する民衆生命の正當防衛を理由に無罪の判決を受けた實證に就ても語り度いと思ふたが、あまりの多忙と、豫定の頁數を超へてゐるので、玆に擱筆する（八月六日記）

民衆運動と警察權の對立

杉森孝次郎

民衆運動と警察權の對立といふ言葉が意味をなす場合がある。それは、その民衆といふ言葉で意味されるものが、一つの政治的秩序に於ける消費者ではあるが、それの生産者でない場合だ。

その極端なる或形式は、獨立前のアメリカ、革命前のフランスの町民が、その民衆である場合だ。しかし、それには、無限の程度別ともいふべきものがある。それの極めて緩調なものにには、一、二年内に交迭する内閣の、その時々の反對黨側の國民が即ちその民衆であるといつたやうな場合もある。

一面からいへば、民衆と警察とが競爭的對立關係を構成する基礎は事實的だ。兩者の間にはそれが無い可能と、無く成り行く傾向があるからだ。

一體、政治は、他の文化要素よりも早く自治化する必然的事情を持つ、どうしてかといふに、政治に限つて、例外なしにそれの消費者の位置が被强制的だ。それゆえに、一とつの政治組織及びそれの作用の消費者ではあるが生産者ではない位置にある社會部分は、その位置に對して敏感だ。そして蓄積的及び飛躍的に、かれら自身が同時に政治的生産者たる位置を確保すべく、その部分はおのづから從事する。デモクラシが、經濟に於てよりも、教育に於てよりも、學問及び藝術に於てよりも、政治に於て先づ發達したわけはそこにあると考へる。例へば經濟なら、すくなくとも手工業時代に於ては、また機械産業時代になつてからでも政治との比較に於ては、生産者や商人は賣りつけたい一方であつても、買ふ、買はんは當方の勝手だといふ位

置が保存されてゐる。政治の場合にあつては、しかしながら、消費を忌避することは違法、反逆としてその政治の生産者から、その政治の構成のかたちに於て制裁されることを、そこに相當の實力差がある限り、意味する。

一とつの政治を生産するものが、その政治を消費するものと精確に同一人、同一團、同一社會である狀態に達することができない限り、權力と反逆との對立關係がその生産者と消費者との間に多少成り立つことは避けられない。そこには、極端に無邪氣な、底の淺い單なる官僚主義、役人根性といつたやうなものさへある。仲間から委託された役權を特權の如くに想像して、仲間にむかつてこれの濫用に多少耽らずには滿足できない幼童的本能さへある。

しかし、現代の通般的事實として、民衆運動と警察權の對立關係を構成する要素はもつと實質的だ。經濟的及び政治的特權階級と比較的無特權階級との對立が、警察權と民衆運動との對立の背景だ。したがつて、その背景が移らないあひだ、その前景は保存される。

警察權は政治的權力の機能的一部にほかならない。全體としての政治が不獨立であるあひだ、警察權だけが社會的純正至公を實現することはできない。全體としての政治が多少とも階級政治、黨派政治であるならば、警察や司法も、したがつて多少非社會的であることをまぬかれない。警察や司法の當局吏たる人々が、意識的には充分に良心的であること、したがつて獨立不羈であることはいくらでもありうる。しかし、良心そのものが、各瞬間の事實としては、習性を自然的條件とする。平素の利害意識、所屬階級の特權、これらが良心の形成に必然參加する。

階級專制を制するものは反對の階級專制力であるほかない。しかし、政治は、完全にそれの消費者たる位置にある人々によつて生産される一途を追うて、進歩力ある社會に於ては、必然進歩する。この關係は、政治が社會的一機能としての位置に於ての完成を次第に與へられることを意味する。階級鬪爭の一層分析的な、及び一層綜合的な意味は、政治の社會化としてのみ發見される。

長野事件の如きも、分析して見つかる最後の要素は、或實質的必要の自己主張だ。それは他のなにものをも專制し、強制する性質のものではない。他から專制され、強制されてすますことのできない、極めて局限的な利益が、物質的及び精神的兩形式に於てのこれが、あの全運動を必至させたのだ。即ち、官吏の所爲が、たとひどんなに正常な意思及び動機に發したとして

も、地方民自身から見て、實情、地方歴史的、地方社會的、利益的、感情的、人間性的な種々の實情に對する理解を缺いたものであつたのだ。

即ち長野事件の如きは、制度に於ける自治主義の缺乏と必要を反映した一現象にほかならない。それは、決して、專制、獨裁、强制、即ちいはゆるヂクテーターシップの缺乏と必要を意味した現象ではない。長野事件に於ける民衆側の要求の核心は、即ち充分に社會的なものであつたのだ。形式上の權限的自由や良心によつて片づけられることには、どうしても否定を表示せずにはゐられない實情が、そこにその政治的消費者たる地方民によつては確實に自覺されて存在した。

分析して見て自治の必要にほかならないものだから、その運動は、綜合的には階級鬪爭でなく、社會保存を意味する。それは專制を目的としない。それは專制を制することを目的とする。それは、社會的內部生命自身のために、外來支配を許容しない社會的、自己的綜合必要の意識だ。

現在の制度では、地方民の政治的必要のかたちに於ける意思と體驗が、偶然によつてのほか、したがつて原則的には、地方官吏に分有される機會がない。この位置は極めて顯著だ。それはくはしい論證を可能にする。

本誌八月號掲載廣告の玄黄社發行「處世哲學」の
定價壹圓九十錢は貳圓八十錢の誤りにつき訂正す

童馬山房漫筆

齋藤茂吉

一　蟬聲

いつのまにか蜩が鳴くやうになつた。曉が暗いのに一しきり墓地の木立から鳴きはじめて、それが僕の寢てゐる直ぐ近くの繁みに移つて來る。また夕方になつて狹い部屋に讀書も何も出來ずに愁然としてゐると、直ぐ前の木で一しきり鳴いて、そして闇の濃くなるころには鳴き止んでしまふのである。

長崎にまる三年もゐるうち、長崎の街では蜩のこゑを聞かなかつた。然るに同じ縣下の溫泉嶽に行くと、あそこの松の生へた滿山に蜩のこゑがしてゐたことがあつて、それをたいへん僕は面白いと思つたことがある。

吾妻山ぐらゐの上にのぼると、もう蜩は鳴かない。これは木立のないせいもあらうが、山を下つて來て中腹ぐらゐになると蜩のこゑが聞え出して來て、山を下るに從つてそれがだんだん繁くなつて來るのであつた。

歐羅巴にゐるうち、獨逸でも墺太利でも、瑞西でも佛蘭西でも英吉利でも、つひぞ蜩のこゑを聞かずにしまつた。ひとり寂しく伊太利を旅した時、ナポリあたりの夕べに蜩を聞くかと思つたのであつたが、そこでも蜩のこゑを聞かずにしまつた。

蜩の聲はものあはれであるが、聽いてゐると人なつこいところがある。それであるから、旅から旅へ歩いて、『寂しさに堪へたる人のまたもあれな』などといつた西行などでも、夏山の曉、ゆふべに蜩のこゑを聞くと、幽かに人間戀愛の情調を感じたのであつただらう。然るにアルプス山系の中の密林などになるとただに空山人を見ぬのみではない。すでにかかる蜩の音すらもしないのである。そこには西行などの味はつたものよりもまだまだ手嚴しい寂寥があつた。

僕は歐羅巴にゐるうち、つひに蜩のこゑを聞かずに歸つた。ある時ふと、福本日南の遺した歌集を讀んでゐると、發二婆爾斯羅納一赴二馬德里一途上。といふ詞書があつて、『巖山の小松がうれに風絶えて鐵路とほく蟬のこゑする』といふ歌が載つてゐる。

これは松蟬のたぐひであつたのかも知れぬ。或は芭蕉が出羽の立石寺で吟じた、しづかさや岩にしみ入る蟬のこゑ。のやうに油蟬であつたのかも知れぬ。西班牙の國となるとだいぶ南方で日本の風土と相似の點が多いであらう。そこで、この歌の中の『蟬のこゑ』をば蜩であつて呉れゝばいゝと思つたのであつた。平凡な人情であるけれども、僕は、人なつこくて、そしてうらがなしい蜩のこゑにしたかつたのである。

二　Café Geisha

はじめに伯林に著いて、それから維也納へ留學してしまつたから、伯林の事情は好くは知らずにしまつた。然し年に二回ぐらゐは伯林に行つた。それは概ね古書類を買ふためである。伯林には親しい友の前田君がゐて何くれとなく面倒みてくれた。伯林の幾つかの經驗は皆前田君のお蔭であつた。

西暦一九二四年の七月一日の條の手帳を見ると、先づチムメルマン會社をたづねて實驗心理の器械を見て、高いので

買はずに一先づ歸つてゐる。それからその足でロオタツケル書店に寄つて古書を撥り買つてゐる。それからウエルトハイムに寄つて、それから小宮・小西兩氏と落合つて午餐を共にしてゐる。それからミユルレル書店に行つて古書を撥り、心理の雜誌を注文してゐる。そこを出て、ベルリッツの語學校に行つて松原氏の事を問ふ。松原氏は病氣で習に來てゐない。それから前田君と落合ひ藤卷料理店に行つて鰻を食べてゐる。それからcafé（カフエ） Geisha（ゲイシャ） に行き、歸つて二人で寢てゐる。

café（カフエ） Geisha（ゲイシャ） は café（カフエ） Geiko（ゲイコ） とも謂つてゐるさうであつた。日本料理で久々に腹を滿足せしめて、ゆふぐれの街を歩いて來ると、もう人々は夕の粧を濟まして歩いてゐるのであつた。向うから二人連の娘が來た。ひとりは漆黑で細く楚々としてゐた。ひとりは明色で豐かであつた。目立たぬやうに化粧をして、いかにも容子よく歩いて來る。通り過ぎようとする一瞬に二人はにこりとした。

これは前田君に對する流眄であつたのである。前田君はつかつかと行つて二人と何か話してゐたかと思ふと、二人を兩側にして拉して來た。四人は相竝んで歩いた。そして Café（カフエ） Geisha（ゲイシャ） に來たのであつた。

そこで四人は氷菓などを食べ、料理も食べた。それから強い酒を甞めるやうにして飲んだ。僕は去年の夏、民顯（ミユンヘン）に轉學してから全く不犯の生活をしてゐる。そして既にかういふ種類の娘には興味が失せかゝつてゐた。けれども二人ともどうも美しい。その顏容を見てゐると張りつめた心が和んで來るやうな氣がする。ふたりの美しい娘の目を見てゐると、僕の目も吸込まれるやうな氣がする。「何よ」！ などといふ。

然るに、細い漆黑の娘は日本語を使つた。これは暇のある日本の軍人さんか何かに研ぎ減らされたのではないかと思ふと、不愉快になつたが、その感情は刹那にして消えた。

たとへば僕等は、歌劇の蝶々夫人のことを話合ふと、細い娘は、„Frau butterfly wartet und wartet. Und nicht zurück Dannasan!" などといつた。娘は意識してさういふ獨逸語を使つた。誰が敎へたか、『旦那さん』といふところが面白い。

娘は、今日、夫人同伴の本田大使に往來で會つたといふ。それは出鱈目であつたけれども、その時も、„Exzellenz Honda mit seiner Okusan" などといつた。„Ihre 奥さん Japan!" などといふ獨逸語を使ふかとおもへば、話のあひまに、『心痛いです』などと云つて、兩手で涙を拭く眞似をしたりした。

僕は一寸言葉を寫生しておかうと思つて手帳を出すと、娘は手帳をいきなり自分の方に引寄せて、『私名は』と云ひながら片假名で、『エラ・シックラー』！と書いた。娘は果してもつと南方の國から來てゐるのであつた。

娘は或るはずみに『あなた Hakasche？』と云つた。迦陵頻伽のやうなこゑで云つた。突如としたこの質問はひどく僕を驚かした。『博士』でなくて、『はかしぇ』であつた。Hakasche であつた。

『いや違ふ』さう僕は答へた。

その時、僕の眉間に彷彿として幻のごとく浮んで來たものは、鼈甲の眼鏡をかけた、黄顔にして細鼻な、額の狹い日本の Hakasche であつた。渠は西洋に遙々と留學して教室で苦しんでゐる同胞をば遊び暮らしてゐると做し、日本で拵へた片手間の論文をば正味の菩薩位の値打と言ひ振らして、異邦の娘に、Hakäsche などと敎へて暗記させる徒であつた。幻の像は暫し僕の眉間に漂つてゐたが、長續きせずして消えた。その時には、僕等のそばの狹い牀上には二組ばかり異邦の女と踊つてゐる日本人が來てゐるのであつた。二人の日本人は妙に腰のあたりを動かしながら、ちよこちよこ

と踊つてゐた。

僕は、もう酒がまはつてゐた。そして、娘の前に鉛筆でBaka(バカ)と書いた。それを踊つてゐるあの日本人のところに行つてどうしても言へと吩咐けた。然るに、娘はBaka(バカ)といふ日本語を解してゐてつひに行かない。そして、『茶目あなた』などと云つたりした。

楽につれて踊つてゐる日本人の足取はいまだ止まない。漆黒の娘はうたひ出した。

戀はやさし。野べの花よ。夏の日のもとに。藤の花よ。あつい思を。胸にこめて。疑ひのしもを。ふじにもおかず。我が心。ただひとりよ。

娘はおぼつかない抑揚をつけながら、かういふ日本語の歌をうたつた。僕は鉛筆を以て二たびBaka(バカ)とは書けなかつた。そして如是の唄を敎へた日本人の根氣と、それを暗記した娘の根氣とに感謝と讃歎と崇拜とを以て、『もう澤山だ前田君、僕はもう歸つて寢る。ただ今の歌を聞いて書いて置いてくれたまへ』と云つた。前川君は『よしよし』といつて鉛筆を動かしてゐたが、前田君も少しく酒がまはつてゐるのであつた。

日本に歸つて來て、今にして思ふと、あのあたりは奈何にしても氣が立つてゐた。前川君はそれではいかぬと云つて呉れるのであつたが、日本語を使ふ美しい女などを見ると益々氣が立つのであつた。然し歸國後の今になつて見れば、イロニーでなしに、あの日本語を敎へて呉れた日本人をば讃歎してゐるのである。

三　蝶々夫人

伊太利ミラノの初の旅は、大體伊太利を遍歴して墺太利へ歸りがけに寄つたので、一人旅とはいつても氣が割合に落

付いてゐた。特にレオナルド・ダ・ヴインチの流派のものが此地に多く殘つてゐるので連日緊張して見て歩いてゐた。

或る日少し餘計にマカロニを食べて腹をくだしたので、腹を暖ためながら半日ばかり寢た。午過ぎになつて工合が少し好くなつたから靜かに街に散歩に出ると、とある處の家角に日本の女の肖像入廣告ビラが貼つてあつた。近寄つてみればそれは三浦環さんが一兩日中にここに來て、蝶々夫人を歌ふといふ廣告ビラであつた。

Tamaki Miura celebre soprono giapponese. Nell'unica Rappresentazione Straordinaia などと書いてあつた。悲しいことには伊太利語は解せぬが、何でも大した日本の歌ひ手だといふやうなことが書いてあるらしい。環さんはたいへん肥つて寫眞に撮つてゐた。

それから或處に行くと又別な廣告ビラがあつた。それには、環さんは日本の美しい『きもの』を着、日傘を差し、左手には扇を持つてゐるところの寫眞が附いて居り、『世界に名高き蝶々さん三浦環』と鷺堂流の日本文字が書いてあつた。Teatro carchno. Incomparable Madan Butterfly. などといふ文字もあつた。しまひの方が英語らしいから、亞米利加あたりで用ゐたものゝ殘りであつたかも知れぬ。

僕は維也納でも蝶々夫人の歌劇は聽いてゐるので、若し環さんが蝶々夫人になつたら、具合よいに相違ないと思つたのであつた。それと同時に、かうも思つた。環さんは歌劇の歌手になつて今伊太利に來て居る。これは實際である。さうすれば旅から旅へと渡り歩く藝人のやうな氣持でもあつた。

さういつても輕んじたのではない。日本の藝人のうちには、明治の初年に亞米利加に渡り、流れ流れて歐羅巴に行つてゐるうちに西班牙の女藝人と仲好くなつて、一人の娘を生んでゐるのもある。ある日本の娘は興行團に買はれて歐羅巴に渡り、流れ流れてゐるうちに病んで民顯(ミユンヘン)に歿したのもある。望郷病だなんぞと云つてゐるうちはまだまだなまぬる

い。かうして旅に果てるもののうちには、諦念がある。それから猶太族に相通ふ心情がある。

僕は肥つた環さんのいふことを聴いて、生れ故郷の女人を祝福したいと思つたのであつたが、日が無いのでミラノを立つてしまつた。その後しばらく歐羅巴に滯在し、伊太利にも旅したけれども、つひに環さんの歌劇團の一行には會はずにしまつた。

僕の空想は追々下等になつて行き、環さんはヴエネチアあたりの興行中は、恐らく鮪の刺身なども食べ、章魚の煠でたのなども食べたらうとおもふ。さういふことを空想したのである。

四　探卵患

耶蘇降誕の祭がすでに過ぎてはやくも歳の暮に迫つてゐる。外には大雪が降りつもつて、向うの山懷に籠る樵夫の家々も埋まつたやうに雪の面に接して幾つかの小さい窓が見えるばかりである。樅の密林もその秀先の動搖が見られぬほど靜寂にかへつてゐる。ここは Gesäuse 谿谷の入口であるといふことを僕はもう少しも疑はなかつた。さういふしづまりかへつた谿谷のなかを Enns の川が流れてゐる。川原も何も白くなつたところを黯ずんで流れゆくが、耳を澄ませば底の方から瀬の音が幽かに聞こえてゐる。

Enns 川は、もつともつと西南の山中から出て來て、谿谷をつくりながら東方にながれる。山間の驛 Hieflau あたりから方嚮を北に取り幾つも支流を入れて、西北へ途を取つたかとおもふところ、つひに Donau に灑ぐのである。瑞西から起つたアルプス山系が墺太利の方に延びて來、大きな群山と深い谿谷とを作るその規模はいかにも莊嚴であつた。その山系のあるところから Enns が出て谿谷に沿うてながれ、川のほとりには村がある。その村でも谿谷の狹くなつた

Admont（アドモント）から、Hieflau（ヒーフラウ）あたりまでを、Gesäuse（ゲソイセ）と名づける。そこには大きな山がかたまつてあり、谿流と深潭とがこもごもあつて、昔から旅人の注意をひいたのであつた。

いまはあだかもその Gesäuse（ゲソイセ）の朝である。僕は維也納うまれの眉眼明色の娘と、しぼり立ての牛の乳を飲み、二人はたいへん仲好くなつてゐるのであつた。靜かな氣持で窓外を見ると、いまだ日光のささぬ雪の面を風が通り過ぎてをりをり粉雪を飛ばしてゐる。

ふたりはきのふの早朝に維也納を立つてここへ來たのである。Donau（ドウナウ）の流はところどころで見ることが出來た。沿岸一帶は冬枯の景色で、畑も野も一いろに見えてゐる。そこに數百の鴉の群れてゐるところなどもあつた。Melk（メルク）の町の寺院の尖塔を右に見てだいぶ來ると、もう雪を戴いた峻峯が遙か西南の彼方に見え出す。丘陵の凹たみには雪があり、林中の泉には青い水綿が浮き、小女が自轉車によつてこちらを眺め、ドナウの汽船が川上へ走る。さういふのは實はすでに平凡で、走馬燈、映畫の一片のやうなものであつた。Amstetten（アムシユテツテン）といふ驛で汽車を乘換へたが、汽車は小さく、車内を暖める蒸氣は通つてゐなかつた。午後十二時五分にそこを發してからは汽車は南下して山嶽地へ向つた。車内には十五四歳から十六歳ぐらゐまでの少年の一隊が甲斐甲斐しい登山のいでたちで快活な面持でみんな重さうな背嚢（ルツクサツク）を背負つてゐた。そのうち樅樹の森林が見え出して來ていよいよ高原の趣になり、路傍には色褪せた祠などがあつてそのなかに十字架の基督が寂しさうに祭つてあつたりした。

汽車は Enns（エンス）川に沿うて走つた。水面と平行して走るやうなところがあれば、斷崖から谿を見おろすやうなところもあつた。一山に落葉が積もつてそれがいかにも雄大に見えるやうなところもあつた。煉瓦工場があつたり、泥炭を掘つたところがあつたり、Oberland（オウベルラント）驛あたりから雪がそろそろ深くなつて行き、橇に材木を一ぱい積んだのをひく馬が歩

んでゐるところなどもあつた。Enns川の紺碧の流が、雪をかうむつた赤裸らしい山の間から見えるやうなところを走つて、四時近くに Gstatterboden 驛に著いた。

四時といへばもう暗がりに入りかけてゐる。この驛は山中の實に寂しい驛であるのに、ふたりは訊き訊き小さい旅舍を音づれて一夜の宿を乞ふた。小さい部屋は二つとも明いてゐた。庭先に出てゐると水は山の方から樋で引いてあり、それから細い鐵管で桶のなかに落してあつた。日本の夏ならば心太でも沈んでゐるやうな趣である。

ふたりは、夕食まで少しの間散歩しやうと企てて旅舍を出た。人馬の往反した道は流石に雪はかたまつて既にそれが氷りかけてゐる。その道から反れて樅の密林の方に行つて見やうとしたのであつたが、その坂ののぼり口のところに家の水が流れてゐてそこだけ雪が無く、こんこんといふやうな音を立てて居る。そこからはもう人跡は無い。雪はなかなか深いのであるが、夕の寒さで氷りかけて堅雪になりはじめてゐる。

その雪をふたりで踏んで行つた。樅樹はいよいよ深く頭の上からかぶさるやうにたつて來てゐる。雪は堅雪になりはじめたと謂つてもいまだ柔かい。僕も娘も時々靴がぬかつた。『おう恐い』などといつて僕につかまつたりした。雪の上に鹿の足跡がある。よく見ると子を連れて駈けてゐる。向ふに行つて又こちらに來た形跡などもある。さういふのも僕には珍らしい。これに交つて兎の足跡が幾つもついてゐる。けふあたり行つたとおもふやうなスキイの跡が二すじこれからのぼる山奥の方についてゐた。靴はたびたびぬかつて、時には太腿までに及んだ。かういふことを非常に好む碧眼の娘も靴が濡れるといつて歸還をすゝめた。

ふたりは元來た道をたづみたづみ小半時も下りて來た。周圍は實に靜かで物音一つしないやうである。小鳥のこゑは稀にした。汽車は、僕等の乘つて來たのが最終の列車であつたらしい。雪の降つた大きな山が二つも三つも眼前に突立

つてゐて、それはどうもいゝ氣持である。山はいづれも森嚴で鋭い。すべてが、生れ故郷で見るやうな樹木で蔽はれた柔かい山ではない。又富士のやうな秀麗な趣はない。唯ががあんとしてゐる。

坂をおりてしまふ頃にはもうだいぶ暗くなつてゐた。坂を下りて往來に出た時に娘は濡れた靴をひどく氣にした。これは餘所行の靴で、靴下も餘所行のものを穿いてゐたからであつた。氷つた雪道をだいぶ歸りかけると、劍附鐵砲を肩に擔つた二人の兵士に通り過がつた。これは今の墺太利では珍らしく、特にかかる山中の夕ぐれに、無造做に劍を附けた鐵砲をかついで通る兵士を見ると、何だか舞臺のうへを見てゐるやうな氣もした。それにしても今時分何處に行くのか知らん。この谿で何かを番してゐるのか、或はこのあたりに兵隊の屯でもあつてそこへ歸へるのか。戰敗の後共和政治になり、艱難に艱難を重ねてゐる時分に演習があらうとは思はれぬ。そんなことを僕は思つたのであつた。道を曲ると、Enns川の瀨の音が一段と鮮明に聞こえる。僕等は橋を渡つた。

しばらく來るとひとりの年寄つた樵夫に會つた。樵夫は向うからgrüss Gottと挨拶して、通過ぎるかとおもふと、娘と何か話しはじめた。それが僕にはちつとも分からない。けれども大體この山中のことを話してゐるらしい。音を長く延ばして、奈何にも靜かにおだやかに話してゐる。娘も老翁と話してゐるときには墺太利の訛を使ふのでやはり僕には聞取れない。老翁は大きい靴を穿き、このへんの古びた服裝をして斧を一つかついでゐる。娘は僕を顧みながら、『この方は日本の方です』などと稍標準語を使ひながら老翁と話すが、老翁は『日本』といふことを知らなかつた。娘は、維也納からずつとずつと東の方の國で、今どきの大きな汽船で行つても四十日もかかるところだなどと話してゐる。翁、は何だか、童話の國を聞いてゐるやうな風である。娘は、『さうだわ。支那の方にある國だと云つた方が分かり易いわね。お爺さんは支那を知つてゐるでせう。お芝居なんかに出て來る髮の毛を尻尾のやうにしてゐる支那人の國の近所に

日本があります。この方は日本のドクトルなんです』などといつてゐる。翁は、幾分見當が附いたらしく、しきりに點頭いてにこにこして僕をも見た。この年寄の樵夫は、橋を渡つて向うに少しばかりかたまつてゐる人家に住んでゐて、かうして働き、この文明の世に未だ一度も維也納に出たことはないさうであつた。年寄つた樵夫と手を握つて分かれたときは、人の顔を辨じ難いほどの暗さになつてゐた。鐵道のシグナルにすでに燈火がともり、黄色の光を放つてゐるのも寂しい氣持であつた。

その夜は盛に燃えてゐる暖爐のまへで夕食をし、麥酒を飲み、鹿の肉を食べた。スキーを遊ぶ客が二人ばかり泊つてゐるほかには食堂には誰もゐない。ただ村人が來て麥酒を飲み新聞を讀んでゐるくらゐである。僕等はしづかな落著いた氣分で食事を終はることが出來た。

それから二人で娘の部屋に行き、僕は簡單に今日の行程などを手帳に書いた。暖爐には薪をくべるので娘は羨しがつてしきりに太い薪を暖爐内に投じた。焔はさかんに音を立てて燃えてゐる。娘は濡れた靴をぬいで見て『こんなに濡れてしまつたわ』などといつたかとおもふと、宿の上さんを呼んだ。上さんは愛想のいゝ肥つた女で日本を知つてゐた。のみならず、いつかも御國の方がいらつしやいました。何でも林學の方をおやりになる方でございましたなどと、何か追憶するやうな風をした。

『お上さん。まことに濟みませんがね。乾草を少し下さい』と娘はいつた。娘は上さんの持つて來て呉れた乾草を濡れた靴のなかに一ぱいつめた。そして『これが一番いゝのよ。』などゝいつた。

夜は冬でも相當に更けた。娘は胸に十字を切り、ふたりは一寸親嘴してわかれた。僕の部屋は娘のところよりも餘程寒い。併し僕はいつも寢室を餘り暖めない習慣であるから、その佛布團のなかにもぐつた。汽車で來たのに麥酒をも飲

んだので相當に疲れてゐる。實に寂しい靜かな夜である。瞼の重くなつたころ、向うの部屋で娘の嚔するのが二つばかり聞こえた。まだ眠らずにゐるのかなど丶おもつてゐるうちに、いつのまにか僕も眠りに落ちたのであつた。

今朝は新鮮な氣持で目をあいた。僕は忽ち口を漱ぎ、鬚を剃り、洋服を著てしまつて娘の部屋に行つた。部屋はいまだ錠前が下りてゐる。僕は戶を叩いて音なふ合圖をした。

『ちよいと待つて頂戴』淸いこゑで中から娘のこゑがした。

『一寸あけて呉れ。僕だよ』

『ちよいと待つて頂戴』

『一寸あけて呉れ。大切なんだから』中で笑ふこゑがして、戶が開いた。娘は上半身裸形である。

『いやな方ね。そんなにせつかちで、あたしお化粧ちゆうよ』

『何かまはん。僕は歐羅巴人のお化粧を見るのだからその儘やれ』娘は Toilette といふ語を使つた。

『失禮してよ』とか、『それでも見てゐられるとをかしいわね』など丶いつて娘は體を洗つてゐる。寒冷な水を瀨戶の盥に入れ、石鹸を過剩な程つけて、顏から、頸、胸、兩の手を洗ひ、すつかり拭いてしまつた。そして上著を著た。これから下半身に及ぶのである。洗ふのに、Waschlappen といふものを使ふ。これは太い丈夫な糸で十文字に編んだ袋でそのなかに手首を入れて使ふのである。Waschlappen は其後だんだん花車になつて、タオル地のやうな模樣附のものをば勸工場などで見かけるが、娘の使つたのは、傳來風の頑固なものであつた。

『もうごらんになつちやこまるわ。』こんなことを娘は云つた。

僕は寢臺の布團のうへに仰向になり、兩の手を後頭部に組んだ。娘は上半身を洗ふに用ゐた同じ水で下半身を洗ふら

しい。そして足の端に及んだらしい。娘はもう下半身を拭く氣配である。

僕は仰向になつて、時折娘の方を瞥見しながら少しく感動の氣持であつた。聰明で高級な人等は僕の感動を目して、Sentimental となす性のものであつた。僕は思つた。おなじ維也納の女どもでも、Diana-Bad のやうな大浴場に浴して、按摩をとらせ、安臥し、爪を手入させて半日の安樂をする猶太富豪の娘の如きもゐるのであるが、この娘のやうなものは、年にせいぜい一二回市立の溫浴場に出入するに過ぎないであらう。然るに彼女は毎曉、湯があれば一杯の湯を以て、湯がなければ嚴冬といへども寒冷の水を以て、身體髮膚を洗ふのであつた。僕は如是の健氣な行爲を計らずもこの山中旅舍の曉にまのあたり目撃して少しく感動したのであつた。

娘は旨い工合に體をこなして水を殆どこぼさない。嘗て森鷗外は「鷄」といふ自叙傳風の小説を書いたとき、この體を拭くことがあつた。『石田は先づ揚子を使ふ。漱をする。湯で顏を洗ふ。石鹼は七十錢位の舶來品を使ふ。何故そんな贅澤をするかと人が問ふと、石鹼は石鹼でなくてはいけない。贋物を使ふ位なら使はないと云つてゐる。五分刈頭を洗ふ。それから裸になつて體ぢゆうを丁寧に拭く。同じ金盥で下湯を使ふ。足を洗ふ。人が穢いと云ふと、己の體は清潔だと云つてゐる。湯をバケツに棄てる。水をその後に取つて手拭を洗ふ。水を棄てる。手拭を絞つて金盥を拭く。又手拭を絞つて掛ける。一日に二度づつこれだけの事をする。湯屋には行かない。その代り戰地でも金盥をしてゐる間は、これ丈の事は廢せないのである』云々。おもふに鷗外の行爲は軍人生活から餘儀なくされた行爲ではなく、留學中歐羅巴人から學んだものであつただらう。

僕は今曉、無理に娘の行動を見てからひどく上機嫌である。二人でしぼり立ての牛の乳を飮みながらだんだん仲好くなつて行くやうに思はれたのはこれがためであつた。

寫生文の筋はここに懸つた。僕は維也納に歸つてから、夜、床に入る前に寒冷の水を以て體を洗ふことを實行しようとした。そして一ケ月ぐらいも續けたであつただらうか。その後は一日置になり、二日置になり、ついにはもつと間が延びるやうになつた。それから、その事があつてから數ケ月經て、まだ雪の深い時分にと思つて、僕ひとりでこの山中の同じ旅舍に來たのであつた。僕は孤獨で二三日の間この寂寥境を味はひたいやうな心持で、幾等か若氣(わかげ)の空想をも交へて來て見たのであつた。さて來て見るとあんまり寂しい。鹿谷をもう一度辿らうと思つて小半里も來たかとおもふともう否になつた。身も心も落着かずに、あくる朝別な方面へ旅立つたのであつた。

僕は此の小さい寫生文を書かうとおもひ、往年の手帳をさぐつた。以上のやうなことは西暦一九一二年、十二月廿七日のくだりに書いてある。簡單に事柄が箇條書にしてあるが、寒冷水を以て少婦四大を洗ふなどと書き、その下のところに『探卵患』！と書いてあつた。

異邦に留學することは何で樂であらうか。艱難辛苦のうちに見る一瞬の夢の如きものであればこそ、『充足の原理』も汝立つのである。かくの如き寫生文は秘錄であれ。街頭の淸きを保つためには、defense d'affiche だからである。

五　ゲゾイゼ鹿谷

十二月廿八日。暖い乳をのみ新鮮な酪をつけて朝の麪麭を食つた。さて目ざす山奥に行かうとしたのであるが、停車場にはもう三四里山奥から橇で材木を運んで來た牛馬が歸りかけてゐるところであつた。

目前の大きな山にも日光が差し初めた。僕等の辿つて行く道は橇の通つた跡と、橇を引いた牛馬の蹄の跡があるのみで、そのほかは白皚々としてゐる。向うから橇でも來るときには雪の中に靴をうづめて避けなければならぬ。ふたりはさ

ういふ道を歩いて行つた。娘は旅舍の上さんに頼んで山道を歩く靴を用意したらしい。道は上り坂になつたり、下り坂になつたり、Enns（エンス）の蒼淵を見おろすところを通るかと思へば、流れからは遠ざかつて行つて瀬の音を幽かに聞くといふやうなところを通るのであつた。ふたりは、靜かで寂しくてそして嚴しいこの雪道をなるべく離れないやうにして歩いた。道は下りになつて、一帶の樅の密林に入つたときに、Oh! frische Luft! などと云つて、空氣を嗅ぐ眞似をしたりした。僕の生れ故郷の娘はそんなことは云はぬから、旨くは翻し兼ねた。けれども維也納のやうな大都市に餘り裕福でなく暮してゐるものは、童幼の頃から既に折に觸れてこのやうな表現をなすやうになつてゐるのであつた。そこで此のやうな言ひ廻しは無理がなく口から出た。

密林のなかは雪が少いやうに見えるが、どうしてなかなか深かつた。樅の枯枝が落ちて倒さまになつて雪の中につきささつてゐるのに雪の降つたといふやうな所もあり、山兎が直ぐ目前を駈けてゐたりした。しばらくすると、うしろの方で鈴の音がしだした。鈴の音は澄んで長く引き山峽に反響するので、非常に具合のいゝ音を立ててゐる。これは牛と馬の引いた橇が歸路に就いて僕等を追越さうとしてゐるのであつた。

橇は馬二頭で挽いてゐる。中には三頭挽のものもある。今は空身であり歸路なのでおのづから馬は急いだ。橇は列をなして十ばかり續いた。そして忽ち僕等を追ひ越した。人間は橇の上にゐて鼻唄をうたふ。橇のうちには麥酒樽とか家具のやうなのを少し積んだのもあつた。向うから乾草を山ほど積んだのと材木を滿積した橇が來た。行逢ひざまに馬は嘶き人間はものをいふ。既に山中の語で僕には全く通ぜなかつた。道が坂になつたところに、泉の水を樋で引き丸太を掘つたのに溜まるやうにしてあるところがある。そこに近づくと馬はひとりでに近づいて行つてその水を飲んだ。馬はかはるがはる飽くまで泉の水を飲んで歸路を急いだ。ふたりはなるべく馬と一しよに行かうとしたが、つひ後れがちに

なり、鈴の音はだんだんに向うに遠ざかつた。その鈴の音は生れ故郷で馬の頸につける鈴の音と違つて長く引いた。其の音色は、例へば佛教精舍の鐘の音と天主の御堂の鐘の音ぐらゐの差別はあつた。馬はずんずんひとりで飲みひとりで歩くのに牛は一々馬子が綱を持つて泉のところに導いてゐた。牛の歩はさう遲くはない。やはり馬に追ついて行つた。

道は大體 Enns（エンス）に沿うて行つたらしい。日本娘ならば、『寂しいわ』などゝいふところであらうが、そんなことはちつとも云はなかつた。徒歩の人には未だ誰一人にも會はない。橇を引く牛馬の鈴の音が僕等から益々遠ざかつて行つてもう聞こえない。

『ゆふべは蟲がゐなかつたね。

『えゝ、ゐなかつたわ。

『それでも感心だね。こんな山中に蟲のゐないといふのは、やつぱり上さんが綺麗好でやかましやなのかね。

『あたしなんかもう馴つ子だわ。貴方みたいではないわ。けれど、やつぱり氣候のせいもあつてね。それに、こんな山中には存外金持の旅人が來ますからね。ゆふべのお料理の wienerschnitzl ね。あれが二萬クロネでせう。維也納よりも高いのですからね。それが、貴方とあたしだから高いといふのではないわ。あの旅舍はあれでも割合に裕福よ。

『蟲にゐられちや實際かなはん。獨逸のマインツの一夜は實にひどかつたね。マインツの素人屋に宿つたときのこと話したつたかね。

『えゝ、伺がつたわ。けれど、貴方の血は未だ新しいんですわ。波蘭の或貴族のところに遙々と來た御客が泊つたんですつて、するとやつぱしやられたんですつて。それを貴族のあるじ、男爵か子爵でせうね。そのあるじに話すと、あなたの血はまだ新鮮でございますといつて大層褒めたといふ話があるわ。あたしなかなか旨いでせう。

こんなことを云つて娘はしじゆうにこにこしてゐた。午後の一時近くになつてゐたであらうか。僕等は峽間の一軒屋に辿りついた。そこにはもうさつきの橇を引いた樵夫等が到着して、屋外の雪の上に乾草を存分に置いて馬と牛とに食はせてゐた。なかに前脚で雪を掻いてゐる馬がゐたが、深雪(ふかゆき)で土があらはれない。牛馬等は香の高い乾草を食ひ快く糞をし小便をして白雪をよごしてゐた。そこに大きな犬が居つて、別して僕等に吠えようとはしない。二人はその一軒家に入つて行つた。屋内はうすぐらく、さきほどの連中はもう麥酒の大杯を傾け、聲高にあらあらしく嬉しさうに話込んでゐた。二人は窓際の明るい卓に行つて午餐を注文した。屋内を見ると、鹿の角だの、羚羊の角だのが壁に一ぱい飾つてある。窓の硝子は二重になつてゐて、隙間のところには苔蘚を一ぱいつめてあつた。家は丈夫な板と丸太で固めてあり、陰鬱のやうでゐて、何だか閑寂と安定とがあつた。汁も肉も非常に鹽辛く　汁は日本の味噌汁よりも鹽辛く、僕は驚きながらそれを吸つた。が、氣が妙に落着いて來て、麥酒の大きいのを飲干したのであつた。耶蘇と聖母とを飾つた小さな龕も古び煤けてゐるが、耶蘇の降誕を祭つた樅の枝と、蔦などが未だ乾からびずに殘つてゐた。僕は鹽辛い肉を食ひながら、鮭の鹽引をむさぼり食つた少年のころを思ひ出してゐた。連中は一杯機嫌で牛馬を勵ましながら出發した。維也納生れの娘は、ここの汁をも旨さうに吸つた。柱時計は鳥の啼くような聲を立てて一時半を報じた。

これからこの山奥の Johnsbach(ヨオンスバツハ) といふ町までは二里半ある。そこまで一氣に行かうとしたが、なかなかではなかつた。ただ Enns(エヌス) に灑ぐ幾つかの川が滾々として流れて來るさまが僕を喜ばしめた。それのみではない。大きな山が幾つも直ぐ僕の額を壓して立つてゐた。この藪くが、ががあんとした巖山で、秀麗の氣などはちつともなかつた。アルプス連峰が實にそれでであつたから、ここに兀立してゐる幾つかの名のある山もそれに相違なかつた。ただ是等の大山を凝視してゐると、直ぐ支那の山水畫が頭に浮んで來た。支那の山水畫法では、山の皴などにいろいろと面倒に命名して畫分

けて居り、それを單純直截な毛筆法でやつてのけてゐるのであるが、僕はこの山中に來てはじめて支那山水畫家の偉かつたことが分かつた。あれらの『法』といふものは悉く寫生から來てゐたのであつた。それが粉本を迴るやうになり、信濃飛彈の連山といへども此處ほどの大山(たいざん)が無いのであるから、僕は發祥期に活躍した支那山水畫家の偉さは分からなかつたのである。それだけでも僕は嬉しかつた。さういふ時には僕は沈默になつてしまふから、默りこけて娘とも滅多には話をしなかつた。

西洋畫家は、眼前にこれだけの大山幽谷を持つてゐながらそれに筆をつけ得なかつたのは、宗教を中心として、人物、物語、事件に凝つたためであつた。デューレルが西洋の山水畫家の初などといはれてゐるが、支那の山水畫に較べるならば山水畫とは謂へない。レオナルド・ダ・ヴィンチは山水を畫いたが、人物の背景として添へたに過ぎなかつた。併しレオナルドのものは一種の悠久感を有つてゐて、支那の山水畫と相通ずるものがある。モナ・リザの背景にしろ、聖アンナの背景にしろ、人物を拔きにして、あの山水だけを突つめて行くと、支那の山水畫と合致するところまで行つただらう。そして、レオナルドの事であるから、描法などもいろいろと工夫したであつただらう。近世になつてセガンチニも好い山水を畫いた。けれどもあれも一種感傷的な農民の生活に添へた山水に過ぎなかつた。支那の山水畫はあれほど偉かつたが、極度に單純化の發達を遂げたために、もはや變化の餘地が無くなつて衰へてしまつた。それは芭蕉の俳諧が衰へて行つたのと好く似てゐた。

けれども僕は直ぐ氣を取直して道を急いだ、路傍の崖の雪の無いところを見ると、白い高山植物の花が咲いてゐた。二人してそれを摘みながら平凡なことを話してゐると、向ふから一人の小娘が來た。小娘は Johnsbach(ヨオンスバツハ) から又一里の奥にある小學校に通ふのであつた。そこの小學校には教師が唯一人ゐる。そして三部教授をしてゐる。小娘は毎日六里

づゝ歩くのであつた。小娘の歩みは非常に早かつた。話してわかれ、しばらくするともう向ふの道のくまに見えなくなつてゐた。僕はその小娘をあはれに思つた。かういふ山嶽地方の生活は維也納あたりの爛熟花車の生活とは非常な違ひがあつた。併し僕の生れ故郷の日本でも毎朝三里ぐらいづつ歩いて小學校に通ふところは幾らもある。長崎の裏の山を越えて行つたところにさういふのがあつた。出羽嶽文治郎などもさうして小學校に通つたものである。けれども日本の山は淺い。そのことを思つて僕は娘をあはれがつたのであつた。

Johnsbach(ヨンスバツハ)に著いたのは三時過ぎであつた。そこには墓地があり寺があつた。是等は皆近頃出來た新しいものばかりであつた。山懷にある小村で流石に山の寒風を防ぐやうに自然になつてゐた。そこのさゝやかな食店に寄つて、暖い肉汁を飲んだ。店内には十五六人の少年がゐてしきりに山人(やまびと)の唄をうたつてゐた。唄のをはりにホウア。ホオア。といつたり、ホラヰア・ヰア。ホラヰア・ヰアなどといふ節(ふし)がつゞいて素朴なおもしろいものである。それを少年等はうたつてゐたが何處かの都市からか遠足に來てここに宿るのであらう。生れ故郷の青森地方にはホオハイ節といふのがある。瑞西からかけて墺太利、獨逸の山嶽地でうたふ山人樵夫の歌はホオハイ節(ぶし)に似てゐた。少年等はそれを眞似してゐた。

橇をひいた連中はここからまだ二里も奥まで歸るのださうであつた。彼等は、曉の暗いうちに橇に木材を滿載して出發する。そして朝のうちに停車場に著き、そこで荷をおろして、一服すると歸路について燈のつくころ家にかへるのであつた。一度の往反が毎日の爲事で、ゆるく淸い鈴の音をさせながら馬も牛もその行程に馴れ、前の橇との間隔が大きくなると馬はひとりでに走つて前の橇に追ひつくといふ風であつた。墺太利敗戰の餘波はかかる山中にも及んだが、山人の生活過程は左程變らなかつた。またさういふ生活を繰返すより他に途は無かつた。大戰中、工業國のチエツコスラワキアが謀叛し、大戰後、農業國の匈牙利が獨立して、小さい墺太利は山嶽地として殘つたやうなものである。その山

深い家々には未だ純朴で勇敢な國民は殘つてゐる。けふ出會つた小娘なども、いゝ妻となり、難有き母となつて吳れゝばいゝとおもふ。

二人は食店を出てひたすら歸りを急いだ。暗くならないうちにと念じたのであつたが、途中で日がとつぷりと暮れてしまひ、二人はひもじいのを怺へて雪明りの道を急いだ。上り坂になつて、それをのぼりつめると家の燈火が見え出した。急に疲れをおぼえて、重い足を引擦りながら旅舍についたのはもはや九時であつた。

ふたりは腹が減つて夕食をした。そして一杯の麥酒を飲むと相當に醉のまはるを感じた。けふの歸路に急足ではあつたが、路傍の巖を削いて、Moritz Janniss の功績を簡明に記してあつた。この人は樹林を育てる方にも、山の獸類の保護にも極めて骨折つた人であることが書いてあつた。日本から留學してゐる森林學の方の教授の話を聞くと、墺太利の森林の好いのは氣候のせいもある。けれどもやはり手がいゝのである。食後さういふことを思つて話のおひまに墺太利を褒めたりした。

今夜は上さんに話して部屋を一しよにしてもらつた。美知能斯理古波陀袁登賣波阿良蘇波受泥斯久袁斯叙母宇流波志美意母布。これは日本古事記の歌であつた。暖爐の中には火炎が收まつて、紅い燠はだんだん灰となるらしい。僕は神の如くに寢た。

六 鹿の床

十二月二十九日。今曉も寒水で體を洗つたけれども、水がこぼれて巧者には行かない。然るに娘は體を旨い具合にして水は殆どこぼさなかつた。そのへんまで注意すると學ぶところは未だ幾らもあつた。

健康な胃に存分麵麭を入れて、旅舍を出ると、細かい雪が降つてゐる。もう昨日のやうに橇を挽いた牛と馬とが停車

場に著いて休んでゐる。木挽小屋からは電氣仕掛で木を挽いてゐる音が古びた胡弓か何かのやうに響いて來る。さういふところを通つて行くと、坂になつて鐵道をも眼下に瞰すところへ來た。そこには兒童が小さい橇を走らして遊んでゐた。さうして會ふ兒童毎に Grüss Gott! といふ。それが僕の東洋人だといふことに氣附かぬらしい。維也納の郊外あたりにゆくと、支那人(キネゼ)! などといつて家陰に隠れたりするのであるが、さういふ兒童は東洋には別な人類のゐることを教はつてゐるからである。この山中の兒童はてんでさういふことに顧慮しない如くである。それゆゑ僕が過ぎ去つても彼等同志相顧みて囁合ふといふやうなことがない。會釋は如何にも自然ではきはきしてゐる。人は意識してコスモポリイトなんぞといふが、この山中の兒童はてんでさういふことが意識のうへに上つて來ない、そして親と小學校の教師から教はつたやうに會釋するのであつた。僕は自分の少年時代のことを回顧したが、もつと小狡(こずる)くもつと小癪であつたやうにおもふ。歐羅巴に於ける『人種哲學』の問題なども、猶太人種を抜にしては成立たなかつたであらうから、この大山幽谷の間に、かりそめにもさういふ思想が入つて來なくとも好かつたのであらうか。兒童等はころころと轉がり雪にまみれながら嬉々として遊んで居た

さういふところを通つて峠をのぼつて行つた。細かい雪は降つてゐてもここ數日大雪が降らなかつたと見え、人馬の往反した道がついてゐる。峠ももう頂上だとおもふところに、路傍に祠があつて、永世童貞女馬利亞(まりあ)と、十字架の基督とを祭つてある。二人はそこに近づいて行くと、娘は直ぐ胸に十字を切り、膝をちよいと曲げた。祠の中は薄ぐらい。ただ祠のなかには繪馬のやうなものが懸かつてゐる。玻璃の裏に泥繪具のやうなもので、耶蘇が生れてゐるとその傍に白い驢馬がゐるところだの、荊(いばら)の冠をかうむつた耶蘇だの、稚兒を抱いた童貞女だのいろいろである。これはチロール地方からかけてこのわたり一帶の農民藝術の一種で素朴で且つ象徴的なものであつた。この風習は今は稍衰へて行つたと

は謂へ、いまだ古の手法の名残をとどめてゐるのである。僕はその一つ二つが欲しくなつた。あたりを見れば誰も通るものはない。いま盜んでも誰ひとり知るものはないだらう。さう思つて僕は娘に同意を求めてみた。然るに娘は目を大きく瞬つたかとおもふと言下にそれを否定した。娘は神聖な祠のものを盜むことをひどく勿體ながり、さういふものを盜まないことを希つた。そして二たび胸に十字を切つた。

僕は娘の寄せた眉間の憂を見て、玻璃繪の額を盜むことを罷めた。併し、現今歐羅巴の都市を步きゐて、博物館を訪ひ、日本の品物を見てゐるとき、紅毛蕃人の徒が如何に日本の僧侶、執事に喰はせて、品物を盜んで來てゐるかが分かる。その最も狡猾で巧なのは英國である。紅毛蕃人崇拜の遺風はつひにこの事すらも見拔くことが出來ないのである。ただ流れ出た品物が、濕氣の少い大陸の博物館に丁寧に保護されてゐるといふことが幾分の慰安になるに過ぎなかつた。けれども僕はかかることを娘には話さなかつた。その峠はのぼり極まつて、眼界には廣い野のやうなところが展開されて來た。野には一面に雪が降り、柵がめぐらされてある。道はその柵をば彎曲形にまはつて向うの森林の中に入つてゐるのである。野の隅の方には二軒ばかりの家が簷まで雪に埋まつて見えてゐる。

『あ、あれが確か Hütte だとおもふわ。

『何かね。

『多分。Enustalhütte だわ、あれは。Hütte ですか。戰(いくさ)まへには墺太利もなかなか豐かだつたんでせう。それで大雪が降ると山の獸が食べ物に困るものだから、日を極めて餌(えさ)をまいてやるんです。さうすると山ぢゆうの獸が寄つて來て、そりや見物なんです。お猿も來れば、鹿も羚羊も猪も熊も來るといふ調子でね。鹿なんかは子を連れて何百となし來るんですつて。けどももう墺太利も駄目だわ。

二人は、そこから向うに見える家を目當に歩いて行つた。道は雪にうづもれてゐる。ただ幾らか堅雪になつてゐるからなづみながら雪の上を行くことが出來る。靴は時々ぬかつた。

たどり著いた家は古くて貧しかつた。善良さうな女が三つばかりの女の子と出て來た。娘は來意を告げて、しきりにその女と話をしてゐる。けれども訛音が多くて僕には聽取れない。娘の通辯を聽くと、なるほどここは Hütte であつた。けれども戰後墺太利國の艱難は到底さういふ事はしてゐられなくなつたといふのであつた。今は時々野獸が出沒するだけで、集まつては來ないといふのであつた。晝も過ぎたので都合によつてはこの家で食事しようとおもひ、たづねてもらつたが、何一つ用意がないといふことであつた。善良さうな女は如何にも言ひにくさうにしてことわつた。そのとき側にゐた女の子は何かいつたのを聽くと、お客さまに何かおあげなさいといふのであつた。僕は五百クロネ與れた。さうすると女も感謝して、『それでは折角ですから頂戴しておきませう。Sparkassa にあづけませうね』などいつた。村には貯金組合のやうなものがあるのであらう。五百クロネは一錢五厘ぐらゐであつた。

ふたりは爲方がないからそこを出て森の方へ這入つて行つた。Buchstein(ブウフシュタイン) などといふ高山が直ぐ目のまへに突立つてゐる。それは低い平凡な群山を前景としてゐず直ぐ谿から聳えてゐるのであるから、峻烈莊嚴の氣持である。樅の密林は上り坂になりだんだん深くなつて行つた。そこを二人は手を引かへながら辛うじて行くと僕の額からは汗が滲み出た。またしばらくかういふところを歩いたことがないので息切がしてならない。併し休み休み行くところまでは行つて見ようとおもふ。雪の深いこの密林のなかに唯二人ゐるといふ意識も息切のために忘れてゐた。然るに息を休めてしばらく居ると、周圍(まはり)はしづまりかへつてしまつて何の物音もしない。ただ寄添つて小聲でいふ二人の話があやしく林中に籠るを感ずるのみである。ふたりはひよいと親吻をした。それから一のぼりのぼらうと息込んだ途端に、すさまじい音

を立てて獸が逃げた。驚愕して立とどまると、獸は鹿であつた。鹿は枝のさいた角を稍背に近づけて逃げて行くのが一瞬見えただけで、つひに見えなくなつてしまつた。

鹿の立つたところは凹處を隔てて向うの高い處である。そこには樅樹の太いのが密生して見える。僕はあの高處に行つて見たいと思つた。併しそこに行くには廻り道をしなければならなかつた。二人は時々雪に膝を沒しながら辛うじて其處にのぼつて行つた。樅の大樹の根方に雪の無いところがあつた。そこには短い草がところどころに生へて冬枯れのまゝ地に伏してゐる。それから一定の擴がりに苔の蒸してゐるところもあり、樅の木の落葉が細かく茶褐色になつて一めんに散敷いてあつた。雪がないと謂つても全く無いのではない。粉雪の細かいのが氷つた地のうへに飛んで來て消えずにゐる。そこに獸の臥したあとがあり、まるい糞が其處此處にあつた。氷りついてゐる糞もあつた。

『まあ、今の鹿は此處に寢てゐたのだわ。』

『うまいところを見つけるね。これなら靜かでいゝ。かうしてゐると僕も氣が落著くやうだ。』ふたりは新聞紙を折つて其處に敷いた。全く人跡を斷えて、風音もしない。

『鹿は一つだつたわれ。』

『うん、一つだね。一つのことだつてあつてもいゝね』

『けれども einsam でせうね』

『それはさうだらう。einsam だから、zweisam といふことも惡くないんだね。君は Zweisam を知つてゐるかね。』

『zweisam もいいわ。かうして双棲のやうにしてね。それはさうと鹿は今晩もここへ歸つて來るでせうね。』娘は何か別の事を考へてゐるやうでもあつた。

『やつぱり歸つて來るだらう。かう具合のいゝところばかりは無いからね。』

『それはさうね。』

野獸も人間、獵犬のほかにしじゆう敵はゐるだらう。そのほかに病にも罹るだらう。野獸は屍を曝さないと聞いてゐる。年老いて死ぬときは彼等はどういふところに寢てゐて息絕ゆるであらうか。そんなことを思ふと寂しくなつて來て溜らない。ふたりは道へ引返して來て歸をいそいだ。

その夜は薪を澤山くべて心しづかに寢たのである。

七　歸路

十二月三十日。今曉も早く起きて眼を洗つた。肩や胸のあたりを扱(こ)すことを敎はつて洗つてみたが、やはりあたりに思切つて水がこぼれた。これはもつと稽古すべき一つの業であつた。

ゆうべは何か日本のことを夢みてゐたやうであつた。歐羅巴に來てもう滿一ケ年を過ぎてしまつたが、やはり夢で覩る場面は日本のことが多かつた。つい近頃になつてやうやく西洋の場面をも見るやうになつたがそれもたまさかである。五臟の疲れかどうであらうか。フロイド一派の憧憬充足の說はどうであらうか。僕はふと寫象再現の『時間的要約』が題目になりはしないだらうかと思つたことがあつた、すなはち、眠際(ねむりぎわ)に起つて來る幻覺、hypnagogische Halluzination では、今日經驗したことが直ぐ今日あらはれて來る。それを夢はなぜさうでないであらうか。これは空想家のフロイドもいまだ取扱つてはゐなかつた。ほかの實驗心理學者も無論氣づかずにゐるのである。

二人は食堂に下りて來て、紅く音立てて燃える暖爐の火を對角線に見ながら暖い牛の乳を飲んだ。そこへ一人の樵夫

が來て、上さんに兎一匹賣ることを談合してゐる。今しがた打止めたやうな兎であつた。つひに上さんはそれを二萬クロネで買つた。樵夫はそこの卓で麥酒を飲んで暫くして歸つて行つた。

僕等は午前十時八分の汽車で Gstetterboden（グシテッテルボウデン）を立つた。汽車は矢張り川に沿うて東へ走つた。ふたりはもうしばらく雪にうづもれたこの山峽にゐたかつたのであるが、もう明日は大晦日である。僕は大晦日の夜を維也納で過ごさうとしたのであつた。途中から乘つた勞働者のなかに非常に獰猛の相をしたのがゐて、酒氣を吐きながら、盛に政治を論じ、今の政府の駄目なこと、猶太の族は吾等を餓死せしめるなどといふことを息卷いてゐたが、或驛に來ると降りた。プラットホウムに出てから、そこに老媼が背嚢（ルックサック）の旨く肩に締まらぬので困つてゐるのを、その勞働者がいろいろ手傳つてやつてゐるのが見えた。

Amstetten（アムシュテッテン）驛に來て降りた。維也納へ行く列車に乘換へるにはそこで二時間も待たねばならなかつた。二人は停車場内の食店に入つて時を過ごさうとした。ふとその土地の新聞を見ると、盛に猶太人排斥の記事が載つてゐる。その大體は維也納の大學から、猶太系の教授と學生とを擊退せしめよといふのであつた。彼のゲゾイゼ谿谷の住民等は、いまだ人種のこと、猶太族のことで思惱まさなくとも好かつたのである。然るに、此處に來るともうその火の手があがつてゐる。如是の現象なども僕には興味があつた。

維也納市の有力な新聞も今では悉く猶太系統のものである。ただ二つばかりさうでないのがあるけれども二つとも幽かな新聞だと謂つていゝ。東北大學で講じた植物學の老大家モリッシュ教授は、その幽かな新聞の一つに日本からの通信を書いてゐたが、それを讀まぬ維也納人が多かつたであらう。僕はモリッシュ教授と相見ぬが、純粹な維也納氣質の老翁だとおもつて秘かになつかしみを感じたのであつた。

いま休んでゐる停車場の新聞には、猶太族が共同して大學に金圓を寄附したことが書いてあり、それを、„ihre unsauberen Praktiken などと云つてゐるのが目に附いた。それから筆鋒が激して來て、darum genug der Worte auf zur Tat などといつてゐた。もはや餘言は要らぬ。實行に移れといふのである。Amstetten（アムシユテツテン）などいふ小都市の新聞が既に斯くのごときことを論じてゐるのが僕の注意を牽いたのであつた。

維也納に著いて、その夜しづかに僕は眠つた。一夜明けて、留學生仲間の誰彼と會つたけれども、娘と大雪の降る谿へ行つて旅寢をしたことなどは一言も云はなかつた。僕はこの經驗を千金の如くに愛惜し、知らん振をして、仲間の留學生等と共に大晦日の燈火の燦爛たるカフエへ入つて行つたのである。

江戸の切支丹宗門

姉崎正治

（一）開教と外國交通、最初の迫害

日本のキリシタン傳道を開いた聖サビエの時から、その布教者は九州と上方京阪地方を主とし、秀吉が禁令を發する頃まで四五十年の間に、山陰地方の外、日本の西半分は、どこにもキリシタンの存在を見、その寺院、學校、病院等も中々多かつた。その傳道が公然組織的に關東に波及して來たのは、秀吉の死後、德川の勢力が加はるに從つての運動であつて、その教師等が自由に江戸に住むやうになつたのは、家康の海外貿易政策と關係することであつた。即ち教師バテレン等を利用して、海外貿易を促進せうとする初期德川幕府の政策が、又その傳道を助けたのである。

江戸は、天正十八年（1590）家康の入府以來、段々諸國の人が集り、上方から來住した者もあり、その中にはキリシタン宗門の者もあつた。東海道一帶は小田原征伐で往來を加へ、クラセ（日本西教史下二一八頁）が傳へてゐる、東海道にゐた信徒の醫者の話の如きは、その一例に外ならぬ、而してキリシタン宗門では、單に信仰するだけでは滿足しないで、種々の儀式を營むを要件とし、それに教師即ちバテレンを必要とするから、信者側から司祭教師の來訪を求めるは自然の數であつた。その需要に應じ、且つ新興勢力たる德川氏に關係をつけて、布教の便に資せうといふのが、教師等の着眼點で

あつた。

この先鞭をつけたのが、ポルトガル生のバテレン、名はゼススのゼロニモ（Jeronymo de jesus）で、フランシス會の敎師であつた。一體キリシタンの日本傳道はゼスス會のサビエロに始まり、それ以來四十年間は、ゼスス會の專有であつたが、秀吉がマニラとの交通に着目すると共に、その地に一本據を有してゐたフランシス會の敎師が多く日本に來ることになり、後には他の團體も加はり、其等の間に疎隔衝突を起した事もある。江戸のキリシタンはゼロニモが開いたので、後までフランシス會の勢力が多い。このゼロニモは、西日本で段々迫害が起りつゝあつた慶長三年（1598）日本に來着、直に京都を目指して、暫く紀州から伊勢の間に隱れ忍むでゐた。而してその年十一月九日（陽曆十二月七日）捕はれて伏見に送られ、そこで家康親らの訊問を受けた。それが却つて僥倖になつて、家康によつて江戸に布敎を開く源を開いた。その時の家康との會見は詳しく手紙に記してあるが、中にその言としてゼロニモが本國へ報告してゐるのは左の通りである。

恐れる事はない、又隱れるにも及ばぬ、又服裝を更へないでよし（即ち法服を着用してよい。）何事もお前の爲めによく取計らつてやらう。自分としてはメキシコとの貿易を開く考えがあり、關東へ立ち寄るカステラ人（イスパニア人）にも親しく交り、又銀鑛山の術をも能く習はせたい。云々

即ち交易や技術の上でゼロニモに求むる所があつたので、彼を厚遇し、暫く京都に止めて、それから江戸に行く樣に取計らつてくれた。ゼロニモは江戸に來て、先づ手始に一寺を建立した。その費用の中には、上から廻はつた金もあつた事と思はれる。此の寺はロザリヨの聖母（Santa mari de Rosario）といふ名で、始めて祭式を行つたのは慶長四年（1599）ペンテコテスの祭日（即ち五月頃）であつた。その寺がどこにあつたのか、全く傳を失してゐるが、その頃の

江戸市中、即ち日本橋邊であつたかと想像される。又ゼロニモがどれだけ江戸に滯在したか、不明であるが、先づ一年位と假定し得る。此の如くゼロニモの江戸在住は正式傳道の始をなし、江戸キリシタンは大體フランシス會の事業となり、此團體の特色の一として大に癩病患者の收容保護に勉めた。(その頃の日本には癩病が中々多かつたので、江戸の外に長崎、大分、大阪、京都、廣島などにいくつもあり、各々數十乃至數百人を收容してゐた)。傳道と慈善の効果は忽に現れ、關東に多くの信者が出來、その中には九州に行つてセミナリヨ(學院)で修業し殉教する者も出來た。元和三年(1617)大村で死んだ武藏生のフランシスコの如きはその一人である。

ゼロニモは、一方此の如く布教を開始したが、他方家康の希望に副ふ必要もあり、一度マニラに歸り、家康の注文した測量築港の準備の外に贈物を齎らして再び日本に向つた。ところが途中で船が難破して引返し、再擧して平戸に上陸し、京都に出て、そこで上洛中の家康に謁したのが慶長七年(1602)。その後間もなくゼロニモは病死した。家康は此の行を單に國交上の一使節と見てゐたに、その中にバテレンが澤山來たのを好まなかつたが、それでも彼等を優遇し、その中四人だけ關東に行くことを許した。四人は江戸に出て、ロザリヨ寺院の傍に僧院と病院とを建てた。

禁教令は存在して居ても、又九州諸處には迫害殉教はあつても、家康は海外貿易の爲に、存外バテレンを厚遇し、通譯の役を勤めてゐたジュアン・ロドリゲスの如き、自由に京都や伏見の城内を出入したといふ。且つ重臣本多上野介(正純)は、後にも述べる如く常にバテレンを保護し、又家康に取りなした。此等の關係から、キリシタンの布教は大に便益を得、慶長十年(1605)には、全國に七十五萬の信徒、五千五百の新受洗があつた位であつて、關東のキリシタンは此の頃興隆期に入つてゐたのである。

慶長十年、家康が將軍職を秀忠に讓つて、キリシタンに取つては多難の時が來るべき運命に向つて居たが、二代將軍

も、一方には江戸市中でキリシタンを檢擧しながら（僅かに十人を召捕つたといふ）、他方外國使節としてはバテレンを厚遇した。慶長十一年（1606）には、九州始め、紀州や相模三浦に番船がいくつも着き（實記九卷三九九）、パゼス（一三二頁）によればマニラから來た船は、フランシス教會の教師を載せて、九州から關東に廻航したといふ。後に江戸で入牢し、而して伊達正宗の爲に働いたソテロ（Luis Sotelo）も、その船に乘つて來たのである。

フランシス教會の教師が此の如く江戸で布教するやうになつて、その競爭者ともいふべきゼスス教會の人々は、江戸に着目し、又將軍に取入る事を勉めた。即ちその布教長たるパエス（Francisco Paez）は、慶長十二年（1607）陽曆五月長崎を出發、行く〳〵信者を歷訪して、閏四月、駿府で大御所（バテレンの記錄には內府樣又は公方樣と稱して江戸の將軍樣と區別してゐる）に謁した。駿河では本多上野介の世話になり、又江戸にゐるその父佐渡守（正信）への添書をも貰つた。それから東海道を進んで鎌倉（若干の信者があつた）にも立寄り、江戸に出た。

江戸では當時政權を握つてゐる佐渡守の外に大久保相模守（忠鄰）へも渡りがつけてあつたので、萬事好都合に運むだ。將軍家へ謁見の時には、京都相國寺の長老承兌が先着してゐたにかゝはらず、先づバテレンに謁見を賜はり、それから殿中到る處へ案內せられ、又當時進行中であつた築城工事を見せて貰つた。パエスは佐渡守にも相模守にも教書を呈して大に教法を說いたが、二人共に感服したと傳へる。

パエスの江戸滯在は僅かに八日間であつたが　萬事好都合に運び　歸路には同行の一人を伊豆の銀山に派遣し、駿府で上野介に會つて西に去つた。江戸に殘した弟子の中で、日本イルマンのパウロといふ者は城門に時計を仕かける仕事を引き受け、一人のバテレンはイルマン一人を伴つて上野國に傳道した。上野國との連絡は此以前は不明であるが此頃には信者も出來、沼田が特にその中心となり、後年まで宗門者が多かつた。此の教師はそれから、信濃美濃を經

て、京都でパエスに合した。又他の一人イルマンは、江戸から近國に布教に出かけ、相模の小田原で、活佛といはれてゐた念佛の行者と、阿彌陀教について議論を鬪はし、彼を說破したといふ。云ふまでもなく江戸は關東の中心であるから、此に布教の中心が出來れば　その勢力が關東全體に及ぶのは自然の事で、又東北奥羽への布教も、江戸が策源地になるに從ひ、その往返にも常陸や下野に布教の興るは當然であつた。即ち後の結果で見ても、房總半島の方には信者が比較的に少なく、常陸と兩毛には中々多かつたのである。相模も同樣で、京都との往復の外に、外船の到着があり、慶長十三年(1608)には浦賀に新に寺が出來た。江戸でも病院僧院の増築が出來た。但し寺の外は通常の家屋を用ひたといふ。

禁教令は存しながら、その勵行が甚しくなかつたのは、要するに外國貿易の希望があつて、ゼロニモでも、パエスでも、皆右の如く比較的厚遇を受け、それが又布教に便益を與へたからである。右の二人が將軍に謁見したにつゞき慶長十四年(1609)には　又マニラの前大守ビベロ(Vivero)の謁見があつた。此人はメキシコとの通商を劃策して、三艘の船を仕立て、自らそれに乘り出したが、一艘は早くも九州邊で難破し、自分の乘船は又房總の岸で勝浦の北、岩和田近邊で擱座し、そこで船をすて、領主の城下大多喜を經て江戸に出た。幕府は之を禮遇して、將軍秀忠に謁見せしめ、又駿府では大御所も謁を賜はつた。此間に周旋の勞を執つたのは本多上野介で、而して通譯を勤めたのはジエスス會のパテルポルロ(G.B.porro)であつた。此の如くにして宣教師は一種の公認を得た姿で、現にポルロはその後大阪籠城に加はつたにかゝはらず、中國で働き、終に江戸に出(寛永七年)それから奥州に傳道して十年の間働いた。

二代將軍の保守氣風は段々禁教令を勵行するに傾いたが、それでもバテレンに對しては、嚴令の排斥を行はず、後に述べる通り御家人の中に信者のあることに神經を惱ましてゐた。慶長十五年(1610)には、ドミニコ會の教師數人が駿河と江戸とで各々上に謁見したと傳へる。此が誇張であつても、此頃バテレンが駿河と江戸との間を公に往復してゐた

のは事實である。又右のドミニコ會の教師は江戸で伊達正宗と謁し好意ある約束を得たといふ。正宗とソテロとの連絡が三年の後に公の事實となつた點から見れば、此事も事實らしい。かくて駿府にも江戸にも寺や僧院の增築や新築があり(寺の外は通常の家屋であつた、)又關東一帶にも布教が進み、上野や相州浦賀にも新寺が出來た、慶長十六年(1611)には全國で五千の受洗があつた。

然し迫害は終に來て慶長十七年(1612)に駿府と江戸とで爆發した。但し迫害は殿中や御家人の範圍で、バテレンや一般市民には及むでゐない。即ち徳川家に事へてゐながら外教を奉ずるのは不都合だといふ、意味の迫害であつた。但し寺は破壞された。三月江戸で御家人の中に搜索を行つたがその中の大立物原主水は逃亡した。駿府でデーゴ小笠原を手始に、御小姓や武士十四人を處刑して流罪にしたが、江戸で捕はれた岡本大八(本多上野介の家來だと傳へる)は、何故か駿府に送られて、阿部川原で火あぶりになつた。此時駿府の大奥にも遭難者があり、おたいの方(ジユリア、)を始めとして女性の流人は伊豆大島に流された。おたいの方は伊豆網代まで跣足で歩行したといふ。此が第一回の迫害で、幕府直屬の中のキリシタンを檢擧處刑したものである。

(二) 迫害つゞいて起る

此の迫害は表面の打擊に過ぎなかつた、駿府にはバテレン一人、イルマン一人が居住してゐたし、江戸にも數人の教師がゐた。此の如く迫害あり、又次年には京都での大迫害があるに關せず、教師の往來は多く、慶長十八年(1613)には一バテレンが駿府で家康に謁し、それから江戸に出、その歸路駿河、美濃、尾張から中國九州の信徒を歷訪したといひ、又慶長十一年以來江戸に往來したと考へられるソテロ(Luis sotelo)は、先に破却せられた寺の代りとして、淺草

で一家を建てゝ癩病收容所と共に禮拜所をしつらひ、儀式を行つた。此の事が誇大に傳へられ、廣大な城廓を作つた如く上聞に達したので將軍は怒つて市の內外に亙つて大檢擧を行つた。此の一件は大久保岩見守の陰謀事件と關係ありとも傳えるが、兎に角それが江戸第二回の大迫害で慶長十八年（1613）の陽曆八日であつた。即ち宗徒は皆首枷足枷をかけて牢に入れられ、ソテロは收容所の二十七人と共に捕はれた。入牢の教徒は信仰を主張し同宿ジュアン民部（? Juan Mimbocau）が筆を執つて有司に提出した。

我等の御主デウスは、天と地と、又その中にあるあらゆるものを作り賜ひ、森羅萬象を治め賜ふ、又我等人間を救はんが爲、限なき生命を掌り賜ふ。デウスは、誠の御扶手ゼウスキリシトにてましまし、永へのビルゼンより生れ賜ひ、我等の科を贖ふ爲にクルスの上にかゝり賜ひぬ。御上から我等に恐ろしき御仕置仰せ付けらるゝとも、我等はこの御主を尊ひ奉るが故に、聖きヒデス（信仰）を棄てまじく、我等の決心を證す爲に、此く申上奉る。

兩方共戰を宣して引く事は出來ない仕儀になつて來た。獄中の狀態は悲慘なもので、特にその年の夏は大暑であつたといふが、アポリナリといふ一教徒は、獄中で四日間祈りつづけて餓死した。七月一日（陽八月十六日）、その中の八人を江戸の牢から引き出して、江戸と淺草との間の鳥越（敎會の記錄にはTcuchai）といふ處で首打獄門にかけられた。翌日は淺草牢舍の十四人を斬つてこれも七日間獄門にさらした。その人々の名は皆傳はつてゐるが、中には、大工のレオといふ者もあれば、身分のある士で笹田ミゲルといつた人もある。笹田の仲間ロマンの話も傳はつてゐる。それから三週間七月廿四日（陽曆九月七日）には、又十數人を刑した。その中に先に云つたジュアン民部は、他の數人の外に、獄中で新に信者になつた一人と共に市中を引廻はされたが、その間にも群集に向つて說教して死ぬまでつづけた。その外に板倉ロレンソといふ同宿はどうしてか牢に殘されたが、四年後に牢死した。

此の如く數十人の殉教者を生じた迫害にも中心人物たるソテロは出獄した。それは外國交通と關係することで、卽ち伊達正宗が命乞ひをし。而してその人をイスパニアとの交通に利用したのである、ソテロが仙臺に去つた後、家康は諸國のバテレン追放を遂行し（慶長十八─十九年）、江戸には傳道者バテレンは居なくなつた。その欠を充たすに苦心したバテレンが何人かあつたのであるが、フランシスコ會のデーゴ（Diego de S. Francisco）はその一人で、恰も大阪冬の陣の混雜に乘じて京都に入り、それから兵卒に扮裝して江戸に入込むだのが元和元年（1615）。その頃、教會の癩病收容所（多分淺草にあつた）には約五十人の患者がゐて、その中で元は身分のあつたゼロニモといふ者がその頭をしてゐた。此の收容所は十數年前からあつたのであるが、市民も役人も忌み嫌つて近寄らないから、潛入バテレンにとつてはよい隱れ場所であり、デーゴはそこに住むで患者の慰籍に勉めた。その後、他方面の信者が傳道を求め、祭式を行ふ必要もあるので、デーゴは、伊豫松山の藩士シモン佐兵衛の保護でその藩邸內の家に起居し、そこから市中に出かけて、特に婦人の間に布教した。

陽曆四月復活祭も近い時、段々危險が迫つて來た。陽曆四月四日（陰曆三月七日）火曜日、佐兵衛邸內の者は皆捕はれ、收容所の癩病患者も皆引き立てられた。牢屋に入れられて後番人の一人が信者であつたので、その好意で諸般の器具を備へ、教師は祭服を整へて獄中で復活祭を行つた。その時、シモンは教師の前に懺悔告白をし「此の罪の多い賤しい身をデウスの御爲に捧げ得るは、特別の御惠み」だといふ感謝を表し、デーゴは我等信心の爲に共に惱み共に死に就くの光榮を說いた。かくてシモンは、士分の身で此の如き禁を犯した爲、先づ刑せられ、四月十日（陰曆三月十三日）斬首せられた。デーゴと信者達は尙ほ牢に留められたが、牢中には常に百五十人位の囚人がゐた。デーゴは一年半の在牢中に七十八に洗禮を授けた。その間一度も斬髮をせず、きたなく獸類の如くなつたといふ。獄中の狀態は實にひどいもので、デーゴ日

らの手紙が殘つてゐる

人間の歴史の中に此れほど悲慘殘虐な牢屋の例は、又となからう。囚人は皆狂犬の如く互に殺し合ひ、夜になると、病ひでねてゐる者の頭をぶつて殺す。それを諭すと、彼等はこんなことは何でもない、どうせ死ぬ者を往生させてやるので却て慈悲だといふ。わたし自身は、始終病み、その間には半死のこともあるに、彼等に殺されないのは、デウスがわたしに罪を懺悔せしめる爲めに、生命を長らへさせ賜ふに外ならぬ。又此樣な惡人を、七十人までもヒデスに導かせ賜ふたが、百五十人が皆信仰の中に死ぬまで、彼等がわたしの居るのを見てゐる樣にさせ賜ふに外ならぬ。

我等は皆始終餓えてゐるが、それは云ふまい。囚人の中で三十人位は、いつも全く食物を得ない。他人から少しづつ分けて貰つても五十日位で餓死する。餓の外に、渇の苦みは最もはげしい苦で、例へば洗禮を施す時に、受洗者のあごの下に鉢を持ち、洗禮の水がひたゝると、それを受けて一氣に飲みほす。牢屋は狹くて、一疊に六七人をぶち込み、その中二人位が死んでゐる事も度々ある。生きてゐる者はその間に坐して、却て死んだ者の運命を羨む位である。その上、死人があつても、屍體を片附けるのは一週間位後であるから、その間に屍體は腐り、ぐるりは屍汁の水溜の樣になる。此の腐敗と臭氣とは、堪えられぬ惡感を起すが、それでも死人を持ち去つた後には、まあ自分は生きてゐてよかつたと思ふ。然しその安心は永續きはしない。即ち屍體を持去つたあとは、又直に他の囚人を入れて、元の通り狹く詰め込まれた。死體やあらゆる腐敗惡臭は、生きてゐる者の健康を犯し、大抵皆癩病にかゝる。わたし自身も、頭の頂から足の先まで、健全な處は一つもなくなつてしまつた。而してかゆ味が激しいので、ロザリヨを繰る間にも、爪ででき物をかゝずに一遍すませる事はない。且つ爪は方外に延びて、歯でくひ切る外なく、言葉に盡せない苦である。手紙は一も入れてくれず剪刀も小刀もなく、又頸くくりしない樣にとて紐は一本もない。髪の毛を切る事

は全く出來ない。

自分はもう何も申上げまいと思つたが、わたしの教で引上げられた人々に對しても、默しては濟まないと思ふ」即ちその中で七人の殉教者を得、三十人の奉教者は流罪になり、自分はまだ生殘つて聊か御奉公を勤めてゐる。

此の悲慘なる生活の中にも、デーゴは祈念の生活をつづけたのであるが、獄中で綴つたオラショが殘つてゐる。

御主よ、わたしは弱い者、功德のない者、只だ此の試練に逢はさせ賜ふ御ガラサを蒙ることを知る。此に對して御禮申上げ、又御主の御力で此の苦みに堪え得る御合力を賜はらん事を御願ひ申上げる。御主の御前に此の嘆きを申上げて、此の惱みも、自分のいのちも、自分のあらゆるものを御主に捧げ奉る。わたしの願ふ事も、又賜はるものも、盡く御主の御手から受け申すもの故、御主の聖き御心に隨ひ申さうとのみ望み奉る。デウスを敬ひ奉り、兄弟等を慈み申さん爲に、此の試錬の惱みを受けても、自分はそれで御主の御賞めに與らうといふ心でなく、只自分が少しにても功德を積み、惱みを忍受することの出來ることを、つくぐ〜と內なる良心に感じ申す。只管御主の御慈悲にのみ此身を委せ奉り、その御ガラサにて此の身のアニマを助け賜はる樣、偏に希ひ奉る。

兎に角、かゝる牢獄の中で生き延びたが不思議であるが、その慘憺たる生活は一年半近く續いて、翌年夏に至つた。その年イスパニア船が浦賀に來たので、幕府の御船方たる向井將監は此の船を利用してメキシコとの交通を開かうと建言し、其間に周旋せしめる爲にデーゴの出獄を取計らつた。出獄した時、デーゴは自分では步けないで、人にかつがれて漸く戶外に出た。船は八月廿日(陽曆九月卅日)出帆して、太平洋を渡つた。デーゴは一度メキシコへ行つてそこで病氣が奇蹟的に全治したといふ。此くして二年後、又日本に來て、大に傳道に活動し、仙臺では政宗の保護を得、元和六年(1620)再び江戸に來て、七ケ月の間布教し、又轉じて東北で活動し、その間に男子の修道所を十二、女子のを四つ建

てた。その後此の人は又長崎でフランシス會の長として大に活動した。

此の如にして、江戸に於ける第三回、元和元年の迫害には、第二回と同じく、その中心人物たるバテレンは一命を助かつたが、その他は皆殉教の死を遂げた。即ち癩病者の長ゼロニモは、その年の九月末頃(陽暦六月下旬)斬首。第一回に逃亡した原主水が、二度目に捕はれ、駿府で手足の指を切られ、額に十字の烙印を押されて追放に處せられたのも、江戸の此迫害と一聯の事實である。その他段々に牢死し、最後は翌々年(1617)三月五日(陽暦四月十日)に牢死したロレンゾで、此人は典醫茅野サクアンの子であつた。

それから後も迫害處刑は斷續して行はれ、元和五年(1619)三月十九日(陽暦五月三日)朝鮮人でロザリヨの團員であつたペトロ・アリゾウは、入牢者に食物を送つた爲に目をつけられて、その家で殺され、その從者であつたトマス小作も亦斬首せられた。此の事は、數年間入牢者の絶えなかつた事を示す。その外に、元長崎奉行であつたアントニヨ村山等安が江戸で刑せられたのは、同年末であつたが、それは單に信仰問題の爲のみではなかつたといふ。

(三) 傳道者の熱心、東北地方との聯絡

監視迫害は段々嚴しく、外國との聯絡は益々困難になつたに關せず、バテレンの活動は潛伏的にはなつたが、衰へなかつた。東北方面の傳道者が江戸に往復する外、元和六年(1620)にはゼスス會のベント(Bento Ferdinendez)が新に江戸に來た。此人はポルトガル生れで、一六〇六年日本に來て、自ら日本人と名乘つてゐた位で、前後二十七年間各地に活動した。即ち九州から上方に來、近江、美濃、尾張、伊勢、三河、遠江、駿河、伊豆、相模を經て江戸に入つた。五十日間市中に傳道し、(勿論隱れて)、翌年は上州沼田で働き、それから信濃、越後を經て、金澤では三ケ月止まり、

能登へも行つた。それから十三年の後即ち寛永十年（1633）長州で捕はれて、長崎送となり、ここで火あぶりになつた。

元和年間に於ける江戸キリシタンの運動について注目すべきは、東北奥羽地方の傳道との關聯である。即ち東北地方のキリシタンは慶長十九年（1614）上方からの流人を津輕に送り、その方へ教師等が出かけたに始まり、偶然ともいふべき始をなしてゐるが、教師等が往返するにも策源地を要し、始は上方を本據としてゐたのを、段々に江戸を本據にする様になり、その爲に教師の江戸と東北との往返が増したわけである。此の策を立てたのは東北布教の主任者、ゼスス會の人、天使のジロラモ（Girolamo de Angelis 以下アンゼリスと呼ぶ）であり、而して此人は又元和九年の大迫害に、鈴ケ森で五十人と共に火あぶりになり、江戸キリシタンの花をさかせた。

アンゼリスは先年から奥州で大に活動したが、終に本據を江戸にかまへて、自分が江戸と東北との間に往返するのみならず、同會の教師をも江戸から東北へ送り、常に聯絡を保つた。後に仙台で捕へられて江戸パテレンの最後の人となる、マルチノ式見市左衛門（日本人で九州生れ）が奥州から江戸へ來たのは元和七年（1621）、それから又出かけて北國出羽を巡教した。翌年（1622）には、名は傳はらぬがパテレン四人、イルマン一人が江戸から東北に出かけた。その年東北で千五百人の受洗があつたといふ。又元和九年（1623）は江戸での最大迫害の年であるが、それに先つてパテレン一人、同宿二人は江戸から伊豆の三島を經て駿州に布教し、又轉じて上野の沼田を經て（此地には信徒が多かつた）、加賀能登をも巡回した。前にも述べた如く、相州や上州沼田に信徒の多かつたのは、江戸から及むだ影響であり、その波及は信州から北陸にも及むでゐる。但し北陸のキリシタンは、此の外に策源地があつて、江戸との聯絡は寧ろ偶然である。

(四) 第三回、江戸最大の殉教

元和九年(1623)、三代將軍の代となり、江戸のキリシタンには最も記憶すべき年が來た。將軍家光は君主の威烈を示す爲に、種々の方法を用ひた。その一つに引かゝつたのがキリシタンで、政策の峻烈を施すには、弱い者いぢめで、何人も異論を唱へ得ない最も適當の事であつた。從つて迫害刑罰も、幕府の威光を公に知らしめる爲に特に嚴かに又大びらに行はれた。此が第四回の迫害、お仕置であつて、事は原主水から發した。原主水、名はジュアン、御家人の一人で、先に述べた如く、慶長十七年(1612)の召捕には逃れて身を隱し、元和元年(1615)捕へられ、駿府で烙印を押されて追放に處せられ、あちらこちら隱れ忍んでゐた。然るに此の頃、江戸に忍んで身を術僕の一人に托してゐたのが、その者の反間で密告せられ、同信の五十餘人と共に召捕られた。

此時一緒に召捕られたアンゼリスは、先に述べた如く、江戸を本據とする東北傳道の中心人物であつた。奥州から暫く江戸に來て居る間に、今度の迫害が始まり、始は逃れてゐたが、彼が宿をしたといふ嫌疑で捕はれた信徒が、その處在を白狀せぬとて甚しい拷問にかけられるのを聞いて、獨り自ら身を全うするに忍びず、他の信徒が諫止するのをふりすてゝ、自ら名乘り出た。平生は日本服に身分を隱してゐたのが、その時は特に正式に法服を着して、奉行所に出頭、堂々と名乘りかけた。自分は遠く本國を離れ、日本の民にデウスの道を傳へる爲に働いてゐる者たる事を述べ立て、且つ同時にキリシタン宗門の何たるかを説法した。奉行所の玄關先で、黑衣のバテレンが説法する光景は想像するに餘りある。續いて從者シモン遠市(鮮血遺書には遠藤)も名乘り出、共に獄に投ぜられた。シモンは獄中で四十人の囚人を感化して洗禮を授け、アンゼリスの牢屋には八人の士が居たが、此も皆信者になつた。

他の一人のパテレンは、前年來ソテロと聯絡して江戸と東北との間に傳道してゐたフランシス會のガルベスであるが、迫害が近づくを見て、同宿二人と共に鎌倉まで逃れ、信者イラリヨ孫左衛門の家に隱れたが、かぎ出されて宿主夫婦と共に捕はれ、江戸へ送られ、他の教徒五十人と共に入牢した。

此時、江戸市中は大騷動でも起つた樣で、市民はうつかりキリシタンの嫌疑を受けてはたまらぬと大恐慌を來し、キリシタンでない事を證明する爲に自分の旦那寺を屆けるといふ始末（蓋し後の寺請證文の制なども此ういふ事から端を發したと考へられる）。又キリシタンたる者の中には、覺悟を定めて名乘り出る者もあれば、一切を賣拂ひ、互に助け合つて近國に逃げ出す者もあつた。探偵は血眼で搜索し廻はり、人々は聲を潛めてキリシタンの噂に日を暮した。

召捕の中に南蠻パテレンが二人ゐたことが上聞に達するや、將軍は烈火の如く怒つて言ひ放つた。

全國に反亂が起つても、江戸に二人のパテレンがゐたと聞く程には驚かない。町奉行等は、先年すでにパテレンは一人も府内にゐないと申したぢやないか、それに今の樣はどうぢや。奉行の申すことはあてにならぬ、まだ恐らく他にも潜んでゐるであらう。長崎で二十人のパテレンが捕はれたとて多いとは云へないが、府内に二人ゐたとは以つての外。大膽不敵の奴原ぢや。これから出て來る者も皆同樣、盡く火あぶりにせよ。

上の一聲、所刑は忽ちに定まり、十月十三日（陽曆十二月四日）キリシタン囚徒を牢屋から引出し、町々を引廻はし刑場（多分鈴ケ森）に向つた。第一隊はアンゼリスを先登に、高手に縛りあげて馬に乘せ、シモン始め十六人が徒歩で續く。第二隊はガルベスを首に馬に乘せ、十六人が之に從ひ、第三隊は原主水を馬に縛りつけて、十五人が之に續く。路々見物が黒山をなす間にパテレンが說法をした。

かくて刑場五十の柱に一人づゝを縛りあげ、其の前には薪木を山の如く積む。見る者は四方の竹柵の外に群集した。

中には感極まつて自ら名乘り出て、共に火に投ぜうとする者もあつたが、これ等は皆縛りあげられた。火炎は予定の通り、五十の柱のぐるりに燃え上り、其の中に信徒がゼスス・マリヤの名を呼ぶ聲とパテレンが祈をかねた説法の聲とが聞える。火焔は段々に人々を焼き、聲も段々にかすかに、日沒には餘燼が物凄く燃え殘つてゐた。

火の盡きた後、死骸をさらしにしたが、信徒等は、爭つて死骸や遺物の斷片をも持ち去つた。此の如くにして、江戸に於ける最大の迫害は、バテレンの死に花を咲かせ、又その前後には多くの壯烈な物語を傳へる。敎會側の傳へる所によれば、此の前後に召捕られた者四五百人に上るといふ。此の數字が果して正確であるや否やは確め得ないが、五十人の火刑につゞいて搜索處刑が行はれたのは事實である。德川實紀（十月十三日の條）に、原主水の事に連座した者、御小姓組の士杉浦三之介外二十四人とあるのは、敎會側で陽曆十二月二十九日（陰曆十一月八日）三十七人の處刑があつた中、二十四人はキリシタンであつたとし、且詳しく、六人は火刑、十七人は斬首、一人は十字架（即ちはりつけ）になつたとしてある。總數二十五人で實紀の記事と一致する。但しその他に信者でない者の中二人は火刑、一人は斬首、餘ははりつけだとし、將軍御小姓の一人も此の中にあつたといふ。その他數字の詳細や姓名の傳はつてゐるのもあるが、それに續いて又二十人の召捕があり、後に多分殺されたらしい。此等の中信者でない者の處刑は皆キリシタンの宿をしたとか、深い關係があつたとかいふ事である。此等は皆士分の家族である點から見れば、町人の處刑は此の外にもあつたに違ひなく、前後總數三百以上であつたと推測し得る。而して此後十四五年に亘つて始終に召捕處刑のあつた事と參照して見れば、此の大迫害の前、江戸キリシタンの最盛時には、四五千の信徒があつたと見るべきであらう。

（五）寛永初年の迫害とピエーラの火刑

元和九年第四回の迫害は、表面江戸のキリシタンを一掃した。但し、その後も、北國や東北に布教する者は、常に江戸に往來し、信徒で召捕られる者は絶えなかつた。即ち寛永元年（1624）四月廿七日（陽暦六月十二日）、男五人女七人を火あぶりにし、その前に牢死した一人の死骸を火焰の中に投じた。寛永二三年頃には、ゼスス會の同宿アレシス(alexis)といふ者が、城外の癩病收容所で働き、その外にも傳道して、百數十人に洗禮を授けた。此の頃に京阪から北國東北にかけての傳道も中々行はれたが、その傳道者の一人バテレンは商人に扮して、京都から北國諸州や佐渡ヶ島にも行き、それから信濃を經て江戸に入つた。江戸では寛永三年（1626）秋から翌年春にかけて、家宅搜索を行ひ、その間に癩病者六十八人を投獄した。彼等は皆餓死又は病死した。

寛永六年十二月一日（1630一月廿四日）には、可なり身分ある人々の夫婦小供合せて十三人が水責にあつた。中にも中川平左といふ士は、三日間水に漬けられた揚句に、竹鋸で頸をしごき切にされたが、最後までデウスの御名を唱へてゐた。寛永七年(1630)にも、市中大搜索があり、その中一人は長崎へ送られて、古賀で斬罪になつた。此の如き迫害の間にも、ドミニコ會の教師一人、ゼスス會の教師二人は江戸にゐた。寛永八年十一月廿二日（1632一月十三日）、夫婦小供合せて七人が火あぶり、その中には道川といふ姓の士があり、又一人當歳の孩兒は父母の面前で殺された。寛永九年(1632)、元長崎に居たアウグステン會のトマス(Thomaz de S.Aug.)といふバテレンが江戸に來て、多く旗下の士を感化したが、その士達は皆打首になつた。寛永十年(1633)八月上旬（陽暦九月）、四年前に會津で捕へられて江戸で入牢してゐた日本人バテレン・ジュアンヤマ(Juan Yama)が穴つるしで殺された。

寛永十三年(1636)三月五日（陽暦四月十日）、將軍自ら城門の修築工事を見分した時、城外で發見したキリシタン九十三人（皆乞食で多くは盲人又は跛者）を捕へ、密室にぶちこんで餓死せしめた。此の如くにして寛永年間を通じて、江戸府内

にはキリシタンのお仕置が絶えなかつたのである。

右便宜上、寛永初年の迫害を一括して記したが、この間に一つ比較的重要の事件が寛永十一年(1634)にあつた。即ちゼスス會の教師ビエーラ(Sebastian Vieyra)と伴侶七人の穴つるし及火あぶりで、バテレン火あぶりの第二回たるのみならず、殉教者自身の手紙で、その入牢糺問の狀態が活々と傳はつてゐる。

ビエーラは、九州、北國、中國をかけて、有爲活動と共に多難多事の二十年を日本で送つて來たが、終に九州で追ひつめられ、小舟で上方(或は東北)を目指して來た。寛永十年(1633)夏大阪の港外で發見され、召捕の上長崎へ送られ、又江戸へ轉送せられ、町奉行の吟味を受けた。その有樣は左に示す本人の手紙に詳しいが、著しい點は教理要領を奉行に差出した點にある。

手紙に曰く、

此町の兩奉行は、政府要路の一部になつてゐるが、時々そのどちらかへ呼び出される。其時には法服を着して出る。但し兩手の親指を綱でしばり、それを帶の革に結びつける。奉行所に着けば其の綱をほどき、一間(ひとま)に入れられ、長く待たされる。その間「ロマから來た人間」を皆が見に來る。ゆつくり時間があるから、色々の問に答へることも出來て、宗門の不思議を說いてきかせる。………

兩奉行が廣間に出、それから自分を次の間に案内し、紙と墨とを前に置いて問ひかける。なぜ將軍の命を犯して日本へ來たか。日本の國を奪ふつもりじやないか、又何を說法したか、などいふ問を出す。それに答へると、一々それを筆記し、終にそれで分かつたといふ。而して最後に奉行のいふには、お前の宗旨は中々よい宗旨じや、その通りにすればよい人間になれやう。但し將軍家は、キリシタン宗の者は、盜賊、火つけ、人殺しよりも憎くむべき

だと仰せられると述べる。それで訊問は終つた。

それから三日たつて他の奉行が二人、牢の中庭に來て、先づ牢内でわしを縛りつけさせ、手と腕とを背の方に縛り上げさせた。而して他の罪人が拷問を受ける傍でそれを見せ、又拷問道具をその邊に並べて見せる。而して奉行等が將軍の命としていふには、お前の說いてゐる法を棄て、且つ此くしてころむだ（棄教）といふ事を告げ知らせよと。その上、筆紙墨を持つて來て、右の趣を書けといふ。それに答へて云つた。『わしは年がもう六十三になるが、今までの一生、天と地との御主から數へきれぬ御惠みを蒙り申した。之に反して將軍がわしにくれたものは、手枷、拷問、牢屋のみであり、且つ又將軍もわしらと同じく、どうせ死んでゆく人間に過ぎない。それ故、わしが說き來つた法の爲に、信仰の眞理の爲にそれを捧げやう。此の信仰は今までキリシタンの節儀を全うして常に守り唱へて來た所であるから、天下をわしにくれやう。又は國中の拷問をやめてやらうといつたつて、信仰にはかへられない。若しわしがどうしてそれを守るかといふ譯が知りたくば、筆墨を下されよ、それを紙に書いて進ぜう』、こう述べた。

それから又二日の後、紙と筆墨とを持つて來て、信ずる所を書き上げよといふ。そこで十四時間足らずの間に、我等の信仰の大要を書き上げ、世界創造の初から、最後裁判の結果までを、日本の言葉、日本の文字で記し終つた。奉行は又それを自分の國の言葉で書けといふから、その通りにして差出したが、奉行はそれを將軍の手許へ差出したといふ事である。將軍はわし等を殺して了へば、何か怨祟がありはしないかと恐れてゐるらしい。暴君が、此のあはれな一說教者、みじめな一パテレンに對して恐を抱くといふのは、此の聖い教の勝利に外ならぬ。……

眼中將軍なく、天下なく、教の眞理に信頼する態度は實に見上げたものである。此の氣慨と誠實とが、之に接した人

々をどれだけか感動せしめた事は推測するに足る。それから後四月七日（陰暦三月十日）附、會長への報告書簡も殘つてゐるが、殉教の用意に最上の白衣を用意して待つてゐるといふ外、此の如く將軍へまで教理書上を見せたのはデウスの御計らひに外ならぬと悦んでゐる。又入牢前或はその後にも、例の如く市中引廻しをされて、その途上説法したものと見えて、江戸の町々に白晝公然説法し布教したので、小供までも、キリシタンを知る樣になつたと記してゐるが、天和九年の大迫害の場合と同じである。

此の手紙の中には、殉教で命を棄てゝも、デウスの御恩の萬一に當らぬといふ事をくり返し、最後に曰く「只だ此の一命を棄つるのみにては、御恩に報ゆるに足らず、百の命ありとも、千の身體ありとも、此の廣大無邊の御ガラサに答ふるは不足」と述べてゐるが、此は宛然「マルチリヨの勸め」（迫害と潜伏二二八頁）と同じである。當時殉教者の間にあつた感情を表してゐるが、「マルチリヨの勸め」は或は此人に關係あるでないかといふ想像もし得る。兎に角、ピエーラが日本語と日本文に長じてゐたことは明で、彼れの街上説法、奉行所での説破、獄中の著述、皆江戸キリシタン史中特筆すべきものである。

尚此外、將軍が教理大要に感服して心動いたといふ話もあるが、之は信ずるに足りずとしても、將軍家が御覽になつたといふ位は、獄吏でバテレンに同情し、或は之を尊敬する者が話しをしたのかも知れない。

獄中半歳、最後の拷問で聽かなければ死罪と定つた。長崎から同伴した五人の伴侶の外に、フランシス會のゴメス（Luis Gomez）とその從者と、都合八人が拷問にかゝつた。ゴメスも長崎から送られた人で、此の時八十餘歳、書簡も殘つてゐるが、その事は略して、五月十一日（陽曆六月六日）、二人のバテレンは馬上、他は徒步で刑場に向つた。市中引廻しに又々説法をしたに違ひない。刑は穴つるしの責で、人々は段々に死んだが、ピエーラは四日を經て十四日にも、ま

だ穴の中で生きてゐた。そこで穴から引出して火あぶりになつた。その報が大川（マカオ）に達して、彼地では全市十三日間の祭を行つた。

（六）島原亂後のバテレン處分

日本キリシタン史の中で寛永十四、十五年（1637―33）は肥前島原亂の勃發で最も著しい年であつた。此の亂の眞相は別に論議を要するが、幕府は此を以てキリシタンの反逆とし、愈よキリシタンの邪法なる事を確め、將軍は非常に彼等の不逞を憤慨して、益々根こそぎにキリシタンを剿滅するを命じた。そこで島原亂の平ぐと共に搜索の歩を進め、年の末までに、府内で多くの信徒を召捕つた。十二月一日（1633一月十五日）その事を諸大名に告知して、益々搜索を嚴にせよと命じた。此までの迫害處刑は斷片的ながら、西洋側に報告が屆いてゐるが、島原亂と共に日本の教徒は全く外國との聯絡を絶たれたので、此から後の事は西洋には殆ど傳はつてゐない。且つ幕府でも、處刑を大びらに公開するを止めて段々事件を秘密に扱ふやうになつたので、記録が極めて乏しい。これ故、今述べた召捕も「府内にて天主教の徒を多く搜り得たり」とあるのみであるが、可なり多くあつたと推測される。詳細は知れぬが、此を第五回の迫害と稱してよかろう。

寛永十五年の末頃は、段々裏面に潜んだ江戸キリシタン史になる、即ち同年末に仙臺で捕はれたバテレン四人は江戸に送られ、評定所で公の吟味にあひ、將軍自らが私に之を訊問もしたが、一向埒があかない。そこで事件を大目附井上筑後守の手に移した。井上は、おどかしたり、拷問で苦ろしめるのみでは目的を達しないことを悟り、段々甘言誘惑を用ひるやうにした。四人中二人（即ちマルチノ式見とジュアン・バウチスタ）とは、それに乘ぜられて棄教し、同宿二

人も同じくころむだ。然しそれに應ぜず信仰を頑守主張したペトロ精井は遂に穴つるしのうへ斬首に處せられた。又殘る一人のフランシスコ市左衞門といふ南蠻バテレンは、山形で捕はれて江戸に送られた。ベルナルドと二人（二人の事西洋側に傳なし）、共に信仰を守り、芝で火あぶりになつた。それは寛永十六年（1639）の多分夏頃で、江戸に於けるキリシタン火あぶりの最後である。

此等の經驗によつて井上筑後守は、キリシタンに對する政策に大變更を加へ、誘惑を一層多くすると共に、其の刑罰を公表せず、民衆の眼にふれぬやうにするに至つた。即ち其後三年、筑前で捕へたバテレン一行十人は此の如くにして盡く棄教させて、お上の御用を勤めしめ、小日向の屋敷即ちキリシタン屋敷に圍ひ住はせて一生かひ殺しにした。これから後は、江戸のキリシタンと云ふよりも小日向屋敷のキリシタン史であつて、他に捕へた者も同樣、皆其の中に囲ひ置くことになつた。此の如くにして、それから五十餘年、小日向屋敷には四五人のころびバテレンや、其の從者等が一種の別世界を作つてゐた。この屋敷最後の外國バテレンは正德四年（1715）に死んだジョアン・シドツテで、此人は棄教せず、且つ、從僕をも感化した。それで刑せられずに一生かひ殺しにあひ、所謂ジョアン榎の下に墓石を殘して異邦の土となつた。之が百余年に亘る江戸キリシタン史の最後である。

愚人の毒

小酒井不木

一

こゝは××署の訊問室である。

なまぬるい風が、思ひ出したやうに、街路の塵埃を運びこむほかには、開け放たれた窓の効能の少しもあらはれぬ眞夏の午後である。今にも、柱時計がとまりはしないかと思はれる暑さを物ともせず、三人の洋服を着た紳士が、一つの机の片側に並んで、時々扇を使ひながら、やがてはひつて來る筈の人を待つて居た。

向つて一ばん左に陣取つて三人のうち一ばん若いのが津村檢事で、額が廣く眼が鋭く髭が無い。中央の白髪まじりの頭が藤井署長、署長の左に、禿げた頭を金縁眼鏡と頬髯とでしめくゝつて、ゆつたりと腰かけて居るのが法醫學者として名高いT大學醫學部教授片田博士である。職務とは言ひながら、片肌抜ぎたいくらゐな暑さを我慢して、にじみ出る汗を手巾に吸ひとらせて居る姿を見たならば、誰でも、冗談でなしに、「御役目御苦勞」と言ひたくなる。

三人は今、ある事件の捜査のために、有力な證人として召喚した人の來るのを待つて居るのである。嚴密に言へば、その事件の捜査の主腦者である津村檢事は、召喚した證人の訊問に立ち合つてもらふために、藤井署長と片田博士に列席してもらつたのである。その證人は、檢事にとつては、よほど重大な人であると見え、彼の顔面の筋肉は頗る緊張して見えた。時々頬のあたりが、ぴくり〳〵と波打つのも、恐らく氣溫上昇のためばかりではないであらう。訊問といふことを一の藝術と心得て居る津村檢事は、ちようど、藝術家が、その製作に着手するときのやうな興奮を感じて居るらしいのである。之に反して、藤井署長は、年齢の多數のせいか、或ひは又、年齢の多數と正比例をなす經驗のせいか、一から興奮した樣子も見えず、たゞその白い官服のみが、いやにきら〳〵として居るだけである。まし

て、科學者である片田博士のでつぷりした顏には、いつもは愛嬌が漲つて居るに拘はらず、かやうな場所では、底知れぬといつてもよいやうな、沈着の無氣味さがたゞよつて居るのであつた。

　柱時計が二時を報ずると、背廣の夏服を着た青年紳士が、一人の刑事に案内されてはひつて來た。右の手に黒革の折鞄、俗に所謂、往診鞄を携へてゐるのは言はずと知れた御醫者さんである。人間の弱點を取り扱ふ商賣であるだけに、探偵小説の中にまで「さん」の字をつけて呼ばれるのであるが、この人頗る現代的で、かやうな場所に馴れて居るのか、往診鞄を投げるやうにして机の上に置き、至つて輕々しい態度で三人に挨拶をしたところを見ると、もう「さん」の字をつけることはやめにした方がよからう。

「山本さん、さあ、そちらへ御掛け下さい。」と、檢事はいつの間にか興奮をしづめて、にこ〳〵しながら、醫師に向つて言つた。「この暑いのに御出頭を願つたのは、申すまでもなく、奥田さんの事件に就て、あなたが生前故人を診察なさつた關係上、二三御たづねしたいことがあるからです。この事件は意外に複雜して居るやうですから、死體の解剖をして下さつた片田博士と、なほ、捜査本部の藤井警部長にも、かうして御立合ひを願ひました。」

　かういつて津村檢事は、相手の顏をぎろりと眺めた。この「ぎろり」は津村檢事に特有なもので、嘗てこの「ぎろり」のために、ある博徒の親分がその犯罪を何もかも白狀してしまつたといはれて居るほどの曰く附きのものである。彼は後に、「おらア、あの眼が怖かつたんだよ。」と乾兒に向つて懺悔したそうである。然し、この「ぎろり」も、山本醫師に對しては、少しの効果もなかつたと見え、

「何でも御答へします。」といふ、至つて輕快な返答を得ただけであつた。

　その時給仕が冷たいお茶をコップに運んで來たので、檢事は對座してゐる山本醫師にすゝめ、自分も一口ぐつと飲んで、更に言葉を續けた。

「先づ順序として、簡單にこの事件の顛末を申し上げます。

　S區R町十三番地居住の奥田とめといふ本年五十五歳の未亡人が、去る七月二十三日に、突然不思議な病氣に罹りました。午前十一時頃、急に、身ぶるひするやうな惡寒が始まつたかと思ふと、高熱を發すると同時に、はげしい嘔吐を催ほしました。まるで食あたりのやうでしたので、多分暑氣にでもあてられたのであらうと思つてその日は醫師を招かないのでしたが、夕方

になつて、幸ひに嘔吐もなくなり、熱も去つて翌日は何の異常もなく過ぎました。

ところが、更にその翌日即ち七月二十五日に、やはり先日と同じ頃に、同じやうな症狀が始まり、あまりに嘔吐がはげしくて、一時人事不省のやうな狀態に陷つたので、令孃のきよ子さんは、あはてゝ女中を走らせ、かゝりつけの醫師山本氏即ちあなたの診察を乞ふたのでした。その結果、恐らく食物の中毒だらうといふ診斷で、頓服藥を御與へになりますと、その效があらはれて、夕方になると嘔吐はおさまり、熱も去つて、患者は非常にらくになり、その翌日も何のことなく過ぎたのであります。

すると又、その翌日、即ち、七月二十七日に、やはり前二回と同じ時刻に、同じやうな症狀が始まり、嘔吐ばかりでなく、下痢をも伴ひ、患者は苦痛のあまり、昏睡に陷りました。急報によつて馳けつけたあなたは患者の容態のたゞならぬのを見て、始めて、尋常の中毒とはちがつたものであらうと御氣附きになりました。で、あなたは、令孃に向つて、周圍の事情を御きゝになりました。

その時、令孃の話した事情といふのが、あなたの疑惑を一層深めたのでした。然し、その事情を述べる前に、私は奥田一家の人々について申し上げなければなりません。主人はもと、遞信省の官吏をつとめて居たのですが、今から十五年前に、相當の財產を殘して死去し、男まさりの未亡人は三人の子を育てゝ、他人の後ろ指一本さゝれないで、今まで暮して來ました。長男を健吉、二男を保一、その妹がきよ子さんですが、長男の健吉君一人は、未亡人にとつて義理の仲なのであります。義理の仲といつても、主人の先妻の子といふのではありません。奥田氏夫妻は、主人が四十歲を過ぎ、夫人が三十歲を越し、結婚後十年を經ても子がなかつたので、遠緣に當る孤兒の健吉君を、その三歲の時に養子として入籍せしめて育てたのであります。ところが皮肉なことに、健吉君を養子とした翌年、夫人が姙娠して保一君を產み、更にその二年後きよ子孃を產みました。かうしたことは、世間に屢ばあることで、かゝる際、義理の子は、いはゞ夫婦に子福を與へた福の神として尊敬せられるのが世間の習ひですが、奥田家に於ても、健吉君は、實子が出來て後も、同じ腹から出た總領のやうに、夫妻から愛せられて成長しました。ことに健吉君は性質が溫良でしたので、主人奥田氏の氣に入つて氏が逝去の際も、三人の子がみな若かつたから財產は一旦夫人に讓ることにしたものゝ、行く〱は家督を健吉君に讓るやうに、くれ〲も遺言して行つたといふことで

ある。

爾來十五年間、三人の兄妹は、勝氣な未亡人の手によつて、ことに健吉君が二十七歳、保一君が二十四歳、きよ子孃が二十二歳になるまで、無事に育てあげられました。ところが、いかに勝氣の未亡人でも、人間の性質といふものは如何ともすることが出來なかつたと見え、二男の保一君は、兄とは頗るちがつて、いはゞ不良性を帶びて來たのであります。健吉君は、H大學を卒業してから、デパートメントストーアで名高いM呉服店の會計課につとめることになりましたが、保一君はW大學を半途にて退學し、放蕩に身を持ち崩しました。

未亡人は、保一君が可愛かつたゝめ、金錢上のことは、隨分やかましい人であつたけれど、保一君のために、可なりの金額を支出してやりました。然し、昨年の春、保一君が某所の遊女の身請をしようとした時には、長男の手前もあつたであらうが、徹底的に怒つて、昔の所謂勘當をすると言ひ出しました。けれど、何といはれても保一君は初志を貫徹しようとしましたので、健吉君が仲にはひつて、その遊女を身請させ、一方、未亡人の意志を尊重するため、一先づY區に別居させて、音樂店を開かせ、當分出入を禁じたのであります。ところが、未亡人は勝氣な人であるだけ、一面甚だ頑固であつて、保一君が、請出した女と手を切らぬ間は、決して再び逢はないと言つて、健吉君やきよ子孃が何度賴んでも、どうしてもきゝ入れず、遂に今回の悲劇が起るまで、「勘當」の狀態が續いたのでした。

さて、話はこゝで健吉君のことに移らねばなりません。健吉君は保一君とちがつて、素行が極めて正しかつたのですが、最近Mデパートメント・ストーアに勤めて居る。ある美しい女店員と戀に陷りました。間もなく二人の戀は白熱しました。たうとう健吉君は去る七月十五日に、未亡人に向つて、戀人を妻に迎へたいと告げたのであります。

ところがです。未亡人は、どうつむじを曲げたものか、非常に憤慨しました。或は、未亡人に無斷で戀人を作つたのが氣に入らなかつたのか、或は、デパートの店員を嫁にするといふことが不服であつたのか、或は又、信用して居た兄まで、弟と同じやうなことをするといふことに腹を立てたのか、若し、その女を家に引き入れるなら、わたしときよ子とは別居する。さうして、家督はきよ子に養子を迎へて、その男に讓ると宣言したのださうであります

これをきいて健吉君は奈落の底へつき落されたやうに、驚き且つ悲しみました。きよ子さんの話によると、兄さんはそれ以後、まるで別人のやうになつたのださうです。たえず考へこん

で居て、母親にも妹にも碌に口もきかなかつたさうです。時にはまるで精神病者のやうにぶつ〳〵獨り言をいふこともあつたさうです。

　すると二十三日に未亡人の奇怪な病氣が起りました。M呉服店では七月が決算期で、會計係は七月二十一日から三十一日まで、一日交替で宿直をして、事務を整理する習慣になつて居ります。健吉君は七月二十一日が宿直の晩で二十二日に歸宅し、二十三日の朝出かけてその晩宿直し、二十四日に歸宅して、二十五日の朝出發するといふ有樣でしたが、不思議にも未亡人の病氣は、健吉君の休みの日に起らないで、宿直の日の、殊に、健吉君が出かけて二時間ほど過ぎた頃に起つたのであります。

　きよ子孃はいつも兄さんの留守に母親が苦しむので、少なからず狼狽したのですが、兄さんは、非常に多忙な身體であるから宿直の日に呼び戻す譯に行かず、而も兄さんが休みの日は意地惡くも病氣が起らないので、兄さんに母親の苦しんだ模樣を告げても本當にせず、此頃中、母親とはあまり口も開かなかつたので、しみ〴〵母親に見舞の言葉さへかけぬ位でした。

　山本さん。未亡人の三度目の發病の際あなたが令孃からお聞きになつた事情といふのが、即ち、このことだつたのです。あなたはこれをきくなり、意味ありげな笑ひを浮べて、じつと考へ込みました。」

二

「さて、」と檢事は更に續けた。「未亡人の三回目即ち七月二十七日の發病もあなたの適當な處置によつて無事に治まり、その翌日は何ともありませんでした。あなたは二十九日の發病を防ぐために、一包の散藥を與へて、午前十時頃にのむやうにと、その朝わざ〳〵書生を奥田家に遣はしになりました。ところが、その散藥の効が薄かつたのか、未亡人は、やはり十一時頃になると、惡寒を催ほし、次で發熱して、例の如く、はげしい嘔吐に苦しみました。そこで、午後二時頃令孃は、あなたを迎へにやりましたが、その日、あなたは、早朝與へた散藥のために決して症狀が起るまいと確信して居られたのか、家人に行先をも告げないで、どこかへ行つて居られました。そこで令孃はあはてゝ他の醫師を迎へようとしましたが、その時未亡人の容體が急變して、午後三時半、遂に未亡人は絶命したのであります。未亡人は可なりにふとつた體質の人でしたから、心臟があまりに強くなかつたのか、或は中毒の原因が強く働いたのか、前三回の病氣には堪へ得たのに、四回目にはたうとう堪へることが出來なかつたのです。

令孃は二十七日に、あなたが意味ありげな笑ひをなさつたのを見て、若しや兄が……といふ疑ひがひらめいたものでしたから、その晩、委しい事情を二番目の兄即ち保一君のところへ書き送りました。で、保一君は、二十九日には、母に内證にたづねて來て、健吉君が出かけるところを見屆けてから、奥田家にしのび入つて、きよ子孃の取計らひで、あの暑さに、押入れの中にはひつてかくれて居ました。未亡人が發病するなり、飛んで出て看護しましたが、さすがの未亡人も、怒るどころか、むしろ感謝して居る樣子がありありと見えたさうです。さうして保一君は悲しくも未亡人の死に目に逢つたのでした。

きよ子孃と保一君とが死體に取りすがつて泣いて居るとき、あなたはひよつこり奥田家を訪れました。さうして、未亡人の死をきいて非常に驚き、亞砒酸の中毒ですよと大聲に御言ひになりました。それから死體をちよつと診て、すぐ樣家に歸り、死亡診斷書を御書きになりました。診斷書の病名のところに、明かに亞砒酸中毒としてありますので、それが當然警察の活動を促がし、遂に未亡人の死體は解剖されることになり、前後の事情から、健吉が眞先に拘引されて取り調べを受けることになりました。どうです、私が今まで述べて來たことに間違ひが御座いませうか。」

かう言つて津村檢事は、手巾で額を一撫でして、ちよつと署長の方をふりかへり、次に、山本醫師の顏をながめた。兩者とも、異議がなかつたと見え、たゞ肯定的にうなづくだけであつた。訊問室は暫らくの間、しーんとして、蟬の聲がキニーネを呑んだときの耳鳴を思はせるやうに響いて來た

「ところで」と檢事は二三回ぱたぱたと扇をつかひ、ぱらりとすぼめて言葉を續けた。「健吉君を取調べましたところが、母に亞砒酸を與へた覺えは斷じてないと申しました。もとよりそれは當然のことで、健吉君がすぐ白狀してしまつたら、事件は頗る簡單で、かうしてあなたにまで、この暑さの中を來て頂く必要もない筈です。そこで、私たちは、先づ順序として健吉君が果して未亡人に毒を與へたかどうかを檢べねばならぬことになりました。

さて、殺人に就て、私たちの第一に考へることは、殺人の動機であります。さうして、健吉君の場合に就て考へて見ますに、健吉君には、母親をなきものにしたいといふ心の發生を十分に認め得る事情がありました。健吉君が未亡人と生さぬ仲であること、熱烈に戀する女との結婚をきつぱり拒絶されたといふことは、立派に殺人の動機となることが出來ます。令孃の話によると、母に拒絶された後は、まるで病人のやうになり、殆

狂でもしはすまいかと思はれたといふほど心に強い打撃を受けたのですから、これまで至つて親孝行であつた健吉君でも、精神に多少の異常を來せば、恐ろしい計畫を懷いたとしても、あながち奇怪ではありません。

然し、健吉君は猛烈に殺人を否定して居ります。そこで私は、健吉君の殺人の動機となつた間接の原因、即ち、健吉君の戀人なるM呉服店の女店員に事情をたづねました。その店員は、大島榮子といつて、至つて內氣な色の白い丸顏の人でした。何でも以前、S病院の看護婦をして居たさうですが、美貌のために、醫員たちが、うるさく騷ぎ寄るので、職業を變更してデパートに出勤することにしたのださうです。S病院といへば山本さん、あなたも御開業になる前に、其處で醫員をなさつて居られたさうですね。………余談はさて置き、その大島榮子さんから聞いて見ますと、健吉君は、母の拒絕したことを告げて、非常に悲しみ、大恩ある母の意志に背くことは自分には出來ない。生さぬ仲のことであるから、なほ更、しのばねばならない、いつそ一しよに死んでくれないかとまで言つたのださうです。然し、榮子さんは、今、私はあなたが死んでは却つてお母樣に不孝になる、私はあなたと結婚が出來なければ、一生涯獨身で暮して、お友達として交際しますから、どうか短氣なことは思ひ止まつて、お母樣に孝行をして上げて下さいといつてなだめたさうです。すると、健吉君は、それならば自分も永久に獨身で暮さうといつて、情死のことはふつつりと斷念したさうですが、その後もやはり、毎日浮かぬ顏をして、時々ため息をもらして居たといふことです。

ところで、犯罪學的に考へて見ますならば、自殺を思ひ止まつたものが、他殺を企てるといふことは、極めて自然な心の推移であります。榮子さんの忠告によつて一旦は自殺の心を翻へしても心の打擊は容易に去るものではありません。さればこそ、時々長太息を洩したのであつて、その長太息が凝つて、遂に殺人といふ霧を心に降らしたのだと考へても敢て差支はなからうと思ひます。

かくて、健吉君の殺人の動機を十分に認めることには、何人も異議があるまいと思ひます。そこで次に起る問題は、健吉君が如何なる方法を用ひて、殺人を遂行しようとしたかといふことです。すると、こゝに、健吉君の殺人方法を推定せしめるに足るやうな事情が突發しました。それは即ち、未亡人の不思議な發病であります。それは惡寒と發熱と嘔吐と下痢を主要な症候として居りまして、健吉君が宿直の日に家を出かけると、必ずその二時間ほど後から始まりました。このことが、三回目の

發病の際、あなたの注意を惹いて、あなたは、若しや、亞砒酸の中毒ではないかと御考へになりました。まつたく私どものやうな醫學に門外漢たるものが考へても、その疑ひをいだくのは當然のことであります。嘔吐と下痢とは亞砒酸中毒の際の主要な症候であるさうですから、健吉君が、何等かの方法によつて、未亡人の飲食物に亞砒酸を投じたであらうといふことは、これ未た何人も異議のあるまいと思はれる推論なのであります。

さて、未亡人は、前三回の發病からは幸ひに恢復し、四回目の發病の際遂に絶命したのですから、この事實よりして、前三回に與へられた亞砒酸の量は致死量以下であつたことを想像するに難くなく、殺人者の側からいへば、第一回に致死量を與へて突然絶命させては、疑ひを受ける惧があるから、先づ三回だけ苦しませ、然る後、致死量を與へて殺すといふ極めて巧妙な方法を選んだといはねばなりません。

ところが殺人者は非常な誤りをしたのであります。それは何であるかといひますに、毒として亞砒酸を選んだことです。こゝにおいでになる片田博士のお話によると、西洋では亞砒酸のことを「愚人の毒（フールス・ポイズン）」と呼ぶさうですが、それは、亞砒酸を毒殺に使用すれば、その症狀によつて、極めて氣附かれ易いし、又、死體解剖によつて容易にその存在を發見されるから、愚人しか用ひないといふ意味ださうであります。今回の事件に於ても、殺人者は愚かなことをしました。即ち、亞砒酸を用ひたゝめにあなたの疑ひを起したのです、して見ると亞砒酸はこの場合に於ても、愚人の毒たる名稱を恥かしめなかつた譯です。

かくの如く、健吉君に對する嫌疑は、動機の點から見ても、その他の周圍の狀況から見ても、だん／＼深くなるばかりですが、然し、單にこれだけの事情によつて、健吉君が母親殺しの犯人であると斷定することは、大昔ならいざ知らず、現代にあつては、殘念ながら不可能なのであります。即ち健吉君が未亡人に、亞砒酸を與へたといふ物的證據が一つもないのであります。それがため私たちは、はたと行き詰つてしまいました。第一に健吉君が亞砒酸を持つてゐたといふ證據がありません。次に健吉君が、亞砒酸を何の中へまぜて母親に與へたといふことが、如何に委しく當時の事情を檢べても少しもありません。例へばお茶の中へ投じたとか又は、夏のことですから、飲料水の中に投じたとか、何か怪しむべき事情があつてもよいであらうに、令嬢にたづねましても、女中にたづねましても、さつぱりわからないのであります。この事情が明かにされて、而も、それを裏書するやうな物的證據を得ない間は、健吉君を犯人とすることは出來ません。それと同時に、私たちは、たとひ健吉君

に對する狀況證據が色々集つて居ても、物的證據のない限りはその物的證據をさがすよりも、新らしく事件を考へなほした方が得策だらうと思ふに至りました。一般に現今の警察官にしろ、司法官にしろ、物的證據のない場合、先入見に支配されて、物的證據をどこまでもさがしださうとするために、色々の弊害を生じ、その間に犯人を逸してしまふやうなことになり易いのです。ここで私は、健吉君を一先づ事件から切離して見たならば、どんなことを推定し得るかと、思考をめぐらしたのでありました。

健吉君を事件から除いて考へるとき、先づ、未亡人が自殺するために亞砒酸を服用したのではないかと思はれますが、その考は、言ふ迄もなく、成立する余地がありません。未亡人には自殺すべき何等の事情もないし、又、自殺するならば、わざわざ一日置きに四回も苦しむといふことは考へられません。精神異常者ならば兎も角、さもない人が、さうした死に方をするとは思はれないのであります。

そこで、未亡人の自殺が問題にならぬとすると、次に考ふべきことは、未亡人の病氣が果して、亞砒酸中毒であつたかどうかといふ問題です。未亡人は前後四回同じ病氣に襲はれて居ますけれど、四回とも果して同じ病因であつたかどうかは、容易に斷ずることが出來ないのであります。私のごとき素人にはわかりませんが、症狀が酷似しても、原因が全く別な病氣は澤山あるらしく思はれます。そこで私たちは、ここにおいでになる片田博士に御願ひして、亞砒酸中毒以外に、何か未亡人の身體から、別の病原を發見することが出來はしないかと思ひ、その方面の綿密な檢查をして貰つたのであります。

すると意外にも、片田博士は、死體の血液檢查の結果、血球の中にマラリアの原蟲を發見なさつたのであります。」

三

檢事は最後に言葉を一語一語はつきり言ひ放つて、その言葉が相手に如何に反應するかをじつと見つめた。

果して强い反應があつた。即ち山本醫師は、

「えツ？　マラリア？」

と、驚きの叫びを發して、片田博士の方を向き、本當ですかと言はんばかりの顏をした。

博士はこの時靜かに口を開いた。

「さうです、明かに三日熱の原蟲を血球の中に發見しました從つて未亡人の死んだときには、マラリアの發作も合併して居た譯ですし、又、そのことによつて、未亡人が、一日置きに、而も

同じ時間に惡寒、發熱、嘔吐を起したことを、よく了解することが出來ます。」

「けれど、嘔吐がマラリアの時に起ることは稀ではありませんか。」と、山本醫師は反對した。

「如何にも稀ではあります。然し、決して無いことではありません。」と、片田博士はにつこり笑つて言つた。「ヒステリーの婦人がマラリアに罹ると、はげしい嘔吐を起したり、人事不省に陷つたりしますから、色々の中毒と間違へられるのです。」

「そこで」と檢事は二人の會話を横取りして言つた。「未亡人がマラリアに罹つてゐたとすれば、少くとも四回の發病の際、四回ともマラリアが合併してゐたと考へてもよからうと思ひます。いや、もう一歩進んで考へるならば、はじめ三回は單なるマラリアの發作で、第四回目に、亞砒酸中毒が合併したのではないかと思はれるのであります。何となればはじめ三回は首尾よく囘復し、最後に絕命したからであります。で、實は、あなたに來て頂いたのも、この邊の事情を明にしたい爲でして、あなたは第二回から御診察なさつたのですが、その際、病氣は單なるマラリアの發作であつたか、それとも、亞砒酸の中毒症狀も合併して居たかを御たづねしたいのであります。」

山本醫師は、非常に顏を紅くし、頸筋の汗を、唇を歪めて拭き乍ら答へた。

「いや、御恥かしい話ですが、私がはじめて診察した時は、何とも病名がわからず、その次即ち未亡人の三回目の發病のときも、マラリアとは少しも氣づかず、令孃から事情をきいて、若しや亞砒酸中毒でないかと疑つたのです。今まで嘔吐や下痢を伴ふマラリアの例には一度も接したことがないので、つい誤診しました。若しマラリアだとわかれば、直ちにキニーネを用ひますから、未亡人の第三回の發作は起らずに濟んだ筈です。從つて、各々の發病の際、マラリアの發作だけであつたか、又は、亞砒酸中毒が合併してゐたか、はつきりしたことは申し上げかねます。」

「然し第四回目の亞砒酸中毒だつたことははつきり御わかりになりましたのです。ね？」

「それは、私が四回とも亞砒酸中毒だと思つたからでして、未亡人が死んだと聞いた時、死因は亞砒酸中毒にちがひないと判斷したのです。」

「けれど、あなたは、四回目の時は診察はなさいませぬでしたでせう？」

「急用が出來て他行して居たために間にあいませぬでした。」

「だが、あなたは、亞砒酸中毒の起らぬようにといつて、二十

九日の朝、書生さんに一包の藥を持たせてやられたのではありませんか。」

「持たせてやりました。然し、それは、單純な消化劑でして、亞砒酸中毒を防ぐ藥といふものはありません。中毒の方のことは、令孃に私の疑念を打あけて、それとなく注意して置きましたから、私は比較的安心して他行することが出來ました。けれども、やはり、氣になつたものですから、用事の濟み次第、奥田家をたづねると、すでに死去されたあとでした。」

檢事は山本醫師の返答をきいて、暫らく考へてゐたが、やがて言つた。

「よくわかりました。して見ると、あなたも、亞砒酸中毒だといふことは、單なる想像によつて判斷されたのに過ぎないのですね?別に患者の吐物を化學的に檢査されたのではないのですね?さうですか。それでは私も一つ、私の想像を御話しして見ませうか。即ち私はかう想像したのです。始め三回は單なるマラリアの發作で、第四回のみが、亞砒酸中毒と合併したのであると。わかりましたか。さうすると、誰かゞ、はじめ三回の發作を利用し、第四回目に亞砒酸を患者に與へ毒殺し、罪を健三君に歸すやうに計畫をしたのではないかといふ考が浮んで來ます。從つて、その人は健三君に恨みを懷いてゐるか、又は、健三君を亡きものにして利益を得ようとするものでなくてはなりません。そこで、當然考へられることは、二男の保一君のその日の行動であります。」

先刻から檢事の言葉を異樣の緊張をもつて聞いて居たらしい山本醫師は、この時、ほつと安心したやうな樣子をした。

「すでに申し上げた通り、」と、檢事は山本醫師を流し目に見て言葉を續けた。「二男の保一君は久しく奥田家に出入りを禁ぜられて居たのですが、令孃からの手紙によつて、兄の行動と母の病氣とが、何となく關係のあるらしいことを知り、二十九日の朝、兄が出かけたすぐあとへ、しのび込んだのでした。その時保一君はどういふ心をもつて訪ねに來たのでせうか。親子の愛情によつて、母を保護するために來たのでせうか。それとも他に目的があつたのでせうか。この點は非常にデリケートな問題です。母は保一君が女と手を切らぬ間は決して家へ入れないとがんばつて居ました。保一君は賣藥店を開いて居ても、辛うじて生活して行けるか行けぬの程度でありまして、時々兄の健吉君に無心を言つたらしいですが、最近は可なりに困つて居た樣子です。そこへ、妹さんから、母の病氣と兄の行動について委しい通知があつたのです。俗に、「背に腹はかへられぬ」といふ言葉がありますが、保一君が、令孃の手紙を讀んだとき、

さうした心にならなかつたと誰が保證し得ませう。即ち、母をなきものにし、兄に毒殺の嫌疑をかければ、保一君は當然奥田家の財産をもらつて、大手を振つて歩くことが出來ます。保一君は幼時より不良性を帶びて居ました。さうして最近は母をうらむべき境遇に置かれて居ました。兄とは義理の仲である、いや、たとひ肉身の兄であつても、背に腹はかへられぬ、これは一つ、この又とない機會を利用して、危險ではあるが一芝居打つて見よう、と、考へつかなかつたことは誰が保證し得ませう。不良性を帶びた人は、惡を行ふ智慧は鋭敏に働くものです。ことに都合のよいことは、自分が賣藥店を開いて居ることです。即ち、亞砒酸は手許にある、たゞそれを利用すればよいのだ、かう考へて亞砒酸を携へ、奥田家へやつて來たのだと推定しても、敢て不合理ではないと思ひます。」

山本醫師は檢事の言葉に、つくづく感じ入つた。想像とは言ひながら、如何にも事實を言ひ當てゝ居るやうに思へたので、思はず、讃嘆の微笑をもらした。然し檢事は、山本君の微笑をも知らぬ顔して、論述を進めた。「然らば、保一君は、如何にして、その亞砒酸を母親にのませたでせうか。そこが、健吉君の場合と等しく問題なのです。勿論、保一君も、母の病氣がマラリアであるとは知らず、兄の健吉君が母親に毒を與へて居るものと信じて居たのですが、如何なる方法で兄が母親に毒をのませて居るかは知らなかつたのです。で、自分勝手な方法で機會をうかゞつて毒を投じやうとしたのですが、こゝにはからずも、保一君にとつて非常に好都合な事情があつたのです。それは何かといふに、その朝、あなたから、未亡人に十時頃にのませるやうにといつて、一包の散藥が届いて居ることを令嬢から聞き出したのです。で、保一君は、令嬢に向つて、ちよつとその藥を見せなさいといつて、取り寄せ、ひそかに携さへて來た亞砒酸をその中へまぜたらしたのです。亞砒酸は白色で無味ですから、決して服用する人にはわかりません。

さて、私は、以上の話を單なる想像のやうに申しましたが、實は、かやうに想像すべき事情、いや、むしろ證據といふべきものがあつたのです。それは何かといふに、あなたがその朝、書生さんに持たせてやられた藥劑の包み紙を片田博士に分析して貰つた結果、明らかに亞砒酸の存在が認められたのであります。」

四

この言葉をきくなり、山本醫師の身體は、ゴム毬のやうに椅子からはね上つた。さうして、何か言はうとしても、たゞ唇だ

けが波打つだけで、言葉は咽喉につかへて出て來なかつた。
「まあ〳〵、」と檢事は手をもつて制して言つた。「何もそれ程驚きになることはありません。あなたが御入れになつたとは私は申しませんでした。あなたが書生さんに持たせてやられた藥の中に亞砒酸があつたとて、直ちにあなたがお入れになつたと言ふことが出來ません。だから私は先づ保一君に嫌疑をかけて見たのです。さうして今申し上げたやうなことが行はれたのだと推定したのです。然し嫌疑といへば、保一君ばかりでなく、健吉君にも、令孃にも、女中にも一應はかけて見なければなりません。殊に私は健吉君のことを一旦切り離して考へるやう申しましたがこゝに至つて、健吉君を再び引き出して來るのは少しも差支ないと思ひます。かりに未亡人の前三回の發病が、マラリアであると想像して、健吉君には無關係であるとしても、健吉君もまた、その事情を利用して、毒を投じたと考へてもよい理由があるのであります。といふと、前三回の發病でさへ、健吉君が疑はれて居るのだから、四回目に毒を投じたならば、當然健吉君が犯人とにらまれるにきまつて居るから、まさかそんなことはすまいとお思ひになるでせう。然し、健吉君自身からいへば、前三回の發病には自分は無關係だから、第四回目に、毒を投じて他人に嫌疑をかけさせるやうに計畫したと考へても差支ありません。差支のないばかりか、其處に立派な理由があるのです。

それは何であるかといひますに、實は、健吉君の戀人なる大島榮子さんから聞いたことですが、健吉君のほかにも榮子さんを戀して居る人があるのださうです。だから、榮子さんとの結婚を母親から拒絕されて、健吉君が情死を迫つたのも、榮子さんを、そのいはゞ戀敵のために取られたくなかつたゝめらしいのですつて、榮子さんは、健吉と結婚が出來なければ一生涯獨身で暮すと、かたく誓つたのださうです。けれど、氣の小さい健吉君が、なほも不安を感じたことを想像するに難くありません。從つて健吉君がその戀敵を除かうと企てたこともまた想像し得るところです。といふと、健吉君が母親に毒を與へてどうして戀敵を除き得るかといふ疑問が浮ぶ筈ですが、山本さん、あなたにはよくわかつて居るでせう。あらためておたづねするのも變ですが、健吉君の戀敵といふのはあなたゞさうですねえ?

いや、こんなことをたづねてお顏を紅くさせては申し譯ありませんが、これも訊問の順序として致し方ありません。で、健吉君が、その朝、あなたのところから、母親に藥の屆いたのを幸ひに、その中へ、亞砒酸を投じ、恰もあなたが毒殺なさつた

やうに見せかけたと考へても、これ又、決して不合理ではないと思ひます。

さて、かうなると、健吉君が投じたのか、保一君が投じたのかさつぱりわからなくなつて來ました。藥包紙に殘る指紋はもとより不完全のもので誰のものともわからず、又、ある一定の人の指紋があらはれたとしても、必ずしも、その人が亞砒酸を投じたとは斷定出來ません。同樣に令孃か、女中か、或は又、疑つて見れば、あなた自身が御入れになつたのかも知れません。で、私は、すつかり迷つてしまつたので、この問題を解決して下さるのはあなたより外あるまいと思つて來て頂いた譯なのです。」

檢事は一息ついて、ぎろりと眼を輝かして相手を見つめた。藤井署長も、片田博士も、何となく緊張した樣子であつた。山本醫師も少なからず緊張して見えたが、氣溫の高いのに似合はず、顏の色が蒼かつた。

「私に解決せよと仰しやつても、解決の出來る道理がありません。」と、醫師は細い聲で言つた。

「さうですか。私はまた。この事件の鍵を握つて居る人は、あなたより外にないと思ふのです。」

「何故ですか。」

「何故といひますと、先刻も述べましたとほり、あなたが二十九日の朝書生に持たせて寄越された菓の中に亞砒酸があつたとすると、その亞砒酸を投じたものは、保一君か、健吉君か、令孃か、女中か、或はあなた御自身か。さもなくばあなたの家の書生かでありますが、書生と女中と令孃は問題外として、殘るところは、保一君か健吉君かあなたの三人であるからです。健吉君と保一君の事情は先刻申し上げたとほりですが、あなたに就ても健吉君と同樣なことが言ひ得るだらうと思ひます。即ち、あなたにとつて健吉君は戀敵です。大島菜子さんの話によると、あなたがS病院においでになるとき、菜子さんに執拗に言ひ寄られたさうで、菜子さんは、それがうるさいために病院を辭して、M吳服店にはひつたのださうです。して見ればあなたは失戀の人であります。從つて、同じく戀敵同士でも、あなたが健吉君をにくむ程度は、健吉君があなたをにくむ程度よりも、比較にならぬほど大きいのであります。で、あなたが令孃から事情をきいて、その好機會を利用なさつたと考へることはまことに當然ではありませんか。あなたが、未亡人の病氣のマラリアであることに御氣づきになつたかどうかは、今ここで問はぬことにして、嘔吐と下痢のあることを幸ひに、亞砒酸を利用しようと企てられたことは、最も自然な推定ではありませぬか。健吉君も保一君も醫者ではありません。ですから、健吉君と保一君とあなたとの三人を並べて、誰が這般の事情を利用するに最も適して居るかと問ふならば、誰しもあなたであると答ふるにちがひありません。保一君は賣藥業を營んで居るから、

多少醫學的智識があるとしても、あなたほど容易には考へつかぬと思ひます。古來毒殺は女子の一手販賣と考へられ、男子で毒殺を行ふものは醫師か、藥劑師であるといはれて居りますから、この際にも醫師たるあなたを考へるのは、別に奇怪ではないと思ひます。保一君は賣藥業をして居りますから、亞砒酸を手に入れ易いとしても、保一君にしろ、健吉君にしろ、亞砒酸を投ずる際に、頗る大きな冒險をしなければなりません。ところがあなたは、易々として亞砒酸を投ずることが出來、而も命令的にのませることさへ出來る位置に居ます。かう考へて來ると、三人のうち、あなたを最も有力な嫌疑者と認めることは、大なる誤りではないと思ひます。」

山本醫師の顔は土のやうに蒼ざめ、額から汗がばら〳〵流れた。

「だつて私が亞砒酸を混ぜたといふ證據がないぢやありませんか。健吉君や保一君と同じ位置にあるだけぢやありませんか。」

「ところがさうでないのです。あなたは二十九日に大へんな間違ひをやつて居ます。問題の藥を書生に持たせてやつて、あなた自身が患者に與へられなかつたことも或は一つの手ぬかりかも知れませんが、それよりも、もつと大きな手ぬかりは、あなたが奥田家をたづねて、未亡人の死をおきゝになつたとき、今朝持たせてよこした藥を患者はのみましたかとおたづねにならなかつたことなのです。ところが、保一君は、あの朝、健吉君の出たあとへ、しのんで來て、令孃から、十時頃にのむべき藥が屆いて居ると聞き、若しや兄がその中へ毒をまぜはしなかつたかと疑つて、その藥を母親にのませなかつたのです。で、その藥はそのまゝ保存され、片田博士に分析してもらつたところ、〇、二瓦の亞砒酸、即ち、致死量の二倍の毒が存在して居るとわかりました。」

これをきくなり山本醫師は咽喉の奥から一種の唸り聲を發した。

「だつて、だつて、」と、山本醫師は叫んだ「未亡人は亞砒酸中毒で死んだではありませんか。」

「如何にもあなたの死亡診斷書には亞砒酸中毒が死因であると書かれてありました。ところが片田博士が死體を解剖なさつた結果、亞砒酸の痕跡をも發見し得なかつたので、博士は死因に疑ひをいだいて、血液檢査の結果、マラリアの存在を發見し、四回もはげしい發作を起したゝめ、四回目に心臟が衰弱してたほれたのだとわかつたのです。ですから、健吉君も保一君も、その他何人も、未亡人の死とは關係ありません。」

この時山本醫師は急に眼を白黑させて、机の上にふら〳〵と、うつむきに上體を投げかけた。だから、檢事の言つた次の言葉が、果して聞えたかどうかは疑問である。

「山本さん、私はあなたを、奥田未亡人謀殺未遂として告發します。」

（をはり）

成都道中記

遲塚麗水

其一

夕ばえに紅くたゞれたるちぎれ雲は、江を隔てゝ翠黛の色濃やかなる塗山の峯の彼方にたむろせり、太古、大禹が諸侯と會盟したりと傳はれる山は是れなり、重慶の五月雨晴、日頃は霧、霧あたりに籠めて、太陽の光を見るといと稀れに、蜀犬、日に吠ゆといふ古き諺の人を欺かざる四川にありて、けふの美霽は誠に珍らしゝ、

故郷の叢花を後にして、湘雲、楚雨の異境にさまよひ、更に三峡の險を踰へて、巫峡の暁猿、白帝城の暮鼓、泊り〳〵の二た夜三夜、燈を揭げて呼湖に、さまよふ歌姫の舟を喚びては、坐ろ愁腸をしぼりつゝ、汗漫の游び茲に七十日、やうやく重慶にたどりつきし余を、文字の緣淺からず、東川郵務管理局にある、F氏夫妻は、歡びてその館舍に迎へ、朝な夕な、一向らに余を款遇したり、F氏の館舍は太平門の邊にありて、坐ながら長江一帶の風光を領略し得べし、厚き磚瓦を繞らせる亞字欄ある廣き露臺には、花卉を栽えたる鉢を並べ置き、日本にては、盛夏ならでは咲き出でざる山梔子の花、五月の初めといふに早や蕾を破りて、妙香、風に傳はれり、けふは五月の四日、あすは余、重慶より十日餘りの轎の旅を、成都へと試むるその前日にてありしなり、

齡若きF氏夫妻の、その日常の生活は洋式なりき、發軔のその前夕、余があすの慶たき首途を祝すべく、特にコツクに赤飯と尾頭つきの魚の用意を命じたり、やがて日はとつぷりと暮れて、對岸の獅子山あたりより輾り出づる十三夜の月、淸光は水のごとく食堂の窓より入り來るなり、

「あすはつとめて早きお立ちなれば」と、F氏夫妻はにこやかに余を食堂に導き、三鞭の盃を擧げて余が一路の平安を祝しくれたり、一千支里に餘れる轎子の旅路、夜每の旅舍のいぶせきはいふも更なり、兵隊の跋扈、天然痘のはやる土地もありと聞

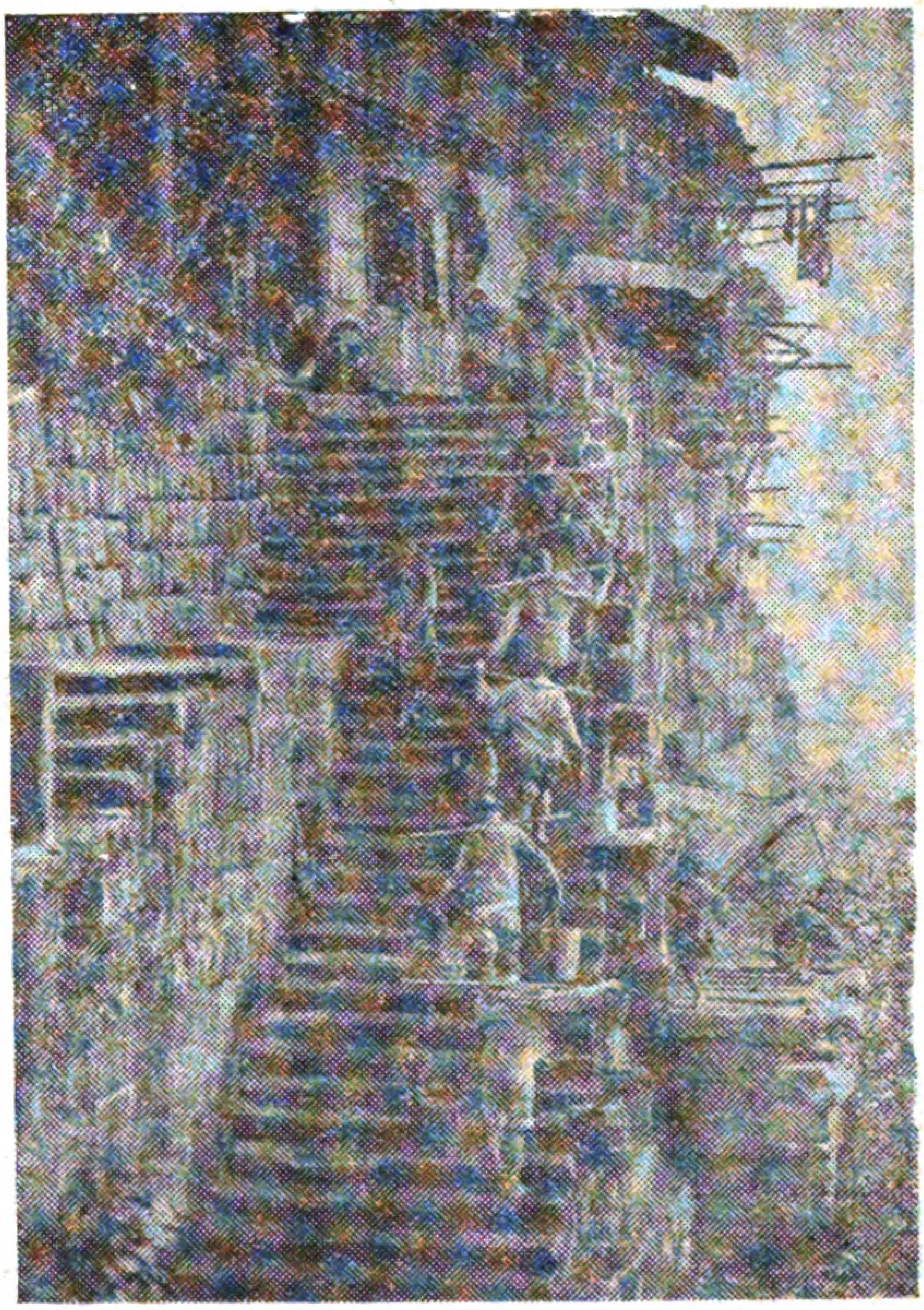
く、殊に土匪の横行は隨處にあるべし、好める道のためなりとはいへ、つとめて自愛したまへといふ、余はその厚意を謝して、杉なりに盛られたる親椀の赤飯を夷げたり、食後、露臺に籐椅子を移して夜闌に語る、晝見れば代赭色に濁りたる長江の水も、さやけき今宵の月を浮べて、うすむらさきの霧の底より寄する夜潮に、しろがね色の波長く湧いて岸を打つなり、

　と見れば月に傍ふて黒雲一つ浮び出でたり。その形蟇のごとし、月を呑んで又は吐く、

其　二

曉、大雷雨

朝餐をすませて　F氏の朱柄の轎子に上りて、先づ朝天門に近き、我が領事館に行く、G領事はあらかじめ余の爲めに成都に伴ひ行くべき轎子を買ひ、四人の轎子をも傭ひくれ、別に外務省巡査M氏といふを余の爲に同行させたり　數日前、吾が外務省の對支文化事業局より　成都圖書館に贈るべき大藏經と古籍篇全卷が領事館に到着したれば、同行のM氏は之を宰領して、齎らし行くこと丶なりしなり　言語不通の獨旅、心細からざるにあらざるに、大藏經を持護して行くこと不思議の緣なり　願はくばこの功德によりて旅中の危難を攘はせたまへと、余は自から名のりて贈大藏經使といふなり



重慶の擔水夫

　狠雨、横さまに吹き入る領事館の廊下に立ちて　余はM氏と共に轎夫を檢閲したり　相形の獰猛なる人を斥けて、つとめて容貌の柔和なるものを採る　余の轎子に四人、M氏の轎子に四人、大藏經と古籍篇全卷を納めたる大函四個は、これを二函づ丶兩分して、各擔夫二人を附したり、別に老夫頭ありて之を統御す、部署既に成れり、G領事以下の館員と乾盃して後、余の轎子を先頭に　次にM氏　次に二擔

の大藏經函、夫頭の後より發す　風雷は收まりたれど　雨はいよ〳〵猛烈なり、

凡そ重慶より成都に赴くには、二道あり、一は永川より資陽、簡陽を歷て成都に入るもの、路程實に一千二百支里、これは官道なり、一は、合川、安岳、樂至を歷、簡陽に合して成都に入るもので、是れは間道なり　官道、近ごろ土匪の爲めに路塞がる　已むなく余は間道を採りたり　その路、險なれども捷なり、八百餘里と註せらる。

猛烈なる雨を冒して、余等は朝天門邊より舟を傭いて嘉陵江を下り、更に長江を橫ぎりて重慶の對岸江北に上陸す、民船の帆を撤して、余等を載せたるまゝ轎子を船に移す、舁夫八人、擔夫四人、夫頭を倂せて十三人、膝を抱いてうづくまる、船窄くして人多し、長江の水、昨に較ぶれば數尺を增したり、味噌汁に似たるその色も一段の濃さを加へて、或は藥研形に、或は漏斗狀に、時としては常夏の國の池に咲くといふなる鬼蓮の葉のごとく、緣より捲き上りて舟を包まんとする大渦の湧き返りつゝ、逆落しに流るゝその物凄さ、艫に立てる老船頭は、右手に櫂を執り左手に舵を操り、舳邊の少年は、左手と右手とに櫂を握つて、瀧頂の猛雨に面も振らず船を行るなり、

塗山、字水と彫られたる絕壁を彼方に見つゝ、江を下ること數町、やがて江北の磧の邊に船は着きたり、城外に傍ふて嘉陵江の邊を行けば北塘の里なり、こゝには護照檢査所といふがありて、例の淺黃の木綿服に、草鞋を素足に穿き、肩より斜に彈英帶を懸け、赤さびしたる銃槍を執りたる兵士ありて、余等に護照を出し示せといふなり、言はるゝまゝに出して示せば、少時く待てといひ捨てゝ內に入る。門には紅の色の緣をとりたる三角旗の、眞中に隊長の名の魏の一字、黑く染め出したるが樹てられたり、兵士再び出て來りて、擔夫の擔へる函は何ぞと問ふ、成都圖書館に贈るべき大藏經なりといへば、又た內に入り去りしが、やがて三たび出て來りて好しといふ、余轎夫を疾く〳〵と促かして村を去る、

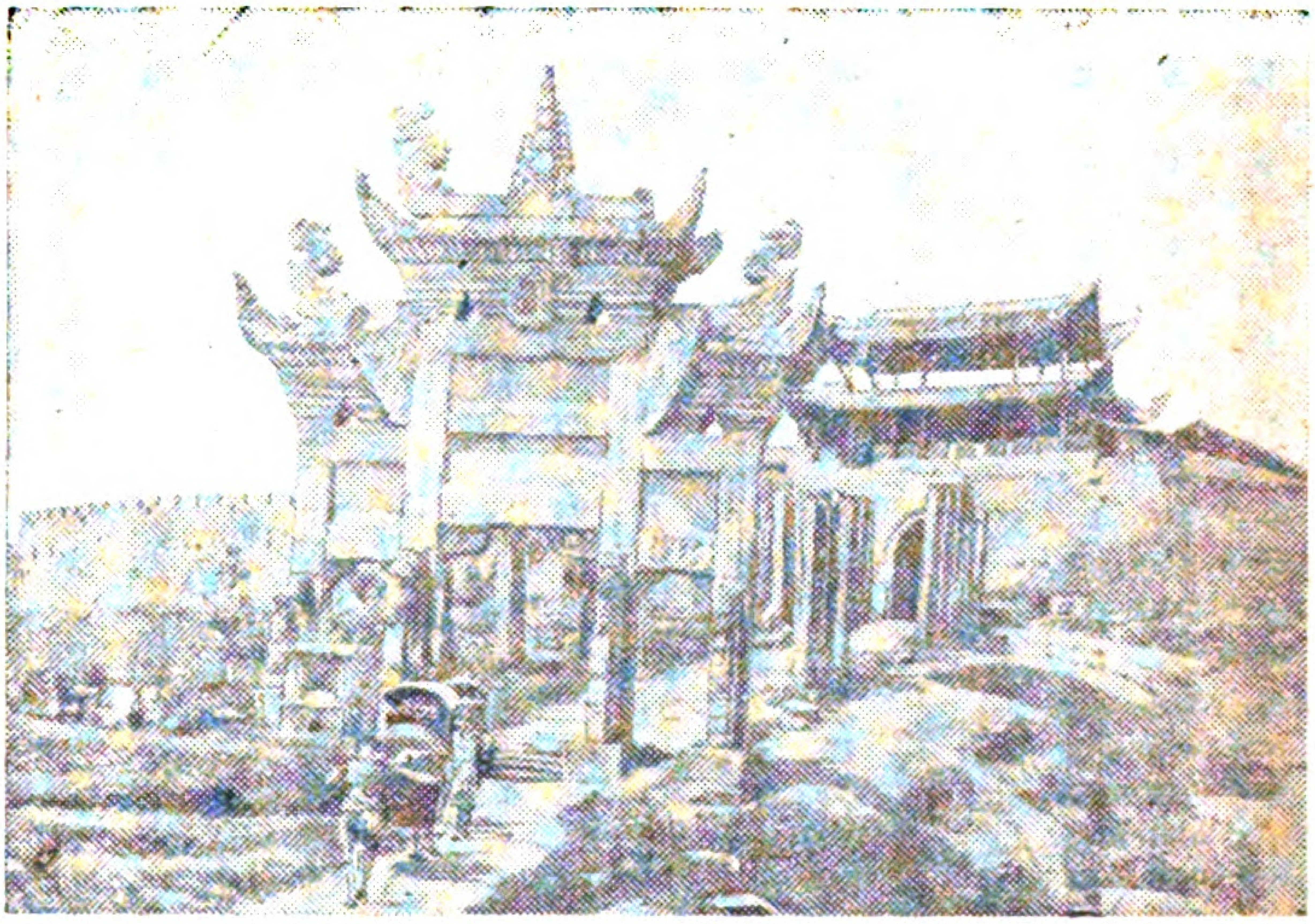
浮圖關を江の彼岸に望みつゝ、午後二時、鷲叢場に入る、名は極めて風流なれど、貧寒の村にてありき、唯ある飯店に入りて、轎夫と共に卓を圍みて飯す、油滓にて黑光りする大釜にて、湯も沸かせば肉菜も煮、飯も炊くなり、臭穢いはん方もなし、余は數個の鹽背を買ふて飯の代りに食ふ、鹽背とは山鹽に漬けたる家鴨の卵なり

これより幾個の寒村を過ぎて、午後四時、悅來場に入り、いぶせき旅館の門を敲いて、成都道中の第一夜をこゝにて過ごす、雨やうやく晴れ、夕陽、人に媚ぶ

其三

客室とは名ばかりにて、湫陋は言語に絶せり、壁は零ちて骨を露はし、煤けたる障子の紙は全く破れて風ある毎に舌を吐く、壁に傍ふて形ばかりの寢臺ありて枯草堆かく積まれたり、室に近き圊の尿氣と圊に隣りする檻に蠢めく豚の穢臭とに、余は鼻を掩ふて茫然と立盡せり、余等を載せ來りし轎夫等は、早やこの日の責任は解除されたりとて、烟房に、飯店に、巳かじゝその姿を晦ませり、余はM氏と共に、桐油紙、毛布を寢臺の上に敷き、蜘蛛の巣を拂ひ、塵ほこりを掃つて後、辛くも夫頭をすかし留めて、飯と開水とを買ひ來らしめ、裸蠟燭の火を圍んで旨からぬ夜食を攝りたり、床蟲しきりに咬み、蚊軍枚を啣んで襲ふ、昏臥の夢圓かならず、やがて鷄鳴。

こゝは嘉陵江の右岸にありて、一帶の翠阜、村は石磯に傍ふて十二三家あり、旅館は懸崖の上にありて、江山の曉色は描くが如し、開水を買ひ來りて顏を洗ふ、梁間の燕語、晴を喜ぶもの丶如し、朝飯は例の鹽胥、別に鷄卵を攝る、鷄卵十個の價、二百文の銅貨一枚なり、一個の代價が一錢二三厘に當る。



重慶北郊の浮圖關

午前六時江畔の路を降りて船に上り、嘉陵江を溯る、今日の行程は一百里、すべて船の旅なり、目の極まるところ都べて一枚の大磐石、その色赤くして火の如し、舟子二人、舳と艫とにありて船を行る、長江の水の黃濁せるに較べて、嘉陵の水はさゝ濁る春の水のさまに澄みたり、右岸の棧道は成都街道にて、岩の陰、樹のほとり、寸馬豆人、時に見え時に隱る、その絕壁の面には佛の姿の往々にして彫刻されているがあり、雨に洗はれ霜に打たれて、眉暈臉影、をぼろ／＼に見えながら微妙の相貌、また尊とくも拜まれたり、八時半、土坨といへ

ろ寒村の苦磯に船を寄せて、人夫ども朝飯くふ、余はM氏と船中にありて、F氏夫人の贈るところの、コニヤックの瓶を解いて相酌むなり、さるにても、昨日の雷雨に餞けられて千里の首途に上りしは吾が生涯に紀念すべき快心事なり、一詩なかるべからずと、枯腸を絞つて作し得たるその口占は

　國を去つて三千、麥已に黄なり
　蛾眉を窮めんと欲して渝城を發す
　斯の游、正に想ふ奇絶多きことを
　天、風雷を役して吾が行を壯にす

舷に凭つて歌ふ、河霧漸く霽れて、近翠、遠靑、波の頭とばかり推し寄せたるが、その山々の頂までも、都べて耕され盡して寸土も剩すところなし、罌粟畑、殊に多し、阿片を作るの原料なり、四川の軍閥、租税を稻田麥圃に取るに自から極限あり、唯だ烟税は自由なれば、公にはこれを禁じながら、隱には罌粟を作ることを奬勵す、花今や滿開、山阿、水隈、うすむらさきの叢簇がりて低迷するは皆なこの花なり。

　土坨より上流は水勢甚だ强ければ、數人の曳夫を雇ひ船を牽かせて上る、竹索の長さ數丈、曳夫はこれを肩にして、岸の巖を狙のごとく走りつゝ我が木遣音頭にさも似たる歌をうたふて船を曳くなり、身に一絲をも掛けず、皆な拔刀隊なり。

　船の行くこと牛よりも遲し、轎夫等は、船の胴の間に團欒して牌(ペイ)と稱する花札やうのものを弄びて博奕するなり、やがて北坪の渡頭を過ぎたり、屋の如く峙てる渡頭の大石の面に白堊泥をもて上灘錢六百文と大書したるを見る、水勢尤も激し、大船の溯りて此處に來るもの、更に曳夫の數を增して船を曳かしむ赤裸無褌の荒くれ男數十百人、曳々聲して船を牽く、吾が船は他よりも小なり、水に逆ふ竹索に觸れて、危くも顚覆せんとして僅かに免かることを得たり。

　左岸の絕壁に巖窟ありて、中に華麗の廟宇を含めるは禹王廟なり、廟と相對して右岸の峭峯より瀑布雪を噴いて落つ、風光まことに畫の如し、十二時、靑岡包を過ぎ、三時半、嶠荳子を過ぐ、船を岩陰に繋いで上陸し、衆皆な遲き午餐を攝る、いまだ器皿の不潔に慣れざる余は、獨り塩脊を取つて飯に代ふ、

　六時半、船は沙溪廟の岸に着く、危磴を登れば簇々として數十家あり、四川第三師の兵一連(九十名)、廟に宿舍し、軍歌を合唱しつゝ游行す、平和なる村の靜けき夕べなるに、婦人小兒は姿も見せず、父老の顏にも不安の色あり、余等の宿りしは三荼店とて、門邊に高く懸けたる燈籠には商人下榻と書かれたれど、その湫隘なるは、前夜宿りし旅館と異なるところなし、飯店も肉賣る家も、兵士の微發を懼れて皆な雨戶を鎖したり、僅か

に主人に乞ふて豆腐と葱と鶏卵とを求め得て、雜炊を作りて餓を凌ぐ、この邊の家々には、薪の代りに鋸木屑を用ゆ、竈の外側に鞴あり、一と握みづゝ鋸木屑を竈中に投じ、風を送りて火を吹くなり。

今宵も例のコーヤツクを傾けて、藁の臥床の上に疲れ果てたる身を横ふれば、兵士七八人、班長と覺しき髭男を先頭にして入り來り、旅客を點檢す、數名の泊り客は、慌たゞしく走り出でゝ立ち並ぶ、小兵の班長肩を怒らせ、虎髭をくひ反らしつゝ客の氏名を呼捨てにしてその職業と何處に行くかとを問へば、衆客唯々して答ふ、倨傲まことに惡むべし、但し余等はワイコレン（外國人）の故をもて、護照を檢閲されたるのみなりき、

壁一重隔てたる隣家にては、新たなる夫を喪ひて、今宵はその通夜を營むにてありき、銅鑼を鳴らし大鼓を敲いて、導師、衆僧と共に經を誦みて死者の冥福を祈る、その騷音のとぎれ／＼に、寡婦の哭聲太だ哀れなるを聞く、寢ねられず。

其　四

七日、曉五時、沙溪店を發す、桑の大樹多し、早起の少年群、木梯を架けてその葉を採るなり、危磴を登りて山の嶺を極むれば遙かに大河の西より來たりて嘉陵江の會注するを見る、是れ涪江なり、曉風殘月、氣象太だ雄大なり

七時、唯ある寒村の一茶店に入り、轎夫の飯するを待つ、童男女五六人ありて小學讀本を會讀す、皆な敏慧なる面持にて容姿も醜くからず、傍より窺ひ見れば、共和國教科書、新國文の第二冊なり

園中花　先後開
桃花紅　李花白　桂花黄
菊有多種　顏色不同

一幼女　剪彩紙　削竹籤
製爲風車　風吹車動　旋轉不已

取火燃燭　光照　四壁
人在燭傍　壁上有日影
人坐　影亦坐　人行　影亦行

座上客　遠方來
父陪客　食午飯
飯後出門　與客閑眺
前有青山　旁有流水

一々挿畫あり、我が邦の小學二年級の教科書に比すれば、生字の多少、字句の長短、筆畫の繁簡、都べて太だ難きを思はしめたり

九時嘉陵江を度りて合川に入る、人口十萬、市街は高丘に據りて甚だ殷賑なり、江に傍へる一飯店に入りて朝飯す、ここは鄧錫侯将軍の治下にて、路行く市民の三分一は皆な兵士かと疑はる、十一時、伯少市を過ぎ一茶店に憩ふ、市に岩鹽を見たり、その色灰白、鐵椎をもて砕き、天秤に懸けてこれを鬻ぐなり、村外は罌粟畠多く、又た甘藍菜の畠多し、轎その間を行く、路の隨處に黃葛樹あり、太さ五六圍、時には十圍を踰ゆるものあり、大枝小枝、宛轉として相錯綜し、葉を着ること甚密、遠く望めは丘の如し、行路の人、皆なその蔭に憩ふて、涼を取るあり、所謂榕樹なるもの、土に生ゆる都ての樹草を伐採してつゆ愛惜するの念なき西支那の地に、この樹獨り數百歳の齢ひを保ちて、斧斤の災を免るを得たるは、その木質の石よりも堅くして、斫りて器具を作るに堪へず、割いて薪料とする能はざる樗櫟の材なれはなり、四川道中別に樹らしき樹はなくて、獨りこの黃葛樹あるのみ、蜀山の兀たるは、阿房宮の爲にはあらざるなり、松栢の類は皆無、唯だ竹林は到る處に濃陰を布く、橋あるところ必す竹林あり、

日、亭午を過ぎて銅溪鎭に入る。川主廟あり、河伯を祀れるなり、路上に群れ遊ぶ雞の雛の背に、赤インキにて種々の模様を描きたるは飼へる家の紀號なり、この目標にて自他の雛を識別するなり、亦た面白し、蠶を飼ふ家多し、今や四眠なり、是れより安居に至る三十支里、嘉陵江に沿ふて絶壁の上を行くなり、路窄くして、僅かに轎子を通ずるに過ぎず、脚下はそゝり立つ大岩の、一たび足を失なへば、その深潭は我等の墓田なり、途中、幾たびも例の民船曳夫の拔刀隊に逢ふ、烈日に燒け爛れたる峭岩を、蝸附猿攀して船を曳く、揮へる汗は雨の如し

黃昏、安居の市に入らんとする時、數名の兵士立ち現はれて、我が轎を喚び留めたり、底事ぞと問ふまもあらせず、轎夫の利腕取つて捻じ上げ、老夫頭の臂をも攫んで引き行かんとす、M氏と共に轎を降りて、その狼藉を叱咤すれど、余は元來啞も同様にて言ふべき辭を知らず、M氏も亦た南語を操るに慣れざれば、唯だ怒り罵しるのみなり、衣兜より護照を出して、濫りに外國人の從者を拘引する非理を詰るの意を示せば、兵士等は己が眼を指して手を揮ふ、字を知らさるの意を示すなり、斯る間に他の兵士等は、亂拳を哀號する轎夫に加へ、白き歯を露はして、茫然として立つ余等に嘲笑の一瞥を與へつゝ、夫頭もろとも遮二無二、引き行けり、空轎路に横はりて、暮色漸く迫る、余等は策の出づるところを知らず

良や久しうして老夫頭、蒼皇として逃れて還る、顏色土の如し、隱れゐたる他の轎夫等を物色して、狭く／＼逃れ去れよと

ばかり、轎を舁きつゝ月昏き闇みの夜道をはしること三十支里、午後十時、僅かに安居鎭なる寒村に入り、村の元の素封家の王某の落魄して、荒れ果てたる祖先の宗祠を家となし、貧しき旅館を營める人の門を敲いて、その祠堂のうちに宿る、食ふに飯なし、僅かに鷄卵を擣る、行李のうちに蠟燭を探れば燃殘りのもの一寸ばかりなるがあり、幽かなる燈火のもとに枯草を籍いて眠る、古廟陰慘、何來の風に燭火は消えたり、夜雲、低く簷に垂れて疎雨を催し、怪鳥しきりに啼く、終に睡る能はず。

其五

八日、この曉、二發の鉄聲を聞く、四時ならざるに、轎夫を戒めて早くも出發の用意をなす、主人曰ふ、近ごろ兵隊の大移動ありて、軍需品の輸送始まり、行旅の雜人は皆な拉致さると、村の壯丁を雇ふて舁夫を補充し、雨を衝いて安居鎭を立つ、こゝより二十支里、中和場まで舟を僦ふて涪江の支流を溯る。

八時半、中和場に着し、いぶせき飯屋に入りて飯くふ、少女あり、明眸にして皓齒、容姿愛すべし、齡を問へば十六、名を問へば、指をもて卓の上に玉英と書せり、父は小作農、母と共に行旅の人に飯を賣るなり、少女、器皿を浣ぎ洗ふて後、客に背いて麥を碓くなり、

十一時、三滙場に入る、こゝには潼縣の一都會にて、けふは市の立つ日なり、日用の物資、皆なこの市に集る、禹王廟、殊の雜沓す、一茶店に入りて茶を飲まんとすれば、碗の中に胥の浮び漂ひて飲むに堪へず、砂糖きびを買ひ、咬んで僅かに渇を醫す、南支那の隨處にては、砂糖きびは一種の清涼的嗜好物なり、宛も吾が緣日の洋杖店のさまに、路傍の露店並べ列ねてこれを賣る、長きは丈餘、短きは一二尺、紳士も咬み、苦力も咬む、甜香にして喜ぶべし、轎夫等は、一丈もある砂糖きびを、息杖の代りにつきつゝ、且つ咬み且つ走るなり、

偶ま、町の彼方に鉦鼓の聲の起るあり、底事ぞと往き見れば、この町の素封家の先人供養の行列なりき、鼓隊、銅鑼隊、つゞいて童男、童女數十人、紅紫いろ〳〵に彩られし花燈籠を繋げて練り行く、その次には、緋紅色の法衣をつけたる僧侶十數人、中に導師と覺しき老僧は、錦襴の帽子を冠れり、その次は祭りする家の一家眷族、身に白き衣をつけ、白き帽子をかぶりたるが、手に〳〵長き線香を捧げつゝ進み行く、この行列の過ぎ行く町の家毎の簷の柱には、一炷の線香を挿しはさみて、人人掌を合せつゝ見送るなり。

正午、三滙場を出でゝ、三時塘垻に入る、過ぐるところ多く

は水田、農家は挿秧に忙かしく、皆な男子、絶えて婦人を見ず、鍤のさまにさも似たる大鋤を水牛に曳かせて田を鋤くなり、日は高かけれど、疲れたれば此處に宿る、旅館は金華店といひ、先づ旅館らしき旅館なり、門を入りて中庭、正面は上官房、紳縉を迎ふる大房なり、庭を挾んで左右に宿房あり、東廂第一房西廂第一房といふ、余等に上官房に入る、房内の不潔なるは言ふまでもなし、簷端に懸けなる籠間の白頭翁、この洋服姿の東洋人を珍らしとや思ひけん、象牙の澤あるその嘴を鳴らして、啼くことしきりなり

早や支那流の生活に慣れたれば、豚肉と胡瓜を合せ煮たるを下物として、殘り尠なのコニヤックを傾け盡し、更に燒酎を買ひ來りて飲む、やがて晩風に微醉の面を吹かせつゝ、出て、町の三聖廟にある演劇を看に行く、廟の樓門の上が舞臺にて、アセチリン瓦斯の燈火は花のごとし、正面の廣場、本殿の階段、樓門より本殿につゞく左右の回廊、その回廊の二階まで早や立錐の餘地もなきまでに看客群集す、余等は回廊の二階に席を占めたり、劇は「狂女」といひ、良人遠征し、新婦追慕の情に禁へず、終に火を縦つて焚死するに終る二齣の新劇也、登場の武夫、新婦、待女等は、皆なこの町の年少これに扮す、新らしき男女、新らしき演劇、支那西陲の農村にも、時の思潮の潜流し來ると思はれたり、悲むべきか將た慶すべきかを知らざるなり、携へ行ける双眼鏡を、傍に立つ婦女子等に貸し與へて觀せしむ、我も我もと傳觀し、拇指と人名指とを屈して環となし、一唯だ見れば小的といひ、更に左右の掌を擴げて大圓を作り、眼鏡を把つて看むれば大的と詬りて歡笑するなり、

其六

九日、曉、空雷、山を踰え、又た山を踰ゆ、十一時、毛家垻に入る、こゝもけふが開市の日とて、賑はしゝ、此の町にも三聖廟あり、梁間にある二十四孝の彫刻は粉碧紅黃いろ〳〵に彩どられて綺麗なり、

三時、龍嶴場を過ぎて宿る、旅館は例のごとく湫隘なり、盥に開水を買ひ來りて顔を洗ひ膚を拭ひ、更に犢鼻褌を脫して手づから之を浣ぐ、蚊軍の襲擊太だ猛烈なり、蚊遣香を求め來りて、終夜焚いて蚊を攘ふ、

十日、朝五時、出發、けふも曇天なり、十時半、永順場を過ぎて、張桓侯廟畔の飯店に入り朝飯くふ、主婦甚だ巧慧、我等の命ずるまでもなく、熱水を灑ぎて食器を洗ひ淨め、飯を盛りたる大碗に、更に一箇の茶碗を添ゆるなど、いかさま我が邦人の習慣を知れりと覺えて心地よし、但し、路に遊べる豚鷄さて

は狗までが、店內に入來りて、吾が食卓の下に集り、零るゝ飯粒や肉片を爭ひ食めるは、來路の飯店と異なるところなし。

路は又た山に入る、山は皆な巖なり、轎の行くこと極めて遲し、登り盡せば望み甚だ快豁、萬頃の水田を繞る四方の山、近きは雲嵐を舒べ、遠きは翠黛を拖いて、來りて脚下に朝す、天風蓬々として鬢髮を吹き揺がすなり。

零時半、山を下りて石橋場の一茶店に憩ひ、遙かに安岳の粉壁の日に燦けるを望み見て轎を促がしやがて安岳に入る、衙內に入れば市塵甚だ、繁華なり、大道を夾んで、知事官衙、兵營、市會々署ありて皆な簷牙高く啄める壯麗なる建築なり、兵士、銃槍を執つて門を警む、遊行の兵士もその數を知らず、皆な成都の督辦劉湘麾下に屬するものなりといふ、余はM氏と共に夫頭に案內させて、茶舖に入りては龍井茶を、雜貨店に入りては琺瑯燒の飯碗と、茶瓶を洋貨店に入りては一壜のコニヤツクを買ひ得て還る、二時出發、五時、鴛鴦場の寒村の入りて宿す。



石橋場附近の山路

十一日、朝五時半、鴛鴦場を發し、十時、大佛寺の村を過ぎて憩ふ、茶店の臭穢、いはん方なし、鷄卵をもて朝飯となし、昨、安岳にて購ひ得た茶瓶に熱水を灑ぎて、龍井茶を瀹す、茶味甚だ妙なり、是れより路は田隴の間に通ず、家鴨、數百千、群をなして水田に泳ぐ、亦た道中の奇觀なり、四時半、樂至を過ぎて宿す、市街は相當に賑かなれど、旅館は例のごとく極めて陋穢なり、こゝにも多數の兵士ありて廟宇と民家とに分宿し、黄昏に至れば軍歌

を合唱しつゝ游行す、町の人皆な目を側つ、晩にきのふ購ひ得しコニヤツクの罎を解いてこれを飲む、辛棘なる木臭ありて鼻を撲てり．蓋しメチール、アルコールをもて作りたる悪酒なり、．しかもその價は實に七元、英國製の商標あり、猾商の奸詐、悪むべきなり、夜に及んで多數の兵士、中庭に沓至し、ワイコレンと喚ひつゝ、余等の動止を窺ふ、闢を閉ぢて睡る．蚊の群がると無數なり、蚊遺香を求むれども無しといふ、疲れたれは手巾を顔に掛けて困睡す、夜明けて起き出づれば血に飽きたる蚊の屍骸の朱萸の如く紅きが、枕邊に狼籍す。

十二日、曉四時、櫟至を發し、六時半、童家橋を過ぎて飯す、山漸く盡きて．水田となる．路は坦らに、轎の走ること飛ぶが如し、正午、施家橋を過ぎ、一敗屋に入り、午熱を避けて風を納る、偶ま二人の兵士あり、一人の傖夫を拉し來りて大地に推し倒し、傍にありし太き棍棒を振り上げてこれを亂打す、傖夫．掌を合せて哀を乞へども肯かず、打つこと更に數十回、衣は裂けて血は滲む、傖夫痛みに堪へず泥中に顔を埋めて喘ぐ、やがて見る〳〵血を吐いて息は絶へなんとす、兵士、相顧みて乾笑し、棒を棄てて立ち去れり、村の人、堵の如く繞りてこれを觀れども、救解する者もなく、兵士の去る後、亦た半死の人を其儘に打ち棄てゝ散じ去れり．天下の官道にありて、庶民に私刑を行ふ兇暴なる兵士あり、誠に驚異すべきなり。

田隴の間を行く、涓々と靜かなる水音立てゝ、人と路を爭ふ小川には、珍らしや鬱金の色に燃えたつ睡蓮の花の簇がり咲くがあり、石榴の花も隨處に咲きて鮮紅、人の目を喜ばしむ、野薔薇の花も亦多し、田間、處々に竹を組みたる櫓を立てたるは、地中より湧き出づる山鹽を採るなり、石炭の露頭も到る處の山にはあるなり、居民手づから掘り採り來りて燃料となす、鳥には我が國の鶺鴒鳥、百舌に似たる鳥が隨處に好音を弄せり、何れもその聲を聞けどもその形を見ず、この外に鳴禽の啼く音を聞かず、山に樹木なければなるべし、困臥の夢の空しく回る夜更、明け方、名のる杜鵑は常に聞けり、坐ろ旅愁の湧くに禁へざるなり。

路々沱江の河原に入りて、芦荻の間を走ること五六支里、たそがれの渡頭に立ちて佇むれば、簡陽の城壁の、折からの落日を背にして、眞つ黑に峙ちたる、逆光線の大印籠を看るがごとし、

其七

兩少年の櫂操れる舟に乘り、沱江の流を渡りて簡陽城に入る、日は已に暮れたり、城壁の高さ三丈ばかり、その規模の壯

大なるは、南京、蘇州の城壁と伯仲す、六時を過ぎたれば城門既に鎖されたり、城の外壁の下を行きつゝ、城外の町に入らんとする折しも、城門を護れる幾名の兵士、異口同音にワイコレンと叫喚して吾が轎を停めたり、轎を卸して立ち出づれば、銃槍提げし兵士は我を包圍して、何處に往くぞといふ、成都の日本領事館へ行くものなりと答ふれば、闇のうちに近寄りて、吾等が行裝をすかし視たる後、手荒く轎上の行李を引き卸してその蓋をはねたり、心にその無禮を怒れども、余は勉めて抗らはず、衣兜より燐寸を取り出して彼に與へ、その檢閲に便したり、中なる寫眞機と、そのフイルムを取り出して、兵士等は何事をか語り合ふ、怪しき單語と手眞似にて、寫眞機なることを說明すれば、彼れ始めて頷いてこれを返す、燐寸を彼に與へしことは、異心なきを示せる方便なり

斯くして辛くも兵士の誰何より遁れ去りし我等は　轎を促がして　城外の町に旅館を求めたり、途、一大橋を過ぐ、長さは四十間もあるべく　幅は七八間と覺し、橋の上には　漆塗りの屋を構へ　金泥にて萬安橋の三大字を書きたる額を懸け、橋の央の楣間には　利渉　大川の四大字を　紺碧にて書き成したる額の懸りたり、額の下には寶龕ありて　夜も光かる金色の觀世音像、手に浄瓶を執りて慈悲の靦容いみじくも　往來の人を護るにてありき、その規模の雄大なる、長江を溯りてこゝに七十日、余は始めて斯かる壯麗なる橋を渡りたり。

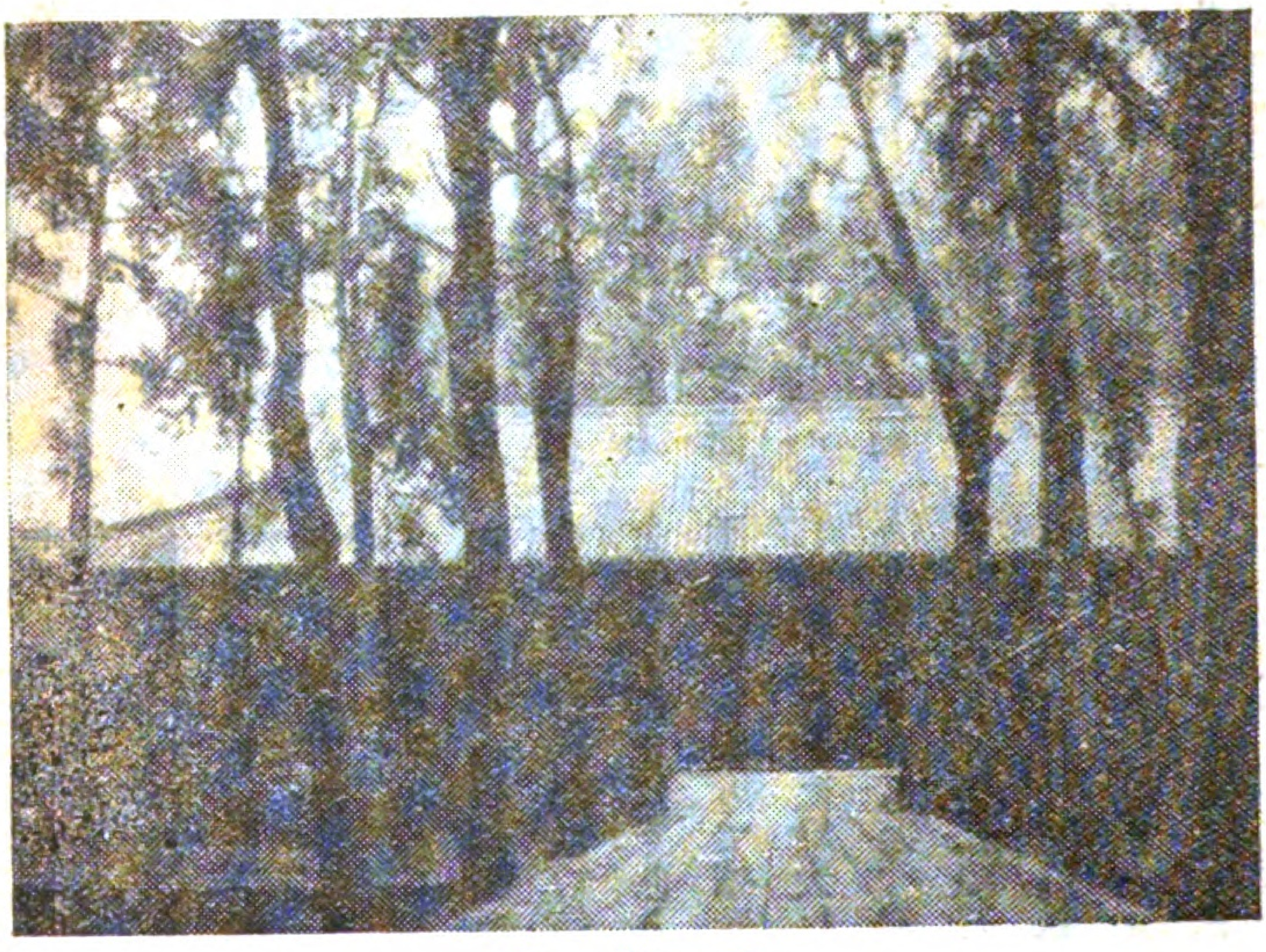
今宵の旅館も、さすがに城市に相應はしき體裁を備へ、室には二個の寢臺ありて、碧紗の蚊帳さへ懸り、板敷の床は埃を鎮むる爲め水さへ灑がれたり、開水を呼んで、滿身の塵埃を拭ひ　雞を割き、老酒を煖め盃を擧げて成都に至る早や一日半程なるを喜び祝せり。

十三日、けふは曇天、曉四時に簡陽を立つ、一望水田　水を掬くの稻禾、青うして雨ふらんとす、成都に早や近ければ、轎夫踴躍して行くこと甚だ疾し、正午、茶店子に飯し、五時龍泉驛に宿る。旅館はこれを曩昔の夜に比すれば、正に雲泥の差なり、草を藉いて臥す。

十四日、けふは成都に入るといふに　生憎の雨なり、雨を冒して發す。行くこと二十支里、昔の蜀の都、成都城の東門近く進み行けば、廣衢たちまち豁けて人の往き來も次第に繁げく、ねづみ色の制服をつけたる交通巡査の、途の中央に樹てられたる向右手走」の木標の下に立つて、交通を整理し、自動車往き人力車來る。余等は護照の檢閲を受けて、東南大門を過ぎ、我が領事館に入りたり。

其八

我が領事館は、成都城内の西南隅通俗教育博物館の園池に近き處にありて、嚴めしき支那風の門を入れば甃石の逕盡きて亭宇あり砌には花卉を栽えたり、これを過ぎて洋館、壁にも欄干にも薜蘿はひからまりし層樓にて、榑松宇平太氏、總領事代理として事を視る。書記生は賜服歸朝中にて、館員は唯だ一名あるのみ、夫人兒女數人、こゝに棲む、居留民は唯だ理髮師某の一人あるのみなり、余等が大藏經を護持して重慶を出發する前數日、無頼の市民、領事館に亂入し、應接室、事務室の椅子、卓子、窓硝子を打ち毀ち、器物若干を掠略して去れり、余、今ま十日に亘れる不安の旅程を終へて、成都に訪へば、吾が領事館はさながら廢屋の如し、言ふべき辭を知らず、榑松氏は樓上の一室を洒掃して、余等に與へ、夫人と共に欵遇して到らざるところなかりき



武侯祠

越へて一日、余は館の文案某氏を東道として先づ國立成都大學を訪ふ、蜀漢皇城の遺蹟は、早や全く毀たれて、僅かに「爲國求賢」の康熙帝の題字ある、荒れさびたる牌門を留むるのみなり、門を入れば考試の大殿あり、是も頗る荒廢したり、殿の後庭にある數棟の木造洋館は、所謂國立大學なれど、窓の戸には早や硝子なく、故紙を取つてそれを補へど、それさへ破れ果てゝ、折からの斜日を防ぐに由もなく、髮長く顔青ざめたる諸生等の、物さびしくも机に凭りて文讀むさまいと哀れなり、去つて通俗教育博物館を訪ふ、古銅器の外には、観るに足るものなく、その一室に五卅事件に死傷

じたる學生等の寫眞を並べ懸けたる、こゝにも排外の鋒芒は露はれたり、園中の獸園内に、西藏産の犛牛あるは珍とすべし、漆の如き叢毛を抽いて、牙よりも鋭き短角を現はし、金睛人を睨む、獰猛、人をして避易せしむるなり、

次の日は昭烈廟と丞相祠堂とに、錦官城の西八支里に詣づ、繞らすに丹塀を以つてし、門に漢昭烈廟の四大字を掲げたり、門を入りて左に乾隆重修碑、右に蜀丞相祠堂碑の巨碑あり、第二門を入れば、昭烈帝廟、等身の先主衣冠の像を安置し、左右の廻廊に當時の文武諸臣の像を置けり、第三門を入れば諸葛亮祠にて、孔明の塑像あり、龕前の大香爐に、香烟うづまき上る、龕の左方に徑一尺に餘れる二個の銅鼓あり、面に花文を鑄出し、繞らすに六蟆をもつてす、孔明が軍旅に用ゐたりと傳へたれど、恐らくは後代の模造品なるべし、殿内に歴代諸名家の題字多く、中に顏眞卿の草書古柏行と、杜子美の詣丞相祠の石刻あり、殿の外壁には、出師表の石刻を掲す、池畔の琴亭には古琴一張を置く、是れも孔明遺愛の琴に擬したるなり、壁間に張飛書するところ前後出師表の拓本を懸けたり、亭を過ぎて竹樹幽邃、雅潔なる小亭ありて人の遊息するに任せたり、石逕の窮まるところ、惠陵あり、實に昭烈帝と皇后甘夫人を葬りし處と傳ふ、

午後は道教の大本山、青年宮を青羊の市の邊に觀に行けり、老子の將に關を出でんとする時、關令尹喜に、千日の後、我を青羊の肆に見んといひしに因みて、後人のこゝに一觀を造營したるなり、宮は明末、張獻忠の爲に焚き毀たれて、舊時の壯觀は見る由なけれども、前庭に建てたる八角堂の華麗なるは蜀中隨一といふべし、前後に石階あり、玉の澤ある石欄これを繞り、八箇の石の柱ありて簷を支ふ、柱には蟠龍を彫りたり「老而不老」の金字額を掲げ、碧瓦綺梁、奇巧を極む、うちに老子騎牛の青銅像あり、斯る由緒ある道教の本山ながら、宿舍の兵士群れ集ひ、簷を傳へて洗衣を晒すあり、石壇の上に竈を築いて飯を炊ぐありて、狼籍を極めたり、支機石公園を訪ひ園後の堦を廻りて城壁の上を歩す、錦江の水、溶々として環流し氣象まことに雄大なり、支機石は漢の張騫これを銀河の水邊とり獲來りしもの、織女の機脚を支へたる石なりしと傳ふ、余竊かに思ふ、是れ隕石なるべしと、祠亭の中に立つてる石を見れば、高さ八尺ばかり、頂細くして根は肥え、正に黝黯なる[illegible]石にてありしなり、

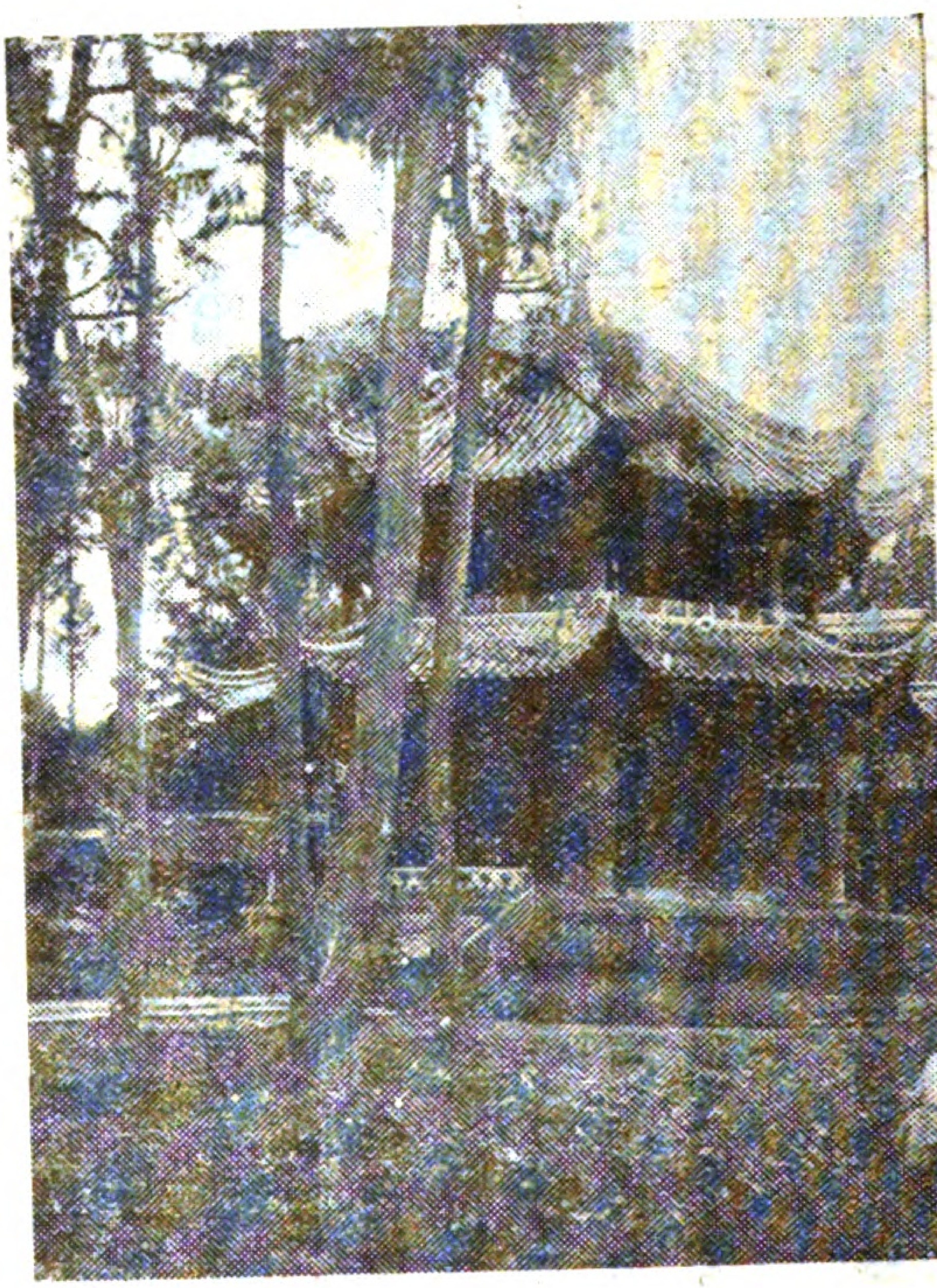
この夕、傅松氏は、成都在住の耆宿、顏雁賓、朱青長、徐子休、宋芸子、尹碩摧、顏楷、林君墨の七氏を招いて、余と會飲す、筆談湧くがごとし、顏楷氏、余の發渝城の詩に和するの送別詩あり

儒家禪經共に一發
瀛洲の文軌擁書城
君を送つて輪與す崑崙の水
萬里橋邊萬里行

翌、朝は萬里橋、駟馬橋を見、更に錦江に舟を浮べて流れを溯り、送仙橋畔より上陸して田隴の間を行くを凡そ一里、浣花溪に草堂寺を訪ひ、杜子美の少陵草堂に詣る正殿は少陵祠なり額して騷壇鼎峠といふ、中央には杜子美、左するに黃魯直、右には陸務觀の塑像を置けり、竹樹淸新のうち、閑亭ありて、老翁、人に茶を侑む。

其九

午後は佛教大學教徒の邀宴に、文珠街なる文珠院の精舍に赴けり、昨日、嘗て歡話したる四川一流の書道家顔楷氏と、市立通俗教育博物長の林君墨氏とは陪賓たり、院主禪安師、喜び迎へて余を導きて佛教、經藏、坐禪堂より、一山の大衆の合掌、經を誦して歩趨進退する念佛堂を觀、終つて院後の閑庭に



青年宮の八角堂

卓を列ねて餐を共にしたり、精進料理なり、はや薄暮となりたれば、辭して文珠院を出で、又成都藏貯公司に催うされる留東學生諸氏の歡迎會に臨む、來り會するもの數十名、四川料理なり、席上にては一切日本語を用ひ、支那語を操ることを許さず、宴酣、發企人の歡迎の後、余も一場の挨拶を試みたり、宴酣にして餘興に入る、出雲節、追分節、磯節、鴨綠江節、相繼いで出づ、聲調甚だ巧妙、無藝の余等は顔色なかりき、强ひられて辭むに由なく、李太白の詩を高吟してその責を塞ぎたり

四川料理は蔬菜を主とし、多く肉を用ゐず平淡にて本邦人の口に適す、宴央ばにして僮子、一大皿を擧げ來りて卓上に置く、皿の中央には大椀を覆せたり、椀を撤すれば、活きたる川蝦數十百尾ありて頻りに跳躍す、これに一種の酒を灑ぎ、箸もて潑剌たるその蝦を挾み食ふ、まことに鮮美なり、又た竹孫の羹あり、竹筍の根邊に生ずる蕈なれば、竹孫といふなるべし、茄子色なすその笠、絹絲を束ねたるに似たるその莖、軟脆にして齒牙の香ばしきを覺ゆるなり

其十

當初余が成都に來りし目的は、岷江を下り、峩眉に登り、その金頂の上に立つて、西の方、西藏國境に連亘する大雪山を望み見んと思へるにありき、梅松氏の言に據れば、岷江眉縣、嘉定府の邊、近ごろ土匪跋扈して、行旅全く杜絶せりといふ、余は已むを得ず初志を飜がへして、直ちに重慶に還らんと決意したり、

月の十九日、領事館を出で、M氏と共に轎に乘じて發す、前日來、成都の劉湘將軍は重慶の袁祖銘を討伐すべく江を傳へて西上する萬縣の楊森將軍と策應して、兵を成都街道に進むべく活動を始めたり、路、しばしば兵隊の行軍に逢ふ、隊長は便服して轎に乘り、士卒は素足に草鞋を穿きて銃を擔ぎ、一様にお納戸色の洋傘を翳して進行するなり、遠くより眺むれば、さながら我が花時に上野、飛鳥山に見る長唄師匠連のお花見行列の觀あるあり、偶ま馬に騎るものもあれど、馬は皆なポニーにて、胸がひ、臀がひに色美しき流蘇を飾り、懸けたる鈴を鏘々と高く鳴らし、轡を按じて徐行するさま、誠に滑稽千萬なり

兵隊の行列に阻てられて、簡陽に宿るべき筈の路は、茶店子にて日は暮れたり、旅館は兵士等塡咽して宿るべき處もなし、暗中に彷徨しつゝ、僅かに町端れの一小旅館の門を叩けば、今年の三月、北京の學生騷動の際、射殺されたるその學生の棺を護り來りし一團の人、既にこれを占領し、『忠肝義膽』などゝ大書したる旗を房頭に揭げて中庭に集り、爆竹を燃しをれり、驚いて其處を立ち出で、辛くもいぶせき旅舍に宿り、草を籍いて眠る。

二十日は四時に立ち、八時石版子を過ぎて飯す、簡陽よりは舟に上りて三時龍泉驛に入り、こゝにて午餐、夜は施家場に宿る、到るところ兵隊あらざるはなし

二十一日は樂至に晝飯し、捷路を河家灣に至りて宿し、二十二日は沱江の分水嶺を踰へ、分水驛に入り、更に山を降りて通賢を過ぐ、織物の産地にて機杼の音、街に充てり、舟を僦ふて

小河を下り、桃市に入りて宿る。主人、終夜麥を舂く、眠られず

廿三日は崇龕舖、柏鎭、を歴て壜場舖に宿る、毎日九十度を踰ゆる苦熱なり

廿四日は雨、やゝ涼し、三滙場より舟に上り、安居を過ぎて上陸、午後三時、早けれどこゝに宿る

廿五日、微雨、舟を傭ふて銅溪鎭に入り、更に涪江に沿ふて下り、伯雨より復た舟にて下ること十五里、煙雨空濛のうちに合川に入る、こゝに宿る

廿六日、朝五時、石油發動汽船嘉陀に乗りて嘉陵江を下る、八時、小滑廟を過ぐるの時、江岸に聚りゐたる一兵船より銃聲起る、船中の人、遽かに俯して丸を避ぐ、銃聲復た起る、と見れば兵士數名、輕舸を飛ばして來り、旅客を檢査するなり、停ること半時ばかり、僅かに行くを許されたり、全速力をもて流を下り十時、浮圖關を過ぎ、十一時、我が領事館の大國旗を、翠阜の一角に仰ぎ觀つゝ、終に重慶朝天門の碼頭に入りたり

門を護れる兵隊は、日頃よりもその數を増して警戒頗る嚴重なり、轎を促がして街を行けば、過ぐる町々の巨商の家は、皆な兵士の宿舍となり、簷に隊旗を樹てゝ兵士塡咽す、そのけはひ、何にやら椿事のありたる樣なり、太平門外のF氏の館舍に入れば、主人夫妻、喜び迎へて曰ふ、月の上旬、萬縣にある揚森の麾下、王、藍、許、唐、張の諸將軍、窃かに兵を進めて、一遂捲きに重慶を包圍し、袁祖銘の軍は全く釜中の魚となり、策の出づるところなく、十九日風雨晦冥の夜に乗じ、渡船數百艘を徴發して、江を渡つて北げたりしを、揚軍、これを狭撃して機關銃を亂發し、死傷八百を出したり、斯くて揚軍城に入り、王陵基を衛戍司令に任じて治安の維持に努めしめ、恂々たる物情の、やうやく平靜に復せしは、實に一昨日來の事にてありきとて、戰渦のうちを突破して、些の奇難にも遇はざりし余の幸運を祝したり、館舍の壁には丸痕を留む、都べて十二三、その一丸は、余の臥房の扉を貫いて、露臺に據へる窓の硝子を粉碎したりといふ也

其十一

往復十有八日の成都道中は、生來いまだ曾つて嘗めざりし困難なる旅行にてありき、征清の役、余は牙山、平壤に從軍して具さに辛苦を嘗めたれども、これを今次の旅行に較ぶれば、誠に言ふに足らざるを思ふなり、旅館らしき旅館に宿りしは、十八日の旅次のうち、僅に一兩夜のみ、それさへ我が國の木賃宿にも及ばざる底の設備なり、窄き轎裡に坐して、風雨と溽暑とに虐げられつゝ、山に谷に登頓上下して、疲れ果てたる身を、

薄暮、辛くも旅館にたどりつけば、轎夫等は余を棄てゝ、直ちに烟房に走り、旅館の主人も亦た顧みず、薬を索めて臥床を作作り、重き銅貨を提げて飯菜を街に買ふ、皆な自ら役を執るなり、第一に困りたるは圊に上る事なり、随所の旅館にては、屋後の簷の陰に、大いなる孔を穿ちて、上に數條の木板を架け渡し、人はその上に踞して不淨を排泄するなり、圊に降りては、檻あり豚を飼ふ、その臭穢は言語に絶せり、余等は晴れたる日には戸外に出でゝその用を便すれども雨の日には勢ひ其處に入らざるべからず、大抵我慢はしたれども、偶ま内の迫るに堪へがたくて圊に上れば、轎夫も、苦力も、旅人も、些の羞耻の色もなくその上に群踞し、烟草をふかして談笑するなり、此際余は不思議なる事を發見したり、曰く、支那の轎夫や苦力などの下層階級の人は、決して不淨を拭はざることにてありき、

兵隊の亂暴には随處に出會ひたり、勞役を嫌へる、遊惰の民が、自から志願して隊伍に編せられたるものなれば、何等の規律も節制もなく、その素質は苦力よりも劣れり、平時には日用の物資を徴發して錢を拂はず、戰時にありては勝ちても負けても掠奪を專らにす、斯る夥伴が武裝して横行す、正に狂人に刃物を持たせたるに同じ、危險千萬といふべき也.

土匪跋扈の風説も、到る處にて聞き、戒心しゐたりしが、一度もそれらしき者に遭はざりしは幸ひなりき、軍閥の全盛時代とて、その苛斂誅求により、沿道の商賈や農民は全く、困憊疲弊して、生に聊せざる有様なり、それ等の窮民は、いつ何ン時、土匪に變化するやも知れず、物騒の事どもなり、些も油断もなりがたし塵垢、肌膚に滿ち、汗臭醋の如くなれど、旅中は常に衣袴を脱がずして假睡したり、當時、贏ち得たる疥癬は、月を踰ゆれどもいまだ癒えざるなり。

通邑大都、乞食は常に群をなす、或る都會にては、乞食追放令を出して、これを隣縣に放逐し居れり、さりながら、支那人は、乞食を一種の職業と見做し、轎夫、苦力の賤しき者にても、剩れる錢あれば之を施す、余、通賢の市を過ぎて、饂飩店る入り、その一碗を食ふて午飯に代へたることあり、折から蓬頭藍面の乞食の一人、入り來れり、亭主は手を抗げて揮ひ斥けたれど、乞食は嚢中より錢を出して、我に饂飩を食はせよといふ、亭主、諾きて、余と同じ卓邊に導き、余と同じ茶碗に饂飩を盛りて與へたり、余は徹底せるこの亭主の心境に感服す、恐らくは是れ全支那人の心境なるべし、饑孚は到るところにあり、二三人折重つて死せるもあり、群蝿雨の如く集まれども、人見てこれを怪まず

支那に入りて感嘆すべきは、道路の良きことにてありき、中

にも重慶より成都に至る一千餘支里の官道には、短きは三尺、長きは四五尺の板石を敷き詰めて、山を蹈へ、谷を度り、田隴の間を過ぎて何處までも絶ゆることなし、されば余の如き生路の客にありても、地圖を披くまでもなく、その敷石の上を辿り行けば道に迷ふことなきなり、隨處の小川や溪流に架せられたる橋梁も、亦た石造若くは厚き磚瓦を疊み上げて作れる堅固のものにて、中には石欄干に龍虎獅子を高彫りしたる壯麗なるものもあり。成都の官道、昔はその道幅も、現時に比して太だ廣かりしは、その橋梁の大いなるも知らるゝが、久しき歳月に亘りて、所在の農民等は、道の左右の土をそぎ取りて、已が田畠の領域を擴むるに努めたる爲め、今は唯だ板石以外に路らしき路はなく、若し二個の轎子が途中にて相逢はば、一方の轎は岐路に避けて他の行き過ぐるを待つなりき。

轎夫、一日の勞銀は一元三十錢なり、我が一圓五十錢に當る。十日の旅程にて十三元、之に酒錢を加ふれば、四人にて六十元を超ゆ、十年前は、十日の勞銀、九吊文（我が一圓五十錢）にて事足りしと云ふ、兩三年前より、次第に上りて七八元となり、今年は俄かに十三元となる。米一斗の價、銀四圓なり。物價昂騰は驚くべく隨つて轎夫の賃銀は高くなりたれどその勞働の劇甚なる、誠に同情に値するなり、山谷を跋渉する一日約一百餘里、風雨烈日に暴露し、轎の長柄の當る兩肩の肉は、紫色に瘀血して碗さふせなるごとく腫れ上る、そのさま實に見るに忍びず、斯る激しき勞働なれば、飯を食ふこと一日數度、走りつゝ放尿し又撒屁す、轎上の余も、これには閉口し、鼻を掩ふて苦笑するなり。



地獄

沼田流人

(一)

若し、不幸な奴が、行く所を失つて俯れて立つてゐれば、陥穽が踵の下に掘られる彼が、暗い運命を背負つて、あてもなく彷徨てゐれば、その爪先に罠が敷かれる。そして、この地獄へ曳ずり落されるのだ。

然うだ。私は、その事を始めから書かう。

私は、ひどい憂鬱症で〇〇〇〇新聞をお拂ひ箱になり、町の下宿からも掃き出された。そして、幾日かこの埃の巷を彷徨(ほつきある)いた末、疲れ果てて公園の掲示板の下に寢ころんで居た。私には、その時、行く所も、食べる物も、それ等を求めやうとする氣持さへもなくなつてゐた。

日が暮れかゝつて、鈍黄色な落日の光の流れは、埃のやうに街巷を漂つてゐた。

そこへ、黄色つぽい瘠せこけた、蝸牛の殼みたいな面の男がやつて來た。此奴は、

楓の木の下で、あざひを喫しながら、長い間私を見てゐたのだ。

『お前さんは………失禮だが…………何か仕事を……
……つまり、待つてゞもゐる人間ぢやないのかね。』

其奴は、卑屈な薄笑ひを泛べて話かけた。

私は、默つて點頭いた。

『それは、それは…………。』

それから、腰を屈めて揉手をしながら、北海道の或支線の鐵道工事に就て、ばかにうまい話をもち出して、私の肩に手をかけた。

『どうだい、兄弟は………？』

私は、腹をきめてしまつた。そして彼に隨てその家へやつて行つた。

それは、新川町の車庫の裏の、暗い路次の奧で、その薄汚い家の壁の下には、幾人かの仲間が、襤褸の塊かなぞのやうに眠つてゐた。

私もすぐ、その群の中へ頭を突込んで寢てしまつた。

『さあ、これで十三だぞ。然し此奴は何てえ妙な奴だらう。ひよつとすると狂人かな………。』

この蝸牛の殼みたやうな面の周旋屋は、首を振りながら口の中で呟いた。

（二）

私の仲間は、皆どこかゝら掃き出されてきたぼろぼろな奴ばかりだつた。

一人の浮浪者は、或日自分の前途を祝福する爲に、履物まで賣飛して飲んでしまふ。そんな奴が薄暗い巷で邂逅て、また何所かへ潜り込んで、意識が足の裏へずり落ちるまで亂醉ふのだ。

そして、次の日やつと眼が覺めた時、自分がそこへ支拂ふ爲の、一片の銅貨も持つてゐない事に氣がつく。彼等は、青ざめた顏をして、嘆息をつきながら、そこの主人に話かける。

『大將。俺等は、どうしたものだらう………。實は、すつかり何所かへ落してしまつたんだ。金を、ね。』

無論、誰もそれを拾つてゐる譯はない。落したのは金ぢあなく、何かの夢なんだ。主人は、注意深く彼等を視て、氣難かしげな顏をして呟く。

『困つた事だ。誰か盜んだんぢやないかな。ひよつとすると、お前さん等自分ででも………。へ、へ、まあ俺が何とかしやう。』

そして、遂々この泥醉漢等は、そんな所へまで網を張つてゐる周旋屋の手に賣り飛されるのだ。

又、別な誰か、自分のいゝ行き場所を見つけやうとして、懐手をして街を彷徨てる人間を、その周旋屋が見つける。すると彼は、其奴の肩を叩いて、親しげに話かけるのだ。

『どうだ、兄弟！お互の爲に一杯やらうよ。』

そんな人等は、何時でも自分に話かけてくれる人を待つてゐるのだ。で、心を踊らせながら然し、怖々して言ふ。

『併し………俺は、文なしだよ。兄貴。』

『金てものは、所持てる奴が出すべきものなんだ。關はねえ。』

そして周旋屋は、どこかの居酒屋でこの男に一杯飲ませながら、その話をもち出すのだ。

『俺も、一つ行く心算なんだが、どうだい兄弟は？………』

金は、土地ほど掴めるし、仕事は樂だし、食物は素的、町の女等は安くて綺麗で素直だと、彼は喚り立てる。浮浪者は、すつかり乘氣になる。そしてもとより何所と言つて行くべき所もない奴なので、威勢よく一つ手を拍つて決めてしまふのだ。

『ぢあ一つ、大將の世話で稼いでみようか。』

そんな風で、すつかり罠にかゝつてしまふのだ。

でなければ、その陷穽へわざわざ自分の足でやつて來る奴がある。そんな眼先の利かない男は、きつと蒼ざめた顔をして近眼鏡をかけてゐる。何それの學校だの、會社を投り出されたり、漸くしがみついてゐた何所かの椅子から掃き出された連中だ。例へば、私自身のやうに。そして、乾からびて些しばかり殘つてゐる自分を種にして、食物にでも有りつかうとしてゐるのだ。怖々と、何所かからやつて來て、うまい事を竝べ立てた募集廣告をすつかり讀んでしまつてから、腰を屈めてこの暗い陷穽へ這入つて來るのだ。

（三）

出發の日の朝、ぼろぼろなメリヤス襯衣一枚きり着てゐない、若い絆かきの男がやり出した。

『時に大將。出發祝ひに、一杯やりたいんだが………。』

周旋屋は、顰面をして答へた。

『だが、待てよ。俺は一文もなくなつてしまつてゐる。お前たちの着物を、ほら、買つて來たし、それに汽車賃だらう。だから………。然し、彼方の驛には、金が待つてゐるんだ。そこで俺等は、酒も、女も、もつといゝものも御意のまゝさ。』

『さうか。ぢや向ふの街で、何も彼も………。然うしやう。兄弟！』

捨かきは、寂しい顔をして、仲間を顧た。で、私たちは、買つてもらつた襤褸の印袢纏か何かを着て、一出かける事になつた。

(四)

私たちは、全三日の懶い陰氣な旅を續けた後、その××××町に着いた。それは、高原の小都會なのだが、高い死火山の陰の、日の光もよくあたらないやうな薄暗い街で、荒寥とした開墾地の丘陵に圍まれた窪みの底にあつた。

そして、其所に待つてゐたのは、金でも、女でも、酒でもなく、嚴面をした警察の連中と、毒々しい生きた鎖とばかりであつた。

私等は其所で、頭髮の一本まで調べられ、一一指紋を取られた。若し體が惡くて働くに耐えられないものか、或は唯の一度もそんな激しい勞働に從つた事のない連中は、その時の問ひに答へれば、解放されて何所へでも自分の道を撰んで、行ける事になつてゐた。然し、周旋屋も、連中を受取りに來てゐる人々も、資本をかけて漁つて來たタコ等を――其所では、この募集夫等が然う稱ばれる。自分の肉を喰ふ生物と言ふ意味ださうだ。――そんな事で放してやるやうな誤つた者なぞ、どこにも待ち合してゐない賢い人々であつた。

『若し、そんな事でも言つてみろ!野郎共……。』

汽車を出ると直ぐ、恐ろしい人相の連中に、後で思ひ知らされる程、睨みつけられた。周旋屋も、すつかり生れ變つた人間のやうになつて、私等には遂ぞ優しい言葉の一つもかけなかつた。勿論、警察の人々は、皆自分の爲すべき事を心得てゐる、立派な人々であつた。で、一通り調べ終ると私等に言つた。

『お前等は、無論稼いでゐたんだらうな。今まで……若し、然うでないとすれば、この雇主を欺したことになつて、罰を受けなければならないんだ。此所には、お前等が皆勞働の經驗があると書いてあるんだからな……。』

『然うです。勿論稼いでゐました。』

皆、怯々と彼等の顔を見ながら、力なく答へた。肺病で、現場へ着いて九日目に死んでしまつた、寺を追はれた坊主の古手までも……。言ふまでもなく、解放された奴なぞ、ありやしない。

そこで、私等には、完全に生きた鎖と足枷とが施された。つまり恐ろしい連中が、確實に自分等の手の中へ、慘な私等を受取つてしまつた事だ。

『ぢや、皆、しつかり働くことだ……。』

安くて美しい女がある、酒も、金も、御意のまゝだと保證した周旋屋は、然う言つて、私等から離れて行つてしまつた。

それから、この哀れな連中に對して、警察署長が長い訓示をした。

つまり、お前たちは、雇主の言ふ事を何でも諾いて、力の限り働く事だ、と……。

『地獄へ行く亡者等に、こんなお說教てものがあるもんぢやねえ。』

年とつた土工夫が、ぶつくさ呟いた。

『所で大將、ほんの唇を濡らす程、ひつかけてえんだが……その……。』

『何だと！金を……てえのか。白痴犬奴！』

その時まで、默つて私たちの間を歩きまわつてゐた男が叫んだ。其奴は、しやれた雨衣を着た、頬に長い傷痕をもつた、禿鷹のやうな眼をした奴だつた。それは、ずつと後になつて解つた事だが、彼は、私たちの部屋の外に、まだ三つも部屋を張つてる男だつた。彼の口から、私等に、夥しい額の前借が讀み聞かせられた。それは全然私等に覺えのないものであつた。然し、その爲にこの支線の隧道工事に、八箇月も働らかなければならないと言ふ事が示された。」

智慧なきものの背には、笞ありと言ふ事が、文字通りに現れた。私等の背の上には、工事用のマレブルの鞭が閃いた。何か、一言でもぶつくさ言つたら、それで毆られる事はきまつてゐた。理屈がましい事でも並べたら、それこそ…………………てしまふことだらう。

私等は、立派な囚人の取扱をうけて、その町から九哩の間を、現場まで護送された。監視者等は、それこそ普通のゴリラぢやない。若し、然うする必要があれば、すぐ私等の喉笛にでも噛みつく事だらう。否、大喜びで飛びつくに相違ない。これが、生きた鎖と足枷の連中だ。

毒々しい惡罵と、威嚇とは、その一步毎に私等の額の上で笞のやうに鳴つた。皆、絞首架の前に出される囚人のやうに、悄々と曳かれて歩いた。足が遲いとか、何か仲間に話かけたとかつて理由で、幾人かの人夫がその背を毆られた。その事は、怖え切つた仲間の頭へ釘のやうに、突き刺つた。

皆、すつかり脅さめてしまつて、もう自分等を待つてゐるものは、坑ばかりだ。俺等は、………………………………………………。それに違ひない、と思ひ込んだ。事實、それに違ひなかつた。若し他のものだにした所で、それよりもつと惡いものに違ひないのだ。そして、その九哩の道に、自分を地獄

へ送つて行く連中は、幾年と言ふ長い旅を續けた程疲れて、毛の伸びた病馬のやうに弱々しく、力なくなつてしまふ。

その道が盡きると、そこに私等を待つてゐる坑があつた。

（五）

それは、現場の死の壘のやうな絶壁の下に、崩れかゝつてゞもゐるやうにして建てられた、陰氣な、朽ちかゝつた古い柩を思はせる、奇妙な建物だ。然し、それは柩ではなく、恐ろしい檻だつた。その内部の空虚な陰暗には、狼と蛇の道徳があるばかりだつた。そこへ囚られる前に、怖えた羊等は、扉の所で或特殊な生物の所へ、一人宛呼び出されて調べられた。それは、勞働者の監視をするといふ、唯それだけの奇異な仕事の爲にゐる、特別な烙印を捺された生物だ。普通の猛獣でないと言ふのは、此連中の事なのだ。彼等は、棒頭とか、立ん坊とか稱ばれてゐた。

『もちつと、前へ出ろ！山崎ていのは、汝か…………。』

そんな風にして、私等は再び總ての事を調べられた。かなり前から其所にゐた人夫等は、自分と同じ運命の陷穽に落ちて來た人間を囲繞て、愁はしげな薄笑ひをしながら、見てゐた。陽が落ちかゝつて、佗しい黄色な光はこの断崖の下の空地を照した。建物の前の、××××の河流は、氣味惡い沼のやうに澱んでゐた。對岸の死火山の下の深林では、啄木鳥が懶げに音を立てゝゐた。

最後に私の前へ來た時、意地惡いヴルドッグのやうな顏をした監視者が、訊ねた。

『變な奴だな。何だつて、こんな所へ來たんだ。』

『稼ぎに…………。』

『此所は、地獄だぜ。おい！何を稼ぎに來たんだ。』

『知らない。』

『何てえ事を吐すんだ。汝は、白痴か。』

『さうかも知れないよ。』

『ハ、ハ、ハ、…………。然うだらう。』

其奴は私の肩まで垂れた髮に觸つて見て、哄笑して仲間の奴に訊ねた。

『汝等、誰か知らねえか。此男の事を…………。』

『其奴あ、必然狂人だらう。』

周旋屋の家で、私の隣に寢てゐた軀幹のひよろ高い縮毛の奴が言つた。

『それに、其奴あ壞れかゝつてる。』

別な奴が、つけ足した。

『壞れかゝつてゐる？　何の事だ、それは…………。』

監視者は、困つたやうな顏をして、訊ねた。その男は、私を指して彼に告げた。

『何の事だか…………。其奴が言つたんだ。何所も彼所も、螺旋が壞れてぼろぼろだつて…………。』

私はその説明に違ひないつて事を證明する爲に、一つ點頭てみせた。

『へ！此奴あ…………、そんなにぼろぼろになつて、…………狂人奴！何が出來るんだ。』

『何でも。』

『何でも…………ふ！笑はしあがる。ぢあトロでも押せるか。』

『それが俺の用事かい。』

『然うよ。』

『ぢあ、それをやらう。』

私は、溜息を吐いて、微笑した。

(六)

人々は部内へ這入つた。そこは、窖のやうな無氣味な陰暗さだつた。高い壁の上に、細長い玻璃窓が誰一つあるきりで、加之それは暗く煤けて外部から蜘蛛の巣のやうに鐵線で覆はれてゐた。その爲に、隅の方など手探りをしなければならない程の暗さだつた。窓の下の側には、種々な工事用の道具や、セメントの樽、その他の材料がごたごたと積まれ、一方の壁に沿ふて、居住者の寢具になる襤褸が、土間に直接に敷かれた莚の上に散ばつてゐて、その中が廣い通路になつてゐた。入口に近い土間には、素張しい大きな長い食卓があつて、人々はその周圍に立つたまゝ食事する仕掛けになつてゐた。その側に焚火の爐があつて、片眼で、傴僂の倭小な老人が、そこで炊事をしてゐた。

私は、そこへ蹲つて、しみじみと屋内をみまわした。總ての物象が、重苦しい息をひそめて、灰色な眼を光らせてでもゐるやうに、暗がりに蹲つてゐた。

入口の扉には、重い金具がついてゐたし、そこにはもつと別な、生きた扉も立つてゐた。それは、何時でも吠え立てる、二本の足で追かける、そして心臟に嚙みつくかも知れない恐ろしい代物だつた。

間もなく私等は、慘な暗い顏をして食卓についた。皆、沈んで考へ込んでゐた。

自分のいゝ運命を發見さうとしてゐた人間は、その時自分を俘へてゐる恐ろしい鎖と、青黑く瘦せた氣味惡い運命の手を、

發見す。安くて美しい女と、金との代りに、心髓までも拐り喰ふ狼と、鐵の鞭とが與へられ、うまい酒をと希つた奴には、壁辛い切干汁と、惡息のする蘭貢米の一皿とがあつてがはれ、腐つたやうな襤褸を敷いた地面の寢床が、陷穽の底に待つてゐたのだ。

自分の運命が決まると、皆その地面の襤褸夜具に纏つて横たはつた。その時、こんな所の居住者になる事をよさうと、心を決めた奴も確にゐたに違ひないのだが、彼等は二日と經たない間に總ての事を思ひ知つた。それは、唯考へてみただけだと言ふ事を。どうして……手輕に選び出せるやうな地獄ぢあ、決してないのだ。

私等は、土塊かなぞのやうに自分の頭をそこへ投げ出して、眠つてしまつた。慘めな夢の中で、哀れな生物は、苦しい息づかいで呻いたり、訴へるやうな泣聲で譫言を呟いたり、果しもなく嘆息をくりかへしたりした。

冥府のやうに閑寂とした屋内で、監視者等の微な呻きが聞え、重苦しい足音が、のろのろと頭の側を通り過ぎた。手に提げた蒼白いカアバイトの灯光が、陰慘な視線のやうに眠つた人々の顏の上を流れた。私は幾度となく、その、人の呼吸を覗ふ怪異な生物のやうな跫音を、夢現の間に聞いて惱ましく醒めた。その度毎に、別などの監視者かが、腹立しげに唇を鳴して唸つた。

（七）

翌朝は、黎明に皆青ざめた惑亂した顏で、夜具の中から這ひ出て來た。

『へ！草の葉片のやうに、青くなつて慄えてあがる。』

年老つた、灰色の楔形の腮鬚を生やした、軀幹の高い監視者が嘲るやうに嘲笑ひしながら言つた。

惡臭のする、鋸屑のやうにぼろぼろした外國米の一皿の飯と、鹹辛い切干汁の一椀との朝食が私等を待つてゐた。前から此處にゐた連中は饑えた犬のやうに、食卓を圍んで貪り食つた。

その貧しい朝食が濟む頃、六十位の老人夫が泣聲を立てゝ叫び出した。彼は、ずつと前から此所にゐた男で、白痴の犬のやうな情ない顰面をしてゐた。この老人夫は、齒が弱かつたので、生煮えの切干を顏を顰めて嚙つてる間に、隣にゐた若い人夫に、その飯を一掴み盜まれたのだ。

『こら、こら、…………』

彼は、蹲まり込んで食卓の下を覗きながら叫んだ。

盜人は、食卓の下へ這込んで、謔けた冷笑をしながら、その

食物を食つてゐたのだ。彼は、煙管のやうな黒い空虚な顔をした、佝僂の魯鈍な若者だつた。

『老耄犬奴！何を吠えあがるんだ。』

奇妙な木の瘤のやうな顔の監視者がやつて來て、哀れな被害者の背を蹴つた。老人夫は地面へ潰れ込んで、口の中でまだ嚙み切れない食物を嚙みながら、涙を流して何かくどくど呟いた。

『へ！泣面をしあがるねえ。』

その監視者は、彼の顏へ唾を吐きかけて、行つてしまつた。

二人の監視者は、食卓の下から一握の食を盜んだ若者を曳ずり出して、その首の骨が碎ける程も毆り据えてから、二十挺の鋤簾を彼の背に縛り着けた。

私等はすぐ、工事の現場へ曳き出された。瘠せた、鼻の曲つた藥屋の古手は、路傍の靑い蓿蒿の實を拾つて、それを口へ入れやうとした時、この不運な奴は、彼のすぐ後からついて來た監視者に發見(みつけ)された。

その監視者は、人夫等に蝎と呼ばれてゐる猛惡な奴であつた。事實この男は、それに相違なかつた。彼は、地の上を這つてゐる、その厭はしい生物の相貌をそのまま具へてゐた。その屈まつた格好は、恰もその虫のやうな奇怪な形をし、恐ろしい眼は、黄色つぽく腫れ塞がつたやうな瞼の下で、氣味惡く光つてゐた。彼は、いきなりその藥屋を地面へつき倒して、……………………………………………………。其奴は、病人のやうに烈しく嘔吐した。蝎は、其奴の顔を二度ばかりそこへ擦りつけてから、一言も口を利かないで離れ去つた。

もとの藥屋は、嗚咽るやうに呻いて、眼に一杯涙を溜めて起き上つて、靑ざめた顔をして歩き出した。

前からそこにゐた人夫等は、もう腹が空つて、萎れた粟のやうに乾びてゐたのだ。私は――――いや、新しくやつて來た連中の誰も彼も――――もう自分までが、哀れな死にかかつた犬にでもなつたやうな、慘(みじめ)な暗い心になつた。

（八）

仕事は、まつたくひどかつた。

墜道の暗い坑の中で、土を掘つて終日を過すもの、六十鎖(チエン)も離れた河岸まで、トロで土を運ぶもの、他の約半數のものは斷崖を切崩す作業をしてゐた。

陰濕な暗い坑の中には、靑ざめた陽光が辛うじて手許の見える程流れ込む。その中で、闇に滲まされて人々は、默々として働いた。

重い力なげな詛嘲の聲、退つた土砂の崩れ落ちる音、それが、從い、果しもない哀訴を繰り返してゞもゐるやうに續いた。

時々、その暗い壁に吸着いて、彼等を見張つてゐる監視者等の脅かすやうな舌打ちと、疲れ果てた人夫等の哀れな嘆息とが、その響の中に慄えた。

二十分位の間を置いて、重苦しい轢音を立てゝトロが押される。私は、四十ばかりの恐ろしく默り込んだ、蹙んだやうな奇妙な顔の男と二人で一臺のトロをあてがはれた。川岸まではかなりの勾配があつたので、私等は土砂を積んだトロに乘つて、制動機を加減して行くのだつた。

川岸の埋立をする箇所には、あの意地惡い蝎が見張つてゐた。彼は、發狂者のやうな無氣味な叫聲を擧げて、一一叱言を言つた。その男を、地の下百尺も埋めてやり度いと思つてゐる人間でも、そこでは馬車馬のやうに從順に働くよりほかなかつた。何故かなら彼は、腰に拳銃の革嚢を結着けてゐたし、手にはマレブルの素張らしい笞を持つてゐたから。マレブルや拳銃が、どんな土を掘るに用ひられやう。此獄の前で一歩を誤つたなら、それこそ普通ぢあすまないのだ。其所では——何所でも、然うではあつたが——嘆息も吐いちあゐられなかつた。この、恐ろしい道具を持つた怪物は、蝎にでも飛びかかるやうに、默つて來る。人々は、その叫聲と笞の唸りとの下で、馬車馬のやうに酷使はれた。否、馬車馬でも、若し泥濘から匍ひ出せなかつたりしたら、僅かばかりの吐息の暇ぐらゐは容されるのに、此所では疲れ果てたダイナモのやうに、間斷なく動かねばならなかつた。

埋立場で土を均してゐた一人の若者は、ほんの二分ばかり自分の脚を掴んで跼まつてゐた爲に、恐ろしい杖を背中に喰はされた。

彼は、ひどい脚氣症で、勿論斯うした勞働には耐えられない程の容態だつたのだ。その、病の爲に全身氣味惡い程腫れ上つた若者は、その一つの打撃で、……………………。

蝎は、足の爪先で一寸其奴の頭に觸つてみて、側で慄えながら鋤簾で土を掻いてゐた人夫に言ひつけた。

『此奴を、彼所へ引ぱつて行け!』

氣絶した奴は、水溜りへ曳ずつて行かれて、その中へ頭を浸された。

他の人人は、もう其所に何事もなかつたかのやうにして、働かなければならなかつた。

汚い水溜の中へ頭を漬けられた男は、二十分位の後蘇生し

て、死人のやうな惨な顔をして這出して來た。

『豚奴！怠けあがると、こら………。解つたか！』

マレブルの笞は、彼の額の上で鳴つた。

その聲を聞くと、哀れな病人は、發作でも起きたやうに痙攣的に慄へて、無意識に鶴嘴を動かし始めた。それは、…………………………………………、惨な象だつた。

人々は、微かな呼さへもなし得ないで、たゞ陽の落る時を待ちながら、手も足も離れ離れな生物のやうになつて、果てもない苦しい作業を續けるのだつた。

私には、その十四時間の仕事が、仝二箇月の間手を休めないで、働き續けた程にも思はれた。

誰も彼も、揉みくちやになつた襤褸のやうに疲れきつてゐた。

あの、食物を盗まれた老人は、沈んで行く夕陽に掌を合せて禮拜し、側に立つてゐた同僚にそつと呟いた。

『日が暮れる………。兄弟………。』

彼は、小兒のやうに嬉しげに、微笑してゐた。意地悪い蝎は、それを見逃さなかつた。

『老耄蟇奴……仕事さへ止めれば、歡んであがる！』

不運な老人は、太陽に感謝した罰で、その額を一つ毆り飛ばされた。

（九）

鋭い叫聲と、何かの頽れ、落ちるやうな激しい物音が、眠沈んでゐた私の頭に玻璃の破片のやうに突き刺さつた。私は傷むやうな驚愕に眼を覺して四圍を見まわした。

人夫等は、皆醒めて不安げに眼を光らせながら、暗がりに頭を擡げてゐた。

『靜に……野犬ども！誰に頼まれて眼を光らしてあがるんだ。』

むやみに軀幹の高い、梟の嘴のやうな妙な鼻をした監視者が、瓦斯燈を揭げて私等の枕元を歩きまわりながら、叱つた。

然し、事件は、二分の後明瞭になつた。

兩足を血まみれにした若い人夫が、首を結られた犬のやうに泣き叫びながら、七八人の監視者等に曳ずられて來た。それは、瘠せこけた意地悪い靑ざめた蟷面の男であつた。彼の兩足は、……………………………………………………………………………………からの水のやうに流れ出てゐた。その軀は、軀は、薬かなぞのやうにひどく毆られて、破れた汚い襯衣の中で熱つて震へ、その眼は、怪しい炎の様に

燃えてゐた。

そして、軀を蛇のやうに蜒らせて跪きながら、かちかちと齒を觸れ鳴して頭を振つて、氣味惡く叫ぶのだ。

監視者等は、その半死の男の周圍に立つて、うまく擊ちとつた獲物を圍繞(とりま)いてでもゐるやうに、何か話し合つてゐた。

『どうしたんだい。これは…………。』

誰かが、怯怯しながら訊ねた。

蝎は、恐ろしい毒薊を人々の耳に突き刺すやうに言つた。

『見ろ！此奴は、飛つちよをやり損じたんだ。汝等(てめえたち)、そんな事を考へてでも見ろ…………、それこそ、……………………………。』

飛(とび)つちよと言ふのは、逃走の意味に用(つか)はれる彼等の合言葉なのだ。

その男は、前の日の午前、私に二言ばかり呼いた。

『どうしても、俺は歸るよ！妻(あれ)の所へ…………。』

彼は、別れて來た妻の事で、汽車の中でも私に何か言ひかけたのだつた。彼は、その事で、目に見えて惱んでゐた。

『どうやつて…………？』

で私は、彼の手段を訊ねたのだ。

然し彼は、その陰鬱な意地惡い眼で、凝然と私を凝視ただけで、何も言はなかつた。長い間彼は、一人で考へてゐたに違ひない。そして、便所の窓から、うまくやれば戸外へ脫げられると言ふ事を發見(みつけ)した。

『さうだ！あのほかには、蜘蛛だつて這出る所はない。』

彼は、そして人々の寢入るのを待つてゐた。何も彼も、うまく行つた。窓は、造作もなく開いた。然し、そこは地面からかなり高く、それに暗がりなので、不運な男は、自分の爲に口を開いてゐる陷穽へ、力まかせに飛び降(くだ)つた。

そこの窓下には、三寸釘を倒に植えた板を五六坪も敷つめてあつたのだ。監視者等は、そんな恐ろしい罠をかけて、陷穽の口にあたる便所の窓を、故意(ことさら)に開くやうにして置いたものだ。

慘な逃走者は、跣足でその植え並べた釘の上へ自分を投げつけた。勿論、その外の何所にも、彼の足を置く所はないのだ。

彼は、自分の力で、足に突き立つた釘を拔く事さへ能(でき)ないで、そこへ潰れ込んで肺臟の破れるやうな聲で泣き叫んだ。

監視者等は、悉皆承知してその叫聲を待つてゐたのだ。そして、犬のやうに群り集つて、針づけになつてゐる男を、ぼろぼろになる程も毆りつけた。

哀れな男は、もう死ぬばかりになつて、曳ずり込まれて來たのだ。彼は、獅のやうに腫れ上つた頭を擧げては、烈しく土に

打あてゝ…………………………吹きながら叫で立てた。その度毎に、…………………………、血塗になつて腫れ上つた軀は、踠き戰いた。

『放棄といて、…………………………………………………………。』

蝸は、厭はしい笑に顏を歪めて、爐の方へ歩いて行つた。監視者等は、皆彼の後から跟いて行つてしまつた。

半死の男は、土に爪を立てゝは、軀を起さうと踠いて叫んだ。然し、その注くやうな聲は、唯死にかかつた獸の呻聲のやうで何の語も聞取る事が出來なかつた。軈てその哀しげな不氣味な叫喚の聲は嗄れて、亂れた苦しげな呼吸の裏に、舌縺れしながら何か譫言のやうに呟き始めた。そして微かに首を振つては、さめざめと歔欷くのだ。

年老つた、灰色の髯の監視者がやつて來て、愁はしげに彼の上に跼まり込んで覗いた。間もなく、彼等は皆でやつて來た。そして、この瀕死の男を席へ容れて、何所かへ運んで行つた。

夜は再び明け離れたが、あの瀕死の逃走者が何所へ行つたものか、誰にも解らなかつた。

『あれは、どうした。死んでしまつたのか。』

私は、蝸に訊ねた。

蝸は、捩錐のやうな恐ろしい視線で私を凝視して、矜すやうな手眞似をしたきりで何も言はなかつた

その態度から、あの死にきらない屍は、此所よりももつと惡い所にゐると言ふ事は解つたが、それがどんな所なのか、私にも、他の誰にも解らなかつた。

そして、その事に就ては、皆恐ろしい威迫の針で脣を縫はれてしまつた。

(十)

朝の食事が濟んだ時、一人の若者が、腹が痛むから休ましてくれと言ひ出した。その男は、食ふ事が能なくて村を迷ひ出て來た百姓で、土塊のやうな重苦しい魯鈍な顏をしてゐた。

『然うか。それぢあ、汝を病室に容れてやる…………。』

蝸が　怪しい薄笑ひを顏に泛べて言つた。

『どうぞ　お助け下さいませ。』

彼はきつと、藥と、何か些しばかりいゝ食物と、それから暖物のついた室にでも寢せられる事と思つたに違ひないのだ。彼は、蝸に連れられて、道具や材料の積まれた隅の方にある奇妙な室へ連れ込まれた。

人々が、勞役から歸つてから、彼はそこを出された。彼は、

涙と鼻汁とで汚れた惨めな顔をして、土まみれにたつて這ひ出して來た。一言も口を利けないで、嗚咽ながら人々に掌を合せ、地に頭をすりつけてむやみに八方へお辭儀をした。

『腹は、癒つたか………。』

蝸は、其奴の肩を杖でつゝきながら、冷笑つた。もとの農夫は、墓坑からでも這出して來た人間のやうにすつかり青ざめて、わなわな慄えながら唯幾度も地面に額を打つけた。

『白痴奴！　だからつまらねえ事を言ひ出すもんぢやねえ。』

木の瘤のやうな監視者が、重苦しい聲で言つた。

『彼所は何だ。君………。』

私は、彼が壁の下へ來た時、その肩に手をかけて言つた。

『墓だよ。』

『墓？』

『墓だよ。』

『どんな墓だ………。』

『墓だよ。』

土地を失つた百姓は、泣くやうな聲で同じ事を繰返してゐたが、恐ろしい眼をして私に見入つた。

『何だつて、そんなにお前さんは…………。もう聞かないでくれ。』

彼は、そこに蹲まつて、兩手で顔を掩ふてしくしくと泣き出した。

然し、それがどんな墓坑だかと言ふ事を、暫くしてから彼自身、呪はれた人の譫言のやうな調子で語り出した。

…………鐵板で張つた重い扉を開いて、蝸はその暗い墓坑のやうな窖を指した。彼は怖々と、その恐ろしい坑へ進み入つた。

『へ、へ、白痴犬奴！　悠然休め…………。』

監視者は、重い音を立てゝ扉を閉めて行つてしまつた。

農夫は、耳をすました。立去つて行く人間の足音が、恐ろしく深い地の底からのやうに微に聞えて消去ると、屍室の底のやうな息苦しい闃寂になつた。彼は、耐えがたい不安の裡に一歩進み出ると、突然深い坑の底へ顚倒に陷ち込んで何かの屍のやうなものに頭を打ちつけた。彼は、黒い毒汁の澱みのやうな闇の底で、發狂したやうな叫聲を擧げて起き上ると、再び何かに躓いて倒れた。

手探りに燐寸を探し出して、點火したのはかなり長い間を、夢中に跪きまわつた後であつた。黄色つぽい弱々しい灯光は、途を失つて暗い坑の底を溜息のやうに慄えながら、暫しの間彷徨ひ照した。

そこは、宛然陥穽のやうに深く、逵の上に鐵板で覆はれた室の壁が見え、地面から底は冷い屍のやうな土の膚の露出れた坑であつた。彼が頭を打當てたのは、軀を蹈めて地底に額をあてて俯した、…………………………。それは、

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

………………………………………………。

そこから二歩離れた隅には、重なり合つた……………あつた。……………………、地面に埋る程も顔を押あててゐた。その上に俯した……………………、…………………………………。彼等は、然うして死の前に殘された幾時間かを、闇の中の戰のやうに跪き通したのに違ひない。

腐れ朽ちて行く屍の惡息と、總ての物を蝕ひ滅す暗慘な濕つた匂ひの、痲藥のやうに淀んだ底に、彼は危く昏倒する所であつた。それからの十幾時間を、彼は物に憑かれた人のやうに悲鳴しながら、徒らにその坑壁を掻き拗つては狂ひまわつてゐたのだつた。…………

人夫等は、靑ざめた顔をして、惨(みじめ)に沈默(だんまり)て聞いてゐた。

勿論、監視者等に、この男をそこへ葬る氣なぞあつた譯ではない。

彼は、愚鈍ではあつたが、仕事には隨分役立つたし、加之こんな地獄で、幸福さうに感謝して働いてゐた程であつたから。唯、監視等(かれら)は、この男を通して、人夫等の頭に恐ろしい釘を打込んだのだ。

（十一）

私達の醫師は、或夜また一人の病人を、病室へ送る事に決めた。

その立派なドクトルは、あの蝎であつた。彼は、意地惡い毒々しい眼で人々を土塊のやうに量つて、その運命を決めてしまふ。此奴に見込まれた奴は、お終ひであつた。

『もう、此奴から、役に立つ所は、ちつとも搾られない。』

さう彼に決められゝば、……………………………………のだ。

それは、前にも書いたあの肺病で死にかかつてゐた男だ。彼は、もう四十位の瘠せこけた矮男で、頭の禿げた燒け頽(くち)た煉瓦のやうな不氣味な顔色をしてゐた。彼は、此所へ來てから、まだ九日を經たばかりであつた。そして、その總ての日を人々と

常に激しい仕事をして暮して來た。自分の足で歩く事すら、困難であつたのに、生命を蝕ふ、忌はしい疫に虐まれながら、働きつゞける慘な態を私等は見るに耐へなかつた。その眼は、燃えくちて行く黄蠟の焰やうに、不氣味に光つてゐる。

彼は、その夜部屋へ歸る爲に、蹌踉きながら小兒のやうに啜り泣いてゐた。そして辛うじて扉の所まで來ると、そこに摑つて蹈まり込んでゐたが、宛然突き倒されたやうに恐ろしく地に頭を打ちつけて潰れ込んで、投げ出されたカツプからのように激しく喀血した。

監視者等が、其所へ行つて彼の頭を擡げた時、彼は軀を痙攣させながら、血に汚れた脣をひくひくと慄はしてゐた。その冷灰のやうな色の額の底に落ち雅んだ眼球は、死の怪しい光を湛えてゐた。

病人の額の上に蹈まり込んで覗いてゐた蝎は、倦げに呟いた。

『いけない。これは、もうだめだ……………』

『然うかい。』

蜘蛛のやうな、厭はしい不恰好な大きな頭をした監視者が、そこへ歩いて行つた。

病人は、垢で破れ汚れた布片のやうに、役に立たなくなつてゐた。殘忍な宣告は、垂死の人の胸の上に、灰のやうに落ちた。

彼は、恐怖に魔はれた小兒のやうに、押驅た嗚咽に顔を歪めて戰慄した。

『病室へやるのか……………。』

蜘蛛は訊いた。

『然うだ。それが、この男の爲にいゝ。』

蝎は、斷ちきつたやうな冷たい聲で言つて、立ち上つて妙な手眞似をした。

四五人の監視者が、彼を持ち上げた。その時病人の喉から、涙が流れ出した。乾いた脣が、朽葉のやうに微かに戰いた。

人夫等は、彼を圍繞た。

『いけない。あつちへ行け！』

……………へ運ばれる病人は、胸を波打たせて、きれぎれな傷ましい呼吸を貪るやうにした。喉は、ごろごろと怪しい粘つた音を立てた。

扉は、重々しい音を立てゝ開かれた

垂死の人は、その暗い坑へ投込まれる僅四秒ばかりの間、體力の失つた眼を大きく瞠いて、窓から流れ込む黄色つぽい坑の縞のやうな落日の光りの流れを、燃るやうに貪り眺た。その瞳は、霞んだ灰色の壁のやうな、不氣味な色をしてゐた。

彼は、……………

…………………………。

蜘蛛は、その響を抹殺するやうな荒々しい音を立てゝ扉を閉めた。些し離れて、彼等の背後に立つてゐた蝎は、首を振つて忌々しさうに地面へ唾を吐いた。

『あゝ…………。』

人夫等の群の中で、誰かゞ泣くやうな嘆息をした。

『何だ、何だ汝等は…………。彼奴に何か用事があるのか。』

杖を鷲掴みにした蜘蛛が、私等の方へ飛んで來た。

皆、自分等の食卓の周圍へ、戻つた。誰も、何も言はないで俯れてゐた。

そして、蒼褪めた冷たい死の手が、自分の脣の上に措かれてでもゐるやうな怯々した瞳を、時々あげて相互を見合つた。

息づまるやうな、恐ろしい沈默が屋内を領した。

（十二）

或者は、脚氣を患つてゐた。

或者は、飢餓の爲に鳥眼になつてゐた。

或者は、過激な勞働から烈しい神經痛を起してゐた。

然うして、辛じて自分だけを曳ずつて歩いてる人間が、どんなにゐたことだか…………。事實、皆襤褸みたいになつてゐたのだ。

それでも皆自分自身の足で地に立つてゐる事が能なくなるまで、仕事に出た。それは、…………よりは、きつといくらかいゝ事だつたのだらう。然うでもなければ、好んでそんな事をする程の好奇家がゐたらうとは思はれない。

一人の男は、事實極度の疲勞の爲に死んでしまつた。彼はまだ三十にもならない位の弱々しい若者で、自分の商品の石鹸をすつかり賣飛して飲んでしまつてから、此所へ陷ちて來た男だつた。もう二箇月も此所にゐたので、恐ろしい疲勞の爲にその軀は殆んど傀儡のやうに屈まり、その首は病衰へた馬のやうに胸の上に垂れてゐた。

誰も、彼がそんなにもすつかり破れきつてしまつてゐる事に、氣がつかなかつた。事實何の病氣も、その體にはなかつたのだから。

その日は、朝からすつかり默り込んでゐて、時々深い嘆息を吐いて木の葉のやうに戰慄したりした。

夕方、彼は働いてゐた手を止めて、のろのろと地面に蹲まり

込んで、ひどく鞭打たれた馬車馬のやうに胴慄えした。そして、…………………………………………。

荒々しい歩調で、彼の側へやつて來た蜴は、その頭をマレブルの杖で突いて怒鳴つた。

『何て行爲だ！汝…………。』

屍は、土のやうに沈默つてゐた。

死骸は、トロに積まれて運び去られた。

つひ側に働いてゐた同僚さへ、この男が死んでしまつたのだと言ふ事を、ずつと後まで知らないでゐた程だつた。

部屋へ歸つてから、彼と何時も一緒に居た男が、誰にともなく呟いた。

『どうも、彼奴が何で死んだのか、俺には解らない。』

そして、疲れ果てた深い嘆息をした。

人々は、その暗い隧道の中で音もなく頽れ落ちる砂のやうに、頽れ滅びて行くのだつた。幾日かの後、またそんな風の死人が出來た。

それは、自分の食物を盗まれて泣いた老人夫で、彼は以前から幾分心臟が惡くて、働く事がかなり苦しいらしかつた。

彼はその時、私のすぐ側で働いてゐたのだが、突然眩暈でもしたやうに、ふらふらと私へ倒れかかつて來た。そして、何かの手に喉を締められでもしたやうに、恐ろしく慄えて力まかせに私の肘を摑んだ。

『どうした。おい！』

私は、彼の肩に手を捲いて支へた。

老人夫は、地面へ頽れ込んで、骨ばつた手を慄はせながら、爪痕のつく程も烈しく私の手を摑んで、踠くやうに頭を振り動かした。その顏は、揉みくちやにされたやうに、醜く痙攣を起して燃んでゐた。その眼窩の上に露出した黄色つぽい眼球は、恐ろしい苦痛と不可解な死の色を湛えて、戰えてゐた。歪んだ脣は、ほんの四つばかりの幼兒のやうに、泣聲を立てた。

その啜れた、痛ましい泣聲が、人々を慄えさせた。監視者等は、彼と私の周圍に走り寄つた。然し、彼の上に何事が起つたのか、誰も知る事が出來なかつた。そして、唯茫然私等を瞻つめてゐた。

泣聲は、斷ちきられたやうに、弱々しく消えて彼は、長い無氣味な呻聲を立てゝ、地に頽れ落ちた。そして、二度ばかり土に爪を立てゝ頭を擡げやうとしたが、遂にそのまゝ動なくなつてしまつた。

監視者等は、街から警察醫を聘んだ。

そして、立派な屍體檢案書と、執葬認可をうけた。必然、外傷さへなければ、土工夫なぞは、死の刹那まで激しい働きをさせても、何等差支ない規定でもあるんだらう。

この屍と、他に幾つかの病室の死體とは、次の日隣町の丘を一つ越えた部落の、露天火葬場で燒いてしまつた。

病室の死者等は、その都度逃走の屆出がされてゐた。何と言ふ哀れな、逃げ方だらう。其筋の方々も、この慘な奴等に非常に寛大な處置を取つてくれたか、遂ぞ逃走者は發見されないでしまつた。

そして、この人間等に關聯した總ての事は、冷たい灰になつてしまつた。

（十三）

或朝、町の警察署から、もう五十に近い素燒の土甕のやうな顏の部長が、鰻のやうな唇をした巡査を一人連れてやつて來た。

人夫等は、すつかり小屋の前へ整列させられた。一人の警官は、人夫等の支給される食物、被服、勞働の時間、病人の狀態其他に就て直接私達から糺す爲に、遣されたのだつた。

『食物は、食べられないものぢあない。充分だ。衣服も、無論ある。そして誰も、病人でも死人でもないとすれば……………、その他に何が汝等は言ひ度いのか、言つて見ろ！』

この、何も彼も知つてる、解りのいゝ部長は、ほろ／＼した道山を睨みつけながら、本當にこの通りに言つた。

無論、その他に何もありやしない。こんな狼等に何を言つたつて、それは狹に話かけるよりも無駄な事も、否それはかりぢあないそんな事の破片でも行にしたら、次の日から自分の眼が太陽を見なくなる事も、十分喰ひかゝれてしまつたやうにふらふらしてる頭でも、皆よく心得てゐた。

『何も、言ふ事がない…………。ぢあ默つて稼ぐ事だ。勿論汝等に、何の言ふ事があつて良い筈のものぢやない。若し、逃げやうなぞと言ふ考を持つたりしたら、それこそ毆り殺されるぞ！、すつかり何も彼も覺えて置く事だ。いゝか…………。』

部長は、私等の間を歩きまわりながら、ぶつくさ呟いた。巡査は、情けない膃面をして彼の背後に隨つた。

それから二人の警官は監視者等の室で、白痴の犬みたやうになる程も燒酎を馳走になつた。そして、ひよろひよろしながら、私等の稼いでゐる現場へやつて來た。

そこで一人の人夫が、仕事が拙いつて言ふ理由で、亂醉した

部長の踵に、頭を蹴られた。

『こら！犬奴！何てい事だ此處へ坐れ！』

その人夫が、默つて地面へ踞ると彼は、いきなり長靴でその頭を蹴飛ばしたのだ。

その、紛雜の裡に、一人の人夫が逃走を企てた。それは、何所かの街で理髮師をやつてゐたと言ふ、四十ばかりの、軀幹の矮い鼬の尾のやうな腮髯を生した、痩せこけた禿頭で、人々に床屋と稱ばれてゐる奴であつた。

彼は、非常に周到な注意の上でやつた。音もなく、埋立地を辷り降りた。まつたく、うまくやれば彼はそこを逃げ終せる事が可能たかもしれなかつた。どの監視者も、殆んどそつちを見てはゐなかつた。所が、若い猿面をして呆然川の水面を見てゐた鰻の唇の巡査の目に入つた。

床屋の禿頭には、まつたく惡魔の呪ひの息がかけられてゐたのだ。

『あれは…………何だ。何故あんな所を走つてる…………。』

巡査は、指さして叫んだ。監視者はそつちを見た。禿頭の矮男が、體を振りながら變な格好で、力まかせに川岸の凹地を下流の方へ驅けてゐた

『畜生！床屋！…………。』

ヴルドツクのやうな恐ろしい猿面の、前歯の露出た監視者が、吼えながら飛んで行つた。

『まて、まて、禿！殺すぞ！撃つぞ！』

四五人の監視者がそれに續いた。

『あれは、何だ…………。あれは！』

巡査部長は、酒臭い息を吹いて舌甜ずりしながら唸つた

『逃走者を追かけたものであります。』

鰻の唇は、眞直に棒のやうに突立つて答へた。

『何、逃走…………。…………………』

部長は叫び立てゝひよろひよろと走り出した。そして、三歩ばかり行つてからがちやがちやと足にぶつかつて躍つてゐる佩劍をいきなり拔き放して、馬でも鞭打するやうな格好に振りまわしながら、喚聲を擧げて勇敢に突貫した。鰻の唇も、何かの容器のやうな不格好な重たい大きな長靴で、地を叩いてその後に續いた。

『へえ…………。』

零落た百姓の若者は、吃驚したやうに直立つて、眩しさうにこの雄々しい人々の行進の姿を眺めた。

殆ど、虚空で足が跳いてゐるやうに見える程も速く飛んでゐる床屋の背後から　どの監視者かゞ…………

した。無論あたる譯もなかつたが、床屋はその音に頭をうちぬかれてしまつた。そして動顚して何かに彈き飛ばされでもしたやうに、流れの中へ飛込んだ。

所が此奴は、あの世から首玉へ石塊を結りつけられて出て來た。つまり、ちつとも泳げなかつたのだ。彼は、むやみに頭ばかり振りまわして、がぶがぶと水を吞みながら、虚空を掻き捞ろやうに兩手を擧げて跪いた。

ヴルドツグは、その頭を長い竿で毆りつけた。すると床屋は、泣面をしながらその棹の端にしがみついて這上つて來た。

彼等が、此禿頭を水の中から曳ずり上げた時、恰度勇敢な巡査部長が驅けつけた。

『退け、退け！俺が…………。』

そして、背後から飛びかゝつて、泣面で噓をしてゐる床屋の禿頭を、…………。床屋は、辛うじて死に損つた。ほんの一吋（インチ）ばかりの違ひで。…………

…………。で、錆びた剃刀ですりむいた程の傷がついただけであつたが、彼は釘拔で挾んだやうに兩手で頭を摑んで。…………

…………。

部長は、べたりと地面へ潰れ込んで、發狂者のやうにげらげらと笑ひ出した。

『…………。は、は、は……は、は……

……。』

彼は、あまり目覺しい活動の爲に、恐ろしく氣がまゐつて、それから何か譯の解らない歌を舌縺れしてきれぎれに唄ひながら、土へ頭をあてゝ手だけで躍り出した。

監視者等は、氣絶した床屋を繩で縛つて、曳ずつて歸つた。

床屋は、現場へつくと蘇生して、あまりの恐怖の爲に嬰兒のやうに聲を立てゝ泣き出した。

『部長殿は、ひどく、その…………自分が解らなくなられた。あれを何とかして、運んでくれまいか…………。』

巡査は、澁面をして蝸に呻いた。

『へえ…………。その通りで…………。隨分、自分を見忘れられた風で…………。おや、その擔架で———急造の…………。』

『うむ、何でも宜し！どうも、自分の足で歩くことを忘れてしまつてゐられるから。』

地面へ醉潰れて眠つてゐた、自分を見忘れる程勇敢な巡査部長は、その急造の擔架———つまり便所の戸板———で四哩の道を運ばれて歸つた。

奇妙な巡視が行つてしまふと、監視者等はそこで泣いてゐる……………………………………。彼は、折れた鍬の柄や、マレブルの…………………………………………………………。床屋は、………………………………。痩せこけた背の肉は、………。

監視者等は、然うして………………………………………………………る間に自分を制する力を失つてしまふ。そして、思惟する事も能ない程の殘忍な方法を案出しては、それをやるのだ。加之、胸をわくわく躍らせて、…………………………………………………。二人の監視者は、…………………………………………………………………………。

床屋は、地獄の火の中にでもゐるやうに、狂ほしげに泣き叫んで跪いた。然し終には聲も立てられなくなつて、……。

此連中と來たら、とてもサアド侯爵位の代物ぢやない。物語の地獄の締の鬼が息吹してゐるのだ。彼等が、こんなにも執拗に恐ろしく、人夫等を虐む事が、何の利益をも彼等に齎す譯ぢあない。彼等も亦或者等の貪慾を充す爲に踏臺になつてゐる、慘な人々の罪人なのだ。それなのに勵んで哀れな人夫等の首の絞繩になり、忌はしい肉車のやうに其者等を嚙碎く。彼等は、この自分の前に…………………………………………………、もう血に醉ひ痴れた獸のやうになつてしまつてゐるのだ。

暴虐は無限に昂進する恐ろしい疾患である。その病患に憑れた怪異な病者は、支配とか統制とか、その他いろんな装の陰に隱れて、地の上の到る所にその爪を延し、毒の息吹を續けてゐる。しかも、放恣と殘忍と貪慾との鞭を振り、快樂の意識の下に、……………………………………………………………………………………………。監視者等は、唯その鞭なのだ。

床屋は、次の朝すぐ仕事に出された。彼は全一箇月もの間、瘧にでもかかつたやうにぶるぶる慄えながら、不斷めそめそ泣いてゐて遂に死んでしまつた。

（十四）

或朝、ヴルドックの足袋がなくなつた。

それが監視者のものでなくても、此所でそんな事件は、遂ぞない事であつた。事實、誰も、他人にどころか、自分にさへも必要な所持品なぞありはしなかつたのだから。それは何かの錯誤か、でなければ病的な自分の盗癖を抑へることの能なくなつた人間の、所爲であつたに違ひない。

所がその盗んだ奴は、恐ろしく勇敢な奴で、こんな地獄部屋を荒して渡り歩くことを職業にしてゐる、軀幹の六尺もある、宛然油を塗られた鐵の錠のやうな顔をした奴であつた。三ちやんといふのが、その名であつた。

ヴルドッグは、蝸と二人でこの盗人を發見すると、いきなりその顔を一つ毆はして、足袋に頭のつくまでもその軀を折り曲げて、こすりつけた。

彼は、何か二言ばかり呟いたが、別に抗ひもしなかつた。

二人の監視者は、…………………………………………………………
……………………………………………………。

彼は、全一日そうして置かれた。併し、一言も口を利かないで、後頭部を水に浸して顔だけ出して仰向いてゐた。夕方になつて、曳上げられた時、病人のやうに蒼ざめて、ふらふらするやうな無氣味な眼を光らして、齒を喰ひしばつて慄えてゐた。

三ちやんは、その鎖を解かれると、突然工事用の鍬で、ヴルドッグを毆りつけた。

その鍬が、彼の頭の上にのつかつてる變な端の尖つた帽子の上にあたる刹那に、ヴルドッグは蹲み込んだ。鍬は、彼の背の上で恐ろしい音を立てゝ、この監視者は呻聲をあげて地面へ潰れ込んだ。

三ちやんが、二度目の打撃をその上に加へない間に、彼の歩後に立つてゐた蝸は、マレプルの杖が曲る程、この足袋盗人の後頭部を力まかせに打下した。盗人は地に蹲まつた。ヴルドッグは、その時吠え立てゝ飛上つた。彼は、ひどく腰をやられて、ふらついてゐたが、そこに轉がつてゐたスコウプで、盗人の頭をこつぴどく毆りとばした。スコウプは、その鐵の錠のやうな頭にぶつかつて、がんがんと音を立てゝ跳ねかへつた。三ちやんは、…………………………………
………………………………………。

『……………………………………………
…。…………！』

ヴルドッグは、再び地面へ潰れ込んで、喉一杯の泣聲で怒鳴つた。

四五人の監視者が飛んで來て、……………………………

…………。三ちやんは、慄える歯
手で自分の頭を掴んで、かちかちと歯を鳴らしながら、長い長い宛然自分の肺臓まで吐き出してしまふやうな呻聲を立てた。監視者等は、殴るのを止めて、彼の周圍に立つた。

彼は、のろのろと全身を延ばした。

…………………。そして、灰色な、汚れたセルロイドの玉のやうに氣味惡く光る眼を動かして、その人々の影を凝視た。その眼は、もう何も見えなかつたのだが、執拗に彼等の上を這ひまわつた。その顔は…………。

………………………

佗しい、灰黄色の輝きのない落陽の光の流れが怪しげにこの死にきらない屍を浸した。

半死人は、蓆にのせて部屋へ引ずつて來られた監視者等は、それを扉の所へ置いて、傍に立つて何かひそひそ相談してゐた。

『いけない！此奴は、癒つたら誰かの眼に釘でも突き刺すに、違いないんだ…………。』

暫くしてから、蜘蛛のやうな厭はしい顔の監視者が、首を振つて唸るやうに言つた。

半死者の呼吸は、殆んど聞き取られない程だつたが、…………
…………………、もう總ての意識の破れ朽れた頭の底から光らして周圍を見た。

『然うさ。それに、此奴だけだぞ、俺等の首に飛びかかつた奴は…………。…………、…………。』

梟の嘴のやうな鼻の監視者が、低い意地惡い聲で呟いた。

『いや、やつぱり病室の方がいゝ。…………
…。』

蝎は生物らしくない怪異な薄笑ひに顔を歪めながら、毒々しい聲で言つた。然し彼は、その語を終まで言ひきる事が能なかつた。そこの地面に投げ出されてゐるまだ死にきらない顔が、殘されてゐる總ての力で脣に觸れる程に置かれた蝎の足に喰ひついたのだ。

『あ、……つ、つ、…………。』

蝎は、鉄罠にかかつた獸のやうに、體を振りまわして跳いた。然し、その踵に喰ひついた恐ろしい歯は、肉にかかつた釣かなそのやうに離れなかつた。

彼は、發作的に、自分の左手に提げてゐた手斧で、…………
…………………………………

…………、がくがくと激しく動いて、…………………………
……………………………………………。

どの監視者も、皆飛退いてしまつた。

蝎は、發狂したやうに叫びながら、二三度激しくその斧を頭上に打下した。

頭は、彼の足を離れて、怪異な生物のやうに蜿轉つて、がりがりと土に嚙み着いた。蝎は厭はれた發狂者のやうに、激しく胴慄えして何か叫びながら、……………………………………。

……………………………………………………
……………………………………………………
……………………………………………………
……………………………………………………
……………………………………………。
……………………………………………………
…………………。皆、息をひそめて後退つた。

蝎は、血みどろな斧を掴んだまゝ、片手で自分の頭を押へて、鋭い刃の打撃を受けでもしたやうに、きれぎれに呻いた。そして、激しく胴慄えしながら、氣味惡く首を振つて泣聲を立てた。

彼は遂に、その肩へ手をかけやうとした蜘蛛に斧を振り上げた。その瞳はもう、意識の狂ひ亂れた、怪異な光を泛べてゐた。

監視者等は、ともかく慌しく屍體をどこかの暗がりへ運び去つた。彼等が歸つて來た時、蝎は入口の土間の壁に吸着いて蹲つて、わなわな戰えながら呻いてゐた。人夫等は、化石したもののやうに默つて立つてゐた。監視者等は、奇怪な發狂者を遠くから凝視ながら、何かひそひそと囁き合つた。蝎の無氣味な呻聲は、傷ついた垂死の蛇のやうに、陰慘な暗い屋内を匍ひまわつた。

（十五）

發狂した蝎は、その壁の下に粘着たまゝ、何時までも無氣味な呻聲を立てゝゐた。

誰にも、この男がこんな事にならうなどゝは思ひもよらなかつた。前にも言つた通り、此奴は血と殘忍の妖怪だつたのだから。ひよつとしたなら、この出來事に基因して起つた、…………………………………、彼の頭は狂つたのかも知れないのだ

然し彼は、……………………………………………、何

時までも彼の脳髓に喰ひついてでもゐるやうに、異様に眼を光らして、不斷戰いてゐた。ともかく彼の頭の中に齒を立てゝゐる物は、すつかり慘にこの男を喰ひやぶつて、ぼろぼろに穴をあけてしまつたのだ。

彼は、時々恐ろしい炎に燬されでもしたやうに、慘な叫聲をあげて跳いたりした。然し、誰もこの男の額の上に手をあててやることも、能なかつた。若し誰か彼の傍へ行きでもすると、激しく慄え出して、嚙みつきさうに齒を露出して喚き立てたり、爪が食入る程も固く握りしめてゐる斧を振りあげたりするので。

同僚等も、唯惱ましげに遠くから彼を見るだけだつた。

蝎は然うして、殆んど一滴の水もその喉には通さずに、釘で刺されでもしたやうに壁の下に粘着いて、狂亂の炎の中に吊されて跳いでゐたのだつた。

――三日目の朝、私等が仕事を始めてまだいくらも經たない間に、跛の大工が息をきらして喘ぎながら、現場へ驅けつけた。彼は、蜘蛛の前まで來ると、べたりと潰れ込んで唯むやみに手眞似をしながら、舌縺れして譯の解らない事を叫つた。此奴は、毛を拔られて乾びた雞のやうに瘠せこけた老人で、どの監視者かの兄にあたる男で、その日はトロの臺を修繕する爲に部屋に殘つてゐたのだつた。

『何だ、どうした……。』

『あ、あの、人、人が……。』

大工は、きれぎれに呻いた。

『どうした。どうしたんだ。』

『こ、こ、殺、して、しま……。』

『殺した？誰を……。』

蜘蛛は、飛び上つた。

『爺さん、を……。』

四五人の監視者が、走り出した。蜘蛛も、何か呼びながらその後を追つた。

彼等がそこへ行つた時は、……………………………………………………………………………………。血のついた斧を提げた蝎が、忌はしい笑を顔に浮べて、無氣味な怪しい眼を光らして、人々を見た。

然し、誰も彼の肘を制へる事も能なかつた。彼等は、唯跛の大工の話を訊いて、悤しく人々の所へ歸つて來た。

蝎は、壁の下で狂ひ憊れて眠つてゐて、物に魘されて跳き始めた。宛然、恐ろしい炎の中に倒に吊されてでもゐるやうに、

聲を立てゝ泣き叫びながら、跪くのだ。殆んど覺醒してゐるやうに見えるのに、その恐ろしい夢の鎖はれの火坑から逭ひ出せないのだ。

それは、どんな人も側で見てゐるに耐えられない慘苦だつた。

片眼の炊事番の老爺は、自分の不自由な體を曳ずつて、彼の側へ行つた。惟らくは、その男の肩に觸つて、眼を覺してやる意だつたのだらう。

蝎は突然、齒を鳴らして唸りながら、醒めた。そして、自分の側の人影を見ると、喉の破れるやうな叫聲を擧げて飛上つて、いきなり手に掴んでゐた乾いた血の粘着いた斧を振り上げた。

老人は、そこへ潰れ込んで叫びと言ふよりは、寧ろ低いきれぎれな惱ましい呻聲を立てた。極度の恐怖に、喉が痙攣て、乾きついてしまつたのだらう。唯、痲痺したやうな灰色な瞳で、蝎の眼に見入りながら、泣き出さうとする幼兒のやうに脣を歪めて慄はした。そして鞭のやうに激しく胴慄えしながら、のろのろと無意味に片手をさしのべた。

跛の大工は、出口まで夢中で逭ひ出て扉に掴まつて慄えながら、毛蟲でも追ふやうに足踏みしてきれぎれな叫聲を擧げた。

發狂した血の妖怪の瞳は、恠しい炎のやうに戰いた。血に飢えた斧の刃は、垂直に片眼の老人の、禿頭の上に打落ちた。老人は、慘な醜い澁面をして、奇異な蟲のやうにひどく體を屈め四肢を縮めて、木の葉のやうに痙攣て死んでしまつた。

蝎はそして、そのまゝ其所に、忌はしい絞首架の杭のやうに、突立つてゐたのだ。

夜になつて、人々が部屋へ歸つて來た時、蝎は、地面に坐つて何か壞れた土偶でも繕ふやうに、壁の下の土をこそげ取つて、…………。小兒のやうに顔を蹙めて、何かぶつぶつ呟言をいひながら。

四肢を縮めた、矮少な、片眼の壞れた頭をした老衰へた死骸は、血と土とに塗れ汚れて、怪異な土偶かなぞのやうに見えた。

監視者等は、愁はしげにひそひそと何か呟いてゐた。人夫等は、息づまるやうな陰慘の中に、遠く彼等を圍繞して、凝視てゐた。

蝎は、その夜眠つてゐる間に、ワイヤロープで縛られて、町へ曳ずつて行かれたと言ふ。ともかく、私等が醒めた時、彼の姿は其所から消えてしまつてゐた。瘋狂院の、暗い檻の鎖に縛

られたのか、それとも、惨な奴等を自分で送り込んだ坑へ落されたのか、遂に歸つて來なかつた。」

(十六)

或る日の朝、脚氣で心臟を冒された人夫が、或特別な墓坑へ送られた。

彼は、四十位のひどく眼の惡い男で、此所へ陥ちて來る前は、遠い南の國の港の町で、印判屋をしてゐたのだと言ふ。陰氣な沈默(だまりや)だ男で、まるで渇えてゞもゐるやうに酒を飲みたがつてゐた。もうずつと前――私等の來ない時――からの病氣で、その軀は黄色い膿汁でも澱んでゐるやうに、腫れあがつてゐた。そんな軀で、死ぬよりもひどい苦痛に呻きながら、働いてゐたのだ。同僚の人々は、その男を見るに忍びなくて顔を反けゐる程だつた。若し、自分の爲に一片の乾いた麵麭も持つてはゐない人間でも、その背中に來る鞭さへない事なら、この有様で自分の足で立つてはゐないに違ひない。

黎明から彼は、その心臟に蒼黒い爪が立てられてでもゐるやうに、苦悶してゐた。不[illegible]を立てゝ自分の爪で胸を掻き拶りながら、軀に纒つてゐる襤褸きれを噛み裂いて[illegible]を迸らせて跳いてゐた。その眼はもう視力を失つて、灰黄色に腫れてゐた。蝸醫師の後任は、蜘蛛だつた。

ドクトルは、新米だつたので無論何も解りあしなかつたが、彼は平常から、沈んだ陰氣臭い印判屋の古手が氣に喰はなかつたので、極めて簡單な診斷を下した。

『病室へ…………。これは、もういけない。』

印判屋はそれを聞くと、哀しげにふらふらと頭を動かしながら、何か舌縺れした不明な呻きで哀訴した。

『ふん…………。』

蜘蛛は顰面をして鼻で冷笑(わら)つた。

二人の若い下飯漢――監視者、即ち幹部と稱れる中の、一つの階級だ。――が、其奴を暗い病室へ投り込んだ。

或はそれが、この印判屋の古手に賦(わりあて)られた、運命だつたのかも知れない。また、その立派な迅速な處決は、相互の爲に非常な利益であつたのかも知れない。然しその夜、私等が仕事から歸つて來た時、彼はまだ死にきらないでゐた。……………………

……………………………………。そして、例の何かに首を締められてゞもゐるやうなきれぎれな呻聲…………。時々、弱弱しい知覺のない手が、……………………………。

…………………………………………。

夜明方になつてからは、激しく自分の頭をその壁に打あてる、石でも擲るやうな音がして、その度に、わなわなと慄える、きれぎれな無氣味な泣聲が聞えた。

蜘蛛は、困惑しきつたもみくちやな澁面をして、夜具の中から匍ひ出して來た。

『いけねえ。あの蟾蜍奴……………。』

彼は、舌を鳴して呟いた。

『墓、墓！彼の…………。でなけあ、這ひ出して來るぜ。』

ヴルドックは、戲けた薄笑をして、眼を瞬いて片手の指を彈いた。

それは、その時までに掘り進んだ隧道の最も奥の落盤の箇所で、工事中に突然そこの底部が直徑三碼位陥沒して、その穴はどんな方法をとつても埋らなかつた。彼等は、その事でひどく氣を腐らしてゐたので、皆直ちに贊成した。

『へ、彼奴が、こんなに役に立つ事は、生れてから今始めてだらうよ。』

梟は、冷たく嘲笑つた。

然し彼等が、病室からこの瀕死者を曳出した刹那に、彼は息が絶えた。その短い縮毛の粘着いた頭は、……………

…………………………………………

た。着てゐたものは、すつかり撈り破られてしまつて、汚れた襯衣の襟だけ殘され、一つの釦がその首を絞めてゐた。

三人の監視者は、……………

…………………………………………

（十七）

その特別な墓坑の埋葬者に就て、私はもう一つの別な事件を書かなければならない。

それは、その時から一週間も經たない間だ。何時か病室へ這入つたことのある魯鈍な農夫の若者を、罠にかけたやうに囚へてしまつた奇妙な男があつた。それは、もう四十位の小さな赤い腫れた眼をした、腰の屈つた人夫で甲蟲といふのが、その綽名だつた。事實、その意地惡さうなこちこちに乾からびた蟲に、似てゐない事もなかつた。彼は、ずつと前からその若者を覘つてゐたらしかつた。そして牡の浮浪犬のやうに、執拗くこの農夫につきまとつてゐた。どんな機會から彼等が結びついたのか、勿論誰も知らなかつた。

の新講義を聞くの思ゐがある。
一勞働組合法論二根本的に改惡されたる勞働組合法案三「勞働組合取締法案」を評す四佛國新職業組合法五勞働協約と法律六佛國

谷崎氏の快著出づ!!

がある。讀者を魅了し盡す技の神に近く、讀み易くし

て藝道の泉源を剔るところ明治、大正に追隨し得るものなし。初秋の書齋此一書ほど親み易きはなからん。

内容＝（1）赤い屋根。（2）羅洞先生。（3）馬の糞。（4）友田と松永の話。（5）二月堂の夕。（6）港の人々。（7）金を借りに來た男。（8）マンドリンを彈く男。（9）白日夢。

定價壹圓六拾錢　送料十七錢

甲蟲は、その事に就て、まるで忌はしい狂人だつた。若い農夫は、…………………………。私達の仲間に、そのことは知れ渡つてゐたが、皆憫ましげな沈黙を守つてゐた。何故かなら、まだ他にもそんな惨な慾情の罠に因はれてゐる人々がないでもなかつた。私自身、執拗に二人の同僚からその事を挑まれてゐた程だから…………。

甲蟲は、惨な慾情の恣欒の爪に傷つけられて、その頭がぼろぼろになつてゐたのだ。彼の眼は白痴の犬のこれのやうに灰色に鈍濁れ、その頭は黄色つぽい胸の上に垂れ下つてゐた。そして仕事をしてゐながら、突然首を振つて、忌はしい奇聲を立てたりした。

夕暮だつた。

その時彼は、その事に就て自分の發作を制する力を失つてしまつたのに違ひない。自分の側に蹲まつて、鶴嘴を使つてゐる若者の肩に手を捲いて…………。農夫は、地面へ膝をついた。

ヴルドツグは、歯を鳴らしながら彼に飛びかかつて、…………、首を摑んで後へ引張つた。

甲蟲は、それでも地面へ押へつけた若者から手を離さないで、發狂者のやうに…………。

五六人の監視者等が、これを引き離して、……………………。甲蟲は、醜く顔を歪めて、乾いた下唇を垂れて長く呻いた。

「此奴を、…………。」

……………、首を振り立てゝ叫んだ。其時、彼の軀は事實そこへ逃るより外、どんな方法もない有様になつてゐたのだ。彼等は、……………………。

甲蟲は、その傷つき潰れた軀で、……………。

蜘蛛は、…………

…………

…………

…………

…………

…………

…………

…………

…………。

蜘蛛は、耐えがたく惱亂したやうな歪んだ顏をして、十秒ばかり茫然それを凝視てゐたが、突然そこに轉がつてゐた…………………………………………………………………。

甲蟲は、恐ろしい叫聲を立てゝ、………。

暗い坑は、そこが奈落でもあるやうに、闃寂としてしまつた。若い農夫は、坑の緣に跪いて暗い底を覗きながら、その叫聲が果てしなく續いてゞもゐるかのやうに聞入つてゐたが、果ては白痴の小兒のやうに醜くく顏を顰めて、聲を立てて慟哭しだした。

『何だ、汝も行き度いつてのか…………』

梟は、この男の頭を曲る程も毆りとばして、馬車馬のやうに鞭を振つて仕事に追立ててやつた。

（十八）

私等の仲間に、唯一人の自殺者が出た。

そんな事は、遂ぞどこの部屋でもなかつたことだ。事實、自分自身の處決が能なくなつた奴ばかりが、この地獄に陷ちて來てゐるんだから。

それは、まだ三十位の肋膜を患らつて幽靈のやうに痩せこけた、蒼ざめた男だつた。

どうしてこの病人が、こんなにも激しい仕事に耐えてゐられたか奇異なことだつた。惟らくその滅び盡した肉體の中に、僅か死に果てない意識だけで、働いてゐたのかも知れない。それも、鞭に虐まれて、狂亂してゐたのだ。この男は、突然發狂のやうに激しく自分を迫虐んで働きとほした。死にかゝつて苦悶てゐる生物を見るやうで、私にはこの男を見る事が慘といふよりも寧ろ厭はしくさへあつた。

その四五日前から、この病人に激しい腹膜の徵候が顯れた。その腹部は大きな忌はしい氷嚢のやうに膨れ上つた。或朝彼は、遂に寢具の中から這ひ出す事さへ能ない程になつてしまつた。骨ばつた顏の底に陷ち込んだ眼は、土塊のやうに輝きもなく乾いて動かなかつた。監視者等は、此死にきらない屍の處決に、幾時間かの猶豫を與へて現場へ出て行つた。

夕方になつてから、片眼の老爺の後任の、吃の少々有り難い炊事番が、鼬のやうに走つて來た。その腹の膨れ上つた幽靈が死にたがつて困るから、誰かにすぐ來てくれと言ふのだ。

幽靈は、全一日死んだやうに微動もしないでゐた。そして五時

の時計が鳴ると、のろのろと這ひ出して來て、ぶるぶる身慄えして呻きながら、炊事場の焚火に頭をさし入れやうとした。炊事番は驚いて曳き戻した。然しこの男は、執拗に、一言も口を利かないで、自分の火葬に努力するのだ。彼はすつかり脅されて、火を消して走つて來たのだつた。

『よし、俺等が歸るまで、殺さないで置け…………。』

蜘蛛が、傲げに言つた。炊事番は、蒼白をしてのそのそと部屋へ戻つて行つた。

然し、彼が歸り着かない間に、その病人は自分の首に繩を捲きつけて殺してしまつてゐた。

私等が歸つた時、その屍は扉の側の…………………………………………………………。

梟は、荒々しい歩調で歩み寄つて、冷笑つた。

『何てえ宜い事を思ひ付いたもんだ…………。』誰かゞ、…………………………………………。』

『ふん、自分にさへも要らないものを…………。』

ヴルドツクは、氣むづかしい怒りつぽい調子で嘲つた。

……。

……。この屍の不可解な哀愁をもつた瞬は、私等の頭に黒い憂悩の滴を落した。人々は、暗い沈默の中に、重たい嘆息をした。

（十九）

私は、三度不倖な逃走者の事を書ねばならない。

その男は秋の末の或晴れた日の暮方、自分を賣りつけにやつて來た。彼は、すりきれた齒磨刷毛(ブラシ)のやうな髭を立てた痘面の矮男でその双肩は瘤(こぶ)のやうに高く肉がついてゐた。人々が歸つて來た時彼は、小さな荷を首に結着(くく)けて、部屋の扉に凭れて立つてゐた。

梟が、彼に聲をかけた。

『誰だえ、汝(てめい)は…………。おい！』

矮男は、嗄れた叫ぶやうな聲で、蟷螂のやうに勇敢に首を擡つて自分の名を告げた。

『ともかく、此所へ暫く置いてくれ。何か面白い事もあるかと思つて、來たんだから…………。』

此奴の話によれば、彼はお母の胎内からの土工夫で、風のや

うに斯うした場所を流れ歩いてゐる連中の一人だつた。

『ふ…………。面白い事は毎日だ。過日も一人、…………
…………。』

『それは、それはちあ是非置いてくれ。』

勿論、此奴は唯の木の葉ちあない。確に油断のならない代物だつたのだ。

次の朝此男は、特別な枕の爲でその左の眼を潰れる程も傷つけた。此所では特別な枕が用ひられる。工事用の一本の枕木に五人の人夫が寢せられるのだ。朝が來ると、梟が大鎚でその端を叩いてまわる。人夫等の頭は彈ね飛ばされて枕木にぶつかつて、些し叫聲を立てなくても眼を覺ますしかけになつてゐた。此所では、總て然うした立派な道具が揃つてゐるのだ。その時、彼は俯臥してゐたので、その枕の角でひどい傷をした。彼は、兩手で傷ついた眼を押へて、一言も言はなかつた。そして、鹽水で洗つて古手拭で繃帶した。彼は、恐ろしい復讐の決心をしてゐたのだ。

午後になるとすぐ、彼は現場でトロを突離した。二三日前から、かなり激しい傾斜の所をやつてゐたので、一人押しの小型のトロを用つてゐた。彼は出發點の所で、三十秒位の間凍つたやうな恐ろしい瞳で埋立地の方を凝視てゐたが、聲のない氣味惡い歪んだ落笑ひをして、制動機の掛金を歯車へ挾まずに足で制へて辷り出した。そして、まだ二十鎖も進まない間に、彈き飛されたやうに顚落ちたのだ。

そこは、坂の最も急角度な頂點であつたし、制動機の掛金は外れてゐた爲に、トロは宛然血に飢えた獸のやうな奇怪な唸聲をあげて飛下つた。そして、終點に立つて梟と何か話してゐた。一人の人夫の頭から飛びかゝつた。その人夫は、狡猾なスパイで、何か人夫等の間に起つた事件を、一々監視者に賣つけて、幾分樂な待遇を受けてゐる奴だつた。彼は、叫聲一つ立てる間もなく、そのトロの下敷になつてしまつた。

人夫等は、二十分の後にこの男を掘り出した。…………
………………………………
………………………………
………………………………
………。

監視者等は、恐しい眼で、のろのろと起きて來た歯磨きブラシを視て默つてゐた。

その夕方、人々の夕食がすまない間に、歯磨きブラシの姿は、風のやうにこの部屋から消えてしまつてゐた。加之、前の靴修繕師の腰の曲つた老人を連れて…………。

彼等は、人々と戸外で足を洗つてゐる間に、逃げてしまつたのだ。

何も彼も、ひつくりかへして探された。

然し、何所の隅にこの男等が粘着て落ちてる譯でもなかつた。

四人の監視者は、鷲のやうに飛んで行つた。

その人等は、一時間の後に歸つて來た。

然し彼等の持つて來たのは、唯重たい疲勞と、自分の足についた埃とだけだつた

すぐに、別な監視者等が、幾人かの人夫を連れて出かけた。この人夫等は忠實な犬で、つまり監視者等の爲ならば、自分の頭にでも吠聲を立てゝ噛みつきかねない連中であつた。然うした精神病者は、地上の到る所に狂憬の叫聲を擧げてゐる。

哀れな靴修繕師の古手は、連れにはぐれて河岸の林の中で彷徨てゐて、彼等に捕へられた。その男は、…………………………………二人の人夫に擔がれて來た。彼が、この連中の姿を見て逃げ出さうとした時、蜘蛛が……………………つけたのだと言ふ。

彼等は、その屍體を投り出すとすぐに、再び出かけて行つた。この靴修繕師の古手なぞ、此所では全然そんな手段で索ね出す必要のない人間だつた。彼は、何をしたつて、他の人々の五分の一も働き得ない人間だつたから。然し唯、監視者等は、何でも言ふ事の出來る人間を娑婆へ放してやる事が恐ろしかつたのだ。で、彼等としては、この男に對するこの行爲は、理想的だつたのに違ひない。

殘つた監視等は、一人も眠らなかつた。そして、焚火を繞んで蹙面をしながら私等人夫の群れを見張つた。

眠それて微動した者も怒鳴られた。

眠り痴れて譫言を言つた者も叱られた。

私等人夫は、この連中がそんなにも不機嫌になつた理由を知悉した。然し、私等には、事件がどんな風に展開してるのか、些しも解らなかつた。で、默り込んで寢息も立てないで檻褸の中に軀を踞めてゐた。

ヴルドツグは、時々私等の枕元を歩きながら、舌を鳴らして呟いた。

「…………………………………！………………。」

然し、誰も動きはしなかつた。

皆、お互の顏を見合ひながら、一言も口も利かないで何かを待つてゐた。

三時間の後に、肉附き刷毛は、…………

…………。彼は、……………………………………………………、ふらふらする瞳を光らして、嗚咽ながら身悶えしてゐた。

監視者等は、…………………………………。

ヴルドッグは、…………………。歯磨刷毛は、……………………………………………。

………………………………………………………………………………。

この醜い顔の監視者は、發狂者のやうな奇怪な笑聲を立てゝ顔を歪めた。それを取繞て酒を呻つてゐる監視者等も、痙攣的な笑聲をあげて軀を搖り、或者は病的に呻いたのだつた。

彼等は、それを曳ずり降して、……………………………………。

地面へ下された歯磨刷毛は、宛然皮を剝がれた蛇のやうに慄えながら、すつかり相好の頽れた顔を歪めて、歯を噛みしめてゐた。殆んど視力を失つた眼の視線は、氣味惡い然し臆病な異様な光りを湛えて、亂醉者等の額の上をふらふらと彷徨いた。

醉亂れた監視者等は、彼を戸外に曳きずり出して、……………………………………………

………………………………………だ。彼等は、そんなにかけては、もうサアド侯爵以上の奇怪な生物になつてしまつてゐるのだ。……………………………………………………た。

黄色つぽいカンテラの灯光の流れがこの、凄惨な情景を照した。靴屋は、…………………………………………………た。

「………………………………」

彼等は　恐ろしい杖を持つてそれを待つてゐたのだ。そして、……………………………………。

歯磨刷毛は、…………………………、二十秒の後……………………………。

杖は、暴風のやうに、……………………………………………………。そして、……………………………………………………。

鼻は、……………………………………………。その間中、………

つて、……………………………………。

そして、水は長い間死んだものゝやうに靜まつた。

監視者等は、痙れあがるやうな笑ひをして引返さうとして、水の底をも一度その暗い水の底をカンテラの灯光で透してみた。

その時、…………………………………、のろのろと水面に泛び上つて來た。その、硝子の破片を含んで…………………、無意味に開かれて顫えてゐた。

水の中へ踞まり込んで覗いてゐた監視者等は、叫聲を立てゝ後退りをした。誰も、聲を立てなかつた。

その頭は岸に這ひ寄つて來て、爪を立てゝ土に掴まつた。梟は折れた鍬の柄の杖でその頭を突いた。彼は、…………………………………………………、そして、……………………………、死んだ瞳で、青ざめた灯光を凝視た。

蜘蛛は、手にしてゐたスコツプで、その頭をひどく毆りつけた。………………………………………………。

…………………………………………………………………………。自分の頭の置所を忘れた右手は、……………………………………………。

監視者等は再び寄り集つて……………………。

腫れ上つた唇は、………………………………………………………………。

監視者等が狂人のやうに………………………………。彼等は、遂にそこを離れ去つた。慘な屍の上に、闇は黒い死の掩布を垂れ、風は暗い遠い空で歔欷いた。

次の日も、…………………………。陽は鈍黄色な視線で、怯々とそれを凝視してゐた。梟は、それを見ないと力めながら、慄える吐息をして、相互の眼を見合つた。夥しい鴉の群が、何處かから襲つて來た。そして悩ましげな啼聲を立てながら、…………………………………。

梟は、氣難かしげにそれを見てゐたが、唇を鳴らして手を振

つた。

『ほう…………。畜生！』

然しこの黒い死の鳥は、羽搏きをして些し飛んでは、呪ふやうな忌はしい聲で啼きながら戻つて來て、……………………。

彼は、石を投げつけた。石塊は唯虚空に悩ましい音を立てゝ飛んで落ちただけだつた。一羽の鴉は、自分のすぐ前に落ちた石塊を、嘴で突いて見て嘲るやうに黒い眼を光らして聲を立てた。

鳥は、腹立たしげに叫んで、同僚を呼んだ。七分の後に、……………………………………………。

（二十）

冬が襲つて來た。

苦惱の軛を背負つて、土に跼まつてゐる者は、空を仰ぐ事も容されない。その人々の苦しみの上には何の關はりもなく、時は過ぎたのだ。

或夜、地は灰色な死の掩布(シィツ)のやうな雪に覆はれた。地を呪ふものの、息吹のやうに、吹雪は暴れつゞけた。その中で私等は、九日の間雪を掘つて仕事をした。それ以上この仕事を續ける事は、どんな獸にも不可能だつた。二十幾人かの人夫は、悉く凍傷にかかつた。

まだ幾日か、烈しい暴風が鞭を振るやうな音を立てゝ吹き荒み、フエアリイの撒く灰のやうに、狂亂した雪は地を襲つた。

私たちは、襤褸布片(ぼろきれ)かなぞのやうに、そこを掃き出された。總ての人夫等の掌に、一枚の二十錢銀貨が載せられた。私たちはその恩恵に對して、地に額のつく程も頭を下げなければならなかつた。

總ての計算は、規則通り立派に行はれた。そして、それに從へば、どの人夫も皆、一枚の錆びた銅貨の所得どころか、まだ幾年も斯うした殘虐な鞭の下に、慘な勞作を續けなければならない事になつてゐた。然し、誰もこの事に就て、その錯誤を、否詐僞を指を折つて計算(かぞ)へもしなければ、一言も口を開かうともしなかつた。ゴリラの牙から一時離れた所で、何を喚き立つた所で、それが何にならう。皆、默つてゐた。

『然し、汝等(きさまたち)も此所で今まで稼いでくれたんだから、不足を何う此うと解らないことは、言やあしない。加之(おまけに)、これだけの金をやるから、今日から、自由に自分等の方向に歩いて行くがいゝ。』

この、素張らしく解りのいゝ人等は、私等に施與としてその

金をくれたのだ。雖然、誰がこの場合、與へられた慘な自由を歡べやう。皆、自分の壓挫がれた、病に蝕はれたぼろぼろな軀と、汚れ破れ果てた夏仕度の襤褸。行くべき所ももたない人々なのだ。

　或者は、ひどい感冒の發熱の爲に、譫言を言つてゐた。或者は、凍傷の爲に四肢の指が腫れあがつて、自分の足で歩く事も能ないでゐた。斯うした人々が、吹雪の荒む果てもない雪の曠野に立たされるのだ。どんな人間が、それを歡び得やう。對者にも不要になつてから掃き出されて、喜べる程の聖人は、私等の仲間には一人もゐなかつた。

『さあ、汝等は雇主の慈悲で、自由を與へられた。些しも早く、此町を立ち去ることだ。非然、浮浪罪として所罰されるか、凍え死ぬかだ。すぐ自分等の首を突込む穴を探しに、出て行け……。』

　部屋の解散に臨檢した警察の人々は、然う私たちに說き聞かせた。この人々は厄介な浮浪者等を、一時も早く自分の署の管内から掃出す爲に、わざわざ來てくれた親切な人々だつた。

　私たちは、吹雪の荒む午後三時頃、慘な自由と、一枚の小さな銀貨とを背負はされて、慄えながら雪の曠野へ出た。

　私たち――――私の肩に靠れかゝつて歩いてゐる、ぼろぼろな汚れたメリヤス襯衣一枚きりで周旋屋の手に陷ち込んで來た、あの若い陶器繪師と、私、――――は、四哩の間に、もう仲間の影を見失つてしまつた。

　彼の軀は、もうひどくいけなくて、その顏は瘦せこけて朽葉色になり、枯草のやうに茫々と亂れ伸びた頭髮の頽れかかつた額の底に、落ち窪んだ眸は汚れたゼラチンのやうな哀しげな異樣な光を湛えてゐた。

　私は彼に自分の破れた短衣を一枚着せ、蓆でマントを造へてやつた。然し彼は、木の葉のやうに烈しく慄え、幾度も雪の上に蹲つては長い間膝の上に頭を押あてゝ呻いた。……の部落へ越える峠へ來た時、曳ずられて歩いてゐた彼は、私の肩から手を離して雪の中へ頽れるやうに蹲坐してしまつた。

『ね、行かう……………。もう些しだ。』

　私は、彼の背に手をかけたが、苦惱に慄へてゐるその軀を見ると、强いては起たせかねて、そのままそこへ蹲つた。私自身もう雪に塗れて、風に虐まれる木立のやうに凍え慄えてゐたのだ。

　彼は、吹溜りに頭を靠せて、吹雪に咽びながら、だしぬけに遠い南の國の港の町に自分を待つてゐる女の事を、きれぎれに譫言のやうに語りはじめた。私は、何か言はふとしたが、涙が溢

れて來て物が言へなかつた。そして、彼の首に手を捲いて、幼兒にでもするやうに、その背を撫でゝやつた。この、烈しい苦惱に頭の亂れた若い繪師は、私の胸に顏をすり寄せて、嗚咽の中に舌縺れしながら物語を續けた。然し十秒の後には、兩手で頭を摑んで、烈しい咳に襲はれながら、嗄れた弱々しい聲で、何かの小唄を唱つてゐた。斷ちきつたやうに、その唄をやめる。そしてまた欷歔ながら呟く。

『それは…………、寂しい顔の女だよ。それは、ね…………。然し、俺は…………あゝ、駄目なんだ。もう…………。歸れないだらう。ね、彼女の、所へ…………。』

その顏は土色がして、全身が波打つやうに慄えてゐた。

葉のない白樺の木立は、吹雪の荒む高原に、慄えながら悲しげなトレモロで叫んでゐた。

私は、心臟の上に錐でも突き刺されたやうに戰いた。そして、彼の肩に手を捲いて曳き起した。

『さあ、もう些しだ。兄弟…………。』

その聲は、喉の中で凍え着いて、唯呻くやうに唇が顫えた。私はその時もう自分の右脚が凍えてしまつて、利なくなつてしまつてゐる事を覺つた。雖然再び、吹雪の狂瀾の渦卷き、暴風の吼え叫ぶ、雪の海に彼を背負つて出た。

陽は落ちて、陰慘に垂れた暗い暮の影に、灰色な雪明りが漂つてゐるだけだつた。私たちは風に吹き飛ばされて、幾度か縺れ合つて雪の中に倒れた。そして、長い間踠いては辛じてそこを這ひ出すのだつた。

まだ峠を下らない一つの曲角で倒れた時、彼の穿いてゐた雪靴が脫げてしまつた。私の手の指も、凍え果てゝそれをなほしてやる事も能きなくなつてゐたのだ。彼は、私の肩の上に顏を押あてゝ、齒を鳴らせながら呻いてゐた。その軀は、もう氷つた土塊のやうに凍えてゐた。

私は、有つたけの力で彼を曳ずつて、四歩ばかり離れた木立の下へ這ひついた。そして自分の印袢纏の裾をひき裂つて、彼の足に捲きつけた。語をかけたいと思つたが、唯烈しく齒がなつて、何かで喉を塞がれたやうに聲が出なかつた。で、力を籠めて、彼の手を摑んで振つた。

その時、突然腦に釘でも打込まれたやうに、激しい衝動と痙攣が私を襲つた私は、頽れるやうに、雪の屍臺の上に倒れた。黑い、恐ろしく冷たい何かの手が、私の眼を掩ふた。私は、消えて行く意識の中に、凍え果てた手で雪に頭を埋めてゐる屍のやうな友だちを探りあてて、殘された力の總てで烈しくその首を抱きしめ、その顏に顔をおしあてた。

私は、五箇月の後に、辛うじて自分の健康を回復した。然し彼は、十一時間の後に二人がそこから掘出された時、もう冷たい屍になつてゐたのだつた。(つゞく)

夏のわかれ

釋迢空

十年前の夏、子どもから育てた生徒の一人を、造士館高等學校へ送つた。其頃の寂しくて、乏しかつた日々は、この子の拘泥のない心持ちに救はれることが多かつた。たゞしてやつた日の記憶が、此ごろ頻りにあざやかに浮んで來るやうになつた。

青ぞらのうらさびしや。麻布でら　霞むいらかをゆびさしにけり

かげろへる大き銀杏の梢を見よ。わが言ふまゝに、目翳さす子か

飯倉の阪ののぼりに、汗かける白き額見れば、汝はやりがたし

晝早くそばをうたせて　待ちごゝろひそかなれども、たのしみにけり

じづかなる晝餉をしたり。いやはてに、そばのしろこを啜ろひにけり

今日寢ずば、三夜さを徹すわが爲事。心悔いつゝたひらかにあり

喰ふそばの腹にたらふが、あぢきなし。遂遣る心さだまるごとし

時を惜しんで

さびしさを我に告げむとする人よ。いこひて行かな。圓山の塔

塔の山をおり來るあゆみ默深し。やゝ夕づける風そよぎ居り

二年後、時々おこす手紙は、私を寂しがらせる樣になつた。

この憐き心にも、倘むくゆなと言ひ給ふかと、詞を哭きにけり

ふみの上に、こと荒らけく叱りつゝ　下むなしさの　せむすべ知らず

あやまたず　あらしめしかのをみな子も、かつ〳〵我を忘れゆきけむ

別腸譫語

庭土の上に素足の　踏みごゝち　このこゝろよさも忘れ居にけり

來しかたは、來しかたなり。今はもよ　よきねくたいの色などこのまむ

古めきて　色さむけさよ。ふさへりと　われの背びろは、ほめられにけり

腹だちて、ほしきまゝにも　言ふ我か。人とある人を　蟲鳥にせり

箱根山

古泉千樫

大正十五年八月、増上寺主催の「山上のつどひ」の中にありて

うつし身をいたはり馴れて山寺のかたき蒲團の寂しかりけり

よひよひの低き枕におのづからよく眠りけり山のみ寺に

いちやうに早く起きいでてこの山のつめたき水に顔あらふかも

山の上の心すこやかに朝な朝な井の水くみてからだを拭ふ

箱根山み山もさやに繁み生ふる椎の葉の上に朝の霧みてり

山の上に相いそしみてととのふる日々の食事のいつもうましも

やゝ暑き山の日ざかりの心よく大き西瓜をわりにけるかも

おのづから靜けくもあるか日もすがら日ぐらしの聲うぐひすの聲

山の上のみ寺にあれば天の川よひよひ清くあきらかに見ゆ

夕おそくのぼりきたりて箱根山みづうみのべに天幕張る人

宵闇の舊街道をわがくれば天の川白し蘆の湖の上に

夕餉終へて散歩にいづれば寺の爺提灯もちてゆけといひけり

杉並木暗き舊道行き行きて新道を歸る宵ふけにつつ

幾人か目ざめゐるらしあかつき深く降りいでし雨の音のしづけさ

箱根路の山のみ寺にもろともに心すずしく七日すぐしつ

詩六篇

千家元麿

夏の夜

近所の家は早寢なのに
私の家は眠るのが晩い
戸も開けて燈火は輝き
時はづれに賑やかだ。
若い氣同士が集つて
夏の夜の更けるのも知らずに
話し込み
十二時過ぎて客も主人も驚くのだ
あゝ又今晩も十二時過ぎだ。

よくも話の盡きないものと
夏の夜の星も傾き
暑さも少しうすらいで
急いで床に就くのです

葉柳

葉柳よ
毎年夏になると
芽を出し枝を垂れて
茂り繁る愉快な街の木よ
純白な日傘が通り
汗によごれた勞働者が通り
御前の輕るい葉の姿には
やさしい勇氣が湧いてくる

薬柳よ、御前は街の中に立つて
暑さにくるしんで通る人に
やさしい言葉をかけてくれ
街角の美しい薬柳よ
逍遙者の友よ
人々は御前を記憶して憶ひ出すだらう

友　よ

友よ
夏の日も健やかに
日に焦けた顔をして
花作り、畠の仕事に
樂しく働く君は
羨しい生活です

毎日の仕事に
倦むことも無く
余暇には好きな本もよめ
林の奥や野の逍遥に
清い小鳥の聲を聴き
やさしい野の花を見つけたり
森と土との匂ひに染んだ新鮮な心に
疑惑の入る余地も無い
君の生活は羨しい

夏の夜

星の多い夏らしい
幸福の感じられる晩だ
自分の胸も爽やかに

空のやうに晴れて
夏らしい夏を祝ひたい
葡萄酒を飲み乍ら
昔の戀の手柄でも話したい
こんな晩はお饒舌りになるものだ
子供は子供で樂しさうに
花火をあげたり活潑に
庭を走つたりして中々眠らないで
爽やかな夜を戯れてゐる

魚の子

魚の泳ぐのを見るのは好きだ
きれな清い流れに
育つてゆく魚の子の可愛ゆさ

流れの中に群れて魚の學校のやうだ
流れに學ぶ魚の子は
皆んな美しく育ちたいのだ。

夏に

夏、照り極つて
素晴らしい大暑に
悩みくるしむ人々が多いのに
歡喜に燃えてよろこぶ人も
亦多いと思ふ
夏は歡喜の時
懶怠を好まない
勤勉で快活な人には
夏は感興の催す時だ

沈滞した精神が
感激に躍る夏だ
家の内に懶怠にくらすのは苦痛だが
戸外の新鮮な大氣は爽快な凉味に滿ちて、
日を浴びて歩いても左程辛いとは思へない
野に照る太陽は麗はしく
風は甘美な凉味に豊かで
これより樂しい御馳走はない。
人々は風を喜ぶ
夏は天然と親しむの時だからだ。
夏の休みの子供らよ
窮屈な學校の生活から
開放された子供らは
夏の間に健やかな軀となり

野外の自然に親しんで、快活に夏を悅ぶ

豐饒な夏よ
森も野も田畠も神々の綠の微笑に漲り
天空は快濶に
大膽な色彩と光耀に狂めき
夕暮の雲々の曲線の奇觀や豐富な色彩は
壯麗を極めて輝く
オゝ靜かに繁茂する樹や草の蜜で參差とした眺め
あり余る豐饒な彼ら
天然の滋養物
悠々として浮遊する白雲
日沒の壯嚴で美麗な瞬間よ
夏は精神の歡喜に高潮する時
健やかな肉體をもつて

働くにも、遊ぶにも
快活で愉快な時
太陽よ我らを照らせ
興饒の自然を味ひ樂しめる我らに
詩歌の天地は夏こそ榮へ
生命に滿ちて溢るゝだらう

ミュンヒェン

小宮豊隆

一九二四、五、六、

墺太利から獨逸に這入ると、國境一つ隔てて、人間の感じががらりと違つて來る。墺太利人（と言つても維也納人しかよく知らないが）は妙に疲れてゐる。或意味では上品だと言へるかも知れないが、兎に角丸で精氣がない。それが、獨逸に這入ると、みんなぴちぴちしてゐる。墺太利人は既に過去に於てそのドラマを持つて了つた國民である。獨逸人は是から先きも、充分そのドラマを持ち得る國民だといふ氣がする

ザルツブルクからミュンヒェンに來る途中は、殊にザルツブルクとザルツブルクに近い地方の一體の景色は、非常に美しい。アルプスの岐れか何かが峯を頂いて遙か遠くの空をヂクザクと劃して連なつてゐる前景には、うねうねと柔らかな線を描いて可也な丘が幾重にも重なり、それをあらゆる變化を極めた線を包む若葉の森が點綴して行く所を、一面の青青した麥畠を隔てて見はるかす景色は、伊太利などでは到底見る事の出來ない、朗らかな暢びやかな濃やかな景色である。獨逸人は、伊太利伊太利と言つて、頻に伊太利に憧がれてゐるが、自然だけに就いて言へば、私には此所の自然の

方に反つて深い味がある様に思はれる。

ミュンヒエンに來てから、汽車は大分長い間、ミュンヒエンの裏側を通る。昔隅田川で明るいうちに船遊びをした時、淺草を裏側から見て、妙に芥溜の中を覗き込むうな感じを受けて以來、不思議に私は、都會を裏側から見る事に興味を持ち出したのであるが、流石の歐羅巴の都會でも、裏側から見ると、大抵は、汚ならしく不愉快で胸が惡くなる樣なものだらけである。然るに此所の裏側は、不思議に、小ざつぱりしてゐるのみか、雅かな味をさへ持つてゐる。――この事が先づ私をミュンヒエンに牽きつけた。

ホテルに落ついてから、休養がてら、町の中を好い加減にぶらぶらあるいて見る。ステーションの近くは小ぎたなくせせこましくざわついて、何となく伯林の樣な感じがあつて厭だつたが、ホテルの近所は、カスターニエンを植ゑ込んだ廣場なぞもあり、家のたたずまゐにもしつとりした所があつて、何となく寛ろぎと落つきとを感じる。

廣場の廣告塔を不圖見ると、伯林の『フイラルモニー』の連中がフルトヱングラに率ゐられて、今夜、此所に來て演奏會を催すとある。曲目には、ハイドンのG-durのシムフオニーがある、バハのF-mollのピアノと絃とのコンツエルトがある、最後にベートーフエンの『第五シムフオニー』がある。――急いでホテルに歸つて、番頭に切符を買はせる。

『樂堂（トーンハルレ）』に行つて見ると、非常な人である。こんなに人が來るとは豫期してゐなかつたのか、携帶品預所には婆さんがたつた一人きりゐない。婆さんは汗みどろになつて働らいてゐるけれども、あとからあとからと客が押し寄せるものだから、仕事がなかなか追つつかない。客は雪崩を打つて前進しようとする。それを別に制止しようとするでもなく、婆

さんは、自分の前に差し出される帽子や外套やステツキを、一つ一つ片つ端から始末しては、左手を曲げて額をこすり上げて、袖の所で汗を拭いてゐる。

ハイドンのものには一體に近代的な神經質な味が多い樣に思はれる。このシムフオニーにも同じ味がある。さうして此所には隨分奇麗な、たとへばリストかなぞを思ひ出させる樣なパセジが、方方に鏤められてゐる。——ハイドンは、ベートフエンに比べれば無論人間の味が少ないには違ひないけれども(又ベートフエンの場合に使ふ人間といふ言葉とハイドンの場合に使ふ人間といふ言葉とは多少內容を異にするけれども)、我々の感覺に訴へる訴へ方からいふと、バハなどよりも、ハイドンは遙に人間的だといふ氣がする。バハのものが我々の感覺に訴へる訴へ方には、雅樂や能の囃子や僧のお經などが我々の感覺に訴へる訴へ方と、非常に重要な點で共通する。箇々には如何なる感情をも表現するものでない樣なリヅムとメロデイーとが相集まつて我々の感覺を刺激してゐる內に、いつのまにか我々は今までとは違つた特別な世界の中に導き入れられてゐるのである。ハイドンには、然し、さういふ意味でのリヅムとメロデイーとでなく、もつとハイドン自身の人間に近づいた箇々のリヅムや箇々のメロデイーが多分にある樣に思はれる。

バハの「コンツエルト」では、フルトヱングラがピアノを彈いた。彼はピアノを彈きながら、左の手を高く上げて、絃の指揮をした。それが私には珍らしくもあれば不愉快でもあつた。いくら馴れてゐるからといつて、あんな事をして本當にピアノが彈ける筈のものではない、それを彈けると思つてゐる心掛が藝術家らしくないと思ふから不愉快なのである。然し段段彈き込んで來るうちに、彼は左手の指揮をやめて了つた。是は彈奏に脂が乘つて來たせゐもあるかも知れないが、一方では、兩手を使はなければならないパセジが、段段多くなつて來たせゐでもあつた。然し、左手の指

揮が止むと同時に、今度は彼は、無暗に頭や體を振り動かし始めた。それが又私を不愉快にした。——然し考へて見ると、若しああまでして絃を指揮しなければならないものだとすると、それは、氣の毒がられべきではあつても、不愉快がられべき筋合のものではない、たとひあれがフルトヹングラの癖であるとしても、さういふ解釋を容れる餘地がある以上、さう解釋する事によつて自分の不愉快を消した方が、此際遙に好都合な事ではないか。さう思つたら、私はそれが少しも氣にならなくなつた。彼が再び左手を上げて指揮しようが、また前よりも一層劇しく頭や體を振り動かさうが、そんな事に少しもお構ひなく、私は、そこに開展される音の世界の中に、段段と深入りして行く事が出來た。——一方から言へば、それだけバハが偉いのだと言へるかも知れない。聽衆にてんでに勝手な事を考へさせて置いて、結局は自分の音の世界に牽き摺り込んで其所に集中させて了ふからである。考へて見ると、バハのものでは、私はよくかういふ經驗をしてゐる樣である。初め暫くの間は、なかなかその世界に這入れない。然し時が立つうちに、いつの間にか、逆つた世界に這入つて了つてゐる。

ベートーフエンの『第五』は、フルトヹングラが一生懸命に指揮した割には、圓盤で親しんでゐるニキツシュのそれほど、纏まつた味が出なかつた樣である。是はフルトヹングラが豐富な感情の持主であるにも拘はらず、その豐富な感情を制御し整理する事によつて、必要に應じて自由に自分の解釋の上に強調を與へる事が出來るほど、まだ充分に理知的になつてゐない爲ではないかと思はれる。ニキツシュのものを聽いてゐると、全體に與へられた抑揚緩急が如何にも自然で、從つてあの『第五』の中に盛られてゐる筈の感情が、何所にも曖昧模糊がなく、條理を悉して透明に我我の頭に這入つて來る。少くともニキツシュは『第五』を支配してゐる感じである。然るにフルトヹングラは反對に『第五』から支配されてゐる。もつともニキツシュの樣に『第五』を支配して了つて可いものであるかどうかは充分問題になり得

ろには違ひないけれども、兎に角フルトヱングラが『第五』に支配されてゐて、その爲めに、その『第五』が、全體として、ニキッシュの『第五』に劣つてゐるといふ事だけは爭はれない。フルトヱングラにあつては、感情が氾濫する。從つて好い所になると、それは肉薄する樣な直接性を帶びて來る。然し一方からは、そのため印象にムラが出來て、鮮不鮮の明暗が際立つて現はれて來る。例へば、初めのアレグロの終に近く、重荷を脊負されて喘ぎ喘ぎ働いてゐる者があげる最後の呻き聲とでも形容したい樣な悲痛なパセジには、ニキッシュにも見出されない樣な劇しい絶望的な苦悶が表現されてゐたけれども、初めの運命の訪づれと呼ばれるパセジでも、スケルツオ全體でも、また最後の、ヷグヹルが『リエンツイ』の前奏曲の中で踏襲してゐる、裏に憂鬱を包んで凱歌を奏してでもゐる樣なパセジでも、充分なアインフユールングのもとに、充分に適切な表現が與へられてゐたとは思はれなかつた。

さうは言ふものの、フルトヱングラ初め、みんなが一生懸命であるのは、實に氣持がよかつた。こんな敬虔な心持で演奏する管絃樂部を、私は未だ嘗て見た事がない。

今日初めて氣がついた事は、一つの樂器から次の樂器へと順次に音が移つて行く時に、その音の運動が、例へば塀の上をちよろちよろと鼠が渡つて行く樣に、いかにもスマートに又いかにも可愛く見える樣な氣がするといふ事である。勿論樂人は音を出す爲に腕や手を動かすのだから、一つの樂器から次の樂器へと順次に音が移つて行く場合には、その手や腕の運動の見えるのは當り前である。然し私の音が見えると感じるのは、結局それから誘はれる錯覺であるには違ひないが、それのみでなく、何かairyなサムシングが別に存在して、絃なら絃の上を、右から左へ左から右へ、ちよろ〳〵

ちよろ〳〵と動いて行く様な氣がして仕様がないのである。さうしてそれが不思議な美しさを持つてゐるのである。私はそれを眺めながら、多くの作曲家の内には、私の如くにこの不思議な美しさを感じて、その美しさの爲めだけに一つの管絃樂曲を作らうと企てた人が、或は一人ぐらゐはゐたのではないかと考へて見た。然し今までにさういふ事を少しも感じた事がなかつたのだから、誰のどの曲がそれに當て箝るものなのか、元より見當のつく筈はなかつた。

外に出て見ると、びしよびしよ雨が降つてゐる。今朝ホテルの女中が、ミュンヒエンはやつと今日お天氣になりました、今まではそれはそれは厭な天氣が續いてゐたのですよ、と言つてゐたが、此様子では、まだ天氣が定まらないと見える。――然し若葉はもう到る所に出揃つてゐる。カスターニエンの樹も、涎懸をかけた様に葉にとりまかれて、すくすくと茶褐色に立つてゐる。

一九二四、五、七、

『アルテ・ピナコテク』に行く。

ルーベンスの畫をその附加（アンシュッツクンゲ）と上塗（ユーバーマールンゲ）とから洗ひ落したものだと云つて、洗ひ落した畫とその元の畫の寫眞とが並べて懸けてある。それは裸の子供を膝の上に抱き締めた Hélène Fourment の全身像である。寫眞では色が分からない、それに明暗の關係が妙に誇張されるから、寫眞と畫とを比べて見るのでは、はつきりした事が言へない。然

し、ともかくも比べて見てゐると、寫眞の方が遙に可いと思はれる部分も二三ケ所はある。さうして二つの間には、色んな點で、可也著しい相違がある。

元來この畫は誰の畫だとされてゐたものだらうか。ルーベンスの畫室の畫とされてゐたのか、それとも誰か或特定の弟子の畫とされてゐたのか、それともルーベンス自身の畫とされてゐたのか。前の二つの内の何方かだとすると、この剝奪はまつたく大手柄である。然し此所に附加(アンシユツツクング)と上塗(ユーバーマールング)とがあると見、然もそれがルーベンスの弟子のものであると見、のみかそれを剝奪すれば眞正のルーベンスがその奥から出て來ると確信し、さうしてその剝奪にとりかゝつたその根據は何所にあつたか。これだけ大膽なことをする位だから、事前の考慮は愼重に愼重が重ねられたものに違ひない。然し、若しこの中にルーベンス自身元の形が氣に入らなくて自分で附加(アンシユツケン)し自分で上塗(ユーバーマーレン)した部分もあり得ない筈はないといふ事が想像し得られるとすれば、そのルーベンスとルーベンスでないものとを、剝奪に際して、當事者はどうして區別して行つたものか。區別する必要のない程に、この附加(アンシユツツクング)と上塗(ユーバーマールング)とがルーベンスのものでないと確證されてゐるのならば、勿論問題はない。然し、若し區別する必要があつたとして、さうして區別したとして、結局その區別は想定の上に立つものに違ひないが、その想定はどういふ事實を根據としたものか。――獨逸の事だから、この事に關する當事者の精細な報告書が發表されてゐるのかも知れない。どうにかしてその「證明」のはつきりした手續を知りたいものである。私の樣な臆病で下らない想像計りに煩はされる者には、この事は、到底思ひ掛れさうもない。思ひ切つた仕事なのだから。

維也納にもルーベンスの可い畫があるが、此所にもルーベンスの可い畫が隨分ある。

欧羅巴に來たてにはルーベンスの畫は寧ろ厭だつた。それが方方畫を見て廻つてゐるうちに、段段その好い所が分つて來る樣な氣がし出した。維也納の畫や此所の畫の前に立つてゐると、ルーベンスもなかなか立派な畫かきだと感心する心持になる。と同時に、ティツィアノやティントレットの好い所が、愈はつきりして來る樣にも思はれる。多少違つた意味ではあるが、ミケランジエロの『最後の審判』の偉大も、一層鮮やかになつて來る。

十六世紀から十七世紀へかけて全欧羅巴を支配したバロツクの精神は、その源をミケランジエロに發すると言はれてゐる。ルーベンスはその精神を主としてティントレツトとヱロネーゼとから開發されたものの樣ではあるが、然し幾度も羅馬に滯在してゐる以上、ルーベンスは、直接にカペラ・システィナのその源に就いて、吸收すべきだけの營養を吸收したに違ひない事は論を俟たない。現に、あすこの天井畫の豫言者エレミヤをルーベンス自身が模寫してゐるものが、ルーヴルには殘つてゐる。ルーヴルに行く程の事もない、既に此所の、大小二た通りの『最後の審判』が、そのミケランジエロの影響を——換言すればそのバロツク的精神の影響を、最も雄辯に物語つてゐるものであると思ふ。

然しミケランジエロに比べるとルーベンスは、遙に現世的であり享樂的であり最後に女性的（ミケランジエロに比較すれば大抵なものが女性的にも見え得る。然し此所ではその意味での女性的ではない）である。若しミケランジエロの『最後の審判』を常陸山や太刀山などの相撲を幾百となく集めてそれを一時に相撲はせてゐる樣なものだと形容するならば、ルーベンスの『最後の審判』は何百人となく集まつて揉み合つてゐる女相撲だといふ感じである。そこに動がある事は事實である。然もその動は、ミケランジエロの動の樣に、壓倒的な威力は持たずに、寧ろ誘惑的な魅力を持つてゐる。ミケランジエロの動の底には、或悲劇的（トラーギツシュ）な心が流れてゐるけれども、ルーベンスの動には、さういふものが丸でない。あるものは、肉體のあらゆる姿態（ポーゼ）をあらゆる關係に置いて見る。豪奢な享樂の心のみである。——その點に於いて

ルーベンスは、本質的に、ティツィアノと相繋がる。

ルーベンスが死んだあとに、ティツィアノの畫が十九枚、ティントレットの畫が十七枚、ヱロネーゼの畫が七枚、その他、外にルーベンス自身の手になつたティツィアノの模寫が三十二枚殘つてゐたと言はれる。ティツィアノには、動的なバロツク的な、言はば建築的な想像力は乏しかつたけれども、現世的で享樂的で、東邦的な官能的な色彩を充分に帶びた當時のヱネツィアの文明を背景にした。豪奢な心を表現する靜的な畫家としては、當時彼に比肩し得る者もなかつたのだから、ルーベンスが彼に最も多く牽かれたのは、極めて自然の事であると言へる。然も北邦の享樂兒は、いくら南邦の享樂兒から開發されても、竟にその「國境」を踏み超える事は出來ないものと見えて、あれほど豐麗であれほど豪奢な世界を描いてゐるにも拘はらず、色彩の點ではルーベンスは、ティツィアノに比べて、丸で子供であり又丸で田舍者であるとしか思はれない。それほどティツィアノの色彩は、色彩そのものが複雜である上に、特に色彩と色彩の相關から來る味が複雜である。ルーベンスの色彩は、ティツィアノでは大して强調されなかつた光の効果が特に强調されるから、非常に絢爛で複雜である樣に見えるけれども、事實は、ルーベンスの色彩はティツィアノに比べて、遙に單純であり且つ生なのである。二人の色彩の間には丁度燻んだ能衣裳と紅い色の多い羽二重友禪との相違がある樣にさへ思はれる。

もつともこの事は直ちにルーベンスとティツィアノとの、畫家としての優劣にはならない。なぜならルーベンスは一方では特に女の肉體を取り扱ふ上に於いては、ティツィアノなぞが到底及びもつかない特殊の技能を發揮してゐるのだから。――ルーベンスの女の肉體には、ルーベンスの觸覺が出てゐる又溫覺や壓覺が出てゐる。さうしてそれ等のものをひつくるめて、眩ばしい程に赫奕とした、不思議な光るものが、全體を包んでゐる。或意味で赫耶姫を思ひ出させる

肉體である。是に比べると、テイツイアノの女の肉體は、生理的に甚だ stupid なものに見える。それほど、テイツイアノの女の肉體は、健康だとは言へるかも知れない。又その量的に人を壓迫する樣な健康無敵な所に、テイツイアノの女の肉體の取り扱ひ方の長所を認める人もゐる樣である。然しそれは特徴ではあつても長所ではあり得ない。いくらぶち殺しても死にさうもない樣な、若しくは擲ぐりつけたらぼとぼとといふ樣な音でも立てさうな、さういふ皮の厚い、「肌」らしい感じのない肉體は、人間の肉體ではなくて、化物の肉體である。もつともさういふ意味から言へばルーベンスの肉體にも、妙な化物の樣な肉體がないとは言はれない。殊に或種類の男の肉體にさういふのがある。又その得意とする女の肉體にも、脂肪過多でぶくぶくして、妙に氣味が惡くなる樣なものも、往往ある。然し一般的に言つて、肉體の上の光と色との効果をこの位細かにこの位鮮やかに受とつて、それを又この位細かにこの位鮮かに表現し得た者は、ルーベンス以前には、何所の國の畫家にも殆んど一人もゐなかつたと言つて可い樣である。文藝復興前期のシエナ派のドゥッツイオは、爪の先きが觸つても直ぐ血が滲みさうな、皮膚の薄いマドンナの顏をかいてゐる。若し強ひてルーベンスの先縱を求めるとすれば、それはドゥッツイオぐらゐなものではなからうかと思はれる。唯然し、ルーベンスがドゥッツイオを見て、それに影響されたものであるかどうかは、勿論問題である。

一九二四、五、八。

午前中を『アルテ・ピナコテク』で暮らす。
午後はホテルに蟄居する。

夕方茂吉君が來て、外で一緒に飯を喰つたあとで、『ブラッツル』とかいふカバレーみたいな所に連れて行つて呉れる。

カバレーといつた所で、是れはティロルか何所かの山の中の百姓の衣裝をした人間が、多勢出て來て、茶番をやつたり滑稽を言つたり Blech-musik を奏したりするのを、小さな卓子を圍んでビールを飲んだりしながら、見物する所である。舞臺の茶番は方言計り使ふので、何を言つてゐるのか、丸で分からない。音樂はガチヤガチヤブウブウとまくし立てる。多勢の人間の煙草の烟で、廣いにも拘はらず、部屋の中が濛々としてゐる。然し、全體の感じが、いかにも原始的健康で快活で無邪氣で、ひつくるめて野趣があつて、非常に愉快な氣がする。

我我のかけた卓子の向う側には、可い加減な年輩の夫婦者がかけてゐる。彼等はビールを一杯づつとつて、うちから持つて來たものらしい紙に包んだハムの一塊をポケットから取り出し、女中から庖丁を借りて薄く切りながら、それを肴にしてはビールを飲み飲み、舞臺の茶番を樂しんでゐる。我我の入場料はなんでも一マルクか一マルク五十位だつたと思ふが、かういふ連中は恐らくその半分以下の入場料で這入れるのだらう。來てゐるのは大抵勞働者の樣なものか、それでなければ細細と暮らしてゐるらしく見える市民の樣なものである。

この家の內部は、ぶつ通しの大廣間で天井は木造である。それが黑光に光つてゐる。廣間のまん中に太い丸木柱が、一寸土俵を區切る四本柱の樣な恰好に、四本立つてゐる。その縱の二本の間には、ぐつと細い丸木柱が、一本づゝ、右にも左にも立つてゐる。是は何するものか、若しくは何にしたものか、分からない。然しそれ等の柱の爲めに、この大廣間の空間は三つに分たれる。さうしてその太い丸木柱の奧の二本の前に、芝居や音樂や落語の爲めの、舞臺が築き出

てゐるのである。三方の壁には脊の高い腰板が打ちつけられ、その腰板に低くベンチが造りつけられてゐる。天井と腰板との間の壁には、いろんな地方の服装をした百姓の男女が、彩色畫にかいてかけてある。

舞臺は、シエーキスピア時代の舞臺の様に、一間位は見物席に突き出てゐる。さうして奥の方に、百姓家の正面が造りつけてある。芝居をするときには、その百姓家の屋根の下の壁を全部引きをろすと、其所に百姓家の内部が出來てゐて、ドアがついてゐたりストーヴが切つてあつたり、戸棚があつたり郭公時計が掛つてゐたりする。其所へ後見が卓子と椅子とを運んで來る。それでもう百姓家の内部は完成するのである。いかにも簡單で面白い。然も、芝居が濟んでも、唯その卓子と椅子とを片づけて了ふだけで、あとはその儘で、次々と音樂を奏したり唄を歌つたり落語をしたり、澄してプログラムを進行させる。それも私には面白かつた。音樂も唄も殆んど凡てが、百姓を中心とした地方的のものなのだから、藝術的にいつても、その舞臺装置と、氣分の上で、決して矛盾しないのである。

この舞臺の人氣者らしいのが落語をやる。いろんな事をさんざ饒舌つたあとで、お祈の眞似をする。

先づ「フオン・デム・ヘルン」とか「フオン・デル・フラウ」とかいふ言葉から始めて、遊んで廻る事が好きで家事に心を遣ふ事の嫌ひな女だとか、働く事が嫌ひで外で女計り拵へて廻る男だとか、この男は、さういふ女だの男だのの惡辯を滔々と述べ立てて、可い加減な所で、ポツリとその言葉をきる。さうすると、見物席から、男の惡辯を述べ立てた時には女の聲が、女の惡辯を述べ立てた時には男の聲が、突嗟に、さうして口口に、「エルレーゼン」と言つて響きを返す。さういふ女から、若くは男から、救はせ玉へ、と神樣に祈る事になる譯である。舞臺と見物席との間でさういふ應酬が續く。或はラインランド問題だの、居住税問題だの、さういふ時事問題にも觸れて、一一、女のお客さんだけから若くは

男のお客さんだけから若くは兩方のお客さんから「エルレーゼン」といふ答へを受けとりつゝ、この人氣者は段々聲の調子を張り言葉のテムポを早めて行く。それにつれて、客の心持も段々緊張して行くと見えて、次第次第に「エルレーゼン」と應へる聲が多くなる。仕舞には、舞臺の役者も見物席の客も一つ心になつた樣に、凡てが一生懸命になつて來る。役者が出來るだけ聲を張り上げてテムポを早める。見物も出來る丈聲を張り上げテムポを早める。その間の呼吸が段段切迫する。それがもう殆んどその絕頂に達すると思はれる頃になつて、役者は急にその競り上げる事をやめ、「アーメン」と言つて、それまでの長い應酬に最後の段落をつける。その時分になると、この建物全體としてそれを享樂してゐでもするかの樣に、大廣間一杯の客の顏からは不思議な活氣と歡びとの表情が放射され、その空氣が場內全體の空氣を支配し切つて了ふのである。――私もそれに釣り込まれて、非常に愉快な心持になつた。人から見たら、私も外の人と同じ樣に、活氣と歡びとを私の顏に漲らしてゐたに違ひない。

此所では、役者も見物と一緒に遊ぶ事を知つてゐる。見物も役者と一緒に遊ぶ事を知つてゐる。是は畢竟は双方の呼吸で成り立つ。かういふ事が今日の日本に殆んど見うけられないのは、どういふのだらうか。役者が惡いのか、それとも見物が惡いのか　太神樂だの落語だの曾我酒家だの、ああいふ種類のものがもう少しどうにかしたら、この役者と同じ樣にとは行かないまでも、是と似た意味で、民衆の心を全體として捕へ民衆を全體として樂ませる事が、出來ない筈はないといふ氣がするけれども、事實としてかういふ光景に接した事がないのは、どういふのか。――もつとも此所にはビールがある。是があるので、一つは、さういふ事も樂に行くものかも知れない。

茂吉君の話によると、ミユンヒエンには、かういふ種類の家が、まだ外に二三軒はあるさうである。例へば淺草あた

りにかういふ設備があつたらどうだらうと思ふ。日本人は酔つ拂つて自分だけ好い心持になつて、みんなと一緒に愉快に一晩を過さうといふ氣にはならないものだらうか。

一九二四、五、九、

『アルテ・ピナコテク』に行く。

レムブラントの『復活したる基督』の顏が實に好い。今迄基督の顏を隨分見て來たが、どういふものか是はと思ふ顏が殆んどなかつた。唯一つ、レオナルドの『最後の晩餐』の中の基督の顏だけは、人間として最も深い味を持つてゐるものの樣な氣がして、實に好いと思つた。是程の顏は到底誰にもかけまいと思つた。然しレムブラントのこの基督の顏も、決してあの基督の顏の味に劣らないと思はれる。

この基督の顏を眺めてゐると、基督は「復活」といふ事をそれほど歡ばしい事に思つてゐなかつた樣に見える。寧ろ悲しい事に思つてゐた樣に見える。今迄美しい夢を見てゐた者が不圖よび覺まされて、はつとする。はつとすると同時に、自分の周圍を見ると、自分の周圍は、今迄の美しい夢の世界とは違つた、醜い現實の世界である。美しいものが毀れた事も悲しい、醜い所に歸つた事も悲しい。さういふ意味でこの基督の顏には、夢と現實との二つの世界に立つて、悲しさうにしてゐる心持がある。――さう解釋する事は、復活した基督の心持（といふものが若しあつたとして）を正當に理會する所以ではないかも知れない。然し少くとも此所の基督の顏に現はれた惱みと悲みと寂しさと憧がれとがこ

の世のものであつて然もこの世のものでない感じを與へるとすれば、さうしてそれが『復活したる基督』と名づけられてゐるとすれば、是を基督が神の世界から人間の世界へ歸つて來た事それ自身を悲しい事に考へてゐる表情だと解釋しても、些しも差支なささうに思はれる。もつともさう解釋する事が不都合であるならば、私は何も强ひてさう解釋しなくても構はない。この際私にとつて重要な事は、この基督の顔が、この世のものであつて然もこの世のものでない人間の、いかにも複雜な又いかにも深い、寂しさといふか悲しみといふか、さういふものを表現してゐるといふ點にあるのだから、

　この基督の顔とルーベンスの、例へば維也納にある、マリアとヨハネとに抱かれてゐる基督の死顔とを比較して見ると、レムブラントとルーベンスとの傾向の相違が、いかにもはつきり目に立つて來る。ルーベンスにとつての關心事は、衆生に代つて一生を惱み通した一人の人間の死顔の描寫ではなくて、希臘風に理想化された一箇の理想人の理想的な肉體の描寫である。ルーベンスは、その基督の顔に、普通に死んで行つた普通人の表情をしか與へない。然しルーベンスは、露はに示されたその肉體の上半部には、あらゆる注意とあらゆる技巧とを注いで、英雄的な偉大な感じを與へようとする。然もその肉體は、魂の宿としての肉體ではなく、寧ろ魂とは何の關はる所のない、肉塊の樣なものとしての肉體である。從つてルーベンスが如何に敏捷に光を捕へ如何に精緻に色彩を追つてゐるとしても、そこに表現された肉體は、結局は心理的な意味では stupid な、魂のない、表情のない肉體に過ぎない。例へば基督の肉體を取り卷くものとして、ルーベンスもレムブラントもともに白い絹を用ひる。ルーベンスでは、それは唯普通以上に白く美しく光る事によつて基督の肉體に映發し、肉としてのその華やかしさを一層華やかしいものに見せる爲の、一つの道具としてしか使はれてゐない。然しレムブラントでは、その絹は（勿論ルーベンスのそれよりも遙に多くの畫面を占領してゐるけれど

も）普通以上に白く美しく光る事によつて、基督の肉體を輝やかしいものにしないで、その肉體を通して表現せられる基督の精神を輝やかしいものにする。白い絹は、レムブラントの不思議な光に照らされて、それ自身が或神秘的な存在になるのみでなく、それは、それに映發するものをも神秘的な存在に高める、特別な作用を持たされるのである。

ひらめなる言ひ様ながら、ルーベンスは結局官能に終始する。レムブラントは官能を通して心をかく。從つてレムブラントにあつては敏捷な光の捕捉も細緻な色彩の追蹤も、凡てがそれら自身の爲のものではなくて、それらによつて表現される心の爲のものである。此所の基督の肉體の描寫がそれを證明してゐる樣に、レムブラントが基督の肉體を描寫する事精細を極めれば極めるほど、その肉體は肉として人に訴へるよりも前に、靈として人に訴へる。一切の形あるものが、此所では、或心を擔ふ、象徴として取り扱はれてゐるのである。然しルーベンスにとつてさういふ世界は、全知未知の世界であつた樣に見える。ルーベンスは官能の世界だけで滿足した。又滿足しなければゐられないほど、ルーベンスにとつて、官能の世界は豐富な内容を持つてゐた。さうして、六十幾つで死ぬまで、若若しい心持を失はずに、その世界のあらゆる多樣を享樂し、その世界のあらゆる多樣を表現した。

レムブラントはルーベンスよりも三十年近く後に生れてゐる。王侯の樣な畫をかいて王侯の樣な生活を送つてゐたルーベンスは、ルーベンスから見れば丸で平民の樣な畫をかいてゐたレムブラントを、恐らくは丸で認めもしなかつたらう事は、充分に想像される然しレムブラントにルーベンスを知られてゐなかつた筈はない。或は、直接ではなくとも、レムブラントはルーベンスの影響を受けたのではないかといふ氣もする。ドレスデンにある „Die Alte mit dem Kohlenbecken" と題するルーベンスの小品などを見てゐると、暗い中に石炭の火を置いてそれに婆さんの半面を照し

た、そのイデーといひ色といひ、レムブラントだと言はれても恐らく誰も少しも不思議に思はないほど、レムブラントの初期の作品に酷似するものを持つてゐる様である。もつともルーベンスの初期の作品には信用の出來ないものが多いと言ふから、一六一五年から一六二〇年の間にかかれたらうといふ此畫なぞも、或はルーベンスではないのかも知れない。然し三十年以前に生れたルーベンスが、三十年後に生れたレムブラントと同じ様に、既に光の神秘を意識した畫家であり、又その光の神秘を、彼一流の仕方であるとは言へ、その畫に於て表現してゐる以上、假令後では違つた途をあるいて行つたとしても、少くともその修業時代に於て、よし短い期間ではあつても、レムブラントが、主として光の扱ひ方の方面で、ルーベンスから導かれた事がありはしないかと想像する事は、それほど不條理な事でもなささうに思はれる。然しこの影響が根深い決定的なものでなかつた事は、後のレムブラントの光の扱ひ方で知れる。ルーベンスは、言はば、女の肉體を享樂する時にのみ、特に光の神秘を感じ且つ表現する。然しレムブラントは宗教的と言つて可い程の意味で、あらゆる場合に亘つて、光の神秘を感じ且つ表現する。レムブラントはその神秘の故に光そのものを畏敬に近い心持を懐いて尊重してゐる樣にさへ見えるのである。

一九二四、五、一〇、

『グリユプトテク』に行く。

此所には有名なエギナのアテネの殿堂の破風に嵌め込まれてゐたといふ、群像の再構成がある。断片を繋ぎ合せて元

の形を組み立てて見ようとする仕事そのものには、私は非常に興味を感じるけれども、然し此所の群像の斷片そのものには、私は殆んど何の興味をも牽かれない。此所の斷片は、どれもこれも硬ばつて、妙に化石した樣で、流動する自由な生命を、その中に感じる事が出來ないからである。希臘の彫刻も、あまり時代が降つてもデカダンになつて了ふけれども、兎も角ももう少し後の時代にならないと、面白いと思ひ好いと思ふ樣なものは出て來ないのではないかとさへも思はれる。かういふ彫刻に對しては私は、寧ろ埃及末期の彫刻の臭氣を感じる樣な氣がする

もつとも雜馬にある『ヴエヌスの誕生』と言はれてゐる浮彫は、凡そこの群像と時代を同じうしてゐる筈であるが、是は又恐ろしく美しい、生命に充ちた、この群像などゝは比べものにならない程のフレキシビリテイを持つた浮彫である。凡そ時代を同じくするこの二つのものが、どうしてこんなに違ひ得るのか。浮彫が彫刻よりも遙かに容易しい仕事である爲めか。それとも群像の彫刻家が浮彫の彫刻家よりも遙に劣等な藝術家であつた爲めか。然しこの群像の制作者は、說はあるにも拘はらず、ともかくも名前が指されるに反して、この浮彫の方は制作者の名前さへきまらない所を見ると、作家の優劣からはこの事は、到底解決は出來さうもない。――して見ると、是は結局この彫刻の美しさを、私が味ふ事が出來ないといふ事になるのだらうか。

ゲーテが褒めたといふメヅウサの顏がある。是も私には何所が好いのか分からない。もつとも伊太利をあるいて、あちらこちらで、ゲーテの褒めた作品なるものに注意して見ても、どれもこれも大抵は面白くないもの計りの樣である。仕舞には、あんまり馬鹿馬鹿しくなつて、ゲーテの見識が疑ひたくなつて來る。かういふものはゲーテには分からなかつたのだといふ氣にもなる。

然し見識があるないといふ事は、一體どういふ事を意味するのであるか。ゲーテは是に限らず外のいろんな下らない希臘風の作品を褒めて、其所から大きな感激を受けてゐる。充分に營養を吸ひとつてゐる。感激を受け營養を攝つた事を、その藝術によつて明らかに證明してゐる。とすれば、ゲーテに見識があるかないかといふ樣な問題は第二義的の問題になつて、ゲーテが其所から何を得、その得たものがゲーテにどう作用したかといふ事が、第一義の問題になつて來はしないか。見識は鰯の頭を取るに足りないものだとけなしつける。多くの人の見識もそれに一致する。然し或一人の人にとつてその鰯の頭は毫光のさすものであるとすれば、さうしてその毫光の故にその鰯の頭がその人に或尊い仕事をさせたとすれば、所詮その見識は鰯の頭の價値を上下するに何の役に立つものではないといふ事になりはしないか。

正邪曲直善惡美醜をそのあらゆる紛亂と假裝とのもとに正當に辨別するものは見識である。從つて見識は藝術を評價する根本の標準にならなければならない筈のものであり　同時に又それは普遍妥當性を持たなければならない筈のものである。然し、自分の見識が斷じて以つて美しくないとするものが、ある他人の人に充分美しいものとして活らきかけ、然もその人がその事を自分の美しい仕事によつて明白に證明してゐるとすれば、その見識は當然藝術の價値を測定するに足りないものであり　同時に又普遍妥當性を持つてゐないものでなければならない。といふ事になる。是を目前の場合に適用すれば、メヅウサの顏を面白くもなんともないとする私の判斷は、藝術の價値を測定するに足りないものであり、同時に又普遍妥當性を持つてゐないものである。といふ事になつて了ふ樣である。

然し、ゲーテが褒めたといふ事を考慮に入れて再三自分の印象を點檢し直して見ても、是を面白くないとする私の判斷が動かない以上、その普遍妥當性はともかく　私は私の判斷をこの藝術の價値を測定するに足りないものだとは思ふ事が出來ない。私の印象を捨てて、何によつて一つの藝術の價値を測定するのか。ゲーテの如くに褒めるといふ事は、

自分を捨ててゲーテになるといふ事である。自分自身を僞る事である。一つの藝術の價値が、それに對接する人の心を、最も廣い意味で、美しく振動させる。その運動量の多少によつてきめられべきものである以上、私自身が直接にそれに觸れて、私自身の心の振動を私自身が直接に經驗しない限り、私にその藝術の評價の出來る筈がない。然も此所で私がそれを直接に經驗してゐる以上、さうしてその經驗の內容を點檢するに際して充分愼重でもあり周到でもあつたと信じてゐる以上、私は私の印象と私の判斷とを固持するのみか、それらのものを根據としてこの藝術を評價して些しも差支ない筈である。

さうすると私は、結局自分を恃んで、ゲーテに見識がなかつたといふ事を、主張しようとする者の様に見える。それは致し方がない。事實私は密かに、ゲーテはこの方面では、充分な見識がなかつたのだと信じてもゐるのである。それも「一系職主義」が流行つた當時としては、寔に已むを得ない事だとも思つてゐるのである。唯然し私は、その故にゲーテを輕蔑しようと抔は決して思はない。反つて私は、その點では充分な見識がなかつたなどと偉らさうな事をいふ自分が、ゲーテの様に、充分見識のある所を事實によつて證明し得ない事を、非常に恥かしい事に思ふのみである。然し同時に私は、その恥かしさの故に、自分の判斷を捨ててまでゲーテのこの方面の見識を認めようとは思はない。

午後に『エングリツシエル・ガルテン』に行つて見る。なかなか氣持の可い庭園である。かういふ庭園を流行させた英國人にはやつぱり偉い所があると思ふ。ルネサンス式の庭園の可い對照である

もつとも英國人はルネサンスの庭園の對症療法として是を創造したものではあるまい。元來英國人はルネサンス風の庭園を好く様な感覺は、國民性として持つてゐないのだらう。その上英國の貴族の中には、何十哩とある様な大きな邸宅

を田舍に持つてゐる者も澤山ゐるといふから、その邸宅の趣味がその住方方の庭園に持ち込まれ、釣をしたり狩をしたりする環境と同じ樣な環境を作り出す事が目的とされたものに違ひないとも想像される。ルネサンス風の庭園が人工そのものだとすれば、英國風の庭園は自然そのものである。自然に人工を加へて自然にもない自然の美しさを創造した庭園を持つてゐる我我日本人からいふと、この英國風の庭は可也物足りない感じもあるけれども、然しとにかく美しい自然が眼の前に展かれてゐるのだから、氣持の好い事は實に氣持が好い。殊に毎日畫や彫刻を見詰めてゐる眼には、廣廣とした芝生の綠だけでも、實に有難い。

オーシアンだのロビンソン・クルーソーなどを通して大陸の文藝には「自然」が導き入れられたと言はれる。この英國風の庭園が大陸に這入つて來たのも、或はさういふものと密接な關係がありはしないかとも思はれる。英國風の庭園が大陸で特に問題にされ出したのはいつ頃の事か知らないけれども、その方面だけでルネサンスやロコヽなどゝ英國風とが相抗爭する經路を考へて見る事も面白い事であるに違ひない。それに、なほ面白い事は、この英國風の庭園が、獨逸には割合に方々にあるに反して、佛蘭西には餘りない樣に見受けられる事（もつとも是は私が佛蘭西の中を獨逸の中ほどには知らないからかも知れない）である。然もこの事も、押し詰めて行くと、その國民性に密接に結びつきさうな氣がする。

時評

長野事件が示唆する社會相

大山郁夫

一

長野縣の騷擾事件は、單に近頃珍らしい出來事だつたといふ點からだけでなく、もつと實際的な、もしくはもつと現世的な多くの立場から、一般世人によつて、多大の關心を以て見守られてゐる。極めて習俗的な見地だけからでなくては世相を觀察したり批判したりしないやうに習慣づけられてゐる政黨政治家たちさへも、今度の事件に出會つては、さすがに何時になく緊張した昂奮振りを示してゐる。そして彼等は、該事件は單に一地方の問題に限られただけのものではなく、國家政治の上の一般的問題——しかもこの重大なる一般的問題——としての性質を持つたものだと言つてゐる。殊に彼等は、一般世人と共に、この事件のうちに、地方民心の官憲に對する態度の上に何時の間にか靜かに起つた著るしき變遷の徵候をはツきりと認めて、今更らしく驚いてゐるやうである。

この點に關する彼等の驚きは、可なり普遍的に感じられてゐるやうである。更らにまた、その驚きのために、及びそれに伴生した一種の不安のために、或る脅迫感に襲はれてゐるといふことにかけては、政府、政府黨、及び在野黨の區別がないのである。彼等は一樣に、何とも形容のしようのないやうな無氣味さを感じてゐるに違ひない。そして彼等のその無氣味さは、普選の効果が始めて試みられるであらうことが豫想される次の總

選擧を間近に控へてゐるといふ意識によつて、一層强められてゐるに違ひない。といふやうなことも、我々には想像されるのである。

次に彼等は、今度の事件が、さらでだに既に非常に不安に瀕してゐる現內閣の基礎に向つて、更らに一層致命的な痛手ともなりかねまじき打擊を與へたことを、それこそ彼等獨特の本能ともいふべき一種の敏感をもつて嗅ぎ出してゐる。そして政府及政府黨は、無論のこととして、その打擊の影響を出來得る限り微少なものにしようがために、一生懸命に防禦の陣立てを整へることに腐心してゐる。が、これに反して在野黨は、これも無論のこととして、この事件を出來るだけ多く內閣倒壞の策戰に役立たせようとして、極力材料の蒐集や政府攻擊の理論づけやに、忙しく立ち廻つてゐる。曰く、地方民の意向を無視した知事の獨斷專行、及び知事にさうした獨斷專行の權能を許容した政府の方針。曰く、騷擾繼續中の警戒の粗漫。曰く、善後處置の失當、殊に新聞に對する記事掲載禁止の範圍の不當に廣汎であつたことによつて惹き起された不當な言論の抑壓、及び捜索や檢擧の過度に峻嚴であつたことから生じた關係諸地方の人心の不安動搖、並にその間に屢々繰り返された人權蹂躙事件、等、等。——かうした諸項目はみな、彼等の政府彈劾のための有力なる武器を彼等の手に渡してゐるものである。

しかし私には今、さうした黨人氣質の發露としか見えないことに、一々かかはり合つてゐる興味がない。

二

しかし、地方民の對官憲態度の變遷。——これは一體どういふ風に見て、どういふ風に解釋すべきものであらうか？

それには、先づ第一に、右の騷擾事件の勃發の動機から檢討してかからなければならない。またそれから次には、その騷擾事件が取つた形式をも究明しなければならない。だが、それをするには、私が新聞紙の記事だけから得た報道は餘りに貧弱でもあればまた餘りに不正確であるかも知れない。その上私は、その時々に卒讀した新聞記事の內容を、今では可なり多く忘れてしまつたのもある。けれども私は、私の記憶のうちにやつと殘つてゐる諸事實を——それらが最も顯著なものであつたから私の記憶のうちに、髣髴としてにもせよ殘つて居るのだ、といふやうな聊か手前勝手に見えるかも知れない假定の下に——まとめ上げ綴り合はせて、それを基礎にして事件勃發の動機を探り、且つまた事件の形式をも見究め、それからその上に私の批判を漸定的に作り上げて、そしてもしそれのどこかに誤謬

だの遺漏だのが發見されたら、あとで訂正することにする。

私は先づ事件の動機から始める。

長野縣の騷擾事件は、中野、屋代、岩村田の三警察署および鹽尻外十三個所の分署の廢合問題を中心として、關係諸地方民が、彼等の間の輿論と、縣會の意志とを無視してそれを斷行した知事の專斷的處置に對する憤激を動機として勃發したものだといはれてゐる。だとすると、この動機の內容は、少くとも二つの部分に區切られたことが出來る。その一つは關係諸地方民の警察署及び分署の廢合の處置に對する不滿である。他の一つは、知事が如何に自己の權限內のこととはいへ、政治的常識上、かうした問題の處置に際して當然相當に尊重されなければならない關係諸地方民の意向を全然無視して甚しき專制的處置に出たと思惟されたその獨裁ぶりに對する彼等の憤激感情である。それに、新聞紙の記事から得た私の印象を追へば　その知事の獨裁ぶりを牽制することが出來なかつたと思惟された縣會の無視（？）もしくは受動性（？）に對する彼等の輕侮感(？)も多分にその間に混入されてゐたやうである。

無論、事件の動機の內容を構成するこれらの二つの部分は、實際上相密着し合つてゐてさう手奇麗に切り離され得るものではないそれだのに、それをさういふ風に區分したのは、ただ議論の便宜上からしたことにすぎないのである。だから我々は、それらの各々を別々に檢對した上で、再びそれらを元のやうに合せて更らにそれを一括的に考察し直ほす必要を持つのである。が、それは兎に角、右の二つの部分のうち、第二のものが少くとも表面上は殊に鮮明に地方民心の對官憲態度の變遷を反映してゐるやうに見られる。中央政府の威信をその任地に代表してゐる地方長官の權限內の處置に對して縱しそれが如何に官府の權勢を笠に被ての獨斷專行と思惟されたにもせよ、地方民衆が彼等の憤激感をああした手段方法で表白しようなどとは、官尊民卑の風が盛に行はれてゐた少し前までの時代には、夢想だもされ得なかつたことである。

かう考へると、誰だつて、その間に於ける時勢の推移について、多少感慨を新にしないものはないであらう。若し當年の官僚政治家たちにそれが見せられるものなら、彼等はそれについて果して何といふだらうか？

だが、政黨政治家たちにしたところで、彼等はさうした當然の時期の變遷をも當然のこととして平氣で見て居ることが出來なくなつて來てゐるのである。彼等は表面上は、往年の自由民權論の唱道から出發し、藩閥打破憲政済美の標語掲揚時代を

經て、最後に憲政擁護運動を潜り抜けて、遂に彼等の今日の政治的地位に辿り着いたといふ歴史的事實から見れば、彼等は相當デモクラティックであつてもいい筈だが、しかし實は彼等は當初から決して官僚的氣風から全然自由であつた譯ではないのである。それに最近に於ける帝國主義支配下に特有の反動的傾向は、彼等の本來の官僚的素質を一層濃厚なものにして見せてゐる。で、『官吏の威信』などといふやうなものは、彼等に取つても、最早輕微な問題ではなくなつて來てゐるのである。またそれと相表裏して、地方民衆の氣風が段々と扱ひにくいものになつて行くといふことは、彼等に取つても一の重大問題である。それに彼等から見れば、地方民衆は今後ますます帝國主義政策の下積みにされなければならない必要があるものである。（官製青年團、在郷軍人會、青年訓練、運動競技の奬勵、等は何のために存するかを考へてみるがいい。）から考へて見ると、たとへばあの搔擾事件後の善後處置に關聯する知事更迭問題に對する政府のディレンマなどの如きものも、その解釋が容易につくのである。即ち政黨の地方的地盤、地方黨員からの精神的壓迫、等等の問題が、『官吏の威信問題』と相牽制し合つてゐ、そこに如何なる均衡を見せて居たかは、さうした政府の善後處置の態度の上に可なり明瞭に現はれてゐた。

しかし、あの事件の動機が何であつたにもせよ。事件そのものは、或る點に於てファシズムの形式を取つて居たといふ一點から見れば、それに參加した地方民衆の或る部分――若しくは、どうかするとその大部分――は、今後の導きやう次第によつては、反動的勢力の方へ引き込まれ得る可能性を充分に藏してゐるものではなからうか？　さうだ。さういふことも考へられる。だからこそ、あの事件の性質の解釋が、一層困難なものになつて來るのである。だが、さうした問題は、ある事件が取つた形式にも交渉じてゐるものだから、それ以上それを論究することは、しばらくあとまはしにする。

けれども、あの事件の動機の内容の他の一部をなす警察署だの分署だのの廢止に對する關係諸地方民の不滿は、一體どういふところから來てゐたものであらうか？

警察署といへば、秩序、風俗、衛生、私有財産の保護、等等に關する官的施設のことが、普通人にはまづ第一着に聯想される。それからまた、警察署または類似の諸官衙が、それの所在地の小さき繁榮――どうかすると、それの所在地の小さき體面――といつたものに寄與するといふやうなことも、矢張り尋常一様の市井の人々の念頭には上りがちのものである

ところで、かういふ諸問題に對して、幾らかでも眞劍に利害感

を燃え立たせるといつたやうなことは、小市民階級意識——特に地方的利害感の限局性によつて一層限界を狭ばめられた小市民階級意識——の側からは、極めて容易に起りがちのものである。——小市民階級意識。——それに結びついた地方的利害感の限局性。——さういふところに、警察署とか分署とかの廢合に對する關係諸地方民の不滿の最後の源泉が求められるのではあるまいか？　そして、あの事件に非常に多數の無產者の大衆が參加したから、騷擾があれまでに大きくなつたのだといふ事實は、事件の究極の原因そのものが小市民階級意識に胚胎されたものだとする右の說明を左右しないのである。

群衆心理。——それも、あの事件の說明のためには動員されなければならないものである。けれども群衆心理的行動は、何かで點火されないで燃え上がるものではない。で、あの場合、それに點火したものは、警察署や分署の廢止問題に關して極度に刺激された關係諸地方民の不滿の感情でなければならない。そして、その不滿の感情は、大體右に述べたやうに說明され得るものだと、私には考へられる。

だが、群衆心理的行動が點火され易い狀態にあることは、現代社會では、至るところで見受けられる現象である。それは、現代社會の全面に漲つて居る一般的不安焦燥氣分によつて指標されてゐる。そして、その一般的不安焦燥氣分は、資本主義末期の特徵の一つとして見ることが出來るものである。今や、支配階級には支配階級の惱みがあり、被支配階級には被支配階級の惱みがある。帝國主義の道程の上に乘り出し、且つそれに伴ふ反動政策をも採用しなければならなくなつた資本階級にもそれ相應の惱みがある。それから、その資本階級に直面して對立する無產階級が、時代の惱み、社會の惱み、人類の惱みのすべての最終の負擔者であることは、これもいふまでもないことであらう。それは、惱みのうちの惱みである。更らにまた、その資本階級とその無產階級との中間にはさまつて居る小市民階級にも、その階級に附隨した惱みがある。それは、或ひは明確に、或ひは漠然と、滅び行く運命を自己の前途に見てゐるものの惱みである。それは單に長野縣の或る諸地方だけに限つて見られることではない。それは現代世界の全面の上に亘つて見られることである。

三

警察署や分署やの廢合に對する反對運動を起して、却てそれで警察官吏と大衝突を演じたやうな一大矛盾に陷つた關係諸地方民の態度は、一體進步的なのか？　反動的なのか？　それは

誰れにも解けない謎である。それは單に外部の傍觀者に解けない謎であるばかりでなく、事件の當事者たちにさへも解けない謎であらねばならぬ

このことは、あの事件が取つた形式を見た場合に、最も適切にいへる。即ちその形式からいへば、あの事件は先づ第一に、關東地方の大震火災直後の例の有名な事件を想ひ出させる。しかし、兩方の場合に於て、相手の性質が根本的に異がつてゐる。官憲の處置に對する民衆の抗議的運動と、地震後のどさくさ紛れに乘じての、社會的弱者に對する迫害運動とは、如何にその外形の上に相似點があるにしても、その根本的性質までが同一だとは、決していへないのである。但しかういふことは、如何なる意味に於ても、今回の騷擾事件に對する是非の評價をしてゐることに當るものではない。是非の評價は、私は本文では一切しないことにしてゐる。

次にあの事件の形式は、――その内容もしくは本質もさうだが、――例の××××××と或る多分の共通點を示して居る。××××××といふと、我々はまづ第一に、大正七・八年頃の我國の勞働運動が尙ほサンディカリズムの理論の影響を受けてゐた時代のことを想ひ出す。しかしその頃には、議會否認主義が別にその目的のための特別の積極的運動となつて現はれてゐた譯ではないから、私は玆ではそれを問題外に置くことにする。それから我々はまた、我國の議會で始終行はれて來たものであるところの、例の少數黨の議員連による議場内に於ける度々の騷擾をも思ひ出す。さうした騷擾も、一種の議會否認的行動である。そして、さうした騷擾の當事者が常に議會内に議席を持つ議員連だといふことは、少しも事柄の性質を變へないのである。それは、彼等が或る特殊問題に關して普通の議事手續に依つては、到底慘敗の運命に陷る外はないことを見て取るとき、それの代りに議場内で暴動を演じることに依つて、幾分なりと反對黨の氣勢を挫くことを試みるのである。今回の騷擾事件は、さうした種類の議會の議場内での暴動とは、その前後の事情を異にし、またそれが行はれた場面や相手を異にしてゐたにも拘らず、矢張り或る點に於て或る相似點を示してゐたことは、誰にもが氣附いたことであつたらう。

で、諸新聞紙のうちには、問題の關係諸地方民の心情に多少の同情を寄せながら（それを知事の獨裁的處置に對比して）彼等が非立憲的行動に出てたことを批難してゐたものがあつた少くとも、關係諸地方民が彼等の主張の貫徹のために立憲的手段を取らなかつたことを惜んで居たものが、相當に多くあつたやうである。だが、それらの諸新聞紙の所謂『立憲的手段』と

は、何ういふことを指して居たものであるか？　それは、陳情とか請願とかといつたやうな形式の運動を指して居たものではなかつたらうか？　若しさうだとすると、あの場合に於てさうした運動が實際行はれなかつたか否かの事實の調査以外に、あゝした場合にさうした運動が果して所期の効果を擧げ得る可能性を持つものか否かの問題もまた、當然先決問題として、論議されなければならなかつたのではなからうか？　私は今玆でさうした問題を討究しようとは思はない。從つて私は益々、あの騷擾事件の當事者たちの行動に對する是非の評價に關して口を噤ぐまなければならぬ。

議會否認運動から糸を手繰つて來て、私は次に、この頃諸方面で問題にされてゐる所謂議會主義の頽勢の世界的傾向なるものを聯想する。この傾向が問題にされるときには、ボルシエヴイズムとファシズムと、若しくは共産主義ロシアの政府と、ムソリーニの獨裁的支配とが、それの反對傾向を代表する二つの主要型として引合ひに出されるとが、殆んど常例のやうになつてゐる。それらの二つのものは、その外形に於て幾分の相似點を示してゐるとはいへようが、しかしその本質内容に於ては、根本的の相異點を見せてゐる。このことは、一トロに反議會主義的傾向と言つても、そのうちには、前進的もしくは革新的のそれもあれば、後退的もしくは反動的のそれもあるといふことを示してゐるものと見ることが出來るのである。

長野縣の騷擾事件の如き、まづ第一段には小規模の地方的性質のものであるに違ひないところのものと、ボルシエヴイズムやファシズムの如き大掛りのものに對比するのは、一見極めて不自然のやうではあるが、しかしまた或る見方によつては、必ずしもさうとはいへない點もある。けれども、それは、それらの何れに似て居るかといへば、外形内容とも、大體に於てそれらの何れにも似て居ないが、しかしそれの個々の細部を一つ一つと拾つて居ると、ところどころにそれらの一方にも他方にも似て居る點が全然ないではないやうである。で、結局我々は今一度、長野縣の騷擾事件は一體進歩的なのか？　反動的なのか？　の問ひを繰り返へさなければならないのである。

文學博士 高野辰之著（最新刊）

日本演劇の研究

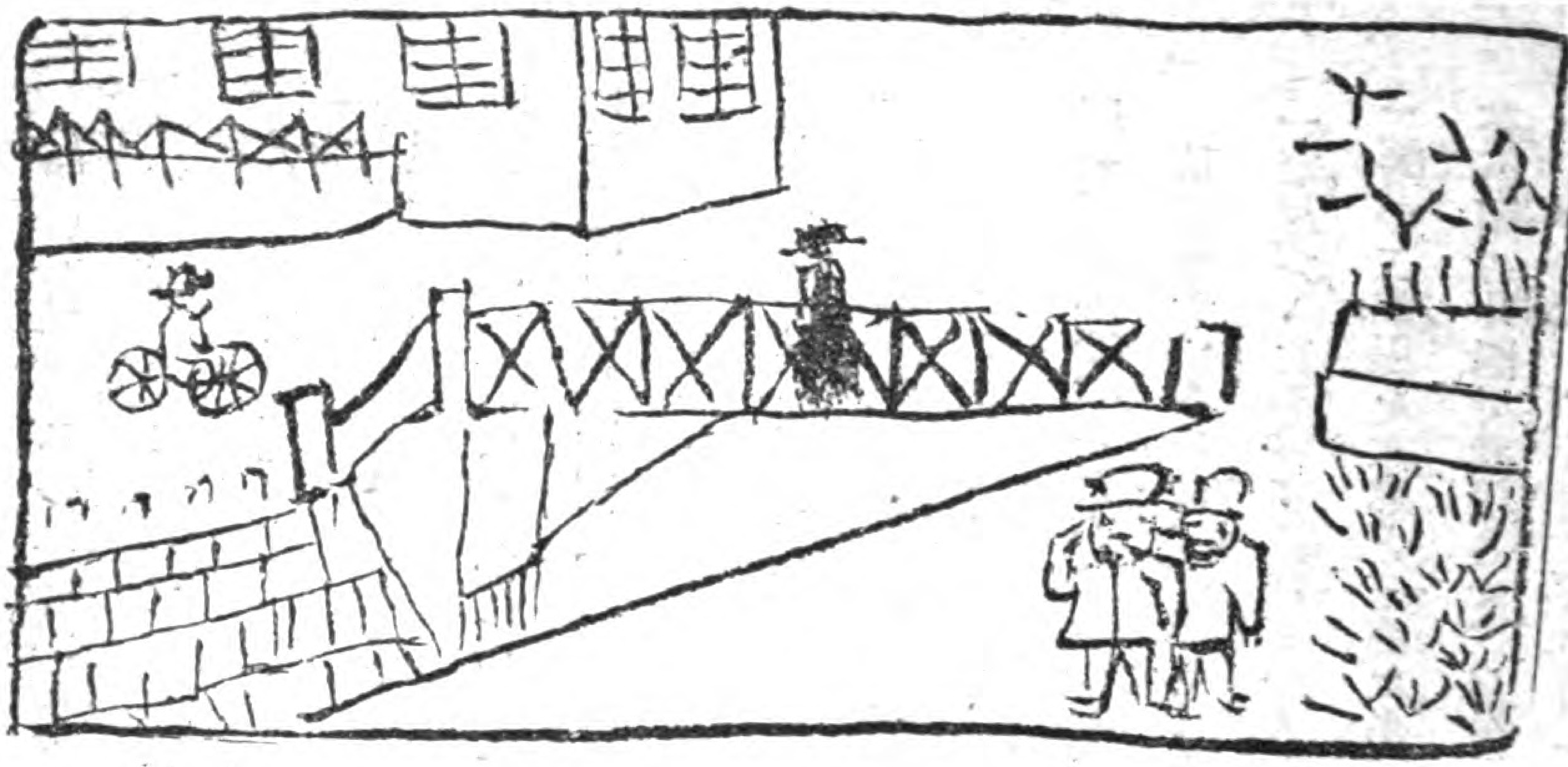
菊判上製天金 美裝コロタイプ及寫眞版七十餘種挿入 定價四圓 送料三十錢

―藝術研究唯一の參考書―

演劇と歌謠の蘊蓄に於て當代第一の稱ある博士が、日本の演劇に關する多年の研究を集大成されたもので、第一部演劇舞踊篇には、古代東洋劇、日本劇、木偶劇、近松劇、鄕土舞踊他數篇を、第二部歌謠篇には、弱者の歌謠、民謠の背景、歳日物、邦樂他數篇を收めて、これ〳〵博士ならではよく爲し得ざる業績を示されて居る、演劇研究の旺んなる折柄、日本演劇に關する斯くの如き權威ある著を得たことは獨演劇研究者の喜びばかりでなく全日本人は藝術教育の爲め必讀すべき名著である

目次

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社



嵐

島崎藤村

子供等は古い時計のかゝつた茶の間に集まつて、そこにある柱の側へ各自の背丈を比べに行つた。次郎の背の高くなつたのにも驚く。家中で、一番高い。あの兒の頭はもう一寸四分ぐらゐで鴨居にまで屆きそうに見える。毎年の暮に、鄕里の方から年取りに上京して、その時だけ私達と一緒になる太郎よりも、次郎の方が背はずつと高くなつた。

茶の間の柱の側は狹い廊下づたひに、玄關や臺所への通ひ口になつてゐて、そこへ身長を計りに行くものは一人づゝその柱を背にして立たせられた。そんなに背延びしては狡いと言ひ出すものがあり、もつと頭を平にしてなどゝ言ふものがあつて、家中のものがみんなで大騷ぎしながら、誰が何分延びたといふしるしを鉛筆で柱の上に記しつけて置いた。誰の戯れから始まつたともなく、もう幾つとなく細い線が引かれて、その一つ〳〵には頭文字だけを羅馬字であらはして置くやうな、そんないたづらもしてある。

『誰だい、この線は。』

と聞いて見ると、末子のがあり、下女のお徳のがある。いつぞや遠く滿洲の果から家をあげて歸國した親戚の女の兒の背丈までもそこに殘つてゐる。私の娘も大きくなつた。末子の背は太郎と二寸ほどしか違はない。その末子が最早九文の足袋をはいた。

四人ある私の子供の中で、身長の發育にかけては三郎が一番おくれた。一頃の三郎は妹の末子よりも低かつた。日頃、次郎贔屓の下女は、何かにつけて『次郎ちやん、次郎ちやん』で、そんな背の低いことでも三郎をからかふと、その度に三郎は口惜しがつて、

『悲觀しちまふなあ――背はもうあきらめた。』

とよく嘆息した。その三郎がめき／＼と延びて來た時は、いつの間にか妹を追ひ越してしまつたばかりでなく、兄の太郎よりも高くなつた。三郎はうれしさのあまり、手を振つて茶の間の柱の側を歩き廻つたくらゐだ。さういふ私が同じ場所に行つて立つて見ると、殆んど太郎と同じほどの高さだ。私は春先の筍のやうな勢ひでずん／＼成長して來た次郎や、三郎や、それから末子をよく見て、時にはこれが自分の子供かと心に驚くことさへもある。

私達親子のものは、遠からず今の住居を見捨てようとしてゐる時であつた。こんなにみんな大きくなつて、めいめい一部屋づゝを要求するほど一人前に近い心持を抱くやうになつて見ると、何かにつけて今の住居は狹苦しかつた。私は二階の二部屋を次郎と三郎にあてがひ（この兄弟は二人ともある洋畫研究所の研究生であつたから、）末子は階下にある茶の間の片隅で我慢させ、自分は玄關側の四疊半に籠つて、そこを書齋とも應接間とも寢部屋ともして來た。今一部屋もあつたらと、私達は言ひ暮して來た。それに、二階は明るいやうでも西日が強く照りつけて、夏なぞは耐へがたい。

南と北とを小高い石垣に塞がれた位置にある今の住居では濕氣の多い窪地にでも住んでゐるやうで、雨でも來る日には茶の間の障子は殊に暗かつた。

『こゝの家には飽きちやつた。』

と言ひ出すのは三郎だ。

『父さん、僕と三ちやんと二人で行つて探して來るよ。好い家があつたら、父さんは見においで。』

次郎は次郎でこんな風に引受け顏に言つて、畫作の暇さへあれば一人でも借家を探しに出掛けた

今更のやうに、私は住み慣れた家の周圍を見廻した。こゝは一番近いポストへちよつと葉書を入れに行くにも二町はある。煙草屋へ二町、湯屋へ三町、行きつけの床屋へも五六町はあつて、どこへ用達に出掛けるにも坂を上つたり下つたりしなければならない。慣れて見れば、よくそれでも不便とも思はずに暮して來たやうなものだ。離れて行かうとするに惜しいほどの周圍でもなかつた。

實に些細なことから、私は今の家を住み憂く思ふやうになつたのであるが、その底には、何かしら自分でも動かずにゐられない心の要求に迫られてゐた。七年住んで見れば澤山だ。そんな氣持から、兎角心も落ちつかなかつた。

ある日も私は次郎と連立つて、麻布笄町から高樹町あたりをさん／＼探し廻つた揚句、住み心地の好さそうな借家も見當らず仕舞ひに、空しく植木坂の方へ歸つて行つた。いつでもあの坂の上に近いところへ出ると、そこに自分等の家路が見えて來る。誰かしら見知つた顏にも逢ふ。暮から道路工事の始まつてゐた電車通りも石やアスファルトにすつか

り敷きかへられて、橡の並木のすがたも何となく見直す時だ。私は次郎と二人でその新しい歩道を踏んで、鮨屋の店の前あたりからある病院のトタン塀に添ふて歩いて行つた。植木坂は勾配の急な、狹い坂だ。その坂の降り口に見える古い病院の窓、そこにある煉瓦塀、そこにある蔦の蔓、すべて身にしみるやうに思はれて來た。

下女のお徳は家の方に私達を待つてゐた。私達が坂の下の石段を降りるのを跫音で聽き知るほど、最早三年近くもお徳は私の家に奉公してゐた。主婦といふもののない私の家では、子供等の着物の世話まで下女に任せてある。このお徳は臺所の方から肥つた笑顏を見せて、半分子供等の友達のやうな、慣れ〳〵しい口をきいた。

『次郎ちやん、好い家があつて？』

『駄目。』

次郎はがつかりしたやうに答へて、玄關の壁の上へ鳥打帽をかけた。私も冬の外套を脱いで置いて、借家探しに草臥れた眼を自分の部屋の障子の外に移した。僅かばかりの庭も霜枯れて見えるほど、まだ春も淺かつた。

私が早く自分の配偶者を失ひ、六歳を頭に四人の幼いものをひかへるやうになつた時から、既にこんな生活は始まつたのである。私はいろ〳〵な人の手に子供等を托して見、いろ〳〵な場所にも置いて見たが、結局父としての自分が進んで面倒を見るより外に、母親のない子供等をどうすることも出來ないのを見出した。不自由な男の手一つでも、どうにか吾が兒の養へないことはあるまい、その決心に到つたのは私が遠い外國の旅から自分の子供の側に歸つて來た時であつた。その頃の太郎は漸く小學の課程を終りかける程で、次郎はまだ腕白盛りの少年であつた。私は愛宕下のある宿屋にゐた。二部屋あるその宿屋の離れ座敷を借り切つて、太郎と次郎の二人だけをそこから學校へ通はせた。食事の度には宿の女中がチヤブ臺などを提げながら、母屋の臺所の方から長い廊下づたひに、私達の部屋まで支度をしに來て與

れた。そこは地方から上京する馴染の客をおもに相手としてゐるやうな家で、入れ替り立ち替り滞在する客も多い中に、子供を連れながら宿屋住居する私のやうなものもめづらしいと言はれた。

外國の旅の經驗から、私も簡單な下宿生活に慣れて來た。それを私は愛宕下の宿屋に應用したのだ。自分の身のまはりのことは成るべく人手を借りずに。そればかりでなく、子供にあてがふ菓子も自分で町へ買ひに出たし、子供の着物も自分で疊んだ。

この私達には、いつの間にか、いろ／＼な隱し言葉も出來た。

『あゝ、また太郎さんが泣いちやつた。』

私はよくそれを言つた。少年の時分には有りがちなことながら、兎角兄の方は『泣き』易かつたから、夜中に一度づつは自分で眼をさまして、そこに眠つてゐる太郎を呼び起した。子供の『泣いたもの』の仕末にも人知れず心を苦めた。そんなことで顏を紅めさせるでもあるまいと思つたから。

次第に、私は子供の世界に親しむやうになつた。よく見れば、そこにも流行といふものがあつて、石蹴り、めんこ、劍玉、べい獨樂といふ風に、あるものは流行りあるものは廢れ、子供の喜ぶ玩具の類までが時につれて移り變りつゝある。私は又、二人の子供の性質の相違をも考へるやうになつた。正直で、根氣よくて、眼をパチクリさせるやうな癖のあるところまで、何となく太郎は義理ある祖父さんに似て來た。それに比べると次郎は、私の甥を思ひ出させるやうな人懷こいところと氣象の鋭さとがあつた。この弟の方の子供は、宿屋の亭主でも誰でも遣りこめるほどの理屈屋だつた。

盆が來て、みそ萩や酸漿で精靈棚を飾る頃には、私は子供等の母親の位牌を旅の鞄の中から取出した。宿屋住居する私達も門口に出て、宿の人達と一緒に麻幹を焚いた。私達は順に迎へ火の消えた跡をまたいだ。すると、次郎はみん

なの見てゐる前で、

『どれ、三ちやんや末ちやんの分(ぶん)をもまたいで――』

と言つて、二度も三度も燒け殘つた麻幹の上を飛んだ。

『あゝいふところは、どうしても次郎ちやんだ。』

と宿屋の亭主は快活に笑つた。

やゝもすれば兄を凌がうとするこの弟の子供を制へて、何を言はれても默つて順つてゐるやうな太郎の性質を延ばして行くといふことに、絶えず私は心を勞しつゞけた。その心づかひは、子供から眼を離させなかつた。町の空で子供の泣き聲や喧嘩する聲でも聞きつけると、私はすぐに座を起つた。離れ座敷の廊下に出て見た。それが自分の子供の聲でないことを知る迄は安心しなかつた。

私のところへは來客も多かつた。ある酒好きな友達が、この私を見に來た後で『久し振りで何處(どこ)かへ誘はうと思つたが、あゝして子供をひかへてゐるところを見ると、どうしてもそれが言ひ出せなかつた。』と人に語つたといふ。その話を私は他の友達の口から聞いた。でも、私も、引込んでばかりはゐられなかつた。世間に出て友達仲間に交りたいやうな夕方でも來ると、私は太郎と次郎の二人を引連れて、いつでも腰巾着づきで出掛けた。

そのうちに、私は末子をもその宿屋に迎へるやうになつた。私は額に汗する思ひで、末子を迎へた。

『二人育てるも、三人育てるも、世話する身には同じことだ。』

と私も考へ直した。長いこと親戚の方に預けてあつた娘が學齢に達するほど成身して、また親の懷に歸つて來たといふことは、私に取つての新しい歡びでもあつた。その頃の末子はまだ人に髮を結つて貰つて、お手玉や千代紙に餘念も

ないほどの小娘であつた。宿屋の庭のまゝごとに、椶葉を魚の形につなぐことなぞは、殊にその幼い心を樂ませた。兄達の學校も近かつたから、海老茶色の小娘らしい袴に學校用の靴で、末子をもその宿屋から通はせた。にはかに夕立でも來そうな空の日には、私は娘の雨傘を小脇にかゝえて、それを學校まで屆けに行くことを忘れなかつた。

私達親子のものは、足掛二年ばかりの宿屋住居の後で、そこを引揚げることにした。愛宕下から今の住居のあるところまでは、歩いてもさう遠くない。電車の線路に添うて長い榎坂を越せば、やがて植木坂の上に出られる。私達は宿屋の離れ座敷にあつた古い本箱や机や箪笥なぞを荷車に載せ、相前後して今の住居に引移つて來たのである。

今の住所へは私も多くの望みをかけて移つて來た。婆やを一人雇ひ入れることにしたのもその時だ。太郎は既に中學の制服を着る年頃であつたから、すこし遠くても電車で私の母校の方へ通はせ、次郎と末子の二人を愛宕下の學校まで毎日歩いて通はせた。その頃の私は二階の部屋に陣取つて、階下を子供等と婆やにあてがつた。

しばらくするうちに、私は二階の障子の側で自分の机の前に座りながらでも、階下に起るいろ〳〵な物音や、話聲や、客のおとづれや、子供等の笑ふ聲までを手に取るやうに知るやうになつた。それもその筈だ。餌を拾ふ雌鷄の役目と、羽翅をひろげて雛を隱す母鳥の役目とを兼ねなければならなかつたやうな私であつたから。

どうかすると、末子の啜り泣く聲が階下から傳はつて來る。それを聞きつける度に、私はしかけた仕事を捨てゝ、梯子段を驅け降りるやうに二階から降りて行つた。

私は直ぐ茶の間の光景を讀んだ。いきなり箪笥の前へ行つて、次郎と末子の間に入つた。太郎は、と見ると、そこに

爭つてゐる弟や妹をなだめようでもなく、たゞ途方に暮れてゐる。婆やまでそこいらにまご〳〵してゐる。

私は何も知らなかつた。末子が何をしたのか、どうして次郎がそんなにまで平素の機嫌をそこねてゐるのか、さつぱり分らなかつた。たゞたゞ私は、まだ兄達二人との馴染も薄く、こゝろぼそく、兎角里心を起しやすくてゐる新參者の末子がそこに泣いてゐるのを見た。

次郎は妹の方を鋭く見た。そして言つた。

『女のくせに、威張つてゐやがらあ。』

この次郎の怒氣を帶びた調子が、はげしく私の胸を打つた。

兄とは言つても、その頃の次郎は漸く十三歲ぐらいの子供だつた。日頃感じ易く、涙もろく、それだけ激し易い次郎は、私の蔭に隱れて泣いてゐる妹を見ると、さもいま〳〵しさうに、

『父さんが來たと思つて、好い氣になつて泣くない。』

『喧嘩は止せ。末ちやんを打つなら、さあ父さんを打て。』

と私は簞笥の前に立つて、やゝもすれば妹をめがけて打ちかゝらうとする次郎を遮つた。私は身をもつて末子を庇護ふやうにした。

『父さんが見てゐないと直ぐこれだ。』とまた私は次郎に言つた。『どうしてさう解らないんだらうなあ。末ちやんはお前達とは違ふぢやないか。他から父さんの家へ歸つて來た人ぢやないか。』

『末ちやんのお蔭で、僕が父さんに叱られる。』

その時、次郎は子供らしい大聲を揚げて泣き出してしまつた。

私は家の內を見廻した。丁度町では米騷動以來の不思議な沈默がしばらくあたりを支配した後であつた。市內電車從業員の罷業の噂も傳はつて來る頃だ。植木坂の上を通る電車も稀だつた。たまに通る電車は町の空に悲壯な音を立てゝ、窪い谷の下にあるやうな私の家の四疊半の窓まで物凄く響けて來てゐた。

『家の內も、外も、嵐だ。』

と私は自分に言つた。

私が二階の部屋を太郎や次郎にあてがひ、自分は階下へ降りて來て、玄關側の四疊半に座るやうになつたのも、その時からであつた。そのうちに、私は三郎をも今の住居の方に迎へるやうになつた。私は獨りで手を揉みながら、三郎をも迎へた。

『三人育てるも、四人育てるも、世話する身には同じことだ。』

と末子を迎へた時と同じやうなことを言つた。それからの私は、茶の間にゐる末子のよく見えるやうなところで、二階の梯子段を昇つたり降りたりする太郎や次郎や三郎の跫音(あしおと)もよく聞えるやうなところで、ずつと座り續けてしまつた。

こんな世話も子供だから出來た。私は足掛五年近くも奉公してゐた婆やにも、それから今のお德にも、串談半分によくさう言つて聞かせた。もしこれが年寄りの世話であつたら、いつまでも一つ事を氣に掛けるやうな年老いた人達を奈何(どう)してこんなに養へるものではないと。

私達がしきりに探した借家も容易に見當らなかつた。好ましい住居もすくないものだつた。三月の節句も近づいた頃

に、また私は次郎を連れて一軒別の借家を見に行つて來た。そこは次郎と三郎とで精しい見取圖まで取つて來た家で、二人ともひどく氣に入つたと言つてゐた。青山五丁目まで電車で、それから數町ばかり歩いて行つたところを左へ折れ曲つたやうな位置にあつた。部屋の數が九つもあつて、七十五圓なら貸す。それでも屋賃が高過ぎると思ふなら、今少しは引いてもいゝと言はれるほど長く空屋になつてゐた古い家で、造作もよく、古風な中二階など殊におもしろく出來てゐたが、部屋が多過ぎて未だに借手がないとのこと。よつぽど私も心が動いて歸つて來たが、一晩寢て考へた上に、自分の住居には過ぎたものとあきらめた。

適當な借家の見當り次第に移つて行かうとしてゐた私の家では、障子も破れたまゝ、かまはずに置いてあつた。それが氣になるほど眼について來た。せめて私は毎日眺め暮す身のまはりだけでも繕ひたいと思つて、障子の切張りなどをしてゐると、そこへ次郎が來て立つた。

『父さん、障子なんか張るのかい。』

次郎はしばらくそこに立つて、私のすることを見てゐた。

『引越して行く家の障子なんか、どうでもいゝのに。』

『だつて、七年も雨露を凌いで來た屋根の下ぢやないか。』

と私は言つて見せた。

煤けた障子の膏藥張りを續けながら、私は更に言葉をつゞけて、

『ホラ、この前に見て來た家サ。あそこはまるで主人公本位に出來た家だね。主人公さへ好ければ、他のものなぞはどうでも好いといふ家だ。唯、主人公の部屋だけが立派だ。あゝいふ家を借りて住む人もあるかなあ。そこへ行くと、二

度目に見て来た借家の方がどのくらゐ好いか知れないよ。いかに言つても、父さんの家には大き過ぎるね。』

『僕も最初見つけた時に、大き過ぎるとは思つたが――』

この次郎は私の話を聞いてゐるのかと思つたら、何かもぢ〳〵してゐた後で、私の前に手をひろげて見せた。

『父さん、月給は？』

この『月給』が私を笑はせた。毎月、私は三人の子供に『月給』を拂ふことにしてゐた。月の初と半ばとの二度に分けて、半月に一圓づゝの小使を渡すのを私の家ではさう呼んでゐた。

『今月はまだ出さなかつたかねえ。』

『父さん、けふは二日だよ。三月の二日だよ。』

それを聞いて、私は黒いメリンスを巻きつけた兵古帯の間から蝦蟇口を取出した。その中にあつた金を次郎に分け、丁度そこへ屋外からテニスの運動具をさげて歸つて來た三郎にも分けた。

『へえ、末ちやんにも月給。』

と私は言つて、茶の間の廊下の外で古い風琴を靜かに鳴らしてゐる娘のところへも分けに行つた。その時。銀貨二つを風琴の上に載せた戻りがけに、私は次郎や三郎の方を見て。半分串談の調子で、

『大麩羅の立食なんか、ごめんだぜ。』

『父さん、そんな立食なんかするものか。そこは心得てゐるから安心してお出よ。』と次郎は言つた。

樂しい桃の節句の季節は來る、月給にはありつく、やがて新しい住居での新しい生活も始められる。その一日は子供等の心を浮き立たせた。末子も大きくなつて、もう雛いぢりでもあるまいといふところから、茶の間の床には古い小さ

な雛と五人囃子なぞをしるしばかりに飾つてあつた。それも子供等の母親がまだ達者な時代からの形見として殘つたものばかりだつた。私が自分の部屋に戻つて障子の切張を濟ます頃には、茶の間の方で子供等のさかんな笑ひ聲が起つた。お德の賑かな笑ひ聲もその中に混つて聞えた。

見ると、次郎は雛壇の前あたりで、大騷ぎを始めた。築地小劇場で『子供の日』のあつた折に、たしか『そら豆の煮えるまで』に出て來る役者から見て來たらしい身振り、手眞似が始まつた。次郎はしきりに調子に乘つて、手を左右に振りながら茶の間を踊つて歩いた。

『オイ、父さんが見てるよ。』

と言つて三郎はそこへ笑ひころげた。

私達の心は既に半分今の住居を去つてゐた。

私は茶の間に集まる子供等から離れて、獨りで自分の部屋を歩いて見た。僅かばかりの庭を前にした南向きの障子からは、家中で一番靜かな光線が射して來てゐる。東は窓だ。二枚の硝子戸越しに、隣りの大屋さんの高い塀と樫の樹がこちらを見おろすやうに立つてゐる。その窓の下には、地下室にでもゐるやうな靜かさがある。

丁度三年ばかり前に、五十日あまりも私の寢床が敷きづめに敷いてあつたのも、この四疊半の窓の下だ。思ひがけない病が五十の坂を越した頃の身に起つて來た。私はどつと床についた。その時の私は再び起つことも出來まいかと人に心配された程で、茶の間に集まる子供等まで一時沈まり返つてしまつた。

どうかすると、子供等のすることは、病んでゐる私をいら〳〵させた。

『父さんを怒らせることが、父さんの身體には一番惡いんだぜ。それくらゐのことがお前達に解らないのか。』

それを私が寢ながら言つて見せると、次郎や三郎は頭をかいて、すご〳〵と障子のかげの方へ隱れて行つたこともある。

それからの私はこの部屋に臥たり起きたりして暮した。めづらしく氣分の好い日が來た後には、また疲れ易く、眩暈心地のするやうな日が續いた。毎朝の氣分がその日その日の健康を豫報する晴雨計だつた。私の健康も確實に回復する方に向つて行つたが、いかに言つてもそれが遲緩で、もどかしい思ひをさせた。何程の用心深さで私は折々の暗礁を乘り越えようと努めて來たか知れない。この病弱な私が、兎も角も住居を移さうと思ひ立つまでに漕ぎつけた。私は何か斯う眼に見えないものが群がり起つて來るやうな心持で、本棚がはりに自分の藏書のしまつてある四疊半の押入をもあけて見た。いよ〳〵この家を去らうと心をきめてからは、押入の中なぞも、まるで物置のやうになつてゐた。世界を家とする巡禮者のやうな心であちこちと提げ廻つた古い鞄――その外國の旅の形見が、まだそこに殘つてゐた。

『子供でも大きくなつたら。』

私はそればかりを願つて來たやうなものだ。あの愛宕下の宿屋の方で、太郎と次郎の二人だけを側に置いた頃は、まだそれでも自由がきいた。腰巾着附きでも何でも自分の行きたいところへ出掛けられた。末子を引取り、三郎を引取りするうちに、眼には見えなくても降り積る雪のやうな重いものが、次第に深くこの私を埋めた。

しかし私は獨りで子供を養つて見てゐるうちに、だん〳〵小さなものゝ方へ心をひかれるやうになつて行つた。年若い時分には私も子供なぞはどうでもいゝと考へた。反つて手足纏ひだぐらゐに考へたこともあつた。知る人もすくない遠い異郷の旅なぞをして見、歸國後は子供の側に暮して見、次第に子供の世界に親しむやうになつて見ると、以前に手足纏ひのやうに思つたその自分の考へ方を改めるやうになつた。世はさびしく、時は難い。明日は、明日はと待ち暮して見ても、いつまで待つてもそんな明日がやつて來そうもない。眼前に見る事柄から起つて來る多くの失望と幻滅の感じとは、いつでも私の心を子供に向けさせた。

さうは言つても、私が自分の直ぐ側にゐるものゝ友達になれた譯ではない。私は今の住居に移つてから、三年も子供の大きくなるのを待つた。その頃は太郎もまだ中學へ通ひ、婆やも家に奉公してゐた。釣だ遠足だと言つて日曜毎に次郎もぢつとしてゐなかつた時代だ。一體、次郎はおもしろい子供で、一人で家の内を賑かしてゐた。夕飯後の茶の間に家のものが集まつて、電燈の下で話し込む時が來ると、弟や妹の聞きたかる怪談なぞを始めて、夜の更けるのも知らずに皆を恐がらせたり樂ませたりするのも次郎だ。そのかはり、いたづらも烈しい。私がよく次郎を叱つたのは、この兒をたしなめようと思つたばかりでなく、一つには婆やと子供等の間を調節したいと思つたからで。太郎贔屓の婆やは、何かにつけて『太郎さん、太郎さん』で、それが次郎をいら〳〵させた。

この次郎がいつになく顏色を變へて、私のところへやつて來たことがある。

『我儘だ、我儘だつて、どこが、我儘だ。』

見ると次郎は顏色も蒼ざめ、少年らしい怒りに震へてゐる。何がそんなにこの兒を憤らせたのか、よく思ひ出せない。しかし、私も默つてはゐられなかつたから、

『お前の暴れ者は研究所でも評判だといふぢやないか。』

『誰が言つた――』

『彌生町の奥さんがいらしつた時に、なんでもそんな話だつたぜ。』

『知りもしないくせに――』

次郎が私に向つて、こんな風に強く出たことは、後にも先にもない。急に私は自分を反省する氣にもなつたし、言葉の上の爭ひになつてもつまらないと思つて、それぎり口をつぐんでしまつた。

次郎がぷいと表へ出て行つた後で、太郎は二階の梯子段を降りて來た。その時、私は太郎をつかまへて、

『お前はあんまり温順過ぎるんだ。お前が一番の兄さんぢやないか。次郎ちやんに言つて聞かせるのも、お前の役ぢやないか。』

太郎はこの側杖を喰ふと、持前のやうに口を尖らしたぎり、物も言はないで引き下つてしまつた。さういふ場合に、私のところへ來て太郎を辯護するのは、いつでも婆やだつた。

しかし、私は子供を叱つて置いては、いつでも後で悔ゐた。自分ながら、自分の聲とも思へないやうな聲の出るに呆れた。私は獨りで唇を嚙んで、仕事もろく／＼手につかない。片親の悲しさには、私は子供を叱る父であるばかりでなく、そこへ提げに出る母をも兼ねなければならなかつた。丁度三時の菓子でも出す時が來ると、一人で二役を兼ねる俳優のやうに、私は母の方に早替りして、茶の間の火鉢の側へ盆を並べた。次郎の好きな水菓子なぞを載せて出した。

『さあ、次郎ちやんもおあがり。』

すると、次郎はしぶ／＼それを食つて、やがて機嫌を直すのであつた。

私の四人の子供の中で、三郎は太郎と三つちがひ、次郎とは一つちがひの兄弟にあたる。三郎は次郎の槃れ屋ともちがひ、また別の意味で、よく私の方へ突きかゝつて來た。何をこしらへて食はせ、何を買つて來てあてがつても、この兒はまた物足りないやうな顔ばかりを見せた。私の姉の家の方から歸つて來たこの兒は、容易に胸を開かうとしなかつたのである。上に二人も兄があつて絶えず頭を押へられることも、三郎を不平にしたらしい。それに、次郎贔屓のお徳が婆やに替つて私の家へ奉公に來るやうになつてからは、今度は三郎が納まらない。丁度婆やの太郎贔屓で、兎角次郎が納まらなかつたやうに。

『三ちやん、人を抓つちやいやですよ。ひどいことをするのねえ、この人は。』

『なんだ。なんにもしやしないぢやないか。ちよつと觸つたばかりぢやないか――』

お徳と三郎の間には、こんな小ぜり合ひが絶えなかつた。

『父さんはお前達を惡くするつもりでゐるんぢやないよ。お前達を好くするつもりで育てゝゐるんだよ。母さんでも生きてゝ御覽、どうして言ふことをきかないやうな子供は、よつぽどひどい目に逢ふんだぜ――あの母さんは氣が短かゝつたからね。』

それを私は子供等に言ひ聞かせた。あまり三郎が他人行儀なのを見ると、時には私は思ひ切り打ち懲さうと考へたこともあつた。ところが、幼少な時分から自分の側に置いた太郎や次郎を打ち懲すことは出來ても、十年他に預けて置いた三郎に手を下すことは、どうしても出來なかつた。ある日、私は自分の怒りを制へきれないことがあつて、今の住居の玄關のところで、思はずそこへやつて來た三郎を打つた。不思儀にも、その日からの三郎は反つて私に馴染むやうになつて來た。その時も私は自分の手荒な仕打ちを後で悔ゐはしたが。

『十年他へ行つてゐたものは、父さんの家へ歸つて來るまでに、どうしたつてまた十年はかゝる。』

私はそれを家のものに言つて見せて、よく嘆息した。

私達が住慣れた家の二階は東北が廊下になつてゐる。窓が二つある。その一つからは、小高い石垣と板塀とを境に、北隣の家の茶の間の白い小障子まで見える。三郎はよくその窓へ行つた。遠い郷里の方の木曾川の音や少年時代の友達のことなぞを思ひ出し顔に、その窓のところでしきりに鶯の啼聲の眞似を試みた。

『うまいもんだなあ。とても鶯の名人だ。』

三郎は階下の臺所に來て、そこに働いてゐるお徳にまで自慢して聞かせた。

ある日、この三郎が私のところへ來て言つた。

『父さん　僕の鶯を聽いた？僕がホウ、ホケキョとやると、隣の家の方でもホウ、ホケキョとやる。僕は隣の家に鶯が飼つてあるのかと思つた。それほど僕もうまくなつたかなあと思つた。ところがねえ、本物の鶯が僕に調子を合せてゐると思つたのは、大間違ひサ。それが隣の家に泊つてゐる大學生サ。』

何かしら常に不滿で、常に獨りぼつちで、自分のことしか考へないやうな顔付をしてゐる三郎が、そんな鶯の眞似なぞを思ひついて、寂しい少年の日を僅かに慰めてゐるのか。さう思ふと、私はこの子供を笑へなかつた。

『母さんさへ達者でゐたら、こんな思ひを子供にさせなくとも濟んだのだ。もつと子供も自然に育つたのだ。』

と私も考へずにはゐられなかつた。

私が地下室に譬へて見た自分の部屋の障子へは、町の響が遠く近く傳はつて來た。私はそれを植木坂の上の方にも、淺い谷一つ隔てた狸穴の坂の方にも聞きつけた。私達の住む家は西側の塀を境に、ある邸つゞきの抜け道に接してゐて、

小高い石垣の上を通る人の跫音や、いろ〳〵な物賣りの聲がそこにも起つた。何處の石垣の隅で鳴くとも知れないやうな、ほそ〳〵とした地蟲の聲も耳に入る。私は庭に向いた四疊半の緣先へ鋏を持出して、よく延び易い自分の爪を切つた。

どうかすると、私は子供と一緒になつて遊ぶやうな心も失つてしまひ、自分の狹い四疊半に隱れ、庭の草木を友として、僅かに獨りを慰めようとした。子供は到底母親だけのものか、父としての自分は偶然に子供の内を通り過ぎる旅人に過ぎないのか——そんな嘆息が、時には自分を憂鬱にした。その度に氣を取り直して、また私は子供を護らうとする心に歸つて行つた。

二

安い思ひもなしに、移り行く世相を眺めながら、獨りでぢつと子供を養つて來た心地はなかつた。しかし子供はそんな私に頓着してゐなかつたやうに見える。

七年も見てゐるうちには、みんなの變つて行くにも驚く。震災の來る前の年あたりには太郎は既に私の側にゐなかつた。この兒は十八の歲に中學を辭して、私の鄉里の山地の方で農業の見習ひを始めてゐた。これは私の勸めによることだが、太郎もすつかりその氣になつて、長い支度に取掛つた。ラツケツトを鍬に代へてからの太郎は、學校時代よりもずつと元氣づいて來て、翌年あたりにはもう七貫目ほどの桑を背負ひ得るやうな若者であつた。

次郎と三郎も變つて來た。私が五十日あまりの病床から身を起して、發病以來初めての風呂を浴びに、鼠坂から森元町の湯屋まで靜かに步いた時、兄弟二人とも心配して私のからだを洗ひに隨いて來たくらゐだ。私の顏色はまだ惡かつ

た。私は小田原の海岸まで保養を思ひ立つたこともある。その時も次郎は先きに立つて、弟と一緒に、小田原の停車場まで私を送りに來た。

やがて大地震だ。私達は引續く大きな異變の渦の中にゐた。私が自分の側にゐる兄妹三人の子供の性質をしみ〴〵考へるやうになつたのも、早川賢といふやうな思ひがけない人の名を三郎の口から聞きつけるやうになつたのも、その頃からだ。

毎日のやうな三郎の『早川賢、早川賢』は家のものを悩ました。昨日は何十人の負傷者がこの坂の上をかつがれて通つたとか、今日は燒跡へ燒跡へと歩いて行く人達が舞上る土ぼこりの中に續いたとか、さういふ混雜がやゝ沈まつて行つた頃に、幾萬もの男や女の墓地のやうな燒跡から、三つの疑問の死骸が暗い井戸の中に見出されたといふ驚くべき噂が傳はつた。

『あゝ――早川賢も遂に死んでしまつたか。』

この三郎の感傷的な調子には受賣らしいところもないではなかつたが、まだ子供だ子供だとばかり思つてゐたものが最早こんなことを言ふようになつたかと考へて、むしろ私にはこの兒の早熟が氣に掛つた。

震災以來、しばらく休みの姿であつた洋畫の研究所へも、またポツ〳〵研究生の集まつて行く頃であつた。そこから三郎が目を光らせて歸つて來る度にいつでも同じ人の噂をした。

『僕等の研究所にはおもしろい人がゐるよ。『早川賢だけは、生かして置きたかつたねえ』――だとサ。』

無邪氣な三郎の顏を眺めてゐると、私はさう思つた。何程の冷い風が毎日この兒の通ふ研究所あたりまでも吹き廻してゐることかと。私は又、さう思つた。あの米騷動以來、誰しもの心を揺り動かさずには置かないやうな時代の焦燥が、

右も左もまだほんたうにはよく分らない三郎のやうな少年のところまでもやつて來たかと。私は屋外からいろ／＼なことを聞いて來る三郎を見る度に、ちやうど強い雨にでも濡れながら歸つて來る自分の子供を見る氣がした。

私達の家では、坂の下の往來への登り口にあたる石段の側の塀のところに、大きな郵便箱を出してある。毎朝の新聞はそれで配達を受けることにしてある。取出して來て見ると、一日として何か起つてゐない日はなかつた。あの早川賢が横死を遂げた際に、同じ運命を共にさせられたといふ不幸な少年一太のことなぞも、さかんに書き立てゝあつた。又かと思ふやうな號外賣がこの町の界隈へも鈴を振り立てながら走つてやつて來て、大袈裟な聲で、そこいらに不安を撒きちらして行くだけでも、私達の神經が尖らずにはゐられなかつた。私は、年もまだ若く心も柔い子供等の眼から、殺人、强盜、放火、男女の情死、官公吏の腐敗、その他胸も寒がるやうな記事で滿たされた毎日の新聞を隱したかつた。生憎と、世にも稀に見る可憐な少年の寫眞が、ある日の紙面の一隅に大きく掲げてあつた。評判の一太だ。美しい少年の生前の面影はまた、一層その死をあはれに見せてゐた。

末子やお德は茶の間に集まつて、その日の新聞をひろげてゐた。そこへ三郎が研究所から歸つて來た。

『あーー一太。』

三郎は直ぐにそれへ眼をつけた。讀みさしの新聞を妹やお德の前に投げ出すやうにして言つた。

『こんな、罪もない子供までも殺す必要がどこにあるだらうーー』

その時の三郎の調子には、子供とも思へないやうな力があつた。

しかし、これほどの熱狂もいつの間にか三郎の內を通り過ぎて行つた。伸び行くさかりの子供は、一つところに止まらうとしてゐなかつた。どん／＼昨日のことを捨てゝ行つた。

『オヤ――三ちやんの「早川賢」もどうしたらう。』

と、ふと私が氣づいた頃は、あれほど一時大騷ぎした人の名も忘れられて、それが『木下繁、木下繁』に變つてゐた。木下繁も最早故人だが、一時は研究所あたりに集まる青年美術家の憧憬の的となつた畫家で、みんなから早い病死を惜まれた人だ。

その時になつて見ると、新しいものを求めて熱狂するやうな三郎の氣質が、何となく私の胸に纏まつて浮んで來た。どうしてこの兒がこんなに大騷ぎをやるかといふに――早川賢にしても、木下繁にしても――彼等がみな新しい人であるからであつた。

『父さんは知らないんだ――僕等の時代のことは父さんには解らないんだ。』

訴へるやうなこの兒の眼は、何よりも雄辯にそれを語つた。私も萬更、斯うした子供の氣持が解らないでもない。よりすぐれたものとなるためには、自分等から子供を叛かせたい――それくらゐのことは考へない私でもない。それにしても、少年らしい不滿でさんざん子供から苦められた私は、今度はまた新しいもので責められるやうになるのかと思つた。

末子も眼に見えてちがつて來た。堅肥りのした體格から顏つきまで、この娘はだんだんみんなの母親に似て來た。上付男の子供ばかりの殺風景な私の家にあつては、この娘が茶の間の壁のところに小乾す着物の類も眼につくやうになつた。それほど私の家には女らしいものも少なかつた。

今の住居の庭は狹くて、私が猫の額に譬へるほどしかないが、それでも薔薇や山茶花は毎年のやうに花が絶えない。花の好きな末子は茶の間から庭へ降りて、僅かばかりの植木を見に行くことにも學校通ひの餘暇を慰めた。今の住居の

裏側にあたる二階の窓のところへは、巣をかけに來る蜂があつて、それが一昨年も來、去年も來、何か私の家には好い事でもある前兆のやうに隣近所の人達から騒がれたこともある。末子はその窓の見える抜け道を通つては毎日學校の方から歸つて來た。そして、好きな裁縫や編物のやうな、靜かな手藝に飽きることを知らないやうな娘であつた。そろ〳〵女の洋服が流行つて來て、女學校通ひの娘達が靴だ帽子だと新規な風俗をめづらしがる頃には、末子も紺地の上着に襟のところだけ紫の刺繍のしてある質素な服をつくつた。その短い上着のまゝ、早い桃の實の色した素足を脛のあたりまであらはしながら、茶の間を歩き廻るなぞも、今までの私の家には見られなかつた圖だ。

この娘がぱつたり洋服を着なくなつた。私も多少本場を見て來たその自分の經驗から、『洋服のことなら父さんに相談するがいゝぜ』なぞと末子に話したり、帯で形をつけることは東西の風俗ともに變りがないと言ひ聞かせたりして、初めて着せて見る娘の洋服には母親のやうな注意を拂つた。十番で用の足りないものは、銀座まで買ひにお德を娘につけてやつた。それほどにして造りあげた帽子も、服も、附屬品一切も、僅か二月ほどの役にしか立たないことを知つた時に私も驚いた。

『冗談ぢやないぜ。あの上着は十八圓もかゝつてるよ。そんなら初めから洋服なぞを造らなければいゝんだ。』

日頃父一人を頼りにしてゐる娘も、その時ばかりは私の言ふことを聞入れようとしなかつた。お德がそこへ來て、

『どうしても末子さんは着たくないんださうですよ。洋服はもう要らないから、欲しい人があつたら誰かに進げて下すつてもいゝなんて……』

斯ういふ場合に、末子の代辯をつとめるのは、いつでもこの下女だつた。それにしても、どうかして私は折角新調したものを役に立てさせたいと思つて、

『洋服を着るんなら、父さんがまた築地小劇場を奢る。』

と言つて見せた。すると、お徳がまた娘の代りに立つて來て、

『築地へは行きたいし、どうしても洋服は着たくないし……』

それが娘の心持だつた。その時、お徳はこんなことも附けたして言つた。

『よくよく末子さんも、あの洋服がいやになつたと見えますよ。もしかしたら、屑屋に賣つて呉れてもいゝなんて……』

これほどの移り易さが年若な娘の内に潛んでゐやうとは、私も思ひがけなかつた。でも、私も子に甘い證據には、何かの理由さへあれば、それで娘の我儘を許したいと思つたのである。お徳に言はせると、末子の同級生で新調の校服を着て學校通ひをするやうな娘は今は一人もないとのことだつた。

『そんなに、みんな迷つてゐるのかなあ。』

『なんでも「赤襟の姉さん」なんて、次郎ちやん達がからかつたものですから、あれから末子さんも着なくなつたやうですよ。』

『まあ、あの洋服はしまつて置くサ。また役に立つ日も來るだらう。』

到頭、私には娘の我儘を許せるほどのはつきりした理由も見當らず仕舞であつた。私は末子の『洋服』を三郎の『早川賢』や『木下繁』にまで持つて行つて、娘は娘なりの新しいものに迷ひ苦んでゐるのかと想つて見た。時には私は用達のついでに、坂の上の電車路を六本木まで歩いて見た。婦人の斷髮はやゝ下火でも、洋装はまだこれからといふ頃で、思ひ〳〵に流行の風俗を競はうとするやうな女學校通ひの娘達が右からも左からもあの電車の交叉點に群がり集つてゐた。

私達親子のものが今の住居を見捨てようとした頃には、どんな新しいものも遠い『昨日』のことのやうになつてゐた。三郎なぞは、『木下繁』ですら最早問題でないといふ顔付で、佛蘭西最近の畫界を代表する人達――殊に、ピカソなぞを口にするやうな若者になつてゐた。

『父さん、今度來たピッシエールの畫は隨分變つてるよ。あの人は、どん／＼變つて行く――確かに、頭が好いんだらうね。』

この兒の『頭が好いんだらうね』には私も吹き出してしまつた。

私の話相手――三人の子供等はそれ／＼に動き變りつゝあつた。三人の中でも兄さん顔の次郎なぞは、五分刈であつた髮を長めに延ばして、紺飛白の筒袖を袂に改めた――それもすこしきまりの惡さうに。顏だけはまだ子供のやうなあの末子までが、いつの間にか本裁の着物を着て、女らしい長い裾をはしよりながら、茶の間を歩き廻るほどに成身した。

『子供でも大きくなつたら。』

長いこと待ちに待つたその日が、漸く私のところへやつて來るやうになつた。しかしその日が來る頃には、私はもう動けないやうな人になつてしまふかと思ふほど、そんなに長く座り續けた自分を子供等の側に見出した。

『强い嵐が來たものだ。』

と私は考へた

『父さん――家はありさうで、なかなか無いよ。僕と三ちやんとで毎日のやうに歩いて見た。二人ですつかり探して見

た。この麻布から青山邊へかけて、もう僕等の歩かないところはない……』

と次郎が言ふ頃は、私達の借家探しも一ト休みの時だつた。成るべく末子の學校へ遠くないところに、そんな注文があつた上に、好さそうな貸家も容易に見當らなかつたのである。あれからまた一軒あるにはあつて、借手のつかないうちにと大急ぎで見に行つて來た家は、既に約束が出來てゐた。今の住居の南隣に三年ばかりも住んだ家族が私達よりも先に郊外の方へ引越して行つてしまつてからは　一層周圍もひつそりとして、私達の庭へ來る春も遲かつた。

めづらしく心持の好い日が私には續くやうになつた。私は庭に向いた部屋の障子をあけて、兎角氣になる自分の爪を切つてゐた。そこへ次郎が來て、

『父さんは何處へも出掛けないんだねえ。』

とさも心配するやうに、それを顔にあらはして言つた。

『どうして父さんの爪は斯う延びるんだらう。こないだ切つたばかりなのに、もうこんなに延びちやつた。』

と私は次郎に言つて見せた。貝爪といふやつで、切つても、切つても、延びて仕方がない。こんなことはずつと以前には私も氣付かなかつたことだ。

『父さんも弱くなつたなあ。』

と言はぬばかりに次郎はやゝしばらくそこにしやがんで、私のすることを見てゐた。丁度三郎も作畫に疲れたやうな顔をして、油畫の筆でも洗ひに二階の梯子段を降りて來た。

『御覧、お前達がみんなで噛るもんだから、父さんの臑はこんなに細くなつちやつた。』

私は二人の子供の前へ自分の足を投げ出して見せた。病氣以來肉も落ち痩せ、ずつと以前には信州の山の上から上州

下仁田まで日に二十里の道を歩いたこともある脇とは自分ながら思はれなかつた。

『腰掛りと來たよ。』

次郎は弟の方を見て笑つた。

『太郎さんを入れると、四人もゐて喧るんだから、たまらないや。』

と三郎も半分他人の事のやうに言つて笑つた。そこへ茶の間の唐紙のあいたところから ちよいと笑顔を見せたのは末子だ。腰掛りは、こゝにも一人ゐると言ふかのやうに。

その時まで、三郎は何かもぢ〳〵して、言ひたいことも言はずにゐるといふ風であつたが、

『父さん――ホワイトを一本と、テラ・ロオザを一本買つて呉れない？繪具が足りなくなつた。』

斯う切り出した。

『こないだ買つたばかりぢやないか。』

『だつて、足りないものは足りないんだもの。繪具がなけりや、何も描けやしない。』

と三郎は、不平顔である。すると、次郎は早速弟の言葉をつかまへて、

『あ――また喧るよ。』

この次郎の串談が、みんなを吹き出させた。

私は子供等に出して見せた足をしまつて、何氣なく自分の掌を眺めた。いつでも自分の掌を見てゐると、自分の顔を見るやうな氣のするのが私の癖だ。忌々しいことばかりが胸に浮んで來た。私はこの四疊半の天井から澤山な蛆の落ちたことを思ひ出した。それが私の机の側へも落ち、疊の上へも落ち、掃いても掃いても落ちて來る音のしたことを思ひ

出した。何が腐り爛れたかと薄氣味惡くなつて、二階の部屋から床板を引きへがして見ると、鼠の死骸が二つまでそこから出て來て、その一つは小さな動物の骸骨でも見るやうに白く曝れてゐたことを思ひ出した。私は恐ろしくなつた。何か斯う自分のことを形にあらはして見せつけるやうなものが。しかもそれまで知らずにゐた自分の直ぐ頭の上にあつたことを思ひ出した。

その時になつて見ると、過ぐる七年を私は嵐の中に座りつゞけて來たやうな氣もする。私のからだにあるもので、何一つその痕跡をとゞめないものはない。髮はめつきり白くなり、座り胼胝は豆のやうに堅く、腰は腐つてしまひそうに重かつた。朝寢の枕もとに煙草盆を引きよせて、寢そべりながら一服やるやうな癖もついた。私の姉がそれをやつた時分に、私はまだ若くて、年取つた人達の世界といふものを覗いて見たやうに思つたことを覺えてゐるが、ちやうど今の私がそれと同じ姿勢で。

私はもう一度、自分の手を裏返しにして、鏡でも見るやうにつく／＼と見た。

『自分の掌はまだ紅い。』

と獨り思ひ直した。

午後の好い時を見て、私達は茶の間の外にある緣側に集まつた。そこには私の意匠した緣臺が、緣側と同じ高さに、三尺ばかりも庭の方へ造り足してあつて、蘭、山査子などの植木鉢を片隅の方に置けるだけのゆとりはある。石垣に近い緣側の突當りは、壁によせて末子の小さい風琴も置いてあるところで、その上には時々の用事なぞを書きつける黑板も掛けてある。そこは私達が古い籐椅子を置き、簡單な腰掛椅子を置いて、互ひに話を持ち寄つたり、庭を眺めたりして來た場處だ。毎年夏の夕方には、私達が茶の間のチヤブ臺を持ち出して、よく簡單な食事に集まつたのもそこだ。

庭にある遲咲きの乙女椿の蕾も漸くふくらんで來た。それが眼につくやうになつて來た。三郎は緣側のはなに立つて、庭の植木を眺めながら、

『次郎ちやん、こゝの植木はどうなるんだい。』

この弟の言葉を聞くと、それまで妹と一緒に黑板の前に立つて何かいたずら書きをしてゐた次郎が、白墨をそこに置いて三郎のゐる方へ行つた。

『そりや、引拔いて持つて行つたつて、構ふもんか――もとからこゝの庭にあつた植木でさへなければ。』

『八つ手も大きく成りやあがつたなあ。』

『あれだつて、父さんが植えたんだよ。』

『知つてるよ。山茶花だつて、薔薇だつて、さうだらう。あの乙女椿だつて、さうだらう。』

氣の早い子供等は、八つ手や山茶花を車に積んで今にも引越して行くやうな調子に話し合つた。

『そんなにお前達は無造作に考へてゐるのか。』と私はそこにある籐椅子を引きよせて、話の仲間に入つた。『父さんぐらゐの年齢になつて御覽、家といふものはさう無暗に動かせるものでもないに。』

『どこかに好い家はないかなあ。』

と言出すのは三郎だ。すると次郎は私と三郎の間に腰掛けて、

『さう、さう、あの青山の墓地の裏手のところが、まだすこし殘つてる。この次にはあそこを歩いて見るんだナ。』

『なにしろ、日あたりが好くて、部屋の都合がよくて、庭もあつて、それで安い家と來るんだから、むづかしいや。』と三郎は混ぜ返すやうに笑ひ出した。

『もつと大きい家ならある。』と次郎も私に言つて見せた。『五間か六間といふ丁度好いところがない。これはと思ふやうな家があつても、さういふところはみんな人が住んでゐてネ。』

『父さん、五間で四十圓なんて、こんな安い家を探さうたつて無理だよ。』

『そりや、こゝの家は例外サ。』と私は言つた。『まあ、ゆつくり探すんだナ。』

『なにも追ひ立てを喰つてる譯ぢやないんだから——ここにゐたつて、ゐられないことはないんだから。』

斯う次郎も兄さんらしいところを見せた。

やがて自分等の移つて行く日が來るとしたら、どんな知らない人達がこの家に移り住むことか。そんなことがしきりに思はれた。庭にある山茶花でも、つゝじでも、何度私が植替へて手入れをしたものか知れない。暇さへあれば箒を手にして、自分の友達のやうにそれらの木を見に行つたり、落葉を掃いたりした、過ぐる七年の間のことは、そこの土にもここの石にも種々な痕跡を殘してゐた。

いつの間にか末子は黒板の前を離れて、霜溶けのしてゐる庭へ降りて行つた。

『次郎ちゃん、芍藥の芽が延びてよ。』

末子は庭にゐながら呼んだ。

『蔦の芽も出て來たわ。』

とまた石垣の近くで末子の呼ぶ聲も起つた。

遠い山地の方に出來かけてゐる新しい家が、別にこの私達に見えて來た。こんな落ちつかない氣持で今の住居に暮してゐる中にも、その噂が私達の間に出ない日はなかつた。私は郷里の方に賣物に出た一軒の農家を太郎のために買取つたからである。それを峠の上から村の中央にある私達の舊家の跡に移し、前の年あたりから大工を入れ、新しい工事を始めさせてゐた。太郎も既に四年の耕作の見習ひを終り、雇ひ入れた一人の婆やを相手にまだ工事中の新しい家の方に移つたと知らせて來た。彼もどうやら若い農夫として立つて行けさうに見えて來た。

一體、私が太郎を田舍に送つたのは、もつとあの子を強くしたいと考へたからで。土に親しむやうになつてからの太郎は、だん〳〵自分の思ふやうな人になつて行つた。それでも私は遠く離れてゐる子の上を案じ暮して、自分が病氣してゐる間にも一日もあの山地の方に働いてゐる太郎のことを忘れなかつた。郷里の方から來る便りは何程この私を勵ましたらう。私はまた次郎や三郎や末子と共に、何程それを讀むのを樂しみにしたらう。さういふ私は未だに都會の借家住居で、四疊半の書齋でも事は足りると思ひながら、自分の子のために永住の家を建てようとすることは、我ながら矛盾した行爲だと考へたこともある。けれども、これから新規に百姓生活に入つて行かうとする子には、寢る場處、物食ふ爐邊、土を耕す農具の類からして求めてあてがはねばならなかつた。

私の四疊半に置く机の抽斗の中には、太郎から來た手紙や葉書がしまつてある。その中には、もう麥を蒔いたとしたのもある。工事中の家に移つて障子を張り唐紙を入れして見たら、まるで別の家のやうに見えて來たとしたのもある。これが自分の家かと思ふと、何だか恐ろしいやうな嬉しいやうな氣がして來たとしたのもある。誰に氣兼ねもなく、新しい木の香のする爐邊に胡座をかいて、飯をやつてゐるところだとしたのもある

ふとしたことから、私は手にしたある雜誌の中に、この遠く離れてゐる子の心を見つけた。それには父を思ふ心が寄

せてあつて、いろ〳〵なことがこま〴〵と書きつけてあつた。四人の兄妹の中での長男として、自分は一番長く父の側にゐて見たから、それだけ父の愛を感ずる心も深いとしたところがあり、それから又、父の勸農によつて自分もその氣になり、今では鍬を手にして田園の自然を樂む身であるが、四年の月日も空しく過ぎて行つた、これからの自分は新しい家にゐて新しい生活を始めねばならない、時には自分は土を相手に戰ひながら父のことを思つて涙ぐむことがあるとしたところもあり、その中には又、父もこの家を見ることを樂みにして郷里の土を踏むやうな日もやがて來るだらう、寺の鐘は父の健康を祈るかのやうに、山に沈む夕日は何かの深い暗示を自分に投げ與へるやうに消えて行くとしてあつたのを覺えてゐる。

最近に、また私は太郎からの葉書を受取つてゐた。それによつて私はあの山地の方に出來かけてゐる農家の工事が風呂場を造るほどはかどつたことを知つた。何となく鑿や槌の音の聞えて來るやうな氣もした。こんなに私にも氣分の好い日が續いて行くやうであつたら、折を見て、あの新しい家を見に行きたいと思ふ心が動いた。

長いこと私は友達も訪ねない。日がな一日寂寞に閉される思ひをして部屋の黄色い壁も慰みの一つに眺め暮すやうなことは、私に取つて今日に始まつたことでもない。母親のない幼い子供等を控えるやうになつてから、三年もたつ中に、私は既に同じ思ひに行き詰つてしまつた。しかし、その頃の私はまだ四十二の男の厄年を迎へだばかりだつた。重い病も、老年の孤獨といふものも知らなかつた。このまゝ座つたきりに座つてしまふのかと思ふやうな、そんな恐ろしさはもとより知らなかつた。『みんな、さうですよ。子供が大きくなる時分には、吾が身體がきかなくなりますよ。』と

私に言つて見せたある婆さんもある。あんな言葉を思ひ出して見るのも堪えがたかつた。

『父さん、どこへ行くの。』

ちよつと私が屋外へ出るにも、さう言つて聲を掛けるのが次郎の癖だ。植木坂の下あたりには、きまりでその邊の門の脇に立話する次郎の舊い遊び友達を見出す。ある若者は青山師範へ。ある若者は海軍兵學校へ。七年の月日は私の子供を變へたばかりでなく、子供の友達をも變へた。

居住者として町を眺めるのもその春かぎりだらうか、そんな心持で私は鼠坂の方へと歩いた。毎年のやうに椿の花をつける靜かな坂道がそこにある。そこにはもう春がやつて來てゐるやうにも見える。

私の足はあまり遠くへ向はなかつた。病氣以來、殊にさうなつた。何か特別の用事でもないかぎり、私は樹木の多いこの町の界隈を歩き廻るだけに滿足した。そして、散歩の途中でも家のことが氣に掛つて來るのが私の癖のやうになつてしまつた。『父さん、僕達が留守居するよ。』と次郎なぞが言つて呉れる日を迎へても、たゞたゞ私の足は家の周圍を廻りに廻つた。あらゆる嵐から自分の子供を護らうとした七年前と同じやうに。

『旦那さん。もうお歸りですか。』

と言つて、下女のお徳がこの私を玄關のところに迎へた。お徳の白い割烹着も、見慣れるうちにさうをかしくなくなつた。

『次郎ちやんは？』

『お二階で御勉强でせう。』

それを聞いてから、私は兩手に持てるだけ持つてゐた袋包をどつかとお徳の前に置いた。

『けふはみんなの三時にと思つて、林檎を買つて來た。ついでに菓子も買つて來た。』
『旦那さんのやうに、いろ〳〵なものを買つて提げていらつしやる方もない。』
『さう言へば、鼠坂の椿が咲いてゐたよ。今にもう俺の家の庭へも春がやつて來るよ。』
そんな話をして置いて、私は自分の部屋へ行つた。
私の心は何となく靜かでなかつた。實は私は次郎の將來を考へた揚句、太郎に勸めたとは別の意味で郷里に歸ることを次郎にも勸めたいと思ひついたからで。長いこと養つて來た小鳥の巣から順に一羽づゝ放してやつてもいゝやうな、さういふ日が既に來てゐるやうにも思へた。しかし私も、それを言ひ出して見るまでは落ちつかなかつた。
丁度、三郎は研究所へ、末子は學校へ、二人とも出掛けて行つてまだ歸らなかつた時だつた。次郎は最早毎日の研究所通ひでもあるまいといふ風で、しばらく家に籠つてゐて描き上げた一枚の油繪を手にしながら、それを私に見せに二階から降りて來た。いつでも次郎が私のところへ習作を持つて來て見せるのは弟の居ない時で、三郎がまた見せに來るのは兄の居ない時だつた。
『どうも光つていけない。』
と言ひながら、その時次郎は私の四疊半の壁の側にたてかけた畫を本棚の前に置き替へて見せた。兄の描いた妹の半身像だ。
『へえ、末ちやんだね。』
と私も言つて、しばらく次郎と二人してその習作に見入つてゐた。
『あの三ちやんが見たら、何と言ふだらう。』

その考へが苦しく私の胸へ來た。二人の兄弟の子供が決して互ひの畫を見せ合はないことを私はもうちやんとよく知つてゐた。二人はこんな出發點のそも〳〵から全く別のものを持つて生れて來た畫家の卵のやうにも見えた。

次郎は畫作に苦み疲れたやうな顔付で、癖のやうに爪を噛みながら、

『どうも、糞正直にばかりやつてもいけないと思つて來た。』

『お前のはあんまり物を見つめ過ぎるんだらう。』

『どうだらう、この手はすこし堅過ぎるかね。』

『そんなことを父さんに相談したつて困るよ。父さんは、お前、素人ぢやないか。』

その日は私はわざと素氣ない返事をした。これが平素なら、私は子供と一緒になつて、何とか言つて見るところだ。それほど實は私も畫が好きだ。しかし私は自分の畠にもない素人評が實際子供の勵ましになるのかどうか、それにすら迷つた。ともあれ、次郎の言ふことには、賴らうとするあはれさがあつた。

次郎の作つた畫を前に置いて、私は自分の内に深く突き入つた。そこに吾が子を見た。何となく次郎の求めてゐるやうな素朴さは、私自身の求めてゐるものでもある。最後からでも歩いて行かうとしてゐるやうな、ゆつくりと遲い次郎の歩みは、私自身の踏まうとしてゐる道でもある。三郎はまた三郎で、畫面の上に物の奧行なぞを無視し、明快に明快にと進んで行つてゐる方で、昨日自分の描いたものを今日は舊いとするほどの變り方だが、あの子のやうに新しいものを求めて熱狂するやうな心もまた私自身の内に潜んでゐないでもない。父の矛盾は覿面に子に來た。兄弟であつて、同時に競爭者――それは二人の子供に取つて避けがたいことのやうに見えた。成るべく思ひ〳〵の道を取らせたい。その意味から言つても、私は二人の子供を引き離したかつた。

『次郎ちゃん、おもしろい話があるんだが、お前はそれを聞いて呉れるか。』

そんなことから切り出して、私はそれまで言ひ出さずにゐた田舍行の話を次郎の前に持ち出して見た。

『半農半畫家の生活もおもしろいぢやないか。』と私は言つた。『午前は自分の畫をかいて、午後から太郎さんの仕事を助けたつてもいゝぢやないか。田舍で教員しながら畫をかくなんて人もあるが、ほんとうに百姓しながらやるといふ畫家は少い。そこまで腰を据えてかゝつて御覽、一家を成せるかも知れない。まあ、二三年は旅だと思つて出掛けて行つて見てはどうだね。』

日頃田舍の好きな次郎でもなかつたら、私もこんなことを勸めはしなかつた。

『出來るだけ父さんもお前を助けるよ。』とまた私は言つた。『そのかはり、太郎さんと二人で働くんだぜ。』

『僕もよく考へて見よう。斯うして東京に愚圖々々してゐたつても仕方がない。』

と次郎は沈思するやうに答へて、やゝしばらく物も言はずに、私の側を離れずにゐた。

四月に入つて、私は郷里の方に太郎の新しい家を見に行く心支度を始めてゐた。いよ／＼次郎も私の勸めを容れ、都會を去らうとする決心がついたので、この子を郷里へ送る前に、私は一足先に出掛けて行つて來たいと思つた。留守中のことは次郎に預けて行きたいと思ふ心もあつた。日頃家にばかり引籠り勝ちの私が、こんなに氣分の好い日を迎へたことは、家のものを悅ばせた。

『ちよつと三人で、ぢやんけんして見てお呉れ。』

と私は自分の部屋から聲を掛けた。氣候はまだ春の寒さを繰返してゐた頃なので、子供等は茶の間の火鉢の周圍に集まつてゐた。

『オイ、ぢやんけんだとよ。』

何か好い事でも期待するやうに、次郎は弟や妹を催促した。火鉢の周圍には三人の笑聲が起つた。

『誰だい、負けた人は。』

『僕だ。』と答へるのは三郎だ。『ぢやんけんといふと、いつでも僕が貧乏鬮だ。』

『さあ、負けた人は郵便箱を見て來て。』と私が言つた。『もう太郎さんから何とか言つて來てもいゝ頃だ。』

『なあんだ、郵便か。』

と三郎は頭を掻き〳〵、古い時計の掛つた柱から鍵をはづして、路次の石段の上まで見に出掛けた。

郷里の方からの便りがそれほど待たれる時であつた。この旅には私は末子を連れて行かうとしてゐたばかりでなく、青山の親戚が嫂に姪に姪の子供に三人までも同行したいといふ相談を受けてゐたので、いろ〳〵打ち合せをして置く必要もあつたからで。待ち受けた太郎からの葉書を受取つて見ると、四月の十五日頃に來て呉れるのが一番都合がいゝ、それより早過ぎても遲過ぎてもいけない、まだ壁の上塗りもすつかり出來てゐないし、月の末になるとまた農家はいそがしくなるからとしてあつた。

『次郎ちやん、父さんが行つて太郎さんともよく相談して來るよ。それまでお前は東京に待つておいで。』

『太郎さんのところからも贊成だと言つて來てゐる。ほんとに僕がその氣なら、一緒にやりたいと言つて來てゐる。』

『さうサ。お前が行けば太郎さんも心強からうからナ。』

私は次郎とこんな言葉をかはした。

久し振りで郷里を見に行く私は、土産物をあつめに銀座邊を歩き廻つて來るだけでも、額から汗の出る思ひをした。一暮からずつと續けてゐる藥を旅の鞄に納めることも忘れてはならなかつた。私は同伴する人達のことを思ひ、漸く回復したばかりのやうな自分の健康のことも氣遣れて、途中下諏訪の宿屋あたりで疲れを休めて行かうと考へた。やがて、四月の十三日といふ日が來た。いざ旅となれば、私も遠い外國を遍歴して來たことのある氣輕な自分に歸つた。古い鞄も、古い洋服も、まだそのまゝ役に立つた。連れて行く娘の支度も出來た。そこで出掛けた。

この旅には私はいろ／＼な望みを掛けて行つた。長い支度と親子の協力とから出來たやうな新しい農家を見ることもその一つであつた。七年の月日の間に數へるほどしか離れられてなかつた今の住居から離れ、あの惠那山の見えるやうな靜かな田舍に身を置いて、深い溜息でも吐いて來たいと思ふこともその一つであつた。私の側には、三十年振りで郷里を見に行くといふ年老いた嫂もゐた。姪が連れてゐたのはまだ乳離れもしないほどの男の兒であつたが、直ぐに末子に慣れて、汽車の中で抱かれたり、その膝に乘つたりした。それほど私の娘も子供好きだ。その兒は時々末子の側を離れて、母の懷をさぐりに行つた。

『叔父さん、ごめんなさいよ。』

と言つて、姪は幾人もの子供を生んだことのある乳房を小さなものにふくませながら話した。そんなにこの人は氣の置けない道連れだ。

『さう言へば、太郎さんの家でも屋號をつけたよ。』と私は姪に言つて見せた。『みんなで相談して田舍風に「よもぎや」とつけた。それを「蓬屋」と書いたものか、「四方木屋」と書いたものかと言ふんで、いろ／＼な說が出たよ。』

『そりや、「𣜿屋」と書くよりも、「四方木屋」と書いた方がおもしろいでせう。いかにも山家らしくて。』

こんな話も旅らしかつた。

甲府まで乘り、富士見まで乘つて行くうちに、私達は山の上に殘つてゐる激しい冬を感じて來た。下諏訪の宿へ行つて日が暮れた時は、私は連れのために眞綿を取寄せて着せ、また翌る日の旅を續けようと思ふほど寒かつた。――それを嫂にも着せ、姪にも着せ、末子にも着せて。

中央線の落合川驛まで出迎へた太郎は、村の人達と一緒に、この私達を待つてゐた。木曾路に殘つた冬も三留野あたりまでゝ、それから西は既に花のさかりであつた。水力電氣の工事で堰き留められた木曾川の水が大きな溪の間に見えるやうなところで、私はカルサン姿の太郎と一緒になることが出來た。そこまで行くと次郎達の留守居する東京の方の空も遠かつた。

『漸く來た。』

と私はそれを太郎にも末子にも言つて見せた。

年とつた嫂だけは山駕籠、その他のものは皆徒歩で、それから一里ばかりある靜かな山路を登つた。路傍に咲く山躑躅でも、菫でも、都會育ちの末子を樂ませた。登れば登るほど清く澄んだ山の空氣が私達の身に感じられて來た。舊い街道の跡が一筋眼につくところまで進んで行くと、そこはもう私の郷里の入口だ。途中で私は森さんといふ人の出迎へに來て呉れるのに逢つた。森さんは太郎より七八歳ほども年長な友達で、太郎が四年の農事見習ひから新築の家の工事まで、殆んど一切の世話をして呉れたのもこの人だ。

郷里に歸るものゝ習ひで、私は村の人達や村の子供達の物見高い眼を避けたかつた。今だに古い驛路の名殘を見せて

ゐるやうな坂の上の方からは、片側に續く家々の前に添うて、細い水の流れが走つて來てゐる。勝手を知つた私はある抜け道を取つて、丁度その村の裏側へ出た。太郎は私の直ぐ後から、すこしおくれて姪や末子も随いて來た。私は太郎の耕しに行く畠がどつちの方角に當るかを尋ねることすら樂みに思ひながら歩いた。私の行く先にあるものは幼い日の記憶を喚び起すやうなものばかりだ。暗い竹籔のかげの細道について、左手に小高い石垣の下へ出ると、新しい二階建の家のがつしりとした側面が私の目に映つた。新しい壁も光つて見えた。思はず私は太郎を顧みて、

『太郎さん、お前の家かい。』

『これが僕の家サ。』

やがて私はその石垣を曲つて、太郎自身の筆で屋號を書いた農家風の入口の押戸の前に行つて立つた。

四方木屋（よもぎや）。

太郎には私は自身に作れるだけの田と、畑と、薪材を取りに行くために要るだけの林と、それに家とをあてがつた。自作農として出發させたい考へで、餘分なものは一切あてがはない方針を執つた。

都會の借家住居に慣れた眼で、この太郎の家を見ると、新規に造つた爐邊からしてめづらしく、表から裏口へ通り抜けられる農家風の土間もめづらしかつた。奥もかなり廣くて、青山の親戚を泊めるには十分であつたが、大人から子供まで入れて五人もの客が一時にそこへ着いた時は、いかにもまだ新世帯らしい思ひをさせた。

『きのふまで左官屋さんが入つてゐた。庭なぞはまだちつとも手がつけてない。』

と太郎は私に言つて見せた。

何もかも新規だ。まだ柱時計一つ掛つてゐない爐邊には、太郎の家で雇つてゐるお霜婆さんの外に、近くに住むお菊婆さんも手傳ひに來て呉れ、森さんのお母さんまで來て吾が兒の世話でもするやうに働いてゐて呉れた。

私は太郎と二人で部屋々々を見て廻るやうな時を見つけようとした。それが容易に見當らなかつた。

『この家は氣に入つた。思つたより好い家だ。よつぽど森さんにはお禮を言つてもいゝね。』

僅かにこんな話をしたかと思ふと、また太郎はいそがしさうに私の側から離れて行つた。そこいらには、まだ乾き切らない壁へよせて、私達の荷物が取り散らしてある。末子は姪の子供を連れながら、部屋々々をあちこちとめづらしさうに歩き廻つてゐる。嫂も三十年振りでの歸省とあつて、舊馴染の人達が出たり入つたりするだけでも、かなりごたごたした。

人を避けて、私は眺望の好い二階へ上つて見た。石を載せた板屋根、ところどころに咲きみだれた花の梢、その向ふには春深く霞んだ美濃の平野が遠く見渡される。天氣の好い日には近江の伊吹山までかすかに見えるといふことを私は幼年の頃に自分の父からよく聞かされたものだが、曾てその父の舊い家から望んだ山々を今は自分の子の新しい家から望んだ。

私はその二階へ上つて來た森さんとも一緒に、しばらく縁の側に立つて、久し振りで自分を迎へて呉れるやうな惠那山にも眺め入つた。あそこに深い谷がある、あそこに遠い高原がある、とその縁から指して言ふことが出來た。

『お蔭で、好い家が出來ました。太郎さんに呉れるのは惜しいやうな氣がして來ました。これまでに世話して下さるのも、なか〳〵容易ぢやありません。私もまた、時々本でも讀みに歸ります。』

と私は森さんに話したが、禮の心は言葉にも盡せなかつた。

翌日になつても、私は太郎と二人ぎりでゆつくり話すやうな機會を見出さなかつた。嫂の墓參に。そのお供に。入れ替り立ち替り訪ねて來る村の人達の應接に。午後に、また私は人を避けて、爐邊つゞきの六疊ばかりの部屋に太郎を見つけた。

『父さん、土産はこれつきり?』

『何だい、これつきりとは。』

私は約束の柱時計を太郎のところへ提げて來られなかつた。それを太郎が催促したのだ

『次郎ちやんが來る時に、時計は持たしてよこす。』と言つた後で、漸く私は次郎のことをそこへ持出した。『どうだらう、次郎ちやんは來たいと言つてるが、お前の迷惑になるやうなことはなからうか。』

『そんなことはない。あの通り二階はあいてゐるし、次郎ちやんの部屋はあるし、僕はもうそのつもりにして待つてゐるところだ。』

『半日お前の手傳ひをさせる、半日畫をかゝせる――そんな風にしてやらして見るか。何も試みだ。』

『まあ、最初の一年ぐらゐは、僕から言へば反つて邪魔になるくらゐのものだらうけれど――そのうちには次郎ちやんも慣れるだらう。なか／＼百姓もむづかしいからね。』

さういふ太郎の手は、指の骨のふし／＼が強くあらはれてゐて、どんな荒仕事にも耐へられさうに見えた。その手は最早一ぱしの若い百姓の手だつた。この子の机の側には、本箱なぞも置いてあつて、農民と農村に關する書籍の入れてあるのも私の眼についた。

その日は私は新しい木の香のする風呂桶に身を浸して、僅かに旅の疲れを忘れた。私は山家らしい爐邊で婆さん達の話も聞いて見たかつた。で、その晩はあか〳〵とした焚火のほてりが自分の顏へ來るところへ行つて、寛いだ。

『ほんとに、俺のやうなものゝ造るものでも、太郎さんは甘い甘いと言つて食べさつせる。さう思ふと、俺はオヤゲナイやうな氣がする』

と私に言つて見せるのは、肥つて丈夫さうなお霜婆さんだ。私の郷里では、このお霜婆さんの話すやうに、女でも『俺』だ。

『どうだなし、こんな好い家が出來たら、お前さまも嬉しからす。』

と今度はお菊婆さんが言ひ出した。無口なお霜婆さんに比べると、この人はよく話した。

『今度歸つて見て私も安心しました。』と私は言つた。『私はあの太郎さんを旦那衆にするつもりはありません。要るだけの道具はあてがふ、あとは自分で働け——そのつもりです。』

『えゝ、太郎さんもその氣だで。』とお菊婆さんは爐の火の方に氣をくばりながら言つた。『この焚木でもなんでも、みんな自分で山から背負つておいでるぞなし。そりや、お前さま、こゝの家を建てるだけでも、どのくらゐよく働いたか知れすか。』

爐邊での話は盡きなかつた。

三日目には私は嫂のために舊い馴染の人々を四方木屋の二階に集めて、森さんのお母さんやお菊婆さんの手料理で、みんなと一緒に久しぶりの酒でも汲みかはしたいと思つた。三年前に兄を見送つてからの嫂は、にはかに老けて見える人であつた。おそらくこれが嫂に取つての郷里の見納めであらうとも思はれたからで。

私達は爐邊にゐて順にそこへ集まつて來る客を待つた。嫂が舊い馴染の人々で、三十年の昔を語り合はうとするやうな男の老人は最早この村にはゐなかつた。さういふ老人といふ老人は殆んど死に絶えた。招かれて來る客はお婆さんばかりで、腰を曲めながら入つて來る人の後には、すこし耳も遠くなつたといふ人の顏も見えた。隣村からわざ〳〵嫂や姪や私の娘を見にやつて來て呉れた人もあつたが、私と同年で既に幾人かの孫のあるといふ未亡人がその日の客の中での年少者であつた。

しかし、一同が二階に集まつて見ると、このお婆さん達の元氣の好い話聲がまた私をびつくりさせた。その中でも、一番の高齢者で、一番元氣よく見えるのは隣家のお婆さんであつた。この人は酒の盃を前に置いて、

『どうか、まあ太郎さんにも好いお嫁さんを見つけてあげたいもんだ。父さんの御心配で、斯うして家も出來たし。この次は、お嫁さんだ。その折には私もまた今日のやうに呼んで頂きたい――私は私だけのお祝ひを申上げに來たい。』

八十歳あまりになる人の顏にはまだみづ〳〵しい光澤があつた。私はこの隣家のお婆さんの孫にあたる子息や、森さんなぞと一緒に同じ食卓に就いてゐて、日頃はめつたにやらない酒をすこしばかりやつた。太郎はまたこの新築した二階の部屋で初めての客をするといふ顏付で、冷めた徳利を集めたり、それを熱燗に取り替へて來たりして、二階と階下の間を往つたり來たりした。

『太郎さんもそこへお座り。』と私は言つた。『森さんのお母さんが丹精して下すつた御馳走もある――下諏訪の宿屋から父さんの提げて來た若鷺もある――』

『斯ういふ田舍にゐますと、酒をやるやうになります。』と森さんが私に言つて見せた。『どうしても、周圍がさうだもんですから。』

『太郎さんもすこしは飲めるやうになりましたらうか。』と私は半分串談のやうに。
『えゝ、太郎さんは強い。』それが森さんの返事だつた。『いくら飲んでも太郎さんの酔つたところを見た事がない。』
その時、私は森さんから返つた盃を太郎の前に置いて、
『今から酒はすこし早過ぎるぜ。しかし、けふは特別だ。まあ、一杯やれ。』
吾が兒の労苦をねぎらはうとする心から、思はず私は自分で徳利を持ち添へて勧めた。若者、萬歳――口にこそそれを出さなかつたが、青春を祝する私の心はその盃に溢れた。私は自分の年とつたことも忘れて、いろ／＼と皆を歓待顔（もてなしがほ）な太郎の酒をしばらくそこに眺めてゐた。

七日の後には私は青山の親戚や末子と共にこの山を降りた。
落合川の驛から元來た道を汽車で歸ると、下諏訪へ行つて日が暮れた。私は太郎の作つてゐる桑畑や麥畑を見ることも叶はなかつたほど、いそがしい日を郷里の方で送りつゞけて來た。察しのすくない郷里の人達は思ふやうに私を休ませて與れなかつた。この歸りには、一旦下諏訪で下車して次の汽車の來るのを待ち、また夜行の旅を續けたが、嫂でも姪でも言葉すくなに乗つて行つた。末子なぞは汽車の窓のところにハンケチを載せて、たゞうと／＼と眠りつゞけて行つた。
東京の朝も見直すやうな心持で、私は娘と一緒に家に歸りついた。私も激しい疲れの出るのを覺えて、部屋の疊の上にごろ／＼しながら寝てばかりゐるやうな自分を留守居するものゝ側に見つけた。

『旦那さん、あちらはいかゞでした。』

とお徳が熱い茶なぞを持つて來て呉れると、私は太郎が山から背負つて來たといふ木で焚いた爐にもあたり、それで沸かした風呂にも入つて來た話なぞをして、そこへ横になつた。

『父さん、どうだつた。』

『思つたより太郎さんの家は好い家だつたよ。しつかりと出來てゐたよ。でも、贅澤な感じはすこしもなかつた。森さんの寄附して呉れた古い小屋なぞも裏の方に造り足してあつたよ。』

私は次郎や三郎にもこんな話を聞かせて置いて、またそこに横になつた。

二日も三日も私は寢てばかりゐた。まだ半分あの山の上に身を置くやうな氣もしてゐた。旅の印象は疲れた頭に殘つて、容易に私から離れなかつた。私の眼には明るい靜かな部屋がある。新しい障子の側には火鉢が置いてある。客が來てそこで話し込んでゐる。村の校長さんといふ人も見えてゐて、『太郎さんの百姓姿をまだ御覧になりませんか、なかなか好うござんすよ』と私に言つて見せたことを思ひ出した。『おもしろい話もあります。太郎さんがまだ篠刈にも慣れない時分のことです。篠刈と言へば、この土地でも骨の折れる仕事ですからね。あの篠刈があるために、他からこの土地へお嫁に來手がないと言はれるくらゐ骨の折れる仕事ですからね。太郎さんもみんなと一緒に、威勢よくその篠刈に出掛けて行つたは好かつたが、腰をさがして見ると、鎌を忘れた。大笑ひしましたよ。それでも村の若い者がみんなで寄つて、太郎さんに刈つてあげたさうですがね。どうして、この節の太郎さんは、もうそんなことはありません。』とその校長さんの言つたことを思ひ出した。さう言へば、あの村の二三の家の軒先に刈乾してあつた篠の葉はまだ私の眼に在る。あれを刈りに行くものは、腰に火繩を提げ、それを蚊遣りの代りとし、襲ひ來る無數の蚊と戰ひながら、高い崖

の上に生えてゐるのを下から刈取つて來るといふ。あれは熊笹といふやつか。見たばかりでも恐ろしげに、幅廣で鋭く尖つたあの笹の葉は忘れ難い。私は又、水に乏しいあの山の上で、遠い吾家の先祖の遺した古い井戸の水が太郎の家に汲み返つてゐたことを思ひ出した。新しい木の香のする風呂桶に身を浸した時の樂しさをも思ひ出した。ほんとうに自分の子の家に歸つたやうな氣のしたのも、さういふ時であつたことを思した。

しかし、斯ういふ旅疲れも自然とぬけて行つた。そして、そこから私が身を起した頃には、過ぐる七年の間續きに續いて來たやうな寂しい嵐の跡を見直さうとする心を起した。こんな心持は、あの太郎の家を見るまでは私に起らなかつたことだ。

留守宅には種々な用事が私を待つてゐた。その中でも、さしあたり次郎達と相談しなければならない事が二つあつた。一つは、見つかつたといふ借家の事だ。早速私は次郎と三郎の二人を連れて青山方面まで見に行つて來た。今少しで約束するところまで行つた。見合せた。歸つて來て、そんな家を無理して借りるよりも、まだしも今の住居の方が勝しだといふことに想ひ當つた。一旦は私の心も今の住居を捨てたものである。しかし、もう一度この屋根の下に辛抱して見ようと思ふ心は既にその時に私の内に萠して來た

今一つは、次郎の事だ。私は太郎から聞いて來た返事を次郎に傳へて、いよ〳〵郷里の方へ出發するやうに、その支度に取掛らせることにした。

『次郎ちやん、番町の先生のところへも暇乞ひに行つて來るがいゝぜ。』

『さうだよ。』

私達はこんな言葉をかはすやうになつた。『番町の先生』とは、私より年下の友達で、日頃次郎のやうな未熟なもので

もまた頼母しく思つて見てゐて呉れる美術家である。

『今ある展覧會も、出來るだけ見て行くがいゝぜ。』

『さうだよ。』

とまた次郎が答へた。

五月に入つて、次郎は半分引越しのやうな騷ぎを始めた。何かごと〳〵言はせて戸棚を片付ける音、畫架や額縁を荷造りする音、二階の部屋を歩き廻る音なぞが、毎日のやうに私の頭の上でした。私も階下の四疊半にゐてその音を聞きながら、七年の古巣からこの子を送り出すまでは心も落ちつかなかつた。仕事の上手なお徳は次郎のために、郷里の方へ行つてから着るものなぞを縫つた。裁縫の材料、材料で、次から次へと追はれてゐる末子が學校での稽古に縫つた太郎の袷羽織もそこへ出來上つた。それを柳行李につめさせてなどゝ家のものが語り合ふのも、何となく若者の旅立ちの前らしかつた。

次郎の田舍行は、よく三郎の話にも上つた。三郎は研究所から歸へつて來る度に、その話を私にして、

『次郎ちやんのことは、研究所でもみんな知つてるよ。僕の友達が聞いて「それだけの決心がついたのは、えらい」——とさ。しかし僕は田舍へ行く氣にならないなあ。』

『お前はお前。次郎ちやんは次郎ちやんでいゝ。廣い藝術の世界だもの——みんながみんな、さう同じやうな道を踏まなくてもいゝ。』

と私は答へた。

子供の變つて行くにも驚く。三郎も私に向つて、以前のやうには感情を隱さなくなつた。めまぐるしく動いてて止ま

ないやうな三郎にも、何となく落ちついたところが見えて來た。子供の變るのは大人の移り氣とは違ふ、子供は常に新しい――さう私に思はせるのもこの三郎だ。

やがて次郎は番町の先生の家へも暇乞ひに寄つたと言つて、改まつた顏付で歸つて來た。餞別のしるしに贈られたといふ二枚の書をも私の前に取出して見せた。それは見事な筆で大きく書いてあつて、あの四方木屋の壁にでも掛けて眺め樂しむにふさはしいものだつた。

『父さん、番町の先生はさう言つたよ。いろ〳〵な人の例を僕に引いて見せてね、田舍へ引籠んでしまふと誰がかけなくなるとサ。』

と次郎はやゝ不安らしく言つた後で、更に言葉を繼いで、

『それから、斯ういふものを呉れてよこした。田舍へ行つたら讀んで御覽なさいと言つて僕に呉れてよこした。何かと思つたら、「扶桑隱逸傳」サ。畫の本でも呉れゝばいゝのに、こんな仙人の本サ。』

『仙人の本はよかつた。』と私も吹き出した。

『これは父さんでも讀むに丁度好い。』

『父さんだつて、まだ仙人には早いよ。』

『しかしお餞別と思へばありがたい。けふは番町でいろ〳〵な話が出たよ。ギルドラックといふ人の持つて來たマチスの畫の話も出たよ。けふの話はみんな好かつた。それから先生の奥さんも、御飯を一緒に食べて行けと言つてしきりに勸めて下すつたが、僕は歸へつて來た。』

先輩の一言一行も忘れられないかのやうに、次郎はそれを私に語つて見せた。

いよ〳〵次郎の家を離れて行く日も近いた。次郎はその日を茶の間の縁先にある黒板の上に記しつけて見て、何となく名殘が惜まるゝといふ風であつた。やがて、荷造りまでも出來た。この都會から田舍へ歸つて行く子を送る前の一日だけが殘つた。

『どつこいしよ。』

私がそれをやるのに不思議はないが、まだ若いさかりのお德がそれをやつた。お德も私の家に長く奉公してゐるうちに、そんなことが自然と口に出るほど、いつの間にか私の癖に染まつたと見える。

このお德は茶の間と臺所の間を往つたり來たりして、次郎の『送別會』の支度を始めた。さういふお德自身も遠からず暇を取つて、代りの女中のあり次第に國許の方へ歸らうとしてゐた。

『旦那さん、お肴屋さんがまゐりました。旦那さんの分だけ何か取りませうか。次郎ちやん達はライス・カレエがいゝさうですよ。』

『ライス・カレエの送別會か。どうしてあんなものがさう好きなんだらうなあ。』

『だつて、皆さんがさうおつしやるんですもの。――三ちやんでも、末子さんでも。』

私はお德の前に立つて、肴屋の持つて來た附木にいそがしく目を通した。それには河岸から買つて來た魚の名が並べ記してある。長い月日の間、私はこんな主婦の役をも兼ねて來て、好き嫌ひの多い子供等のために毎日の惣菜を考へることも日課の一つのやうになつてゐた。

『待てよ。俺はどうでもいゝが、送別會のお附合に鮎の一尾も買つて置くか。』

と私はお德に話した。

『末ちやん、おまいか。』

と私はまた小さな娘にでも注意するやうに末子に言つて、白の前掛をかけさせ、その日の臺所を手傳はせることも忘れなかつた。

『ほんとに、太郎さんのやうな溫順しい人のお嫁さんになるものは仕合せだ。わたしもこれでもつと年でも取つてると――もつとお婆さんだと――臺所の手傳ひにでも行つてあげるんだけれど。』

それが茶の間に來てのお德の述懷だ。

茶の間には古い柱時計の外に、次郎が銀座まで行つて買つて來た新しいのも壁の上に掛けてあつた。太郎への約束の柱時計だ。今度次郎が提げて行かうとするものだ。それが古い時計と並んで一緒に動きはじめてゐた。

『凄い時計だ。』

と見に來て言ふものがある。そろ〳〵夕飯の支度が出來る頃には、私達は茶の間に集まつて新しい時計の形をいろいろに言つて見たり、それを古い方に比べたりした。私の四人の子供がまだ生れない前からあるのも、その古い方の時計だ。

やがて私達は一緒に食卓に就いた。次郎は三郎とむかひ合ひ、私は末子とむかひ合つた。『送別會』とは名ばかりのやうな粗末な食事でも、斯うして三人の兄妹の顏が揃ふのはまた何時のことかと思はせた。

『いよ〳〵明日は次郎ちやんも出掛けるかね。』と私は古い柱時計を見ながら言つた。『母さんが亡くなつてから、今年で

もう十七年にもなるよ。あの母さんが生きてゐて、お前達の話す言葉を聞いたら驚くだらうなあ。わざと亂暴な言葉を使ふ。「時計を買ひやがつた――動いてゐやがらあ」――お前達のはその調子だもの。』

『いけねえ、いけねえ。』と次郎は頭をかきながら食つた。

『父さんがそんなことを言つたつて、みんなが左樣だから仕方がない。』と三郎も笑ひながら食つた。

『さう言へば、次郎ちやんも一年に二度ぐらゐづゝは東京へ出ておいでよ。なにも田舍に引込みきりと考へなくてもいいよ。二三年は旅だと思つて御覽な。父さんなぞも旅をする度に自分の道が開けて來た。田舍へ行くと、友達はすくなからうなあ。殊に畫の方の友達が――それだけが父さんの氣掛りだ。』

斯う私が言ふと、今迄子供の友達のやうにして暮して來たお徳も長い奉公を思ひ出し顏に、

『次郎ちやんが行つてしまふと、急にさびしくなりませうねえ。人を送るのもいゝが、わたしは後がいやです。』

と給仕しながら言つた。

『あゝ、食つた。食つた。』

間もなくその聲が子供等の間に起つた。三郎は口を拭いて、そこにある箪笥を背に足を投げ出した。次郎は床柱の方へ寄つて、自分で裝置したラヂオの受話器を耳にあてがつた。細いアンテナの線を通して傳はつて來る都會の聲も、その音樂も、當分は耳にすることの出來ないかのやうに。

その晩は、お徳も名殘を惜むといふ風で、臺所を片付けてから子供等の相手になつた。お徳は賑かなことの好きな女で、戯れに子供等から腕押しでも所望されると、いやだとは言はなかつた。肥つて丈夫さうなお徳と、瘦せぎすで力のある次郎とは、おもしろい取組を見せた。さかんな笑聲が茶の間で起るのを聞くと、私も自分の部屋にぢつとしてゐ

られなかつた。

『次郎ちやんと姉やとは互角だ。』

そんなことを言つて見てゐる三郎達の側で、また二人は勝負を爭つた。健康そのものとも言ひたいお德が肥つた膝を乘り出して、腕に力を入れた時は、次郎もそれをどうすることも出來なかつた。若々しい血潮は見る〳〵次郎の顏に上つた。堅く組んだ手も顫へた。私はまたハラ〳〵しながらそれを見てゐた。

『オヽ、痛い。御覽なさいな、私の手はこんなに紅くなつちやつたこと。』

とお德は血でもにじむかと見えるほど紅く熱した腕をさすつた。

『三ちやんも姉やとやつて御覽なさいな。』

と末子が側から勸めたが、三郎は應じなかつた。

『僕は止す。左（ひだり）ならやつて見てもいゝけれど。』

さういふ三郎は左を得意としてゐた。腕押に、骨牌に、その晩は笑聲が盡きなかつた。

翌日は最早新しい柱時計が私達の家の茶の間に掛つてゐなかつた。次郎はそれを厚い紙箱に入れて、旅に提げて行かれるやうに荷造りした。

その時になつて見ると、太郎はあの山地の方で既に田植を始めてゐる。次郎はこれから出掛けようとしてゐる。お德もやがては閑をさして歸らうとしてゐる。次郎のゐない後は、にはかに家も寂しからうけれど、日頃せゝこましく窮屈にのみ暮して來た私達の前途には、いくらかの部屋のゆとりのある日も來さうになつた。私は私で、もう一度自分の書齋を二階の四疊半に移し、この次は客としての次郎を吾家に迎へようと思ふなら、それも出來ないやうに

見えて來た。どうせ今の住居はあの愛宕下の宿屋からの延長である。殘る二人の子供に不自由さへなくば、さう想つて見た。五十圓や六十圓の家賃で、さう思はしい借家のないことも分つた。次郎の出發を機會に、漸く私も今の住居に居据りと觀念するやうになつた。

私は獨りで、例の地下室のやうな四疊半の窗へ近く行つた。そこいらはもうすつかり青葉の世界だつた。私は兩方の拳を堅く握りしめ、それをうんと高く延ばし、大きな欠伸を一つした。

『大都市は墓地です。人間はそこには生活してゐないのです。』

これは日頃私の胸を往つたり來たりする　あるすぐれた藝術家の言葉だ。あの子供等のよく遊びに行つた島津山の上から　芝麻布方面に連なり續く人家の屋根を望んだ時の曾ての自分の心持をも思ひ合せ、私はさういふ自分自身の立つ位置さへもが――あの藝術家の言草ではないが、いつの間にか墓地のやうな氣のして來たことを胸に浮べて見た。過ぐる七年のさびしい嵐は、それほど私の生活を行き詰まつたものとした。

私が見直さうと思つて來たのも、その墓地だ。そして、その墓地から起き上る時が　どうやら自分のやうなものにもやつて來たかのやうに思はれた。その時になつて見ると、『父は父、子は子』でなく、『自分は自分、子供は子供等』でもなく、ほんとうに『私達』への道が見えはじめた。

夕日が二階の部屋に滿ちて來た。階下にある四疊半や茶の間はもう薄暗い。次郎の出發にはまだ間があつたが、纏めた荷物は二階から玄關のところへ運んであつた。

『さあ、これだ、これが僕の持つて行く一番のお土産だ。』

と次郎は言つて、すつかり荷ごしらへの出來た時計をあちこちと持ち廻つた。

『どれ、わたしにも持たせて見て。』

と末子は兄の側へ寄つて言つた。

遠い山地も、にはかに私達には近くなつた。この新しい柱時計が四方木屋の爐邊に掛つて音のする日を想ひ見るだけでも、樂しかつた。日頃私が矛盾のやうに自分の行爲を考へたことも、今はその矛盾が矛盾でないやうな時も來た。子のために建てたあの永住の家と、旅にも等しい自分の假の借家住居の間には、虹のやうな橋が掛つたやうに思はれて來た。

『次郎ちやん、停車場まで送りませう。末子さんもわたしと一緒にいらつしやいね。』

とお徳が言ひ出した。

『僕も送つて行くよ。』

と三郎も言つた。すると、次郎は首を振つて、

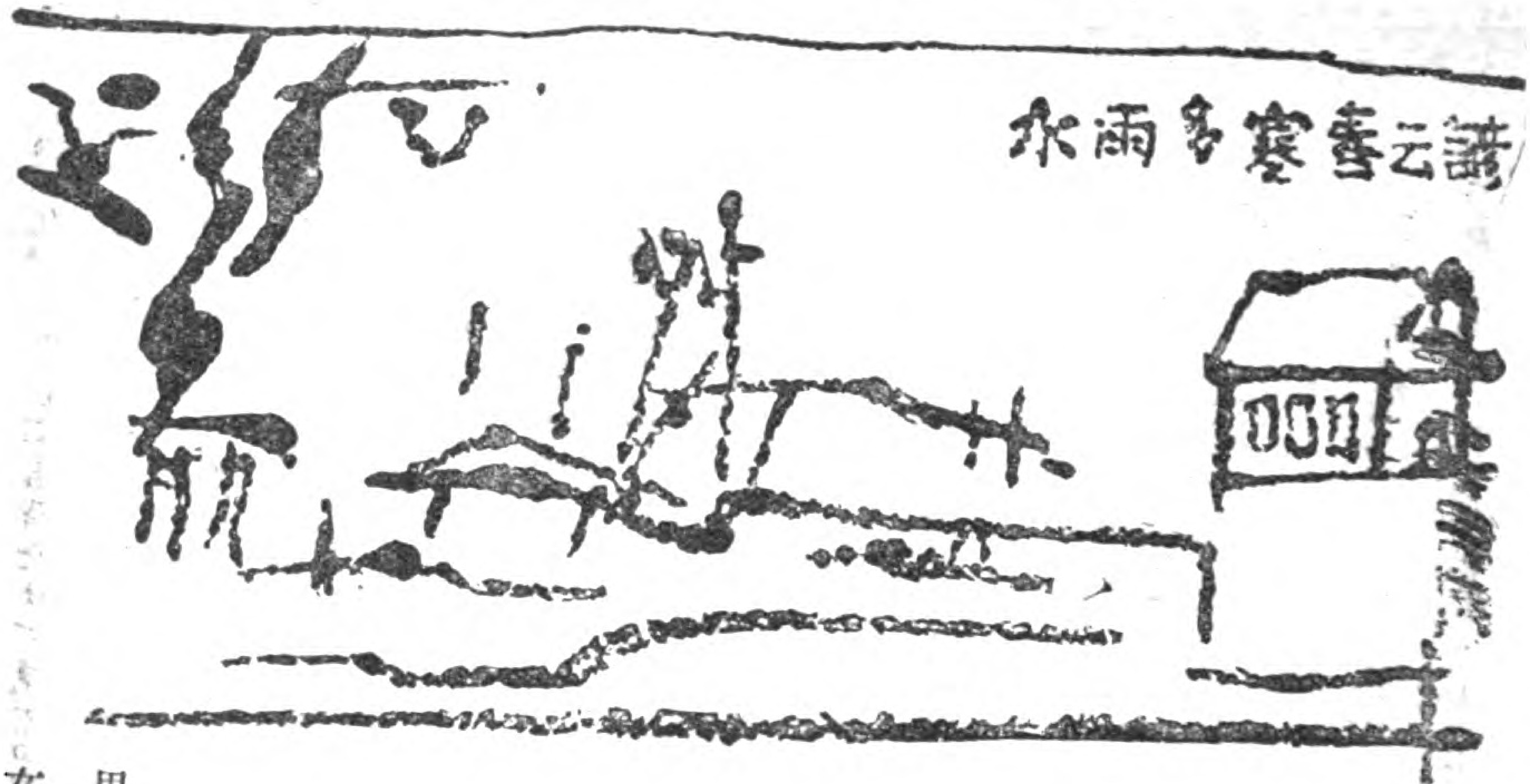
『誰も來ちやいけない。今度は誰にも送つて貰はない。』

それが次郎の望みらしかつた。私は末子やお徳を思ひとまらせたが、せめて三郎だけをやつて、飯田町の停車場まで見送らせることにした。

やがて、そこいらはすつかり暗くなつた。まだ宵の口から、家の周圍はひつそりとして來て、坂の下を通る人の跫音もすくない。都會に住むとも思へないほどの靜かさだ。氣の早い次郎は出發の時を待ちかねて、住み慣れた家の周圍を一廻りして歸つて來たくらゐだ。

『行つてまゐります。』

茶の間の古い時計が九時を打つ頃に、私達はその聲を聞いた。植木坂の上には次郎の荷物を積んだ車が先に動いて行つた。いつの間にか次郎も家の外の路次を踏む靴の音をさせて、靜かに私達から離れて行つた。（をはり）



戲曲

戀愛恐怖病

岸田國士

一

静かな海を見下ろす小高い砂丘の上。

日没前後。

男と女とが、向うむきに、脚を投げ出して座つてゐる。「なんでもない同志」の間隔が、それとなく保たれてゐなければならない。

やゝ長い間。

男。あアあ、南京豆が食ひたくなつた。

女。南京豆……？それより、あれ御覧なさい。霧がだんだんこつちへ來てよ。

男。霧は毒ぢやないでせう。これやいかん、尻がつべたい。僕は何時の間にか砂を握つてゐた。

女。燈臺に灯がつくまで、こゝにゐませうね。

男。勿論僕だつて歸らうとは云ひません。今日はなんだか重大な日だ。胸騷ぎがします。

女。あたしは、何んだか知らないけれど、喉がかわくの。（急に歌ひ出す）

　波の底に

　呼ぶ聲あり

　われあらずば

　誰か應へん

男（それを受けて、歌ふやうに呼ぶ眞似をする）

　オーイ

　オーイ

　やゝ長い間。

　女。朗らかに笑ふ。

男。女の友達つていふものは、どうしてかう、妙に相手をはぐらかすかなあ。

女。それは、男の友達つていふものが、變にどこへでもついて來たがるからよ。

男。それは僕に云ふことぢやないでせう。僕はあなたからきめられた時間以外、場所以外に、あなたに近づかうとしたことはありません。

女。それは別としてよ。

男。僕は一度だつて、あなたの觸れない問題に觸れたことがありますか。

女。それはないやうね。

男。それ御覧なさい。

女。しかし、あなたも——あなたもよ——あなたも、絶えず人が何を考へてゐるかと探らうとしてゐらつしやるわね。

男。それは、一寸意外な觀察ですね。相手が何を考へてゐるかを知らうとしないで、一時でも人間と人間とが顔を突き合はしてをれますか。

女。をれさうなものぢやない？、いろいろな見榮を捨てゝしまひさへすれば……。

男。そして、相手を不愉快にすることを恐れさへしなければね。

女。へえ、あなたにも、さういふ心遣ひがおありになるのか知ら？あなたは、一所懸命に、人を怒らさうとしてらつしやるんだと思つたら……。

男。それに、どうしても怒れないところがあると見えますね。

女。まあ、さういふことにして置きませう。（間）でもあなたは晶子さんを、とうとう怒らしておしまひになつたぢやないの。

男。あれは向うが悪いんです。僕に手を持つて泳がせてくれつて云ふから手を持つて泳がせてゐたんです。すると、い

きなり、手の握り方が氣に入らないつて云ふんです。そんなもんぢやないつて云ふんです。

女。おやおや……。

男。それで僕は、ぢや勝手になさいつて手を放したんです。すると……。

女。もう澤山……。そんな話……。

男。それで、多少水を飲んだらしいんです。これが絶交の原因です。

女。もう少し寛大になつてもいゝのね、あなたは……。

男。さういふことにですか。

女。男と女とがお友達になるつていふのには、いくらかさういふことに興味がもてなくつちやね。

男。さうか知ら。……。僕はさうは思ひませんね。友達は友達、戀人は戀人、夫婦は夫婦、かうちやんと區別をつけてほしいな。

女。つけなくつたつていゝぢやないの。それや、區別をつけたい人はつけたつていゝわ。例へば、あなたとあたしとは、友達以上のものになりたくないと思へば、ならずにすむわけだは。

男。もちろん、僕もさう心掛けてゐるのです。

女。心掛けなくつたつて大丈夫よ。あなた見たいな方は、戀人としては熱がないし、夫としては落ち着きが足らず……
……。

男。友人としてだけ尊敬ができるわけですね。あなたは流石に眼が高い。だからこそ、僕は安心して、あなたとだけは、かうして、向ひ合つてゐられるのです。戀愛なんていふものは、一方だけがしつかりしてゝもなんにもならな

い。そこへ行くと、大丈夫なのはあなたゞけではない。僕の方も大丈夫です。なぜなら、あなた見たいな女は、戀人としては氣紛れで……

女。妻としては我儘で……。ね、さうでせう。

男。(笑ひながら)それに、友達としてのあなたは、實に申し分がない。淡泊で、敏感で、思ひやりがあるところ、少くとも、僕が今迄つき合つた男、女を通じて、あなたほどの友人は一人もなかつた、このことだけは、僕も、お世辭でなく、あなたの前で云ひきることができます。

女。眞面目になるのはよしませう。

男。眞面目に聞いてゐるからいけないんです。

女。あなたは、今日は、變よ。もう少し落ちついてものをおつしやいよ。お互に毎日、かうして話をし合つてゐるんだから、お互に、どういふところに興味をもち合つてゐるか。それがわからなくつちや駄目……。

男。……?

女。いゝのよ、そんな顔をなさらなくつたつて……。あたしは、あなたの、どこが好きかつて云へば……さうぢやないの、あたしは、あなたから何を求めてるかつて云へば、あなたの、その……女を女とも思はない圖々しさなの……。あら、ほんとよ……。勿論、多少の誇張はあるけれど、それは仕方がないわね。そこにあなたの宗教があるんだから……。

男。……?

女。人によつては、それがわざとらしく思はれたり、却つて氣障に見えたりするかもわからないけど、あたしは、さう

いふ男の友達が好きよ。(間)えゝ、まあ、好きつて云つてもいゝわ。

男。話がそこまで來たなら、僕も云つてしまひませう。僕は、今迄、戀愛の過程でしかないやうな、さういふ友達づきあひほど、異性間の間柄を月並にするものはないと思つてゐました。それで、どうかして、自分も男であることを忘れ、對手も女であることを忘れて、しかも、お互に、異性からでなければ受けられないやうな………親しみ、と云つては悪いかな、まあ、一種の親しみですね、さういふものを感じ合ひ、それによつて、お互の生活を新鮮にして行きたいと思つてゐたのです。

女。あたしは、異性の友達といふものに、それほど期待をかけてはゐないの。生活を新鮮にするのは、新しい戀愛だと思つてゐるんですからね。しかし、戀愛のできない男——かりにさういふ男があるとすれば——そして、さういふ男性を友達にしてゐるとすれば、それはそれでまた面白いと云ふ程度なの。しかし、あたしは、あなたを戀愛のできない男の一人だとは思つてゐませんわ。

男。それは、まあ問題外さ。少し話がやゝこしくなつて來たなあ。

女(笑ふ)周章てないでもいゝわ。思つてることをおつしやいよ。あたしではそろそろお氣に召さなくなつたんでせう。友達としても、やつぱり落第つていふわけね。それかと云つて………。

男。そんなでもありませんよ。早く云へば、あなたは少し美し過ぎるんだ、友達としてはね。それは、つまり、僕にも弱味があるといふことになるんだが……一つ、此の邊で、あつさり手でも、握るかな。

女。さあ、どうぞ(手を出す)握れるなら、握つて御覽なさい、どんなことになるか。

男(無器用に笑ふ)僕は冒險は嫌ひだ。

女。さうでもないくせに………。あたしの見るところでは、あなたの生活が、もう一つの冒險だと思ふわ。

男。あなたの生活はどうです。

女。だからあたしは、冒險家を以て任じてるんだわ。さうね。あなたは、用心をしながら冒險をするつていふところがあるわね。

男。………。

女。獨身で婆やを置いてらつしやるのなんかもそれよ。

男。（笑ふ）なるほど、さうか。獨身は冒險なんですね。

女。あなたのお年ではね。

男。結婚はなほ冒險でせう。

女。一度で濟むわ、その代り………。

男。一度で濟まなければ………。

女。冒險でなくなるばかりよ。

男。あつさりしてら。僕は兎に角、冒險はきらひです。獨身が冒險だと云はれゝばしかたがないが、少くとも獨身を利用することは愼んでゐるのです。あなたのやうな自由な考へ方も面白いが、僕もこれで、なかなかしつかりした考へをもつてゐるつもりなんです。心を亂したり、生活を煩はしくしたりするやうな一切の誘惑は、頭から斥けよう、かう決心をしてゐるのです。あなたとかうしておつきあひをするやうになつたのだつて、僕の方から求めたわけぢやないんですからね。

女。え〻、それやあたしの方から品子さんにお願ひして紹介して頂いたんだわ。

男。その品子さんといふのがまた、友人の妹といふだけで、別に………。

女。なんでもないつておつしやるんでせう。そんなことはお斷りにならなくつてもい〻わ。それで、あたしにどうしろつておつしやるの。また絶交しようつておつしやるの。

男。それもい〻かも知れません。しかし、今のところ、それほどの理由もないやうです。僕は、こわいんですよ、實は………。

女。あたしが？

男。い〻え、あなたといふ譯ぢやないが………。

女。あたしとかうしてゐることが………？

男。い〻え、それより、僕自身の問題なんです。僕は、早晩、身動きができなくなるでせう。

女。い〻ぢやありませんか。

男。そのうち、あなたに、どんな要求をし出すかわかりませんよ。

女。い〻ぢやありませんか。

男。僕は、あなたなしには、生きて行けなくなるでせう。

女。い〻ぢやありませんか。

男（獨言のやうに）い〻ぢやありませんか………。（間）い〻ぢやありませんか………。（間）ちつともよくはありませんよ。

長い沈默

女（だしぬけに）燈台に灯がついたわ。

男。もう歸る時間でせう。

女。さうね、ぼつぼつ………。（間）ぢやこれでお別れね

男。どうでせう、さうした方がいゝでせうか。

女。さあ、あたしはどつちでも………。（間）處で、こんなことを、眞面目くさつて相談するなんて、隨分あたしたちも馬鹿ね。めいめい、自分の好きなやうにしたらいゝぢやないの。あなたは歸るなら歸りなさい。あたしは、もう少し、からしてゐるの。

男。お腹はすかないんですか。

女。人のことなんか心配しないだつていゝわ。

男。…………

女。なによ？あたしは、煮えきらない男は嫌ひ……

男。煮えきるにも煮えきらないも、別段、今、決心をしなけれやならん場合ぢやないでせう。

女（ふき出して）決心をしなけれやならん場合よ。

男。さうですか。ぢや、決心をしませう。（起ち上らうとする）さよなら。

女（わざと横を向いて聞えないふりをしてゐる）

男。さよなら、御機嫌よう。（起ち上る）

女（いきなり、男の手を捕へて、そこへ引き据える）駄目！

男　………？

女。駄目よ、行つちや………。

男。さ、放して下さい。

女（男の眼を見据え）あなたは、憶病なのね。

男（眞面目くさつて）ゆるして下さい。

女（なんでもないやうに笑ふ）ゆるしてあげるから、もう一度こゝへお坐んなさい。

男（しかたがなしにすわる。）

女（男の手を握つたまゝ、詰るやうに）どうして………？

男（面目なげに顔を伏せる）

女。どうして逃げようとなさるの、何がこわいの。誰にわるいの。（間）ねえ、それを聽かして………？

男。（こゝで女の顔を見る）なかなかあなたも芝居がうまいや（笑はうとするが、口の邊がこわばる）

女。そんなことをおつしやるなら、もつと事務的にお話しをしませう。ね、そんならいゝでせう。

男。さういふ意味ぢやないんです。僕達二人のことについては、もうこれ以上いろんな問題に觸れない方がいゝと思ふんです。さつきも云つた通り、僕達は飽くまでも友達としておつき合ひをしたいと思つてゐるんです。あなたとなら、それができると思つてゐたのです。僕は、今、どんな異性とでも、友達以上の關係を結びたくないんです。その理由をお話しすると長くなりますが、一口に云へば、戀愛ていふものに、全く興味を失つてゐるのです。いや、さういふと

語弊がありますね。つまり、さういふ關係から必然的に生じる、いろんな繁雜さに、堪えられない氣がするんです。

女。つまり面倒臭いのね。

男。億劫なんです。

女。氣味が惡いんぢやない。

男。飽きあきしてるんですね。

女。ほんとうの味がわからずにね。どうしてお笑ひになるの。あたしがこんなことを云つては可笑しいか知ら………。あなたにだけ可笑しいのかも知れないわ。

男。（とぼけて）僕だけに可笑しいことが、此の世の中に一つでもあれば、それはなんと得意ではないか。

女。（お話をして聽かせるやうに）さうよ、あなたは、どんなに得意におなりになつてもいゝわ、あなたは、一人の女から、命をかけて愛されていらつしやるのよ。

男。その愛を、僕は、命をかけて拒まうとしてゐるのです。

女。とおつしやるのは口ばかりで、その愛がどんな愛かといふことを御覽になつたら、きつとその命とやらは、また懷へしまつておしまひになるでせう。

男（おどけて）いえ、いえ。

女。いえいえ、なもんですか。さ、耳を澄まして、あたしの歌ふ唄を聽いていらつしやい。

男　その前に、僕は一寸、飯を食つて來ます。

女。いけません。歌がお嫌ひなら、お話にしませう。

あたしたちは、先づ決して誓ひといふものを立てません。

その代り、あたしたちは、誰もゐないところへ行つて、二人だけの愛の巣をつくります。

あたしたちは、夜が明けてから、日が暮れるまで、顔を合はせないやうにします。

あたしは、その間、なるだけ淋しさうな顔をしてゐます。あなたが、何時、なんどき、あたしのしてゐることを見にゐらつしやるかわからないから……。さうして、あたしが、獨りで淋しさうな顔をしてゐることは、あなたにとつて、何より幸せなことでせうから……。

男。そんなことはありません。

女。そんなことはないんですつて……それぢや、何時も、樂しさうな顔をしてゐませう。あなたの腕に抱かれてゐる時も、さうでない時も、同じやうに晴れやかな顔をしてゐませう。あなたはどんな時でもあたしをお呼びになることができるの。しかし、あたしは、あなたのお許しがなければ、おそばに行かれないことにしませう。女は、それくらゐにしないと、自分を制することができないものですから……。

男。…………

女。あたしたちは、どんな仕事をしませう。……？あなたは、やつぱり、童話をお書きになるのね。あたしは……あたしは、あなたのお好きな事をしますわ。草花を作りませうか。鶏を飼ひませうか。

男。鶏はよしませう。

女。さう、ぢや、鶏はよしませう。お台所とお針だけにしませうか。それと、お洗濯……。

男。婆やがゐるぢやありませんか。

女。あの婆や、あたし、ゐない方がいゝわ。

男。…………。

女。それとも、あたしにさういふことをさせるのがおいやなら、小さな女中を一人置きませう。十三から十五までの……無邪氣な、よく云ふことを聽く……。あたしが上手にし込みますわ。

おや、こんなことを云ふと、丸で、あなたの奥さんになるやうね。

そこで、今度は、二人が一緒にゐる時はどうするかつて云ふこと……。

長い沈默。

女。何をそんなに考へていらつしやるの。

男。僕は非常にがつかりしたんです。さういふ夢を見てゐる時のあなたは、やつぱり平凡な女だといふことがわかつたからです。なるほど、あなたのやうな若い美しい女の口から、さういふ歌を唄つて聞かされるのは、それだけとして、惡い氣持はしない。それどころか、僕は、年甲斐もなく、ほろりとさへしました。しかし、子守歌はやつぱり子守歌ですね。僕はもう、そんなことで、すやすやと寢つきはしませんよ。

女。人間は誰でも、男でも女でも、眞劍になると平凡よ。

男。…………。

女。あなただつて、今日は、いつものあなたぢやなくつてよ。さうお思ひにならない？　でも、うれしいの、あなたを

少しばかりしんみりさせたから………。

男。………。

女。云ひたいことを云つてしまつたら、胸がせいせいしたわ。（間）でも、悪く思はないで頂戴………。

男。僕は何んとも思つてやしません。（間）しかし、何處までが眞面目でどこまでが戯談なんだか………。

女。もちろん。これがお芝居だと云つて濟まされないことはありませんわ。

男。その方が、起ち上るのに都合がいゝでせう。さ、もとの二人になつて、何時もの通りに、さよならをしませう。

女（力なく、しかし、男の口調を眞似て）よからう。（間）ところが、もう眞暗だ。ホテルまで送つて來てくれ給へ。序に、晩飯を一緒に食はうぢやないか。（間）よかつたら、僕んとこへ泊つて行くさ。部屋はいくらでも明いてる。

男。ぢや、兎に角、送つて行つてあげませう。あの道は、一人ぢや物騒だ。（起ち上る）

女。なあに、こわいことはないさ。たゞ、道を迷ひさうなんだ。あの杉林の中は、晝間でも、うつかりしてると間誤つくからね。（起ち上る）あぶねえ（と云つて、よろけながら、男の肩に腕を投げかける）駄目だよ、そんなに急いぢや………。（男を引き留める）どら、どんな顔をしてる（男の顔をのぞき込む）ちつたあ、笑へよ（と云ふなり、男の頬へ唇をあてる）

男。なにするんです（と云ひながら、驚いて女を突きのけ、逃げるやうに走り去る）

女（笑ひながら）戯談よ、今のは戯談………。何處へ行くの………。もうしないつてば………。ほんとにもうおしまひよ………。

長い沈默。

女（突然聲をあげて笑ふ。そして男の後を追ふ）

— 幕 —

二

同じ砂丘の上

朝。

男が別の男と並んで、正面向きに、脚を投げ出してすわつてゐる。

別の男。しかし、昨夜、君と二人で此處にゐたのを見たものがゐるんだ。

男。それや何の證據にもならないぢやないか。

別の男。何んの證據にもならないかねえ。それぢや、その先を云つても、君は驚かないか。

男。驚かない。

別の男。彼女は、夜中まで、此處で泣いてたんだよ、一人で………。

男。…………。

別の男。泣いてたのを見たのは僕なんだ。

少し驚いたらう。しかし、その先を云はうか、もつと驚くことがあるんだ。

男。…………。

別の男。彼女は、今、僕の處にゐるんだ。昨夜から、僕の部屋にゐるんだ。

男。昨夜から？

別の男。君はこれでも驚かないか。ぢや、最後のひと言を云はう。僕達は結婚したんだ。

男。え？

別の男。勿論、僕は、君の驚く顏を見たさに、これだけのことを君に云ひに來たんぢやない。僕はたゞ、自分の立場を明かにしに來たんだ。

男。…………？

別の男。僕があの女に參つてゐたことは、君達はとつくに知つてる筈だ。恐らく、此の避暑地に來てゐる連中で、それを知らないものはあるまい。彼女が食つた西瓜の種を、殘らず拾つて集めてゐるといふ噂も、まんざら嘘ぢやないんだ。

男。…………。

別の男。ところが、あの通りの女だ。僕も昨夜までは知らずにゐたんだが、今迄、自分を愛してゐると口に出して云つた男には、その場限り絶交を宣言することにしてゐたんださうだ。

男。…………。

別の男。僕も、その一人だつたんだ。

男。…………。

別の男。僕だけぢやない。聞けば、「山猫」もさうだ、「ダヌンチオ」もさうだ、「緑の猿股」もさうだ。それから、「棚つ尻」………。

男。タナツチリ………？

別の男。識らないか。そら、女學校の教師だとかいふ、尻を突き出して歩く奴がゐるだらう………。光明寺の庵室を借りて自炊してゐる………。

男。あゝ。

別の男。「棚つ尻」………こいつは、一度寃されて、また失敗つたんだ。

男。あいつが………？

別の男。まだあるかも知れん、まあ、それやどうでもいゝ。僕は、此の一週間、その爲めに、彼女と口を利かずにゐた。なんのことはない、台所を追はれた野良犬さ、此の土地にゐちやよくないと思つた。そこで昨夜は、思ひ出の仕入れかたがた、月がいゝのを幸ひ、濱傳ひに此處まで歩いて來たんだ。(間)見ると、女が一人、ハンケチを眼にあて、啜り泣きをしてる、轟く胸を押し鎭めて、女のそばに近づいた。(間)――どうしたんです、今頃………。と云つて、そこへしやがんだまではよかつた。それが、意外にも、彼女なんだ。

男。………。

別の男。それが、彼女であつて見れば、話は却つてし易い。ね、さうぢやないか。果して、話は簡單に運んだ。

男。………。

別の男。と云ふと、君はそんな顔をするだらう。待ち給へ。それには入り組んだ事情がある。彼女の云ふところはかうだ。彼女は、人知れず、君に心を傾けてゐたらしいんだ。

男。…………。

別の男。しかし、彼女は、その氣持を、君に見破られることを恐れてゐたんだ。と云ふよりも、君に先手をうたれることを恐れてゐたんだ。なぜなら、彼女は、君の告白を冷やかに聞き流す勇氣がないことを知つてゐた――と、まあ、彼女は、さう云ふんだがね。從つて、自誡を破らなければならない。だが、それは、彼女の自尊心が許さない。

男。…………。

別の男。そこで、彼女は、一策を案出した。つまり、君の腕から逃れる爲めに、自ら君の腕に飛び込むといふ戰法がそれなんだ。

男。…………。

別の男。わからんかね。（間）早く云へば、こつちから持ちかければ、向うが逃げると見たんだ、彼女はね。（間）果せるかな、君は逃げた、と、彼女は云つたよ。（間）

男。…………。

別の男。それや、本當かい、君…………。君は、しかし、變な男だよ。僕がそれを云ふと可笑しいが、君はなんだつて、逃げたんだ。

男。…………。

別の男。君は、實際、あの女に氣はないのかい。

男。…………。

別の男。言葉が惡けれや。云ひ直さうか。君は、あの女が、どうなつたつてかまはないか。僕は、それを君に聞きに來たんだ。僕として、それを聞くのが、そんなに不自然ぢやないと思ふんだ。だから、もう一度聞くが、君は、僕の手から、あの女を取戻さうとはすまいね。

男。……………。

別の男。なに、さう云つたつてかまはんよ。あの女は、君の出方一つで、君の思ふ通りになるんだ。それが、偶然僕の懐へ飛び込んで來た、と云つて、何も不思議はない。僕の懐は、彼女の病院なんだ。(間) 彼女は一種の病人だよ

男。…………。

別の男。彼女は、昨夜から僕のものにはなつたが、絶對に「ラヴ」といふ言葉を口に出すなと云ふんだ。(間) 僕の机の上にあつたトランプを一枚一枚めくりながら、ハートの札を片つ端から引裂いてしまつた。丸で狂氣だ。

男。…………。

別の男。狂氣だと云へば、彼女は、君の寫眞を一枚欲しいと云つてた。何にするのか知らないが、あるならやつてくれ。僕は、彼女が、たとへその寫眞を、肌の護りにしやうとも、敢て苦情は云はん。

男。…………。

別の男。君は僕を馬鹿だと思ふだらう。しかし、僕は君に感謝する。君のやうな果報者に、惨めな男の氣持はわからんよ。僕はこれから、彼女を連れて、田舎へ引込む。彼女もそれを望んでゐるのだ。尤もそれが、長く續くかどうかわからん。華やかな生活に慣れた彼女が、都の灯を慕ひ出せば、その時はまたその時の話だ。僕といふ男に用がなくな

れば、その時もまたその時の話だ。しかし、今日といふ明日、彼女を他の男の手に奪ひ去られたくない。それで、ひと言、君の返事を聞きに來たんだ。

男。………。

別の男。君はほんとにどうもないか。

男（きつぱり）どうもない。

別の男。さうか。

男。君は、今、君の懐は彼女の病院だと云つたが、それでなにか、彼女はたゞ、それだけの理由で、君の懐を求めて來てたと思つてゐるんだね。その事について、もつと突つ込んだ考へ方はしてゐないんだね。

別の男。突つ込んだ考方とは………？

男。結局彼女は君を愛してゐるんだとは思はないかい。

別の男。それは何んとでも考へられるさ。或は、もつと突つ込んで——君の言葉を借りればだね——例へば、僕を通して君を愛さうとしてゐるのかも知れないよ。

男。………。

別の男。或はまた、さうすることによつて、彼女は、僅かに自尊心を慰めてゐるのかも知れないよ。

男。それで君は、なんともないのか。

別の男。………。

男。こんなことを君に聞く必要はないのだが、僕としては、君がそこまで考へた上で、僕の處へその話をしに來たんだ

といふことを知るのは非常に興味があるんだ、兎に角僕は君に誓ふ――僕と彼女とは永久に「何んでもない」よ。

別の男。それぢや、もう別に云ふことはない。今迄、あまり話しをする機會はなかつたのに、何時の間にか、かうして、さつくばらんに話しができるやうになつてゐたことは幸ひだ。君が僕のことを人に話す時に、多額納税者の道樂息子とは云はずに、大學で一緒に講義を聽いたことのある男と云つてゐるといふことは、蔭ながら、君に親しみを感じさせた一つの理由だ。

男。僕は君が多額納税者の道樂息子だなんていふことは知らなかつたよ。

別の男。さうか、それほどお互に無關心だつたんだ。さう云へば、今度だつて、あの女を通じて、二人は話しをし合ふやうになつたんだからね。

男。君は僕を覺えてゐたと云ふぢやないか。

別の男。覺えてゐたよ。君は夏も冬も同じ服を着てゐた。君は講義の途中で、よく席を立つた。君は女子聽講生を一人友達にしてゐた。

男。あれは妹だよ。なるほど、君はよく覺えてゐる。それから、君は、僕が一度、心理の時間に腦貧血を起して倒れたのを知つてるか。

別の男。知らない。僕は一度しかなかつたことは先づ知らないと云つてい〻。

長い沈默。

男。君は彼女の云つたことを悉く信じてゐるのか。

別の男。悉く信じてはゐない。一體僕は、女の云ふことは半分だけ信じることにしてゐるんだ。尤も、何を信じ、何を信じないといふやうなことを、ちやんときめてかゝることはできないが、そんなことはどうでもいゝんだ。大概あてずつぽうに、これはほんとだ、これは噓だ、さう判斷をしてかゝれば大した騙され方はしないよ。

男。騙されても半分だけだ。

別の男。さうだ。半分だけだ。

男。それから一層、全く信じなければいゝぢやないか。騙される率はなほ少いわけだ。

別な男。それや少い。しかし、全く騙されないたんていふことは淋し過ぎるよ。僕が若し君なら、彼女に一度騙されてやるね。

男。………………。

別な男。彼女が實際君を騙さうとしたかどうかは知らんが、さう考へて見るのも面白いぢやないか。（間）つまり、彼女は君を愛してはゐないといふことになるのだ。

男。それさ、僕の云はふと思つたことは……。

別な男。さうか、さういふ風に考へて行けば、昨夜の芝居は、また觀方が違つて來るわけだ。

男。その方が、君自身には面白からう。

別の男。さうでもないよ。君の方だつて、その方が樂だらう、氣持ちがいゝね。聰明な君にも似合ないことだ、女を泣かしちまふなんて……。それや、向うだつて口惜しいだらう、まんまと芝居の裏をかゝれちやね。僕だつたら、もう少

し、彼女の玩具になつてゐてやるよ。初めから逃げるかはりに、見事に背負投げを喰つてやるよ。そして、アハハハへつて笑つてやるよ。どうだ、此の手は氣がつかなかつたらう。

男（苦笑しながら）かうして話をしてゐるうちに、だんだん色々なことがわかつて來た。しかし、僕にはやつぱりその勇氣はない。それも一種の火いたづらだからね。

別の男。火いたづらか……。それが君の自惚かも知れないよ。これから歸つて、……あれによく聞いて見よう。ぢや、これで失敬。（起ち上る）君は來年もこゝへ來るね。僕達も多分來るだらう。まあ、せいぜい、泳ぎ給へ。（去る）

男（默つてその後姿を見送る。やがて、腹這ひになり、沖の方に向ひ、小聲で唄ふ）

波の底に
呼ぶ聲あり

（すると、此の歌の後を受けて、遙かに、女の聲が）

われあらずば
誰かこたへん

男（恐る恐る半身を起して、此の聲に聽き入る）

その間に幕――



東京驛

正宗白鳥

（一）

與野隆吉はステーションホテルの一室の窓際に椅子を引寄せて、降頻る俄か雨を眺めてゐた。退勤時刻なので雜沓してゐた境地も、一時人影が疎らになつたが、それでも、雨を冒して丸ビルから停車場を差して驅けて來る者もあつた。日傘を風に煽られながら、派手な衣服をずぶ濡れに濡らされながら、電車の停留場のあたりをうろついてゐる若い女もあつた。自働車は泥を飛ばして疾驅してゐた。

窓外の光景に氣を取られてゐた隆吉は、ふと扉を叩く音を耳に留めて「お入んなさい」と何氣なく聲を掛けたが、入つて來た客を見ると吃驚して思はず立上つた。會ひたくもない甥の喜代造の濡れ姿がそれに現はれたのであつた。

「おれが此處にゐることがどうして分つた?」

と、氣色ばんで訊ねると、

「今電車を下りた時に叔父さんの顔が目につきましたから、思切つてやつて來ました」と云つて、喜代造は隆吉の側に腰をおろして、あたりを見廻しながら、「わたしはホテルといふところへははじめて來たんですが、叔父さんはこの頃は、東京へいらつしやるたんびに此處へお泊りになるんですか」

「さう極つてゐる譯ぢやないが。……さつきおれは外ばかり見てゐたのだが、お前が電車から下りるのに氣がつかなかつたのは不思議だね」

「わたしも不思議に思ひましたよ。それで若しや人ちがひぢやないかと思つて、暫く雨の中に立つて、叔父さんの顔を見詰めてゐました」

「馬鹿だなあ。……傘も持たないで雨の中に立つて傍見をしてゐたのか。」

「こんな衣服を濡らすくらゐ何でもありやしません。しかし、叔父さんは何時からこのホテルに泊つていらつしやるのか知りませんが、わたしが今まで一度も叔父さんにお目に掛らなかつたのは變ですね。わたしはこの頃は毎日この東京驛に來てゐるんですよ」

「ぢや、何かい。お前はこの頃鐵道の方の仕事に有りついて、毎日このステーションへ出勤してゐるのかい。そんな話は誰からも聞かなかつたが。……」

「いやさうぢやありません」喜代造は色の黒い骨つぽい顔に、子供らしい笑ひを浮べて、「わたしが鐵道の役人なんかになる資格は全く無いぢやありませんか。それにわたしはいくら職業に窮しても、煩はしい俗務を取る氣にはなれませんね」

「相變らず見識振つてるね。俗務はいやだなんて大きい口を利いてゐても、お前の詩や文章で飯の食へる見込みがつい

てゐるのかい」

喜代造は默つてニヤ〳〵笑つてゐた。

「しかし、お前が自分の好きなことをやるのに、おれは決して干渉はしないよ」

隆吉は甥の無能を蔑視しながら、甥の目に自分が俗物と見られてゐるらしいのを、いくらか氣にしてゐた。

「大分小降りになつたな」と、窓外を見て呟いて、「勤めがないのなら、お前は何しに毎日東京驛へやつて來るんだい」

「遊びに來るんです」

「遊びに來る？」隆吉は怪訝の思ひに打たれて、「こんな所へ遊びに來て何をするんだい」

「何をするつてことはないんです。たゞ驛の中をぶらついてゐるだけです。」

「それが面白いのか」

「えゝ。面白くないこともありませんね。たまには、さつきのやうに思ひも掛けん叔父さんの顏をホテルの窓に見つけることもあるんですから」

「下らないことを云つてる。お前も隨分暇人（ひまじん）なんだね」

隆吉は呼鈴のボタンを押して、「おれはいろんな用事をひかへてゐて忙しいんだが、五時半頃に訪ねて來る客があるので、それを待つてゐるんだ。その間退屈なもんだから、ぼんやり外を見てゐたのだが、人間がうよ〳〵通つてゐるのを上から見下してゐると、ちよつと面白いものだね。意外な夕立がやつて來たので、皆んなが慌てゝ、蜘蛛の子を散らすやうに逃廻るのがなか〳〵面白かつたよ。自分が傘も持ないで夕立に出くはしたら、面白いどころぢやあるまいが

ね」

「叔父さんでも外の人通りを見て面白いと思ふことがあるんですか。ぢや、まんざらわたしと話が合はないこともありませんね。丸ビル前の廣場を見下してゐるのも面白いでせうが、このホテルに泊つていらつしやるのなら、時々暇な時を利用して、廊下へ出てステーションの中を見下して御覧なさい。そりや面白いですよ。」

「そりやさうだらう。東京驛は日本の中心見たいで、いろんな人間が出入してゐるからね」

「日本の中心だか塵棄て場だか知らないが、人間の溫氣が渦を巻いてゐますよ。白粉の匂ひも香水の匂ひも汗の臭ひも、乳の臭ひも小便の臭ひも一しよくたになつて、ムツと鼻を突いて來ますね。急行の發車間際や、退け時の雜沓時刻が面白いばかりでなしに、十一時の最終の下ノ關行が出たあとのガランとしたところも面白いですよ。東京驛が大きな墓場見たいです。わたしはその墓場に一人で立つてゐて感慨に耽つてゐると、驛夫に追出されるんですが、叔父さんは此處にいらしやるんだから、夜中に廊下へ出て、あの墓場をゆつくり追弔することが出來るでせう」

「ハゝゝ。結局は詩人らしいことを云出したね。おれなんか、夜中に大地震があつたつて目を醒ましやしない。お前の云ふやうな物好た眞似は出來やしないよ」

隆吉は、そこへ入つて來たボーイに、紅茶を吩咐けて、時刻をも訊ねた。

「五時を七分過ぎてゐます」喜代造は腕時計を見て知らせた。

「ぢや、もう二十分ばかり暇があるね。その間だけお前にお突合ひをしよう。別段おれに用事がある譯ぢやあるまいね」

「久振りでお目に掛つたのだから、わたしの近狀をお話したいんですが、叔父さんはわたしが叔父さんの面前にゐるこ

とをあまり好んでゐらつしやらないやうだから、紅茶を一杯御馳走になつたら、直ぐにお暇することにしませう」

「おれは別段お前を毛嫌ひしてやしないよ。まだ二三日こちらに滞在してゐるんだから、お互ひの都合のいゝ時に、晩餐を一しよに食べてもいゝよ」

「わたしはどうせ日に一度は東京驛へやつて來るんですから、またお伺ひしてもよろしいが、叔父さんは御迷惑でせうから、訪問はこれつきりにして置きませう。我々の一族は遺傳的に肉親に對して親しみが薄いんですね。わたしなぞも年を取るほどさういふ氣持になります。今日は不意に叔父さんを見付けて、臆面なしにお訪ねして、こんなお喋舌りをしましたが、實は當分身内の誰れにも會ひたかないんですよ。二三日前に、このステーションで愛助さんを見つけた時にもわざと人の背に隱れて知らん顏をしてゐました。愛助さんは妻君の母親を連れて神戸行の急行に乘りましたよ」

「愛助にも暫く會はないが、……」

「あの人もこの頃は妻君に感化されて、わたしのことなんかよく云つてゐないさうですよ」

「ハヽヽ」

少しばかり身内のことを話合つてゐるところへ、紅茶と洋菓子とが運ばれた。喜代造はそれを手早く貪ると、直ぐに椅子を離れて、叔父に挨拶して出て行つた。

隆吉は甥を戸口まで見送つて、「まあ、しつかりやれ」と、漠然たる、しかし機嫌のいゝ言葉を放つて、元の椅子に戻つた。雨は小降りになつて、西の空には明るい雲が見えだした。一時俄か雨のために行く手を遮られてゐた男女は、また夥たゞしく前後左右に動きだした。

「喜代造のやつ、あんなことを云つて、奇麗な若い女を捜しに東京驛へ來てやがるんだな。この停車場に見張つてゐよ

うなら、親の仇でも主人の仇でも見つかりさうだ。氣に入つた女の一人や二人見つけるのは雜作もないことだ。……よし、おれは暇な時に廊下へ出て、喜代造のやつが停車場でどんな眞似をしてゐるか、そつと覗見してやらう」と、彼れは獨笑ひを浮べたが、やがて「い〻歳をして物好きだ。おれも叔父甥の縁で變物の喜代造に似てゐるところがあるのだな」と、おのれを省みた。そして、若い時分に、お茶の水通ひのある可愛らしい女學生の後を、毎日その通學時刻を見計つて隨けて行つたことを思出した。脚氣を患つてゐたのだつたが、跛足ひき〳〵毎日隨いて行つたのであつた。

コツ〳〵と扉に音がしたので、隆吉は待人のことを思出した。そして、「お入んなさい」と聲を掛けると〻もに、今までの妄念を振拂つて身構へした。

「えらい雨でしたなあ」

客は重つたるい聲でさう云つて、疲れてゐる顔を強いて快活らしく裝つて入つて來た。

「折惡しく大雨でお困りでしたらう。どうかお掛け下さい」

「有難う。……お約束の時刻に遲れちやならんと思ひまして、大急でまゐりました」と云つて　客の平野は胸の鎖を取出して、「丁度五時半です」

「あなたは萬事が正確だからい〻」

「いや、これで隨分ズボラを極める時もあるんですよ」

「あなたは活動範圍がお廣いから、たまにはズボラをやらなきや身體が續かないでせう」

「いろんな方面に掛り合ひをつけられて氣忙しい思をするばかりですよ。年中無駄骨を折つてるようなものです」

二人はしばらく無駄口を利き合つたあとで、用談にうつつたが、用談と云ふのは、隆吉の經營してゐる大阪の商店に

大改革を試みるために　重立つた二三の店員を取變へようとして、ある敏腕家の周旋を、平野に依頼して打合せをすることであつた。平野は以前隆吉の部下として、ある會社に勤めてゐたことがあつて、その後職業を異にするやうになつても、引續いて、相結托して、互ひの利益を計るやうにしてゐた。

「先方の持出した條件をお聞き入れになれば、大丈夫承諾します。勿體をつけて愚圖々々云つて居りますが、腹の中は大低見え透いてるんですよ。念のために、明日あたりお會ひになつて　直接お話なすつて下さい。わたくしが連れてまゐりませう」と、平野が云ふと、隆吉は同意して、面會の時刻などの打合せをしたが、

「しかし、松田にお會ひになる時には、あなたのお店の事を、あんまり景氣よく御吹聽なさらない方がよう御座んすよ。あの男は少し旋毛まがりですから、……君の力で店の勢ひを盛返すやうに骨を折つて呉れと云つたやうに持掛けた方がいゝんです」

「ハヽヽヽ。わたしがどうかすると、お調子に乘つて駄法螺を吹くもんだから、豫め注意するんですね。……有難う。……しかしこの頃は、わたしも身體が衰へて法螺を吹立てる元氣が次第になくなりましたよ」

「さういふ譯で御注意をしたのぢやありません」平野は苦笑して、「あなたは何時お目に掛つてもお變りにならないがわたくしはどうも最近根氣が衰へたようです。四十になつたばかりでこんなことぢや爲様がありませんね。それで、この夏は一つ宗旨を變へて、生れてはじめての避暑道樂をやつて見ようかと思つてゐるんです」

「それはいゝ。何をするにも健康が第一の資本ですからね」

二人はなほ續いて、用談や避暑話などをしてゐたが、そこへ、卓上電話が鳴つたので、隆吉は煙草を置いて受話器を手に取つた。

「あなた、奥野さんでいらつしやいますの？」たしかに女の聲であつた。

「え、さうです。あなたはどなた？」

「お分りになりませんの？」甘たれた若い女の聲であつた。

隆吉は聞馴れてゐる二三の若い女の聲を思出したがどれも電話の聲とは一致しなかつたので、

「よく分らないが、わたしにどういふ御用があるんです？」と、語調を柔らげて訊いた。傍にゐた平野はニヤリと笑つた。

「あたし、これからホテルへお訪ねしちやいけない？」

「ホテルへ來る？。わたしはこれから直ぐに出掛けるんだが……あなたの名前がわたしにはハッキリ分らないね」

「何だか變ね。あなたは奥野喜代造さんぢやないんですか」

「わたしは喜代造ぢやありません。喜代造はホテルにはゐませんよ」

「……どうも失禮いたしました」

それで電話は切れた。隆吉は奇怪に感じながら「いや、どうも失禮」と、座に戻つて平野に對した。次の用事をひかへてゐる平野は、暇を告げるべく腰を浮せてゐたが、隆吉は、

「今電話を掛けた女は、わたしをわたしの甥と間違へてるんですよ。甥にはさつき、あなたのいらつしやる前に會つたばかりで、わたしがこのホテルに泊つてることを、甥はそれまでは知つてゐなかつた筈なんです。……どうも、今の電話は變ですよ」と、自分の疑念を口に洩した。

「あなたの甥と仰有るのは喜代造さんのことですか。お顔はさうでもないが、話聲は、あなたとあの方と似て居ます

よ。身内といふものは爭はれないもので、何處か似てるところがあるんですね」
平野はお附合ひにそう云つたゞけで、そんな無益な話に深入りする餘暇はなかつた。それで、松田を同伴して再び訪問することについて、も一度念を押して暇を告げた。
「若手の腕利きだといはれてゐる松田が、おれの片腕となつて働いて與れるやうだと、おれも心丈夫だ」と、隆吉は一安心して、柔かいクションの上に手足を伸して、目を瞑つたが、先日來の疲れで、少しの間われ知らず假睡の夢に入つてゐた。今夜は草臥休めに、何處か氣持のいゝ家で、ユックリ晩餐を食べたいものだと、夢うつゝで思つたりしてゐたが、ふと、電話の音に呼醒まされた。
「煩いな」と、寢呆け顏を顰て受話器を耳に當てると、
「もし〳〵、あなたは與野さんでいらしやいますか」と、またも女の聲らしい聲が聞えた。
隆吉は、今度こそ、何處かの知合ひの家から掛つて來たのであらうと、當てにしながら、
「わたし、與野です。あなたは？」と訊返すと、
「この頃あなたはホテル生活していらつしやるんですつてね、當分其處にお泊りになるんですか」
「………あなたはどなたです？」
「あたしの聲がお分りにならないの？。どうしたんでせう」と云つて、女は懐つこさうな笑ひ聲を洩らした。
「わたしは與野隆吉ですよ」と、隆吉は相手を咎めるやうな口調で云つた。
「あら……」女はふと驚いた聲を洩らして、「どうも失禮をいたしました」
隆吉はいま〳〵しさうに舌打ちをした、そして急いで出仕度をして廊下へ出た。玄關へ下りて行く前に、驛の中を見

下して、雜沓のなかに喜代造が潜んではゐないかと目を配つたが、甥の姿は見つからなかつた。甥の姿は見つからなかつたが、老若男女の動搖してゐる有樣が、これまで何の氣なしに見てゐた時分よりも面白かつた。

（二）

馴染の料理屋で、數人の藝者を相手に飲食ひをして時を過した隆吉は、あまり夜の更けないうちにホテルへ歸つたが、部屋の卓上には、來訪者の名刺が五枚も置かれてあつた。受持のボーイは入つて來て、「一時間ほど前に、入江さんと仰有る方からお電話がかゝりました。明朝、九時ごろにお訪ねしたいと云つていらつしやいました。それから、あなた樣がお出掛けになると。間もなく、青山さんと仰有る女の方がいらつしやいました」と知らせた。

「青山といふ女が來た？……どんな女だつた？」

「お若い方でした。お名前だけで、外には何も仰有らないで直ぐにお歸りになりました。」

「これは奇怪至極だ」隆吉は思はず呟いた。そして、ボーイが怪訝な顏して出て行つたあとで、五枚の名刺を一々取上げて見詰めたが、そのうちに三枚は、聞いたこともない、自分に關係のなさゝうな人の名前であつた。辻本養一、小谷信太郎、葉村銑之助、と、隆吉は名刺の文字を讀みながら、どうした理由でこんな變なことが起つたのかと、不快な思ひに神經を亂された。喜代造の惡戲にしても、あまりに常識を逸してゐるし、それに、喜代造がそんなに大勢の男女を使役するのが不可解でもあつた。

「とに角おれを馬鹿にしてやがる。當節の若い者の間には、こんな愚にもつかない惡戲が流行るのかも知らないが、不都合至極だ。……さういふことなら、こちらでも對抗策があるのだ。訪ねて來た奴でも電話を掛けた奴でも、側へ引張

り寄せて、うんと油を絞つてやらう。」

　陸吉はさう思つて力み返つてゐたが、醉後の眠氣が萠して來たので、寢室へ入つて正體なく寢臺に横はつた。周圍の雜音にも累はされないで、快く眠つてゐたが、眞夜中時分になつて、口に渇きを覺えて、ふと目を醒まして起上つた。水を飮んで便所へ行つた次手に、喜代造の話を思出して、寢鎭つてゐる部屋々々の前を通つて、廻廊へ出て、ステーシヨンの構内を見下ろすと、そこには、電燈が煌々と照つてゐたが、生物の影一つなくつて、正面の時計の針ばかりが動いてゐた。

「時刻も丁度丑三ツ時だ。大都會の眞中でも、さすがにヒツソリしてゐる」と、はじめて氣がついたやうに感心したが、さう思つただけで、欠伸を洩らしながら、自分の部屋へ歸りかけると、

「與野さんぢやありませんか」と、廻廊の横から、出抜けに聲を掛けられた。見ると、黑川といふ知合ひの五十を可成り過ぎてゐる男が、寢卷姿でそこに立つてゐた。互ひに寢呆顏して近寄つた。

「此處に泊つていらつしやるんですか。不思議なところでお目に掛りましたね」

「わたしはどうしたことか、今夜は眠づかれないので、氣を紛らすためにこんな所をブラついてゐました。わたしどもには、やはり日本宿の方がよう御座んすな。こんなホテルだと牢屋に押籠められてゐるやうでいけません」

　黑川はさう云ひながら不愉快さうに首を振つたが、隆吉が自分と同じやうに寢卷のまゝ、眞夜中に、西洋館の廻廊をうろついてゐるのをふと滑稽に感じて、

「あなたもお眠りになれないんですが」と訊ねた。

「いや、わたしは宵のうちからよく眠つてゐました」

「それではどういふ譯でこんなところを散歩していらつしやるんです？」黒川は微笑を洩らした。
「イヤ、つまらない出來心で。……」と、隆吉も滑稽に感じて、高い聲を出して笑つた。そして甥の云つたことを面白さうに話すと、
「さう承ると、成程、この東京驛の中が墓場のやうに見えますね。」
「墓場にしても、も少し經つたら、また活動がはじまるんですね。一日のうちには何萬人の人間が此處へ出入りするんでせう。」
隆吉はさう云つたが、相手が默つて構内を見詰めてゐるので、「さあ、部屋へ歸りませうか。これからユックリおやすみなさい。明日の朝は御一しよに食事をいたしませう」と云つて、先へ立つて歩き出したが、相手が隨いて來ないので、
「何なら、わたしの部屋へでもお寄りになりませんか」と、振返つて聲を掛けた。
「どうぞ、わたしにお構ひなくおやすみなさい。わたしはまだ眠れさうぢやありませんから、も少し此處をぶらついてゐませう」と云つて、黒川は隆吉にかまはないで、反對の方へ歩きだした。
隆吉は廻廊の方を顧み〳〵自分の部屋へ歸つて來て、寢臺に横はつたが、宵からの熟睡で眠りが足つたのか、次第に目が冴えた。貨物自動車らしい音が、遥かに、地の底からのやうに響いて來る外、無人境も同樣の靜かさであつたが、頭の禿げかゝつてゐる黒川が、寢衣のまゝ、停車場の上の廻廊を唯一人歩いてゐることを考へると、黒川も喜代造同樣の變物のやうに思はれて、滑稽視してばかりはゐられなかつた。
それで、夜明け前に一睡したあと、黒川の部屋をボーイに訊ねて、その扉をノックしたが返答がなかつた。暫くして再び訪れると、今度は黒川の姿が見えなかつた。ボーイに訊ねても分らなかつた。朝餐を共にする約束をしてゐたのに

どうしたのかと訝りながら、食堂を覗いたり休憩室を覗いたりしたが、分らなかつた。ところがふと思出して、昨夕出會つた廻廊を捜すと黒川は、窓際に突立つて、場内の廣場に向つて、凄いほどに目を見据ゑてゐた。隆吉は、騒々しく近づくのを躊躇して、片隅から相手の樣子をぬすみ見してゐたが、黒川は、見据ゑてゐた目を閉ぢて物思ひに耽つてゐるやうな樣子をしたかと思ふと、また目を開けて、ある一方へ視線を集中した。隆吉は好奇心を起して、黒川の視線の注がれてゐる方へ自分の目をも注いだが、三等特急の乘客の行列が改札口を目差して續いてゐる以外に變つたこともなかつた。

「ヤア、また此處へ來ていらつしやつたんですか」やがて、黒川に聲を掛けられたので、隆吉はやうやく心の隔たりを取つて側へ寄つて行つた。

「御一しよに食事をしようと思つて、あなたを捜してゐました」

「それは失禮しました。……では、直ぐに食堂へお伴いたしませう」

二人は、食堂へ連立つたが、食事中は、洋食と和食との比較論や健康法など、有振れた話を取りかはして、變つた話題には觸れなかつた。そして、食事を終つたあと、黒川は隆吉の部屋に誘はれて行つたが、そこの椅子に腰をおろすと、

「あなたに偶然お目に掛つたのも、何かの因縁でせうから、一つ、わたしの胸に仕舞つてゐることを聞いて頂きませうかな」と云つて、隆吉がそれを聞きたがつてゐるか否かを、上目を使つて觀察した。

「是非承りたいものですな。わたしは十時頃までに出掛ければよろしいんですから」隆吉は自分の用事を延ばしてもそれを聞きたいと望んでゐた。

「あなたが興味をお感じになりさうなところだけ、要點を摘んでお話しさせう」

黒川の話振りは事務的で、些しの感激も含まれてゐなかつた。

「あなたの甥御の喜代造さんとかが、夜中の停車場の中を墓場だと仰有つたのに同感しました。それで、昨夕、あなたにお別れしてから、二人で廊下から見てゐますと、三年前のこの頃、滿洲へ出掛けた伜の榮一の姿が改札口の邊にあり〳〵と見えだしました。御存じの通り、榮一はあちらで相當に働いてゐたんですが、氣候が適しないために、病氣に罹つて彼方の病院で亡くなりました。それで、遺骨となつてこの東京驛に着いたのです。わたしは後嗣者を亡くしてから、稼業に身を入れる張合ひもなくなりましたが、病氣で死んだのだから、誰れを敵にして恨むことも出來ないし、まだ老朽はしてゐないわたしが、商賣を止めて遊んで暮す譯には行きません。それで、無理にも諦めをつけて、兄の子供を一人、養子に貰つて後を嗣がせることに極めてゐるんですが、血緣のある兄の子であらうとも、自分の實子とは違ひます。わたしは僅かな財産でも、若い時分から苦勞して蟻が塔を積むやうにしてつくり上げたものを、自分の實子でない者にオイソレと讓渡すのが次第にいやになりました。それも、はじめから實子がなかつたのなら、さういふいやな氣持になることもないのでせうが、死んだ榮一のことを思出すと、兄の子は不當な奪掠者のやうに思はれてなりません。榮一があの世からわたしに向つて、「なぜ、僕が受繼ぐべき財産を仙次郎さんなんぞにやるんです」と、怨めしさうな目をして云つてゐるやうに思はれることがたび〳〵ありました。さういふ御經驗のないあなたなぞは、わたしの考へを淺間しくお思ひになるかも知れません。飛んでもない馬鹿なことを考へる奴だとお哂ひになるかも知れません。わたしも自分で自分を叱りつけて、生きてる間働けるだけは働いて、一生に儲け溜めた財産は、多少に關はらず氣持よく兄の子に讓つて家名を續けて貰はふと思ふこともありますが、腹の底からさうなり切れないのだから困ります。前世の業でせうかな。われとわが身で量見方を變へる望みは全くありませんよ。……それで、上べは、仙次郎を相手に、あたり前に

稼業を續けては居りますが、一年ほど前から、わたしもひどく根氣が疲れました。……昨夕お目に掛つた時にも、わたしは、寢づらい上に心淋しくつてたまらなくつて、フラ〱とあんな所へ出掛けましたが、あんなガランとした洞穴を見てると、あの方へ吸込まれさうでいけません。……あなたはお哂ひになるでせうが、わたしは自分の持つてゐる財産を脊負つて、倅の行つてる所へ行つて、倅と一しよに商賣をはじめようかと思つてゐました」

黒川はさう云つて、自から嘲けるやうに笑つた。隆吉も笑つて、

「しかし、お背負ひになる財產を、充分に持つていらつしやるから結構でさあ」

「いや、わたしどもの商賣はちつぽけな者で、財產の事を彼此申上げるのはお恥かしいくらゐですが、その鼻糞ほどの財產でも、わたしが精根を枯らして拵へたものなんですから」

「しかし、御養子の仙次郎さんは、着實に御商賣をやつていらつしやるんでせう」

「左樣。どうせ今時の若い者ですから、此方の思ふやうに手足を働かしちや呉れませんが、人間はどちらかと云へば穩順で、わたしどもの吩咐に背くやうなことはいたしません」黒川は、仙次郎の顏形を眼前に浮べて、しぶり〱さう云つたが、ふと、現在の自分の居場所に思及んで、「朝からこんな不景氣な話をお聞かせして相濟みません」と、詫びるやうに頭を垂れた。そして、椅子を離れて、丸ビル前の廣場を見やりながら、「喜代造さんとか仰有るあなたの甥御のお說に從つて、停車場の人だかりを見てゐますと、なか〱面白う御座んすね。さつき見てゐた間にでも、何人榮一のやうな男を見つけたか知れません。年齡から姿形、歩きつ振りまでも、榮一ソツクリなのが一人居りましたよ」

「ぢや、それを一心に見ていらつしやつたんですか」

「いや、さうぢやありません。……改札口のところへ押寄せた連中のうちに、田舍者らしい老人がゐました。小型の鞄

を大事さうに提げてゐましたが、敏捷しこい目付をした青年が、早くから、その老人と鞄とに目をつけてゐて、次第に老人に近づいて、一しよに改札口を出て行きました。あれは曲物です。汽車の中で乾度やられますよ」

「スリなんぞは、停車場にはしよつちうゐるでせう。わたしは、あなたの見ていらつしやる所を見てゐたんですが、そんなことには氣がつかなかつた」

「わたしはこれから丸ビルへ行かなきやならないんです。どうも大變お邪魔いたしました」

黒川は、今までとは人が違つたやうに快活に云つて出て行つたが、隆吉は戸口まで見送つたところへ、電話が鳴つた。「また惡戯か。今度は取つちめてやらう」と、待構へて受話機を手に取ると、

「わたしは喜代造です。叔父さんですか」と、甥の聲に違ひない聲がした。

「お前のためにおれは昨夕からどれほど煩い思ひをさゝれたか知れないぜ。何のためにあんな惡戯をするんだ」隆吉は平靜を失して怒鳴りつけた。

「實はわたしも驚いてゐるんです。友人の矢崎が叔父さんをわたしと間違へてホテルへ訪ねて行つたことを今當人から聞いて驚いたんです。あいつは性質のよくない奴なんですから」

「矢崎？。そんな男の名は知らないよ。だが、いろんな男や女が、電話を掛けたり訪ねて來たりしたのだ。おれの留守に置いて行つた名刺を、今讀むから聞いてゐろ」

「そんなに大勢が叔父さんをお訪ねしたんですかね」喜代造は落着き拂つた口調で云つて、「それは叔父さんに用事のある人でわたしには關係がないんぢやありませんか」

「だつて、おれの知らない人間ばかりなんだよ。」隆吉は手を伸して名刺を引寄せて、辻本、小谷、栗村と、一々姓名を

讀上げた。

「わたしは、そんな名前は知りませんね。わたしの友人にそんな男はありませんが、叔父さんの方で心當りがないのなら變ですね」

「お前の企んだ惡戯でないとすると不思議だが、……お前の云ふことは嘘ぢやあるまいな」

「そんなことで嘘をついて何になります？」

「お前が今日も停車場へ遊びに來るのなら、おれの部屋へ寄らないか。今から時間を極めて、おれが待つてゐよう」

「ところが叔父さん。わたしは、當分そちらへ行かれなくなつたんです。惡意をもつて驛の內でわたしを待伏せしてゐるものがあるんですから、危險で寄りつけないんです。そのために、わたしは當分散步の區域を變更しました」

「お前の所爲でないと云つても、事實お前の名を差しておれに電話を掛けた女があるんだ。お前は責任を免れようたつて駄目だよ」

「女が電話を掛けたんですつて？。その女の名前は何と云ひました」

「名前なぞ聞くものか」

隆吉は焦立つて突慳貪に云つたが、電話はそこで切れた。隆吉は甥の云つたことが嘘であれ誠であれ、昨夜の電話と訪問客とのことが氣掛りで、それ等の正體を見屆けて疑ひを解かなければ安心が出來なかつた。それで、今に昨夕のやうな電話が掛つて來るか、昨夕名刺を置いて行つた客がやつて來るかと心待ちにして、肝心な商用についての考へは自から疎かになつてゐた。この馬鹿げた忌はしい疑ひに心を捉はれながら、所在なさに丸ビル前の廣場を見下してゐると、黑川が折鞄を抱へて線路を橫切つて丸ビルへ向つて步いてゐるのが見えた。服裝はキチンとしてゐるのだが、自動

車などを避けてゐる步調のこなしが危かしかつた。そのあたりの若い男女の輕快な足取りとは比べものにならなかつた。

十時近くなつても、待つてゐた電話や來客の音沙汰はなかつたので、隆吉は、豫定の商用を果すために出掛けたが、途中でも馬鹿げた疑ひの方へ心が注がれてならなかつた。

ある銀行の重役に會つて資本金の融通について話を進めてゐる間にも、かの不可解な名刺の人名が頭に浮んだ。この重役は隆吉の堅實な性格を信用してゐるので、彼れの要求を略々聞入れたのであつたが、用談が一通り終つたあとで、

「あなたのお宿は居心地がよう御座んすか」と訊ねた。

「馴れると、西洋宿は簡單でよろしいですな」と、隆吉は答へたが、「實は昨夕から不思議なことがあるんですよ」と、例のことを手輕に話した。

「へえ、それは妙ですね」

重役は口では話に感動したやうに答へたが、怪訝な目付で隆吉の顏を見た。隆吉は、多忙な所でそんな無駄口を利いた自分の不注意をふと後悔して、慌たゞしく用談について二三言云つて暇を告げた。

彼れは、今一軒他所へ廻る筈であつた豫定を變じて、一先づホテルへ歸つたが、部屋へ入つてボーイを呼ぶと、ボーイは、意地惡くも、また名刺を出して、「今しがた、この方がいらつしやいました」と云つた。

隆吉は、矢崎眞吾といふ名刺の文字を見ると、顏色を變へて、

「どんな男だつた？」と、ボーイに問詰めた。

「髮を長くのばした三十前後の方でした。も少し經つてから、も一度お訪ねすると仰有つてゐました」

「人相の悪い男ぢやなかつたか」

「いゝえ、色がお白くて美しい顔をしていらつしやいました」

「さうか」

隆吉は、性質がよくないと云はれた矢崎だけは、甥の知人であることが分つてゐるので、この男を掴まへたなら、喜代造か紳か、誰れかゞ企てた悪戯の眞相が明瞭になるであらうと心構へをした。

(三)

朝から照りつけてゐた六月の太陽は、日盛りにはます／＼勢ひを増した。脂肪肥りで汗つ掻きの隆吉には、洋服を着けて外を驅廻つたり、目上の者に會つて改つた話をしたりするのは苦痛に感ぜられるのであつた。それで、平野がこの夏は避暑に行くと云つてゐたのを思出すと、羨ましくなつて「おれも稼業に繫縛してゐないで、何處かの涼しい温泉場で一月ばかり懶けて暮したいものだ」といふ慾望が頭を掠めたが、商店の方針が堅まらない限りは、店主たる自分が店を空けるなど、實行し得られることではなかつた。

喜代造の住所を聞いて置かなかつたのを後悔してゐる隆吉は、甥の一團の悪戯を居ながら待つてゐる外はなかつたので、稼業に關した二三の訪問をも中止して、浴衣一枚で横はつて、平生に例のない空想を恣にして時を過してゐたが、日暮間近くなつて、やうやく、矢崎といふ男から電話が掛つた。

「わたしは喜代造さんの友人で御座いますが、お訪ねしてもよろしいでせうか」

「ハア、わたしの方では差支えがありません。直ぐにいらつしやい。お待ちしてゐます」

隆吉はさも會ひたがつてゐた親友に會へるやうな喜びを感じて快い返事をした。この男に會つてよく訊糺したなら、昨夕からの不快な胸の蟠まりも一掃されるであらうと豫期して、「性質のよくない奴だ」と、甥が矢崎について警告してゐたことは、心に懸けてゐなかつた。

ボーイに取次がせて矢崎がやつて來たのは、電話が切れてから五分とも經たないくらゐに早かつた。見ると、今朝ボーイの云つた通りに、色が白くて柔和な顏をしてゐる青年であつた。見たところでは、却つて喜代造よりも感じがよかつた。

「サアお掛けなさい」

隆吉は親しい知人を歡迎するやうな態度を見せた。矢崎は、突然の訪問を恐縮してゐるやうに、謹んで自己紹介をした。が、隆吉は相手の來訪の理由を聞くのも待遠しさうに、自分の方から口早く、

「喜代造があなた方を唆かして、わたしに惡戲をしたのぢやありますまいね」と訊ねた。

「そんなことはありません。どうしてさうお思ひになるんです」

「惡戲でないとすると譯が分りませんよ。あなた方が大勢揃つて、わたしを甥と間違へるなんて、有り得べからざることだ」

「その間違ひの理由は簡單です。われ〱が昨日の夕方、ある所に集つてゐる時に、與野君が東京驛のホテルに泊つてゐるといふ噂が誰れの口からか出たんです。與野君は我々の仲間では人望のある人だし、それに、與野君がこのホテルに泊つてゐるといふことは誰れにも不思議に思はれたやうですから、それで、大勢が、あなたを喜代造と間違へて、電話を掛けたり、お訪ねしたりしたんでせう。わたしもその一人ですが」

「しかし、どうして喜代造が此處にゐるといふ出鱈目な噂が出たんでせう。あの男が誰れかにそんな出鱈目を云つたんじやありませんか」

隆吉は、昨夕から暗い雲として頭にかゝつてゐる疑ひが、まだ解けかねて、思はず詰責するやうに云つたが、矢崎は微笑して、「喜代造さんがホテルから出て來るところを、誰れかゞ見つけたのかも知れませんね」と、輕く答へた。

「わたしには腑に落ちないが、……それはそれとして、あなたはどういふ御用で二度もわたしを訪ねていらつしやつたんです？」

「それは追々に申上げます」矢崎は悠然として、袂から煙草を出して火を點けて、年上の隆吉が焦込んでゐるのに氣おくれしないで、「……二度と仰有つても、わたしは只今お訪ねしたばかりなんですよ。まあ、そんなことはどちらでもよろしいが、わたしは、外の連中とは違つて、あなたを喜代造さんの叔父さんとしてお訪ねしたんです。喜代造さんは、只今ある所に監禁されてゐます。わたし達の力では救出すことが出來ませんので、あなたが此方にいらつしやるのを幸ひにお力を借りたいと思つて伺ひました」

「監禁されてゐる？　警察にですか。しかし喜代造は今朝わたしに電話を掛けましたよ。」と、隆吉は相手の言葉を信じなかつたが、捏造にしても、そんなことを聞かされたゞけでビク〳〵した。

「警察ぢやありません。ある所に監禁されてゐるんですが、金を持つて行かなければ放免して與れないんです。喜代造さんがあなたに電話をかけたのも、惡漢どもに監視されて掛けたんでせう」

「しかし、甥はわたしに金の要求なんか少しもしませんでしたよ。個人に無法な監禁をされてることが分つてゐるのなら、警察へ訴へたらいゝでせう。活動寫眞にあるやうな事が天子様のお膝元の東京にある譯はないぢやありませんか」

「わたしの申上げることを御信用にならなければ爲方がありません、……」

「全體喜代造はどんな譯があつて監禁されたのです?」

「あの人はドリーマーですからな。用もないのに東京驛なんかをぶらついて喜んでゐたんですが、昨夕は惡い奴に引掛つたんです。先生誘惑されて隨いて行つたんですが、連れて行かれたところが惡黨の洞穴だつたのです。この事が世間に公にされると、喜代造さんの將來のためによくないんですが、當人だけのことでは濟まなくつて、お身内の方の名譽を傷けることにもなるだらうと思はれます」

「ぢや、婦人に誘惑されたのですか」

「さうです。その婦人も前から與野君に目をつけてゐたんでせうか、それがあたり前の女ぢやないんです。惡い奴が後立てになつてゐて、與野君を罠に掛けたんですよ」

「それが事實だとすると、女も不都合だが、喜代造も怪しからん男です。昨夕久振りに會ふと、甥の話すことが變に思はれてならなかつた」

隆吉は、甥が苦められようとも、不名譽を得ようとも、自業自得として、放任するつもりであつたが、同じ與野の姓を名乘る自分などが詰らない卷添へを喰ふことが恐ろしかつた。ことに、商店を改革して新たに世に乘出さうとしてゐる大切な場合にや詰らないことから名譽を傷けられてはならないと思ふと、少々の金錢には替えがたかつた。

「事情によつちや、わたしだつて、喜代造のために金を出してやらないことはありませんが、ね。はじめてお目に掛つたあなたに、オイソレとお渡しする譯には行きません。全體いくら必要なんです?」

「二百圓もやればよろしいんでせう」

「二百圓？。ろくでもない女に一晩引掛つたゞけで二百圓は高いな」

隆吉は、喜代造の奴は馬鹿だ。今時の若い奴はえらさうなことを云つても間拔けだと憤つたが、しかし、二百圓くらゐの金のために、自分の事業に疵のつくことを免れるのなら、思切つて出してもいゝと覺悟がつきかけた。

「わたしを御信用なさらないのなら、あなたが御自身でお出掛けになつたらよろしいでせう。與野君のゐるところへ、わたしが御案內してもよろしい」

「いや、わたしは今夜も用事がありますから、そんな所へ行く譯には行きませんよ。あなたを信用しない譯ぢやないが、念のために喜代造の自筆でわたしに宛てゝ事情を書いて送らせるやうにして下さい」

「それは自筆の手紙を貰つて來てもよろしいが、喜代造さんから電話でわたしのことも此方へお知らせしてある筈なんですが……」

「さうでした。電話であなたのことも云つてはゐましたがね。しかし、電話ではあなたのことをよく云つてゐませんでしたよ」

隆吉は眉を顰めて不機嫌らしく云つたが、矢崎の柔和な面相を見ると、この男が不良青年であらうとは思はれなかつたので、「あいつの云ふことは當てにならないんです」と、言譯のやうに云つた。

「與野君に惡く云はれる筈はないんですがねえ」と、矢崎はそれを心外に思つてゐるらしくしよげてゐた。

「兎に角、喜代造の手紙か何か、證據になるものを至急屆けて下さい。わたしは此處で待つてゐますから」

「いや、わたしは信用がないのなら、手をひきませう。誰れか外の者がお伺ひするでせう」

矢崎はふと座を立つて、「お邪魔いたしました」と云ふが早いか、扉の外へ出て行つた。

隆吉は腑に落ちなかつたが、ひとりになつてから喜代造のことを考へると、いま／＼しさを通越して憎惡を感じるやうになつた。「おれの運勢があんな奴のためにケチをつけられるのか」

（四）

「モシ／＼、あなたは叔父さんですか。わたしは喜代造です。さつきは矢崎がお訪ねして、出鱈目を云つて、二百圓もゆすらうとしたさうですね。わたしはそんな恐ろしいところへ檻禁なんかされてやしませんから、安心していらつしやい。ハ、、、」

　暫く經つてから、喜代造の聲が卓上電話に傳はつた。外出を見合せて、甥に關したその後の消息を待ちあぐんでゐた隆吉は、「出鱈目も事によるよ。全體お前達はどういふ量見でおれに對して惡戯をするんだ」と、口では荒々しく云つたが、心の中では一つの災厄を免れたやうな喜びを感じてゐた。

「いや、わたしの企んだことぢやないんですよ。二百圓も叔父さんから頂いちやお氣の毒ですから、矢崎にさう云つて中止させることにしました。……わたしは今、新橋のあるカツフエーで矢崎と晩餐を一しよに食べてゐるんです。此處で叔父さんの健康を祝して、御商賣の繁榮を祈らうと思ひますが、矢崎がゆすらうとした二百圓を帳消しにしたかはりに、その一割でもよろしいから、我々の晩餐代に寄附して頂へませんか」

「二十圓寄附しろつて。呆れた奴だな」隆吉はさう云つたが、ふと寛かな氣持になつて笑ひを洩らして、「よし。どうせお前なぞに掛合ひをつけられたのを因果だと思つて、そのくらゐな金は寄附してもいゝよ」

「どうも有難う。……ぢや、早速使に持つて來させて頂けませんか」

喜代造は、××軒といふ自分達の居場所を知らせた。

「ぢや、金はおれの厄落として早速屆けることにしようが、お前は當分此方へは遊びに來ないんだね」

「今朝電話でお知らせした通りですよ。わたしの身の上は昨今危險狀態に陷つてゐて、そちらへは近づけなくなつたんです。矢崎は事情をよく知つてゐますがね。……叔父さんも用心していらつしやい。わたしと同姓の奧野だから、人間違ひをされて飛んでもない目に會はされることがないとも限りませんよ」

「脅かしちやいかんよ。二十代のお前と四十代のおれとが、人に見違へられる譯はないぢやないか」

「間違へられなければ結構です。わたしは萬一を心配して御注意したゞけです。昨夕も叔父さんをわたしと間違へて押掛けて行つた人があるといふぢやありませんか」

「脅かしちやいかんよ。お前と間違へられて監禁されたりしちやたまらないよ」

「ハヽヽとに角東京驛ではわたしを待伏せしてゐるものがあるんだから。叔父さんも用心していらつしやい。……ちや、お使を直ぐに寄越して下さい。待つてゐますよ」

喜代造はさう云つて電話を切つた。隆吉は約束を守つて、直ぐにボーイを呼んで、使に金を屆けさせるやうに命じた。これで不快な出來事に一段落をつけて、自分の用事に身を入れようとして、一二軒關係のある所へ電話を掛けたりしてゐたが、そこへ、黑川が單衣に兵子帶の寛やかな部屋着に着替えて、疲れた顏して入つて來た。隆吉は、折角氣持を取直したところへ、不吉な人間に訪づれられたやうに感じたが、努めて機嫌よく裝つて、

「今日は暑う御座んしたな」

「暑さも暑いし、今日はひどく弱りましたよ。按摩にでも揉ませて、ぐつすり眠りたいと思ひますが、ホテルはいけま

せんな」

「御用事はどうした?。うまく話が運びましたか」

「わたしどもの用事は、手紙でゞも間に合ふくらゐな簡單なことなんです」

「ぢや、今夜は早くおやすみになるんですか」

「えゝ。今湯を立てるやうに、ボーイに吩咐けときましたから、これから一風呂浴びて寢床へ入りませう。暑さと疲れで食慾もありませんから、數寄屋橋の更科へ寄つて、蕎麥を一杯たべて來ました」

「割に胃腸の强いわたしどもでも、日に三度の洋食では閉口しますからね」

「實は何ですよ」黑川は、長くのびた小指の爪で耳糞をほじくりながら、「折角東京へ來たのだから、今夜あたり帝劇か歌舞伎を觀るつもりにしてゐたんですが、とてもそんな浮いた氣持にはなれなくなりました」

「なぜです?。わたしも暇が出來たら、一晩芝居へおつき合ひしてもよろしいんですが」

「あなたがいらつしやるのなら、わたしもお伴いたしませう」黑川は隆吉の空お世辭を眞面目に受入れて、やゝ元氣づいたやうに云つて、「昨夕あなたにお目に掛つてから、一人で芝居見物なぞする氣はスツカリなくなりました。喜代造さんの仰有る通りです」

「喜代造の云つたことですつて?」

「眞夜中の東京驛は墓場に違ひありません」

「そんなことをあなたはまだ考へていらつしやるんですか」隆吉は笑つたが、自分でもいくらかそんな感じがしてゐたのであつた。

「『東京驛ばかりぢやありませんね。今日更科へ行く途中に外から見ましたが、帝劇だつて、夜中には墓場見たいなものでせう。丸ビルだつてさうです。一時は大勢が寄集つて笑つたり騒いだりごたごたした事務を取つたりしたあとの西洋館は墓場なんですね。……このホテルだつてまあそんなものでせうが、』

「ぢや、わたしどもは墓場に入つてる譯なんだが、さう思ふと、あまりいゝ氣持はいたしませんね。……」

「ハヽヽ。でも、よく眠れゝば墓場だつて結構でさあ。」黑川はだるさうな聲で云つて、「今朝は仙次郎のことで詰らないことをお話しましたが、あの話はあの場きりの座興にしてお聞流しにして下さい。わたしが仙次郎に難癖をつけてるやうに、世間の人に思はれちやいけません。どうせ墓場へ持つて行けるものでないとすると、わたしの所有物は氣持よくあの子に譲るのが正當なんですからね。」

「さうですとも」

隆吉が相槌を打つと、黑川は、昨夕からことに頭に蟠まつてゐる養子仙次郎のことについて、もつと何かと話をして鬱憤を晴らさうとしたが、そこへ、ボーイが浴室の仕度の出來たことを知らせて來たので、後刻を約して出て行つた。

隆吉は黑川を避けようとした。そして、今夜も何處かシャレた家の風呂へ入つて、アッサリした料理で一酌を傾けようとしたが、平野が松田を連れて來る約束があるので外出する譯に行かなかつた

うまくもない食堂の洋食を腹へ詰込んで晩餐を濟まして待つてゐると、豫定の時刻に訪ねて來たのは意外にも平野一人であつた。

「松田君は?」と、隆吉は戶口の方へ目をつけた。

「實はどうも申譯のないことになりまして」と、平野は疲れた顏に當惑の色を浮べて、「さつき松田に伺ひますと、スッ

かり話が變つてるので驚きました。二枚舌を使はれるやうなので、隨分詰問してやりましたが、ある止むを得ない事情が急に出來たので、東京を離れる譯には行かない、與野さんのお店へは當分奉公する譯には行かなくなつたから、よろしくお詫びをして呉れと云つて、わたしが口を酸つぱくして說きつけても聞入れません。あの男は旋毛まがりですが、一旦承知したことを、大した理由のないのに變心するやうな無責任な男ぢやなかつたんです。……わたくしにはどうも腑に落ちません。止むを得ない事情を打明けて呉れないので、理由がよく分りませんが、今日になつて出抜けに、何か異つた事が出來たのでせう。…お蔭でわたしの顏が丸潰れで、これからあなたの前で大きな口を利けなくなりました」

「いや、あなたこそいろ〳〵骨を折つて下すつたのに、事が纏らなくつてお氣の毒です。當人がいやだと云ふものは爲方がありませんよ。わたしは諦めて、別の方を搜しませう」

隆吉は事もなげに云つた。

「さう諦めて頂ければわたくしも助かります。自分でお勸めして自分で取消しに伺ふなんて、隨分器量の惡い話なんで……」

「世の中の取引は、さうキチン〳〵と豫定通りに運ぶものぢやないでせう」

隆吉は快活にさう云つて、話題を外へ轉じた。平野は、隆吉がこれに懲りないで、自分に撰擇を任せて呉れゝば、松田以外の適任者を搜してもいゝと申出たが、隆吉は、それを他日に讓つて、自分が一先づ歸阪して方針を考へる事にした。

「しかし、平野さん。迷信のやうだが、人間には運のよい日と惡い日があるんです。今日はわたしのためにはひどい惡日でしたよ。朝からいやなことばかり續いてゐますよ」

「恐れ入ります。わたくしのためにも今日は非常に惡日でした」

平野はそんなことを云つて、暫くして出て行つた。隆吉は寢るには早いし、遊びに出る氣にもなれなかつたので、うか〳〵と廻廊へ出て驛の構内を見てゐたが、すると平野が彼れよりも少し年下らしい男と何か話しながら連立つて改札口を出てゐるのが、ふと目についた。その男の姿形が何となく松田らしく思はれた。「これは可笑しい」と、今まで信用し切つてゐた平野に對してある疑ひを起したが、疑ひを起す間もなく同じ改札口に近づいてゐる丸髷に結つた意氣な女の横顔に心が取られた。連れの小娘を振返つたところをよく見ると、それは、此間うちよく呼んでゐた藝者であつた。

「かういふことが見られるから、喜代造の云ふやうに東京驛が面白いんだな」と感心しながら、また新たなものを見つけるつもりで構内を捜してゐると、ボーイが後から聲を掛けて、名刺を突出した。

「辻本養一」……聞いたことのあるやうな名前だと首をひねるとゝも、思出したのは、昨夕不在中に置いて行かれた名刺であつた。

「部屋へ通して置いて呉れ」と云つて、ボーイを見て、「君はおれが此處にゐることがどうして分つた？」と訊ねた。

ボーイは微笑を洩らして、「たび〳〵こちらへお出掛けになつていらつしやいますから」

「さうか」

隆吉は不快に感じた。この奇怪な訪問客をどう取扱つてやらうかと案じながら、少し間を置いて、つとめて重味のある態度を裝つて、自分の部屋へ入つた。客は無論面識のない男であつた。

「どういふ御用でいらつしやつた？　わたしは與野隆吉です」と、貫目をつけた口調で云つて、相手が人違ひに氣づくかと見てゐたが、

「あなたが與野喜代造さんの叔父さんだと承はりましたので、此方へいらつしやるのをいゝ機會に、ちよつとお耳に入れたいことが御座いましてお伺ひしました」

「さうですか。あなたは喜代造の友人でいらつしやるんですか」

「いや、わたしは一度もあの方にはお目に掛つたことは御座いません。わたしの親戚の婦人があの方に御懇意にして頂いてゐますので……」

「それで……」隆吉は矢崎の話から推して、不吉な事が連想されて、胸を騒がせた。

「それについて與野さんの御一族の代表者として御意見を伺ひたいと思ひまして」

「どういふことか知りませんが、わたしは甥には以前から迷惑を掛けられてゐますので、近年あれのしたことには一切關係をつけないことにしてゐます。あれはわたしどもとは反の合はない非常識な男です。そのつもりでお話をなすつて下さい」

隆吉は豫防線を張るやうにさう云つたが、言葉は震えて、嚴めしさうにしてゐた顏にも恐怖の影が差してゐた。それに氣づいた客の辻本は、不思議に思つてジロジロ相手の顏を見て、

「喜代造さんはそんな非常識な方なんでせうか」

「わたしはあの男のしたことについて責任を負ふことは一切御免を蒙ります。」

「さう仰有るとお話のいたしようも御座いませんが……」辻本は隆吉の譯の分らない不機嫌さに恐れをなして、ふと立上つて「突然お邪魔をいたしましたが、さういふことなら、わたしは何も申上げないでお暇いたしませう。外のものが改めてお伺ひするかも知れませんが」と、オヅオヅ云つて、急ぎ足で出て行つた。

何を云出しやがるかと思つたら、これで助かつたと、隆吉は一ときの安心をして、ボーイを呼んで、「今夜は誰れが

來ても留守だと云へ」と吩咐けて、戸口に堅く鍵をおろして寢床に就いた。電話の受話器も外して置いた。

（五）

「叔父を無用な苦しみから解放させてやらう。」喜代藏はさう思つて、夜が可成り更けてから、電車で丸ノ内へ向つて、無斷でホテルの階段を上つて、隆吉の部屋の戸を叩いた。手應へがないので、ボーイに譯を訊いたが、果して眠つてゐるのかと疑ひながらも　强いて戸を開けさせるのは躊躇された。それで、一先づそこを離れて、驛の廻廊の方へ歩んだ。上から見下すと、不斷構内の雜沓の中にまじつてあたりを見てゐるのとは違つた趣きがあつた。

「最後の下關直行の出るのに間のないほどあつて　場内の人影がよつぽど稀薄になつた。今夜はみんなが大人しい。瘦せつぽちの老女の前でピョコ／＼お時儀をしながら笑顏で何か云つてゐる巨大な男子の格好がポンチ繪のやうで可笑しく思はれるくらゐで、外には注目に價ひするものはなかつた。此處に散らかつてゐる男女があの改札口へ吸込まれると、あとはガラン洞になるのだと思つて見てゐると、彼れがこの頃此處で見續けて來て　ときれ／＼の印象の殘つてゐる老若男女が、墓のあなたへ行つた亡靈のやうになつて浮んで來た。

　東京驛をうろついてゐる不良の徒として附狙はれてゐるといふある注意をも忘れて、彼れは、最終列車の出たあとで、構内へ下りて行つて、亡靈どもの跡を弔はうかと思ひながら、靜かに廻廊をぶらついてゐると、寢衣姿の黑川が向うからやつて來るのに出くはした。何處の誰れか知らない人なのだが、先日構内で見つけて、ある印象の殘つてゐる亡靈の一人であつた。………トボ／＼した足取りで、折鞄を抱へて改札口を出て來たが、何か考へてゐるらしく目を他所へつけてゐたので、後から勢ひよくやつて來る男に壓しつけられて、改札口の側でぶつ倒れたあの人だ。

さう思つて見てゐると、先方でも此方へ目をつけた。

「今夜は大分蒸しますね」黒川は言譯らしく云つて、「あなたはこのホテルに泊つていらつしやるんですか」と訊いた、

喜代藏は、餘計なことを訊く奴だと、むしろ氣味惡く感じて、「さうぢやありません」と答へた。そして、側を離れてホテルの方へ行きかけると　黒川も後から隨いて來た。喜代藏が隆吉の部屋の前に立つて、駄目だと知りながら、扉を叩くと、黒川もそこへ足を留めて、

「あなたは與野さんを訪ねていらつしやつたんですか」と、訊ねた。

「さうです」

「ぢやあなたは與野さんの甥御の喜代造さんですね」

「えゝ」喜代造は訝しげに相手の顔を見上げた。

「さつきから、さうぢやないかと思つてゐました。あなたのお噂は、與野さんからよく承つてゐますよ。與野さんは今夜は客をお斷りになつてゐるさうですから、急用がおありになるのでなければ、わたしの部屋で遊んでいらつしやい」

「有難う」

喜代造は、相手を薄つ氣味の惡い變な男だと思つたが、改札口で倒れた、記憶に馴染のある老人だと思ふと、興味も惹かれたので、黒川の親しみのある誘ひに乘つてその部屋へ隨いて行つた。

「叔父さんもいろ／＼な御用事でお疲れになつてるんでせう。今夜はよくおやすみになつてるやうですから、睡りをお妨げにならない方がよろしい」

「いや、叔父はいやな夢を見て魘されてゐるかも知れませんよ」

「どうしてです？。魘されるのはわたしのことで、叔父さんはいゝ夢を見ていらつしやるでせう」

黒川は、榮一と同年輩の喜代造に向つて愚痴を洩らしかけてゐたが、そこへ、ノックの前觸れもなしに、隆吉が氣無性な顔して入つて來た。嬲いたのは二人よりも隆吉であつた。

「オヽ。お前が來てゐたのか。お前は何しに來た」と、詰問的口調で訊いた。

「昨夕あなたにお目に掛つた處で、喜代造さんにお目に掛つたのです」と、黒川が云つた。

隆吉は甥の方ばかり見たがら、「お前は東京驛の方へは、危險だから當分寄りつかないと云つてゐたぢやないか。いゝ加減な嘘を吐いておれを脅かしたのだな。それで辻本とか矢崎とかいふ碌でもない奴と共謀になつて、おれをゆすらうとするのか」

「ハヽヽヽ」と、喜代造が陽氣に笑つたので、老いたる二人は呆氣に取られた。

「叔父さんのやうな實際家でも、こんな大都會の眞中で寢起きしていらつしやるから、神經を患つて、いろ〳〵な亡靈に襲はれるんですね。昨日偶然、久振りでお目に掛つて、叔父さんでさへわたし達と同じやうな神經を持つていらつしやるのを感じたんですが、わたしは大して惡戯をした譯ぢやありません。お蔭で事務家の本心をいくらか知つて、長い間粗遠にしてゐた叔父さんに親愛を感じるやうになつたんですよ。わたしのやうな空想家のへボ詩人と同一されるのは、叔父さんも却つて御迷惑に思ひなさるでせうか。……だけど、叔父さん、御安心なさい。さつき矢崎から聞いたのですが、辻本とか栗村とかいふ、叔父さんを脅かした名刺の主は、惡意があつて、叔父さんの不在中に名刺を置いて行つたんぢやありませんよ」

「辻本といふ男には、さつき、宵の中におれの部屋で會つたのだ。」

「それはわたしの知らないことです。どんなことを云つてゐました？」

「おれが直かに會つたのだから、お前も言拔けは出來まい。お前とある女との關係を云つてゐたよ」

「ハヽヽヽ」喜代造は再び快活に笑つて、「それぢや叔父さんにも事情がよく分つたでせうのに。……ぢや、矢崎が云つてたやうに、辻本といふ人が、緣談の交渉に來たんですね。先方の身內はわたしに見込をつけて緣談を纏めたいと云つてるさうですから。……それで、叔父さんはどんな御返事をなすつたんです？」

「緣談？。そんなことはおれは聞きやしないよ」隆吉は意外に感じた。

「お聞きにならなきや、それでもいゝんですよ。わたしは、あの女との關係について、叔父さんのお世話にならうと思つてやしませんから。…わたしが監禁されたことも、ある料理で拂ひが少し不足して、金策の出來るまで禁足されただけのことです。叔父さんがさう恐れなさる必要はないんですよ。……叔父さんはビクビクしないで、今まで通りに金儲を熱心におやりなさい」

「そんなことはお前に意見されるには及ばないよ。おれは今度は商賣上でいろいろな手ちがひをした。」

「それがわたしのやうな不肖な甥を持つたゝめだといふんですか」

「さうかも知ない…」

隆吉は陰欝になつた。喜代造は昨夜以來叔父の心を亂したのは、多少は自分の惡戲の結果であると信じてゐたが、今、その無用な苦しみから解放させるつもりだつたのに、その解放が豫期の如く手易く行かないらしいので意外に感じた。

「喜代造さんはお若くつて御元氣だからよろしい。」

黑川がふと眠つたさうな聲で云つたので、二人は話の穗先を削がれた。

「よつぽど遲いやうですからわたしはもうお暇をしませう」と云つて、喜代造は、黒川が引留めるのをも、隆吉が何か心殘りがあるらしい顏付をしてゐるのをも振切つて出て行つた。

外へ出ると、次第に更けて行く都會の夜の音に、彼れは耳を傾けながら、例になく叔父に甘へた一日のことを考へて苦笑して、

「明日からまた疎遠だ」と、自分の心に言譯するやうに呟いた。

ホテルの二人は、喜代造の出たあと、氣拔けのしたやうな顏して、差向ひでじつとしてゐた。

「大分ヒツソリして來ましたね。おやすみになりますか」

「起きてゐても爲方がないから寢なければなりますまい」

「詰らないことに拘はつて、わたしも馬鹿を見ました。明日は今日の取りかへしに飛廻はらにやなりません」

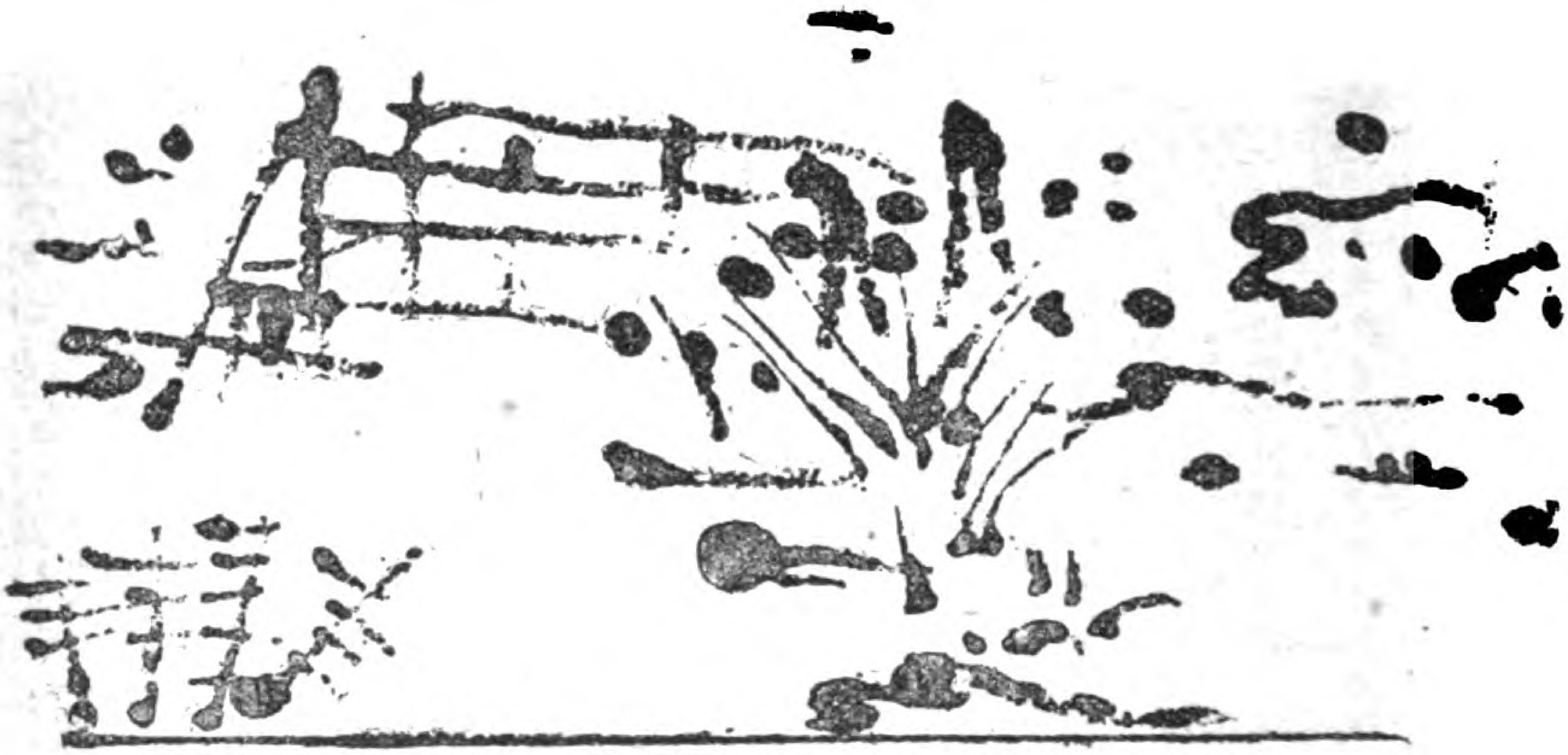
「それは結構です。わたしは用事はあらまし片付きましたから、歸らうと思へば明日にも歸つてよろしいんですが、まあ、當分こちらにゐることにしませう」

眠りづらいこんな部屋がどこかよくつてと、その譯を隆吉は訊かうとしたが、うつかり水を向けようなら、濕つぽい愚痴を留度なく聞かさうな氣がしたので、出かゝつた口を閉ぢた。

「でも、よく見ると喜代造さんは顏立があなたによく似ていらつしやる。わたしの家の仙次郎はわたしにちつとも似てゐません」

「間違へられなくつてよろしいでせう」

隆吉も黒川も一しよに生欠伸を洩らした。



雨後

中條百合子

（一）

電車が九段坂とお濠との間の狹い軌道を、のろ〳〵ブレーキをかけて下り始めた。三分の一ばかり進んだ時、彼方から手に赤旗を持つた男が小走りに駈けて來た。運轉手に向つて何か叫んだ。運轉手は、いそぎ兩手で更に强くブレーキを締めた。電車はいやな音響を立て乍ら、勾配の急な坂路の不安定な位置に停つた。

「何だ、どうしたんだ」

車掌が、下りて行つた。數人の男がざわめいて窓から無理に前方を覗かうとした。

「爆破作業の爲、卅分停車いたしまァす」

「――なあんだ」

と、氣色ばんだ男は當がはづれたやうに席に復した。

車内は、一時森とした。軈てぽつ〳〵話聲が起つた。關東に大震災があつてから

一ケ月餘經つて居たが、東京人はまだ當時の亢奮からすつかり回復して居なかつた。人が寄り集ると火の手の工合だの、逃げ路の相談などをせずに居られなかつた餘勢で、お喋りになつて居た。纒りない雜談が、見も知らぬ乘客同志の間に交はされ始めたのだが、中で一際高い男の嗄れ聲が仲子の注意を牽いた。其男は、明日公判のある甘粕の行爲を、日本男子の龜鑑だと極力賞揚して居るのであつた。ひどく挑戰的な憎々しい調子で、熾に社會主義者はどし／＼殺しちまへと云つて居る。露骨な故意とらしさを不快に感じるのは仲子ばかりでないらしかつた。彼女の前に居た若者は、無視しようとしても耳に這入る文句に焦々し、靴の爪先をばた／＼やつて居たが、遂にくるりと窓を向いて濠を見下し乍ら、トラヴアトウレのジプシーの唄を口笛で吹き出した。晴れた十月午後の日光が、神田一帶の平らな燒跡をかつと照して居る。

「――ちえつ」

やがて立つて居る仲子の背後で、舌打ちをする音がした。

「たまんねえな、根が生えちやうぜ」

仲子は時計を見た。成程もう卅分は充分經つて居た。

「ドカンて云はないうちやあ何分經たうが立往生だ。下りちやはう、何でもありやしねえよ、たつた三帳場ぐれえ」

空いた席に彼女は腰かけた。後の高い煉瓦崖にじり／＼反射する秋の日で、日除け扉を下した其方側はむつとする。隣に、ネクタイなしでソフトカラアに穢れた夏服をつけた薄禿の男が居た。左の手に手帳を持ち、短い鉛筆の先を舐めては、文章の推稿をして居た。講談本でも讀むやうに節をつけて、繰返し自分の書いた文をよんで居る。「一度肉體死するや、其靈魂は、遊行して――遊行して……と」そこで行つまり、更に始めから「ヒトタビ、ニクタイシスルヤ」と出

なほす。飽きず反撥して居る。——妙な反動主義の男は相手がないのでいつか靜になつた。

いきなり、ドドーンと地を震はせて爆音が轟いた。電車の窓硝子が一どきにビリ、とした。

「やつたな！」

待ちくたびれ、ぼんやりして居た乘客は俄に活氣づいて窓外を見た。半分燒け遺り、孤獨に突立つて居た煉瓦の大建築の横から、濛と黄色つぽい大きな煙が昇つた。續いてもう一つ爆音。悠々と立昇つた煙がまだ棚曳いて居る前の煙と重々しく合した。煙が散ると、先刻の高い建物は無くなつて居た。あとの空の廣さ、日の燦きがはつきり感じられた。雄大な寥しい光景である。不圖、女が泣き乍ら物を云ふやうな聲が仲子を驚かした。氣がつくと、彼女の隣に、卅五六の窶れた女房が包みを膝に抱へて腰かけて居た。ドドーンと爆音がした瞬間、その女は居たゝまれないやうにきよろつき、誰にといふ當もなく

「こゝに居て大丈夫でせうか、ね、大丈夫なんでせうか」

と口走つた。その聲が泣き乍ら唇を吸ひこんで喋るやうに響くのであつた。

「——拘さんが居らつしやるから大丈夫なんでせうが……」

然し、ドドーンと土煙が彼方に騰ると、彼女は再び怯え切り自制を失つた。

「あゝ、本當に大丈夫なんでせうか」

仲子は、自分まで悲しいやうな慘めな氣がした。

「大丈夫ですよ。あれはちやんと工兵が働いて仕て居るんだから——安心なさい」

猶二十分以上待ち、電車はやつと走り出した。

焼けた街の樣子が常軌を逸して居る通り、その街々を貫いて疾走するペイントの干割れたぼろ電車の乘客も、何處やら神經の均衡を失して居るのは確であつた。伸子はその裡で一人正氣であつたらうか。

（二）

七月下旬から、其年は佃の父の家に行つて彼女等は暮して居た。二人の心持は、片づかない儘持ちこして居た。烈しい議論をするだけの熱は互に失つて仕舞ひ、其かと云つて心氣一轉し調和的になつて居ると云ふのでもない。惑のほぐれない厭な狀態のまゝずる〳〵に日々が過ぎて行く。——其意識に時々猛烈に惱まされ、一人で泣きつゝ矢張りしやんとしたことは何一つ覺悟出來ない生活であつた。

佃の父の家は、裏日本の舊い村落の一つにあつた。狹い村道に面して、樫の木陰に二階家が建つて居る。下の座敷に佃が、村役場から借りて來た椅子卓子で仕事して居た。彼の仕事は、嘗て飜譯した波斯古代詩の語彙を作成することで、名刺位の大さに切つた厚紙のカードに、一字一字、原語、意義、文法上の格などを書きこむのであつた。其地方は水田が多いから夏は蒸暑かつた。佃は、ランニングでもするやうに白キヤラコの下着一枚で、根をつめ從つて不機嫌に一日机に向つて居る。

伸子は、上の二階に暮して居た。二階と云つても其處はちやんとした座敷ではなく謂はゞ屋根裏の廣い物置めいた場處であつた。天井は低く太い梁がむき出しに見えた。南北に一間づゝ、三尺の窓が切つてあり、下は板敷であつた。隅に、嫂が嫁入りの時持つて來た塗長持がある。北の窓よりに、琉球表の疊が五枚敷き並べてあつた。伸子は其處に一つ古机を運び上げた。短い午前中は北に向いて仕事をし、午後は机ごと南に向き換る。光線の工合や、暑さの點から云へ

ばこれは逆であつたが、北窓の直ぐ近くには一本の大樫の木が梢を繁らせて居た。その樫の木に何とも喧しい蟬が毎日午頃になるとやつて來た。東京で彼女はオーシイツクツクやミーンミーン鳴く蟬はきゝ馴れて居たが、村の蟬には敵はなかつた。其は、何處かの枝に納つて一旦ジーと鳴き出したら、抑揚も絕間もなく氣狂ひがむきになつたやうにジージーと一本調子に鳴き續けるのだ。耳が聾になり此方の氣まで如何うかなる程であつた。其故、眩しく障子を迚も開け放てないので汗が流れる南を向いて、伸子は拵へものゝ小說をこつ／＼書いて居た。出來上れば田舍新聞に載る筈であつた。春頃佃の本をかりて讀んで居たうちに、彼女は一つ物語の材料を見つけた。ルスタムが主人公で、危くお伽噺か新講談になりさうなものではあつたが、自分の生活に自信をまるきり失つて居た伸子は、自分に即したことでなど何も書けなかつた。夫婦の歪んだいきさつについてたゞ繰返し繰返し、一種の偏執狂のやうに苦しむのはもう澤山であつた。氣を紛らし、斯うして自分の日常とまるで關係ないシャーナーマの英雄でも書いて居るうちに何とか行手に向つて心が開けまいものでもあるまい。——彼女は執拗に全力をつくして有史以前の傳說の波斯に空想を打ち込んで居たのであつた。

八月卅一日は殊更暑かつた。そよりと風もなく、伸子の二階の窓から見渡すと、青田の上に暑熱が靄となつて立ち罩めて居た。朝からさうで、日沒頃夕立があつた。白雨に洗はれた後の自然の麗はしさ、清らかさ！遠方の小川の堤に樫の木の行列があつた。驟雨が去ると一緖に急に高く澄んだ空にはまだ雨雲の小さい斷れはしが漂ひ、それが夕日で薔薇色に耀いて居る。下で、その堤の樫は、滴る綠の梢を震はす、森とし、敏感に聽こくなつた萬物に水を吸つた草鞋の音を高く響かせ乍ら、老人が歸つて來た。彼は、伸子の南向の庇に日除けに使ふようにと云つて、澤山の青蘆を刈つて來て呉れた。

瑞々しく太い蔽を一寸位の厚さにずつと敷き並べたので、瓦の焼けるほとぼりは大分樂になつた。けれども、今日から九月に入つたとは信じられぬ暑さだ。二階に人は來ないので、仲子は、古ぼけた母のお古の透綾を着、兵兒帶をしめて机に向つて居た。不圖、不用な障子を立てかけてある板敷の奥で、カサ〱、鼠が動いて居るらしい音がした。彼女が丸めては疊の彼方此方に放つたき丶にして置く原稿紙を啣へ込んで居るらしい。巣を作られては困ると、仲子は拔足をして其方に行つて見た。障子紙は煤け、床に埃が溜つて居る。陰で矢張り音はして居るが、羽目の彼方なのか、其とも窓の用心籠の裏なのか。何か長い物はないかと、仲子が屋根裏ぢゆうを見廻した時であつた。グラ〱と地震が感じられた。仲子は立つた儀居ようとした。が搖れは烈しく、乾燥した建物がギシ〱と軋む音がした。彼女は本能的に階子口迄出たが、階子は田舎の裏板の張つてない段々なので、グラ〱する度後から足がこぼれさうで降りられない。階子下に佃の顔がひよいと出た。

「大丈夫、大丈夫。凝つとしておいで」

軈て階下に降りると、丁度晝に上つて來て居た老人も兒も、澁塗りの椽側に突立つて外を見て居た。

「えらう搖りよつたなあ、近頃に珍しい地震ぢや」

まだ樹木が根から傳つて來た動搖を鎭めず、狹い前栽の暗い巖の上に青い楓が不安にさわめいて居た。晝飯を食べて居る間にも、三時頃になつても、輕い搖りかへしが度々あつた。

二日の晩　いつものやうに仲子は葡萄棚の下の涼臺に出てゐた。荒莚の上に座布團を敷き、荒繩でく丶つた丸太の支柱のところに老人が胡坐をかいて居た。臺處口に出した電燈の光で、ぼんやり彼の浴衣と白髯が見えた。佃が、蚊遣りを吹いた。煙が重なつた葡萄の葉の間に昇つて消える。

「こりや今年の殘暑はきついのう。えらい稲妻ちや　ほ、ほ、いかい光りよる」

白山山脈の上空で、赤い大きい稲妻がして居た。陰暗に間歇的に赤い焔が空を劈くと、連山の嶺がぱつと黒くくつきりと照し出され、消えた。

九時近くなつて、手車の音が往還に聞えた。

「ほら、父さんお歸りだぞ、行つて見や」

總領の十二の男の子が凉臺を跳び下り村街道へかけて行つた。兄が暮方から、二里ばかり隔つた市へ出かけて居たのであつた。

「えゝ水瓜があつたろかのう」

どつこい、と、老人が凉臺から片脚下しかけたところへ、大股に兄が入つて來た。

「やあ御苦勞さん」

「——えらいこつちや!」

兄は背の高い人であつた。それが、菅笠を刎ね、づか〳〵と皆の前に歩み進んで來「えらいこつちや」と云つた氣組み、何か平常と異るものを感じる。一同が覺えず其方を見た。

「なんぢやの」

「東京がえらいこつちや。號外とつて來たが——どえらいことになつたもんぢや」

佃が、のり出した。

「地震か?」

「うん――そこへ火事で。全滅ぢやさうな。本當なら話にならん。途方もないこつちや」

「何處かやられてゐると思つたんだ」

憤つたやうな聲で仙は云ひ乍ら、老人の手に渡つた號外を讀み始めた。嫂のみさが、御歯黑をした口元をおろ〳〵させ、仲子に顏をすりよせた。

「まあどうしましよ。可怖やの、本當やろか」

「一寸拜見」

仲子は、號外を讀んだが、どうも東京全滅といふ、全部が本氣にされなかつた。海上ビルディングや丸の内ビルディングが崩壞し、内に居た數萬人は全滅の見込み。市中到る處から擧つた火の手は三越、白木屋等を始め目貫の場所を一舐めにした後八方に延燒し、瓦斯管の爆發によつて一層煽られた火の手は高崎から見える。宮城類燒、、、、、、死屍累々。×××××衞不明。交通、通信全く斷絕。大阪電話としてあつた。

暫く物を云ふ者がなかつた。やゝあつて仙が

「――大分大袈裟に書いてあるらしいな」

と云つた。

「さうぢやろ?」

良助が、やつと首のところに引かけて來た笠の紐をほどき乍ら應へた。

「儂も號外一目見た時、はゝあ此あ大分割引きして聽かにやならんと思ふた。けどが妙なもんぢやのう、悠くり歩いて來るつもりが自然と前のめりに速うなつて、何やら膝つ株が變ぢや」

みさは、良助について台所へ入つた。京台に遺つた三人は深く動かされた各々の感情で再び號外をとり上げた。號外につきものの誇張をすつかり割引して考へるとしても、伸子は東京の阿鼻叫喚が微に聞えるやうな心持がした。周圍が暗いのに、東京だけがボン〳〵篝のやうに明るく燃えて居るのが見えるやうな氣持もする。彼女は胸板を引剝がされるやうな苦痛を感じた。

「けどがまあこうしてお前等二人が此方にお居でて何よりのこつちやつた。さもなければ、どえらい心配せんならん」

佃がそれに答へず、伸子を顧みた。

「――會社はどうだらう」

「佐々さんの會社か？」

「えゝ、丸の内にあるんだが……」

老人は、狼狽した眼付を伸子に向けた。

「ほほう、そりや心配なこつちや、――丸の内か！」

「――この號外だけぢやまだ何も判らないわ」

伸子は辛うじて平靜を保つた返事を、老人は劬りのこもつた調子で裏づけた。

「さうとも！明日まで待てばもつと詳細がわかる。それまで餘り心配せんとおおきるがえゝ」

翌日、佃は東京に持つて歸る罐詰買ひ出しに市まで行つた。爐邊に、近所の細君が二三人見舞に來て居る樣子であつた。

亢奮した其等の聲を耳にしつゝ十一日の十一時五十八分に、父が何處に居たらうか、伸子は堪え難い氣持で考へてゐ

た。會社は崩れまい。—子供の時分から見馴れた會社のがつしり古風な建物を頭に描くと、無理なくその確信だけは抱けた。會社内に居たら必ず安全であつたらう。頭の上に懸つて居た大額が墜落したとか、瓦斯管爆破で窒息したとかいふ突發事がない限り。けれども、佐々は平常から、會社の外に居る方が多い人であつた。晝餐に何處へか招待されて居たかもしれず、所用で崩れたビルディングのどの一つかに偶然歩み込んだところであつたかもしれない。父は無事であらうか。

和一郎がその夏休みは、小田原に行つて居た。被害は其地方にも烈しいと號外にあつたが、仲子は、彼については動坂に殘つて居た保と共に、ぼんやり安心な豫感を持つた。父だけが心懸りであつた。この遠方でこのやうに思ひ煩ふのは無駄と知るが、切なく、心が落付かない。仲子は、仕舞ひに迷信的な一つの氣休めを見つけた。昔からよく親しい愛情を互に持ち合つて居る人間の何方か一方が死ぬ時は、生き殘つた方に死ぬ者の姿や聲や、何か暗示になる現象が現れると云はれて居る。考へて見れば、人間の心のことだから、まるで嘘の噺とは思へない。一日の晩、自分は東京にどんな地震があつたかも知らず、極めて自然な氣持で床についた。萬一、父がその日不慮の死を遂げた程の不幸が起つて居たら、夢でか現でか愛されて居た娘である自分に知らせのないといふ事はなかつたらう。然し、事實自分は極めて樂にのび〳〵一つの厭な夢さへ見ずに朝まで眠り通した。——仲子は、「何、大丈夫、大丈夫」と呟き乍ら二階を歩き廻つた。全く大丈夫だといふ氣もする。が、と思ひかへすと堪らなくなり、彼女は泣き出したいのを辛棒するに自分の拳固を嚙んだ。

彼女等は、翌日大宮までの切符を買ひ信越廻りの線で東京に向つた。救護隊でどの列車も溢れて居た。神經過敏にざわめき立つた雰圍氣でのそ〳〵列車が手さぐりで東京に近づく。偶々置かれた自分達の位置を悲しく苦々しく思ふ度

が、刻々伸子の内心で増した。歸つて見て父が死んででも居たら、彼女は自分を偶然と云ひながら父の居る土地から引離した佃を迚も有難いとは思へないと思つた。父が死に自分の遭つたのを天の配劑だ嬉しいとは感じられない、父を一人で死なせたのがいたはしく、自分が東京に居なかつたばかりにといふ氣が仕さうなこと、其は想つても辛い。東京に居たとしても、あの日伸子は何處に居たか判らず、十中九分九厘父の會社などに居なかつたらうことは明白であつた。冷靜に理屈を追へば、つまり居ても居ないでも同然だ。けれど——佃との生活を愛しよろこび、そして一緒に旅行して居たのなら又自分の氣持は違つたゞらうと伸子は考へた。彼女は、早晩壞たれることが目に見えて居乍ら夫婦の惰力で佃に引摺られて行つたうちに其那不幸に會つたのでは遣り切れないと感じるのであつた。諸共命を完うしてよかつたと佃は感じるだらう。其が自然であるのはわかつて居たが、伸子は彼と一つ心で動けさうもなかつた。彼が心で先づ助つたと感じるその安堵を自分は憎むだらう。心の上で佃から益々離れるばかりだ。結果は父と佃と二人を一時に失ふことになる。生活の上で感傷的で愚闇な自分への天罰はこれか、と伸子は恐れを以て思つた。

川口の鐵橋が修繕され始めて伸子の乘つた列車が通過した。田端驛の灯のないブリッジの兩側に、ごろ〳〵夥しい罹災者が轉つて寢て居た。その生活力を失つて重り合つた姿が死人のやうに見え、伸子はぞつとした。動坂を登り、左に折れると其邊の家は大抵ちやんとして居る。嬉しさ可恐さ、伸子は口が利けず電燈の灯つた夜の街を行くと、植木屋の生垣の隣りに、ぽつつり佐々の門燈が輝いて居るのが目に入つた。伸子は吸ひつくやうに眼でそれを見た。門柱の下に一つ椅子が出て居、男が腰かけて居る。背後から光線を浴び、もつくりした肩の邊が父そつくりだ。伸子は體ごと投げかけるやうに駈け出した。

「父樣？——そこに居らつしやるの父樣？」

立ち上ると、それは書生であつた。マントを片手で脱ぎ乍ら、彼は睡眠不足で窶れた顔を默つて下げた。
「父様は？」
「いらつしやいます」
仲子は眼の中が熱く熱くなつた。
「皆は？」
書生が返事をしないうち敷石にカタ〳〵下駄の齒を鳴して女中が出て來た。
「――石田さん、一寸………」
門外をすかすやうにし、立つて居る仲子達を認めると、とよは
「まあ！　御歸りになつた！」
と泣くやうな聲を擧げかけつけて來た彼女は、仲子の手に確りつらまつた。
「どうした？」
「やつと命をつないで居るばかりでございますのよ」
父は、西洋間に居た。

（三）

當座のごた〳〵が鎭り、九月下旬には夏休みから引續き田舍に滯在して居た母や艶子が歸京した。秋になつた。蠅の多い秋で、菊が凋れても日の當る椽側の障子などには、澤山の蠅が微かな音を立てゝ這つて居た。翔ぶ力も失つて居な

がら冬まで執着をもつて生きさうであつた。仲子は例年と違ひ其が氣味惡く何だか酸鼻に思へた。震災で燒け死んだ人の魂が來て居るやうであつた。

地震の時、部屋の砂壁が皆剝げ落ちた。後を、佃が間に合はせの壁紙で繕つた。鼠色の壁紙の工合で、今まで暗く引込んで見えた地袋の上など午後の光線で明るく廣々せり出して見える。何處となく荒れた部屋の本棚の前に坐つて、仲子は編物をして居た。松の梢と前の家々の庇間に、狹く深く表通りまでつきぬけて空が眺められた。時々例の蠅が障子紙の上でカサ〳〵いふのが耳立つ。――張りつめた心持で東京へ歸つて來て以來、仲子は落付くにつれ益々自分の氣持が幾分變つたのを感じた。その自覺はさうやつて座つて居る間にもぼんやり身內に感じられる。何がどう變化したのであらう。

生活に行き詰りを感じて居たやうな人にとつて、震災が却つて生きる刺戟と逆轉した實例を仲子は其頃ちよく〳〵聞いた。時にとつて非常に必要な精神上の一押しに天災が役立つた譯だが、仲子の場合ではさうも云へないやうな有樣であつた。境遇的に云へば、彼女は震災を悉く間接に受けた。而も周圍の刺戟に影響されたと云へば――それは他の人々のやうに內に缺乏して居た者が何の形をとつてゞも外から加つたといふより、寧ろ內に既に在つたものが、外からのものと相呼應してはつきり浮び上つたといふ方が適當らしい。浮び上つたものは餘り纏つたものでない。然し、その一つ、例へば一昨日佃とした喧嘩にしろ、と仲子は思ひ起した。

一昨日は日曜日であつた。朝飯をしまふと佃が

「そこいらで壁に貼る紙を買つて來てくれないか」

と云つた。

「素人ぢや無理でせう、今になほして來てよ」

「やつて仕舞はふ――でも」

仲子は、佃が拵へた色の紙と糊とを貰つて來た、あぶなかしい經師屋が始まつた。疊に新聞紙を敷き、踏臺に乘り仲子が糊をはきつけた紙をつまんで渡すのを、佃が破れた壁に貼りつける。午後ぢゆう其仕事をした。仲子は直き厭になつた。彼女は一日其那ことだけでせか〳〵潰して仕舞ふのがいやなのであつた。四時頃

「もう今日はこれだけにして置かない？」

と二三度云つた。佃は、先に庭先へセメントの池を拵へた時もさうであつたが、働くのを程々にやめるといふ事が出來ない人であつた。やり出すと、自分も傍の人間もうんざり仕切るまで頑張つてやる。その傳であつた。すると、門が開き、敷石を靴で來る跫音がした。仲子は糊刷毛を手に持つたまゝ耳を澄した。

「――御免なさい」

仲子は、其聲を聞くと傍に糊をといてあつた丸盆を飛び越え乍ら玄關に出た。

「姉さん居る？」

「居るとも！」

「やあ」

和一郎が來たのであつた。和一郎は九月一日、小田原から鎌倉に行き、五日まで生死不明であつた。中旬になつてやつと軍艦で歸京した。赤阪へはそれから初めてであつた。

「――大變なのね、上つてもいゝ？」

「さあさあ、よく來たわね。――和一郎さんが來たのよ」

と、伸子は良人に聲をかけた。和一郎は、伸子について一杯散らかした新聞紙をよけよけ爪先立つて奥の座敷へ入つて來た。

「今日は――」

「いらつしやい」

佃は、和一郎に背中を向けたまんま一言挨拶したぎりである。――伸子は、直ぐ感じたものがあり、さり氣なく、和一郎を隣の部屋に導いた。

「お茶が入つてよ、いらつしやらない?」

「私はいりません」

ちよいちよい良人の様子を見にゆき乍ら、伸子は和一郎と久しぶりでいろいろ喋つた。何といふこともなく話しはつきず、彼が訪ねて異れたのは嬉しい。良人が壁貼りをやめて暫くでも仲間に入つてくれたらどんなに和一郎も自分もくつろげるだらうかと、伸子は殘念に思つた。彼一人働いて居るといふ意識が彼女の樂しさを曇らす。佃はやがて、脇の下へ紙の卷いたのを挾み、上に糊盆をのせた踏臺を窮屈な中腰で持つて、彼等の居る六疊へ入つて來た。

「一寸どいて下さい、ついでにこゝもやつてしまひたいから」

「――本當にもうおやめにして悠くりしませうよ、ね? 折角和一郎だつて來たんだから」

伸子にすれば、今日一日壁から風が入る位平氣なのであつた。佃は、自分で茶盆など片よせて新聞をひろげ始めた。

仕方なく、彼等は

「さあ逃げ出しく」

と、今度は茶の間へ行つた。和一郎は椅子にかけて居る、境の障子をあけて話し乍ら、伸子は臺處で働き出した。弟が無事であつた心祝ひの心持が彼女にはあるのであつた。

「何か注文ないこと? 今日は少し御馳走してもいゝわ」

「素敵だな――何でもいゝや」

「玄米でげつそりして居たんでしよ」

「うん、でももう平氣。――僕ね、一緒に食ひさへすりやいゝんだから、餘り姉さん心配しない方がいゝ。一人で大變だもん」

「何にしよう、この邊ちつとも美味しいものがないのよ」

ところへ、佃が來た。今度は改めて斷りもなく、彼は片端からどしどし剝げかけて居た黄色い壁を落しだした。和一郎は默つて立ち、八疊へ行つたが、其疊も新聞が敷き散らされて居たので、彼はやむなく椅子を椽側に出したらしい。臺處と茶の間の境の敷居の上に佇み、佃を見上げ乍ら伸子は何處にも落付場を與へられない和一郎の心持をまざまざと感じた。彼は學生ではあつたがもう廿越した青年であつた。まして久しぶりに訪ねて來、この無視した取扱ひは愉快であるまい。伸子もひどく不本意であつた。彼女は良人に賴んだ。

「こゝは私するから今日はやめて下さらない? 家ぢゆう御飯をたべるところもなくなつちやうから」

「御飯なんかまだ食べません」

「なに?」

彼女は思はずむつとしたが、和一郎に聞かせたくなく、踏臺に乘つて居る佃の洋袴のポケットの處を引ぱつた。

伸子は、振向いて體を捩つた良人の方に仰向き小聲で

「ね私今日は和一郎に悠くり御飯をたべさせてやりたいのよ、歸つて始めて來てくれたんだから。――お願ひ、ね？」

佃は躊躇するらしい氣色だつたが、くるりと再び壁を向いた。そして伸子の囁に答へる代り、高くはつきり、聞えよがしに獨言した。

「――いつも食べるばつかりで居たつて何にもなりやしない！」

誰のことを仰云るの？　言葉を、伸子はやつと堪へた。憎惡が心に溢れた。彼が反感から、わざと部屋々々を引きちらかし、和一郎と彼女の落付く場所を失はせるのだと感じずに居られないやうになつた。彼女は兎も角和一郎迄何故其樣に扱はれなければならないか。腹立たしさと悲しさで佃の背中を睨みつけ立つて居ると、やゝ荒々しい跫音で和一郎が彼方から出て來た。

「僕歸る」

伸子は聲が咽につまつたやうで返事が出なかつた

「…………」

「飯なんぞいらない！」

そのまゝ和一郎は帽子かけからさつさと帽子をとつて被り、靴をはき始めた。前に和一郎の背がこゞんで居る。直ぐ左の柱はずれに、踏臺に踏ひろがつた佃の二本の脚が見えて居る。伸子は、どうして呉れる、とその脚をいきなり拂引くりかへしてやりたい激情を覺えた。靴をはき終り、和一郎は、伸子を見

「左樣なら」

と云つた。それはもう六時であつた。彼に金がないかもしれぬ。實に堪へ難く、彼女は辛うじて

「又ね、ぢやあ。——御免なさい」

と云つた。

格子が彼の後にしまると、伸子は涙が出て仕方なかつた。そのやうなことで一人泣く慘さに一層腹が立ち、彼女は佃を踏臺から無理やり下し、幾月ぶりかで熱し云ひ爭つた。結局、佃の

「其那氣ぢやあない」

の繰返しで其は立ち消えとなつたのであつたが。…………………

獨りで今編物をしつゝ其時のことを思ひ出すと、伸子は内に引籠ること強く、外に燃やす力弱い佃の性格を寂しく思ふと共に、自分の寥しさも我心に迫るのを感じた。事實だけとり上げれば、伸子はあの折自分の悲しんだこと、怒つたことが間違ひであつたとは思はなかつた。たゞ自分の氣持の一重底に流れて居るもの。それが寥しい。それは、佃の父の家の床で震災の號外を見た時、老父が無邪氣にお前等二人が此方に居て何よりだつたと悅んだ刹那、伸子の意識を貫いて走つたものと相通じた。引いては、彼女があのやうに父の安否を氣遣つた心持の奧にもつながりがある。——いつの間にか自分には良人の佃より血族の父や弟の方が可愛く大切になつて居るといふ、新たな自覺が震災後彼女に生じたのであつた。

四年前、彼等の戀愛の初め、結婚しやうとする時、如何那に自分が兩親其他に反抗したか、追懷がはつきり伸子の心に浮んだ。彼女は、その頃血に傳る種々な傳統に形と精神とで反抗し、自分だけは別種な、もつと自由なもつと確固とした生存になりたいといふ大望を抱いて居た。段々結婚といふ接木が不成功であることの證明された今、又自ら血が血

をよんで自分は血族の裡に突きつけられるのであらうか。本能の不思議な力。然し、伸子には、努力して出て來た處へ再び舞戻らない信念はあつた。血族の裡にも納まれず、個の中にも溶けこめず、つき拔けつき拔け、この自分といふ女は何處で止らうといふのだらう。考へ、帽子につける飾りのポッチを剪り揃へて居るうちに、伸子の膝は白い毛糸の屑で一杯になつた。

(四)

四月に入つてからの或る午後、伸子は楢崎の書齋で喋つて居た。書齋の窓から田端の高台が見晴らされる。數日風が强く、やつと其の和いだ穩やかな日光と風景であつた。

「眺めが變つたことね、この前上つた時分から見ると――」

「さうでせうとも。もうすつかり春ですよ」佐保子は正面の椅子から立ち上つた。そして伸子に横顔を向け、硝子の外を覗いた。

「本蓮どうしちやつたかしら――この間ぢゆう、彼方の部屋から其は奇麗でしたよ、早く來れば見られたのに」

束ね髪だが、鉢谷のところで髮の毛が張り出して居る。昔の右大臣左大臣が戴いて居る衮纓のやうな陰を頬につけ、ひとりでに横顔が美しく見えた。やゝあり、伸子が云つた。

「――でも貴女は一種の力をもつてゐらつしやるのね」

「ほ、ほ、ほ、」

佐保子は特徴ある笑聲を立て乍ら、又元の場所に戻つて來た。

「大變なことになつたのね」

「でも左樣思ふわ、鬼に角あなたのところへは、ぐうたらな氣持のまんまでは上れないやうな處があるわ」

「窮屈なのよ世間知らずだから。——私それは間拔けなんだもの」

佐保子は伸子より十幾才か年長で、文學上の先輩であつた。女學校の四五年時分から伸子は彼女の制作に親しんで居た。自分が此から進まうとする道に既に踏み出して居る先達、さういふ意味で尊敬と興味を感じつゝ數年經た。ところが偶然の機會から交際が始つた。互のよいところで鼓舞し、仕事で勵み合ふといふ種類の友愛が釀された。佐保子が永年の間種々の困難や苦痛と默つて鬪ひつゝ、怠まず藝術を研いて行かうとする努力の姿は、伸子にとつて少なからず藥になつた。結婚してから生活がかた〳〵になり、何にも出來ない時心が愚痴で濁つても、伸子は佐保子に其を迚も訴へ得なかつた。佐保子はもつと辛いかも知れぬ、其をあのやうに確り堪へてやつて行くではないか。さう思ふのであつた。

話のつゞきで、部分的にさういふ心持を告げると、佐保子は

「あなたなんか買かぶるのよ」

としんみり笑つた。

——でもね。今は私或程度まで生活といふものを客觀的に見て落付けるやうになつたけれど、斯うなる迄には昔持つて居たよいものも澤山失つたわ。——人間といふものは一つ得る爲には何か他の一つを犧牲にしなければならないものなのね」

佐保子は、ロシアの貴族出身で、十九世紀末歐洲で最も尊敬された女流數學者、並に作家であつた或女性の傳記を翻譯して居た。

「どうなすつて翻譯。——おすみになつて？」

「あゝ、もう直き出ますよ、出たら是非讀んで下さい。私がソーニヤを愛さずに居られないわけがわかりますよ。本當に我等の女性といふ氣がしてよ」

扉をノックする音がした。

「はあい、お入り」

若い女中が、仲子に挨拶し、取次いだ。

「吉見さんがいらつしやいました」

「まあ」

佐保子は椅子の上で體を捩るやうにし、仲子を顧みた。

「珍しい人が見えたこと、今日はいゝ日ね好きなお客さんばかりあつて。——仲子さんかまはないでしよ？」

「——」

吉見といふ人が女か男かさへ見當つかず、仲子は、ぼんやり

「どうぞ」

と云つた。

「ちやあこちらへ。そして美味しくお茶を入れて來て下さい」女中が扉をしめて去ると、佐保子はやゝ蒼白い皮膚の下から悦びが照り出すやうな表情で、仲子に説明した。

「私の古い〳〵お友達なのよ、一寸變つたところがあるけれども、其は心が清い人、率直で。——やつぱり一年に何度

といふ位しか來てくれないけれど、貴女にもきつといゝお友達よ」
直ぐ階子に足音がした。ノック。扉が開き、好奇心と期待とを佐保子の言葉から感じた仲子の前に一人の女が現はれた。
「こんにちは」
「今も悪るくちを云つて居たところよ、あなたが稀にしか來てくれないつて」
「あなたの方がもつとひどいぢやありませんか、こないだ來てくれたのが始めてだもの」
二人の話しぶりには、仲子と佐保子との間にある氣分と異つたものがあり、仲子は思はず微笑して問答する彼女達を見守つた。
「御紹介しませう、佐々仲子さん、こちらは吉見素子さん、お父さんの歴かぢりのいゝ身分の人ですよ」
素子は、
「變な紹介だな」
と云ひ、苦笑した。
「これでも食ふだけは自分でどうにかして居ますよ」
「――××××の編輯をして居なさるのよ」
仲子は、思はず素子の顔を見た。我儘つ子らしい、感情家で勝ち氣なところがあるらしい素子の第一印象と、彼女が一度だか見たことのあるその時代にすてられたやうな或團體の機關雜誌とは、凡そかけはなれたものに感じられた。素子は

「いやんなつちやうな」

と、照れたやうに紅くなつて笑つた。仲子も笑ひ出した。紅くなつた素子の楕形の小麦色の肌理の滑らかな顔付に、ひどく稚い純な魅力を感じた。

「——あれ、全く詰らない雑誌ね」

「えゝ。金をかけないんだから逆もいゝものは出來ないんです、潰した方がいゝんだけれど……」

大阪鮨をたべ乍ら、佐保子が云つた。

「私ね、そりや出不精で不忠實な友人なんだけど、この間不圖吉見さんの家を訪ねたのよ。そしたら、この人は、大きなく實に堂々たる机の上に山ほど物をつみ上げてほんのこれつぽつちの隙間で何かして居るんですもの。——滑稽な人ね、あの落付く二階へ、彼那立派な調度があれば私だつたらそりや勉強して見せるわ」

兩手で、五六寸の幅を拵へた。

「二階を借りてゐらつしやるの？」

「——」

素子が口を開かない先、佐保子が教へた。

「いゝえ、ちやんと一軒占領して居るのよ、自分は二階へ納つて下に夫婦を置いて居なさるの」

「いゝのね、羨しい位だわ」

「御覧なさい、仲子さんでさへさう云ふでしよ。何と弁解したつていゝ身分なのですよ」

素子は着物や帶、細々した紐など或趣味で選び身につけて居ることが一目でわかつた。このやうな服裝をする、そして專門は露西亞文學の、獨りで一軒の家の主人となつて自由に暮して居られる女性の生活が、仲子にはひどく悠々獨占的なものに想像された。

五時頃、佐保子が

「仲子さん悠くり出來るんでせう」

と訊いた。

「えゝ、今日はすつかり樂しむ積りなの」

「では、皆で自笑軒へでも行きませう、父さんの都合を一寸訊いて見て」

先へ出かけることになり、三人は、昔風な植木屋などの未だ殘つて居る夕暮の田端の通りを茶料理までぶら〳〵歩いた。途中、或寺を通り拔けた。

「こゝを雪の朝通つたことがありますよ、あなたのところへ泊つた朝早く」

「さう〳〵いゝ雪見をしたつて、——其那ことがあつたわね」

自笑軒で、奥の茶室に通された。仲子は地震後は初めてゞあつた。壁など處々痛んでは居たが、隅に貼りまぜの小屛風を置いた部屋の樣子は惡くなかつた。三十分程遲れて、楢崎も來た。

「もう暗くて見えないかな、多分この庭の奥に何か祭つてあつた筈だが——」

大觀(多分)が月の好い晩こゝの家で醉ひ、興にのつて低い白土塀に影繪の竹を描いたとかいふ庭が彼方にあつた。酒を飮む人がないので食事は直きすんだ。殆どあつけない位であつた。

「たゞむしや／＼食ふのは何だか不風流で手持無沙汰なもんだな」

「いやに、又拗らせるんですね」

皆笑つた。

歸り、玄關から暗い門までの飛石を、女中が先に立ち雪洞で足元を照した。

又田端の通りを、今度は停留場の方まで四人一列になつて歩いた。人通りがなく、少しの風に、呉服屋の幟がはためいて居た。仲子は萬世橋まで素子と一緒の電車で行つた。仲子は赤阪へ、素子は牛込に歸るのであつた。

（五）

十日餘り、仲子はいゝ季節なのに拘らず、引籠つて暮した。楢崎へ遊びに行つた前日、一通り書き上げた小説を、書きなほして居たのだが、仲子は仕事の快感を餘り樂しめなかつた。書き足りない氣持、心全體で動き切つて居ない意識、——從つて、自分の本當の内的發育の上には意味の尠い作品といふ氣が書終ると強く遺つた。仲子は、其作品でほんの端つぽを掠め、技巧的に曖昧に自分の内部生活に觸れた。書いて居る間に、仲子は種々自分の虚榮心や奇麗ごと好きな弱い根性やに心付いた。細君として自分が泥濘でばた／＼やつて居る間は、迚も素直に公平に、自身陷つて居る泥の穢さ、自分の馬鹿さなど自分に向つても承認し得ない女らしい小さい意地が突張るのを感じた。一蹴りきつく地面を蹴つて海に躍り入るやうに仕事の内に飛び込み、頭から足から揉まれ洗はれ、すつきり更新した自分に成りたい欲望が仲子の内に激しく募つた。心が離れきつて居る佃と、殆ど形だけ夫婦らしくして居るのも、仲子は自分の卑怯さからだと明に感じるやうに成つた。昨冬頃、彼女は自分のそのやうに不决斷な氣持な、愛すべき未練や、彼を最小限に傷つける

方法を見出したいと思ふ幾分の好意に起因して居るやうに考へねでもなかつた。今考へるとその起因も主我的なものを含んで居ると思はれた。つまり自分は出來るだけ氣樂に、妥當な云ひ譯を見つけ、彼からも他の周圍からも餘り惡い子と思はれないで仕たい事を遣り遂げたいといふ虫のよい魂丹であつたと伸子は感じた。百萬言並べて、佃が自分にとつてどのやうに不滿な良人であるかといふより、伸子自身先づ、私はもう彼が愛せない、どうしても妻であるのは厭だと宣明する勇氣だけが必要なのだ。どんなに赦されても忠實な彼の妻となつて居られないある以上、そしてその動機がつまりは我を守る本能である以上、何故、憎まれてもエゴイストと云はれても泰然たる覺悟をしないか。自分の内に、佃の受けるだらう同情（世俗的なものと判り、本當の價値は認めない癖に）に對する嫉妬が在るらしく、其を思ふと伸子は苦しく淺間しく、我を卑んだ。

ふらりと其處へ、素子が訪ねて來た。伸子は意外な、嬉しさを感じた。先夜、近いうちに行きませう。訪ねませうと別れたのであつたが、素子が約束をさう早く果さうとは思つて居なかつた。

「——やつぱり先を越されたわね」

「不精なんですね、あなたも……」

「ひどいの」

上りながら、素子が

「いそがしいんですか」

と訊いた。

「もう暇よ」

「少し出ませんか、若しよかつたら散歩に誘はうと思つて來たんだけれど」

仲子は、素子に待つて貰ひ、仕度をして家を出た。日傘なしでは眩しい位快晴であつた。二人は晝飯前であつたので始め銀座に行つた。輕い食事をすませ、素子が用事のあるK新聞によつてから、帝國ホテルの横を通つて日比谷公園に入つた。

「日比谷は珍しいわ。何年來ないかしら……」

「――其那に出ないんですか？」

素子が吃驚したやうに聞き咎めた。

「此那ところ、一人でてくてく歩いたつて仕樣がないやうなもんぢやないの？」

内幸町から入る門の附近、まだバラックが大通りの樹陰に軒を並べて居た。よくも斯うあると思ふ位食物ばかり賣る店が續いて居た。「一寸一杯酒アリ。」立看板がある。汁粉雜煮、ワンタン屋。汚水を流す溝や不完全な炊事場から蒸れ臭い不健全な臭氣が、塵埃で白つぽくなつた春の並木道に漂つて居た。仲子がよく子供の時分大きなリボンをつけて歩いた瓢簞池の傍に出た。葉の青々した篠懸の樹の下に、池に向つて一つ空いたベンチがあつた。いゝ加減歩いた彼女等は其處にかけた。

「もう傘なしぢや無理だな、あついでせう」

素子は、持つて居た雜誌で扇を使ふやうにした。

「でもいゝ氣持だわ、――鴨がまるで愉快さうよ、御覽なさい」

バラックがある故か、日曜でもないのに四邊は割合人出であつた。青茶色の勞働服や法被姿の男が多かつた。彼等は

てんでんに煙草を吸つたり、新聞を見たりし乍ら、池の周圍のベンチ、鐵柵なぞに休んで居る。地震の時水禽を獲つて食べて仕舞つたといふ話の池には水がなみなみと漣立つて居た。キラキラ日光が揺れる。水面に二羽の鴨が安心して盛に游泳して居た。彼等は時々急に蹼が見える程伸び上つて威勢よく羽搏きした。水がバシャ／＼散る。重吹から瞬間低い小さい虹が圓くぼんやり立つた。無心な裡に熱つぽいところのある美しい様子であつた

直ぐ側に印絆纒の男が居たが、仲子は寛ろいだいゝ心持でいろ／＼素子と話した。多くの場合仲子が切り出す廻り合はせになつた。チエホフのこと、西鶴のこと、金槐集のこと。金槐集は最近に讀み、亢奮が鮮やかに甦つたので仲子は熱心に其に就て喋つて居たが、突然妙な顔をして言葉を途切らせた。

「一寸――私さつきから間違へて居やしなかつて？」

「名ですか？」

「タメトモつて云ひやしなかつたこと？　一度か二度――」

素子は、はははと笑ひ出した。

「何だか變だと思つた！」

「皮肉やね、默つてにや／＼して居るなんて法はないわ」

自分も笑ひ出したが、仲子は極りわるく感じ、少し赧くなつた。

「――本當に、あなたが云つたんで、あゝさうかと思つたんですよ、どつち道話は分るからいゝぢやありませんか名なんぞ」

思ひ出すと二人でこの失策を笑ひ／＼、彼女等はそのベンチに二時間ばかり居た。

「あなたはどう？、私はね散歩しても同じ路を往きも歸りも通るのが大嫌ひですよ、どうにかして別の路を歩かないちやあ氣がすまない」

櫻田門の方へ拔ける道を歩き乍ら、素子がさう云つた。其那好みのはつきりして居るところ、いかにも素子らしく、伸子は面白いと思つた。

櫻田門で電車を待つたがなか〳〵來ない。間もなく日比谷の交叉點に故障があることがわかつた。西日がからりと打ち開た廣場を照し、停留場に待つて居る人物の輪廓が、小さく見える。其處から、濠を傳つて彼女達は三宅坂まで歩いた。柳の下を歩いて居た間、日比谷の方から追拔く電車は一臺も來なかつた。

伸子は、その散歩で少なからず元氣づけられた自分を感じた。

（六）

伸子は或日動坂へ行つた。母は留守であつた。彼女は其を知ると庭木戸から、隱居所の椽側に廻つた。六疊に針箱が出て居るが祖母の姿は其邊に見えなかつた。

「お祖母さま」

二聲ばかり呼ぶと、臺處から祖母が

「誰だあ、つや子か、あがれ」

と云ひ乍ら出て來た。針箱の前にもう上りこんで居る伸子を見出すと、彼女は一寸亢奮し

「お前かしふア」、

と笑つた。

「いつ來た？おつかさん生憎出かけたごんだ」

「今日はお祖母さまに用があつたの」

「さあ、おしき」

祖母は、自分が喜の字の祝の時貰つた厚い緞子の座布團を火鉢の向ふ側に置いた。

「おら、きのふ芹田から歸つて來たばかりだごんだ。――あすこでもはあ、これから何じよにして行くか困つたもんだなあ、考へておら昨夜睡れなかつたごんだ」

祖母の二番娘、仲子の叔母が芹田の細君であつたが、地震の時壓死した。あと總領の女學校を出たばかりの娘が世話を燒いて居るのであつた。

「――仕方ないから、家政婦でも置くといゝぢやあないの」

祖母は共に答へず、樂の茶飲茶碗を兩手の間に捧げるやうに持ち、一口吸り

「おら、地震この方、只さへ耄碌して居たのが猶更耄碌したごんだ。お靜には死なれるし、保科は死ぬし……何しておらのやうな在り甲斐なしがいつまでも死なゝいかと思ふ」

去年の九月祖母は東京に居、目のあたり血をわけた娘や弟の死を經驗したのだ。仲子は、哀れに感じて述懷を聞いた。

「そろ〳〵時候もよくなつたから、御祖母さまKで悠くりしにいらつしつたらどう？」

「さうよなあ、見に行かなけりや草屋にして置くなあ」

「私近くに行きたいから、一緒にいらつしやらない?」

意外さうに、祖母は仲子を見た。

「ほんとうか? お前が行くならおらも行ぎたいどんだ」

「私もいゝわ。お祖母さま、いつがよくて」

「今日でなければ、おらいつでもいゝが──」

祖母は、急に年寄らしい氣ぜわしさを感じ始めたらしく煙管をはたき乍ら聞いた。

「──家の方はなじよにする?──佃さんにお訊きしたのか、お前」

「それはいゝのよ」

仲子は、祖母の心配を遮る爲、簡單に輕く答へた。

「私、來月早々立ちたいから、ちやお祖母樣そのお積りでいらして頂戴」

頸に力を入れ確り合點しつゝ滿足さうに祖母は

「よし」

と答へた。

母の歸るのを待たず、仲子は家を出た。停留場の傍にメリンス屋があり、店頭に正札つきの友禪を吊つて賣つて居る中に、一つ目についた柄があつた。價もやすい。思ひ立つて、仲子は其を一丈切らせた。彼女は遠くから華やかな臙脂の模樣を見て居るうち、田舍の家では、夜具の肩當も座布團も何も彼も茶と黑づくめの色彩なのを思ひ起したのであつた。

佃が、伸子より少し前に歸宅して居た。彼は、顏を見ると直ぐ

「動坂へ行つたんだつて?」

と訊いた。

「えゝ」

「電話でもかかつたの」

「いゝえ、さうぢやなかつたけど――誘ひに行つたのよ、お祖母さまを」

「――へえ………」

「私又Kへ行きたいから誘ひに行つたの」

佃は厭な顏をして默り、此方向いて居た顏を机の方に捩つた。行つてもよくて? 或は、ね、いゝでせう? と自分が云ふのを待つて居る良人の期待を感じたが、伸子は意識して沈默を守つた。伸子の心に、捨身になつた結果生じた餘裕のやうなものがあつた。

暫くして佃が露骨に喧嘩つぽい調子で詰問した

「――氣を換へに行くんですか、それとも別れる爲に行くんですか――此方にも都合があるから聞かせて下さい」

語氣は激しいやうであつたが、其を本氣の本氣で佃が云つて居るのではないことを伸子は直覺した。これまで、いつも自分が間抜けに佃のいふ言葉を最大限に受け、其場で結着をつけようとした爲、失敗ばかりした。伸子は、其に氣付き、妙な笑を浮べ乍ら逆に訊いた。

「貴方はどうお思ひになるの?」

佃は、自分からは何方とも見當をつけ切れず、憎しみをこめて横目で伸子を睨んだ。其顔を見ると恐怖の代り、彼女自身を愕かして、切れ〳〵な輕い意地惡な嗤ひが勃發した。彼女は毒々しいところのある優しさで悠くり云つた。

「――憎らしい？」

佃は、體の何處かを突刺されたやうに恐しい表情をした。良人の苦しみが伸子の魂に焙りついた。あゝ、彼は苦しいのだ。苦しいのだ。然し、慰めの言葉をかけようとせず、伸子は本心以上慘酷な快感に煽り立てられ口許に凍つた微笑を漂はせ乍らさも好いことでも告げるやうに、一言一言はつきり

「私も憎らしくつて、憎らしくつて堪らないのよ、貴方が…………」

と囁いた。云ひ終ると、むせ返るやうに佃に對する憎惡と自己嫌惡がこみ上げて來た。伸子は目の前が暗く成るやうな心持で部屋を去つた。

七日か八日にKに出發する予定であつた。佃は例の如く毎日學校にゆき、夕刻かへると見ぬやうにして必ず其となく部屋の様子を覗つた。伸子が旅行の仕度を今日はしたか、如何那にしたか、と思つて彼は歸つて來るのであらう。段々日は近づくのに何一つせぬ彼女を待ち切れなくなつたやうに彼は或日

「本當に行くんなら仕度したらいゝでせう」

と氣を引くやうに云つた。佃がさり氣なく、然し荷物はどんなかと思ひ乍ら我家に入る氣持を感じる丈で、伸子は既にいゝ加減參つて居るのであつた。彼女には業々しく仕度するだけの元氣がなかつた。伸子は、怒つたやうに

「騷ぐほどのものはいらないのよ、私のことだから」

とぶつきら棒に答へた。ぼんやりとだが主婦が居なくなることを知つた女中が、教育のある物わかりのよい女であつ

たに拘らず、何だか落村かなさうに、心の不安を隱して働いて居る樣子も仲子には辛かつた。一つの家庭が潰れようとする前の、壓迫的な解體的な雰圍氣。——

愈々明日立つ筈といふ前日、仲子は十時頃目を覺した。彼女は床の上に起きなほつたまゝ、暫く自分の傍で空になつて居るもう一つの床や硝子戶から見える狹い庭、竹垣などを眺めて居た。隣りの細君がその言葉だけはつきりと喋つて居る。

「又この頃ちや小紋流行ですね」

その高い粗野な聲、日が照して居る竹垣、ひつそりした朝の疊の感觸等が異樣に鮮かな重みをもつて仲子の心に寫つた。總て見馴れて居るものだ。總てが始めてそして最後に見るものだといふ氣がした。これまでこの疊の上で朝目を覺した時先づ「あゝ又こゝで——」と云ひ難い苦惱を感じたのは幾度であつたらう。愈々念願通り其處を去らうといふ時このやうな深い、生存の根まで續いて居るものと別れるやうな感銘を得ようとは稍々思ひがけない。——いやこれを豫知したからこそ本能的に仰をさけて、自分一人の時家を出ようと目論んだのであらう。生活は不思議なものだと仲子は思つた。自分から出た聲、動作——悲喜交々の感情が家の柱の木理一つ一つに滲みこんで遺る。そこに生活する時間が永ければ永い程、遂には其處に無限な自分の涙の跡があるといふばかりに、先づ家をさへ去り難くさせられるのではあるまいか。當の夫である人の顏や聲などその際一向現はれて來なかつた。却つて何でもなく竹垣の根元に忘られて居る穢い萬年靑などが印象の眞正面に立つた。

後で今日といふ日並に佃と暮した數々の日を思ひ出さずには居られまい、その時聯想の種が澤山あるやうにと、我知らず貪慾に本能が働くのかと思ふと、仲子は難く渋組ましかつた。本當に！自分の持つて生れたよいところ、わるいところ、全存在を傾けつくして愛し憎んだ佃であつて見れば、石ころ一つからでも彼が或時斯う云つた聲、あゝ自分を顧

た眼付が思ひ出せようではないか。伸にとつても、自分が其と同様に細かい事まで思ひ出されるであらうと思ふと、伸子は佗しい、其は本當の私ではないのにといふやうな他迯々しい心持がした。

紅茶とトウストを食べると、伸子は卓子を立ち乍ら女中を呼んだ。

「一寸――納戸にある鞄ね、あれを出して掃除して頂戴」

「お立ちでございますか？」

「あゝ。今日から動坂へ行つて居ないと都合がわるいから」

縁側へスウトケイスを出し艶布巾をかける。傍で、伸子は机の上から日記その他必要の文房具をまとめた。ほんの着換の袷・セル等をつめた上に、原稿紙をのせた。

「お荷物これだけでよろしいんでございますか」

「――もつといれば云つてよこすわ、送つて呉れるわね」

「えゝそりや――」

云ひ難さうにし乍ら彼女は尋ねた。

「大抵いつ頃お歸りになりますでせう」

「歸らなかつたら困る？」

と云つて伸子はふざけのやうに一寸笑つた。

「まだわからないの」

俥を呼ばせた。荷物だけ載せ動坂にやつた。スウト・ケイスが小さいので俥に其を幾重にも括りつけた細引の方が目

立つやうであつた。

仙が歸らないうちに出掛けて仕舞ふこと、さすがに躊躇された。仲子は三時過まで愚圖々々して居た。が、軈て彼があの聲と眼とをもつてこれ迄の毎日通り格子を開けて來るだらうことを思ふと、彼女は急に決心して家を出た。

「ぢやどうぞ氣をつけてね。」

門から表通りへ出るまで、左右生垣つゞきの横通りが二丁ばかりある。そこを帛紗包みを抱へて歩き乍ら、仲子は背後が氣になり、我知らず急ぎ足になる厭な氣持を經驗した。通りはずつと眞直彼方を直角に通る大通り迄續いて居た。仲子等の家の在る長方形の一區廓を凹形に圍んで居るのであつた。仙の勤め先から歸る路はきつちり定つて居た。凹形の右の道をずつと來、煙草屋の角を左へ、今仲子が歩いて居る横通りへ入つて來るのだ。いつも人通り尠い通りであつたから、角を曲れば、遠くからでも仲子の後姿は見えた。何かの都合で彼がいつもより卅分早く戻り、あの角を曲つた拍子に自分を見はしまいか。後から速足で追つかけて來たり、口笛をふいたりしはしまいか。――仙は今日仲子がいづれにせよ出掛けることは承知であつた。それだのに何故此那に逃げる者の感情が自分につよいのか。自分に反抗し努めて苦しい位悠くり小砂利を敷いた道を歩き乍ら、仲子は、人にも話せない感情だと思つた。苦い涙が眼に浮んだ。

（七）

田舎に着いた日、其地方は五月の嵐つぽい天候であつた。俥に乘つて市から村へ通じる寂しい一本道を進む時、荒い幅廣い風が幾里も先の山脈から吹き下した。幌がドーッと一陣風を孕むと、俥夫は梶棒に體全體の重量をかけて立ち澱む。さういふ瞬間、仲子は夕暮の正面に一本ぼんやり白く横はる道と、中空に黑い嵐雲の捲き立つ山際のところだけが物凄

い藍色で明るい空を、まじ〳〵と見た。情熱的な暗い不安な空が、彼女の心の狀態とよくつり合つた。

祖母は、毎月竹鋏をこいだり、納屋へ入つたりして働き廻つた。そして、種々見え無いものを發見し、家ぢゆうの騒ぎを惹き起した。

「一寸畑さ行つて與次郎が居たらよんで來てくれろ」

與次郎が椽側に廻ると、祖母は爐ぶちで煙管をはたき乍ら

「お前、茶壺しらねえか？　島根に居た頃、出入りの大工で茶人が居て、これさ茶入れとくと濕けることがないと云つて呉れたんで、おら大事にして居たに無いごんだ」

「御隱居樣、あれは古田さんにお賣りんなさつたんぢやありませんか」

祖母は意外に、口を尖らし

「俺がかあ？」

と、呆れた。

「何して俺が其那事すべつちえ！」

「——困るなあ、」

與次郎は仲子に當惑した笑顔を向けた。

「本當に御隱居樣がお賣りんなりました。古田の隱居が、こりやいゝ茶壺だと云つたら、東京さ持つて行くわけにも行くめからつて、讓つてやんなすつた。——五圓札とひきかへに私が屆けたんだから、間違ひはございません」

「さうか——俺そげえに耄碌したべえか——俺ほんとに賣つた覺えなんぞ無えことよ、しか…………」

與次郎は自分が疑はれて居るのを知り、少し荒つぽく

「ぢやあ、私が使ひに行つたんですから、又五圓いたゞいて行つて取返して來ませう」

「…………さうさなあ…………」

與次郎が、有耶無耶にかへると、後で、祖母は机のところまで仲子を追ひかけて來た。

「俺ら、ほんにやんだ（厭だ）ごんだ。——耄碌したにつけ込んで、何するか知れたこつてねえ。こないださがした銅鍋だつて、俺が山本さ貰つたちうごんだ」

と訴へるのであつた。

「お祖母さま、耄碌は年の故で仕方ないんだから安心して耄碌しちまつた方がいゝのよ。耄碌なさり乍ら、時々氣を張つていやにはつきりなさるから、却つて面倒なのよ」

「ふむ…………。——だが、仲子お前何じよに考へる？　本當に俺が貰つたべか」

仲子は、心が平らな時には、はははと思はず笑つて

「私が判らう筈ないぢやあないの。念の爲それぢや先方へおきゝなさい」

と云つた。神經が亢ぶつて居る時、執念く〳〵云ひ出されると、仲子は怒りつけるのであつた。

「お祖母さま、少しは空でも眺めてぼんやりして居る工夫をなさいよ」

仲子は六疊の隅に、古本箱を脚にし、上に紫檀の机をかぶせて卓子を拵へた。廊下の外は庭、その奥は畑であつた。障子について居る小障子をあけると、庭を區切る低い芝の堤と勢よい梅の並木の一部分が眺められた。光線が斜に葉裏を射す午後、その狹い叢の風景はどこか荒廢した園の趣と初夏の綠の活々した輝きとを相交へ、美しかつた。

伸子の心持はやゝ陰鬱で敏感で、しんがらんと寂しかつた。先、佃を恨んだり自分を鞭打つたりして此處に居た時分、心がむらくゝして居たから、周圍の自然など、さう深く自分に浸み透らなかつた。今の伸子の心は、些か病的に澄み沈潜して居た。田舎の天地に充滿して居る飾ない自然の力と、自分と佃とを支配した不可抗な力とを結びつけ身に泌みて感じた。自分といふ一人の女性の裡に雜居して居る種々な矛盾した欲望や本能。何でも彼でもぱつと薔薇色に燃え立たせ陰影のさす餘裕さへ與へなかつた二十才の情熱――情慾も其處では朗らかな力であつた。佃が卅五才で、永い放浪の後疲勞と休安の欲望をもつて現はれた。その疲れた相貌さへ、悔いたり、身を獻げたり、涙を流したり、何かに熱中したがつて居た伸子の若々しい生命への刺戟であつた。伸子は情熱のあらひざらひの力で佃を我ものにした。佃を我ものにした瞬間、伸子の生命の奥に燃える情熱が燃えつき、二人の生活はほんのり温かに保つ程度の熾になれば無事であつた。××教授並に細君――儉約や貯蓄や恩給が夫婦のたのしみで睦しく四十になり五十になり、墓穴まで行つたらう。ところが伸子の情熱は佃一人に費ひ切れなかつた。彼女が北海道の牛の乳で養はれた細胞と同じやうに豐富で、旺盛で、貪慾であつた生活の上で彼女が求めるのは、良人である佃の求めるやうな、消耗することも尠く吸收することも尠くといふ態度ではなかつた。彼女は地面に墜る影坊師でさへ二人寄れば二つになるものを、愛した男女が二人よれば、二人寄つただけ多く、廣く、深く人生を暮して行かぬ法はないと信じた。――

源に溯ればつまり一つの熱情が愛と現はれ、憎みと現はれる恐ろしい力、又、自分の本質に烈しく自由や獨立を愛して欲まない本能の在ることと、そして其は人との交渉に實にはまり込む、信じ易く受け入れ易い自分の性質に對して自然が與へた唯一の安全瓣であることなど、伸子は永い靜かな田舎の一日一日の間に考へ、知つて行つた。戀愛や結婚生活の明るく暖い種々雜多な情感を全心的に味はせてくれた人として、例へ結果は破壞に終つたとしても、佃は自分にとつ

で決して行き摺りの人ではなかつた。考へようによつては、どんな女性でも一度は捕はれずには居まい結婚生活の夢想から可成り完全に解放させて呉れた點でだけでも、感謝すべきなのかもしれない。…………

いろ〳〵な往來する心持——佃に對して仲子は割に和らいだ氣持であつた。最後に、せめて一本互の思ひ出の爲によい手紙を送りたい。仲子は或晩追憶や感動に一杯になつて机に向つた。紙を展べ、ペンを執つた。最初の一字を書かうとして氣がつくと、何事であらう。いつの間にか感情の扉がぴたりと閉つてしまつて居た。さて何から書くのか、何を書いても下らない索漠とした空虚な言葉としか響かないやうに感じる。逆に曾て自分が佃に向つて云つた數々の憎らしい言葉、毒々しい言葉が次から次へ驚くべき現實的な命をもつて甦つて來た。其に報ひた彼の冷淡な皮肉、醜い自棄自棄の言葉が、又この鼓膜に今聞くやうにまざ〳〵響いて來る。——仲子は夜の燈の下で恐怖をもつて言語の生きて居ること、生きて佃と自分との間に打ち破れない壁となつて頑張つて居るのを感じた。そして先づ誰がそのやうな破滅の原因を作つたのかと思ふと、新しい佃に對する憤りがこみ上げて來た。

——仲子は一字も書き得なかつた書簡箋を思ひ沈み乍ら丁寧に細かく裂いた。彼女は椅子をずらせ、悠くり紙屑籠の眞上からばら〳〵ばら〳〵と其白い紙片をすて、庭に出た。大きい月に更に大きい暈がかゝつて、芝は濕つぽい眠い匂ひを漂はせて居た。遠くの隅の不氣味に黒く見える這松の傍から、湯を貰つて歸る婆さんの姿が現れた。

「えゝ月だなし」

「…………」

「——おやすみなんしよ」

「おやすみなさい」

仲子が無愛想にして居ると、横を通りすがり乍ら、古い雌象のやうなその婆さんは、わざとらしく瞼を細くし
「えゝ謡があることよしか、遠くはなれて會ひたい時は月が鏡になればよい。」
彼女は濡れた手拭を丸めて持つた手で仲子にちよつかいを出すやうな莫迦げた形恰をした。

(八)

仲子の樂しみは、素子からの手紙であつた。田舍に立つ前、仲子の必要から、一緒に鎌倉へ行つた。活動寫眞を見て置く要があつた。それも素子がつきあつた。共に暮して居るのが祖母では、鍋釜の話しが出來ず、その話對手のやうに往復して居た手紙が、仲子にとつて段々生活上必要なものとなつて來た。仕事に無關係な、而も時々胸一抔になる種々な感情や考へを、佃とのことにつき、又他のことにつき仲子は前後かまはず、大きい紙や小さい紙に書きつけて素子に送つた。素子からは又一々其について彼女の意見を云つてよこす。素子は、始め仲子が感じたやうに感情家ではあるが底に落付きといふか、世の中を知つて居るといふか、實際的な一種の均衡を保つて居る女性であつた。仲子が性急に感動したり、思索したりするのを、彼女は好意と滑稽とを感じつゝ、愛のある皮肉で應答してよこした。
「あなたなんか、全く世間知らずなんだと思ふ。今日の手紙だつて。あの傳で佃氏についても夢想したのだなと思ひました。私に感心なんかするのは馬鹿ですよ。散々買ひかぶられた揚句、どかんと幻滅したりされるのは誰しも御免です」
又
「私も馬鹿だが、あなたも馬鹿ですね。而も變な手のこんだ馬鹿だ。自分の馬鹿さをいやに堂々とした理屈で云ひ現す
癖がある。」

合やうだと思ひ、繰返し〳〵素子の手紙をよみ、仲子は愉快に笑つた。その日の氣分によつて、素子は細かい粒の揃つた丸つこい字を書くかと思ふと、駄々子のやうに、手紙の末に行く程大きな字を亂暴に書きなぐつてよこすともある。表面大層心得たらしくあるが、彼女のしんは情に脆い、切な、正直者であることなど、仲子は愛をもつて洞察する。——素子に會へた偶然を、仲子は眞心で悦ぶやうになつた。仲子の、がらんと空虚に銷沈しがちな心に生氣をふき込むのは、素子との新たな結びつきであつた。

或夕、仲子は椽側に祖母と居た。祖母は長椅子に横はり、仲子は踏台を持ち出してその傍に腰かけ。彼等は、監過岐近雇つた女中の給料について喧嘩して、仲なほりしたところであつた。晝飯がすんだ時、女中が急に入用が出來たから給料を欲しいと頼んだ。其日は二十五日であつた。十五圓といふ世話人への約束で雇つたのに、祖母は、さうは云つたが人數も尠いのだから女中には十三圓の割でやると、けちなことを急に考へついた。仲子が其はよくないと云ひ、他愛なく腹を立てた。却つて後睦しく、祖母は珍しくのび〳〵昔の話など仲子に聞かせた。古いこと、高山といふ家に嫁さんが居た。若かつた祖父が、參事司補になつたといふのを耳が遠くきゝ違へ「三里四方といふお役かのし」と訝しげに訊いた。訊かれたこちらの隠居も亦聾なので眞面目くさつて「さようであります」と返事して居たといふ話など。七十九の祖母は自分よりもつと年上で耄けた二人のばあ様問答を可笑しがり興にのつて、「さようであります」と兵卒のやうな口調を眞似て仲子を笑はせた。夕飯に呼びに來乍ら女中が二通手紙を仲子に渡した。下の一つが、日本封筒で、素子がいつも使ふのにそつくりであつた。然し、朝一つ受取つたので、彼女からと思へず、怪しみ裏をかへして見た。矢張り素子から來たのであつた。今朝のと同じ日の夕方の日附であつた。

「一廿八日に私の仕事が多分一段落つくのです。暫く暇になると思つたら、急に其方へ行つて見たくなりました。邪魔で

はいけないから、惡かつたら遠慮なく、直ぐ返事を下さい。行つてよい都合なら大抵廿八日の一時に立ちます」

仲子は、歩き〳〵讀んで居たが、思ひがけぬ嬉しさで胸が苦しいやうになつた。上氣せ、直に、いらつしやいと電報を打たうかと思つたが、兎も角も自分を落付け、食卓についた。亢奮しつゝ彼女は祖母に告げた。

「ね、お祖母さま、素敵よ、廿八日に吉見さんが來るんですつて」

「ふうん。――食ひ物がなくて困るなあ」

「其那ことかまひやしなくてよ。不便なのは解つて居るんだから」

大陽氣で箸を取つたが、ふつと仲子は噛み込んだ飯がぐつと喉で塞へる程情がせき上げて來るのを感じた。今自分をこれ程捕へる喜びのつよさにつれ、これ迄五年の間自分が如何那に嬉しさといふものに飢え暮して來たか、哀れに恐ろしい程はつきり思ひかへされて來たのであつた。友達でさへ、これ丈あたゝかい悅びは齎して與れる。何故佃が、たつた一度でも、何かで思ひ出すのも嬉しく誇らしい悅びを自分に與へてくれることが出來なかつたらう。尤もこの田舍の家へ彼が來ることは動坂に拒まれて居た。けれども、彼に若し心さへあれば、五年のうちの何かの機會、何かの場所にさゝやかな、然し忘られぬ喜びを結びつけてくれられたゞらう、と仲子は思つた。悅ばせ易い、そして悅びたがつてがつ〳〵して居るやうな自分を――全く考へると寧ろ不思議といふ位なものであつた。しんから嬉しかつたこと佃の暖い心を身にひきそへて覺えたこと、何か無いか。まさか一つも無い筈はあるまい。仲子は皆無といふのは恐ろし過ぎ、記憶の中を遽しく搔きさがした。思ひ出されるのは、自分の眞心を信じさせようと熱心に佃を說きつけて居る自分、絕望を負けん氣で搔ひ紛らさうと力んで居る自分などばかりであつた。記憶にのこつて居る程の場面々々は、どれも頰を流れた淚、やけつくやうに胸の中を流れた淚の苦々しさを伴つて浮んだ。その淚いつも主になつて動き求め暖い

て居たのは自分だ。――

机に戻り、素子へ返事のハガキを書き、出させ、猶そのことを思ひつゞけると、伸子は魂の奥が顫えるやうな悲しみを覺えた。最近佃と生活を共に出來ないと決心してから、伸子は自分の經驗した五年の結婚生活を徒にしまいと確く覺悟して居た。たゞの不幸や失敗には終らせまい覺悟であつた。其故自ら理性的に心が働いて時代や性の問題を背景として居た。たゞの不幸や失敗には終らせまい覺悟であつた。其故自ら理性的に心が働いて時代や性の問題を背景とし通觀したり解剖したりしようとする傾きであつた。然し、今伸子の感情がこの堰を切つた。彼女は、二十から二十五までの若い、どんな情熱でもどんな歡喜でも純に火のやうに受けられた時代を空しく貧弱に過して仕舞つたこと、そして、それらの年は一生に再び還つて來ないことを、まざ〳〵痛感したのであつた。生活を惜しむ心が潮のやうに滿ちた。佃と自分との不甲斐なさを心の中で罵り乍ら、伸子は永い間靜に聲のない歔欷をつゞけた。泣き乍ら、泣くことによつていくらかづゝの苦しみを和らげられ乍ら、伸子は考へた。世の中に自分のやうな心を持つ女は一人しかないのであらうか。自分の得たいと願ふ生活の歡びは、此世にあつていけない程贅澤極つたものであつたのであらうか。神よ、神よ。そして、自分は誰からも愛して貰へない程、度はづれな女なのであらうか。と

（九）

素子が來る日、伸子は待ちかねて停車場へ迎に出た。午後からひどい雷雨があつた。家を出る時小歇みであつたが、市から歸る頃丁度烈しくなつて、俥が動けなくでもなれば、伸子は市で宿るしかあるまいと思ひ、小さい楠など持つて出た。去年の夏、村の俥夫の家へ雷が落ちた。彼は其時喫驚した餘り病氣した。其から、雷雨がひどいと足がすくむのだ。市からはさういふ天候だと、村まで有名な風當の強い街道を冒して來る俥夫などは一人もなかつた。

歸途には幸風だけになつた。眞暗な夜道の八方を吹き廻して、荒々しい風の唸りだけ聞える。素子が幾分不安さうに前の仲から

「——ひどいな——餘つぽどあるんですか。まだ」

といふ聲がした。

「もうあと三分の一」

悠くり力を入れて大きい聲で明晰に返事したのに、風にふき散され素子へ屆かなかつた。「え？」ときゝ返す聲がしたが、仲子はもう默つて揺られて居た。

翌朝、東條の雨戸をあけると、素子は、

「ほう！此那いゝ景色のところだつたんですか」

と、驚きを新にした。

「二度吃驚ね、昨夜、實は如何那ところへ來たことかと少し辟易して居たんだけれど」

電光と雨に洗ひ拔かれた後の清い潤やかな北國の空、遠くの高い魅力ある連峰、左手にぽつつりと展望される丘陵の上の可愛い森、活々した美が仲子をも見惚れさせた。

「空氣が何だか違ふでせう？隨分爽かで勁いやうでせう」

「F縣に此那ところがあるとは思はなかつた！」

「——私關西——京都位までしか知らないけれど、あの邊の景色より此方の方がよつぽど好きよ、あなたは？」

祖母が出て來、頻りに

「よく來て下すつたない。田舍で何のおもてなしも出來なくて耻しいごんだ」

と繰返した。仲子は

「八十になつてもまだあゝいふ技巧は忘れないのね」

と素子に囁き、大笑ひした。

黑つぽい紺に綠や茶で古風な粗い格子縞を出した膝掛が一枚、戸棚に元からあつた。仲子は其を庭の芝生に擴げた。二人その上にころがつた。素子が膝掛の房の間にピョンと出て居た草を拔き、自分の細いパイプの先にさし、吹矢のやうな遊びを發明した。

「どれ、かして御覽なさい、私なんかもつともつと飛ばせるわ」

草は輕すぎて却つて遠くに飛ばない。

「あゝ變にして居たんで肩が痛くなつた」

やがて素子は仰向きになり、兩手を組合せて額にかざし乍ら、凝つと地平線の山々を眺めた。からりと香ばしい草や日の匂ひが四邊に漂つて居る……平和な樂しい信頼に滿ちた感情が仲子の胸にあつた。彼女は、先達鎌倉へ行つたとき、ホテルの傍の砂の小高いところに二人矢張りこのやうにして日を浴びて居たことを思ひ出した。彼女は素子の傍に居ると擴りどころのあるやうな居心地よさ、落付き、悪い意味の女らしさから來る窮屈を脫したいゝ心持がするのであつた。これは仲子に全然新しい感情であつた。

死んだ祖父が使つた遠目鏡を出しかけ、彼女達は雲を覗いたり、山を覗いたりした。青々した美しい山肌が其遠目鏡で見ると、樹木が疎で野猪の皮膚のやうであつた。――喋り出す。眞面目な話、呑氣な話、思ひ出の話、種はつきず、

仲子は素子のこれ迄の生活について偽りのない話を聴いた。箱崎から二人で送つた寄書の返事のハガキが來た。其に

「今頃きつと吉見さんは其方だらうと思つて居ました。どうです、私の天眼通は偉いものでせう」

とある。二人で讀み、笑つた。素子は、三日居て歸京した。

素子が立つ前に横はつて居た長椅子が、そのまゝ羽根蒲團をのせて部屋の隅に在る。夜、境の唐紙をあけ放し、机のある方の部屋は明るく次の間は暗い中をぶら〳〵歩き廻り乍ら、仲子はいつの間にか再び自分を貫いて、活潑な生活慾が流れだして居るのを感じた。自覺しないうちに全身がその流れに領せられたかのやうであつた。一週間前、素子が來るといふ通知を受取つた晩自分を眠らせなかつた殆ど肉體的な痛みのやうな悲しさが、却つて生活慾の目覺めを知らす前兆であつたかの觀があつた。新しい生活をしたい、違つた暮しを見出したい、さう思ひつめ求めて居た時、其等のものは何處にあるかさへ知れなかつた。知らないうちに、時期が來た。或朝不圖目を醒し、人が俄に沁み〳〵と天地の春を感じるやうに、氣がついて見廻すともういつか自分の圍りを流れて居るのは過去の潮ではない。――さう云ふ氣持が深く仲子を動かした。

翌日、仲子は確りと更に一段覺悟の定つた心持で、佃に手紙を書き出した。情誼ある手紙を書きたいと思ふと、和らいだ氣分はいつぞやの夜の通りすらすらと溢れ出さず、變に整然とした言葉の丁寧な文が出來た。氣に入らず幾度も破き、諦めて遂に彼女は簡單に要點だけ書くことにした。今度田舍へ來たのは此をけじめとして互に別の生活に入り度い爲であること、東京に居て其を實行することも、彼に云ふことも出來なかつた弱さを許して欲しいこと。

「此事は最初から私にだけ必要で、貴方にはちつとも必要の認められなかつたことです。恐らく今でも其はさうだらうと思ひます。けれどもどうぞ今度はおきゝ入れ下さい。そしてどうか互に憎み合はずにすむ關係になりたいと心から願

ひます。」

彼女は、書き終つてからも暫く二枚の書簡箋を眺めて居る。感動して居たのか、平氣なのか自分ではつきりしない心の狀態であつた。仲子は念を入れて其を揃へ、疊み、封筒に入れ、自分で持つてポストまで入れに出かけた。

往きに心付かなかつたが、歸途何心なく上を見ると、空一杯の夕燒であつた。笹雲が彩り多く高い天に浮いて居る。稻妻が時々閃く。桑畑も杉の防風林も、はては遠い山脈まで耀きに恍惚溶け込んで居た。空氣は透明でそよりともしない。空を仰いで居ると、あゝ、やつとこれで重荷が下りるといふ心持が犇と迫り、仲子は四邊の靜けさや廣さや遠くに居る素子と一緒にその感動で擁きしめたいやうに感じた。東京に行きたい。………彼女は歩き出した。東京に行きたい……。行きたい。行きたい。テムポが次第に速くなり、仲子は段々矢も楯も堪らなくなつて來た。素子が歸る時、仲子は成らうことなら一緒に行きたい位であつた。彼女は其を、佃に對して自分がちやんと立場も明にして居ないのを考へて堪へた。今、兎に角一段落はついた。東京へ二三日行つても一ケ月の忍耐が無駄に成ることはあるまい。——仲子は、素子が今忙しい時ではないかと、日を繰つて見た。東京へ行くとしても、彼女は人の出入の多い、いつ佃の來るかもしれぬ動坂へ行くのは厭であつた。彼女は、素子の處へ行く積りであつた。そして、誰にも會はず、賑やかさと素子の皮肉な然し快い皷舞を吸ひ込んで來よう。

仲子は勢づいて歩いたが、急に、自分が一枚も單衣を持つて來て居ないことに思ひ當つた。袷で六月東京は歩けない。妙案が浮んだ。彼女はいそいで家に戻り、簞笥から藍縞の袷を出し、畑の向ふに住んで居、自分に月が鏡になればよいといふ俗謠をうたつて聞かせた婆さんのところへ持つて行つた。彼女はせき込んで賴んだ。

「これの裏を皆はがして、裾と襟をくけて頂戴、明日の朝までに。——單衣にするんだから」

其は染なほしで、裏は白く滑稽なのだが、伸子は羽織を着るから平氣と思つた。

(十)

動坂の家へ知らせない積りが、東京へ來る汽車中、思ひがけない人に會つた爲變更した。素子の家の近所の自働電話で、伸子は母を呼び出した。昨夕東京に歸つたと告げると、

「へえ……」

と母は疑はしいやうな不快に亢奮の籠つた聲を出した。

「妙なことがあるよ——佃は赤阪に居ないよ」それは如何ういふ意味なのか伸子には判斷がつかなかつた。

「私赤阪に行かないから知らないわ」

「何處に居るんです?」

「吉見さんのところ」

「——兎に角佃は赤阪に居ないよ」

多計代は、脅かすやうに又其を繰返した。

「Kからお前がいつ歸るかつて電報を打つてよこしたよ」

持つて廻り、意味ありげな口ぶりだつたので伸子は直接法に要點にふれた。

「——汽車の中でジョンストンさんに會つたら是非お會ひしたいから明日動坂へ上りますつて。私も行くから、其時いろ／＼伺ふわ」母は考へて居たが、きつぱり

「今直ぐ動坂へおいで」

と云つた。電話口の双方で暫く無言がつゞいた。仲子は、ぢやあ行きますと云つて電話を切つた。

タクシーに搖られ乍ら、仲子は、では佃がKへ行つたのか、と考へた。手紙を見て、昨日、彼は前日仲子が立つたといふ後へ行つたのだらう。勿論仲子は、あの手紙だけで萬事解決するとは思つて居なかつた。佃が文面を二三度繰返して讀み、仲子が本氣なのを知り、立つ決心をした時の心持が、彼女によく察せられた。彼は七分の不安と三分の動かし難い自信をもつて出かけたゞらう。何故なら、仲子が別になりたいと云ひ出したのはもう一年も昔であつた。彼女は鎌倉に暫く暮したり迄したが、結局、彼の涙や當座の熱に負けて來た。今度は少し頑固であらうが、此方も其だけ強硬に根氣づよくとりかゝればよい。さういふ佃の良人としての習慣的な態度が明らかに見え、仲子はうんざり腹立たしく、彼に對して抱いて居た或程度までの公平さ迄失ふやうな氣がした。今迄の自分とはもう違ふのだといふ、冷やかな反抗的な心持さへ頭を擡げた。

父と母が、難しい顏をして座つて居る。中へ仲子は入つて行つた。行くのを拒んであるKへ佃が無斷で出かけた。仲子は何時歸るといふ譯の分らない電報が來たのに、當人の居處は判らない。種々ごたごた疊り、而も底に何事が伏在して居るのか豫測がつかないところから、彼等は居心地わるい迷惑さで、ひどく不機嫌なのであつた。其感情は仲子に理解出來るのだが、何だか佃の側に立ち、自分をとつちめたり、あやまらせたりしたいやうな彼等の心持が仲子を傷つけた。夫婦間のごたごたが夫婦の間だけに止らず波及し、厭はしい心の陰翳を共に連れて見せ合はたければならない。自分の責と思つたが、仲子は、良人を愛してもいけないと云ひ、嫌つてもいけないと云ふらしい親心の微妙な作用を、皮肉に情けなく感じた。

佃に送つた手紙のことを話すと、親達は沈默した。やがて多計代が

「――一生の大事だから、熟考した上でないといけないね。――お前がそんな感情家で、一生孤獨な生活が出來るとは思はれないし」

と、始めてしんみり云つた。

「それは自分も知つて居るの。――考へるだけはもう一年も二年も、もつと永く考へて居たわ。でもね、私はもう理屈ぬきにやり切れなくなつて居るの。魚が水のない場所に生きてゐられない――それを、魚がわるいつていふ人はないでせう？――人間も同じ場合があると思ふわ」

「いづれ、明日でも會ふだらうが、よく考へた方がいゝね――結局、まあその方がいゝことになるかもしれないが……」

本當に勇氣のある人は温和だ。自分にもどうかその温和さの百分の一が授り、最後の會見を佃としたい。伸子はさう思ひ乍ら、夜床についた。

翌朝早く、佃から電話で伸子は起された。

「赤阪からお電話」

といふ聲をきくと、瞼がまだ開き切らない先いやな心持が胸を掠めるのを感じた。氣持を整へる餘裕を得る爲、着物をなほし、板の間へ出て行つた。

「もし〳〵」

いきなり

「もし〳〵、いつ歸ります」

と、急性な、喉の乾いたやうな佃の聲が皷膜を刺戟した。

「――今日ジョンストンさんがいらつしやるのお茶に。それがすんでから――」

「いそがしいんですか」

「――……」

「そんなにいそがしいなら、いつでもすきな時に歸つていらつしやい」

ガチャンと受話機をかけた音がした。

伸子は眠りなほしも出來ず、其まゝ起きた。一時間も經たないうち、又、赤阪から電話が來た。

「もし〳〵伸子さんですか」

今度は佃でなく、佃の親しい友人の織田の低い平らな聲であつた。何と云つてよいか判らず默つて居た。

「何時頃歸りますか」

「多分八時頃になるでせうと思ふけれど――貴方――そこにゐらつしやるの？」

「えゝ、昨夜泊つたんです――ではどうぞ」

尻切蜻蛉にぽつんと電話が切れた。佃と織田の二人の男が、「ぢや今度俺がかけて來てやらう」など落付かず話して居る部屋の光景を想ふと異様に物々しかつた。伸子は、悒しく思つた。

（十一）

赤阪へ行つたのは九時過であつた。

表の角から、人つ子一人通らない暗い早寝の横通りを歩いて行くと、竹垣の透間から佃の部屋の灯が煌々と往來まで洩れて居た。單衣の肩が薄寒いやうに感じつゝ其を眺め、仲子は暗い格子をあけた。佃が、弦の切れたやうな勢でとび出して來た。

「仲子?」

「——たゞいま」

彼は、仲子が下駄をぬぐのを待ち切れないやうにし兩手を執り、ぐんぐんつき當りの燈火のない部屋に彼女をつれて行つた。仲子は、暗闇で間誤付き椅子につき當り、其につかまつた。佃は猶手をはなさず、片腕に彼女を抱へるやうにし乍ら一つの椅子をずらし其にかけると、狂氣のやうな力で彼女を抱き締めた。彼は「Do you still love me?」と云ふなり、子供のやうに聲を擧げて泣き出した。彼は泣き乍ら仲子の頬に自分の頬をすりつけた。手を撫で、肩を撫で、髮を撫で、顫える大きい掌で壓し潰すやうに彼女の體ぢゆうを撫で廻した。——仲子は、凝つと動かず、なすがまゝにされた。彼の重い頭が彼女の胸の上にずつしりと靠れかゝつて居た。止途ない涙が生暖く着物を滲み通すのを感じ乍ら、仲子は彼の頭を抱き靜かに悲しみを以てその髮を撫でた。眼が闇に馴れ、嗚咽する毎に良人の肩が波打つのが暗い裡に見えた。茫然と其を見据え、仲子は自分に駭きぞつとし乍ら心で囁いた。

「——あゝ私は泣いて居ない…………泣いて居ない…………」

良人と共にわつと泣き出さない自分に駭き恐れつゝ、仲子は夢中で彼の頭を撫でた。彼女も俄に悪寒と嘔氣を感じ身震ひがした程、切なく、苦しく悲しいのであつた。けれども、どうしても涙は出ない。二人がこのやうに苦しまねばな

らないこと、而も死んだ愛は再び甦らず總てがもう直ぐ嘗てあつたことに歸さうとして居るといふ絶望的な意識、其等は伸子に呼吸の止るやうな苦惱を與へるのであつた。

「あゝ…………」

伸子は一層深く胸に近く佃の頭を抱きよせ彼の髮の上に自分の頰を休ませた。

「――私の愛した人！　あのやうに可愛くいとしくあつた人――互の間にどれ程涙が流されたことであらう！…………」

一言も口が利けず、涙も出ず、其爲胸が切なさで强直し伸子は氣を失ひさうになつた。彼女は眼を瞑り踠いた。佃は周章てゝ彼女を支へ、橫たはらせた。

佃は官能の嵐で、伸子の心を引き擾ひ、又自分の中へ取り戾さうとするやうであつた。伸子は始め拒絶した。が、終りに烈しく泣きつゝ自分から荒々しい悲しみで、、、、、の下に身を投げた。彼女は自らを傷る底知れぬ苦さと動亂した官能の火花との間を漂ひ乍ら、最後といふ字が大きく大きく物を云ひさうに頭の上の空間に書かれて居るのを知つた。

翌日、佃は勤めに出なかつた。

「私は、Kへ出かけかける時、來週迄缺勤屆を出して置いたのです。三日かかつたらどつちかに決定すると思つたから」

伸子は、良人が今度は全力的なのを感じた。全力を出したら彼女を思ひ返させ得るといふ確信の下に。

それは、一種の監禁であつた。その日は曇つて蒸暑かつたが、障子を閉め切り、狹い本箱の前の疊の上に膝をつき合はせて一日中對座した。食事の時だけ立つた。その食事も、伸子は止むなく座らされ、よく一人で考へて居た隅で所詮

は一つの返答を捏ね廻して居る間に、佃が自分で用意するのであつた。食べ終る。又彼は或は優しく、可恐く切り出した。

「――此那に頼んでも思ひ返して呉れないんですか。――私にだつて缺點はあつたのだらうから、きつと此からなほすと云つて居るのに。其でも君は一緒に生活しないといふのか」

仲子は、元氣なく彼を見上げ訊いた。

「――缺點をなほすからつて――ぢやあ貴方は何處が惡かつたの？」

「其那こと分るもんですか！」

彼は決然肩を聳すやうにして答へるのであつた。

「私は自分が惡かつたとは思はない。然し君がさういふから其那こともあるなら、なほさうといふのぢやあないか」

仲子は、溜息をつき、云つた。

「だからね、もう水掛論のやうなことはやめにしませう、ね。惡いと云へば二人がわるいのよ、喧嘩兩成敗よ。――たた、せめて少し物の分る人間らしくもつと傷け合ふこと丈はやめたいわ。」

暫く默つて居た後、佃は考へ深さうに云つた。

「仕事をする女でも、楢崎さんなんかあゝやつて立派にして居る――君だつてさう出來るんぢやないかなあ、それに、織田とも云つたんだが、さういふ苦しみは皆我々が十五年前に通つて來たものだ」

仲子は、苦笑で唇を歪めた。

「――貴方は楢崎氏？――第一、どうして貴方は私が何でも仕事仕事といふだけで生きて居られるとお思ひになるのか

しら。まるで變だわ——私はへぼ小說を書くより前、女に生れて來て居るのよ、而もまるで女なのに——……」

「それならばさ、」

彼は仲子の手の甲を、子供を賺すやうに撫でつゝ說服するやうに云つた。

「どうして、此那に愛して居る私のところから去らうとするの？え？僕はもうどうせ永く生きる體ではない。せめて死ぬまで僕の傍に居るだけでよい。居て下さいね？」

涙をためた眼で仲子を見守つて居たが、彼女が默つて居ると、佃は、毒々しい顏付になつた。そして、强迫するやうに云つた。

「——私はKで皆君の日記を讀んで來ましたよ」

——留守の机の廻りを、彼が動搖する感情でせわしく彼方此方かき探したどらう。何かこの當のない騷き立てられた不安に結びつける惱みの石、氣休めの石、何かは見つかるまいかと焦立つた彼の心が感じられた。日記を、彼女は机の上に出しつ放して來た。それには、素子に對し傾倒した自分の感情などが細かく書いてあるのであつた。

「…………」

佃は業を煮やし、もう一つの彈丸を放つた。

「——戶棚をあけたら、ごた〳〵の中から、君が動坂へやつた手紙が出た、那須から。——彼那手紙を書く人とは思はなかつた。實に意外だつた」

暑さ、苦しさ仲子は頭がぼつと成るやうだつた。再び夜が來た。彼は死なうとする蛾のやうに又仲子の上に兩腕を擴げようとした。

「あゝ、どうするのよ！どうしようといふのよ、私を！」

おい〱泣き出し止らず、泣きじやくり乍ら仲子は段々氣を失つた。

同じやうな恐ろしい二日目、仲子の神經はすつかり疲勞し始めた。夕方になつて、彼女はおがむやうに佃に云つた。」

「ね、氣が變になる迄お互に疲らしたつて同じことよ。——いざといふ手おくれになつて此那に貴方なさるなら、何故もつとずーつと前に、私の本氣を認めて下さらなかつたのでせう。どんなに苦しがつたつて離れられないさ、と高くくつて居らしつて…………」

「女はどうか知らないが一旦結婚して男は迚も一人で居られるもんぢやありませんよ——肉體的な意味でなしに——」

「——それはさうでせう。——…………でも貴方に本當に入用なのは細君である一人の女なのよ、私が細君だから離せないやうに思ふだけなのよ。强ち仲子に限つたことではないのよ。仲子だから、といふのでは決してないわ——…………」

嚙みつくやうに仲子を睨まへ、佃は

「ぢや、どうしてもいやだといふんですね」と念を押した。仲子は、こつくりと合點した。

「どうしても？」

「——えゝ。——どうしても……」

「それでいゝ！ その返事が聞きたかつたのだ！」

猛々しく彼は立ち上つた。そして、机の上から紙とペンをとつて來た。

「さあ、すつかり定つたから荷物の覺え書を作りませう」

白い書簡箋の中央に橫線をひき、上にT、下にNと頭字を書いた。

「それではと、机——いるでせう？椅子は僕も氣の毒だが三脚だけ貰つて置きます。それから箪笥と」

佃は眞蒼であつた。頰がげつそりして見えた。ペンを持つ人指し指に氣味惡い程力を入れ、書くのを、仲子は放心した

やうに見守つた。荷物を分ける……荷物を引とる……何といふ醜いいやな引き次ぎであらう。仲子は浅間しく、この瞬間其等家具類が一どに消えて無くなればよい、恥知らず！と思つた。

「ね、書かないだつてよくつてよ、私何にもいらないわ。――本と燒物だけあれば……」側はからりとペンを投げすて

「あゝ、親父が知つたらさぞ………」

と頭を掻き挘り泣き始めた。仲子には少し其が芝居じみて感じられた。其にも拘らず彼女の瞼から冷たい涙が溢れ、するする頬を傳つて膝の上に滴り落ちた。

側は、よろめくやうに歩いて、納戸から針金切の鋏みをもつて來た。そして、緣側に出、隅に作りつけてあつた小鳥籠の前に蹲んだ。紅雀や十姉妹が彼の姿に向つて羽搏いた。凝つと眺めて居たが

「あゝもう此那ものにも用はない！」

と呟きつゝ、鋏で網を剪り始めた。パリ、パリ、片端から網がめくれるのが、仲子の坐つて居るところから見えた。小鳥共は、俄な變動に驚き、片隅により集り、悲しげに騒ぎ立てた。大きい穴が出來ると、側は、はた〳〵裏を叩いた。礫のやうについと一羽の十姉妹が破れ目から庭へ飛び去つた。次いで紅雀、殘つた十姉妹、或者はすぐ緣側の前の沈丁花のこんもりした低い枝に止つた。或者は、もつと遠い梅の梢まで翔び、急に放たれた空氣の寒さと自由さを信じ得ないやうにチッチッと啼いた。すると、何を思つたのか、一羽の十姉妹が、緣側までふつと戻つて來た。頭を傾け、傾け、破られた網の口を見て居たが、ちよいと跳んで又元の籠に入つてしまつた。側も仲子も、鳥の動作にいつか氣を奪はれ眺めて居たが、彼は意外に十姉妹の戻つたのを見ると、いきなり、砕けさうに仲子の手を掴んだ。

「あゝ、あゝ、鳥でさへ歸つて來るのに――………君は……君は………」

（終）

苦々しい心が湧き、仲子は鳥籠から目を逸した。飼鳥になつては堪らない。さういふ心持がした。仲子の視線の行手に夕方の空が見えた。都會の卵色の濁つた夕空に庭の松が黒く見えた。非常に鮮やかにくつきり、松葉の一葉一葉が見えた。」

（終）

元の枝へ



元の枝へ

徳田秋聲

一

双方の子供のことで融と衝突して、自分の子供をつれて、ほんの化粧袋と、大分古びのついた金糸などのきら〳〵する手提とを持つて、このあひだ子供を繼母の手から取るために暫く歸つて行つてゐた田舎の家で、母に拵へてもらつたばかりの、ちよく〳〵着の大島の羽織を着て、不斷はあんなに肌ざはりの柔らかい、そして無邪氣で子供つぽい娘のやうな愛子も、自分の正義が少しでも枉屈(わうくつ)されたと感ずると、すぐあんな風に神經がびり〳〵して、鐵砲丸のやうに家を飛出してしまつてから、融は初めて自分がぼんやりしてゐる間に、足下から鳥がたつたやうな狼狽を感じたのであつた。

神經衰弱の發作とも言ふべき、しかもそれは融の持前のぼんやりさで、その時はすぐそのことの意味がわかりかねて、少したつとそれが段々批判的に解つて來る彼のことなので、愛子が朝から顏の硬ばつてゐる融の機嫌を直さうとして、色々に氣

をつかつてゐたにかゝはらず、何の意味もなしに、子供のやうに拗ねてゐるあひだに、多勢の融の子供たちのものである窮屈な家庭のなかに、繼母の手から漸く緩つて來たばかりの子供をつれて來てゐる彼女の微細な心遣が、子供をおいてやることが、何か愛子に對する恩惠であるやうにでも思つてゐるとしか考へられない融に汲取れなくて、今朝のやうな態度に出られたことが、彼女自身の不滿と正義感を極度に激發してしまつて、融の前に長いあひだ號泣してゐた果てに、到頭飛出してしまつたことが、今まで眠つてゐた融の頭腦に漸くわかつて來た。その事の是非は兎に角として、そんな激烈な感情の持主であることを、融は全く知らずにゐた。

若しかしたらと思つて、それとなく捜しに入つたM雜貨店にもゐなかつたところで、失望してそこを出て來た融の頭腦に、昨夕からのことが、初めて明確に浮んで來て、その時はさうも感じなかつた、ぴしつと彼の心を鞭つて來た愛子の痛烈な言葉や、女らしい優しい咲きや、好子をだいてじつと思案してゐた姿などが、はつきり思ひ出せて來た。

融は好子の手をひいて、すご〳〵家へ歸つて來た。そして机の前にすわつてぼんやりしてゐた。今し方まで洗面器に水を取つてくれたり、朝飯の給仕をしながら、そこにこちんと坐つて、箸を取つてゐる好子に、笑顏一つ見せることもできず、お愛相一つすることもしてくれない融のお給仕をしながら、幾度も台所へ涙をふきに行つたり、融の談話筆記を見てくれたりしてゐた彼女のいぢらしい姿が、まだこゝに在るやうな氣がした。勿論一旦厭になると、ぴしりとした態度で、弦を放れた矢のやうに思い切りよく離れて行く彼女であることは、融へ來るまでの外の場合の彼女の態度でもわかつてゐたけれど、あれほど自分に馴れ懐いて、何んなことがよしあらうとも離して行きさうには見えなかつた彼女が、迅雷耳をも掩ふに遑のない勢ひで出て行かうとは、思ひも設けなかつた。

融はまだ子供を引取らない前、愛子が出たといふよりは、融自身が彼女の自決を促したときと、それから今一つ、融

が乘出したのと二つの場合の愛子を憶出してゐた。

それは融がちよつとしたことで、子供らしい拗ね方をして、或夕方ふいと家を出たのであつた。勿論さう本質的な觸合ひではなかつた。融の大きい子供の芳太郎が、その時妙に浮ついた調子で、彼女を或劇場見物に誘つたことから、事件が、起つたのであつた。

「芳太郎さんが××劇場へ行かうと言つて下さるんですの。私先生と一緒ならいゝけれど、折角言つて下さるもんですから、行かないのも惡いでせう。お友達にお約束なすつたやうな樣子なの。」

そんな話を二三日前から、愛子が問題にして、二度ばかり融の顏色を覗つた。

融は別に何とも言はなかつた。子供がそんな風に愛子に好意をもつてくれることは、彼も不愉快ではなかつた。しかし友達のなかへ愛子を引張り出さうとする動機には、何か知ら愛子に對する惡戲な企てが巧まれてあるやうに感じられた。彼は今漸と色々の風評が少し落着きかけて來たばかりの愛子が、そこいらをふら〳〵歩くことを快しとしなかつた。それに本質的には相當の思慮をもつてゐることは信じても可いとしても、背廣などを着込んで、銀座邊をぶらついてゐる芳太郎が、そんな事で浮つき出しては困るとも思つた。見かけによらない、ひどく大人ぶつたところのある愛子が、寧ろ一般的に青年を汚ながつてゐることもわかつてゐたし、「先生は御自分のお子さんだからさうお思ひになるんでせうけれど、そんな氣持があるなら、世間にづゐぶん澤山の若い人がゐるぢやありませんか」などゝ言つてゐることも、彼女が人が思つてゐるほど、戀愛を遊ぶ女でなくて、本質はむしろ其の反對に、反つて實質を擇ぶ彼女であることを證據だてるくらいだつたけれど、融は何うかすると、危險を豫想したり、家庭悲劇を頭腦に描いたりすることがあつた。

「これには私も困る！」愛子はさう言つて、困惑の色を浮べた。
「現代の、殊にあの學校の學生なんて、みなあゝなんですよ先生。そんな惡氣なんて少しもありやしないのよ。たゞ若い女性が家庭にゐるといふことが、惡い感じがしないといふだけなのよ。先生もまさか本當にさう思つていらつしやるんぢやないでせうけれど、私も困るのよ。二人のことをよく解つて下さる芳太郎さんの感情を害しちや、立場に困ることもあるのよ。」
愛子はさう言つて自分を辯解したり、芳太郎を辯解したりしなければならないほど、何うかするとその頃の融は苦しんだ。
觀劇にさそはれたのが、ちやうどさうした氣分が高調に達してゐた頃であつた。するとの時刻少し前になると、行うか行くまいかと迷つてゐた愛子が、何う決していゝか判らなかつたので、困惑した表情で融のそばに坐つてゐるところへ、茶の窓の方に長男と二男が、帽子まで冠つて出るばかりにしてゐる、そわ〳〵した姿が往つたり來たりした。
「私困つてしまふわ。何うしたらいゝでせう。」
「行きたければ行けばいゝぢやないか。己は行つちやいけないと言つてやしない。」
「でも先生がお厭なら……。」
「厭ぢやないけれど、友達も行くといふのだつたら、ちよつと警戒しなければあ。きつと皆なで君を揶揄はうと言ふんだらうから。」
「それなら先生が、つれ出しては可けないと一と言いつて下さると、私もお斷はりしいんですの。親爺なんかいゝんで

すよなんて言つていらつしやるから。」

さう言つてゐるところへ、中折を少し阿彌陀に冠つた人の好ささうな表情をした芳太郎が、襖の陰から、手招きで「お出で／＼」をして見せた。

融は愛子が侮辱されてゐるのを感じた。

「何んだ。手招きしたり何かして、何だと思つてゐるんだ。」融は不愉快さうに言つた。そして愛子の顔を見ると、行きたさうにも思へるのであつた。

「行きたいんなら行くといゝ。歸りに不二屋なんか入られちや困るけれど。今は大事の時だから――行かないのも可笑しいからな。」

愛子は支度でもするつもりか何うか判らなかつたけれど、やがて融の傍を立つて茶の室の次ぎの部屋へ入つて行つた。そこには蝶子や美代子や、男の子供だちもゐた。芳太郎がまるで父を無視したやうに、頻りに二男とふざけてそこいらを徘徊してゐた。

融は奥の室へ行つて見た。

「行くんなら行つてもいゝんだよ。」融は少し怒り氣味で言つた。

「だつて先生が決めて下さらなくちや。」

「君の氣持で決めた方がいゝんだ。己は君を束縛しようといふんぢやないんだ。」そして子供たちに向つて、

「お前たちは一體何うしたといふんだ。己は眞面目なんだ。愛子は當分餘り外へ出したくないんだからね。」と脅かすやうに言つた。

悪氣のない彼等は、驚いたような顔をして、少し退つて融の眞劍立になつた顔を見てゐたが、やがて外へ出て行つた。三四日たつてから判つたことであつたが、彼等は、懐ろの温かい――その頃愛子の懐ろに、ちよつと思ひがけなく大きく纒まつて、田舍から送られた金のあることを、しつてゐたので、彼女にうんと奢らせるつもりで、事によると舶來のネキタイでも買はせるつもりで、銀座あたりへ誘ひ出さうとしたのであつた。が、孰にしても融には同じ結果であつた。

多分近所へ球でも撞きに行つたらしい子供たちは、暫らくすると勉強室に當てゝある裏の彼等の家へ歸つて、樂器なんか弄つてゐた。もう電燈がついた頃で、明るい快活な、彼等の話聲が庭ごしに聞えてゐた。それで先づ何のこともなく收まつた譯であつたが、融は何となくさつぱりしなかつた。愛子がゐるために、彼等の浮つくのも困ると思つたし、彼等のために折角新生活に入りかけようとしてゐる愛子が、踊り出すようでも困ると思つた。

「少し噂の鎭まるまで、自重してゐてくれなくちや困る。子供なら、安心だけれど、世間では變に思ふぢやないか。」

「だから私は行きたかないんですの。私をそんな女だとお思ひになつて？」

でも君の態度がもつとちやんとしてゐないと、子供たちにまで揶揄はれるぢやないか。」

「それあ先生、さう云ふ意味ぢやないんですのよ。今時の若い人達はみんな妹さんや何か連れて歩いたり、若い女と一緒に喫茶店へ入つたりなさるんですの。大きい人達の御機嫌を損ねると、空氣が險惡になつて居辛くなるぢやございませんか。」

「君自身の判斷をもちたまへ。一々己にきくんぢや困る。」

感情が少しこぐらかつて來た。そして愛子の所謂小癪の出て來た融は、「おい、羽織と外套」とぶり〳〵した調子で、

仕度をすると、そのまゝ家を出た。

傍にはらくしてゐる子供たちがゐなかつたら、愛子は隅の方へ融を引張りこんで行つて、いつもするやうに、きつと彼を抱き止めて、感情を釋すのに、さほど骨はをれなかつたであらうが、その時は子供たちが愛子と一緒にゐたので、彼女は玄關口の柱の蔭に立つたまゝ、默つて見てゐた。融は亡くなつた妻のやうに、青筋立てゝ我張つてゐたり、全く敵對的態度に出たりするやうな、片意地さの少しもない愛子のさうした態度を見ると、出て行くにも張合がなかつた。何んな場合にも、腹から融を怒らせてしまふやうな厭な氣質は彼女のどこにも見出せなかつた。たゞ正當と思ふことを主張する場合の強さには、妥協性がなかつた。

融はじつと見送つてゐた愛子が氣にかゝりながらも、いくらかせいくしたやうな氣持で、さつさと電車通りの方へ歩いて行つた。晩春の宵で空氣はおどんでゐたが、町の灯影には何となし潤ひがあつた。そして三丁目から切通しへ出て、廣小路の交叉點近くまで、ぶらくとしかし可なり迅い足どりで、久しぶりで落語でも聞かうと無意識に決めてゐたらしい方向の取り方で、すつすと歩いてゐた。

すると或る花屋の化粧品店の前を通つてゐるとき、背のすらりとした一人の女が、いきなり肩が擦れあふばかりに後からやつて來て、すいくと先きを切つて歩いて行くのに氣がついた。看ると鼠色の横縞の、融の氣に入つてゐた縮緬の不斷羽織を無雜作に着流して、フエルト草履をはいた其の後姿が、何だか後から來さうな豫感もしてゐた愛子であつた。

融はしかしちよつと狼狽した。そして愛子が五六間ばかり行つたところで、片意地にふと立ち止まつた。

「古い先生がまた出て來ましたね。」

よく愛子にさう言はれる融の癖であつた。「自然主義的否定」、「硬い小さい殼」、「ひねくれ魂情」、「片意地な僻み。」そ

んなものが總て、美しい殉情や、ロンマンチツクな戀愛や、センチメンタルな憧憬やに生きようとしてゐる若い愛子によつて「古い先生の影」といはれる小辯であつた。そしてそんな點では、亡くなつた妻との長い同棲生活によつて、すつかり硬い殼となつてしまつた生活の苔のやうなものに封されてゐた融の感情も、愛子の若くて高い情操によつて、いくらかづゝ釋し熔かされて行くやうな氣がするのであつた。婦人觀や社會觀などについても、はつきり知識的に自覺しないながらも、氣質や體驗から來たイブセニズムが彼女の體に流れてゐることは看過せなかつた。柔らかい婉美な感傷的な情緒のなかに包まれたものは、花火のやうな彼女の情熱と性格の強さとであつた。纖細な鋭い神經が、それを堅いでゐた、小節にかゝはらない、男性的なこんな氣慨のある女を、融は嘗て見たことがなかつた。

融は暗い横丁へ姿を消さうかと思つて、ちよつと踵を返したところで、五六間先きで立止つて後を振返つてゐる愛子に氣がついた融は仕方なし美術商の飾窓の前に立つて、見たくでもない新畫や彫刻を見てゐた。すると其處へ愛子も寄つて來た。

「先生。」愛子はいつもの調子で呼びかけて、「私足袋もはかずに、こんな身裝で飛出して來ましたの。先生を見はぐつちや大變だと思つて。どこへ入らつしやるお積りでしたの。」

「どこと云ふ當てもないのさ。仕方がないから暇つぶしに寄席へでも入らうかと思つて。」融はその上小意地の張りやうがなかつた。

「さうつ。私寄席も嫌ひぢやないんですの。」

「行つたことある？」

「え、××屋にゐるとき。」

「誰と？」

「女中とだわ。」

「入つてみない？」

「入つてもよござんす。」

「一時間ばかりね。」

しかし彼女は餘り氣が進まないらしかつた。都會生活といつても、前後一年と少しばかりしか東京の空氣を吸つた譯ではなかつた。それも下宿か旅館で過されたのが、大部分で、都會の家庭生活にも享樂にも丸るきり不通だといつても可いくらゐであつた。おほまかな田舍の家庭で、たぷ／＼した物資生活に育つて來た彼女の目には、都會化された人間ほど、都會ずれのした狡さをもつてゐるとしか見えなかつた。普通の大きな劇場は亦單に衣裳を見せ衒かしに行く子女の歡樂場としか思へなかつた。

明るい廣小路を、二人は肩をならべて歩いた。今夜に限らず、融は人の目を惹く愛子と並んで歩くのが、何となく極りが惡かつた。これがもつと氣兼ねなしに一緒にあるけるやうな年頃の女だつたら……と彼は出る度にさう思つた。しかしそれにも段々狎れて來た。

寄席の前へ來た。しかしそこへ入るには、何となし愛子の氣分が相應はなかつた。融も愛子と一緒に、そんなだらけた娛樂場へなぞ入るのが、詰らなくなつて來た。

「何うしようかな。」融は躊躇した。

「先生。」愛子は呼びかけた。

「私それよりか、今夜鏡臺を一つ買はうと思ふの。」

「鏡臺！」

「資生堂と思ふんですけれど、この邊で買つても可いの。やつぱり簞笥と鏡臺くらゐは自分のをもつてゐないと、子供さんが御母さんのものを使はれるなんて、變にお思ひになるらしいの。外の方はさうでもないけれど、鉞三郎さんが、それは煩さいの。」

「あいつは仕様がないな。」

「いゝえ、それは子供さんのことだし、別に惡氣はないんですけれど、何だかお茶もらひと言つた形で、私も辛いんですの。結婚すれば母もちやんとした仕度はしてくれると言つてますのよ。それはそれとして、先の奥さんのものは、一つでも使ひたくないと思ふの。」

「お金があるの。」

「ここに持つてゐますの。」

「引出したの。」融は咎めるやうに言つた。

「えゝあんなお金なんか、使つたつていゝんですわ。」

「可けないな。」

「でも差當り入るものだけは、何うしても買はなけあなりませんもの。その代り着物と羽織とを、もう二三枚も落着いた地味なものを作れば、あとは何んにもほしかありません。」

「それぢや、仲町にそんなものを賣る家がある。上物ばかりもつてゐる家だ。Tさんが取りつけの……。多分鏡台もあ

つたと思ふ。」

Tさんといふのは融の親友の、先づ大きいブルジョアであつた。融は時々Tとこの邊へ散歩に來て、そこへ寄つたことがあつた。

「そう。それぢやそこでも可いわ。」

二人は明るい物綺麗な店のならんでゐる、賑やかな狹い通りへ入つて行つた。

藝者町にちかいその邊の店では、もう浴衣地なんかゞ出てゐて、愛子が融のために、一反自分で見立てると言つてゐたところから、そんな店をも覗いたりした。そして其の店で、下町の女がもつやうな夏向きの裂の手提を一つ見つけて、買ひさうにしてゐた。

「およし、そんなもの。」

「でもあれは十分憊れてゐますし、芳太郎さんがづゐぶん汚なくなりましたねつて言つてゐましたから。」

「そんなものはお止し。」融は頭ごなしに言つて、連れだしてしまつた。

それから福神漬など買つて、目ざして來た、色々んな凝つた家具類をもつてゐる店の前へ來たとき、飾店に一つの桑の鏡台の出てゐるのを、二人で暫らく見てゐた。

「先生、私こんなんでなしに、丸いのがほしいんですけれど、でも買ひに行くのが面倒だから、これでも可いわ。」

「ぢや入つて見よう。」融はさう言つて、づん〳〵入つて行つた。

「鏡臺を一つ見たいんですが。」

すると愛子は傍から、「鏡が好くなくちやあ。」

番頭たちによつて、鏡臺が大小二つばかり其處へ持出された。

「鏡は皆な上等でございます。」

ちよつと低く小ぢんまりして、意氣に出來たのは、木が少しわるい代りに、細工が特殊のものであつた。それが融の氣に入つたけれど、又た餘り凝りすぎてゐるやうにも思へた。それに抽出しなぞもさう深く出來てゐなかつた。値段は大きい方が矢張り高いのであつた。愛子はこんなものは鏡さへ正しければ、もう少し安いのゝ方が手頃のやうに思つたらしかつたが、しかしそれも氣に入らないことはなかつた。で、暫らく選擇に迷つた果てに、やつぱり大きい方に決めてしまつた。愛子は帶のあひだから厚ぼつたいふくらんだ小型の蟇口を出して、金を拂つてゐたが、それと同時に、

「先生、今夜出た序でに簞笥も一つ買ひたいわ。」

「金があるの。」

「お金は少し餘分に出しておきましたの。」愛子は遠慮がちに言ふのであつた。

「簞笥屋がありますか知ら。どこか此の邊に。」

お神さんが中途から店頭へ來てゐて、

「ございます。手前共の懇意にしてゐる職人の店が、すぐ其處に電車通りにございますから、何なら御案内申しませう。もう極手堅い男ですから、三越や何かでお求めになるよりか、好いお品がずつとお恰好に願へますので。」

やがてお神が福神漬をさげて案内してくれた。

簞笥は直きに極まつた。愛子は華車な指頭で、ばら／＼と札を數へてそこに置いた。

「ではお鏡臺と御一緒に明日おとゞけ致しますですから。」

二人は店の前でお神に別れた。

「先生もやつぱり好いものが目についてしまふ方ね。」愛子は呟いた。

少し歩いてから融は獨語のやうに呟いた。

「死んだ家内が、あゝ云ふ簞笥を一つ買ひたがつてゐたんだけれど」

「奥さんを思ひ出したの。買つてあげなくて可哀さうだとお思ひになるの。」

「そんなこともないけれど。」

「でも先生の奥さんは幸福よ。二十五年も先生にあんなに愛されていらしたんですもの。」

「愛しもしなかつたけれど、愛されもしなかつた。」

「でも皆なが仲が好かつたと言つてゐたわ。」

「嘘だよ。」

「先生には移らない奥さまだつたわ。あの丸髷がきよとんと上の方で高くなつて、あれをもう少し低くなさるとよかつたのね。でも頸足の餘り長くない方でしたから。私奥さまを惡く言ふんぢやないのね。あの方はあの方として、それは好い方なのよ。先生の奥さまはお若いときは意氣だつたんですてね。」

「さあ―」

「よう〳〵。」愛子はいつも彼女の唄の出るときに、口にするやうなお排らからを言つて、

「でも去年の秋、私が田舎へ歸るとき、蝶子ちやんの手をひいて宿へ來て下すつたときの束髪と齊附は、よくお似合ひでしたわ。束髪があんなに能くお似合ひになつて、お上品に見えるのに、何うしてお結ひにならなかつたんでせう。お

年を召して、毛がわるくなると、丸髷はいけないのね。」

「もう止さうよ。」

「あの時貴方が一度宿へ行つてみませうと仰つたから、私御一緒に御飯を食べるつもりで、先生のお好きさうな御馳走をうんと誂へてお待ちしてゐたのに、先生つてば奥さまにお菓子なんかお持たせになつて。奥さまから戴くお土産なんかちつとも有難くなかつた。私あのとき何んなに先生をお待ちしたか。宅が上れないからなんて、随分だと思つたわ。」

「そんな事知らなかつたな。家内に何か話でもするかと思つてゐたんで。結婚のことで悩んでゐたから。それに僕は愛子の宿へなんか氣が差して迚も行けなかつた。」

「でもあの時の奥さまは、迚も感じがよかつたの。奥さまには隨分冷淡に扱はれたけれど。」

「さう？」

「私苦しくなつてくると、よく先生のお宅へ泣きに上つたもんですけれど、あの板塀のところまで行くと、御門が開けにくゝつて、いつでも躊躇したものなのよ。それで御門をくゞると、あゝ到頭又た來てしまつたと思ふのよ。先生のそのお目で、いつでも私は見張られてるやうな氣もしたし、先生がいらつしやる時は、泣かしていたゞけるんですけれど、お留守のときの奥さまの態度だつたら、迚も侮辱を感じたわ。」

「その癖僕がゐたつて、長く話してはゐなかつたぢやないか。蒲團も敷かずに、入口の方に小さくなつて。」

「先生のお時間の貴重なことを、よく知つてゐますから。あの短い時間が迚も大切だつたの、さう云ふ快々するときは、Pカフエへ遊びに行つたらいゝでせうつて、先生が仰つたぢやありませんか。」

「そんなこと言つた。あの時の愛子の暗黒時代だ。もつと目を見張ればよかつた。

「一度なんか、たしかに先生のお聲が聞えたの。尤も夜分に上るのが失禮だけれど。何でも奥さまと長火鉢のところに、お睦まじくお話していらしたに違ひないの。」

「そんなことはない。」融は揉つたさうに笑つた。

「でも先生は私をお好きだつたのね。」

「初めからね。しかしから云ふことは、豫想しようとも思はなかつた。」

それから其へと過去の記憶が出た。暗い裏通の近道を通るとき、二人は少し離れてゐた。

「先生、もう今夜のやうに拗ねるのは止して頂戴ね。私はら〳〵してしまふのよ。」

融はぎやふんと參つてしまつた。彼は腹をかゝへるやうにして笑ひつゞけた。

二

そんな場合の愛子を、彼女に出て行かれた今、融は舌頭に殘された甘さを味はうやうにそぞろに思ひ出してゐたらそんなに大人つぽい彼女なのに、融に父のやうな年をしてゐながら飛出して行く彼女を止めることすら出來なくて、一緒に憤つてしまつたのであつた。そして其は、彼女が長けてゐると人に思はれてゐるらしい。戀愛のテクニックとも一概には言へなかつた。彼女の戀愛は決して都會ずれのした女のそれのようにテクニカルのものではなかつた。勿論さうした痴情の場合と、今の、子供に關する、可なり深刻味の加はつて來た問題とは、一つに言へなかつた。同じ頭へ手をあげるにしても、痴情のうへのことなら、彼女がいつも言つてゐるとほりに、怒らせなくても濟むのであつた。

融はしかし、そんな場合の愛子が眞實なのか。今の愛子が眞實なのか、それも解らなくなつて來た。

融は又こんな場合の愛子をも、暗い心に思ひ出してゐた。

それは或る遲い朝　融が長火鉢の傍で、朝とも晝ともつかぬ飯を食つて、新聞なんか見てゐたときである。子供は一人も四邊にゐなかつた。古くから居なじんで家の勝手をよく知つてゐる女中のおしづが、散らかつた次ぎの四疊半を片着けてゐた。彼女はずんぐりした太鼓の胴のやうな軀の持主で、働き方が餘り敏捷でなかつた。その時も彼女は隅の方で、牛のやうに坐り込んで着物を丁寧に疊んでゐた。すると　其を看てゐた愛子がじれつたさうに少し尖つた聲で言つた。

「しづやさんはよく働いてくれるけれど、仕事が鈍くて困るわ。そんなに馬鹿丁寧にしなくても可いから、もつとさつさと速くするんですよ。」

融は亡妻の仕事の叮嚀すぎるのが、餘り氣に入つてゐなかつた。でもそれには氣轉が伴つてゐた。長いあひだ子供たちのために働いてくれた、亡妻の母親は、それにまた輪をかけたほど叮嚀で、氣が利くかはりに愚鈍さが伴つてゐた。しづやの働き方が、いくらか其に似たものであつた。

「亡くなつた家内のお仕込みだもの、仕方がない。」融は喙を容れた。

すると愛子は顏を少しかくして、劍のある目に興奮の色を浮べた。

「奥さんはそれは先生の世話女房で、さう云ふことが生命でいらしたんですもの。長火鉢のお掃除だとか、お煮物だのお漬物だの、そんなことがお上手だつたんでせうけれど、でも家庭人として、そんな匂ひのしみこんだ先生を見るのは、私迚も堪らない藝術家としてお仕へする私の先生に、奥さまの影がさすのは、遣れ切れないことだわ。」愛子は例の尖鋭な調子で、融にかゝつて來た。

「仕方がないぢやないか。」融も少し神經を苛つかせた。

「私奥さんを惡く言ふんぢやないのよ。奥さんは奥さんでそれで可いのよ。でも先生までが、さう云ふ風に、何でもかでも奥さんのお仕込みでなくてはならないやうに仰られると、私考へなけあなりませんわ。」

爭ひが少しつゞいた。融は鋭い愛子の舌鋒を受け切れなくなつた。それは毒氣のない、爽かな感じのものであつたけれど、同時に妥協性のないものでもあつた。

「そんなに言ふなら仕方がない。僕は今更ら家庭から脫れる譯にも行かない。君がさうむづかしく考へるんなら、別れる外ない。」

「えゝ、これぢや私逆も駄目。」愛子も眉をぴりりとさせた。

「ぢや即刻自決したまへ。もと君から進んで來たことで、僕は君の眞實を信じて此處まで進んで來たんだけれど、さう一々攻擊されちや遣り切れない。」

愛子は俄かに長火鉢を離れて、簞笥のうへから鏡台をおろした。そしてちやうど融の後ろに當る、次ぎの四疊半の片隅へ持出して、化粧に取りかかつた。融もふいと書齋に立籠つてしまつたが、やつぱり心が引かれた。そして暫らくすると、しづやに着ものを出させて、急いで外出の仕度に取りかゝつた。

「僕はちよつと出る。君の出て行くのを見てゐられないから。」融は鏡に向つて、白い肌を肩まで出して、お化粧をしてゐる愛子の後ろから聲かけて、そのまゝ家を出た。

どこへ行かうかと迷つてゐる彼の足には、餘り彈力がなかつた。彼はほんとに怒つてはゐなかつた。愛子に對しては心からの怒りは發しえない彼であつた。彼は現在の愛子がほんとに自分を愛してゐることを知つてゐた。勿論いつまで

も一つの枝に止まりきりでゐられる愛子であるか何うかは解らなかつたし、若い前途の多い彼女を、いつまでも持ちきれる自分だとも思へなかつた。愛子をもつてゐるといふ其事が、老年にしては餘りにも生活の負擔の多い彼に取つては、既に業に一つの努力であつた。若い夢の多い、そして其と同時に、其の若い夢に、幻滅の悲哀を見るのが厭さに、相當打算ももたないではゐられないであらう彼女が、女性の美しさを保持するためばかりでも、融の家庭のやうな貧弱で、そして其は忍ぶとしても、何時までたつても自分のものには到底成切らない事情の見えすいてゐる小さな巣に縮こまつてゐる愛子でないことは、融にも略見當がついてゐた。

「私が最後のものである先生がお亡くなりになれば、私も死にます。」さう言ふ彼女の心持、その日その時には眞實であつても、それも彼女の憧憬癖から來た夢に溺れた言葉としか思へなかつた。

けれど頭腦のうへでさう思つても、彼の執著は既に強いものとなつてしまつてゐた。

融は自分が出たあとで、愛子が多分出るであらうと思つたが、しかし又出て行かないかも知れないと云ふ氣もしてゐた。彼は愛子との關係について、時々苦惱の遣場にしてゐた友人のTさんのところへと、自然に足が向いて行つた。

「多分もう歸らないだらうと思ふね。」融は憂鬱な表情に、强ひて落着を見せながら、否定的な口吻を洩した。

「さう。それなら其でもいゝぢやないか。」

Tさんはちやうど銀座へ買ひものに出かけるところだつたので、融も散歩がてら自動車に同乘することにしたが、賢は呑氣な顏をして人の買ひものなどに附き合つてゐるやうた餘裕はなかつた。それにあゝは言つても、出先きをほど女中に示して出て來た心持がわかつてくれるなら、事によると家にゐるかも知れないと、融は心に望みを繋いでゐた。

「事によると愛子は家にゐるかも知れないんだ。」融は自動車に乘らうとして、ちよつと躊躇した。

「さうね」Tさんは孰でもいゝと云ふ風ににこ〳〵してゐた。

「氣にかゝるから、ちよつと見てこようかと思ふ。もし居たら連れて行つてもいゝかね。」

融はTさんも、個人としての愛子に好感をもつてゐることを知つてゐた。最初融が彼女を紹介したときから、Tさんに與へた愛子の印象は惡くはなかつた。で、融は大抵のことはTさんに打明けてゐた。Tさんの夫人がちやうど病氣であつたので、そんな買ひものに愛子を引張つて行くのも、さう不自然ではないと思はれた。

しかし融が急いで家へ引返してみると、愛子の履物が玄關にはみえなかつた。彼は目先きが暗くなつた。

「やつぱり行つてしまつたんだ。」融はさう思ひながら、女中を呼び出して聽いた。

「先刻お出になりました。」

融は力がぬけたが、仕方なし通りの方に待つてゐる、Tさんの自動車まで急いで行つた。

融は愈よTさんに附合つてゐる空もないほど、氣落ちがした。

「到頭行つてしまつた。」融は空洞な笑ひ方をした。

「さう。やつぱり若いから氣が動くんだらう。それならそれで君も落着いた方がいゝぢやないか。」

しかし此の場合、融はさうは言つてゐられなかつた。不幸であるにつけ、幸福であるにつけ、彼の氣分はこの頃いつでも緊張しきつてゐた。緊張するといふよりも、寧ろ今までの生活の全部を洗ひおとしたやうな、別の人間に拔けかはらうとしてゐた。一切の生活興味の中樞が、愛子におかれてゐることを感じた。妻の突然の死によつて摧がれた彼の生活は、それが幾分彼を家庭の窒息から免かれしめる機緣となりうるにしろ、それだけに又た、たとひ一時であるにしても、翼の片方が折れてしまつたか、片足がもげてしまつたやうな生活上の支障を感じた。それよりも先づ第一に人の世

の果敢なさと、幸福の目の先きに横はつてゐる暗い陥穽の恐ろしさに戦いた。そして今彼はへたばらうとした地びたから、いきなり天上界への綱渡りのやうな危い藝當へと引張りあげられてゐた。底の知れない、暗いとも明るいとも、恐ろしいとも、樂しいともつかない、地獄の口をのぞいて來たやうな、絶望と安易との孰ともつかない、黄昏の寂しい空に懸つてゐるやうな彼の心は、辛くも愛子によつて、萎みがちな生命の衰へを支へてゐた。けれど、不自然な其の愛の生活の底に流れてゐる哀感が又た二重に彼を悩ませてゐた。彼はそれを見まいとしてゐた。彼女の愛の前には、それが消されてゐた。

融たちの乘つてゐる自動車は、いつか下町の繁華の眞中へ乘り出してゐた。彼の目にふれる一切のものが空虚で無價値であつた。その邊をうよ／＼歩いてゐる人間の顔といふ顔が、石塊か木片のやうに馬鹿げて見えた

融たちはやがて自動車をおりて、どこも此處もつる／＼した雜貨店の人込みへ吸ひこまれて行つた。Tさんは先づ人形の並んでゐるところへと急いだ。それがちやうど五月幟の飾られようとしてゐる五月に近い頃だつたので。

「人の顔がみんな瓢箪のやうに間ぬけてみえる。肥つてゐれば、此の人は何んだつてこんなに肥つてゐるんだらうと思ふし、脊の高い、のつぺりした人を見れば、この人は何んだつてこんなにひよろ／＼してゐるんだらうと思うわ。」

愛子がさう言つてゐるとほりに、融の今の目にも總ての女が淡かに姿を消してしまつてゐた。美しければ美しいで物足りなかつたし、醜くければ醜いで亦詰らなくて仕方がなかつた。

Tさんはしかし融のそんな氣持とは風馬牛であつた。彼は何んにも目に入らなかつたが、入らない理由が融とちがつてゐた。Tさんには平和な家庭や、親のそろつた子供たちがあつた。融は愛子を抜きにした自分の家庭を振返ると、そこには唯母をもたない哀れな子供たちの、散漫な集合があるだけであつた。

Tさんは片端から買ひものに取りかゝつた。田舍へ送る五月人形、初夏の子供のエプロン、それから幾足かの靴足袋、キャンデーやデセールのやうな菓子、そしてさう言つた日用品がほゞ揃つたところで、更に家具を見たり、繪畫や美術品を見てまはつたりした。二人は室から室、階段から階段へと、目まぐるしい人の間を縫つて、ぐる／＼廻つてゐるうちに、買ひものゝ嵩ばつた包みの幾つかゞ、持切れないほどTさんの兩手に垂下つてしまつた。Tさんは躊躇してゐた。

融にはその時間が惱ましくてならなかつた。何を見ても興味がなかつた。妻と時々一緒に買ひものに來たときのやうな、それでもいくらかそんなものに興味をもつた彼の氣分は、妻を失つてからの彼には、どこにも見出せなかつた。Tさんの買ひものを滿載した自動車に同乘して、家に歸へつて來たのは、慵い初夏の長い日も彼此れ夕氣づく頃であつた。

急いで門をあけて入ると、古びた格子戸をすかして、桃色の爪革のかゝつた黑塗の日和下駄が、ちやんとそこに爪先をそろへて愛らしく並んでゐるのが目についた。

融はやつと吻とした。

で、格子戸を開けて、上り框へ上ると、茶の間の方から、黑い目をおど／＼させながら、愛子がひよいと顏を出した。そして融が出した帽子を默つて受取つた。

融の頭腦はすつかり明るくなつてしまつた。くしや／＼になつた心が、暢びやかに慰されて行つた。

「お歸りなさいまし。」彼女は机の前にすわつてゐる融に、遠いところから更まつてお辭儀をした。

「どこへ行つてゐたの。僕はTさんの買ひものをお供をして行つたけれど、少しも面白くなかつた。」

「私は子供のことで、此のあひだ手紙をよこしてくれた松木のお友達があつたでせう。丸の内の事務所にゐるの。その人に遇つて來ましたわ。」

「さう。銀座邊を歩きはしない。」

「あの邊へ行けば、ちよつと行つて見たくなるぢやないか。」

「銀座へは行きませんでしたけれど、土橋で寫眞を寫して來ましたわ。」

「呑氣だな。僕はそれ處ぢやなかつた。」

「私も一人で詰らかつたわ。」

愛子はさう言ひながら、彼の側へ寄つて來た。そしてしんなりした腕を彼の膝に差のべた。「何うして歸つて來たんだつて言はれるかと私思つたわ。でも貴方が帽子をお出しになつたんで……。」愛子はさう言つて、目に一杯の笑みをたゝへながら、少し顏を紅らめた。

「何んなことがあつても、私を見捨てないでね。」

「僕をおいて行つちやいけない。僕は何處かへ行つてしまつたと思つた。何んだつて出て行つたんだ。」

「即刻自決しろなんて、あんなこと言はれて、づうづうしく私がゐられるもんですか。おい、君、自決したまへ！先生つてば隨分思ひ切つたこと言ふ方ね。でも逆も好いわ。」

「君のまたあの攻め方の鋭さと言つたら、僕は逆も敵はない。」

夜が迫つて來た。

三

融はその時の愛子をも思ひ出した。その目や手がそつくり彼の感覺に宿つてゐた。しかし子供が出て來てからの愛子は、もう其時の愛子ではなかつた。彼女の心は二つに分裂しかけて來た。今の場合の愛子は、容易に歸へつて來さうに思へなかつた。融は愛子が今頃何處へ落着いてゐるかと、それが氣になつてならかつた。するとちやうど其の時、蝶子が額を顰めながら、二度ばかり厠へ通ふのに氣がついた。

「何うしたの。やつぱり惡いの。」

蝶子は茶の室で、しづやに縋つて、めそ〳〵してゐた。

「え、何だかお腹が痛いんですつて。」

融は急いで傍へ行つた。そして額に手を當てゝ見た。熱がいくらかあるやうに感じられた。やつぱり醫師に診てもらつた方がよかつたと思つた。

「寢んねしておいで、しづやにお床を延べてもらつてね。」

急に蝶子の姿までが寂しく見えて來た。

融はしづやに吩咐けて、掛りつけの醫師のN氏を迎へさせた。醫師の來るあいだも、蝶子は時々鳩尾の痛みを訴へてめそ〳〵泣いてゐた。それは一つは愛子のゐなくなつた寂しさからでもあつた。

「おばちやんは！」蝶子は融の顏を見ると、遠慮ぶかさうにそつと訊いた。

「さあ、何處へ行つたかね。田舍へ歸つたかも知れないね。お父さんが惡かつたね。お前のおばちやんを出してしまつ

て。でもおばちやんがゐなくても可いだらう。おばちやんには好子があるんだからね。」

蝶子は目に一杯涙をためて、遣瀨ない表情をした。

「やつぱり居る方がいゝ？」

融は子供の傍を離れると、至急報で愛子の實家へ電報をうつた。それから愛子が家を出たので、多分そつちへ歸つたんだらうと思ふ。若しさうだつたら、この手紙を讀んでもらいたいと云ふ、斷り書をして、愛子への手紙を封じて、母親へあてた手紙も書いた。

さうしてゐるうちにN氏がやつて來て、蝶子を診察した。いつもの胃腸病であつた。お極まりの手當が施された。

「ちやうど手がないので、迚も看護が行屆かないでせうから、お知合ひの看護婦があつたら一人お願ひしたいんですが。」融はN氏に賴んだ。

「さう！」N氏はそれも少し大業だと云ふ風に笑つてゐたが、融が少し興奮してゐるので、直ぐ誰か一人寄越すやうに言つて歸つて行つた。

融はこんな時、誰も寄りついて來るものもないことを、いくらか心細く思つた。しかし誰か賴む日になれば、やつぱり長い因緣が附絡つて、それから其へと小煩い問題のために、兎角氣分を攪亂されがちになることは、今迄の經驗でよく判つた。それも主婦があつてのことで、統御する主婦のない家庭では埃々したそれらの人達の寄つてくることは、家庭を徒に混亂と爭鬪の禍のなかに陷ればとて、決して好い結果にならないことは、妻の存生中にすら痛いほど經驗させられた融には、判りすぎるほど判つてゐた。彼等のなかには本當に善良で親切で、比較的賑やかな妻の氣分に集まつて來る人も少なくはなかつたが、身寄のものとなると、大抵は氣の許せないものばかりであつた。今融は勝手口から入つてくる

其等の人を、愛子を家へ入れると共に、ずば〱切放してしまつてゐた。或るものは自發的に寄りつかなくなつてゐた。融は生活の單純化を欲してゐた。

融はしかし、氣持の上の大きな支柱であつた愛子に出て行かれると、それらの人々に餘り一刻な態度を取つたことが、心寂しくも思はれた。彼は電報と手紙を出してから、弱い心臟では迚も堪へ切れない惱みを推こたへようとして、じつと机の前にすわつてゐた。蝶子の苦痛を訴へる聲が、しみ入るやうに彼の胸にひゞいた。

「何うしたの。」融は傍へ行つた。

蝶子は劇しく胸が痛むらしかつた。融はそれを氷で冷させなどしながら、彼女の愛子の慕ひ方が普通の愛情以上のものであることが解つて來た。

「おばちやん、おばちやん!」蝶子はだら〱涙を流しながら愛子を呼ぶのであつた。

看護婦の來たのは、九時頃であつた。三十ばかりの怜悧な顔をした、普通婦人としても物解りの好ささうな女であつた。夫が藥學士であることも、後で解つた。

彼女は直きに蝶子の傍に寄り添つて、體溫を計つたり、氷をつけ替へたりした。

「好い兒ですね。苦しいんですの。氷で冷しておくと直き快くなりますからね。」看護婦は優しい言葉をかけながら、蝶子の蒲團の端に横になつて劬はらうとしたが、優しくすればするほど、蝶子は親しみない表情をして、後ろを向いてしまふのであつた。そして間歇的に、口についてゐる「おばちやん〱」を繰返してゐた。

融は仕方なし暫らく其の傍に寢てゐたが、するうち蝶子はうつら〱眠つた。

長男がふらりと外から歸つて來た。融はその時ぽつねんと書齋にすわつて、返電の來るのを待つてゐた。

「蝶子病氣ですか。」
「さうさ。」
「また胃腸ですか。」
「心臓も高い。それに愛子がゐなくなつたんでね。」
「松木さん、何處かへ行つたんですか。」
「子供のことで、少し問題が起つたんだ。已が打つたり何かしたもんで。あの女迚も面白い。しかしもう歸らないかもしれない。多分田舍へ歸つたんだらうと思ふけれど、何うかな。先刻電報をうつて見たんだけれど、何んだか東京にゐるやうな氣もする。旅の仕度をして行つた譯でもないし、ほんの化粧袋と手提を、それに好子の玩具や何か……。」
「ぢや東京にゐるでせう。」
「さあ。出るまでにはづゐぶん思案もしたやうだし、可なり思ひ詰めてもゐたやうだから。」
「やつぱりノラかね。新聞なんか巧い名をつけるもんですね。」
「あれは嘲弄の意味だけれど、さうでなしに眞實の意味のノラだね。だから言ふことは正しい、ぐつと思ひつめると妥協する余地がなくなつてしまふんだ。迚も強い。」
「女は強いもんですよ。戀愛にかけちや男はいつでも弱者ですよ。」
「戀愛問題ぢやないんだ。それもあるかもしれないけれど、それよりも子供の問題さ。子供が多勢の敵のなかに孤立になつてゐるやうな氣がすると、まるで雛子をかばふ牝鷄のやうに、迚も眞劍になるんだ。」
「止めればよかつたですね。」

「止めても見たんだけれどもね。迚でもつけて行けば引止めることが出來たかもしれないけれど、已も怒つてしまつたからな。」

父子はしばらく愛子の噂に時を移してゐた。返電の來たのは夜が更けてからであつた。

「マダデンシヤツカヌ、ツキシダイカヘス、テフコサマオダイジニ」

母から來た返電の文句は叮重であつた。

融は夜深まで話好きな芳太郎と話してゐた。そして寂しい寢床に就いたとき彼は可なり疲れてゐる自分に氣がついた。神經衰弱の酷くなつてゐることと、心臟の弱つてゐることが、覿面に判るのであつた。彼はもう長いあひだ神經衰弱の募つてゐることを感じてゐた。持病が進んで、身心の衰へを感じたのも去年の夏の末からであつた。妻を失つてから一層それが進んでゐた。たゞ愛子との同棲で、それを忘れてゐるだけであつた。そして愛子がゐなくなると、弱い心臟が病氣に罹つたやうに惱むのであつた。

融は床に横はつて、胸に手をおいて靜かに目をつぶつた。そして少しうと〳〵したかと思ふと、苦しい幻覺に胸を壓された、彼は生きるに物憂い此頃の自分に泣いてゐた。

四

翌朝目がさめると、融はちよつと物忘れしたやうな、さつぱりした頭腦になつてゐる自分を怪んだ。彼は枕のうへから顏をあげて、障子をあけて庭を見ながら、烟草をふかした。

「この分なら。」彼は成るべく其の狀態のつゞくことを希つた。そして成るべく愛子のことを考へないやうにと努めた。

朝の頭腦を一日擾亂さないやうにと願つた。

「今日は本でも讀まう。」融はそんな事を考へながら、そつと床を離れた出てみると、茶の間や病室が、昨日とちがつて、ひどくきちんと整頓されてゐた。痛むときの外さう手のかゝらぬ病人の側を離れて、看護婦がまめ〳〵しく家事に働いてくれてゐるのに氣がついた。融は一先づ救はれたやうに感じた。

「何うですか、今朝は。」

「お熱は少し下りましたの、胸のお痛みも、夜中にお吐きになつてから、いくらか治まつたやうですの。未だ何にも召食れませんの。お湯もお乳も。でも御心配は入りません。」

十時頃に朝寢坊の芳太郎が、裏の家からふらりとやつて來た。「この狀態も惡くないな。單純で。」融は彼に話しかけた。

芳太郎はまるで關しないやうな顏をしてゐた。

「この分だと己も忘られさうだ。しかし田舍へ歸らないとすると、何處へ行つたものかな。」

「あの人のことだからどこか其の邊に、けろりとしてゐるんぢやないかな。」芳太郎はにやにやしてゐた。

「この邊にはゐない。」

昨夜女中と美代子の話をきくと、宵のうち彼女たちは愛子を慕ふ蝶子がいちらしさに、この近所の旅館といふ旅館を、大抵きいて歩いたものらしいのであつた。終ひに五町も六町もの先きまで、捜しに行つたが、愛子はどこにもゐなかつた。

「どこか箱根へでも行つて遊んでるんぢやないか。」

「いや、そんな女ぢや。さう云ふ風の都會趣味はない。」融は斷定した。

「Yさんのところへ行きやしないかな。」

Yさんといふのは、愛子が融に紹介されて、處女作を出してもらつたりした因緣から、いくらかペトロ格に親しくしてゐた男であつた。

「さうかとも思ふが、いくら何でもまさかね。そんな女でもないんだ。でも何うだか知れないけれど。」

「行つて見れば判りますね。」

「電話でもいゝけれど。」

そんな話をしてゐるうちに、融の心臟が又たうづきはじめてきた。彼は大分以前に融の親類の若い一人の作家が、愛子の問題について、話しにやつて來たとき、その男の言葉が余りに屈辱的であつたので、堪へられなくなつて外へ飛出して行つたときのことを思ひだした。愛子は途中で失神したやうにきよとんとして交叉點に佇んでゐるところを、追かけて行つた芳太郎につかまつたのであつたが、その時ちよつと神田に知つた宿屋があるので、一旦そこへ落着いて、それから國へ歸らうと思つて居た―そんな話を、愛子は後で融にしてゐた。融は今それを記憶のなかから引出してゐた。

「事によると神田邊かも知れないんだな。」融は言つた。

「何か心當りがあるんですか。」

「いや、心當りといつては無いけれど。」

「神田邊にしやがんでゐるなら、きつと神保町邊を歩いてゐますね。好子さんをつれて、晩方なんかきつと出ますね。」

「さうさ。」

「カフエを搜してあるけば、乾度目つかりますね。皆んなで一つ搜してやらうかな。少し運動費さへあれば。」

融は嘖笑するだけの餘裕もなかつた。何か事件でも起つたやうに、しかし愛子を逃したことは、利害はないにしても、父のためにちよつと惜しまれるやうな氣もしたのであつた。父が持つてゐればゐたで、ちよつと非もつけて見たい彼ではあつたけれど。

午後融に女客があつた。もう十年弱も姿を見せなかつた彼女が、久しぶりにふと遣つて來たのであつた。彼女は單身田舍から出て來て、自力で幼稚園など經營してゐた。現在では彼女の生活は好い方であるらしく想像された。身裝も貴婦人めかして、お上品に凝く作つてゐた。

彼女は融の妻の亡くなつたことを、明瞭りとは知らないらしかつた。

「今日は先生に一つお願ひがあつて上りましたんですけれど。」と通り最近の消息を語つてから彼女は言ひだした。

それは若し心當りがあつたら、犧牲的に働いてくれる、若い女敎師が一人ほしいといふのであつた。

「さあ、私のところへは、そんな人は餘り來ないやうですがね。」

融は名前さへ出てゐれば、何んなことでも出來るやうに思つてゐるその種類の問題に時々出會すことがあつた。

「さうですか。私はまた先生のところへは、各方面の若い御婦人がお見えになるかと思ひまして―自然またお心當りがございましたら」。

それから又しばらく彼女の生活上の話がつゞいた。或る大學の敎授と同棲してゐること、その敎授がすつかり學問に沒頭して二階に立籠つてばかりゐて、時とすると甚く彼女に氣むづかしくなるのに、彼女は彼が留學してゐた外國で關係してゐた西洋人の間に出來たといふ子供の愛のために、兎にも角にも幸福なその日を過してゐるのであつた。

「今まで私は人の子を三人も育てました。けれど大きくなると皆んな穢られてしまひますので…先生にそんなにお子さんが澤山おありのなら、一人おもらひしたいものですが、可愛がつて育てます。犬の子煩惱ですから。」

「若しかしたら……。」融は生返事をしてゐた。

「しかし先生もお困りでいらつしやいませうね。」

「家内が何から何までやつてゐてくれたんですから。」

そして融はそろ〳〵滾しはじめた。今また愛子に逃げられたことにまで、彼の愚痴が延長して行つた。

しかし愛子の話は、彼女には概念さへ摑めないらしかつた。彼女はその事について、何にも知らなかつたし、想像も出來ないらしかつた。

融は終ひに机上に散らかつてゐた、子供の撮影にかゝる愛子の寫眞を見せた。

「これは先生大層美しい方ですね。こんな若い方を、先生はお持ちになつていらして…。」

彼女はやがて急いで暇を告げた。

夕方また芳太郎と書齋で顏が合つた。

「Y君のところ何うした。電話かけた？」

「いや。」

「かけてみない！」

「かけませう。」

彼も父に似て、父以上の無精ものであつた。

夜になると、蝶子はまた愛子の歸りが待遠しくなつて來た。彼女は愛子の蒲團より外の蒲團に寢ることを拒んだ。よく愛子の躰に絡はりついて、時とすると顏に手づけなどするほど、愛子は幼ない蝶子に慕はれてゐることを、融は不思議に感じてゐた。

「おばちやまの御足綺麗ね、なんて蝶子さんがお湯殿で私の足を見るたんびに言ふのよ。」

愛子はいつかもそんな話をしてゐた。

融はその蝶子のことを思ふと、頭腦が憂鬱になつた。折角愛の手をひろげて行つた愛子に事實の子が出て、その愛のために、あれほど懷してしまつた蝶子を見棄て行かれたことはそれが彼自身の過失であるにしても、融に取つては、それだけでも堪へられないことであつた。愛子を失つた蝶子の神經が、母を失つた當座のそれのやうに、細かく彼に絡はりついて來ることを考へるだけでも、融は胸が締められた。

「蝶子は事によると死ぬんぢやないかしら。」融は呟やくやうに芳太郎に言つた。

「さあ、そんな事もないでせうが……。」

融は頭腦がふらふらしてゐた。二三日彼は胃腸を惡くしてゐた。外へ出てみると體の衰へてゐるのが、一層よく判つた。

Y氏のところへ自動電話でもかけてみようかと、父と子はそんな話をしながら、夜の町へ出て見た。

「事によるとそこにゐるんぢやないんですかね。」

三月頃まで愛子が止宿してゐた旅館の近くまで來ると、芳太郎がさう斷定したように言ふのであつた。そしてさう言はれると、融も何だかさういふ氣がした。三月頃融が幾日も幾晩も閉ぢこもつてゐた。二階の奥の部屋に、愛子が好子と

座つてゐるやうに思へてならなかつた。

「さうかも知れないな。」

「いきなり押しこんでやりませうか。」

若い馴染の番頭が家の前へ出てゐるのに、氣がついた。

「愛子はほんとうにゐないの。若しゐるなら、さう言つてくれたまへ。少しあの女に話があるんだから。僕があの女を怒したんだから。」融は何んだか今にも息が切れさうな調子で、脅すやうに哀願するやうに言つた。

番頭は笑つてゐた。融はその笑顔を見ると、愛子の居所を、彼が知つてゐるやうな氣がした。

「いゝえ、そんな噓なんか吐きません。松木さんは何だか、今日ちよつと見えたやうですけれど、直き歸つて行つたさうです。お宅の近所の仕立屋さんに頼んだものがあるとかで、家の女中を使ひにやつたやうです。」

融は息が止まりさうになつた。彼は女中にきいたら居所が知れるだらうと思つて、内へ入つて行つた。

そこへ見知りの年增と若いのと、女中が二人奥から帳場の方へやつて來た。

「愛子が今日來たさうですが、何處へ行つたか若し判つてゐたら。」

女中は胡散げな表情をしてゐた。

「えゝ今日ちよつとお子さんをおあづけに入らつしやいましたけれど、晩方つれてお歸りになりました。」

融は顔が眞蒼になるのを感じた。そんなに近くまで來てゐながら、寄つても行かない彼女なら、やつぱり駄目なんだと思つた。彼はふら〳〵と其處を出たが、目が晦みさうであつた。彼はよく卒倒する質であつた。學校の數學の解答ができなくて卒倒したこともあつた。今フランスにある友人と或る夜更に電車のなかで目が晦みだして、急いで飛出して

町の廣場で二十分も人事不省で地びたに橫はつてゐたこともあつた。

その發作が今やつて來さうに思へた。

「おれは倒れさうだ。」彼はさう言ひながら、ふら〳〵歩いてゐたが、忽ち感覺を失つてしまつた。

薄明りがさして來るやうに、やがて感覺が蘇りかけて來たとき、彼は或る酒屋の前の石崖のうへに、ぐしやりと平伏(へたば)つてゐる自分を發見した。彼はやがて起きあがつた。誰か近所の人が、醫者へ走つたやうであつた。芳太郎がステツキと帽子をもちながら彼を扶けおこした。

「ちつとも分らなかつた。いつの間に仆れたんだか。」

「仆れさうだといふんで、笑談かと思つてゐたら、ぐしや〳〵となつてしまつて、抱きかゝへようとしても、もう駄目なんだ。」芳太郎はそんな場合にも、彼の感觸の若さと軟かさとを失はなかつた。で、またそんな事は何んでもないと言ふ風に、笑つてゐるのであつた。

「餘り見つともいゝ圖ぢやないな。」

「番頭と話してゐる調子が、ちよつと困つたな。」芳太郎はそれかと言つて、嘲笑もしなかつた。

「心臓がひどく弱つてゐる。」

「心臓苦しいですか。」

「もうそんなでもない。」

「あのまゝ蘇生しなかつたとしたら……まあそれでも可い譯だけど、變なことになるな。」

「そしたら愛子も生きちやゐられないだらう。」磯は仕方なし笑つた。

芳太郎は「あははは」と大笑ひに笑ひだしてしまつた。
融は歸るとすぐ醫者にかゝつた。
「心臓は何うです。」
「何あに、大したことはありません。しばらく安靜に。」
彼はその晩昏々として眠つた。
うと〳〵と夜中に目がさめると、亡き妻がデッドマスクのやうな冷たい顏を彼の傍へ寄せて來た。
暫らくすると、彼はまた苦しい眠りにおちた。明け方に目がさめると、今度は愛子の滑かな足が彼に絡はりついてゐる感じが、破れた夢幻の跡に仄かに殘されてゐた。

五

翌日はC女史が、作品を一つもつて來て、蝶子が病んでゐるのを見て、一日慰めてくれた。
「おや〳〵。愛子さんゐないんですか。お話しようと思つて、折角來たのに。何うして又たそんなことになつたんでせう。折角落着いていらしたのに。」
融はまた其の顚末を說明しなければならなかつた。說明しないではゐられなかつた。
「おや〳〵、そんなに貴方が惱んでお出でになつては。」
しかし彼女は好感を寄せてくれてゐた。そしてY氏へそれとなし電話をかけたりしてくれた。Y氏は不在であつた。
「さあ、私もお暇にしませう。愛子さんきつとお歸りになりますよ。まさか今更らYさんのところへ行くやうな、そん

な莫迦な眞似はしないだらうと思ひますね。」
「さうも思ふけれど、しかし一方に絶望すると、誰れの胸へでも飛びついて行かなけあゐられない女だからね。Y君にだつて、世話になつたこともあるらしいから。」
「そんな事ないでせうね。」
彼女は歸つて行つた。
夕方芳太郎がY氏へ電話をかけた。
「來るさうです、後ほど。」芳太郎が報告した。
Y氏の來たのは、それから一時間ばかりしてからであつた。
「何うしたんです。」
「君に心配かけちや濟まないんだけれど、若しかと思つたもんだから。」
「いゝえ。さう思はれやしないかと、私も今電話をいたゞいて、さう思つたんです。」
「そんな譯ぢやないんだけれど、蝶子が慘めでね。自分の子供があるから、迚も歸つちやこないだらうと思ふけれど。しかし迚も面白い女だね。あれが若し、小さい自分の世界に閉ぢこもつて、人の蔭口ばかり吐いてゐるやうな井戸端會議式の女かありふれた淑女型の女だつたら、僕は決してこんなに愛しはしないね。」
「さうですね。面白い人ですね。」Y氏は内向き加減に應答してゐた。
そこへ女中が二通の手紙をもつて來た。
「松木さんから。」女中の顔にも明りがさしてゐた。

しづやは今も茶の室でしく〳〵泣いてゐた。愛子を慕ふ蝶子のいぢらしさに。

「ほう！」Y氏はさう言つて手紙を受取つた。

「差出人の所がないや。」彼は鼻の先きで言つた。

融は蝶子に宛てた一通から抜いた。中から折紙の幾束かゞ出た。

「おい、これを蝶子にやつてくれ。」

それから彼は自分に宛てた分を讀みはじめた。封書にはたゞ愛子としてあるだけであつた。手紙は五色の可愛らしい折紙十幾枚かに書かれてあつた。

何うしてゐらつしやいます事やらと只思はれます。

でも側に眠るあどけない子供の顔を見て、あなたのあの朝のお言葉を思はされます時、私はどうしてもあなたのお側に上られません。いくら考へても、今度のことでは、私は自分を惡いと思はれます節は少しも御座いません。

私に子供の戻つて參るのをわからずに、あなたは私をお入れ下さつたのですから、お氣の毒とは重々存じますのですけれど、

あなたはあの朝、私をおぶちになつてその上泣出した私に「出て行くなら、歸つてこない積りで出て行け」と仰有いましたねえ。

私の體は肩身の狭い、寄り所のないものです。その私が、それも來てから二三日にしかならないのに、子供の事で、「今日とはいはないから、二日もしたら出て行つてくれ」と仰有られて、どうして置いていたゞけませう。私

は分け隔てなく蝶子ちやんも好子も愛したつもりです。あなたと私の生活のよく靜かにゆきます爲めに。

しかもそれは長いことではない。一寸の間を子供と一緒において下さいと申し上げてあるのに。

私は外のことなら、何んな辛いことでも我慢したでせうけれど、あゝしたことから、あの上つらい言葉を、私の最後の方と信ずるあなたからお聞きしようとは思ひませんでした。私はがむしやらに貴方から姿を消してしまひました。

今は全く行く路を失つてしまつた私なのです。總てがくろぐとさされた行手です。私は一晩泣きとほして、何を感じたことでせう。

私一人なら、あなたも愛して下さいました。しかし子供はたつた三日と愛しては下さいませんでした。子供のため、數奇な子供のため、どんな事をしても私は生きて行かねばなりません。

最後の人として私の擇んだ貴方に愛されなかつた私の子供を、親として人としてかばつてやらねばなりません。

あなたは私が去つたら、後の方をお迎へになると、あの朝も仰やいましたのねえ。苦しいけれど致し方もございません。

てふ子さんがどうしてゐられるやらと思はれてなりません。よし子も暗いたしてをります。

あなたはあの朝あなたのお腹立ちを和めようとして微笑んでゐた私に「悶々しい」と仰有いました。又どんな事をしても離れて行かない女がいゝとも仰有られましたねえ。私は奴隷としてあなたに愛していたゞきたくはございません。あなたにお對しする私の愛は、そんなものでは無い、高いお氣持のあなたを、潔い心でお愛しして

ゐる私は貴方の愛人だつたのです。一旦あなたの許を去れば、よし其がどんな理由の下にもせよ、私は今度も世間から悪い子にされてしまひます。あなたは今のうち自決しろと仰有いました。

私の前に、高い潔いものの總てが消え去つてしまつたと悲しまれてなりません。もつと申し上げたいのですけれど、泣いても／＼泣きつくせなかつた私も、今は涙も止まりました。

一昨日あたりから胸がひどく痛みますの。

私の事は御心配なさらないで下さいまし。すべての失禮をおゆるし下さいまし。

先生に　　　　愛子より

手紙には觧かれない節も多かつた。その上抽象的のことばかりで、それを何う解釋していゝかに融は迷つた。しかし川所を書かない二通の手紙に、局の消印のあつたことは、まだしも一縷の望みが繋がれてゐた。それは猿樂町であつた。

Y氏は明日は自分も協力して、愛子を捜さうと言つて、やがて歸つて行つた。

「あの人活動の變り目に、きつと入るから。からと、明日……明後日か日活館の變り目だから、一つ行つて見るんだな。」

Y氏は又た、愛子が家族同士知つてゐる若い學生の下宿が、どこか紅梅町邊にある筈だから、その學生の友人が、ちやうどY氏の世話してゐる女の弟に當るので、その所番地を、明日しらべて知らせすることをも約束した。

翌朝融は早く目がさめた。彼はまだ頭腦がふら／＼してゐた。食慾もまるで無かつた。しかし蝶子の枕頭を見舞ふと、又た驚くべき可憐らしさを見せられた。

「これおばちやんのお手紙!」蝶子はさう言つて枕の下に仕舞つておいた折紙と、折紙の一枚に書いた手紙とを、そつと引出して、そこに添寢をしてゐる融に見せた。

融はまだ眠が十分でなかつたけれど、捜さずにはゐられないやうな氣がした。

融は蝶子を慰めて、起きあがつた。

「どこへ行くの。おばちやまのとこへ行くの?」

「あゝ捜して來てあげるからね。」

融はそんな早い朝に、外へ出たことは滅多になかつた。町にはまだ埃も立たなかつた。初夏の陽光が、路傍樹や、水の撒かれた路面や、自動車や、朝の通勤者だちなどのうへに、爽々しく耀いてゐた。

彼はステッキを突きながら、電車にも乘らずにてく/\歩いて行つた。昨夜の手紙が思ひだされた。融を責めようとする言葉の強さの下に、女らしい弱さがあるやうに思へたり、今迄のことを、その手紙一本で打切るには、餘りに見えすいた根本の矛盾もあるやうに思はれた。

お茶の水をわたると、彼は交番について、愛子の知つてゐると云ふ其の學生の名を告げて、宿を調べてもらつた。しかしそんな名は、どこの宿にもなかつた。

それでも彼は失望しなかつた。どこか其處いらの宿に、愛子がよし子と、ぽかんとして居るやうに思へてならなかつた。で、彼は端の方から調べはじめた。一軒また一軒、到頭その横町にある三軒の旅館を、彼は殘らず調べた。しかし何處にもゐなかつた。

「この邊に、もつと外に下宿や旅館がないでせうか。」融は最後の家できいた。

「この先きへおいでになつて、××病院の横へお入りになりますと、宿屋は澤山ございますよ。」年取つた主婦が敎へてくれた。

融は元氣よく又たその横丁へと入つて行つた。そこには大きな新しい旅館が、兩側に三四軒あつた。

「こちらに松本愛子といふ、子供をつれた女の人が泊つてゐませんでせうか。」

融はわざと洒々した口調で、そんな風にきいた。しかしそれらしい女は何處にもゐなかつた。その橫丁の又た橫丁が袋のやうに深く奥まつてゐて、そこにも安下宿が軒を並べてゐるのが目についた。融はステッキを振り〳〵隅から隅まで尋ねて步いた。しかし其も無駄であつた。

終ひに融は疲れて來た。そして莫迦〳〵しくなつて來た。絕望はしなかつたけれど、さうやつて自身搜しに出てみると、いくらかの紛らかしにはなつた。そして其の「紛かし」が、やがて諦めへの自然の階段に役立つのを感じた。念のため彼は今一度、外の方面を二三軒搜して見たが、家を出たときの意氣込と熱心はなくなつてゐた。

融はぶらり〳〵と、歸途に就いた。

「おばちやんは！」

蝶子は父の顏を見ると、直ぐきいた。

「おばちやん何處にもゐない。」融は素氣なく言つた。

「いいだらう、居なくつたつて。お前にはお父さんや兄さんや姉さんや、澤山あるんだからね。あんなおばちやん來ない方がいゝぢやないか。」

蝶子は唇をふくらませて、泣面をかいてゐた。終ひにしく〳〵泣きだした。

「あゝ可しく。今におばちやん歸つてくるからね。」融はあわてゝ機嫌を取つた。
芳太郎と二男とが寢てゐる、裏の家へ、融は行つて見た。
「おいく、猿樂町の方に宿屋があるかね。」
芳太郎はぽつかり目を開いた。
「さあ！」
「知らない？何だかあつたやうに思ふけれど。」
「あゝ在ります、二三軒。」
「ぢや又行つてみようかな。お前たちも一つ、手分して搜して見てくれないか。」
「行きます。」芳太郎は寢ぼけ聲で言つた。
「もう何時かな。」
「さあ、その時計は止つてゐるもんで……。」
「ではね、十二時までに己れは××喫茶店へ行くから、手分してあの方面を搜して、そこで落合ふことにしやう。」
「よござんす。すぐ出かけます。」
「藤二郎も一緒にね。」
「よござんす。」
融はやがて又家を出て行つた。今度は電車で、猿樂町の方へ、いきなり出て行つた。そして或る大きな洋物店の横丁をふと覗くと、そこに大幸館と云ふ赤いメリンスの旗の出てゐるのが、ふと目についた。融は先づそれから取りつから

と思つた。勿論それもバラックであつた。

するとちよつと一二段高く築いた入口を入つて、陽氣な玄關口に立つて見ると、正面にある梯子段の陰の方に部屋が一つあつて、その障子の三尺ばかりかゝつた奥の方に、大島絣を着て、彼女獨特の髮を結つた愛子の坐つてゐる姿が、融の目についた。

融は夢のやうな氣がした。

「ごめんなさい。」融は聲かけた。

小肥りに肥つた愛相のいゝ主婦が、そこへ出て來ると同時に、その部屋の障子を閉めた

「松木愛子がお宅にゐますね。今そこに見たんですか……。」

融はステッキで其の部屋を指した。

「貴方どなたでいらつしやいますか。」

「あゝ、さうですか。」主婦はさう言つて、その部屋に入つて行つたが、暫らくすると、

「さあ何うぞ!」とにこ〳〵しながら、融を上へあげた。

融は勢ひこんで、その部屋へ飛びこまうとしたが、入口へ顏を出してみると、愛子は紅い顏をして、奥の方の隅に突立つてゐた。

「おい、何うしたんだ。」融はさう言つて跪いた。

愛子は手で、「二階へ、二階へ」と諭した。

壁紙のやうなものが、部屋一杯に取りちらかつて、職人が二人そこにゐたけれど、融は目にも入らなかつた。

彼は主婦の案内で二階の部屋へ入つて行つた。部屋は明るい六疊で、看るとそこに小机があつた。色紙や玩具や子供雜誌や、手提に日傘のやうなものが、床の間にごちや〳〵してゐた。そこが母子の隱れ家であつた。いつか、若しもその時愛子の氣が進むなら、結婚しようとまで約束したとかいはれる或る資産家の思想家と、愛子が歌稿の整理をしてもらうために、そこで幾度か逢つてゐることは、この前のときの愛子の口吻から推して、融には直ぐ頷けた。

　しかし何よりも先づ、融を見て怯けた表情をしてゐる好子に、彼は目がついた。

「おい、好子、こんな處にゐたの。」融はさう言つて彼女を抱きしめた。

　そこへ主婦が上つて來て、お茶をいれてくれた。

「ひどいな！」融は涙ぐんでゐた。

「いいえね、今晩は何うしても歸ると仰有つてゞしたので。」

　主婦と入れ代る愛子が少し紅い顏をして入つて來た。

「君は實にひどい。ひどいよ。所くらゐ知らしてくれたつて可かつたぢやないか。」融は躍りかゝりもしさうな調子で、肩を戰かせてゐた。

　彼は袂の底からハンケチを取出して、ぼろ〳〵落ちる涙をふいた。やがて彼は落ちついた。

「家ぢやあの日から蝶子が病氣してゐるし、一體何うするの。手紙を見たけれど、己も惡いが、づゐぶん小酷く遣つつけるぢやないか。」

「だつて貴方が出て行けと言ふんですもの。私悲しかつたわ。電車に乘つても、ぼろ〳〵涙ばかり出て。」

「家の近所まで來たといふぢやないか。それだのに顏も出さないなんて。君は酷いよ。實に酷いよ。」

「でもあなたにあんな事言はれて、圖々しく居られる私ぢやありませんもの。」

「己はそれを聞いて卒倒してしまつた。」

「そッ！ごめんなさいね。」

「歸るの。歸らないの。」融は性急にきいた。

愛子は落ちついてゐた。

「私先生に少しお願ひがございますの。今夜お話しに行かうと思つてゐましたんですけれど、當分この家によし子と二人下宿して、ちやうど近いところに宗教學校の幼稚園がありますから、そこへよし子を通はせて、私は毎日先生の宅へ通ふことに。」

「いけない、そんな事はいけない。」融は斷定的に否定した。

「その位ならいつそ綺麗に別れよう。」

「私榛原から壁紙なんか買つて來て、下の座敷を少し居心地よくしようと思つて。あの部屋なら安くおいてもらへるの、月五十圓くらゐで。」

「子供をこんな處で育てるのかい。」

「いけない？」

「いけないとも。しかし君がさうしようと言ふんなら、己も考へなけゐならない。」

しかし其の話はそれきりになつた。

「おれは今朝からづゐぶん捜した。君は實にひどいよ。」
「私も歸りたかつたんですけれど、双方に子供があつたんぢや、とてもうまく行きつこはないと仰られてみると、私も考へなけあならないと思ふわ。外の子供は兎に角として、よし子だけは私放したくないの。來てから三日もしないのに、あんな悲しいことが起つたとすれば、これから先きのことも案じられますもの。」
「けど私はちつとも好子を冷遇してゐやしないぢやないか。」
「それあ可愛がつても下さつたわ。よし子も懐いてゐたんですもの。」
そして愛子は、そこにしよんぼりしてゐる好子を振向いて、
「よし子ちやん、下へ行つて女中さんと遊んでおいで」と、そつと開き戸をあけて、廊下へ出すやうにした。
そこへ女中が通りかゝつて、母を取られはしないかと、おど〳〵してゐる好子をなだめて、下へつれて行つた。
「でも善く見つかつたものだね。」
「ほんとうね。何うしても緣があるんだと、さう思ふわ。」
「けど何うするの。」
「歸りますわ。」
二人はいつか相寄つてゐた。
「あなたの踊りこんだ態度つたら、私殺されるかと思つた。でも嬉しかつた。」
「君はひどいよ。己がこなければ、其れきりだ。そんなものなの。」
「私行きたかつたの。」

暫らくしてから融は思ひ出したやうに、

「××喫茶店に子供が待つてゐることになつてゐるんだから、僕は歸らう。××へ行かない。」

「今は行きたかないの。」

「ぢや直ぐお歸り。」

融は帽子を摑んだ。

「ちよつと！」愛子はさう言つて、キッスを求めた。

融は顏をもつて行つた。澄んだ愛子の目が耀いてゐた。

「……、……。」……………………。

……………………。

融は晴々した氣持で家へ歸ると、すぐ蝶子の病床へ近づいて行つた。

「おばちやんが今に歸つて來ますよ。おとなしくしておいで。」

それを聞くと蝶子の顏にも明りが差して來た。そこにゐる看護婦の石黒さんや、しづやのぶくぶくした顏にも、晴れやかな微笑が浮んだ。

「ようございましたね。お孃ちやん。」

融は今朝までの憂鬱な家の空氣が、すつかり何處かへけしとんでしまつたやうに思へた。

「芳太郎は？」
「もうちよつと先きにお出かけになりました。」女中が答へた。
「藤次郎は？」
「お二人でいらつしやいました。」
隆はきつと××喫茶店だらうと思つたので急いで近所へ電話をかけに行つた。果してそこに芳太郎がゐた。
「今ね、少し時間がおそくなつたけれど、此處へ來てゐるんです。お父さんは何處にゐるんですか。」
「今家へ歸つたところだ。愛子が見つかつたんだ。その家のすぐ近くの△△洋物店の裏に大幸館といふ旅館がある。そこに愛子がゐるんだ。今倅をやらうと思つてゐるけれども、ちよつと行つてごらん。」
「さうですか。ぢや、もう可いんですね。」
それで電話を切つた。
二時間弱もたつてから、愛子が晴々した顏をして、こてこて何か持ちこみながら上つて來た。何をおいて彼女は先づ蝶子を見舞はなければならなかつた。晴れやかな彼女の聲が四疊半から聞えてゐた
やがて書齋へ出て來た。
「芳太郎は行かなかつた？」
「おいでになりました。今まであの部屋でお遊びになつて。」愛子はさう言つて、玄關の隣へおいて置いた黄色い莚を二枚ばかり持込んで來て、
「先生、私あの部屋へ敷かうと思つて、朝鮮館で買つて來ましたの。若し餘りをかしくなかつたら、ここへお敷きにな

つては？」

「さうね。」さう言つて、融は二人でそこへそれを敷いて見たりした。

「あすこへ貼りかけたあの壁紙、迚も好かつたの。」

「惜しいことしたね。」

「でも介意ひませんわ。」

そこへ脊廣姿の芳太郎が歸つて來て、庭へまはつて來た。彼も上機嫌であつた。

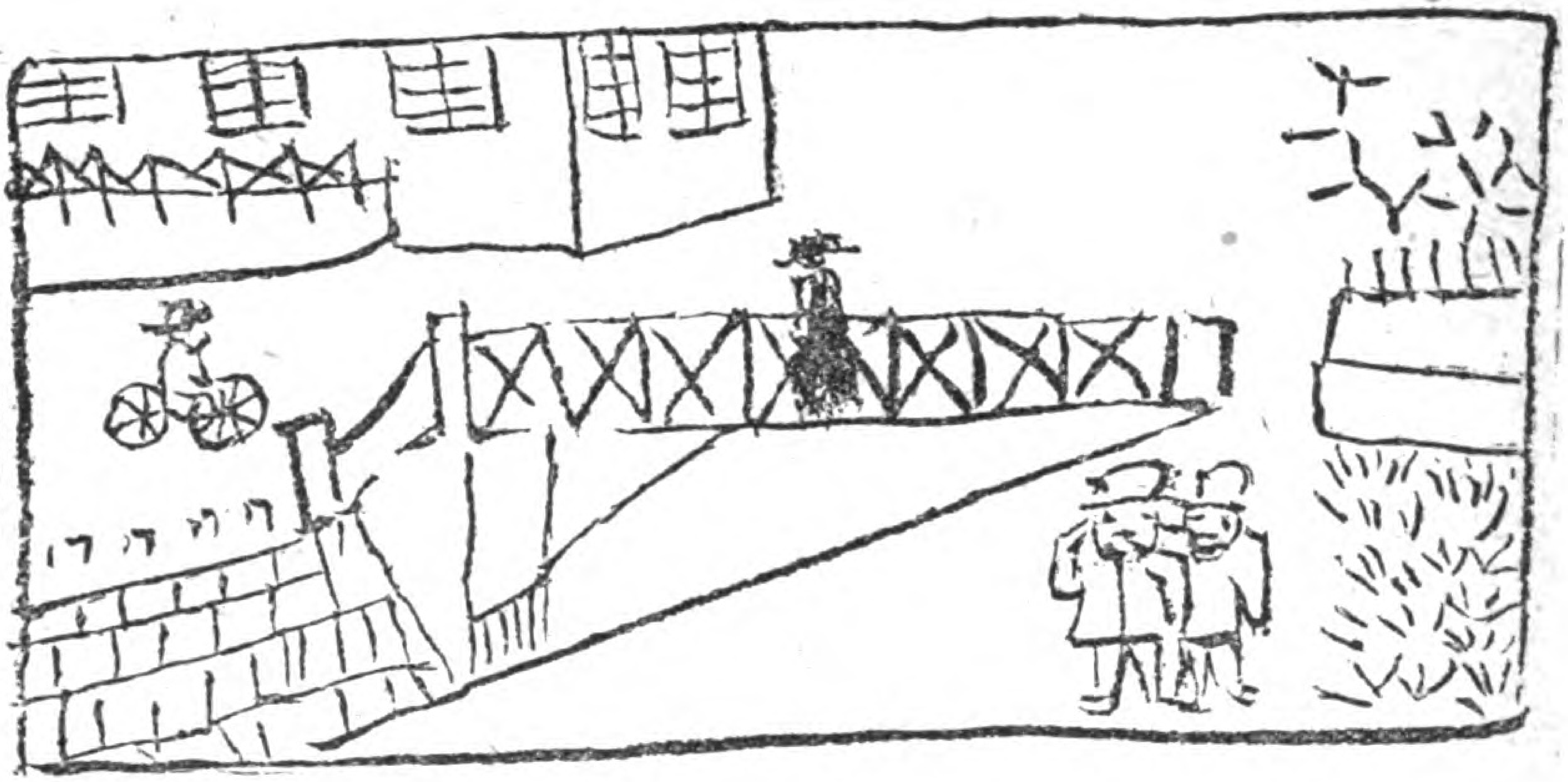
「どうです、このネキタイは。」

看るとちよつと異色のあるネキタイが、彼の顏によく似合つてゐた。

「ほう、迚も素敵！」愛子は言つた。

「ちよつと好いでせう。舶來は舶來だけど、迚も安いんですよ。十圓ぐらゐに見えない？」

「さあ！」融はにや〳〵してゐた。きつと愛子から金を貰つたんだらうと心に微笑まれた。



戯曲

お城の人々

長與善郎

登場人物

武田代藏　田舎の事業家　七十一歲
お龍　その妾　四十一二歲
舜三　その息子　三十五歲
常子　舜三の妹　二十八歲
章（あきら）　常子の弟　十九歲
小枝子　章の妹、（末子）　十八才
平岡麟太郎　お龍の子。代藏に使はれてゐる勞働者　二十五六歲
美濃田徹也　舜三の友
その他勞働者數名

時　現代

場所　北國のある都會の町はづれ

第一幕

武田家の一部を庭の方から見た處、二階家。上下とも二室づゝ。階下の前面はベランダのやうになつてゐる。廊下。ベランダと直角に奥へ通ずる約一間幅の廊下があつて、左右に十疊の田舍風の客間と、六疊位の茶の間とを隔てゝゐる。中央の廊下の突き當りには右手に寄つて梯子段の下の方が見え、ベランダの右端の窓の彼方には日本アルプスに似た嶮はしい嶺と杏の果樹園とがのぞかれる。

右手の客間の床の間には代藏が昔つかひへらした鶴嘴が紀念に樹てかけてあり。『至誠通天』と下手な字で書いた額や、置き時計なぞ見える。茶の間の方は、半分程障子がたつてゐて、僅かに長火鉢が見える。

柱でも板の間でもすべて黒光りする程古いが、只ベランダにおいてある三脚程の椅子と同じソーファと卓子と丈けは新しくて白い。卓子の上には煙草盆と講談雜誌とあり又、そこの柱には晴雨計がかゝつてゐる。

ベランダの前には靴脱ぎ石の上に老人の下駄とそのわきに銀の柄のついた太い籐のステッキがおいてある。

二階の一室は寢室らしく、締まつており一方には書棚、机(デスク)が見え、前の緣側には長椅子が一脚おいてある。緣側の欄干には何か衣服が干してある。又舞臺の左手には生け垣の向ふに玄關の方へ通ずる道が見え、その前に散りかゝつた花の落いてゐる林檎の樹がある。

幕あくとお龍、元は藝者であつたが四十を越した女、小皺だらけの顔に白粉を塗り、齡のわりに大きな丸髷に結つて、ベランダの安樂椅子にいゝ氣持ち相に凭れてゐるガッシリした體の老主人代藏の後ろに立ち、大きなダイヤの指輪を嵌めた手でその白い頭髪を剃つてゐる。そのわきには手鏡、金盥、手拭、シャボン、などが盆にのせておいてある。五月半ばの晴れた午後。

お龍　(沈んだ口調で)ですから妾、やつぱりさうした方がいゝと思ふんですの。

代藏　(眼をつぶつたまゝ)何が「ですから」だ。さうした方とは何だ。

お龍　つまり妾が――まあなんて硬はい鬚なんでせう。ゴワゴワして、剃れやしないわ。

代藏　剃刀がキレないんだらう。もつとシャボンをつけりやいゝ。そうゴリ〳〵やられちやいたくつてかなはんよ。

お龍（ちらりと介歯を見せて笑ふ）だつて剃りにくいんですもの。何だかあぶなくつて。（シャボンを塗る）この髯の下はどうしとくんですの。のこしとくんですの。

代藏　うむ。まあいつものやうに。

お龍　だつてあなたはよくお變へになるぢやありませんか。もぢや〳〵延ばして見たり、剃つちまつて見たり。やつぱり落しちまつた方がよござんすわね。さつぱりして。（そこを剃り落し乍ら）まあそんなことはどうでもいゝけど、兎に角妾、田舍へ歸らうかと思つてるんですの。

代藏（眼をあく、又かと云ふやうに）この家を飛び出やうと云ふのか。

お龍　まあ飛び出るなんてそんな風に仰有られちやア妾立つ瀬がありませんわ。たゞ一時……（眼に涙をためる）

代藏　又へんな駄々を捏ねだしたなお前は。つまりこんな爺のわきにゐるのがいよ〳〵いやになつと云ふのかい。

お龍　まあ又そんないやがらせを仰有るのね。御自分こそ妾が出て行けばこんなお婆さんの代りに若いいゝ女を家に入れる事が出來て却つて幸ひ位に思つてらつしやるくせに。

代藏　この老いぼれがかい。はつ。そんなに俺はまだ氣が若く見えるかな。自分よりも卅も若いお前からそんな悋氣をされるほど。

お龍　誰も悋氣なんぞ起こしやしませんわ。そんな元氣は妾もう疾つくに無くしちまつてるんですからね。そんなわけぢやなく、私、もう本當にこゝのお家にはゐない方がいゝと思ふんですの。

代藏　なぜだ。

お龍（一寸手を休める）なぜつて　妾のやうなものがゐるつて事はどうしたつてこのお家のためによくないんですもの。妾のやうな一度暗い處を通つた女はやつぱり人樣の家庭に這入つちやならなかつたんですわ。（涙ぐむ）全體この世の中に出て來ちやならなかつたんでせうけれど、

代藏　時々そんな事を云つて見たがるのはお前の癖だが。——そんな事を云ふお前はもうその世の中に生れちまつてから四十年以上にもなるんだし、此家へ這入つてからだつて十年にもなるんだが。（白い布の下から手を出して）——一寸鏡をお見せ。まだ濟まないのかい。

勞働者三人ばかり左手の道から這入つて來て庭先きを通る。代藏の前を通る時、彼等は帽子をぬいで頭を下げ乍ら右手へ行く。が、代藏はお龍から渡された鏡を取つて見乍ら、そつちを見向きもしない。勞働者は一寸顏を見合はせて苦笑し去る。

お龍（これも勞働者達の挨拶には應へず）まあざつと。えゝ、そりやどうせ今頃こんな事を云ひ出すのは滑稽だとお思ひんなるでせうけれど、でもさう考へてゐた事はもう隨分……

代藏　長い事なのかい。（鏡を下におく）ちや、なにか。お前のやうなもんが一人生きてゐるとそのためにわるくなるほど世間てものはきれいで高尚な、脆ろいもんだと云ふのかい。

お龍（袂から紙を出して剃刀を拭く）まさかそんな大した力が自分にあるとは思やしませんけど、（四邊をうかゞひ乍ら）それだつてわるい女が一人這入つたためにそれまで樂しかつた家庭がみだされて、折角けがれない善いお子さん達の心までが暗く沈んだものになるつて事は隨分ある事ぢやありませんか。

代藏　あ、どつこいしよと。（手傳はれて起き上り、金盥で顏を洗ふ）

お龍（手拭ひを持つて傍に立ち乍ら）そしてそんな力も妾にないとは云へませんものね。もしそれほど妾がわるいも

のだつたとしたら。（又脣を噛む）

代藏（妙な腰つきで立ち上り手拭ひを取つて額を拭き乍ら、お龍の顏を見る）お前はこの家の平和がそんなに亂れてゐると云ふか。お前のために。（淋しく笑つて）誰かそんな風にお前の事を云つたとでも云ふのか。

お龍　（わざと投げ出すやうに横をむいて）まあそんな事どうだつてよござんすわ。どうせ云つたつて仕方のない事なんですもの。（太息を吐く）

お龍の言葉の終らぬ中、二階の緣側につね子現はれる、二十八歳だが卅歳以上に見える。顏色わるくひつつめに結つてゐる。欄干に干してある着物を取りこみ、少時、外をながめ乍ら息を吐いてゐる。自轉車に乘つた郵便屋が左手の道に現はれ、林檎の樹のうしろを玄關の方へ去る、それを見るとつね子の姿もかくれる。

代藏　（中風病みのやうなギコチない手つきで手拭ひをお龍に渡し乍ら）まあかう云ふわりに大世帶であつて見りや、お前の立場の樂でない事は今更云はずと知れた事ぢアあるが（又グツタリ椅子へ腰をおろして）人に一寸蔭口を利かれるとすぐ泣き出すやうな若いお嫁さんでもあるまいし。その點流石にお前は修行を積んだ豪傑だと俺アいつも感心してゐるんだに。

お龍　何とか云つてらつしやるわ。ほめやうがないもんだから。（煙草箱の卷煙草を一本取つていじくり乍ら）いゝえ、妾たゞもうこのお家へは妾なんぞほんとにゐてもゐなくてもいゝやうなもんですから、いつそ妾がゐなくなつた方がどなたもせい〳〵なさるだらうと思つて、……

お龍の言葉の間に郵便屋去つて行く、

一寸の間二階で靜かにオルガンが聞こえる。ハイドウンか何かのポピユラーな小品。

代藏　一服つけてくれ。あゝほんとにせい〳〵した氣持になつた。原敬と云ふ男はどんな眼の廻はるやうな苦し

い大事件の最中でも毎朝ちやんと鬚を剃る事丈けはついぞ欠かさなかつたと云ふこつたがちよつと並の者には出來ぬ眞似だて。何んでもないやうな事ぢやアあるがな。（お龍の吸ひつけて渡す卷烟草を吹かす）

お龍　あなたよくあの人の事を被仰るのね。あの人、たしかあなたと同い齢ぢやなかつて？

代藏　さう。多分あの男も安政三年の辰年生れだつたナ。だからまだ〱死ぬ齢ぢやなかつたんだ。

お龍　おんなじ年の人はどこか似たところがあるもんなんでせうか。妾、なんだかあの人のいつもつや〱して、けろりとした顔や、かうへんに白ばつくれたやうな處があなたと似てる氣がしてならないわ。（横をむいて噴き出し相にする）

代藏　（いやではないらしく）ふむ。俺をあんな人のわるい狸だと思つてゐるのか。狸どころか、まるで熊のやうに俺ア正直に働いて世間の信用を積んで來たのだ。そりやちつたア損もしたが、損をしねいぢや得は出來ねえ。（頭を撫でゝ）何か塗るものはないか。あの自家で取つた杏仁のクリームがあるだらう。

お龍　（うなづいて）そんな人のわるいとこ迄似なくつて幸ですわ。殺されちやたまりませんものね。（金盥やその他の道具を盆にのせて起ち上り乍ら。）電報が來たやうだけど、どうしたんだらう。

代藏　まあさし當つて一寸死に相なものは誰もゐないやうだ。又何か東京の問屋からでも催促してよこしたんぢやアないか。

お龍　催促ならよござんすけれど注文した分の輸送を減らしてくれとでも云ふのかも知れませんわ。何しろひどい不景氣だつて云ふから。（去りかけて奥を見、聲をかける）どこから來たんですの。

代藏の末の娘、小枝子――十八歳、どこか美しいが跛――、電報を持つてくる。

小枝子　お父樣にぢやないんですの。舜兄さんとこへ來たんですの。
代藏　何、舜三のとこへ（老眼らしく離して電報の宛名を見る）
お龍　まあどうした間違ひでせう。
小枝子　多分舜兄さんがこゝへいらつしやる事になつてゐるんぢやないでせうか。今日あたり。
代藏　（電報を封のまゝ卓子の上に放る。少し樂しみらしく）さうかも知れぬな。あいつのこつたから、又のらくらしてゝ退屈まぎれにこゝへ遊びにくるのかも知れぬ。
お龍　さうだとよござんすわね。にぎやかになつて。お島さんも一緒に連れていらつしやればいゝ。（去る）
代藏　（相恰をくづして）今オルガンを彈いてゐたのはお前かい。姉さんは何をしてゐる。
小枝子　（少し沈んだ顏になる）何か本を讀んでらつしつたわ。
代藏　又小說か。何をさう讀むんだ。（何か深く案ずるやうな面持ちだが、何氣なげに見える）
小枝子　（自然に父の腰かけてゐる安樂椅子の肘に腰を凭たせ、父の鼻の下を指さし）お父樣。こゝお剃りんなつたのね。
代藏　うむ。すつかり若くなつたらう。
小枝子　でもなんだかへんよ。おかしいわ。
代藏　（後ろから小枝子の肩に手を廻はし乍ら）。なにがおかしい。
小枝子　なにがつて、あんまり若く見えすぎるんですもの。何だかお父樣見たいな氣がしないわ。
代藏　（わざとらしく笑ふ）ぢや、もつとよぼ〳〵のお爺さんらしく見える方がいゝのかい（乳の邊りに手をやって）こんなに長くきたない鬚を垂らして。

小枝子　お爺さんらしい方がいゝつて わけぢやないけど。――でも慣れりやへんでなくなるのかも知れませんわね（爪を噛むやうな風をし乍ら）ねえ、お父樣。妾、又學校へ這入つちやいけなくつて？

代藏　何、學校へ。お前、もう學校は卒業したんぢやないか。

小枝子　だつてまだ上の學校があるわ。妾かうして毎日家にぶら〳〵してるの、――退屈なんですもの。

代藏　――

小枝子　妾、學校に行つてた時の方がなんだかずつと香氣で、元氣でしたわ。今思ふと。

代藏（とぼけて）　ふむ。學校なんぞそんなにやつたつて何になるもんか。學者にでもならうつて男なら又別だらうが。（調子を變へ）やつぱり東京の方がいゝか。こんな田舎の親父の家にゐたつて一向面白くもないか。

小枝子　妾、そんな氣で云ふんぢやありませんわ（と涙ぐみかけて顔を外にむける）

代藏　ぢや、どう云ふ氣で云ふんだね。――お前ちつともぶら〳〵してやしないぢやないか。毎日蜂の世話をやいたり、雞の世話を見たり……。尤もさう云ふ仕事がつまらないと云ふならそれも無理はないが。

小枝子　ちつともつまらなかありませんわ。妾さう云ふ仕事好きなんだから――

この時やゝ遠くで鐵砲の音が聞こえる。その音に小枝子がふと振りむくといつの間にかお龍が後ろの曲り角へ來て立つてゐる。小枝子はあはてるやうに父のわきを離れる。

お龍　鐵砲の音だわね。（そこへ來て代藏に小さなクリームの壷を渡し乍ら）誰が擊つてるんでせう。

小枝子　きつと章さんですわ。先刻兎を打ちに行くつて出てらしつたから。

代藏　ふむ。兎を打つならいゝが、あの馬鹿、人でも擊たなきやいゝ。（立ち上つてクリームを頬や額になすりつけ乍ら

右手の方を指さして）だが、あれを見ろ。實に見てゐても氣持ちがいゝ程よく働くぢやないか。殆んど朝からずつと休みなしにやつてゐる。

お龍　（そつちを見ると急に快活になる）まあ、あの人、あんなとこにゐたんですの。ちつとも知りませんでしたわ。何をしてるんでせう。（腰かける）

代藏　杏の世話をしてるのさ。枝を切つたり、蟲を取つたり、あいつの疲れる事を知らない働きぶりを見ると丁度俺の若い時代を思ひだすよ。一つ呼んでお茶にしやうぢやないか。（そつちにむかつて呼ぶ　おーい。

お龍　（起つて兩手をメガホンのやうにして呼ぶ）ちよつと！ちよつとよう！（手を拍きそして招く）

代藏　姉さんも呼んで來ないか。そしてお茶を入れておいでな。

小枝子　お湯が沸いてるかしら。（去る）

代藏　（暗に氣嫌を取るやうに）まつたく妙なものが生れたもんだナ。お前の子にしちやア。

お龍　まつたく妙なものが生れるもんですわね。馬鹿の子に利口が生れたり、女たらしの子に天使のやうな淸らかな人が生れたり。

代藏　だから生んで見るもんかナ。だが島村と云ふ男はよつぽどの精力家だつたと見える。あんなカチ栗のやうなからだをして。

お龍　でもあなた程ぢやなかつたわ。七十にもなつてまだ人の古い棚おろしなんぞをして燒き餅を燒く程の元氣はとてもなかつたわ。

代藏　なに、俺ア唯あの男をほめた丈けだ。お前は俺がもつと燒き餅燒きだとうれしいだらうが、俺ア昔つから人

の燒き餅なんぞ燒いた事はないんだ。

そんな事を云つてる處へ手拭で額を拭き〳〵麟太郎が一寸二階を見て、緣先きへやつてくる、二十五六歳。色の淺黑い見るからに男性的な筋骨逞ましい體。へんに凄く光る眼と眼との間が離れてゐる。勞働者の監督と云つたやうな服を着、腕をまくし上げ、片手にツバの廣い麥ワラ帽子を持つてゐる。

代藏　（愉快相につゞける）なあ、麟太郎、今も云つてるんだが、俺はどんなに貧乏して日給五十錢で食つてた時だつて金持ちを妬いた事なんぞはなかつた。人がどんないゝ女を妾にして樂し相につれて歩いてるのを見たつて、指を啣えて涎を垂らすやうな見つ共ない乞食の眞似は土臺俺にや出來なかつたんだ。「おめえはおちぶれた貴族だ」つて仲間の者から皮肉を云はれた位い。

麟太郎　（ちらりとお龍の方に苦笑をむけ乍ら）さうしていつの間にか人から燒き餅を燒かれるやうな御身分におなりなつたんですね。

代藏　ふむ、それが當り前でないのかね。生れつき並外れた進歩慾を持つてゐたと云ふのか、俺ア子供の時から人が晝寢をしたり馬鹿遊びをしてゐるのを見ると、勉强するのは今だ。進まう〳〵、奴らが寢てゐる間に、と思つたもんだ。一人前の勞働をするやうになつてからでも、俺ア怠けもんが不平をこぼし〳〵日給を飲んぢまつたり、女郎買ひをしてゐる間にきつと奴らの二割分づゝは餘計に働らいて、先きへ進んだもんだ。だから俺アそんな怠けもんの、燒き餅燒きの、蟲のいゝやくざもんのやうにそのなんだ………

麟太郎　まあ一寸水を一杯のましてくれませんか。それからゆつくり御成功談をうかゞふとして。何しろから喉が燒けちや折角のお話も何も（帽子で煽ぐ）

代藏、耳にや這入らないか。はつはつ。だからちつと休むといゝと思つて呼んだんだ。あゝぶつ通しにやつちやそ

りや叶はんさ。いくら疲れ知らずのお前だつて。

お龍　（調子を合はせて笑ひ乍ら）ほんとに有り難くないわねえ。折角呼んどいて。息をつく暇もなく御自慢話を聞かされちやア。（立つて）今お茶が來るにはくるけれど、冷たい方がいゝわね。喉が燒けてちや。

お龍は髮なぞをいぢつていそ〳〵と去る。

麟太郎　なに、僕だつてなにも疲れ知らずつてわけぢやないんですが、やりかけるとつい途中で手離せなくなつちまふんで。（代藏煙草の箱を取つて麟太郎に一本つまゝせる。麟太郎恭しくそれを取り乍ら）尤も今から暑いなんてつてた日にや夏んなつたら働けやしませんからね。

代藏　さうとも。それに暑さと鬪い乍ら瀧のやうな汗を垂らしてものも云はずにコツ〳〵働いてる氣持ち位い張りある強いものはねえからな。苦しいにや苦しいが。（自分の吸ひつけた後マッチを消さずに麟太郎に渡し乍ら）だがまあ、お前がさう云ふ氣で皆の先きへ立つてやつてゝくれるんで俺アほんとに滿足だよ。—子供達の事を考へるとどうやら心細いやうな氣がするが。

麟太郎　（ひそかにほくそ笑む）そんな事はありませんが。御自分があんまり御丈夫なんでお子さん達が弱くお思へんなるんでせう。（外を向いて）が、そりやそうと今年の杏はまつたく大した出來ですね。私がこゝへ來てからもう五六年にもなりますが、こんな豐年は始めてゞす。この不順な陽氣が却つて果物にはわるくなかつたのかも知れません。

代藏　（大いに滿足相に）まあ今の處では申し分ないが、——さてこれからがいつも難關だて。

麟太郎　無論、現在賣つてゐる分の五割は落ちるものと見ての話ですが、それにしてもいつもの二割五分は增收間

違いつこなしですよ。まあよつぽどの天災にでも見舞はれない限りは。

代藏 （テーブルの上の鳥打帽をかぶり立ち上つて）どうもこの需用の少い不景氣年に豐作は皮肉だが！

麟太郎 でもそこが罐詰にしておくんですから、生まで賣るのたアちがつて……。

代藏 うむ、まアそこは强みだが（と椽から降りステツキを取つて）どれ、お前が一服して茶を飲んでる間に俺は一まはり畑を見て來やう。（左手へ去る）

麟太郎、ふとテーブルの上の電報を見つけて一寸封を見る。が、人のくる氣配がしたのですぐ又テーブルの上へ放る）

お龍 （コップに水を持つてくる）まだお茶は來ないの、何をぐず／＼してゐるんだらう。

麟太郎 （一氣に飲み干して）あゝうまい。母さん、今日は何だか愉快相ですね。あんまりこゝの家にゐるのがいや相にも見えないぢやありませんか。

お龍 妾はハタからはいつも愉快相に見えるんだよ。どうせ自分の心は子供にさへ分りやしないんだからね。（煙草を取つて吹かす）ふむ。お前に何が分るもんか。

麟太郎 親の心子知らずですか。しかしそりやさうでせうが、どうか下手な芝居はしないで下さいね。藪蛇をされちや、此方が迷惑しますからね。

又二三人の勞働者がモッコや鍬を持つて庭先きを通る。

お龍 ちよつと、こゝは通つて貰い度くないわね。お前さん達の道はちやんと別にあるんだから。

勞働者達恐縮して頭を下げ乍ら去る。

麟太郎 （一寸いやな顏をする）母さん。又少し小遣をくれませんか。煙草を買ふ錢もなくつて困つてるんです。

お龍　まあ、此間上げたばつかりの十圓もうつかつちまつたの。（帯の間から蟇口を取り出し、札を渡し乍ら）あんた、この頃なにかわるい遊びでもするんぢやないの。

麟太郎　惡い遊びですつて？（皮肉な冷笑を浮べる。が、おとなしく金を仕舞ひ乍ら）へ、冗談でせう！。母さんは男が金をつかふつて云やア何でもその道よりないと思つてゐるやうだけれど。――でも母さんも大分ブルジョアの奥さんらしくなりましたね。その指輪でしたかね。千二百圓だかしたつていふのは。

お龍　（一寸指輪を眺めて）もう三百圓ばかり出すと大きな黒ダイヤのまはりに小粒のダイヤを嵌めこんだんでほしいのがあつたんだけど、こんなお婆さんがそんなものをはめたつて始まらないからね。

麟太郎　千二百圓位なら始まるんですか。――ふむ。何だか妙な氣がするなア。大きな丸髷を結つてそんなものを嵌めてゐる人がこの僕の阿母さんだと思ふと。

お龍　ぢや、もつと貧乏くさくしてる方が妾は似合ふと云ふのかい。

麟太郎　そんな事はありません。それがよく似合いますよ。その指で煙草をはさんで勞働者を叱つたりしてゐる處は。――あの吝ん坊のお爺さんがそんな馬鹿高いものを買つたのはちつと變は變だけれど。

お龍　大きにお世話だよ。お前には變でも、妾には變ぢやないんだから。

麟太郎　そりやさうでせう。ブルジョアジーつてものゝ後ろにはどうせ女がゐるんだから。

お龍　お前は又そんな妾に分らない言葉をつかつて妾を責めるんだね。（涙ぐむで）妾がこんなものをわざと娘のやうにねだつて買つて貰つたりしたのも一體誰のためだと思ふんだい。

麟太郎　母さんはそれも僕のためだつて云ふんですか。（苦笑して）どうもさういろ／＼御心配にあづかると有り難く

つてむづ〳〵しちまいますが、まあそれはさうとしてその指輪はお母さんのものにしておゝきなさい。いつ迄も寶石はどこへ持つて行つても財産ですからね。露西亞の革命の時には貴族の女たちが財産を寶石に替へて國を逃げた相ですよ。

お龍　つまりお前は妾にこの家を出て行けつて云ふ謎をかけてゐるのかい

麟太郎　え？　母さん隨分邪推深くなつたもんですね。僕は只この家にも或る革命がくる事を怖れてるんですよ。母さんが芝居をする迄もなく、誰かしらが早晩この家を出なけれやならないやうな。

お龍　分つてるよ。だから妾はお前のためにいつでもこの家を出てあげると云つてるぢやないか。（涙ぐむ）さうすりや他の者は皆この家におちつくやうになるだらうし、信用されてゐるお前があのぴつこのお翠さんなる事だつて出來るだらうからね。お前をこの家に引き込んであげた妾の望みは達するわけさ。（去る）

麟太郎　へ、出て行けたらお目にかゝら。（ポケットから手紙のやうなものを取り出して一寸ながめ又ポケットにしまひ、庭先きへ飛び出して二階を見上げる。が、誰もゐないので、又椽に戻り腰かけたまゝ卓上の講談雜誌を取つてゴロンと仰向けに寢そべる。

そこへ小枝子が茶を持つてくる

麟太郎　おや、僕に持つて來て下すつたんですか。（跳ね起きるやうに起き上つて茶碗に茶を注ぐ小枝子を視つめる）小枝子さん。東京へいらつしやるんですて？

小枝子　え、あたしが？　誰がそんな事云つて？

麟太郎　なに、只僕の蟲がさう云つたんですよ。ぢや、さう云ふお氣はあるんですね。

小枝子　さうね。ない事もないわ。

麟太郎　この家がいやだからですか。

小枝子　どうして？だつて妾みたいな片輪者がせめてもう少し學校でもじとかなかつたら仕様がないぢやないの。

麟太郎　さうですかね。(茶を飲み乍ら)女子大學でも出て職業婦人にならうつて云ふんですか。

小枝子　なつてはいけないの？

麟太郎　誰もいけないとは云いませんよ。鶴が羽根が一本拔けたために烏の眞似をしたからつて、しちやいけないとは誰も云へないやうなもんで。馬鹿々々しいとは思つてもね。

小枝子　妾、自分で一本立ちに生活していく人か烏なら烏になり度いと思ふわ。遊んで人の世話になつて鶴と云はれるより。

麟太郎　おや〳〵、急に發心しちまつたんですね。姉さんか何かそんな事を仰有つたんですか。結婚は地獄だ。女は男から獨立しなくちや救はれない、つてな事を。

小枝子　(見るともなく講談雜誌を拾つて見乍ら)姉さんはそんな事を私に云ひはしなくつてよ。(何か云ひかけて止す)

麟太郎　たゞ時々涙を拭いた顏を見せる他にはですか。さう。姉さんは胸に思つてる事をあまり口に出しては云はれない方ですからね。尤も見す〳〵御自分の二の舞ひを貴女にさせ度いと姉さんが望まれるわけもないでせうからね。

小枝子　(うなづいて何の氣ないやうに)ぢやあなたもやつぱりさう思つてらつしやるの。

麟太郎　なにをですか。結婚てものをですか。(小枝子うなづく。麟太郎嗤ひ出して)こりやどうも……。あなたもいつの間にか中々やるやうになりましたね。わるい人間にもまれたせいか、僕がきらひなせいか……

小枝子　だつてあなたがすぐさうへんな風にひねくれたもの丶云ひ方をなさるんですもの。

麟太郎　(うなだれ)いかにも、僕は人に物をたのむのにも自分の損になるやうな事ばかりしか云へないほど素直さ

を失つた男です。それに何しろ中學さへ出てゐない一介の勞働者であつて見ると……

小枝子　(少しほゝ笑みながら)あなた御自分をよつぽど勞働者とお思ひになり度いのね。でもお父樣はあなたはきつとえらいものになるつて云つてらつしてよ。

麟太郎　(つい北叟笑むで)僕の母の前でゞせう。

小枝子　いゝえ、妾によ。――妾だつてそんな氣がするわ。

以上の白の間に二階では常子が讀みさしの本を書棚に挿さんでゐる姿が見える。常子はそれから階子段を階下へ降りて來て此方に來やうとしたが二人の話し聲を聞いて横へ去る。

麟太郎　どうもありがたう。そりやまあそう云へばあなたのお父さんだつて今の僕なんぞよりやまだづつとつらい仕事をしてらしつたつてこつてすからね。勿論そりや只、云はゞお父さんの立志傳を飾るだけの話で、なにも勞働する者が皆お父さんのやうにお金持ちになるつてもんでもなし……(ちらりと小枝子の顏を偸み見る)

小枝子　妾、金持ちなんて、好きぢやアないわ。

麟太郎　はゝゝゝ。ぢや、貧乏は好きですか。

小枝子　(嚴くなつて)そりやどうせ妾なんか何にも云ふ資格はなくつてよ。でも、ぢや姉さんは仕合せだつたでせうか。

麟太郎　(顏を曇らせる)なにも姉さんを引きあひに出さなくつたつてさう云ふあなたがいゝ例ぢやありませんか。だから僕は貴女がこゝの家を飛び出度がられるのも無理はないといつも實は同情してるんですよ。先刻はわざとあゝ云つたんだが、まつたくいやな奴と一緒にゐなくちやならない位いたよりない事はありませんからね。

小枝子 （これも苦しげに）妾、そんな氣で云つたんぢやないわ。妾いつもあなたが邪慳になさるのをお氣の毒に思つてるんですわ。

麟太郎 僕の母に對してゞすか。（よろこんで）まさかいゝ氣味だとも云へないでせうがね。實際僕の母なんかは憎くむにも足りない無知な女なんで、見かけほどわるい女でもないんですが。勿論善い人間たア云へませんがね。運もわるかつたんです。僕はそれを憐れには思ひながら、ついどうも顏を見ると邪慳に出たくなるんですよ。あんまり感心した話とも思ひませんがね、何しろ一度も本當に母親らしい感じをうけた覺えがないもんだから。

この時前よりもやゝ近く、再び鐵砲の音につゞいて女の子らしい悲鳴がかすかに聞こえる。

小枝子 （ドキツとして）ま、なんでせう。あの聲。

麟太郎 （おちついて耳をすます）まさか人を撃つたんでもないでせう。章さんがそんなヘマをやる氣遣ひはないでせうから……

小枝子 だつてさうでなくつてあんな聲を出す筈はないわ。きつとさうよ。誰か人を撃つたんだわ。……あゝ、だから鐵砲なんかおよしなさいつて云ふのに。

麟太郎 ふむ、どうもすつかり姉さんの苦勞性がうつつちまいましたね。さうでなくつてもあなたは相當に小さな胸を苦しまされてゐるのに。

小枝子 （やつと少しおちついて太息を吐き）妾、苦しむだ事なんかなくつてよ。――でもどうしてかうこの世の中は不幸な人ばかり多いんでせう。

麟太郎 それがその世の中をつくつた神樣の思し召しだからなんでせうよ。おそらくね。

と麟太郎の云い畢るより早く『オイ　爺さん—き、きてくれ、早く!』と云ふけたゝましい車の聲が聞こえる。

麟太郎　(あはてもせずポケットから手紙を出して素早やく小枝子の手ににぎらせ)どうしたんです。えゝ?(悠暢に走り去る)

小枝子　(同時に立ちすくみ、兩掌を頰にあてるやうにして、掌中の手紙を見)又一太息吐いて逃げるやうに奥へ去る)

とすぐ右手の座敷の襖をあけてお龍が出る。押入から枕を出し、室の一隅に座蒲團を二枚並べて敷き、横になる。そこへ左手から花と花鋏とを持つた常子が現はれ、お龍に氣がつかずにベランダに上つて床の間の方に行きかけてお龍を見、そつと廊下へ出る。

お龍　(眼をあいて常子を見送り、舌打をして)あゝほんとに横になる處もありやしない。(寢返へりを打つ)

瀟洒な背廣姿の舜三、帽子を左手に持ち、ステッキを突き、息を切らせ乍ら庭先きへ這入つてくる

舜三　(大きな聲も出せず、家の中へ向つて呼ぶ)おゝい、小枝ちやん。——常子も誰もゐない……(お龍を認める)

お龍、大儀さうに體を起こし彼方を向いたまゝ頭をいぢり、體を此方にねぢつて

お龍　まあ、誰かと思つたら、舜三さんなの?(馴れ〳〵しく)まあ、これは大へん……(急にいそ〳〵と起つて枕を押入れにしまい、座蒲團をたゝんだりする)

舜三　(とめて)どうぞ〳〵ちつとも大へんなことはありません。これはどうも折角おやすみの處をお起こししちやつて……(腰かける)

お龍　いゝえ　寢てたんぢやないんですの。たゞ相變らずのリユウマチでゆふべも眠れなかつたもんですから……今、一寸こゝでね……(と云い乍らそこへ來てお辭儀をし)どうもしばらく……

舜三　(お辭儀をして)しばらくでしたね。どうもます〳〵筆不精になつちやつて御無沙汰ばかりしてますが、皆お

變りはないんでせうね。首をのばして（左手の道の方を見る）

お龍　（素氣なく）え丶まア、御かげ樣で……。照子さんは今度は御一緒ぢやないんですの。

羿三　え丶あいつはへんに出不精な奴でしてね。一つは、ケチのせいもあるんでせうが自家でごろ／＼してるのが好きなんです。よろしくと云つてゐました。

お龍　（色氣を含んだわらひ方をし乍ら會釋して）御變らずお口がわるいのね。羿三さん。――でもまあ、ほんとにさつぱりした氣持ちのい丶方ですわ。あかるくつて。

羿三　あいつですか。へ、あかるいんだか、ばかるいんだか、唯呑氣な丈けが取り柄ですよ。――が、そりやさうと（とベランダを見廻はして）すつかり西洋式になつちまいましたね。いつの間にか。

お龍　ちよつとびつくりなすつたでしよ。（笑って）どうしてそりやァハイカラなもんですわ。食べものだつてこの節ぢやあハムだの、ソーセージだのつてね。

羿三　（つい噴き出して）ソーセージはお寺みたいですね。

お龍　まア（と手で打つやうな眞似をして、胸をかゞめ乍ら大袈裟に笑ひ）うちでしよつちう、ソーセージ／＼つて仰有るもんだから、ついうつつちまつて。（又掌を口にあて丶笑い、急にぽんと膝をた丶いて）あ丶、そうそ。さつきあなたに電報が來てましたわ。（さがして）それで多分あなたがお見えになるんだらうつて……（電報を見つけて渡し）お噂してたんですの（奥へ去る）

羿三　（後から呼びかける）ねえ、わざ／＼知らせに行かなくつてもよござんすよ。（電報を開封して見る。そしてぼんやりしてゐる處へ美濃田、左手から聲をかける）

美濃田　おい、こゝから這入つていゝのかい。

舜三　（電報をポケットにしまい）あゝいゝとも。はいり玉へ、きよめ玉へだ。

美濃田、庭先きへ這入つて來る。身輕げな旅行服。殆んど舜三と同年輩だが風采がきれいなのでずつと若く見える。油繪の道具を肩にかけ、小さなズックの袋を提げてゐる。

美濃田　（帽子をとつて、ちらりと家の中をのぞき、誰もゐないので前面觀客席の方をながめて、深い息を吐き）なるほど、こりやいゝや。君が自慢するだけの事はあるナ。

舜三　あるだらう。（指して）あの白い花は何の花か知つてゐるかね。

美濃田　なんだ。さつき林檎だつて聞かされたばかりぢやないか。杏はもう散つたつて。

舜三　あ、さうだつたかな。どうもよつぽどどうかしてゐるよ。俺ア近頃。記憶の無く無つた事は夥しい。

美濃田　一寸この荷物をこゝへ置かして貰ふぜ。（とベランダの一隅に袋や油繪道具をおろして又ながめ）さみしい花だナ。かう一面に咲いてゐる處は綺麗だが、何だかかう薄倖な……（と云いかけて止す）

舜三　女を想はせるかい。ふむ。（煙草の箱を取つて美濃田に一本取らせ自分も啣へ乍ら）だが、どうだい。畫け相かね。

美濃田　（舜三と並んで縁に腰かけポケットからマッチを出して二人吸いつけ乍ら）うむ、無論、畫けるにや畫けるが、まアどつちかと云やア僕はこの後ろの山を畫きたいね。南畫の筆法を油繪に應用して活かして見たいと僕はかねぐ思つてゐるんだから。

舜三　（靴を脱ぎ乍ら）ところがその山を畫く前にどうやら僕の親父の顏を畫かされ相だよ。親父は――これも前に話した事かも知らんが――自分のいゝ肖像をのこしたがつてゐるんだからね。（と上へあがつて）おゝい。小枝ちやん。常

子。どうしたんだ。（奥へ行く）

美濃田は、煙草を啣へたまゝ立つて畫の圖取りをするために、兩手を双眼鏡のやうにして前の方を彼方此方のぞくやうに眺める。それからズックの袋を開いて、小さな土産の包みものを出す。

舜三の聲　いや、實はね、一旦來る事にきめてから又面倒くさくなつて止さうと思つたんだが、昨夜へんな夢を見たもんだからね。

常子の聲　へんな夢つて？

舜三の聲　なに、只、お前に逢つた夢さ。どんなんだか忘れちまつたが、まあ兎に角元氣ならいゝや。

舜三と、花を活けた花瓶を持つた常子と出てくる。

舜三　美濃田君だ。お前知つてたつけナ（美濃田に）僕の妹の常子だ。

常子　（花瓶を置いて）お名前だけ。お噂はよく展覽會で拜見しておりましたけど。

美濃田　いや、僕もお名前だけだ。僕、美濃田です。

二人挨拶する。

舜三　お作品はよく拜見して居りました、か。――まア上らないか。

三人笑ふ。

美濃田　御承知の通りのへボ畫かきですがかね〴〵こゝが非常にいゝつて事を舜三さんから伺つてたんで、遠慮なく御邪魔に出たわけです。（靴をぬぐ）

常子　どうぞなるべく御ゆつくり。さみしくつて困つておりましたんですから（花瓶を床の間におく）

舜三　こんなとこにさうしてりやさみしいにきまつてるさ。――小枝ちやんはどうしたい。

常子　今章さんが鐵砲で人を怪我さしたんですの。それを見に行つたんでもないでせうけど、――

舜三　今來がけに俺も見たよ。遠くから。ふむ。相變らず碌な事アやらねえナ。

常子　え、御覽なつた？（ズボンをはたいて上へ上つた美濃田に椅子をすゝめる。美濃田掛ける）

舜三　なに、傍へ行つて見たわけぢやない。なんでも鐵砲で撃たれた〳〵つて人が駈けて行くんで、俺ア逃げて來ちまつた。

美濃田　僕は行つてのぞいて來ましたが、大した怪我ぢやないやうでした。肩を少しやられただけで……

常子　（溜息を吐く。舜三に）でもあの人それは氣が弱いんだから、もう何にも仰有らない方がよくつてよ。どんなに氣に病んでるか知れないんですから。

舜三　章にかい。誰がそんな馬鹿な事を云ふもんか。（向ふを見て）は。おやぢの奴やつて來やがつた。君、吹かれるぜ。覺悟をしてゐないと。

美濃田　（わらつて）吹かれる位は平氣なもんさ。吹かれて損をした事はないんだから。

代藏の聲　療治の代はこつちで辨償してやるからナ。なアに一寸位過ちに怪我をさした位いでこの俺を怨むやうな恩知らずはこの村にやゐないよ。どこの誰の子だか聞かせて、後でお龍でも一寸金をつゝむで見舞いに行つてやりやそれでいゝ。

龍の聲　（低く）妾、いやですわ。そんなとこへあやまりに行くなんて。麟太郎をやりやよかなくつて？

舜三　いや、僕が行つてやりますよ。お父さん。

（年寄りらしくステッキを突いた代藏とお龍、右手の庭先きへ出る。）

代藏　うむ、お前が來たんだつけナ。おや、お客さんか。

舜三　（美濃田と共に起って）いつかお父さんの肖像を賴まうつてお話した事のある美濃田君です。（美濃田に）僕の父だ。

美濃田　始めて。どうぞよろしく。（お辭儀をする）

代藏　（輕く會釋して）あ、さうか。畫かき屋さんか。（舜三の掛けてゐた椅子にかけ帽子をぬぐ）

舜三　（お龍に）僕の舊い友達です。

お龍　まあ、ようこそ。

二人挨拶する。常子去る。

舜三　（冷やかすやうな微笑を浮べ乍ら）美濃田君はあの有名な養殖眞珠の美濃田さんの御令息でしてね。又洋畫家として……

美濃田　（紅くなつて微笑ひ乍ら舜三に）おい、つまらない事を云ふなよ（土產の包みものを出して）これもつまらぬもんですが、自家で出來たものですから、お慰みに……

お龍　まあ、お土產ですの。まあ御丁寧にそんな事を……あなた。（と禮をしてその包みものを代藏に見せる）

代藏　ふうむ。あんたのお自家で出來たものと云ふと眞珠かな。どれ、ちや早速…（眼鏡をかけ）拜見しやう。（包みをあける。中に眞珠貝がある。）ほうこれは立派なもんだなア。（お龍に見せる）

お龍　まあ、見事ですこと。これがあなたのお家でお出來んなりましたの。（舜三に渡す）

美濃田　親父は三十年間苦心してやつとまア天然のものに劣らないものが出來るやうになつたとか云つて、喜んで

ゐますか、どうですか………

お龍　（舜三に）今度はしばらく滯在してゐらつしやれるんでしよ。一寸離れの方を用意して來ますわ。（去る）

代藏　（眼鏡をはづして）　ふうむ、三十年間。それもえらいが、わしはこの仕事を始めてから丁度四十年になりますよ。こゝはずつと昔城のあつた處で、今でも土地の者はこゝをお城と呼んでますが、四十年前にわしがこゝへ來た時分にやまだ熊が出てくると云つたやうな荒れ山で、獲れるものと云つたらそれこそ山芋位いの、全く仕樣のない土地だつたのを、ふと、商用でこつちへ來た折でした。一本の杏にわしが眼をつけたのが元とでね。（煙草を吹かし〳〵語る）

代藏以上の白の間に常子が紅茶を盆にのせて持つてくる。舜三は紅茶を飲み乍ら常子と何か親しげに話し合ふ。そして時々美濃田の方を見やつてくす〳〵笑つたりする。美濃田は閉口し乍らも畏まつて代藏の自慢話を聞いてゐる。

代藏　（つゞけて）ところでわしが苦心慘憺の擧げ句、次第に仕事の成績を擧げてくると、今迄わしを笑つてゐためく〳〵ら共が、後から〳〵とわしの眞似をしだして彼方でも此方でも土地を買ひこんでは、果樹の栽培をやり出した。（前の方を指して）御覽なさい。こゝから見渡すかぎりの丘で杏と林檎の圃でない處はない。わしが先見の明で只のやうに買つた土地は今ぢやもう坪何圓と云ふ値段で、それでももう殆んど空地がないと云つた有樣だ。——

美濃田　では土地の者はさだめしこちらを御恩に感じてゐる事でせうね。

代藏　それはゐますだらうぢやないか。わしはこの死んでゐた土地に價値を與へて活きた土地にしたんだ。丁度あんたのお父さんがえらい著眼で、あのそれ紀州だつたかな、あの舟も着かぬやうな港を（眞珠貝を取つて）から云ふ寶ものゝ出る貴とい名所にされたと同じこつて。そればかりぢやない。わしは同時に又この山地には一番ふさはしい、いゝ職業を土地の者に與へた。そのおかげで彼等はいたづらにあの牢獄同然な都會の工場へなだれこんで、みす〳〵豚のや

うな資本家共の餌食になる憂き目をも免れたと云ふもんです。

常子はいつの間にか去つて了つてゐる。　お龍出る

お龍（代藏の傍に來てさゝやくやうに）又工場の連中が來て是非お目にかゝりたいつて云つてますの。

美濃田　退きませうか。

代藏　いや、よろしい。客ではないんだ。（舜三に）お前はこの—何さんだつけナ—うむさう〳〵美濃田さんを案内して、一つ圃を見せて上げちやどうか。今年の圃の出來は多分こゝのレコードを破るだらうと思ふんだよ。

（口笛を吹きつゝ去る）

舜三　はゝ。（お龍に）相變らずどうも元氣なもんですね。今日は又髭を剃つてるんで、何だか翁の面を剝いだサチールのやうに若く見える。髭で隱してる方が見られるんだが、自分ぢやあの方がいゝつもりでゐるんですかね。

お龍（苦笑して）そりや誰だつてきたないよぼ〳〵に見えたいと思ふ者はありませんものね。（又眞珠の箱を取つて床の間の方に行き）これはこゝに飾つときませうね、まアほんとにこんなものを頂いてお返へしの仕やうもありませんわね。（云ひ乍らそれを床のちがへ棚の上に置き、之の序でに常子の活けた花をいぢくつて直ほす。）

美濃田（わらい乍ら）なアに、御心配はいりませんよ。なにも僕や僕の親父がそれを造つたつてわけぢやないんですから。（袋の中から一册のスケッチブックを取り出し）ぢや、僕は日の暮れない中に圃を拜見方々一寸そこらを歩いてくるよ。

（靴を穿く）

舜三　下見をしに行くのか、おや僕は邪魔になるといかんからまア案内はしない事にしやう。

お龍　まアあんなうまい事を、ずるいのね。（笑い乍ら）お部屋はあちらに用意しておきましたから、いつでもどう

ぞ。(まる)

美濃田も微笑い乍らうなづいて右手へる。舜三は煙草を吹かし乍らベランダの晴雨計に附いた寒暖計を見たりして「六十七度か」なぞと獨り言と云ふ。それから椅子を二つ向い合はせて寢椅子のやうに足を伸ばし、講談雜誌を取つて欠伸をし乍ら背り返へて見る。ふと聲の靡が聞える。舜三は雜誌を膝において耳を澄ます。そこへ二人の着換への着物を持つた常子がくる。

常子　あや、あの方は。

舜三　(顔をもたげ)一寸そこまで繪の下見に出かけたよ。おや、わざ〳〵着物を持つて來てくれたのかい。それや御親切だな。(と冗談のやうに云い乍ら常子の顔をのぞく。そして常子と顔を見合はせてかすかに親しくほゝ笑み合ひ乍ら洋服をぬぎにかゝる。又遠くで聲が啼く。)(常子はほゝ笑み後ろをふりむく)あの聲を聞くとしみ〴〵山を來る氣がするねえ。ガタ自動車やオートバイの音とは大分ちがふよ。なにも都會に惡人と小人が集まつて、田舍に善い人間が集まつてると云ふわけぢやないんだが、あの須田町のまん中からいきなりここへ來ると、あんまり感じがちがふんで、まるで何だがここは善良で幸福な人間ばかりゐるやうな子供らしい錯覺が一寸起るよ。

常子(後ろから着物をかけて)別に錯覺でもないでしよ。幸福な人はどうだか知らないけど。

舜三(じつと常子を觀る)そりやさうだ。本當にわるい人間てものは、つまり他人の不幸を喜ぶ瞬間の多過ぎるやうな人間てものは、存外ザラにゐないもんだ。――だが話がちがうが(頭で奥を指して)俺も惡い人とはどうも思へないがねえ、

二人の會話の間に次第に夕方の光線になり、更に小暗くなる。

常子(暗くなる。下を向いて)妾だつて思つてやしませんわ。却つてお氣の毒な方だと……

舜三(すつかり着換へて、なほじつと常子の顔に眼を据る)しかしわるくない人間同士でも氣が合はないとか利害の衝突

とか云ふ事はあるからナ。

常子（洋服をたゝみ乍ら）ですから妾やつぱりここへ歸つて來たのが間違つてましたわ。もちろん始めから承知で歸つては來たんですけど。

舜三　そんなら、ここへ來るまへになぜ俺の家へ寄つておくれなかつたんだらう。尤も俺アあの時旅行中ぢやあつたけど、お前は島子を嫌いでもないやうだし、俺達は少し不服だつたんだよ。實は。

常子　あの時すぐ兄さんを思つたんですけど何だか急に小枝ちやんに逢い度くなつて……

舜三　自分の不幸の反映で、小枝ちやんまで急に可哀相に思へて來たと云ふわけか。

常子　妾が不幸なのは自業自得ですわ。たゞ妾のやうな業の深い女と結婚したあの人をほんとに不幸だつたと思つてますわ。（涙ぐむ）

舜三（ぼかんと外を見てゐる）

代藏の聲ワッハッハッハ。社會主義なんてそんな野暮なもんで俺がおどろくか。馬鹿め、ハッハッハ。

舜三（そつちを睨み舌打ちして）何を云つてるんだ。

常子　でも妾は自分の業をどうする事も出來なかつたんですもの。（泣く）

舜三（苦しげに）どうもお前の云ふ事は俺なぞには一々皮肉に聞こえるよ。お前達の結婚には俺に責任があるんだが、俺は間島こそ自業自得だなぞと自分の事を棚に上げて云ふ資格さへないんだからナ。只お前がこゝにゐづらいならいつでも俺の家で歡迎すると云つておくだけだ。

常子　ありがと。（涙を拭って）妾こんなに業が深くつても兄さんの事を思ふと、生きてゐる氣になりますわ。

舜三（涙ぐむ）ありがと。さう云はれると氣が引けるが、

常子　あの先刻來た電報、あの人からぢやないんですの、

舜三が答へやむうとする處へ美濃田、章と話し乍ら歸つてくる常子去る。

舜三　どうだつたい。景色は。

美濃田　いや、景色どころぢやないよ。そこで章さんに逢つたんだが、どうも怪我が重いらしいんだよ。

舜三　チエツ。それは困つたなア。（滅入りきつてゐる章を見て）だがそんなに無闇に悲觀したつて仕方がない。結果は兎も角過ちは過ちなんだから。

章　だつて僕があぶない〳〵と云つてる處へ向ふで飛び出してくるんだもの。（泣き出す）

美濃田　その子は低能な子なんだ相だから――全く仕方がないな。（向ふを見て）どうでした。

麟太郎　どうも困つた事になりました。初めの樣子ぢや大した事ぢやあるまいと思つたんですが、散彈は一つ位肺にもあたつてゐるらしいんで、事によると致命傷だつてこつてす。

いつの間にか小枝子そこへ走つて來て物も云へず立ちすくんでゐる。舜三は氣がつかない。

麟太郎　小川勇吉と云ふ職工の一人娘で、兩親は氣違いのやうになつてゐます。兎に角早速お父さんが見舞ひに行つておやりになる必要がありますが、どこにゐらつしやるんです。

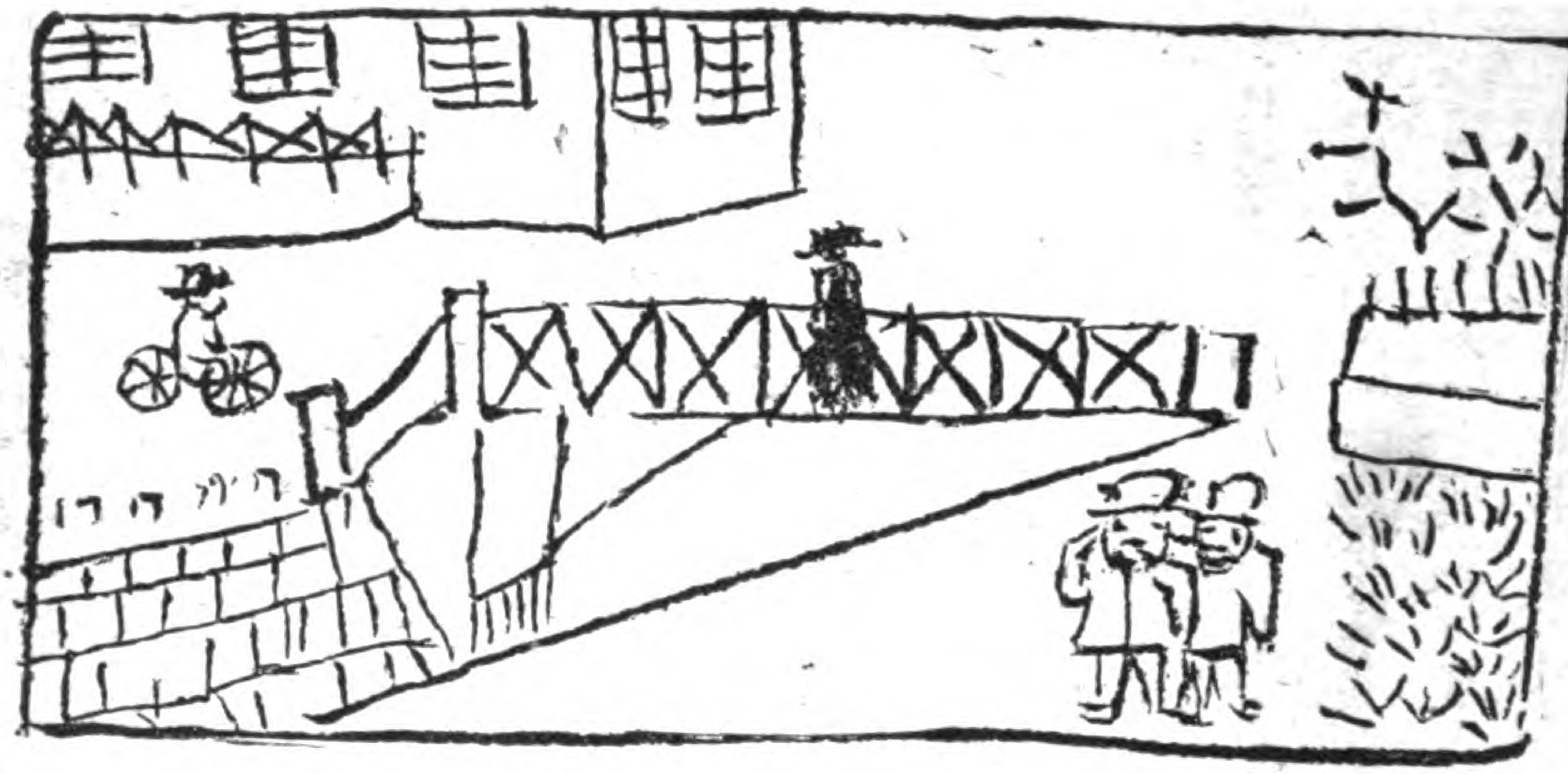
この時二階に明りが點く舜三そつちへ去る。

美濃田（章に）たとへ萬一不幸にして助からなかつたとした處で、君は殺人をしたと云ふ意識で無理に苦しむ必要はないと思ひますね。

と、峰太郎は憎く〳〵しげに美濃田をにらみつけ「へん」と肩を怒らして左手へ去る。

二階では代議が悠々と謠曲を謠うのが聞こえる。闇の中に三人は默つて離れ〳〵に立ちすくむ。

附記、この脚本は最初全部三幕を本號に載せるつもりであつた處、例にない暑氣負けの故もあり、遂々第二次の豫定の第二幕すら書けず、この雲をつかむやうな第一幕のみで切らなければならない事になつた事を實に殘念に思ふ。次號には何とかして完結させ度い希望である。



黄昏

廣津和郎

徹は眼を凝らして、障子のサンを見つめながら、茶立蟲を聞いてゐた。懷中時計のチクタク云ふ音を、十分の一も二十分の一も小さくしたやうな、チ、チ、チ、チと云ふ音を聞いてゐると、彼の心持は和やかになつた。ダヌンチヨの『死の勝利』の中で、茶立蟲が死の象徵として取扱はれてゐるのを讀んで、彼は異樣な氣がした事を覺えてゐる。日本では茶立蟲を見る事は、見た人の幸運と云はれてゐるからだ。

併しその泣聲は餘りにかすかで、餘りに哀れげで、陰氣でない事もない。死の象徵と云はれるのも無理はないかも知れない。——彼はそんな事を考へながら、その蟲の姿を探してゐた。かうした小蟲に、子供の時から不思議に興味を持つてゐる彼は、前にも度々その蟲の姿を見つけた事があつた。それは障子のサンについてゐる小さな埃にも見紛ふやうな、白——灰白色の小蟲だつた。手で潰してもその死骸が後に殘らずに、そのまま指の間で蒸發して消えて行つてしまふやうな小蟲だつた。その大きさはどの位と云つたらいいだらう。針の先——ほんたうに針の先よりも未

だ小さいかも知れない。

彼は一所懸命眼を凝らして、今もたうとうその姿を見つけ出した。そしてやつと安心したやうに吐息したが、子供の時分から見ると、多少眼が悪くなつたためか、小蟲の姿が朧ろに見えた。

彼は机の上の洋書の小説本を見て、眼の悪くなるのも無理はないと思つた。彼はさうして細かい洋書を翻譯する事で、一家を養ひ始めてから、二三年經つてゐたからである。

併し彼は今相當に滿足だつた。何の不平もないやうな心持で小蟲を見てゐた。

電燈のつくのに間のない頃だつた。遠くに波の音が聞えてゐた。空氣が澄んで來たためか、波の音に、何處となく秋が感ぜられた。

彼は障子を開けて、縁側に立つて、濱から沖の方を眺めながら、暢々と伸びをした。そして隣りの部屋の父に向つて、

『もうそろそろ御飯かも知れませんね。階下(した)に下りませうか』と聲をかけた。

『うう』父は不得要領な返事をした。多分讀書に耽つてゐるのだらう。

彼は父を待たずに、階下に下りた。三つになる進が玩具の自働車を引つぱつて、八疊の部屋をかけまはつてゐた。徹は敷居の上に立つて、丈のびして、鴨居に頭をつかへさせながら、子供の遊ぶのを見てゐた。

『腹が空つた』と彼は大きな聲で台所に向つて云つた。

『腹が空つた』と進が彼の言を眞似て云つた。

『只今』さういふ妻の聲か台所から聞えるだらうと豫期してゐた。ところが、何も聞えなかつた。

妙に台所はひつそりしてゐた。と間もなく母が台所から茶の間の六疊に、障子を開けて出て來た。顔か緊張してゐた。

『何ぼ何でもあんまり云ひ方かひどい』母はそんな事を云ひながら、六疊の部屋の眞ん中まで歩いて來た。

『どうしたんです？』と彼は聲をかけた。

『いえ、何でもないんだけれども……でも……あの病氣は、母さん、養生しても一年のものが三年持つだけですつて、ね、と云ふのは、何ぼ何でもあんまりひどい』

『誰が云つたのです？　とめがそんな事を云つたのですか？』

『一年のものなら二年でも、二年のものなら三年でも……さう思つて一所懸命になつてゐるんぢやないの。それを、あんな風に……』

『とめ』と彼は妻を呼んだ。

とめは返事をしなかつた。

『毎日毎日お父さんだけに特にお魚をつけるのが、あんな風に取られてゐるんだと……』

『母さん、もう解りました。僕から云ひます』徹は台所まで、疊の上を荒々しく踏んで行つた。『とめ、此方においで』

妻は片意地なうすら笑を、その頑丈な頬に浮べてゐた。

『お前はどうしてそんな下等な事を云ふのだ？』徹はとめの片腕を取つて、茶の間まで引きずるやうに引つぱつて來た。彼女は茶の間の疊の眞ん中に、ぺたりと坐つてしまつた。

『家ぢゆうで誰が一番大事か、お前は知つてゐるぢやないか。父さんの御病氣は、少しづゝ快くなつていらつしやるの

だ。――それを二年のものが三年にのびるだけとは何だ？……どうしてそんな事が云へるのか、俺には解らない。どうしてそんな事が……繰返して口にするのも厭なやうなことが……』

彼は喉が乾いたやうなイライラさを感じて、言葉を切つた。彼はこんな言葉は、この一家では、先祖代々聞いた事がない言葉に違ひないやうに思つた。父が病氣してゐる。呼吸器を惡くして、數年前から養生してゐる。それをいくら養生しても、二年のものが三年になるだけの事だ――そんな事を云つた息子も、息子の嫁も、實際この一家には嘗てなかつたに違ひない。徹は兩親にも相談せずに、彼の勝手でこのとめと結婚してしまつた事が、今更のやうに云ひやうのない不覺に思はれて來た。淋しいけれども澄んでゐた空氣の中に、突然ゴミタメを打ちまけた罪が自分にあるやうな氣がした。

『他の事とは違ふ。さういふ事は、どんな事があつても許しがたい事だ。――どうしてそれが解らないのだ。どうしてそんな言葉が云へるのか？』

『あたし歸ります。進坊をつれて歸ります』とめは立上つて、から大聲で云つたかと思ふと、八疊の間に遊んでゐた子供の方へ駈け出して行つた。

徹は少し呆見に取られた形でそれを見送つてゐた。が、妻が進を抱き上げて、それから背中に背負つて、玄關の方へ行きかけたのを見ると、彼は妻の側に近づいて行つて、進を奪ひ取り、そして子供を疊の上に下ろし、それから、

『莫迦』

拳を固めて、妻の横面を張つた。成熟した女の彈力のある筋肉が、彼の拳にしたたか打つかつた。彼は自分がへんに落ちついてゐるやうな氣がしてゐた。平手は鼓膜を破る恐れがあるから、拳固の方がいい、とそんな事を考へてゐた。

とめの眼が動物的な敵意と憎しみとで彼の顔を射た。彼女は腕力的に彼に對抗しようと云ふ氣勢を一寸示した。が、そのスキを與へずに、彼の第二の拳固が、彼女のその氣勢を挫いてしまつた。彼女はぺたりとそこに腰を下ろしたまま、默つてゐた。彼よりも二つ年上の三十近い彼女は泣きもしなかつた。

進が泣いてゐるのを彼は耳にした。が、彼は子供の方を振向かずに、『何といふ醜さだ』と心に呟きながら、部屋の中を歩きまはつてゐた。

表面の表ればかりで、とめだけを責めるのは、正當ではないと彼は考へてゐた。それにはその底にもつと原因がある。とめはこの一家で、誰からも愛されのはゐなかつた。第一に彼自身が彼女を愛してゐなかつた。彼と彼女との結合は、ほんの不圖した肉の牽引からだつた。徹はそれを恥ぢてゐた。それで進の出産が彼のその恥を一層のつぴきならぬものにして、彼は蒔いた種は自分で……そんな考で、彼女と結婚し、そして彼女を愛さうと心掛けてゐた。が、どうしても彼は彼女を愛せなかつた。一口に云ふと、彼のさういふ氣持が一家ぢゆうに反映してゐた。

だが、そればかりではなかつた。徹の母は、彼の第二の母で、別段世に云ふ繼母のやうに、徹に故意に冷たく當るといふわけではなかつたが、そして彼女は心の底に意地惡など持つてゐる筈はなかつたが、併し徹の父の子煩惱が、彼女の心に一種の嫉妬を起させてゐたのは事實だつた。それは十數年つづいてゐた。父とだけゐると、母は實に好い母だつた。父の病氣が一時あぶなかつたり、父が遠い或海邊の病院に入院したりしてゐる間、母の看護は文字通りに寢食を忘れてゐると云つた形だつた。『自分の病氣が今のやうに恢復して來たのは、みんな母さんのお蔭だ』父はさう云つた事があつた。さういふ點で、徹は母に心から感謝してゐた。――こんな風に母に感謝するなどといふところが、徹自身の心にも、母に對して他人行儀な點があるためかも知れないが。

併し父と母と二人だけで暮してゐるのならいいが、そこに徹が一緒になると、どうも母の態度に多少の變化が出て來た。——かういふのは、女といふものがみんな多少持つてゐるヒステリイのためかも知れない。何でもない時に、いきなり障子がぴしつと故意に荒々しい音をして閉められたり、皿小鉢がカチヤカチヤと鳴らされたりした。徹はさういふ音を耳にした時、云ひやうのない情なさに、心が冷たくなつた。——彼は子供の時からさういふ記憶を度々持つてゐた。

そんな風なところのある母だつた。さういふところのある母と、强情で意地を通さうとするところのある、とめ——このとめの强情や意地つぱりも、彼女の良人の愛のない心の反映が無論ないとは云へないが、併しただでさへ、二人の女が集まつてうまく行く事はめづらしいところに持つて來て、母の上に云つたやうな性質と、とめの强情とがぶつかり合つて、うまく行くと思つてゐたのが、徹の空想——といふよりも、寧ろ無考だつたのかも知れない。

さういふ事を總て計算に入れて見なければならない。

徹は部屋の中を歩きながら、そんな事を考へてゐた。無論こんなやうに秩序立へて考へたのではなく、そんな考がごちやごちやと頭の中に押寄せて來たのだ。

これから長い間、こんな風にしていつまで續いて行くのかと考へると、彼は妙に絕望的になつて來た。と同時に、みんな實際は、取立てて惡い人間でもないのに、といふ氣がして來た。

摸つた事が、とめに對して少し氣の毒な氣がして來たので、彼はちらりと彼女の方を見た。とその瞬間、彼女の眼が再び憎惡と敵意とで、彼の眼を睨んでゐた。——進をつれて歸つて行つてしまつてやるから、さう云つたやうな冷笑が、彼に向つて脅迫してゐた。

『莫迦…』

彼は再びむらむらとして來てさう叫ぶと、彼女に近づいて行つて、彼女の横面を張つた。彼は狂暴な氣持が胸に迸つて來た。全身が憎惡に顫へて來た。

『何故貴樣は、そんな事を直ぐ表すのだ。父さんに對しての先刻の言葉も、口に出すべき言葉ではないのだ。進をつれて歸るといふ言葉も、無暗に口に出すべき言葉ではないのだ。――無教養にも程がある。莫迦、莫迦。』

一歩一歩加速度をもつて興奮の押寄せて來るやうな氣持で、彼は歩きまはりながら、彼女の側に近づくと、彼女の横面を張り、それから又歩きまはりながら、再び彼女の側に近づくと、その横面を張つた。――『醜い、醜い。何といふ俺は醜體だらう。俺といふ人間は零だ。このざまは何だ。』そんな事を心に叫びながら、彼は彼女の横面を張つた。

『徹、徹、何をしてゐるのだ！』

父の聲が聞えた。彼は父が梯子をいつ下りて來たのかも氣がつかなかつた。

徹は父にこの樣子を見られたのが、一遍に恥しくなつて來た。

『御免なさい』彼は口の中でさう呟くと、そのまま二階に驅け上つてしまつた。そして自分の部屋の疊の上に突つ伏すと、泣き出した。彼は父の眼に映じてゐたであらう子供の時の自分の姿を想像した。いや、子供の時分ばかりではない。つい三四年程前まで、父が自分について描いてゐたに違ひない希望を想像した。――あまりにみじめなものを父に見せてしまつた、といふ事が、今更のやうに彼の胸を衝いて來た。さういふみじめな光景を見なければならない父の心持のみじめさが、二重に彼の心に反射して來た。

父がしづかに二階に上つて來た。階下には進の泣聲も聞えなかつた。

父は椽側を通つて、自身の部屋に這入つて行つた。しづかな足取りだつた。そのまま暫く默つてゐた。

『徹、こつちにおいで』

暫くして、父はやさしく云つた。徹はもう涙が止つてゐた。彼はまぼしいやうな恥しさで、父の部屋に這入つて行つた。

『手荒な事はしないがいい。手荒な事は……』

『ええ』

徹は父の顏に彼に對する優しい慈愛の溢れてゐるのを見た。が、それと同時に、父の顏には、かすかな苦笑も浮んでゐた。

『困つたものだ、女といふものは、實際』

父は眼を伏せながらさう云つた。

徹はなごやかな心持になつて、默つてゐた。肉慾も何も知らない子供時分のやうな氣持が、彼の心に歸つて來た。彼は心が明るく、はれやかになつて行くのを感じた。

一匹の小さな蜂が疊の上を飛んでゐた。それは黑い名の知れない蜂だつた。それは蜘蛛を取る蜂で、小蟲の好きな徹は、子供の時からその蜂をも見馴れてゐた。それと同じ蜂で大きいのは外にゐた。夏の夕方の、乾いた庭の土の上を、その蜂は大きな蜘蛛をころり／＼と轉がしながら、その巢の方へ引つぱつて行つた。――彼はその蜂の名を未だ調べた事がなかつたが、フアーブルの昆蟲記でセリセリスと云ふ甲蟲を專門に取る蜂の事を讀んでから、この蜂もセリセリスの一種だらうと考へてゐた。――今疊の上にゐるこの小さな蜂が、庭にゐる大きな蜂と同じ種類の蜂である事は解る

が、庭にゐる大きな蜂の子であるか、それとも同種類で、小形なのか、それが彼に一寸解らなかつた。――が彼はその蜂にじつと眼をやつてゐた。

それは頗る活潑な蜂で、全身が蟻のやうに黒く、脚が長く、羽根は透明だつた。その羽根をぶる、ぶるつと小刻みに絶えず振りながら、疊の上や、床の間や、机の上などに、獲物を捜してゐた。徹はじつとそれを見てゐる中に、蜂が既に獲物を捕へてゐたのを見た。父がもたれてゐる机の下の薄暗いところに、一匹の小さな蜘蛛がうづくまつてゐた。蜂は凱歌を奏してでもゐるやうに、その近邊をぶるぶるツ、ぶるぶるツと羽根を動かしながら飛びまはつては、時々その蜘蛛の上にとまり、口でくはへるのか、足で抱いて動かすのか、二三寸その蜘蛛を引きずつた。小さな蜘蛛はすつかり意氣地がなくなつて、脚を身體にぴつたりくつつけて、まん丸くなつたまゝ、蜂に少しづつ引つぱられて行つた。丁度猫につかまつた鼠のやうに畏縮して見えたが、或はセリセリスが甲蟲にするやうに、この蜘蛛の神經を痲痺させる注射をしてゐるのかも知れない。

徹は蜘蛛が一寸可愛さうになつた。それで蜂を追つてやらうかと考へたが、又この蜘蛛がうつかりすると、あの可憐な茶立蟲を食べるかも解らないといふやうな氣がして來て、そのまま默つて見てゐた。子供の時分に、かうした蟲の世界の弱肉強食の烈しい有樣を見て、どうしていいか解らない憂鬱を感じた事があつたが、それに似た感じが、今も少しして來た。が、それと同時に、今は觀察の興味といふものが、同じ程度にあるので、へんにセンチメンタルにはならなかつた。

徹が熱心にその蜂を見てゐたので、父が笑ひながら云つた。

「これはなかなか強い蜂だよ。――これはこんなところに巣を造つてゐるのだからね」さう云ひながら、父は本棚の上

にのつてゐる筆立の筆のサヤを指さした。『あのサヤの中に子を生むらしいんだよ。そして子供の餌として蜘蛛をその中にに入れて、上から密封して置くんだよ』

『ほう、さうですかね。それぢや、いよいよセリセリスの一種なんですね』

徹はさう云つて、フアブルの昆蟲記で讀んだ話をした。獲物を殺してしまふと、腐るので、神經を痲痺させる注射をして、身動のならないまま生かして置く事、それを食べて蜂の子が育つ事……そんな事を話した彼は、父の話によつて、外にゐる同種類の蜂は、同種類ではあるが、これの親といふわけではなく、別の蜂である事を知つた。

『神經に注射するとは微妙な事をするものだね』

『微妙なことをするものですね』

二人は何事もなかつたかのやうに、こんな事を暢氣に云ひ合つてゐた。が、徹は父がこんな蜂をやはり觀察してゐたといふ事から、この數年間の父の生活が思ひ出されて來た。孤獨好きな、人と交らない父は、外出といふ事を殆んどしなかつた。始終書齋にばかり引籠つてゐた。その孤獨と運動不足とが、終に父の病氣を引起したのであつた。

徹は急に父がいとほしく、心が感傷でいつぱいになつて來た。この父とだけだつたら、どんなに澄み切つた生活が出來るだらう、といふやうな事が考へられた。

『ねえ』と彼は子供時分に父に甘へた時のやうな氣持になつて云つた。『僕、父さんと二人きりで、下宿生活でもしてゐるんだつたら、どんなに好いだらうと思ひますね』

最後の方を戲談めかしく、笑ひ顔して云つたが、不圖笑へなくなつて、涙が浮んで來た。

『うん』と父はうなづくやうに云つて、一寸默つてゐたが、少しして、しんみりした調子でかう云つた。『お前と二人

だつたら、何も下宿などしなくつたつて、女中でも雇へばいいさ』

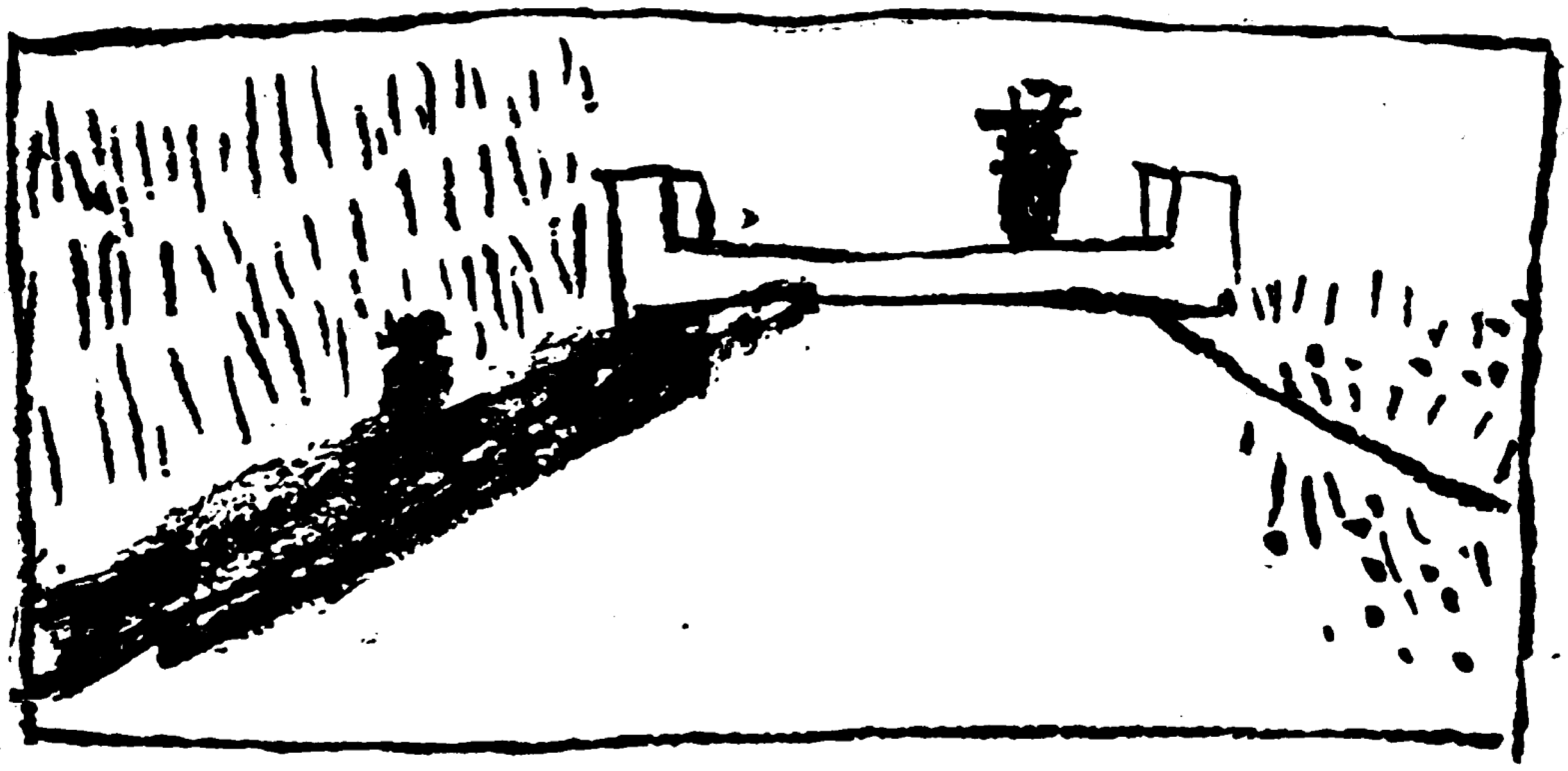
それから二人は默つてしまつた。

徹は今は蜂を見る興味もなくなつて、障子の硝子戸を通して、海に眼をやつた。沖には八月末らしい雲の峰が立つて、それに夕陽が赤く映えてゐた。

『電燈をひねりませうね』

部屋の中がほの暗くたそがれてゐたのに急に氣がついた徹は立上つて、スヰツチをひねつた。

部屋がぱつと明くなつても、父は机に片肘をもたせて、ぼんやり考に耽つてゐるやうな眼をして、暫く身動きもしないでゐた。（終）



この三つのもの

佐藤春夫

十三

その日、お八重は寧ろ快活な様子であつた。尠なくとも話ぶりだけはさうであつた。

北村と彼女との昨日の會見は、ほんの短いものであつたこと――それは北村が豫め赤木に言つたとほりで。さうしてお八重が一とほりは立入つて聞きたいと思つても、それがどうしても出來なかつたこと。また思ひ切つて何かを尋ねてみても北村は只、一切は赤木に話して置いたから赤木から聞けとばかりで答へようもしなかつたといふこと。それらの事どもをお八重は赤木に聞かせた。

お八重は別段に深い感動を持つてゐないらしく赤木には見えた。ただその顏の表情にはどこか鈍い懶げな調子があつた。さうして別れることに決めてしまつてから氣が落ちついたとお八重が言つた時、落着いたといふよりも、氣拔けがしたのだらうと思ひながらも、赤木は彼女が苦もなく運命に屈従してゐるらしいのを知つた。

お八重はまたかう言ふのであつた「ほんとうに、あなたが仰言るとほり、わたしにもこれから今までよりはいくらか氣樂な月日が來るやうな氣持もしないではありませんわ。――心細いには、そりや心細いのですけれどもねえ」

赤木は默つて頷いた。

「それでも」とお八重は言つた「わたし、これもやつぱり燒餅かも知りませんが、さう思つてみてもお雪と北村との事が知りたいのですよ――今までの事をです。これからさきの事は、まだ判らないと北村は言ひますけれど、わたしにはもうちやんと判つてゐます。きつとふたりで家を持ちますわ。わたし、それはそれでいいと思ひます。だつて北村はあんなにお雪を好いてゐるのだし、またお雪の身にとつてみても、あんなことになつてしまつた者を、北村でもどうにかしてやつてくれなければ、今更、身のふり方もないわけですもの。さうでせう」

「それはさうかも知りません」赤木はさう答へてから必然の聯想で橋のことを思ひ出した。さうして言つた「だから、僕はいつか、橋にお雪をやつたらどうですと言つたことがあつたでせう。覺えてゐますか」

「ええ、覺えてゐます。――たしか一昨年の夏でしたね」

「さうです。――實は、僕はあのころから、北村とお雪との關係ははつきり知つてゐたのです。さうして、それをあなたに知らせて、何とか方法をつけたらと何度思つたか知れないのです。でも僕はそれを北村の口から明されたのだし、あなたに言つてしまふにはどうしてもどうしても具合の惡い立場だつたのです。今時分言つても仕方がない事ですが、僕はそれをあなたに敎へてこそは上げなかつたけれど、少しはあなたの身になつて考へても見たのです。さうして、あなたがまるで一向氣がつかないでしかし何かと氣を揉んでゐるのを見るにつけて、たとへ北村が後で僕にどう文句を言はうとも、そあなたに僕から何もかも言つてしまはうと思つた事もあつたのです。あの時だつて、――橋にお雪をや

つたらどうですと言つた時だつて、あんな場所では無くもう少し永く話してゐたとしたら、ひよつとして僕はあなたに、何か一言ぐらゐは言つてしまつてゐたかも知れなかつたのです」

言ひながら赤木の頭には一つの事件と光景とを中心にして、そのころのさまざまな事どもが浮んだ――

＊　＊　＊　＊　＊　＊

市中の拔裏で寺の境内の墓地のわきの細い道をその生垣に沿ふて赤木はお八重と並んで歩いたのだ。それは、そのころの北村の家と赤木の家とを通ふに最も近い道であつた。お八重は、昨夜激怒したまま家を出てしまつた北村の行方を尋ねて赤木のところへ來たのであつた。赤木はその時、實は北村の前夜泊つた或る待合へ、金を持つて彼を迎へに行かうとしてゐる出がけだつた。赤木はただ簡單に、心當りがあるから搜してつれて來ようと言つたまま、お八重と一緒に自分の家を出た。さうして北村の家まで二三丁ほどの道を、お八重と連立つて歩いてゐた。彼と彼女とはあまり口を利かなかつたけれども、その前夜の有樣を目擊してゐる赤木に向つて、お八重は一途に、わたしが惡いのだからと北村のために言ひわけをしてゐた。

その前夜、北村はお雪とどこかへ出かける豫定であつたらしい。それをお八重も一緒に行きたいと言ひ出した。北村はお八重には曖昧な返事をして、結局お雪とふたり出かけるつもりでゐたところへ、ひよつくり赤木が訪ねて行つたのである。

「赤木さん。ちやうどいいところへいらしたのね。あなたも行きませよう。――今から皆で散歩に出かけるところなのよ」

お八重は赤木の姿を見るとさう呼びかけた。

北村とお雪とはその時、肘掛窓の敷居に並んで腰かけてゐた。お雪はいつでも外出できるやうに用意してあつた。お八重はそのふたりの前に立つてゐた。この三人の顔色のなかに、それぞれ不調和なものがあるのを直感した赤木は、お八重の言葉を言葉通りには聞けなかつた。北村が皆して散歩するなどといふことは考へられない事でもあつた。赤木はただお八重の顔と北村の顔とを見比べて異はしさうに笑つてゐる矢さきに、お雪は毒々しく例の眉をしかめて叫んだーー

「何を言つてゐるの、姉さんは。ひとりで勝手に決めてゐるよ。誰が赤木さんなんかと行くものですか。兄さん。何をぐづ〱してゐるの。さつさと用意なさいよ。一たいどうするつもりなの！」

北村はただニタ〱と笑つてゐるだけであつた。赤木はそこでお雪は見ぬふりをしてわざと北村とお八重とに言つたーー赤木には、その時もうその場の事情がすつかりわかつてゐたからである。

「奥さん。お雪ちやんがあゝいふのだから、僕はつれて行つてもらへなくても仕方がない。ひとりでどこへか出かけますよ。折角、珍しくさういふ家庭的散歩案が出來てゐるところへ、僕などが飛び込んだばつかりに實行出來ないといふ事になつたのでは、奥さんにすまない。さあ、北村。早速、着かへるのだね。さうして僕も、電車のところまで一緒に行かう」

北村には　赤木がほゞ事情を知つてお八重に力ぞへしてゐることは判つた。北村はやはりただニタ〱と笑ひつづけてゐる。しかし、お雪は叫んだ、

「誰が姉さんなどと一緒に行くと云つたの。姉さん、ひとり勝手にきめてゐるんだよ。兄さんの馬鹿。ひとをさんざん

ばら待たして置いて。クソ面白くもないね。――おまけに赤木淸吉なんて奴まで飛び込んで來たのだよ」お雪は一たん本當に怒つて見たが氣をとりなほして冗談にしてしまつた「姉さんや、赤本淸吉などと、一緒に行きたい者は行く可しです。どれ〳〵、こんなグズなどは待つてゐないで、お雪ちやんはひとりでどこへでも行きますよ。橋のところへでも行てやれや、有頂天だ」

お雪はそんなことを言ひながら立ち上ると、擧動も荒々しくひとりで外へ出てしまつた。すると、北村の笑顏がだん〳〵と苦いものに變つた。さうして北村は誰とも口を利きさうにもなかつた。赤木も氣まづい思ひで、ひとりでここを立ち去らうとすると、

「待ち給へ。僕も一緒に出る」

さう言ひながら北村は、浴衣がけのままで帽子も冠らずに赤木のあとから階段をおりて來た。彼等を見送つて玄關まで來てお八重は、ひとり取殘されるのを怖れるやうに、半は冗談らしく半は歎願するらしく、

「ね、わたしも從いて行きますよ」

「何を！」

北村は爆發したように叫んだと思つたら、土間から下駄のままで玄關へ飛込んでゐた。さうして手にしてゐたステッキをふり上げて、もうお八重をたたき伏せてゐた。赤木はそれを見てうろ〳〵した。靴を脫がうとするひまもないので、

「何をするのだ。やめ給へ。北村、やめ……」

言ひながら、やはり土足のままで一歩上り込まうとすると、北村はやつとおりて來た。北村は表口の格子戶を荒々しくあけると、すた〳〵と外へ出てしまつた。赤木はやはりうろ〳〵しながら、しかし、お八重はそのままに殘して北村

について行くより外はなかつた。――赤木はその時の北村の樣子をその後よく思ひ出すのだが、家を出た時の北村は生垣と岐路との多い暗い小路のなかを、きよろきよろと後を見まはしながら、非常な早步で逃げまはるのであつた。その樣子は赤木の目には彼が狂氣したかとさへ思はれた――

「どうした。北村。待ち給へ。何故そんなに急ぐんだ」

呼び止めても北村は止らなかつた。さうしてあちらの曲り角こちらの曲り角を、うねうねと逃げ隱れた。赤木は愕と急ぎとの爲に息を切らせながら、やつと北村の後を追つた。北村は或る曲り角の生垣のそばにぴつたり身をよせて、それでも赤本の行くのを待つてはゐた。

「何だつて、そんな急ぐんだ」

「あいつが、お八重が從いて來るかも知れないからだ」

北村は息を切らせてゐた。――怒にまかせてさういふ亂暴をして北村はともかくも、お八重が追つかけて來るかも知れないといふので、そんな小路をあちこちと逃げまはつた北村のその時の擧動は、確に非常識的なものであつた。その作品の反常識的なるにも拘はらず、北村の日常生活のうちには少しも非常識な點のあることを今まで發見しなかつた赤木には、それ故、その時の北村は珍らしい一面を發揮したものとしていつまでも目に殘つてゐた。

その夜の北村は、彼の激情の發露を人に見られた者の恥羞で沈默がちであつた。また、北村は甚だ感傷的でもあつた。赤木と北村とは本鄉の明るい通りからお茶の水橋へ出た。北村はその頃、麴町にゐた不如亭の家へ行かう。――さうして、今晩は彼の家で泊つて來ようと言ひ出した。當時、獨身でただ老婢を使つて暮してゐた不如亭の家は、夜更けまで話込んだり泊込んだりするには最も適當だつたからである。そんな事を言ひ出した北村を赤木はだますやうにして、ともかくも

お茶の水の橋を渡らずに、濠に沿うて水道橋へ歩いた。お茶の水橋を渡つて神田へ出れば、電車の便利もいいし、また麹町へ行かうと言ひ出すと思つたからである。赤木は水道橋から、彼等の家の方角である巣鴨行の電車へ北村を乘らせやうとした。北村はもつと歩かうと言つて電車へは乘らなかつた。その代りには赤木のいふとほりに春日町の方へ歩き出した。

「どうして君は、あんなに細君を手荒くするんだ――あれやどうも少し、サディズムの傾向があるぜ」

「フ、フ。」北村は氣の無い聲で笑つてから眞顔で言つた「たしなめて置かないと癖になつてうるさいのだ。――今まであんなことは一度も言ひはしないのだ。最初が大事だからね。それにあいつは、今日は君が味方をしてくれさうだと思つて、圖に乘つてゐるんだ。馬鹿だからね」

ふたりは又默つて歩いた

「どうだね、君、一そお雪を橋にやつてしまつたら」

「それや考へてゐないではないが、一番困つた事には、橋の奴は不良少年の癖に甘い奴で、まだお雪と僕との事には氣がつかないのだらう。まだ處女ですね、と君に言つたといふ程なのだからね。僕はそれを默つて隱して、お雪を彼のところへやるわけにはいかない。かと言つて橋のやうな子供に何もかも打明けてしまふのは困るよ。それを聞いてしまつてからお雪をいやにならないとも限らないし、またたとひ今は厭にならないまでも後になつて飽きた場合に、これが有力な理由や口實にならないものでもない。それに世間ではよくある奴で、一旦夫婦であつた奴が別れると兩方でさんざ世間へ向つて相手の惡態をつきたがる。そんな場合になつて今更、僕の名が出るのはつまらないからな。――そんなことが心配になるのもつまり、相手の人格を信用しないからなのだが、橋はさう信用できる性格ではないからね。さればと言つて僕としては、今も言ふとほり默つてお雪を彼に押しつけてしまふのも氣持が惡いし……」

「それぢや、その點さへ解決がつけば、お雪は橋にやらうといふ氣になるかい。僕にはどうも君がどうしてもお雪を離したがらないもののやうに思へるのだがね」

「……それや、結局さういふ事になるかも知れないのだがね。――今夜はもう、その話はよさう」

「序だから、もう一言聞くが、で、お雪は何かい、きつぱり君と別れて橋のところへ行かうといふ決心なのかね。そこも僕には一向わからないのだが」

「それが、お雪らしいのだ。たとひ橋のところへ行つても僕とは僕とでつづけるやうな口ぶりなのだ」

北村はそれだけを言ふとまた口を緘ぢて、さつきお八重を毆りつけた太いステッキで、道ばたの石ころを、かんかんと打ち鳴らして轉がしながら、人通りの少い砲兵工廠のわきを歩いた。赤木が勸めたけれども北村は春日町でも電車には乘らなかつた。さうして再び、どうしても今夜は家に歸る氣にはならないと言ひ出した。赤木の家へ泊らうとも言ひ出したが、日ごろ美代子が北村を好まず北村も美代子を好まなかつたので、これは直ぐに北村自身で撤回した。彼の家が近づくに從つて、北村は歩きつかれたせゐもあつたけれども、まるで駄々つ子のやうにもう歩かなくなつた。さうして赤木が以前一二度、人に誘はれるままにそこで遊んだ家があると話したことを、北村は覺えてゐて、たうとう白山の待合へ行かうとさへ言ふのであつた。元來、北村はその頃、それに對して一種の主張見たやうなものを立ててゐたほど、所謂花柳社會なるものに興味を持つてゐなかつた。不愉快がつてさへゐた。實際、今までに北村がそんな動議を出した事は一度もなかつた。北村が贅者な階級を好まないのだそれほどよく知つてゐた赤木はそれだけに、北村が待合へ泊らうと言ひ出した時には、これはよくよくの事に相違ないと思ふにつけても、その夜の北村の家に歸りたく無さ加減が解つた。しかし赤木は同意しなかつた。第一、赤木は金を持つてゐなかつたし、家を飛び出した北村は尙更一文も

持たなかつた。煙草をさへ赤木に買はせた程であつた。それを言つても、しかし、北村は金ぐらゐ明日の朝にでもどうかすればいいいと言つた。しまひに北村はまつたく赤木に懇願する態度であつた。

「君は、僕が今夜歸つた方がいいと思つてゐるかも知れないが、全くさうでは無いのだ。僕は僕として、お八重はお八重として、一そう氣まづいし不愉快なのだ。氣まづいぐらゐならいいが、お八重がぐづぐづ言ひ出せば、僕がまた何をしでかすかわからないのだ。それよりも一晩、どこかで明して明日にでも歸れば兩方で餘裕が出來るから、その方がお八重のためにもずつといいのだよ。ねえ君、一つお八重に對する君の博大な同情をもつてして、僕をそこへつれて行つてくれ給へ」

北村のその冗談めいた口調は、泣き笑ひに似てゐた。赤木は仕方がないと思つて裏道へ曲つた。

「しかし、僕はひとりで來た事は無いのだが、どの家だつたか知ら」

「行つてみれば解るさ。知らないところだつて上げるだらう、どうせ。どこでもいいわけだが金がないのだから、少しでも知つたところの方がいいよ」

「うん、――だが、この通では無かつたか知ら」

「知つてゐるくせに、今になつて解らないなどゝ言つてはいけないぜ、おい。あの家はどうも燒けてしまつたらしいなんて言ひさうだなあ」

北村はいくらか元氣が出て、いつものやうにそんな輕口を利いたりした。

その待合へ這入つた時には、もう十一時になつてゐた。彼等がうろ〳〵と歩きまはつてゐたうちに夏の夜はもうそんな時刻であつたらしい。北村は糖尿病のために禁酒をしてゐたし、赤木はもと〳〵飲まなかつた。でもともかくも一本

のビールを明けて、それから妓がふたり來た。見知らない何の興味をも持てない女どもであつた。

實は赤木は、呼んでみてもいゝ女があつた。さうして、北村にも一二度來た事のある家のやうにしか言つてはゐなかつたけれども、本當は四度ぐらゐは來たことがあつた。つひ一週間ほど前にも來てゐたのだ。けれども赤木はその女をその夜そこに呼ぶのはへんに氣が引けた——といふのは、その女の聲といふのがお八重にあまり似てゐたのだ。偶然その女を見たのであつたが、始めての機會にさう氣がついて、聞くとその女の故郷といふのがやはりお八重の生れた町であつた。たゞそれだけの事ではあつたが、北村の前へその女を置けば、北村もすぐにその聲に氣づくだらうと思つた。さうして既に、お八重に多少の愛情を持つてゐることを北村に打明けてゐた赤木は、お八重の幻影を追ふてゐるやうに見へる自分を、北村に見透されて憫まれたり哂はれたりするのを惧れたのだ。

十二時になつて各がもう別々の部屋へ籠らうといふ時に、豫め考へてゐた赤木は待合の女を呼んで北村だけを殘してそのまゝひとり家へ歸つた。北村は引留めたけれども、明朝金を持つて來る都合があると言つて赤木は泊らなかつた。また何の興味もない女のためには、寢間着を着かへさへもしなかつた。

北村との別れ際に赤木は冗談を言つた「これから一つ、君の留守のところへ乗り込んで、事の一部始終を明した上で、大にお八重に同情を表するのなどもこの場合一策だね。それにはこれほどの好機はないのだがな」

「ああ、それはいかんです」北村はむき出した目をしばたたきながら、山上白雲の口眞似と身振りとをした。

赤木は夜の更けて行く町を二三町まはり道をして、北村の家の前を通つて行つた。そこに立寄らうなどといふ考へは少しもなかつたが、ただお八重が何をしてゐるか、せめて家の表からでも見えるかも知れないと思はないではなかつた。北村の家はひつそりしてゐて、しかし、二階の窓には灯がともつて明放されてあつた。人影も人聲もなかつた。

その翌朝、お八重に赤木のところへ北村を搜しに來たのであつた。さうして、折から家を出ようとしてゐた赤木に、お八重とつれ立つて、墓地に沿つた拔裏道を默つて竝んで步いた。お八重はいつの間にか、しく〳〵泣いてゐた。粗末なパラソルで顏を隱しながら淚をハンケチで拭いてゐた。それを見ぬふりをしながら赤木は言つたのだ「奧さん。橋がお雪ちやんをお嫁に欲しいと言つてゐるんですが、やつたらどうです」

「え。そんな話は本當ですか知ら。でもあんなものは駄目ですわ。ちやんとしたお家へなど行つても直ぐ歸されて來るにきまつてゐます」

お八重はそんな事はまるで取合ないやうに言ひ捨てた。赤木は更に言ひたかつた——奧さん、あなたはお雪ちやんと北村との事を氣がついてゐるんですか。赤木は心のなかでさう言つたけれども、口には出さなかつた。赤木はまた同じやうに腹の中で言つた——奧さん、わたしはあなたを愛してゐるやうな氣がしてゐるんです。その後の言葉は到底言へさうにはなかつたが、前の言葉はどうやらもう少しで口に出たがつてゐるやうであつた。その時、しかし、ふたりはもう北村の家の前まで來てゐた。お八重は北村を搜して來てくれるやうに改めてもう一度賴み、赤木は心當はあるからつれて來ようと答へて、そこで別れた………

* * * * * *

その頃の事を、赤木は今、お八重を前にして思ひ耽りながら、思ひ浮んだままに言つた——

「あの頃、あなたはたしか伊香保へ行つてゐましたね」

「え」

「それから、あとで塩原へも行きましたつけね」

「え」

お八重は顔を上げて。それがどうしたのだと言ひたげであつた。その顔に對して赤木は別に返答はしなかつたけれども、それらの間、欺かれてゐたお八重を氣の毒に思はざるを得なかつた。――いや、お八重はそれよりももつともつと永い間欺かれてゐたのである。赤木はつぶさに思ひ浮べると、北村に對して憤に似たものを感じた。

お八重は、お雪と北村との間柄を知り度いと思つてゐると言つた。それを北村に尋ねたのに、北村は赤木に聞くがいいと答へただけであつた。さうして、お八重は今赤木にそれを尋ねてゐるのに、赤木は北村に聞くがいいと答へようとしてゐる。さうしてお八重はとうとう自分の身の上にふりかかつてゐた事を知りたがりながら知らずに濟まさうとしてゐる。全く知らないならばそれもいいであらう。しかしもう結末だけは知つてしまつて、その途中は一切知らないのだ。それを當人が知りたがらなければ別として、知りたいと希望してゐる以上は、やはりそれをすつかり知らせるのがいい當然である。もし北村自身の口から明しにくいといふのならば、北村に代つて赤木が話してやるのが當り前であるらしい。さうして北村がそれを赤木から聞けと言つてゐる以上、赤木がそれを語つても決して不都合ではないであらう。お八重がそれを知りないとならば彼女もひとりの女たる以上それを聞かなければならぬらしい。

「奥さん。北村とお雪との事を、あなたは知りたいと言ひましたね」

「え」

「知つて一たいどうするのです」

「別にどうと言ふこともありませんけれど――何だか、やつぱり知りたいわ」

「それを知つて一そういやな氣持がすまいものでもありませんよ。何も知らなかつた方がいいとあとで思うかも知りませんよ」

「さうね、それはさうかも知りませんね。でも、どういふわけでせう。やつぱり知らずにはゐられませんわ」

「さうですか。人間にはさういふ氣持はあるものです。納得づくや理窟ではなしに、やつぱり知りたい事はただ知りたといふ事がね。――恐いもの見たさともいふ通りで。それにしてもあなた、自分では一たいいつから嫌はれてゐると思つてゐます――ハ、ハ、ハ。失敬なことを聞くけれど」

「それは自分でも時々考へてみましたわよ」お八重はさう言つて急に眞面目な、といふよりも特別な表情になつた。それは見方によつては羞ぢてゐるやうでもあり、また非常に悲しんでゐるやうでもあり、或は多少憤つてゐるやうでもあつた。さうして何か酸つぱいものを食べた時のやうな口元をしてゐた。「初め半年ほどの間は、わたし何だかわからないのです。でも、さう樂しかつたといふのではなかつたと思ひます。それからだんだんと、もしや自分は氣に入られてゐないのではないかと氣がつくことがありました。別にどういふ事でといふ程ではありませんけれどね。ユリ子が生れた時にはわたし悲しいと思ひましたわ。わたしは叱られたのです。そんな者など欲しくは無かつたのだなどと言ふのですから。これがもし外の人なら、女の子ではあるけれども、初めての子供ではあり少しは喜んでもくれるだらうにと思ふと、わたしはさびしいと思ひました。さうして、これといふのもわたしが氣に入らないからだらうかと、ひとりで考へたりしたものです。そのうちにお母さんが病氣になつたのでせう。それをお見舞ひに行つてもいけないと言はれるし。その時ですよ。わたし始めて北村に、自分の考へてゐることを言つたのです――わたしが嫌はれてゐるのでは無いでせうかつて……」

「あ、その事は僕も知つてゐる。――お母さんが亡くなる前に、北村がどこかへ旅に出る前夜でせう」
「え。どうして御存知？北村が言ひましたか」
「いいや。北村の書いたものにあるさ――『悲しき春の記』に――御身はこのごろ妾を疎み給ふに非ずやとさめざめと涙ながらに語るさま、愚なりと言へども亦憐れなり。わが頬と、妻が頬と二つの頬には涙一つとなりて流れぬ――とか何とか書いてありますね」
「うそ。うそ」お八重は言葉は輕く、しかししつかりと頭をふつて否定した「そんな事を書いてはありましたけれど、本當は煩さがつてまるで取合つてはくれなかつたのです。あんな事はみんな嘘です」
「しかし」と赤木は註釋した「男といふものは素直には心持を出さないから、悲しい時に反つて煩がるやうな樣子をすることもあるものです」
　お八重はそれには答へなかつた。ただ言ひつづけた「わたしはもう自分が嫌はれてゐることにはいくらか氣がついたのです。でももうそのうちには少しづつ慣れて來てしまつて、自分のやうな馬鹿な者だからどうせ嫌はれても仕方がないとも思ふし、また物を書いたりするやうな人は氣むづかしいものだから、とみんな言ふのでわたしも、成程、さういふ事をする人はみんなそんなものかも知れない。何も北村だけがさうといふわけでもないのだらう。さうすればわたしは、なまなか馬鹿の癖にえらい人のところへ來たりしたのが不仕合せなのだ、とさうあきらめてしまつてゐたのです。それが後になつて、あなたなどが奥さんに對する御樣子などを見ると、まるで北村などのやうではないし、何だかお羨ましいやうで、これはかういふ人ならば皆が皆、北村のやうなといふわけではなく、やつぱり北村ひとりだけ特別なのだらうか――尤も、美代子さんはわたしなどのやうな無教育な馬鹿ではないからでせうけれど……」

「僕が、僕がですか？」赤木はお八重の言葉を遮つた「僕が女房に親切ですつて。あなた、いつそんなところを見たのです」

「親切といふわけではないのかも知れませんけれど、二三度ちよつと伺つた時の御様子だつて、それにお雪などからお噂を聞いても、とにかくあなたは美代子さんの相手にお話もなさるし笑つたりもしてゐらつしやるではありませんか」

「何を言ふのです。毎日顔を合せてゐてそんな事ぐらゐ――話をする用事はあるし、たまには笑ふことぐらゐ出來るでせうさ。僕が女房に親切だつて――ハツ、ハツハツ」

赤木が不意にあまり大きな笑を發したので、お八重はへんに思つたらしく彼女の話をもやめてしまつた「どうしてそんなにお笑ひになるの。わたし何かおかしい事を云ひましたの」

「いいや、なに」赤木はヒステリカルな自分の笑ひをやつとやめて言つた「何でも無いのです。あなたのせいではありません。――いづれはお話をしますがね」

さう言つた赤木の聲は、その笑聲とは全く似合はぬ調子のものであつた。それを不思議がるやうにお八重は赤木を見た。その時、彼と彼女との眼が一瞬間ぶつつかつた。

「さあさ。あなたのお話をなさい」

「いやですわ。笑ふのですもの」

「御免なさい。あなたのせゐではないのだから」

しかし、もう氣勢を挫かれでもしたのか、お八重も話し出さうとはしなかつた。赤木も默つてお八重の横顔を見てゐた。さうしてふとこの機會に自分の身の上をお八重に話さうかと赤木は思ひ浮んだ。しかし彼は直ぐに考へ直して――いづれは、もつと適切で、時機を得た折はいくらでもあるだらう。

「奥さん。御免なさい。笑つたのは全くあなたの事ではないのです。あなたの話は、よくわかつたのですよ。それにあなたの考へてゐることは大たいそのとほりらしいと僕も思ふのです――お雪との關係は、昨日や今日の事ではないと北村は言ひました。何でも四年ぐらゐ前からの事ださうです」

「まあ。さうですか」お八重は單純に好奇心で動いてゐる愕きの瞳を見張つた「まあ。わたしは一たい何といふ馬鹿でせうねえ！ほんとうに。わたしはお雪のことを昨日までもむすめだとばかり思ひ込んでゐましたよ！」

「北村は言ひわけをしてゐましたが。あなたには勝子といふ姉さんがありますつて。それがお雪ちやんにそつくりのやうな人ですか。北村は何でも最初、その姉さんが氣に入つたらしいのです。その人はあなたとはまるで反對で、お雪ちやんのやうな人ですつてね」

「え!? 」お八重は赤木の言葉の意味を暫く解き兼ねてゐた。

言つてしまつて赤木はまた赤木で、あまりに心無い人のやうに何もかも一時に疊みかけて言ひすぎたと氣がついた。しかし赤木としては聞かせにくい事を一瀉千里に突き拔ける氣持であつた。

「あ、さうですか。」やつとしてお八重は言つた「わたしのやうな馬鹿にでも、どうやら少しづゝ何かとわかつて來るやうな氣がしますよ」

お八重は、しかし、その事のために今更心を取亂したやうな態度は一向なかつた。それを赤木が惧れたことは幸にも無駄であつた。さうしてそのやうな愕きに對した時の人の心が案外強靱なものだといふことを赤木は二度見たのである。一度はいつか愼吉から一切を告げられた時の彼自身の心。さうして今二度目にお八重のこの樣子。

稍久しい深い沈默の後で、お八重は靜かに述懐を始めた。それは前に掲げた「北村の告白」と同じ事實を別の立場から見てゐるものであつた――

（以下次號）



青塚氏の話

谷崎潤一郎

前篇のつゞき

此處に至つて、私の好奇心が絶頂に達したことは云ふ迄もあるまい。此の男の言動はますます出でてますます意外だ、不思議な奴もあればあるもんだ。――が、その云ふところは私の圖星を刺す點もあり、ちやんと辻褄が合つてゐるのだから、此奴がまさか氣違ひではなからう。多少氣違ひであるとしても、私は彼の異性に對する觀察の細かさ、感覺の鋭さには敬服してゐる。私は當然、彼の細君、――彼の「由良子」と稱する婦人に會つてみたくて溜らなくなつた。それに此の男は未だに身分を明かさないので、かうなつて來るといよいよそれが知りたくもあつた。

「どうだね、君、僕の女房を見たくはないかね。――」

と、彼は横眼で人の顔色を窺ひながら、イヤに勿體を附けるやうな口調で云ふのだつた。

「――見る氣があるなら見せて上げるが、………」

「氣がないどころぢやありません、是非ともお目に懸りたいもんです。」
「それでは僕の家へ來るかね。」
「ええ、伺ひます。——いつ伺つたらいいんですか。」
「いつでもよろしい。今夜でもいいんだ。」
「今夜?——」
「ああ、此れから一緒に來たらどうかね。」
「だつて、——もう遲いぢやありませんか。お宅は一體どちらなんです?」
「直きそこなんだ。」
「直きそこと云ふと?——」
「自働車で行けばほんの五分か十分のところさ。」
氣がついて見ると、私たちはもう出町橋の近所まで來てゐた。そして時刻は彼れ此れ十時半なのである。此の男は何でもない事のやうに「今夜行かう」と云ふけれども、始めて近づきになつた私をこんな夜更けに自分の家へ連れて行つて、細君に引き合はす積りなのだらうか?それ程御自慢の細君なのだらうか?」
「變だなあ、擔がれるんぢやないのかなあ。——」
「あははは、そんな人の惡い男に見えるかね、僕は?」
「けれども、あなた、此れから伺ふと十一時になりますぜ。あなたはいゝと仰つしやつたつて、奥さんに惡いぢやありませんか。」

「ところが僕の女房は、そりやお頗る柔順なもんでね、僕が何時に歸つたつて怒つたことなんかないんだよ。いつもニコニコして機嫌よく僕を迎へるんだ。その夫婦仲のいいことと云つたら、——そいつを今夜是非とも君に見せてやりたい。」

「冗談ぢやない、アテられちやふなあ！」

「うん、まあアテられる覺悟で來ることが肝要だね。」

「肝要ですか。」

「アテられるのが恐ろしいかね。」

「恐ろしいかツて、——そいつは少し、——タヂタヂと來ますな。」

「あははははは、君は年中自分の女房を見せびらかしてゐるんだから、今夜はどうしても僕の女房を見る義務がある。此處で逃げるのは卑怯だぜ。來給へ、來給へ。」

もうさう云つてゐる時分には、彼は私の腕を捉へて、橋の西詰にある自働車屋の方へぐいぐい引つ張つて行くのだつた。

「いや、かうなつたら逃げやしません、度胸をきめます。——」

彼は私を自働車屋の前へ待たして置いて、自分だけツカツカと奥へ這入つて、小聲で行く先を命じてゐた。その時私は、カフヱエを出てから此の男の姿を始めて明るみで見たのであるが、さつきの酒が今頃になつてそろそろ利いて來たのであらう、いつの間にやら彼の人相は別人のやうに變つてゐた。その眼は放埒に不遠慮に輝やき、口元には締まりがなくなり、鼻の孔はだらしなくひろがつてゐる。眼深に被つてゐた黄濁パナマの古ぼけた帽子が、後ろの方へずるツこ

けて、だだッ兒のやうに阿彌陀になつて、縮れた髮の毛が額へもぢやもぢやと落ちかかつてゐる鹽梅は、どうしても不良老年の形だ。老年と云へば、私はさつき此の男の年を四十恰好と踏んだのだけれど、帽子が阿彌陀になつて見ると額には思ひの外小皺があつて眼の皮がたるみ、髮にはつやがなく、鬢のあたりに白い物さへ交つてゐて、ひゐき目に見ても四十七八、五十に近い爺なのだ。彼の醉ひ方が私の想像してゐた以上であつたことは、そのだらりとした態度や、足取りで明かだつた。が、それでも彼は飲み足りないのか、

「おい、君イ、まだかあ!」

と、どら聲を出して運轉手を催促しながら、ポケットから餘り見馴れない珍しい容れ物、――薄い、平べつたい、銀のシガレットケースのやうな器を出して、頻りに喇叭呑みをやるのだ。

「何ですか、それは?」

「此れか、此れは亞米利加人が酒を入れてコツソリ持つて歩く道具さ。活動寫眞によくあるだらう。」

「ああ、あれ。そんなものが日本にも來てゐるんですか。」

「彼方へ行つた時に買つて來たんだよ。此奴あ實に便利なんでね、かうしてチビリチビリやるには。……」

「盛んですなあ、いつもそいつを持つてお歩きになるんですか。」

「まあ夜だけだね。――僕の女房はをかしな奴で、夜が更けてからぐでんぐでんに醉つ拂つて歸ると、ひどく喜んでくれるんだよ」

「すると奥さんも召し上るんですか」

「自分は飲まないが、僕の醉ふのを喜ぶんだね。……つまり、その、何だ、……僕をへべレケにさして置いて、有りつ

たけの馬鹿を盡していちやつからつて云ふ譯なんだ。」

私は彼がさう云つた瞬間、何か知らないがぞうつと身ぶるひに襲はれた氣がした。此のイヤらしいノロケを云ひながら、彼はゲラゲラと笑ひ續けて、私の眼の中を嘲けるが如く覗つめてゐる。私の顏は眞つ青になつたに違ひなかつた。―何と云ふ不氣味な狒々爺だらう。やつぱりキ印なのか知らん?……それに全體、女房々々と云ふけれど、こんな爺に若い美しい女房なぞがあるのだらうか、變な所に妾でも圍つてあるのぢやないのか。…………

それから間もなく、二人を乘せた自働車は恐ろしく暗い惡い路をガタピシ走らせてゐるのであつた。私はあの時分、京都へ來てからまだ幾月にもならなかつたので、あの晩何處を通つたのだか、今考へてもはつきり呑み込めないのだが、兎に角出町橋を渡つてから直きに加茂川が見えなくなつて、やつと車が這入れるくらゐなせせツこましい家並の間を、無理に押し分けるやうにして右へ曲つたかと思ふと、今度は又左へ曲る。雨は止んだが、空はどつぷり曇つてゐるので山は一つも見えないし、もうどの家も戸が締まつてゐて、町の樣子は分らないながら、ところどころにざあざあと溪川のやうな水音のする溝川がある。その男は窓から首を出して、「其處を彼方へ」とか「此方へ」とか、時々運轉手に指圖してゐる。そのうちにだんだん家が疎らになつて、田圃があつたり立木があつたり、ぼうぼうと繁つた叢があつたり、たしかに郊外の田舍路へ來てしまつたらしい。

「驚いたなあ、何處まで連れて行かれるんです。大分遠方ぢやありませんか。」

「まあいいぢやないか、乘つた以上は默つて僕に任せ給へ、君の體は今夜僕が預かつたんだよ。ねえ、さうだろ?さうぢやないか。」

「だけど一體、……いいんですかこんな所へ來てしまつて?」

「いいんだつていいんだよ、いくら醉つたつて自分の家を間違へる奴があるもんか。………どうだね、一杯?」

　車が揺れる度毎にどしんどしんと私の方へ打つかつて來ながら、その男はよろよろした手つきで喇叭呑みをやつては、それを私にもすすめるのだが、次第にしつツこく首ツたまへ嚙り着いて、まるで女にでもふざけるやうに寄りかかつて來る、その口の臭さと、ニチャニチャした脂ツ手の氣持ちの惡るさと云つたらない。餘程酒の上の良くないたちで、醉つたら人を困らせるのが常習になつてゐるのだらう、何しろ私は飛んだ奴に摑まつてしまつた。

「もし、もし、濟みませんが旺の、……手だけ放してくれませんか、此れぢやあ重くつて遣り切れねえや。」

「あははははは、參つたか君。」

「參つた、參つた。」

「君と一つキッスをしようか。」

「ジョ、ジョ、冗談ぢやあ、………」

「あははははは、由良子孃とは一日に何度キッスするんだい? え、おい、云つたつていいだろ? 二度か、四度か十ッたびぐらいか、………」

「あなたは何度なさるんです?」

「僕は何度だか數が知れんね。顏から、手から、指の股から、足の裏から、あらゆる部分を………」

　途端に彼はだらりと私の頬ッぺたへよだれを滴らした。

「うッ、ぷッ、………もう少し顏を………向うへやつてくれませんか。」

「構はん、構はん、由良子孃のよだれだつたらどうするんだい? 喜んでしやぶるんぢやないのかい?」

「そりやアあなたぢやないんですか。」

「ああ、しやぶるよ、僕はしやぶるよ。………」

「馬鹿だなあ。」

「ああ馬鹿だとも。どうせ女房にかかつちやあ馬鹿さ。惚れたが因果と云ふ奴だあね。」

「だけどよだれを舐めなくつたつて、………奥さんは幾つにおなりなんです？」

「若いんだぜ君、幾つだと思ふ？」

「そいつがどうも分りませんや、あなたの歳から考へると、………」

「僕はぢぢいだが、女房はずつと若いんだよ。悍馬のやうに潑剌たるもんだよ。まあ幾つぐらゐだと思ふね。」

「僕の女房と孰方なんです？　由良子はちやうどなんですが、………」

「ぢやあ同い歳だ。」

「そんなに若い奥さんを？　失禮ですが第二夫人と云ふやうな譯ぢやあ、………」

「第一夫人で、本妻で、僕の唯一の愛玩物で、寧ろ神樣以上のもんだね。」

ゲラゲラと笑つて、又よだれを滴らしながら、――

「どうだい、恐れ入つたらう。僕は女房に會ふためにこんな淋しい田圃路を、いつも今時分に一人で歸つて行くんだよ、自働車へも乘らずテクテク歩いて。………すると女房は僕の足音を聞きながら、奥の寢室の帳の中でうつらうつらと、ものうげな身をしよざいなささうに、猫のやうに丸めて待つてゐるのだ、體ぢゆうに香料を塗つて、綺麗になつて。………

「……僕はそうツと寢室へ這入つて、やさしく帳を分けながら、『由良子や、今歸つたよ、嘸淋しかつたらうねえ。』――」

「ええ？」

「あははは、ビックリしたかい？」

「だつて、名前まで『由良子』なんですか。」

「ああ、さう『由良子』としてあるんだよ。さうしないと人情が移らんからね。」

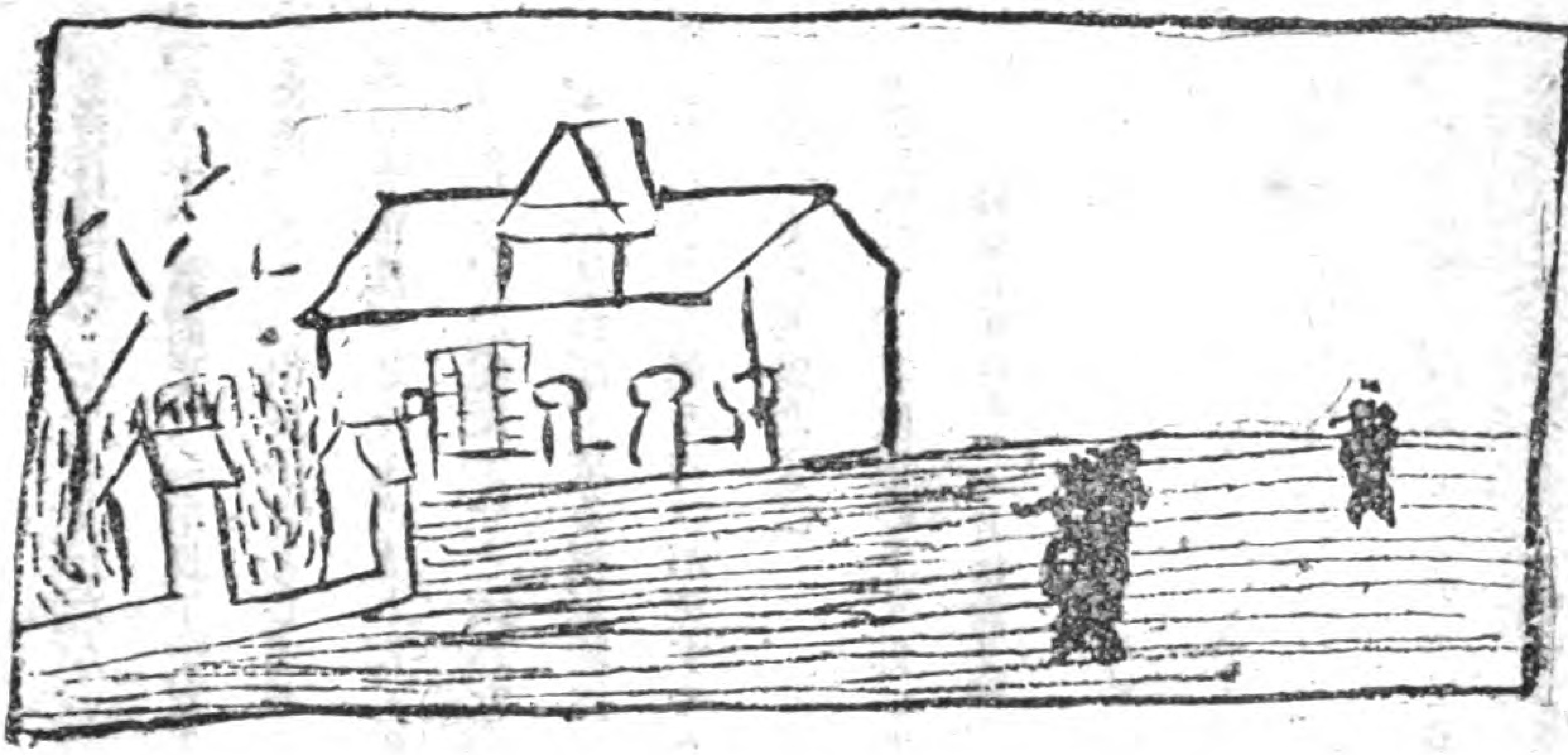
やがて車は、こんもりとした丘の下で停つた。

「此處だよ、此處だよ」と云ひながら、彼は先へ立つて急な石段を登り始める。懐中電燈を取り出して照らしながら行くところを見れば、成る程毎晩遅く歸つて來るのであらう。段の兩側には山吹が一杯、さやさやと裾にからまるくらゐ伸びてゐる。青葉の匂ひが蒸すやうに強く鼻を衝いて、懐中電燈の光の先に折々さつと鮮かな新綠が照らし出される。

「そら、もう其處だよ。」

と云はれて、私は坂の上を仰いだ。見ると、軒燈が一つぽうツと燈つた白壁の西洋館があつた。（つゞく）

締切に追はれて今月は餘り書けなかつた。もつと涼しくなつてから澤山書からと思ひます。——作者記



ある畫室の主（ぬし）

（愛慾後日譚）

武者小路實篤

人物

野中英次
東
小野寺
下島
山田

一

（英次の大きな畫室。英次花をかいてゐる。東、窓から庭を見てかいてゐる）

東。先生。

英治。なんだ。

東。先生。僕にはどうしても松葉の色が出ないのですがね。

英次。それは自分で工風するがいゝ。君の目にどう見へるかね。日かげの松葉と、日のあたる松葉、若い木の松葉の色と、古木の松葉の色、そのお互の關係の面白さ。それを他人に教はつたつてだめだよ。自分で滿足するまで追求しなければ。

東。庭の松を見てゐると實に美しく思ふのです。かくと少しも美しくないのです。

英次。それはまだ苦心がたりないのだよ。僕だつてまだだめだ。毎日少しづゝ會得してゆくだけだよ。

東。先生は私達と同じ繪具をつかつてゐらつしやるのに實に自由自在の色を出されるのにおどろきます。

英次。齢の劾だよ。僕なんか君の齢位には君の半分も自由にかけなかつた。この頃の若い人の進歩の早いのにおどろく。

東。この色はどうしたら出るのでせう。どうもさへてこないのです。

英次。色と色との關係がよくないのだよ。かうすれば少しはいゝ色になる。

東。本當ですね。

英次。色と云ふものはお互に助けあつて美しくなるものだよ。人間と同じことだよ。どつちの色を殺しても駄目だよ。どの色もいきなければ。

東。しかしそれが中々、さううまくはゆきませんわ。

英次。あたりまいだよ。なんだつて修業がゐるよ。のらくらしてうまくならうと思つたつて駄目さ。

東。本當ですね。僕は先生の勉强家なのにはおどろきます。

英次。僕には他のたのしみはないからね。

東。本當に先生は羨やましいと田島ともよく話します。
英次。羨やましい人間なんてあるものぢやない。
東。だつて誰だつて先生の畫をほめない人はありません。
英次。僕はどんなに惡口を云はれてもセムシでなかつたことをのぞむね。かう云つたら君は一言もあるまい。だがセムシでなかつたら僕はこんな畫はかけなかつたらう。ロートレークのやうにね。
東。先生は少しもひねくれてはいらつしやらない。
英次。あたりまいさ。自然の美しさは僕にひねくれることを許さないのだ。だが僕はやゝもするとひねくれるのを恐れてゐる。
東。先生は隨分禪をおやりになつたのですつてね。
英次。なに、なまかぢりだよ。だが白隱なんかの傳はよむといゝ。少くも勉强家になる勇猛心を起してくれる。
東。それでは私もよんで見ませう。
英次。よんで見たまい。僕の處に本があるはづだ。
東。白隱は勉强家だつたのですか。
英次。日本人には珍らしい勉强家だね。その修業に熱心なことゝ、こまかいことにはおどろくべき所があるよ。僕も時々よんで見て勇氣を得る。少しでも敎はりたいことがあれば千里を遠しとしない。又得たものを實際に生かすことが出來ない間は少しも滿足しない。すつかり自分を自分の理想的人物にきづき上げなければおさまらない所がある。
東。さうですかね。

英次。俺たちも之からだよ。
東。さうですね。僕も一生懸命になつてやりますよ。
英次。自分を信じて進んでゆかなければいけない。敎はるものは遠慮なく敎はるがいゝが、自分の心と頭と目だけは自分のものにしておかなければいけない。
東。さうですね。若いとつい、他の人の議論に動かされます。
英次。足さへ地面からはなれなければ、たまにうかれるのもいゝがね。
東。先生は會心の作が出來た時はうれしくありませんか。
英次。うれしくないこともない。だがすぐさびしくなるよ。俺の力は之だけなのかと思ふとね。そのかはり少しづゝは進步してくれるが。
東。さうですかね。先生のやうに畫がかけてもまだ淋しいのですかね。
英次。あたりまいさ。道は遠いよ。上には上がある。いつだつてもう一步と思はない時はないね。それだからこそ、つぎつぎと仕事がしたくなるのだ。今度こそは、今度こそはと思つてね。だが實力だけの仕事切り出來ない。しかし少しは進步してくれるがね。しかし面白味は其處にある。十年前には、こんな畫だつてかけるとは自分では思つてゐなかつたからね。
東。先生は隨分死にもの狂ひの時がおありになつたのですつてね。
英次。誰がさう云つてゐた。
東。何かの評にかいてありました。

英次。批評なんてあてになるものぢやない。だが俺のやうな人間は畫をかくより取り柄のない人間だからね。之で身體さへよかつたら他の仕事をしたかも知れないが。
東。先生が畫に熱中されたことは私達のよろこびです。
英次。今時のやうなさわがしい時代に畫をかくのには餘程しつかりした覺悟が必要だ。俺のやうにやぶれかぶれの人間は別だがね。しかし今時でもおちついてよろこんで立派な畫をかく人間がゐたら、俺は尊敬するがね。
東。畫をかいてゐる時だけ僕は時間を忘れます。
英次。君は畫かきだよ。君は今に僕達にまけない畫かきになるだらうよ。
東。もしさうなれたら、全部先生のおかげです。僕は先生にお逢ひしなかつたら今時分漁師になつてゐたでせう。そして力のない漁師として輕蔑されて一生をおはつたでせう。先生が、私の濱でのいたづらがきをしてゐるのを認めて下さつた時、私は本當に泣きました。
英次。僕もうれしかつたよ。始めあの畫を見た時、本當の畫かきがかいたのだと思つた。そしたら、かいたのが君だと云ふことがわかつた時、僕はおどろいた。そして君がよろこんで畫かきになると云つた時、僕はうれしかつた。本當の掘り出しものをしたと思つたよ。
東。先生の御期待には背かないつもりです。進歩のおそいのがはがゆい氣がします。

（呼び鈴がなる）

英次。誰か來たやうだね。
東。えゝ。(退場)—

（東まもなく登場）

東。下島さんがお見へになりました。

英次。お通しゝたらいゝだらう。

東。はい。（退場）

（東、下島直子、登場）

下島。先生、お仕事の御邪魔ではありませんか。

英次。いや大丈夫。仕事は今のり氣ちやなかつたので、東といろ〳〵話してゐた所です。畫が出來たのですか。

下島。はい。あんまり下手なので、先生にお目にかけるのは氣まりがわるいのですけど。

英次。そんな遠慮はいりませんよ。

下島。それでは見て戴きませう。

（畫を出して見せる。英次見る）

英次。どうもまだものになつてゐるとは云へませんね。

下島。きつと先生はさうおつしやると思つてゐたのですよ。

英次。リンゴはこんなに平べつたくはないはづです。

下島。そしてリンゴはこんなくさつた色はしてゐないとおつしやるのでせう。

英次。まあさうです

下島。どうしたらかけるのか、私にはどうしてもうまくゆかないのです。

英次。さうたやすくはゆきませんよ。

下島。先生の靜物の畫を拜借出來ませんか知らん。

英次。それはいくらでも貸しますがね。あんまり參考にもなりませんよ。やつぱり本物のリンゴを見てかいたらいゝでせう。しかしとにかく畫をお貸しするだけしてもよろしい。しかしあなたは一生畫かきでやつてゆくつもりぢやないのでせう。

下島。私よかつたら一生やりたい思つてゐるのです。だめでせうか。

英次。結婚すればそれまでゞすよ。

下島。私、結婚なんかしないつもりです。

英次。なぜです。

下島。だつて私は一生畫がかきたいのですから。

英次。僕はあなたになるべく結婚することをすゝめますよ。

下島。それだつて、私、結婚したいとは思ひません。

英次。無理に結婚しなければいけないわけでもありませんが、したい人が出來たらする方がよろしい。

下島。それはその時ですわ。

英次。畫でやつてゆくのは大變ですからね。

下島。それは私だつて知つてゐますわ。

英次。東、今何時だね。

東。いま三時です。

英次。さうか。それぢや僕は一寸失禮して小野寺の處へ出かけてくる。約束になつてゐるから。

下島。それでは私、失禮いたします。どうか先生、私を見すてないで下さい。私は先生許りをおたよりにしてゐるのですから。

英次。僕より他にいゝ人があると思ひますがね。

下島。先生は私に愛想をつかしていらつしやるのですね。

英次。さう云ふわけではないのです。しかし僕よりももつと親切に手びきしてくれる人があると思ふのです。僕は正直に云つて、女の方の相手は不適當なのです。

下島。先生のアトリエは女人禁制と云ふ噂がありますが、本當なのですか。

英次。さう云ふわけではないのです。だが僕は女の人が畫かきになるのに反對ではないのですが、女の人は女らしい畫をかく方がいゝと思ふのです。それには僕は不適當な人間ですからね。

下島。それでも私は先生の畫が一番好きなのですから仕方がありません。

(呼鈴がなる。東退場)

英次。しかし僕のやうな畫を女の人がかいたら滑稽ぢやありませんか。

下島。それでも私の畫を見て下さつたつていゝでせう。

英次。正直に云つて、僕が見たつて何にもならないと思ふのです。

(東登場)

東。（少し笑ひながら）先生小野寺さんがいらつしやいました。

英次。へんな奴だな、俺がゆくことになつてゐるのに。

（東、下島、一寸笑ふ、小野寺登場）

英次。よく來た。今僕の方から出かけやうかと思つてゐたのだ。

小野寺。さうか。

英次。之は下島さんと云ふ畫をかく方だ。之は小野寺君です。

小野寺。始めて。

下島。始めまして。

小野寺。新しい畫が出來たね

英次。あゝ。少しづゝはものになつて來たらう。

小野寺。本當に美しいね。

英次。まあ、僕もやつと物になりかけて來た。之も君のおかげだ。まだだめだがね。東、紅茶でも入れて來ないか。

下島。先生、それでは失禮します。

英次。まあ、紅茶でものんでいらつしやい

下島。ありがたうございます。

英次。下島さん、一つあなたの畫でも小野寺君に見せたらどうです。

下島。いゝえ。もうお目にかけられるものでは。

小野寺。いゝでせう。見せて下さい。

下島。もう先生に散々惡口を云はれたので。

英次。小野寺はほめないとも限りませんよ

下島。それではお笑ひ草に見ていたゞきますか。

小野寺。是非拜見さして下さい。

（下島、畫を見せる）

英次。隨分下手な畫だが、女としてはました方だらう。

小野寺。さうだね。

英次。色だつて惡くない。

下島。先生、どうか冷やかさないで下さい。

英次。まあ、素人としてはましだらう。

小野寺。中々感じが出てゐて、奇麗だ。

英次。リンゴの平べつたい處なんか、面白いね。

下島。いやな先生。

英次。まあさうとでも云つて、ほめておくより仕方がありませんからね。しかし正直な處、前よりはうまくなりましたよ。

下島。本當ですか。よろこぶと、あとで、おひやかしになるのではないのですか。

英次。ともかくまだ畫にはなつてゐませんがね。玩具位いにはなつてゐますよ。
下島。先生は隨分ひどいことをおつしやるのね。その內に先生に感心して戴くやうな畫をかきますわ。
英次。そんなことはよして下さい。太陽が西からのぼると困りますからね。
（皆笑ふ）
下島。よろしいわ。（畫をしまう）
（東、登場。紅茶をもつてくる）
英次。どうも御苦勞さん
下島。どうもありがたう。
英次。小野寺君。僕は最近個人展覽會をやらうかと思つてゐるのだよ。
小野寺。それは是非やるといゝね。
英次。君に發起人になつてもらいたいのだ。
小野寺。元よりよろこんでなるよ。
英次。山田にもなつてもらはうと思ふのだ。
小野寺。それはよろこんでなるだらう。
英次。僕も十年、苦勞したから、もうそろそろ世間に自分の存在をはつきりさせてもいゝと思ふのだよ。
小野寺。それは勿論いゝね。
英次。苦しい十年だつた。

小野寺。わきで見てもくるしさうだつた。

英次。精神一到何事かならざると云ふのは嘘ぢやないね。

下島。それでは先生、失禮いたします。

英次。さうですか。それでは又畫が出來たら持つてゐらつしやい。

下島。ありがたう。それでは皆さん失禮いたします。

小野寺。さよなら。

（下島退場、東おくつて退場、外から笑ひ聲聞へる）

小野寺。あの人、中々畫がうまいね。

英次。大したことはないが、女としてはましな方かも知れないね。どもかく熱心だからね。

小野寺。こないだ山田にあつたら君の畫を隨分ほめてゐた。

英次。こないだ來て二枚買つてくれたよ。

小野寺。見せてもらつた。

英次。僕の畫も賣れるやうになつたから不思議だ。人殺しの畫がね。知つてゐる人は少ないだらうがね。

小野寺。君はまだそんなことにこだわつてゐるのか。

英次。こだわらないわけにはゆかないよ。

小野寺。もうすぎたことだ。

英次。とり返しがつくことなら僕はとつくにとり返しをつけてゐる。

小野寺。君はそのことでは苦しみすぎた。
英次。千代子は生きかへつては來ない。
小野寺。死んだ人間は君の云ふ通り生きかへらない方がいゝだらう。千代子さんはもうとつくに生れない前にかへつてゐる。
英次。だが夢のなかでは生てゐるよ。僕は人間が死んでしまうとすつかりこの世から緣がなくなるものとは思へない時がある。僕は千代子の墓へお參りをしてあやまつたつて始まらないことは知つてゐるが、どうしてもゆかないと氣がおさまらない。へんだね。
小野寺。千代子さんがもし君のことをまだ思つてゐるなら、もうとつくに君のことは許してゐるよ。
英次。それはさうかも知れない。しかし殺されると云ふことはどうしたつていゝことゝは云へない。僕は閉口だ。
小野寺。それは誰だつて生てゐるものは閉口さ。平氣で死んでゆくやうに出來てゐたら困るからね。
英次。誰が困るのだよ。
小野寺。そしたら人類はとつくに亡びてしまう。
英次。人類が亡びて誰がよはるのだ。
小野寺。君はよはらないかい。
英次。死ぬのが平氣につくられてゐたら、人類が亡びるのも平氣だと思ふね。第一僕達は生れなくつてよかつたらう。生れなかつたら困りやうもないからね。
小野寺。それなら人間は平氣で死んでゆけるやうにつくられてゐればいゝのかね。

英次。時々はその方がいゝと思ふね。しかしいくらいゝと思つたつて、死ぬのがこわいと云ふ事實はなくならないがね。この事實も面白い處がある。だが要するに死ぬのがこわいとか、苦痛が耐らないとか、恐怖はいやなものだか、云ふ處に人間らしい處がある。それがなくなつたら人間は幽靈のやうなものだね。僕は肉體をもつて生てゆくことには不服はない。そして僕は美しい肉體を讃美する。ガマだつて美しい人間を讃美してわるいわけはないからね。

小野寺。君の精神はすつかり健全になつてゐるね。僕達はそれに感心してゐる。

英次。修業でやつと健全をたもつてゐるだけだよ。まだあやしいものさ。

小野寺。君のやうな心がけと、生活をしてゐれば、何も恐ろしいことはないと思ふね。

英次。中々どうして、さうはゆかない。一たい藝術家と云ふものは仕事の性質上ながい生きのしたいものだ。少しも完成した仕事をしてゆきたいと思つてゐるからね。從つて死にたくない氣の强いものだ。そして死にたくないものは、何も恐ろしくないとは云へないで、何にも恐ろしい。恐ろしいから用心すると云ふ方が本當だよ。

小野寺。だが君の生活には、名僧のような處があると山田が云つてゐたよ。

英次。それは大した買ひかぶりだね。僕はさうなりたいとは思つてゐるが、どうして中々だよ。

小野寺。だが君はすべてをすてゝかゝつてゐる快樂も、金も、不平も。

英次。快樂は向ふで逃げていつたのだよ。僕はそれに未練をもつのを耻ぢるだけだ。金はこの頃だまつてゐても入つてくるが、快樂に逃げられた僕には金は役にたゝない。もつと役に立つ人が持つてゆくのが至當だと思ふね。

小野寺。それが中々出來ないことだよ。それに君は惡評されても、不當に輕蔑されても少しも腹を立てないね。そして不安も感じない。

英次。あたりまいさ。僕は死刑になつても苦情の云へない人間だよ。悪評や輕蔑位いですめば、ありがたいことだ。それに僕はへんに自信があるから、最後の勝利を信じてゐるから不安なんか感じない。自分に見へてゐる世界が、かけないのをはがゆく思ふだけだ。喰ひ込みたりないだけが問題だよ。僕はすてるものをすてゝかゝつてゐる。それだけが僕の强味かも知れない。だが笑つてくれるな。僕は女だけが怖いのだ。他のものは卒業出來たが、女だけはいけない。少し奇麗な女を見ると、自分が首をしめやしないかと云ふ强迫をうけるのだよ。君にはこの氣持がわかるまいね。一寸しめて見たくなるやうな强迫觀念におそはれるのだ。だから僕は女だけを恐れてゐる。夢中に締めたりしたら大へんだからね。

小野寺。それは强迫觀念だけにすぎないね。

英次。それは僕も知つてゐる。高い所にのぼると、ついとびおりたくなつたり、死ぬのがあんまり怖いとつい自殺したり、毒薬だときくとついのみたくなつたり、蛙が蛇ににらまれると蛇の方へ歩いていつたり、まあそんなたぐいだね。早くそんなことに超越したいと思ふが、まだ超越出來ない。

小野寺。しかしそんなことはなんでもないと思ふね。誰にでもあることだよ。

英次。だが程度がちがうだらう。實行しないにきまつてゐる人間と、實行しかねない人間と。

（東、戸をたゝく）

英次。はい。

（東、登場）

東。郵便が參りました。（わたして退場）

英次。(それを見)又畫の注文が來た。あいつがゐたらよろこんだらう。一人ですきなものを買はしてやつたらよろこんだらうと思ふと、つい涙が出てくるよ。小野寺、一寸そのまゝでゐてくれ。僕に君の顔をスケッチさしてくれ。生命の恩人のね。

(スケッチブックをとりあげる)幕。

二

(同じ場、英次花の畫をかいてゐる。呼鈴がなる。英次一寸氣にしたが、畫をかきつゞけてゐる。又暫くして呼び鈴がなる)

英次。(畫をかきながら)うるさい奴だな。留守だと思つて歸ればいゝのに。馬鹿な奴だな。

(戸をたゝく音がする)

英次。はい。

(下島登場)

英次。默つて入つて來たのですか。

下島。だつていくら呼び鈴をおしても、聲をおかけしても誰も出てゐらつしやらないのですもの。

英次。皆留守なのですよ。

下島。あなたも、

英次。(眞面目で、少し怒つたやうに)あたりまいです。呼鈴ならして誰も出て來なければ留守にきまつてゐます。

下島。それはどうも失禮。
英次。本當に仕方がない人です。
下島。それでは私、おいとまいたします
英次。いや、歸らなくてもよろしい。（畫をかくのをやめる）
下島。どうか、かいてゐて下さい。私先生のかいてゐらつしやる所が拜見しいのですから。
英次。それでは失禮して、もう少しかゝしてもらいます。
（英次かく、下島、感心して見てゐる。英次、急にやめる）
英次。あなたに見てゐられちや矢張りかけない。
下島。どうしてです。
英次。僕の畫は女の臭ひが嫌ひなのです。（沈默）
下島。（よはつて）どうもすみません。
英次。いや、今のは冗談です。
下島。いやな御冗談ね。
英次。嘘でもないのです。
下島。東さんは御留守なのですか。
英次。東は寫生にゆきました。東に御用がおありなら、あの裏の橋の處にゐます。
下島。（急にうちけし）いゝえ、東さんに用はないのです。

英次。僕に用があるのですか。

下島。えゝ。又畫を見ていたゞきたいのです。

英次。よくかくのですね。あなたは。

下島。先生はなほよくおかきになりますわ。

英次。あたりまいです。僕は他に用はないのです。

下島。私だつて他に用はありませんわ。

英次。なまけものですね。

下島。畫をかくのはなまけものなの。

英次。料理の手つだいはしないのですか。

下島。先生は女を輕蔑してゐらつしやるのね。

英次。輕蔑しないわけにはゆきませんからね。

下島。どうして。

英次。それでも女にいゝ畫かきがゐますか。

下島。さうおつしやればさうですが。

英次。モリソヤローランサンではね。だが可愛いゝ處はあるにはありますがね。

下島。可愛いゝ畫もたまにはあつてもいゝでせう。

英次。家庭の仕事をしたあいまに、かくならね。

下島。先生は本當にひどい方ね。
英次。まあ、然らずに見せて御らんなさい。
下島。どうせ、つまらないものですわ。
英次。見せないためにもつて來たのぢやないでせう。早くお見せなさい。
下島。さうして早くお歸りなさいでしよ。
英次。まあそんな所です。
下島。私が先生に畫を見てもらうと云ふと、皆おどろいてゐますね。
英次。僕が怖くないのはあなた許りですか。
下島。皆、先生のお口のわるいのにおどろいてゐるのですよ。私はそのお口のわるい所を信用しておりますの。他の方は女だと思ふと始めつから程度をさげて、中々よくかけてゐると云つて甘やかして下さるから、信用が出來ませんわ。
英次。僕なら出來ますか。
下島。それは出來ますわ。
英次。それは感心ですね。まあ、お見せなさい。
（下島、こわさうに見せる）
英次。可愛いゝ貧弱な花をかきましたね。
下島。いつか先生が一本の枝でも本當にかければ大したものだとおつしやつたので、小さい花を三つだけでもいゝから、本當にかいて見たいと思ひましたの。

英次。之で本當にかけてゐるつもりなのですか。
下島。さうは思ひませんけど、力がありませんから。
英次。正直にかいてありますが、色も形も單調ですね。畫面があきまだらけで、貸地の廣告でも出したいやうですね。畫面を充實さすことが大事ですよ。それからこりすぎても面白くありませんね。あんまり臆病になるといぢけますからね。自然は少しもいぢけてはいないものです。
下島。(少し泣き聲で)え〻。よくわかりました。ありがたう。今度はもう少し上手にかいて參ります。
英次。力をおとすことはないのですよ。どうせあなたがものにならない人間なら、僕は惡口は云ひません。
下島。よくわかりました。

(戸をた〻く音)

英次。はい

(東登場)

東。先生、唯今。(下島にあいさつする)
英次。畫が出來たか。
東。はい。
英次。見せないか。
東。どうもうまくゆかないのです。
英次。まあ、見せないか。

東。はい。
英次。矢張りしつかりかけてゐる。少し物質感の方が勝ちすぎてゐるね。
東。さうですか、僕は見てゐる内に物質の美しさにおどろいたので、なるべく物質感を出して見たく思つたのです。
英次。少しものがお互に孤立してゐる。
東。僕はその孤立した所に面白味を感じたのです。
英次。面白い處に面白味を感じたね。
東。（反抗的に、それをなるべくかくして）先生と僕の性質のちがいが少しはつきりして來たやうに思ふのです。先生は矢張り都會の方で、私は矢張り漁師の子だと云ふことがわかつて來たと思ふのです。
英次。さうか。それもいゝだらう。
東。僕は今迄先生に全部おいかぶされて動きがとれませんでしたが、やつと自分の道がわかつた氣がするのです。
英次。少し早やすぎはしないか。
東。先生、僕だつていつまでも子供ではありません。もう二十四になつたのです。まだ畫は隨分幼稚ですが、見へる世界が少しづゝ先生から獨立して來たことを感じてゐるのです。
英次。それもいゝだらう。本當に自分に忠實になれればね。
東。僕もさう思つてゐるのです。
英次。もう君もそろ〳〵獨立してもいゝ時が來たのだから、僕に滿足出來ない所が出て來たのも當然かも知れない。
東。僕は先生に滿足しないわけではないのです。先生の畫を尊敬してゐることは少しもかはらないのです。ですけれ

ど、烏のくせに鵜の眞似をするのは見ともないと云ふことに氣がついたゞけなのです。

英次。それはいづれ君の特色が出るよ。しかしわざと自然を無理に自分で見るには及ぶまい。特色は自づと出るのがいいのだ。出さうとして出た特色には無理がある。

東。先生にはさう見えるかも知れませんが無理に特色を出した覺へはありません。

英次。それさへなければいゝのだ。本當に君には僕は望みをおいてゐるのだ。君は僕とちがつて身體もいゝし、いくらでも大作の出來るたちだから、正々堂々と正面からやつてもらへばいゝのだ。

東。僕は先生より野蠻だと云ふことを今迄耻てゐたのです。この頃、野蠻も惡くないと思つて來たのです。

英次。それは惡くないさ。

東。怒濤のおしよせてくる荒磯のやうな感じも面白いと思つてゐるのです。

英次。それは面白いさ。

東。私もやつと自覺が出來て來たやうに思ふのです。その内には先生がよろこんで下さるやうな畫をかけると思つてゐます。

英次。反抗のための反抗は馬鹿氣てゐると云ふだけなのだよ。

東。僕は先生に反抗してゐるでせうか。

英次。君は一本立ちにならうとしすぎてゐる。

東。さうでせうか。僕は自分のお弟子根性がいやになつてゐるのです。

英次。君はもう僕がうるさくなつて來たのだ。

東。貴方かも知れません。先生が私をおいかぶさつてゐる樣な感じが僕には息ぐるしくなつて來たのです。

英次。齡が齡だからさうなるのも無理がないだらう。君の信じる通りゆくがいゝだらう。

東。それより他仕方がありませんからね。

英次。それはさうだらう。だが特色は無理に出さないがいゝ。

東。僕もその位いなことは、先生知つてゐます。

英次。それならいゝのだよ。

東。僕には昨日まで先生の御批評は絕對だつたかも知れませんが、今日から僕も先生のおつしやることでも腑に落ちないことは、腑におちないと云ふ方が本當だと思ふやうになつたのです。それでこそ先生は先生であり、僕も僕であると思ふのです。

英次。君の考は正しい。しかし正直に云つて君の畫はまだ、すつかり物になつてゐるとは云へない。

東。それなら私も正直に申します。先生の畫に僕はあきたらない所が出來て來たのです。

英次。鼻をあまり高くしないがいゝぞ。

東。先生もあんまり一人天下におなりにならない方がようございます。

英次。ふふん。

東。先生は私を輕蔑なさるのですか。

英次。いや、僕は自分を笑つたのだよ。

東。なぜ御自分をお笑ひになつたのです。

英次。いや、俺も馬鹿だと思つたのだよ。

東。先生は私を輕蔑してゐらつしやるのですね。

英次。そんなことはないよ。それは一面輕蔑してゐるかも知れないが、他では大いに君を認めてゐるつもりだよ。あと二三年、君がハンブルでゐられたら、君は大物になると僕は思つてゐるのだ。

東。あと二三年ですか。

英次。さうだよ僕のうちにもあと二三年は君に役に立つものがあると思つてゐる。自然をすなほに深く見ることが、最初だと思ふね。それからあと、自づと自分の味が出る。自分の味の出るのはおそい方がいゝ。

東。僕にはさうは思はれません。

英次。もう、そんな話はよさう、下島さんの前で、そんな話はよさう。

東。(赤面して)僕もつい云ひすぎたかも知れません。

英次。何に、僕の方も云ひすぎたかも知れない。お互にあんまり利口ぢやない。下島さん、おどろいたでせう。

下島。いゝえ、面白く伺つてゐました。

英次。面白くですか。

下島。それでもいろ〳〵參考になることをきかして戴けたので。

英次。あんまり參考にもなりませんよ。

下島。男の方のお話はキビ〳〵してゐて氣持がようございます。

次英。あんまり氣持のいゝ話でもありませんよ。男同志は殺風景なものですよ。

下島。だがそれでなければ矢張りいゝ仕事は出來ないのだと思ひますわ。
英次。下島さん、あなたを二人にかゝしてくれませんか。東、かいて見る氣はないか。
東。是非かゝして戴きたいものです。
下島。えゝ、それは先生にかいて戴けば、私も光榮ですわ。
英次。（腰椅子をいゝ處におき）それならこゝへ腰かけて下さい。
下島。はい。今日からお始めになるの。
英次。えゝ。急に今、かきたくなつたのです。いゝでせう。
下島。それは私はかまいません。（腰かける）
英次。東、君の位置はどうだ。
東。こゝで結構です。
（二人かき始める）

三

（同じく、英次小野寺と話してゐる）
英次。男つてあさましいものと思ふね僕は内心さとつた人間のつもりでゐた。もう何が來ても平氣だと思つてゐた。僕は何にもかもすてゝしまつた人間。自分の仕事より他のことは全部思ひ切つた人間だと思つてゐたよ。處がこの頃は、あの東のやうな子供とムキになつて議論したり、又ムキになつて競爭したりする氣になるのだからね。女のゐる

前でさ。耻かしいと思つても、すぐムキになる。神樣と云ふ奴は、男を餘程のろくつくつたと見えるね。僕はもう女のことはとつくに思ひ切つてゐるつもりなのだ。僕のやうな人間は女のことを少しでも考へる資格がない人間だと云ふことを自分ははつきり知つて來たつもりなのだ。人殺しで、セムシでさばけない性質、仕事のことは死んでも忘れられない、悟つた人間のつもりでゐた。處がどうだ、下島がやつてくるやうになつてから、そして東が僕に反抗的な態度を見せて、下島さんの前に自分の存在をはつきりさせやうと努力してゐるのが見へてから、僕はそれに超越しなければ耻だと知りながら、超越出來ないのだ。そして東と同じレベルにたつて、云はなくつていゝことを云つたり、しなくつていゝ態度をしたり、そしてそれに氣がつくと、自分で淺間しいと思ふが、しかしどうすることも出來ないのだ。逢ひ見ての後の心にくらぶればと百人一首の歌があるが、實際そんな處だね。

小野寺。君は結婚する氣はないのかね。

英次。まさか、そんな氣はないよ。

小野寺。下島さんは君に氣があるのぢやないのかね。

英次。そんなことはないにきまつてゐるよ。たゞ僕を聖者のやうに崇拜してゐるのだね。少くも僕を天才と信じて、僕の一言一句を信じ切つてゐる。男の弟子はどうかしたらふみにぢつておいこしてやらうと云ふ處と見えて、小生意氣な感じがするものだが、其處へゆくと女の弟子は神妙で氣持のいゝものだ。どつちがいゝのかわからないがね。僕を油斷したら征服してやらうと思ふ者のゐてくれるのも惡いとは思はないが。

小野寺。東と云ふ男は少し生意氣になつたね。

英次。それも女のためさ。尤も男は少し生意氣な所もあるのも惡いとは云へないが、結果をあせりすぎるのは利口とは

云へないね。

小野寺。東は何處へ行つてゐるのだ。この頃よく留守だね。

英次。何とか口實をさがして、下島さんの處へ出かけるらしいのだ。下島さんは閉口してゐた。

小野寺。下島に氣があるのか。

英次。それは大ありさ。

小野寺。君はそれを寛大に見てゐるのかい。

英次。それより仕方がないぢやないか。まさか子供ぢやあるまいし、ゆくなとも云へないからね。

小野寺。それでも下島さんがいやがつてゐるのだらう。

英次。少くも今の所ではね。だがあてにはならない。

小野寺。君は出かけないのか。

英次。僕は出かけないよ。相かはらず僕はこのアトリエに籠城してゐるのさ。僕は勿論下島さんに氣があるわけではないつもりなのだよ。あんな無垢な處女に氣があつてはたまらない。しかし東と結婚するのを望んでゐるのかと云へば、それは勿論うそさ。僕はこの頃東の顔を見るのさへいやになつてゐる。自分で自分に愛想をつかしてゐる。個人展覽會まではうんと仕事をしやうと思つてゐるのだが下島さんの來ない時には何んだかおちつかないのだ。そして下島さんがくると我ながら恥かしい位い、快活になり、冗談が云つて見たくなる。厄介な奴さ。しかし之れも一つの修業だと思つてゐる。あながち超絶しやうと許りは思つてゐない。何か、うんといゝものを生みだす起緣にしてやらうと思つてゐるのだ。

小野寺。それはいゝ思ひつきだ。君らしい考へ方だ。しかし僕は君が下島さんと結婚したつていゝと思ふね。あの人なら純粋に君のことを思つてゐるよ。

英次。だがね。(首しめるまねして)之がおそろしいよ。それに千代子を殺した告白せずに結婚するわけにはゆかない。だが告白は出來ない。下島さんの方から僕と結婚したいと云つてくれれば別だが、僕からは云ひ出せない。

小野寺。女の人からは云ひ出せないだらう。

英次。女の人が本當に僕を愛してゐてくれゝば云ひ出せると思ふね。

小野寺。どうだかね。女は本當に愛されてゐることを知らなければ、中々心は動かさないものだらう。

英次。僕が下島さんを愛してゐることは下島さんは知つてゐるはずだ。

小野寺、結婚したいと云つて見なければだめだね。

英次。さうかね。しかし僕は正直な所結婚したくない。僕はたゞ下島さんが一生獨身で、僕の仕事を尊敬して、兄妹のやうに氣らくにしてくれることを望んでゐるのだ。

小野寺、それならうまくゆきさうなものだね。東だつて、今すぐ結婚するわけにもゆかないからね。

英次。それはさうさ。そして東はまだ海のものか陸のものかわからないからね。その點で僕は安心してゐるのだよ。だが僕がまたそんな事を考へるやうになつたかと思ふとへんな氣がするよ。

(呼び鈴がなる。英次退場。まもなく衣裳屋の番頭と登場)

番頭。毎度ありがたう御座います。御注文のお品をもつて參りました。之ではいかゞで御座いますか。

英次。(惡しくも立派な幕を出して見せる)

英夫、結構です。立派だらう。
小野寺。隨分立派な幕だね。なにゝするのだ。
英夫。こゝへお伽噺の女王樣の玉座をつくることにしたのさ。これが玉座の前の幕なのだ。
小野寺。君に一寸似合はないね。
英夫。そりあ、人間の心のなかにはいろ〳〵のものがかくれてゐるものだよ。僕だつてペロネゼーや、チ、アンが嫌ひとは限らないよ。着物も出來ましたか。
番頭。はい。之ではいかゞで御座いますか。
（お伽噺の女王らしい着物を出して見せる。）
英夫。（調べて見て）結構です。一寸御面倒ですがこの幕をあのひもに通して見せて下さいませんか。
小野寺。さつきからあのひもは何かと思つてゐた。
番頭。承知しました。
（番頭、幕をたらして見る）
番頭。いかゞで御座いますか。
英夫。結構です。それから冠は持つて來て下さいましたか。
番頭。持つて參りました。（出して見せる）いかゞ御座いますか。
英夫。結構です。
番頭。それでは失禮いたします。

英次。さうですか。

番頭。（小野寺に）どうも失禮いたしました。

（小野寺丁寧にあいさつする。番頭、英次退場。小野寺、幕や、着物、冠を見る。英次風呂敷包をもつて登場）

英次。一寸君手つだつてくれないか。之を台に敷くのだ。

小野寺。よし來た。

（二人で敷く）

英次。君、失禮だけど、この長椅子を手つだつてのつけてくれないか。

小野寺。よし來た。

（台をのつける）

英次。（その上にキレをおゝい）これで女王樣が横になつて、戀人のことを夢みてゐると云ふわけなのさ。（花が豐富に挿されてある花瓶を足の方へおく）之でもう女王樣さへ御いでにさへなればいいわけなのだ。（幕のひだをなほしたりいろ〳〵愉快さうにしたぐをする）

小野寺。（少しあつけにとられながら、同情して見てゐる。）思ひ切つた構圖だね。

英次。レンブラントのダイアナの向ふを張らうと云ふのさ。まさか裸になつてもらうわけにもゆかないからね。

小野寺。又東と一緒にかくのかい。

英次。いや、今度は僕一人だよ。誰にもこの畫が出來上るまでこの畫は見せないつもりさ。百號にかいて見やうと云ふのさ。僕の柄にないかね。

小野寺。いや面白いものが出來るだらう。そして下島さんは承知したのかい。

英次。それはよろこんで承知したさ。光榮だと云つてね。

小野寺。面白いものが出來るだらう。

英次。頭のなかではうんといゝものがかけるつもりでゐるが、いざとなるとさうもゆくまい。だが僕はこの頃へんに元氣さ。僕のうちにもこんな快活な精神が生てゐてくれるのかと、自分でおどろいてゐる。東には氣の毒な氣もするが、僕は自分の仕事のため、大きな仕事のためには、小さい同情は殺してかゝるつもりだ。しかし正直を云へば、東に同情なんかはしてゐない。ふみにじることに快感さへ何處かに感じてゐる。小生意氣な奴、僕に反抗出來るなら反抗して見ろつてね。戀と云ふものは一面へんな性質をもつてゐるものだね。

（鈴がなる。英次、退場、まもなく下島と登場。小野寺と挨拶する）

英次。どうです。中々立派でせう。

下島。本當に立派ですわ。

英次。之があなたの着る着物で、之をあなたがかぶつて、あすこに靜かに横つて下さると云ふわけです。

下島。大したことになつたのですね。私よりもつと適當なモデルがありさうに思ひますわ。私ぢやあんまり、

英次。そんなことは斷じてありません。あなたの顏や、身體つきや、感じから思ひついたのですから、他の人ではだめです。

下島。（着物をいぢりながら）なんだか耻かしい氣がしますわ。

英次。そんなことはないでせう。內心よろこんでもゐて下さるでせう。

下島。それはね。
英次。それならそれを着て見て下さい。
下島。又今度にいたしませうね。
英次。まあつけるだけはいゝぢやありませんか。小野寺だからかまいませんよ。
下島。小野寺さまがゐらつしても、それは少しも氣にはしてゐないのですけど。
小野寺。僕は今日は失敬するゝ。又くる。
英次。さうかい。それは失敬したね。
小野寺。それぢや、さよなら。
英次。さよなら。
（小野寺下島と默禮し、退場。英次も送つてゆく。下島、鏡の前へ行つて冠をつけて見る。英次そつと登場。鏡のなかの下島と顔を見まはす）
下島。まあ、びつくりしました
英次。どうしてです。
下島。だつて、先生があんまり靜かに入つてゐらつしたので。
英次。あなたがきつと鏡を見てゐるだらうと思つたので。
下島。いやな先生ね。それでは着物を着て見ますかね。
英次。どうぞ。

下島。先生、一寸目をつむつてゐて頂戴。

英次。よろしい。

(下島。着物をぬぎ、鏡の前で下着の上に着物を着る)

英次。まだですか。

下島。まだよ。

英次。大へんおそいのですね。

下島。まあ、まつてゐらつしやい。(着物つけおはり、冠をつける)

英次。まだですか。

下島。せつかちですね。先生は。

英次。なんだか、目をつむつてゐる内に、美しい世界があらはれたり、消えたりしさうに思ふのですよ。

下島。さう思つてゐたゞければ、なほ目をつむつてゐていたゞきたいわ。目をおあきになると、現實の貧弱さにおどろきになりますからね。(もうけの段をあがり長椅子の上にねて、居ずまいをなほす。沈默)

英次。まだですか。

下島。もう本當はいゝのですよ

英次。(目をあけ鏡の方を先づ見、それから下島を一寸さがして、もうけの席の上に下島のゐるのを氣がつき歎聲をあげる。)あゝ、本當に素敵です。僕の夢は實現されました。

(戸をたゝくものがある)

英次。誰だ？

外。（東の聲）僕です

英次。何か用か。

東。別に用ぢやありません。（云ひながら戸をあけやうとする）

英次。戸をあけちやいかん。（戸に走つていつていきなり戸をしめカギをかけやうとする）

下島。先生！　何をなさるのです。

英次。安心して下さい。僕はたゞ他の人に自分のイリユジヨンをこわしてもらいたくないのです。

下島。カギをかけるのはよして下さい。つまらぬ誤解をされてはいやですから。

英次。それでも。

下島。仕事中は入つてはいけないと云ふ札をお出しになればいゝぢやありませんか。

英次。さうでしたね。僕たはそれが氣がつかなかつたのです。馬鹿ですね。許して下さい。

下島。私は何とも思つてはおりませんわ。先生を信じ切つておりますから。

（英次、いきなり机のところにゆき、ペンで紙に字をかく）

四

（同じ場。英次百號に下島の前の場と同じ形で横になつてゐるのをかいてゐる）

英次。少し休みませう。

下島。えゝ。（下島、畫を見に來、英次の後ろに立つ）
英次。どうです。
下島。本當に美しくかけましたわね。私ぢやないやうですわ。
英次。あなたの内にかくれてゐるあなたです。私一人が知つてゐる。あなた自身も知らないあなたです。
下島。それではこの畫の方が私よりもなほ私なのですか。
英次。まあさうですね。僕は純粹のあなたをかゝうと思つてゐるのです。力はまだ足りませんが、しかし入り込めるだけ入りこんで、純粹のあなたを生かせるだけ生かして見るつもりです。
下島。純粹の私と云ふのは、あなたの見た私と云ふことになるのですね。
英次。さうも言へるかも知れませんがね。だがさうと許りも云へないでせう。あなたより僕の方がより深いあなたの美を見てるとも云へますからね。つまり客觀的にもより本當を見てゐると云へるでせう。
下島。先生のおつしやることはよくわかりませんわ。
英次。まあ腰をおかけなさい。一體人間は自分が自分を一番よく知つてゐると思ふのはまちがいなことがよくあります。花は、自分の美しさを自覺してゐるかも知れませんがね。だが天才のある畫家が知つてゐるだけには知らないでせう。僕なんか、自分の内の美しさを知るのは、ただ他のものに反映する自分によつて知るだけです。僕は僕が他の内に見出し得る美によつて、自分の内に藏された美を知るのです。だから僕はあなたによつて僕の美を知ることが出來たと云ふのです。僕はそれをあなたに感謝してゐるのです。人間は單なる鏡ではない。心靈の鏡です。しかしその鏡は自分の深さだけにきりものをうつすことが出來ないものです。

下島。それでは私の深い私は私にはわからないで先生だけにおわかりになるの。

英次。まあさうです。人間は自分を愛してゐないからです。

下島。先生のおつしやることはわかりませんわ。

英次。人間は自分を愛してゐると思つてゐますが、實は自分を盲目に愛してゐて、あまかしはしますが、本當の意味で自分を尊敬したり愛したりすることは中々出來ないのです。たとへば、あなたは僕を先生として尊敬し、信用してくれてゐる。しかし僕はそれ程自分を尊敬しても、信用してもゐないのです。ごくあたりまいの人間にすぎないと思つてゐます。あなたゞつてさうでせう。自分を特別に美しいとも、優れてゐるとも思はないでせう。よし思つたにしても僕が知つてゐる程は知らないでせう。あなたの美をあなたは僕程愛してゐないからです。

下島。………

英次。僕の云ふことはわかりましたか。

下島。いゝえ、ちつともわかりませんわ。

英次。困つた人ですね。

下島。どつちが。

英次。あなたですよ。

下島。つまり私は馬鹿だとおつしやるのでせう。

英次。つまりあなたは自分の美を知らないと云ふのです。

下島。それだつても、この畫の方が私より美しいのは事實です。

英次。あなたは自分を愛してゐないからです。

下島。そんなことはありませんわ。私は隨分エゴイストですわ。

英次。あなたには僕の云ふ意味がちつともわからないのですね。それともわからないふりしてゐるのですか。わからない方がいゝので。

下島。先生のおつしやることは時々わからないことがあると、東さんも云つてゐらつしたわ

英次。東さんはこの頃も時々ゆきますか。

下島。めつたに。東さんはこの頃、何か怒つてゐらつしやるやうよ。

英次。僕があなたと二人切りで、一時間も二時間もゐるからですよ。

下島。そんなことはないでせう。

英次。東はあなたを戀してゐますからね。

下島。だつて先生と二人切りだつてちつともおこることはないわ。

英次。自分で人を想像するのです。僕があなたを愛してゐるとでも思つてゐるのでせう。

下島。おかしな方ね。

英次。何がおかしいのです。

下島。だつて先生のやうな女嫌ひな方が。

英次。僕を女嫌ひにきめてゐるのはあなた許りですよ。

下島。だつて先生のやうな方から見れば、私は赤坊のやうなものでせう。

英次。あなたは利口ですね。

下島。なぜです。

英次。だつてうまくとぼけますからね。

下島。今日は先生のおつしやることが少しもわかりませんわ。

英次。あなたは矢張り獨身主義ですか。

下島。えゝ。

英次。そして畫を一生やるつもりですか。

下島。自分ではやりたいと思つてゐるのです。

英次。是非おやりなさい。

下島。望があるでせうか。

英次。大いにあります。獨身でゐればね。

下島。先生が保證してくだされば、私一生獨身で畫をやりますわ。

英次。僕を信じ切つて下さい。さうすれば僕はあなたをものにして見せます。

下島。それは私、先生を信じ切つておりますわ。

英次。僕はあなたを殺してゞもですか。

下島。先生はそんなことをなさらない方だと云ふことを知つてゐます。

英次。たとへですよ。

下島。たとへなら、殺されても信じますわ。
英次。何を信じるのですか。
（下島、笑ふ）
英次。ともかく安心してあなたの一生を僕にお任せなさい。
下島。それはお任せしますわ。
英次。條件なしにですか。
下島。それは私、先生を信じ切つてをりますもの。
英次。何を信じてゐるのです。
下島。先生は私を愛してゐて下さることを。
英次。本當ですか。
下島。えゝ、私の父のやうにね。
英次。あなたは蝦見たやうな人間ですね。
下島。なぜです。
英次。つるりと逃げ出すからです。
下島。何が逃げ出すの。
英次。あなたは子供ですね。
下島。先生から見るとね。

英次。さあ、又畫を始めませう。

下島。おゝ。

（モデルの座につく）

英次。（見つめて畫をかゝうとして、筆をまだおろさない）僕は本當にあなたのやうな弟子を一生もつ事が出來ることを實に幸福に思つてゐます。

下島。私も先生のやうな方の一生弟子にして戴けることを光榮に思ひます。

（英次。畫をかゝうとしてゐたが突然立ちあがり、戸をあける。其處に東が立つてゐる）

英次。探偵の眞似はよせ。

（東入つてくる）

東。先生には僕の氣持はわかるはずです。

英次。わかつたつて同情はしない。俺は自分の仕事のよくゆくことを喜ばないやうな男に同情はしない。さあ早く出てくれないか。入つては困るとちやんとかいてある。

東。戸の前にたつてはいけないとはかいてありませんね。

英次。あたりまいさ。カギの穴からのぞくなとかく奴があるか。小便無用とかく奴があつても、泥棒無用とかく奴はない。

東。………

英次。さあ、出ていつてくれないか。

東。……（默つて退場）
英次。さあ、畫を始めませう。
下島。先生は隨分、暴君ね。
英次。私は自分の仕事を尊敬する、仕事の忠實な奴隸にすぎないのですね。さあ、始めませう。（沈默）あなたは東に同情してゐるのですね。僕の仕事と、東の感情とどつちを尊敬するのです。
下島。私にはわかりませんわ。
英次。今日はやめませう。あなたは東が、ぬすみ見たり、ぬすみ聞いたりする。卑劣を尊敬するのですか。
下島。私は女ですもの。
英次。あなたは、一生畫をかく氣なら、そんな女らしい同情はすてなければいけません。
（下島。モデルの座からたち上る）
英次。（怒つたやうに）もう少しそのまゝにしてゐて下さい。
下島。はい。
英次。（かきながら）あなたは僕の仕樣がひどすぎると思つてゐるのですね。
下島。一寸そんな氣が、しましたの。
英次。もうしませんか。
下島。えゝ。よく先生のお氣持がわかりました。
英次。本當にわかつたのですか。

下島。先生はさすがに偉い藝術家でゐらつしやることがはつきりしました。そして藝術の仕事と云ふものは本當にしつかりしなくつてはいけないものだと云ふことがわかりました。

英次。(皮肉に)それは結構です。しかしあさましい氣もしませんか。

下島。いゝえ。だけどなんだか血みどろのやうな氣がしますわ。

英次、血みどろ、僕の手に血がついてゐるやうに見へますか。

下島、いゝえ、先生の心臓は裸ではないかと云ふ氣がしたのです。

英次。僕はおちついて、東にたいしてももつと先生らしい寛大な氣持がもちたいのですよ。だが時々あんな態度に出て、あとでわるかつたと思ふのですよ。

下島。しかし先生位いのはげしさがなければ藝も中々かけないと思ひます。

英次、さう云はれると赤面します。人間て隨分面白いものですね。

下島。私、さつきは本當にどうなるかと思ひましたわ。

(戸をたゝく戸がする)

英次。誰だ。

外で。(東の聲)僕です。

英次。何か用か。

東。(戸外で)先生。今迄僕にお世話になりました。僕は少し考へることがありまして、之からお暇をいたゞきたいと思ひます。どうぞ先生もお身體を大事になさつて下さい。

英次。（戸をあけ）さつきの僕の言葉が原因なら、出かけるのはよしてほしい。僕は自分の云ひすぎたのを後悔して君にあやまりたい氣もちになつてゐるのだから。

東。えゝ。先生のお氣持はよくわかつております。しかし私もいろ〳〵の點で、之以上先生のお世話になるのは心苦しいのです。もう一本立ちになつてやれる處まで、やつて見たく思つてゐるのです。

英次。君の決心は强さうだから、僕も無理にはとめない。もし歸りたくなつたらいつでも遠慮なく歸つて來てほしい。それから金の方の仕事でもさがす必要があつたら、小野寺や、山田にたのむといゝ。なるべく詰で金をとつて質素にくらす方がいゝと思ふ。

東。御注意ありがたう御座います。恩をあだで報ずるのはいやで御座いますが、私も獨立した以上、あくまで先生とたたかうつもりでおります。先生のおともだちのお世話にはなりたくないと思ひます。

英次。それもいゝだらう。

東。それでは失禮いたします。

英次。君もたつしやで、ゐたまい。

東。ありがたう御座います。僕は先生を尊敬してゐることには少しもかはりはないと思ひます。たゞ僕はあることで先生とは何處までも戰ふつもりです。

英次。藝術の名においてか。

東。それと戀の名においてゞす。（退場）

英次。あいつは立派な男だが、惜しいことをした。

下島。先生、私おいとまをいたしますわ。

英次。いけません。もう少しそのまゝにしてゐて下さい。

下島。私、なんだか東さんのことが氣になります。一寸お逢ひしに行つていゝでせう。

英次。（心の内のたゝかいをかくして。冷靜に）いけません

下島。なぜいけませんの。

英次。僕は今壼にのり氣になつてゐるのですから、

下島。一寸です。

英次。それならいつていらしやい。

（下島。いそいで退場。英次傲慢た態度で歩いてゐたが、急にしやくり泣く。下島登場）

下島。先生どうかなさつたのですか。

英次。いや。たゞ急に淋しくなつたのです。

下島。御尤ですわ。先生、お一人になつておしさいになつたのですもの。

英次。………（何か云はうとする）（幕）

五

（同じ場。英次一人で坐禪をくんでゐる。戸をたゝくものがある。）

英次。はい

（下島登場）

英次。昨日は來ませんでしたね。今日ももう來ないのかと思ひましたよ。

下島。昨日は出やうとする所へ東さんが來て話しこんで、どうしても歸らうとなさらないので困りました。

英次。困つた奴ですね。

下島。私、東さんに同情しましたわ。あの方本當に偉い方ね。

英次。なぜです。

下島。だつてこの頃、勞働してゐらつしやるのですよ。

英次。さうですか。そしてそれが偉いのですか。

下島。苦しくつたつて折れないのは偉いぢやありませんか。その上畫をかいていらつしやるのです。

英次。それはまあ感心ですね。しかしあなたが僕のうちにくるのを邪魔しに出かけて、いつまでも歸らないなんて、あんまりほめたことではありませんね。

下島。東さん、少し身體の具合がわるかつたのです。熱をはかつて見ましたら八度三分ありました。

英次。さうですか。それは氣の毒でしたね。そしてどうしました。

下島。私はおとめしたのですが、夕方、無理におかへりになりました。

英次。さうですか。それでは早速ですが仕事を始めませう。

下島。えゝ。もう何日位いで出來上りますの。

英次。個人展覽會が來月末にありますからそれまでにかき上げたく思つてゐるんです。

下島。隨分かゝるのですね。

英次。毎日僕の處へくるのは閉口ですか。

下島。そんなことはありません。

英次。この畫がかけたあと、又あなたをモデルにして畫をかきたいと云つてもなつてくれますか。

下島。それはよろこんでなります。

英次。東は僕のことを何とか云つてゐますか。

下島。いつも先生のことをほめておいでゞす。今度のことでも自分がわるかつたのだとおつしやつておいでゞす。自分が賤しかつたので先生の御心を曲解してゐたとおつしやつてゞした。しかし先生の處から出たのはやむを得ないとおつしやつておいでゞした。そして先生の處には又いゝお弟子さんが出來て、神妙に世話をやいてゐる話をしたら大變安心しておいでゞした。あの方もいゝ方ですね。先生のことをいつも二人で夢中になつてほめておりますの。

英次。東はたしかにいゝ奴です、有望な奴です。あんな奴は滅多にゐません。だがあいつは喰へない所をもつてゐます。あいつは中々策略をつかう男で、目的のためには手段を撰ばない男です。僕はあの男を愛してはゐますが、あのへんな獨立心と、目的のためには馬車馬的で手段を撰ばない所はどうも氣に入りません。あの男の病氣のことをきいた時も僕はあてにはしてゐませんでした。

下島。それでも熱が八度三分ありましたもの。

英次。熱計りは身體の熱でなければ上らないものぢやありませんからね。

下島。それだつてまさか。
英次。僕は今にきつと東は假病をつかつてあなたの同情心に訴へ自分の處にあなたを來させるやうにするだらうと思ひますよ。そしてあなたはきつと同情して出かけて行くと思ひますね。
下島。それはゆくかも知れません。
英次。行つてはいけません。
下島。なぜ。
英次。東にだまされなければならないと云ふ必要はないからです。
下島。それでももし本當に御病氣だつたらどうなの。
英次。本當の病人に東が自分をつくりあげたら、あなたはゆく方がいゝと思つてゐるのですか。
下島。先生のさう云ふお考へ方には私賛成出來ませんわ。
英次。東と云ふ男はさう云ふ男なのです。あいつは利巧な男ですからね。
下島。私にはそんな方とは思へませんわ。
英次。それはあなたが馬鹿だからです。
下島。それでは先生は私が東さんの處へいくら東さんが御病氣の時でも、行つてはいけないとおつしやるの。
英次。斷じて。
下島。本當の御病氣の時でも。私はいくら行つたつて大丈夫と思ひますわ。先生こそ私を信用してゐらつしやらないやうに思ひますわ。

英次。男には腕力があります。巧言令色に女はすぐだまされますからね。

下島。東さんはそんな方なの。

英次。そんな男ですよ。

下島。東さんは又先生を用心しろとおつしやつてゐらつしやいましたわ。

英次。さうでせう。そんな男です。

下島。先生の他の點は皆信用するが、女のことだけは信用出來ないと云つてゐらつしやいましたわ。

英次。人間は自分のこと切りわからないものです。

下島。(冗談のやうに) それなら東さんが假病をつかうことがわかるのも、先生にさう云ふ處があるからなの。怖いわね。

英次。僕にもさう云ふ根性はないことはないのです。たゞ實行出來ないのです。東はそれが實行出來る男です。

下島。男の方のお話をきいてゐますと、怖くなりますわ。

英次。その人に何にもかも許してゐる場合は別です。その他の時は、男にはあまり親切にしたり、男に氣があると自惚させる、そぶりは用心しないといけませんよ。

下島。先生は矢張り、私を獨占なさらうとしてゐらつしやるのですのね。

英次。さうかも知れません。それがどうと云ふのです。

下島。私はそんなことはないと思つてゐましたの。

英次。あなたがさう思つてゐるなら、僕もさうなりますよ。僕はあなたを束縛する資格はありませんからね。たゞ注意

するだけなのです。東とあなたと結婚する氣があれば別です。

下島。そんな氣は少しもありませんわ。だけど御病氣なさつたら、見舞に位い上らないとわるいやうに思ふのですよ。

英次。ゆくなら誰かと一緒にいらつしやい、悪いことは云ひません。

下島。それはさうね。それではゆく時は弟をつれてゆくことにしませう。

英次。それがよろしい。

下島。私、馬鹿ですから、いろ〳〵注意して下さい。私、先生のおつしやることとならなんでもきいてまちがいがないと思つてゐるのですが、つい馬鹿なので、先生のおつしやる意味をとりちがへてしまうのです。之から注意いたしますわ。

英次。僕もまちがいのないことだけを云ふことに注意します。僕はたゞ、あなたが此をやめることを心配してゐるのです。僕の所へあなたが來なくなることを恐れてゐるのです。僕は少し淋しすぎるのですから。

下島。先生のやうな悟つた方でも、淋しいことがあるの。

英次。僕は悟つてはゐませんよ。

下島。私には先生は本當にさとつた方としか思へませんわ。いつもおちついて、しつかりして、自分の道を迷はずに歩いていらつしやる方だと思つておりますわ。私は先生位い、心の鍛えられた方を見たことはありませんわ。浮いたことはちつともおつしやらないし、いつも嚴肅で、快活で、頭がよくお働きになるのにはおどろきますわ。

英次。僕の快活になれるのは、あなたのゐる時だけですよ。その他の僕の生活は今の最盛りのやうな生活です。

下島。さう云ふ生活をつゞけて、平氣でゐらつしやるのに私は本當に感心しておりますわ。

英次。あんまり平氣でもないのですよ。ついよけいなことをしやべりました。畫を始めませう。

下島。えゝ。

英次。畫をかゝずに、呑氣にしてゐるのもたまにはいゝものですが、もう少し喰ひ入らないと我慢が出來ませんから。ぬきさしの出來ない。何處もかしこも充實し切つて、しかも最も深い處で全體が一つになつて落ちつきはらつて、神秘の世界を暗示してゐる。さう云ふ處まで入つてかきたいのです。

（下島着物を着かへやうとする。）

六

（同じ室。英次、小野寺、山田話してゐる）

英次。人間と云ふものはへんなものですね。特別に僕がへんなのではないかと時々思ひますがね。悟つて見ればなんでもないかも知れませんが、悟らない所に又面白味がありますね。藝術家と云ふ仕事は、悟つて許りはゐない方がいゝやうですね。東洋の畫のいゝ所はさとつた所がある處と思ひますね。西洋のいゝ畫は、さとらない所から生れたものゝやうに思ひますね。兩方のいゝ所を調和させるのは、悟る方がいゝ時は悟り、悟る必要がない時は悟らない所にあるやうに思ひますよ。あてにはなりませんが。

山田。さうも云へるでせうね。死ぬまで悟る必要のない人間も、見ともないかも知りませんが、いつも悟つてゐる人間許りも困りものですね。人間は矢張りこの地上の生活をたのしく出來たら、した方がいゝと思ひますね。尤も本當に悟つた人間は、世界をよくしやうと云ふ熱情にます〳〵燃えてゐるものかも知れませんがね。

英次。社會をよくすると云ふことはどう云ふことですかね。私の考へでは皆が人間になることゝ思ふのですが、こないだ僕の處へ金をもらいに來た主義者の話ではプロレタリアの世界になると云つてゐましたがね。僕はその方のことはよくわからないせいか、よくのみこめなかつたのですよ。それで僕はかう云つて聞いて見たのです。プロレタリアの運動と云ふものは、益々プロレタリアがプロレクリアになる運動なのですか。それともプロレタリアがブルジョアになりたい運動なのですか。それとも眞人になりたい運動なのですか。さう云つて聞いてもはつきりした返事は得られませんでしたよ。へたな說教されて時間をつぶされるのがいやで、二三圓の金をやつて歸つてもらいましたが、あんなのは本當の主義者ではないでせうが、頭のよくない男でした。僕は人をおどかすのが好きな男ですから一寸おどかしてやりました。

小野寺。君の處へはくるだらう。

山田。さうは來ない。何しろ僕の生活を見たら、一寸金のことは云ひだせまい。

小野寺。君はなぜあんな生活をつゞけてゐるのだい。

山田。女と云ふものはいくら神妙でも、贅澤にはなれやすいものだからね。切角貧しい生活になれて來てゐる美德を失なはすのもいやだからね。又妻の父もそれをいやがるのだ。しかし僕は、貧乏生活が人間の理想とは思つてゐない。たゞいゝ世界が來た時、すぐ金持の生活が出來るものとは僕は思はないからね。

英次。しかし山田さん位いになつたら、贅澤なさつていゝと思ひますがね。

山田。わるいとも思ひませんが、趣味から云つても質素がすきなのです。

英次。僕はこの頃少し贅澤がすきになつて來てゐるのですよ。その方が精神活動が豐富になれさうに思つてゐるので

す。

山田。それはあなたが畫家だからではないですかね。殊に洋畫家だからではないですかね。

英次。さうかも知れませんね。

小野寺。それは山田君は贅澤にあきた人だし、君は又貧乏にあきた人だからだよ。

英次。さうかも知れないね。山田さんは贅澤からとれるものはとつてしまつた方で、僕は又貧乏で鍛えられるものは鍛えられ過ぎてしまつたのかも知れませんね。あまりに私の生活には冬が多すぎますからね。少しは春の日に憧がれたくなるのです。又夏の盛りにね。

山田。本當にさうですね。僕の生活にも冬もありましたが、この頃はあまりに春らしい生活がつゞきすぎたかも知れません。

英次。自分の内にかくれてゐたものを生かすのは氣持のいゝものですね。

小野寺。君の畫はいつ出來るのだ。

英次。もう大概出來たのだ。

小野寺。まだ見せる氣にはならないかい。

英次。いや、もう見せてもいゝ。昨日かき上げたやうなものだが、今日もう一度よく見ようと思つてゐるのだ。

小野寺。それぢや見せたまい。

英次。それぢや見てもらはうかね。

（畫のおゝいをとる。二人見とれる）

山田。野中君。君がこの畫をかいたことを僕は日本人にかはつて感謝したく思ひますよ。

英次。山田さんにさう云つて戴くと、僕は本當にありがたく思ひます。

山田。日本の女性の美が、實に深かく完全に出てゐると思ひます。愛してかいたと云ふのはこんな畫を云ふのでせう。

英次。僕は讃美してかいたのです。憧憬してかいたのです。

小野寺。熱愛してかいたのではないかい。何處かに執念深い所がある。

英次。そんなことは云はないものだ。

小野寺。僕はほめたつもりで云つたのだよ。

英次。あまりほめたことにはならない。」

（三人笑ふ）

山田。野中君は、之を手ばなす氣はないでせうね。

英次。いゝえ、ないことはないのです。賣る氣ではゐるのです。少し金もほしいのです。第二のくわだてもしてゐるのです。

山田。いくら位いなら手ばなす氣なのですか。

英次。まあ、二千圓と云ふフダでもつけやうかと思つてゐるのです。」

山田。それなら僕に賣つてくれませんか。父に買はしますから。」

英次。あなたが買つて下さるなら、もつとまけてもよろしい。

山田。いゝえ、まけて戴く必要はありません。父に買はすのですから。

英次。あなたのお父さんにお氣に入るかどうか。
山田。金は父に出さして、僕がとりあげるのですよ。もし父が出さなければ、父からもらふ金を出さして貰ふだけです。
小野寺。よかつたね。英次、おごらなくつてはいけないよ。
英次。おごるとも。下島さんもよろこぶだらう。
山田。もう二時になる、もう下島さんのくる時分だらう。失禮するかね。
小野寺。えゝ、歸りませう。
山田。それでは金は今日明日にもとゞけます。歸りに一寸父の處へよつて見ます。家にゐればすぐ出させて、後刻にとゞけさします。
英次。少しも急ぎません。
山田。他へ賣られると困りますからね。
(三人笑ふ)
山田。それでは失禮します。
英次。またどうぞ。
(三人退場、英次まもなく登場)
(英次自分の畫を見てゐる内に、涙ぐみ、よろこびのあまりおどるやうに歩く。戸をたゝく音。)
英次　はい。

（下島登場）

英次。いゝ話がありますよ、

下島。どんな。

英次。あなたもきつとよろこぶでせう。

下島。どんなお話。

英次。あなたは小野寺と山田さんにお逢ひでしたでせう。

下島。えゝ、其處でお逢ひしました。

英次。山川が僕の書にすつかり感心してくれたのです。

下島。お見せになつたの。

英次。えゝ、もう出來上つたやうなものですからね。見せてはいけないのですか。

下島。いゝえ、そんなことはありません。

英次。何があなたは氣になることがあるのですか。

下島。いゝえ。

英次。母の病氣はどうですか。

下島。もう大概おなほりになりました。

英次。もうそれなら看護婦も免職ですね

下島。えゝ。

英次。それから山田があの畫を二千圓で買つてくれたのです。

下島。まあ、もうお賣りになつたの。

英次。でも、今後いくらでも、もつといゝ畫がかけますからね。それにあなたに合作のお禮もあげたいと思つてゐるのですよ。今度の畫はあなたと僕の合作のやうなものですからね。千圓だけ差し上げたいと思つてゐるのです。とつて下さるでせう。

下島。それは頂くわけにはゆきませんわ。

英次。なぜです。

下島。それでもあまり多すぎます。

英次。僕のすることは、なんでもよろこんで承知して下さるのが、賢いことです。遠慮なんかするのは、つまらないことです。

下島。それは先生のおつしやることは何んでもおきゝするのが、一番いゝとは思ひますが、さうもゆかないことが御座います。先生にお金いたゞく理由はありませんわ。

英次。それでも今度の畫は合作ですからね。

下島。それだつて私は先生に教へていたゞいてゐる、お禮にモデルになつたゞけなのですもの。

英次。お禮に仕方がなしになつたのですか。いやいや。

下島。そんなことはありませんわ。

英次。僕の云ふことはきくものです。何にも云はずにとつておいて下さい。

下島。そんなことはいやです。

英次。なぜいやなのです。あなたは僕の厚意を侮辱するのですか。

下島。先生はなぜそんなに澤山の金を私に下さりたがつてゐらつしやるのです。

英次。僕はたゞあなたにお禮がしたかつたゞけなのです。

下島。私、先生の御心もちがはつきりわかりませんわ。

英次。僕は無邪氣なつもりです。

下島。先生は私を占有したがつてゐらつしやるやうに私には時々思へるのです。

英次。それは僕の空想だつたこともあります。しかし僕にそんな資格はないことを知つてゐます。だから僕は何にもあなたに要求はしません。

下島。畫はおかきになりませんな。

英次。あなたも無邪氣によろこびをわけて下さつていゝと僕は思つてゐるのです。この畫がよく出來上つたことを。この畫は二人の子のやうなものなのですからね。

下島。それが賣れたので、おうれしいの。

英次。あなたは米にかぶれましたね。もつと無邪氣になつたつていゝでせう。無邪氣によろこび、無邪氣に人の厚意をうけとると云ふことはいゝことゝ思ひます。

下島。本當に無邪氣にいたゞいていゝの。

英次。勿論です。

下島。私は先生を信じていゝのですね。先生に少しも野心のないことをね。

英次。勿論です。

下島。矢張り私がかつたわ。

英次。なんです。

下島。私と東とよく議論するのです。東は先生が私に野心があるにちがいないと云ふのです。私は先生は鏡のやうにすんだ心を持つて、くもりのない玉のやうな親のやうな愛をもつて私のことを心配してゐて下さるだけだとさう云ふのです。私の方が勝ちましたわ。

英次。それなら金はとつて下さいますね。

下島。え、戴く方がよければ戴きます。

英次。それで僕も安心して話がかけます。

下島。ですけど一寸まつて下さい。私、相談してからはつきり御返事しますわ。

英次。誰にです。

下島。(一寸びつくりし、何げなく)父にです。

英次。あなたは嘘つきですわ。あなたは東と相談しやうと云ふのでせう。

下島。…………

英次。かくしても駄目です。

下島。…………

英次。秘密にして、僕をだまさうと約束をしたのですか。

下島。さう云ふわけではありません。たゞ東が先生にあまり早くお知らせすることを恐れてゐるのです。

英次。なぜ恐れてゐるのです。

下島。先生の今度のお仕事の邪魔になつてはわるいと思つて。

英次。いつ約束したのです。

下島。昨晩でした。

英次。…………

（沈默）

（下島、着物を着かへる。英次默つてゐる。泣きさうな顔をするのを辛く耐える。下島、モデルの座につく。英次、畫筆をとり畫をかかうとして、泣き出す。下島もだんだん悲しくなり、すゝり泣く）

英次。下島さん、泣かないで下さい。僕だつて男です。與へられた運命を耐えて見せます。僕は正直に云つて東の思つてゐる通りあなたを愛してゐたのです。專有出來たらしたいと思つてゐました。しかし僕は正直に云ひますが、人殺しなのです。千代子は病氣で死んだのではなく、僕が嫉妬で殺したのです。その上、僕は片輪です。僕はいくらなんでもあなたのやうな處女を專有する資格のないことは十分知つてゐたのです。だからあなたが僕の處に來た時、僕はあなたからなるべく逃げやうとしてゐたのです。下島さん。矢張り僕はだめです。すぐ歸つて下さい。僕は一人になりたいのです。

下島。先生！本當にすみませんでした。

英次。すむも、すまないもありません。自業自得です。早く歸つて下さい。私は人殺しを實に嫌つてゐますが、私の手はあなたの首をしめたがつてゐますから。早く逃げてゐらつしやる方がよろしいよ。

下島。(恐怖におそはれて英次の前に跪づく)先生、許して下さい。許して下さい。

英次。僕はあなたを殺して、自分も死にたいのです。

(下島おどろいて逃げ出す。英次戶のかぎをかける)

下島。先生!私、先生のおつしやることならなんでもきゝます。どうか殺すのだけ許して下さい。

英次。それなら、(かぎをほりなげ)戶をあけてその着物をもつてお逃げなさい。そしてもう二度と來てはいけません。來いと云つても來ないでせうがね。

(下島。着物をかゝへ、かぎで戶をあけやうとするが、ふるへて開かない。)

英次。かぎをおよこしなさい。あけてあげませう。

(下島。こわ〴〵かぎを與へる。英次いきなり、下島に接吻する。下島、半ば抵抗し、半ば服從する。英次、戶を靜かにあける)

下島。先生!

英次。下島さん。僕をにくまないで下さい。僕の內には惡魔もゐますが、神もゐますからね。

下島。先生!私(瞬間的に英次に屈服しやうとする)

英次。馬鹿!可哀いゝ馬鹿!幸福でゐろ。(戶からつき出し戶をしめる、始め靜かに)人殺し人殺し、セムシ、セムシ、天才、天才、色魔、お人よし、悟つた男、何處までも生きてゆく男、俺は、あはゝゝゝゝ。(段々泣き笑ひになる)幕。

(一六、八、一〇)

編輯後記

◇甑中にあるやうな思ゐをして九月號を編輯した。編輯室は毎日九十五六度に達する。酷熱と闘爭する氣でいるので仕事がドン〳〵はかがいつた。

◇發賣禁止に關する内相との再度の交渉は近く開かれるであらう。鈴木參與官は「時事子」に對して何か妥協點が發見せられるであらうと語つている。

◇一年の力を傾けられた藤村氏の「嵐」が誌本に掲げられたとは嬉しい。氏が十年に近い獨身生活のさびしさ、尊さ兒女のために犠げられた營みが本篇を生んだのだ。何人でも篇本を讀めば暗然として強く打たれるであらう。

◇武者小路氏は「或る畫室の主」の執筆のためこの一ヶ月、全く他の執筆を謝絶し獨り二里ケ濱に隠れて想を錬つたものだ。「愛慾」の後日譚で異常の名作。中條氏はまた、生活の大革命を斷じ本篇を執筆、好評嘖々たりし氏の連載小説の總決算である。と共に氏半生の思想的決算でもあらう、本篇は今までの作中での尤も力のこもつたものである。徳田氏また大努力して五十頁に近くその身邊の異常事を題材としてかき上げた。何れにしても九月號創作欄は前に類例がない力作のみが集まつことを讀者と共に喜びたい。

◇「地獄」は監獄部屋の陰慘な狀態を如實に描いたものである。世の中にはまだこうした殘虐無道のところがある。そして所は北海道で人間は被壓迫者も壓迫者も正眞正銘の日本人である。行文また日本人離れをして深刻無比

◇末弘嚴太郎氏の快著「勞働法研究」の一書九月早々本社から發行される。勞資兩階級の對立はいよ〳〵鬪爭的度を增し、險惡の兆を昨今の社會事象に見つつある折柄、本書の出版されることは意義あることだ。讀者の味讀に俟つ。

◇社會科學秋季特輯號は「唯物史觀研究」號とし大山、新明、淡、櫛田諸氏が執筆する。劃期的大思想である此研究が權威ある諸氏によつて成されることは嬉しい。

◇末川教授著「ソヴヰエト・ロシアの民法と勞働法」近く本社から新刊される、本書ソヴヰエト・ロシアの民法と勞働法及び農業法の法理學的研究に附するに各法條文の完譯を以てし此種著作中最も合理的に完成されたるもの、著者は京大法學部の新進教授。

夏期臨時號『現代支那號』を發刊しました。ぜひ御一讀下さい。
(定價壹圓五拾錢送料四錢)

改造定價

册數	定價	郵税
壹册	八拾錢	貳錢
半ヶ年	四圓六拾錢	特大號共郵税不用
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	特大號共郵税不用

大正拾五年八月十九日印刷納本
大正拾五年九月一日發行
(價壹圓五拾錢)
編輯發行兼印刷人　東京市芝區愛宕下町一ノ一　山本三生
印刷所　東京牛込區市谷加賀町一ノ一二　秀英舍
發行所　東京芝區愛宕下一ノ一　改造社
振替東京八四〇二
電話銀座四五五八

細井和喜藏著

(賣行第一)

無限の鐘

定價貳圓
送料二十二錢

本書中「泥沼呪文」の一詩は其筋より削除を命ぜらる

細井君は「女工哀史」「工場」「奴隷」の三名著で劃期的の所産を公にした眞のプロレタリア作家の第一人で我國の奴隷解放に此上なき貢献を遂げたことは唯人も否むことが出來ない。其後此人が、筐底に秘めた血に泌む力作十二篇發見された長篇作家として成功した君は、短篇作家としてもかくの如く成功した。今この思出で深い一著を手にするとき君の颯爽たる風貌は今尙、無産戰線の最前衛にあるかのやうである。

細井和喜藏著 女工哀史（廿六版） 定價貳圓 送料廿二錢

細井和喜藏著 工場（廿五版） 定價貳圓 送料廿二錢

細井和喜藏著 奴隷（十二版） 定價貳圓 送料廿二錢

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

ブハリン原著
横田千元
富士辰馬共譯

唯物史觀

（菊判）

定價參圓五十錢
郵送料二十八錢

唯物史觀の教科書として好評嘖々

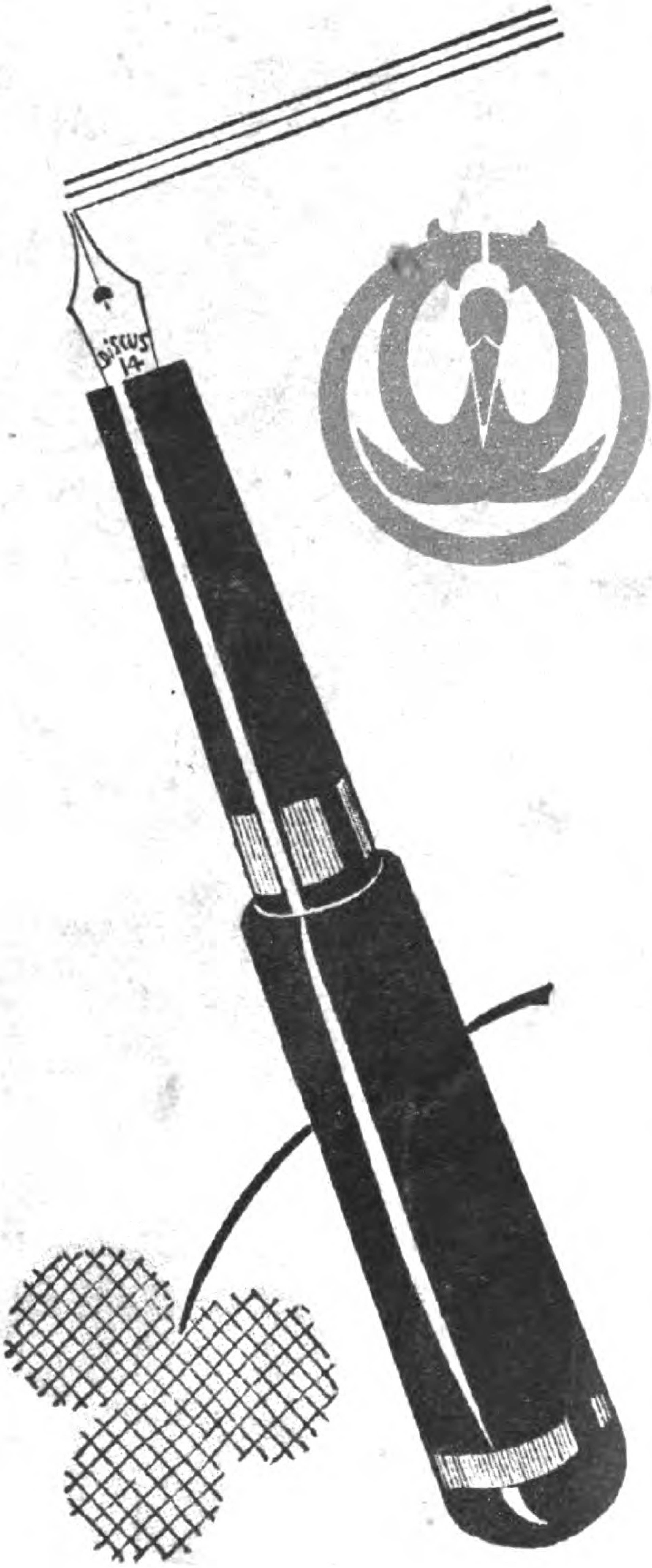
現代最高の大思想たるマルクス學――之を哲學としては辨證法的唯物論、之を社會學としては唯物史觀、之を經濟學としては資本論である。然るに世の俗學者流或はマルクス經濟學を其の根本たる唯物社會學から、或は唯物史觀を其の根本たる辨證哲學から切離さうとし、その外、唯物史觀の改造、變造、捏造、マルクス學の曲解、誤解、無理解が、殆んど到る處に續出する今日、本書の出現は實に濃霧を拂ふ旭日の偉觀である。本書は堅く辯證法的唯物論に立脚して、詳かに且つ平易に親切に唯物史觀の原理と應用を解説し、一切の社會科學に對して唯一正確なる研究の方法、觀察の態度、批判の見地を指示するものである。著者の國際革命運動に於て地位に多言を要せず、思ふに日本現時の社會思想は、本書の出現に依つて一大時期を劃するであらう。

忽七版發賣

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社


滋強飲料
カルピス
カルピスの一杯
萬斛の凉味

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO.



株式會社秀英舍印刷